

AC Zoku Gunsho ruiju
145
G856
1923
v.20
pt.1

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



續羣書類從

第貳拾輯上

東京 續羣書類從完成會



AC
145
G856
1923
v. 20
pt. 1

續群書類從第貳拾輯上目次

合戰部

卷第五百七十一

將門純友東西軍記

一

泰衡征伐物語

一三

卷第五百七十二上

承久兵亂記上

二八

卷第五百七十二下

承久兵亂記下

七五

卷第五百七十三

竹崎五郎繪詞

一一八

舟上記

一三〇

卷第五百七十四

異本伯耆卷

一四二

卷第五百七十五

永享記

一七〇

卷第五百七十六

永享後記

二〇八

上杉憲實記

二一三

結城合戰繪詞

二二一

卷第五百七十七

嘉吉物語

二二五

卷第五百七十八

長祿記

二四四

卷第五百七十九

細川勝元記

二六四

卷第五百八十

官地論

二九七

長享年後畿内兵亂記

三一三

卷第五百八十一

細川大心院記

三二三

瓦林正賴記

三三四

卷第五百八十二

道家祖看記

三四八

立入左京亮入道隆佐記……………三六一

卷第五百八十三

舟岡山軍記……………三七二

卷第五百八十四上

豐臣記上……………三八八

卷第五百八十四中

豐臣記中……………四二八

卷第五百八十四下

豐臣記下……………四七一

續群書類從卷第五百七十一

總檢校保己一集

男源忠寶校

合戰部一

將門純友東西軍記

人王六十一代朱雀院御宇。承平四年ニ。山陽南海ノ海賊ヲコツテ。國民ヲナヤマス。コレニヨリテ。官兵ヲ遣ハシテ是ヲカラメトリ。悉ク斬罪ス。然ル處ニ。同六年六月。南海ノ張本藤原ノ純友ト云者。其徒黨ヲ聚メ。伊與國日振島ニ。千餘船ヲ聚メ。海上往來ノ官物ヲ奪ヒトサル。コレニヨリテ。紀淑人ヲ伊與守トシテ遣ハサル。淑人仁愛ヲ以テナツケシカハ。海賊暫クシツマル。同年七月下旬ニハ。淑人。純友ヲ相伴テ上洛ス。此時。下總國住人相馬小次郎將門

モ在京シタリ。此將門ハ桓武天皇三代高見ノ王一男。高望王ニ六人ノ子アリ。一男ハ平良望鎮守府將軍。是ハ平將軍貞盛カ父ナリ。太政大臣清盛之先祖也。次男ハ平良將鎮守府將軍。是將門カ父ナリ。是故ニ貞盛ト將門トハ從弟子ナリ。三男ハ上總介平良兼。四男ハ平良繇。鎮守府將軍。五男ハ村岡五郎平良文。六男ハ有子ノ平良持ト云。一族若干ニシテ繁昌セリ。シカルニ同年八月十九日。相馬將門藤原純友兩人。比叡山ニノホリ。平安城ヲミヲロシ。互ニ逆臣ノコヲ相約ス。本意ヲトクルニヲイテハ。將門ハ王孫ナレハ帝王トナルヘシ。

純友ハ藤原氏ナレハ關白トナラント約シ。ヲ
ハリテ歸洛シ。其後兩人相トモニ國ニ皈ル。

天應二年^{己亥}十二月^{或說ニハ承平二年壬辰ト有}將門關東ニ亂ヲ

起シ。舍弟御厨三郎平將賴。其弟大葦原四郎平
將平。其弟五郎將爲。其弟六郎平將武以下ノ一

族郎等ヲアヒモヨフシ。常陸國ニ攻入テ。其伯
父常陸大掾平國香^{良望ノ事也。貞盛カ父也。}ヲ射殺シテ。一國

ヲ押領ス。時ニ武藏權守興世王ト云者。將門ニ
云ケルハ。一國ヲカスルモ。坂東ヲ皆奪ヒト

ルモ。ソノ罪同シカルヘシト云ケレハ。將門
ケニモト同心シ。即チ兵ヲヒキイテ。下野國ニ

攻入ル。國司^{或說ニハ國司ハ右大臣藤原恒佐也ト。}軍ヲ率シテ。コバ
ミ防ク。寄手ハ不知案内ナリ。國司ノ勢ハ案内

者ナレハ。要書ニ懸テ挑戰フ。コレニヨリテ。
將門カ兵シバ[●]利ヲ失フ。或時將門鄉民一

人ヲ相ヒカタラツテ。所ノ險難。國司ノ成敗。
軍士ノ剛臆等。委細ニコレヲ尋聞。其後相ヒ謀

テ。夜中軍勢ヲ三手ニワケテ。其一手ハ旗ヲ
卷テ山林ニカクシ置。將門ミヅカラ退兵ヲ勝
リテ。ヒソカニ本陣ヲ出テ。難所ノ森ノ中ニ伏
シ。今一手ハ。本陣拾籌ヲ余多所々ニ燒テ。曉
方ニナリテ兵ヲ引トル。國司是ヲシラサル所
ニ。里人走リ來テ。將門兵ヲ引テ逃カヘルヨ
シ。國司ニツグル。國司コレヲ聞テ悦ヒ。サラ
ハ弊ニ乘テウテヤトテ。何ノ手分モナク。取リ
物モトリ敢ヘス。備ヲ亂シテ。コレヲ追事二十
余町。將門カ伏兵ノ前ニ追來ル。將門敵ヲ思フ
圖ニ遣リスゴシテ。軍士ヲ遣シ。敵ノ陣屋ヲ放
火ス。國司陣屋ノ煙ヲ見テ。味方ノ内ニカヘリ
忠ノ者アリテ。放火スルカト。アヤシミ思フ所
ニ。左ノ森ノ中ヨリ將門軍ヲ備ヘ。鼓ヲ打テ
シツカニ懸ル。國司コレヲ見テ。タバカラレヌ
ルト。ヤスカラス思ヒ。轡ミヲ並ヘ。懸破ラン
トスル所ニ。初メ林中ニカクシ置タル一手。

鯨波ヲアゲテ。横合ニ入ラントス。國司ノ勢二
手ニ分テ相ヒ戰フ。國司ノ兵ハ。初將門カ軍士
ヲ追テ。二十余町ハセハシル間。息絶氣ツカ
レテ引色ニナル所ニ。最前僞テ引退タル相馬
勢。大返ニ取テカヘシ。貝鐘ヲナラシ國司ノ
後陣ヲヲソフ。國司三方ノ敵ニカコマレ。途ヲ
ウシナヒ。討ル、者數ヲシラス。國司希有ニ
シテニケハシル。將門下總ノ國司ヲ追ヒ出シ。
其ヨリ上野ヘウツリ。上總下總武藏相摸ヲ相
ヒシタカヘケル。敢テ敵對スルモノナシ。下總
國相馬郡ニ都ヲ立ツ。或ハ下總國猿島石井ノ
郷ニ都ヲ建氏云ヘリ。彼紀
文ニ云ク。南ニ磯橋ヲ以テ。都ノ山崎トシ。相
馬郡ノ津ヲ以テ。京ノ大津トスヘシ。將門ハ桓
武天皇五代ノ孫ナレハ。帝位ニ即クトモ。子細
アルヘキカトテ。自ラ平親王ト號シ。或ハ新
皇トモ稱ス。左右ノ大臣大中納言參議。文武六
辨八史等。百官ヲ置ク。曆博士ハカリナシ。將

門カ舍弟御厨將賴ハ。下野守ニ任ス。其弟大葦
原將平ハ。上野介ニ。其弟五郎將爲ハ下總守。
其弟六郎將武ハ伊豆守ニ。常盤御厩ノ別當多
治ノ經明ハ。常陸介ニ。藤原玄茂ハ上總介ニ
武藏權守興世王ハ安房守ニ。文室好兼ハ相摸
守ニナル。東國ヲ相ヒシタカヘテ後ハ。王城
ニ責上ルヘキト支度ス。此時源經基源氏ノ武藏
正統也ニ居ラレケルカ。急キ上洛シ。將門カ謀逆ノ事
ヲ言上ス。其早ク注進スルニヨリテ。位ヲサツ
ケラル。經基ハ貞純母ハ中務大輔神祇伯棟貞王女。貞
觀十六年三月廿三日生。一條大宮
於桃花四品中務卿號ニ桃花親王。之子也。貞純ハ清和
天皇第六ノ皇子ナルユヘニ。經基ヲ六孫王ト
號ス。始テ源姓天德二年六月十五日ヲ賜ル。多田滿仲カ父
ナリ。同時ニ藤原純友。海賊等ヲカタラヒ。伊
與國ヨリ討出。備前介子高ヲ捕ヘ。播磨介島田
惟幹ヲ生捕テ。南海ヲカスメ。山陽山陰西海ヲ
ウハントス。始メ將門純友同時ニ在京シ。比

叡山ニ登テ。互ニ逆心スヘキコトヲ約シ。承平年中ヨリ。將門ハ關東ヘヲモムキ。純友ハ伊與ニアリ。少々蜂起シケルカ。今年其約ヲ違ス。東西ニ一度ニ起テ。天下ノ騷動。洛中シツカナラス。

同三年^{庚子}正月。將門純友降伏ノタメ。諸寺諸社ヘ祈念シタマフ。二月。參議右衛門督藤原忠文ヲ征夷大將軍トシ。其弟刑部卿藤原忠舒。并散位源經基等ヲ副將軍トシテ。相ヒシタカフ人ニハ。右京亮藤原國幹。大監物平清基。散位源就國等關東ヘ遣ハサル。又小野好古。藤原慶幸。大藏春實等ヲ將軍トシテ。兵舟二百余艘ヲヒキイテ伊與國ヘ發向ス。又東山東海兩道ヘ。官符ヲ賜リ。軍功アラハ賞ヲ行ハルヘキヨシ。相ヒフレラル。爰ニ下野押領シ。倭藤太藤原秀郷ト云者アリ。カレハ大職冠鎌足ニハ。八代。豐澤カ孫村雄カ子ナリ。器量人ニ越ヘ。

無雙弓ノ上手ナリシカ。以爲吾將門ト同意シテ。朝家ヲ傾ケ奉リ。日本ヲ同心ニシラント思。將門カ館ニ行向。右ノ意趣ヲ云ヒ。人レケリ。折節將門髮ヲ亂シ梳リシテ居タリケルカ。コレヲ聞テ大ニ悅ヒ。彼ハ多勢ノ者。殊ニ強勇ノ將也。秀郷味方ニ屬セハ。天下ヲクツガヘサン。クビスヲ廻スヘカラスト思ヒケレハ。大童ヲアラタメス。白衣ニシテ。周章出テ對面シ。酒肴碗飯ヲカキスヘテ。種々ニモテナス。其體甚タ輕忽ナリ。アマツサヘ。將門カ食スル所ノ御料。袴ノ上ニ落時ニ。ミヅカラ是ヲハラヒ拭フ。秀郷コレヲ見テ。天下ヲクツカヘスヘキ人ニアラス。其行跡。民ノ振舞ナリ。殊ニ多勢ノ者ヲアカム。傍以テ云甲斐ナシト。心中ニ疎シ。將門同心ヲヒルカヘシ。本國下野ニカヘリ。常陸掾平貞盛^{始名ハ上平太}ニ談話ス。貞盛ハ父國香ヲ將門カ爲ニ討レ。鬱憤ヲサンセント相

謀ル最中ナレハ。大ニ悦ヒ。思案ニ及ハス同心シテ。二月朔日貞盛秀郷ノ兩將。陸奥下野ノ勢ヲモヨフシ。一萬九千人ヲ率ヒテ。下野ノ國ニイタリ。又日ステニ黄昏ニ及ヘハ明日將門カ陣ニ押寄テ。討殺スヘシト議定シテ。馬ノ鞍ヲヲロシ。物飼テ休息ス。將門兼テ間者ヲツカハシ。敵陣ヲウカ、ヒ見セシムルニ。敵油斷スルノヨシ告ケ來ル。將門謀ニ。雜人數千人ニ貝鐘ヲ持セ。四方ノ林中。或ハ山ノシケミニカクシ置。舍弟御厨下野守將頼。其弟大葦原上野介將平等ニ。千余人ヲサシシヘ。敵ノ引テカヘルヘキ順路ニ。夜中人夫ヲ掛テ。口二間半深サ五尺ニ堀切。其土ヲ以テ。壘壁ノ如ク築キ。其所々ニ口ヲアケ。驅引自在ニ構フ。其シリヘニハ。軍士百余人ヲ分テ守ラシメ。將門ハ精兵二千余人ヒキイテ。夜討スヘキト支度ス。都合四千余人。相圖ノ刻限待チ居タリ。既ニ子ノ

下刻。將門カ兵二千余ヲシヨセ。敵ノコモリ居タル在家ニ火ヲ放チ。ヲメキサケンテ。攻入ル敵一萬九千人僅カナル在家トリ入テ。帶劔ヲトヒテ寢タル所ヘ。敵俄ニ來テ火ヲ放セハ周章騒テ吾サキニ逃ケ走ル。シカレトモ貞盛秀郷等ハ。氣ヲ屈セス拒防ク。カ、ル所ニ。初メ林中ニカクレ居タル雜人原。放火ヲ見テ貝鐘ヲナラシ。関ヲ上ケレハ。百千雷ノ如クシテ。幾千萬疋ワキマヘカタシ。是ヲ聞テ。敵兵コラヘスシテ驚破立テ。主ヲ捨テ父ヲシラスシテ。逃ケ走ル。敵ノシリヘヲトリキリタル將門カ兵トモ。鳴ヲシスメテ相ヒ待ツ。暗サハ闇シ。道ニ堀切アルヲモシラス。跡ヨリ敵ハ追蒐ケレハ。彼堀切ニ落入。イヤカ上ニ重サナル所ヲ。壘ノ影ヨリ差ツメ引ツメ射ケル程ニ爰ニモ敵アリト云程コソアレ。四角八方ニ逃ケタル。兩大將希有ニシテ遁ル。堀ニ落チ入ル輩

モ。死スルマテハナケレトモ。或ハ手足ヲクシ
 キ。或ハ人馬ニ蹈レテ。半死半生ノ者數百人ニ
 及ヘリ。馬物ノ具ヲスツルコト。道ヲサリアヘ
 ス。將門カ云。今夜ノ夜討ニ利ヲ得ルト。敵サ
 マテ討レス。敵ハ大勢ナリ味方ハ小勢ニテ。入
 替ル荒手モナシ。廣場ノ合戦ハツイニ叶フマ
 シ。味方ノ士卒氣ヲ得タルヲリナレハ。輕ク軍
 ヲカヘシテ。下總ニ到ツテ。要害ニ懸テ。變ニ
 應シ氣ニ隨テ。相ヒ戦ハ利アルヘシ。若戦ヒマ
 ケテ後。引退カハ。要害ニ籠ルトイフトモ。必
 利ナカルヘシト云。時ニ安房守興世カ云。合戦
 ノ利進ムトキハ。鼠モ虎トナリ。一足モ引トナ
 レハ。虎モ鼠ノ如シ。況ヤ味方ハ勝チ軍シテ。
 氣ニノリ。敵ハ戦ヒマケテ氣ヲウシナフ。敗
 軍ノ驅集メ勢。何程ノヲヲカシイタスヘキ。
 寄來ラハ蹴散シテステント申ニヨツテ。暫ク
 逗留ス。貞盛秀郷寄來ト云トモ。敗軍ノ士卒。

五三日ハ物ノ用ニ立ツヘカラストテ。將門ガ
 先陣常陸介經明藤原玄茂等。少油斷シテ。在家
 ニ込入テ。雨ノ晴マヲ待ツ所ニ。貞盛カ一陣
 ハ。旗ヲ卷テヒソカニ寄來ル。秀郷カ一軍ハ。
 山ニ副テ。敵ノシリヘニ廻ル。近々ト來テ時ヲ
 咄ト作り。浪ノウツガゴトク懸リケレハ。經
 明玄茂カ軍士。一戦ニモ不及。立足モナク敗軍
 シテ。將門カ陣ニナタレカ、ル。貞盛秀郷カ兩
 勢。勝ニ乗テ追來ル。將門カ舍弟上野介平將平
 同下總守平將爲。同伊豆守平將武。兄弟三人一
 手ニナツテ拒フセクトイヘトモ。氣ニ乗ツタ
 ル大敵ナレハ。共ニ崩レ走ル。敵猶是ヲ追事
 十余町。秀郷カ一軍九千余人。マツサ。キニ追ヒ
 走ル。貞盛カ一萬余人。或曰貞盛與下野押領使藤原秀郷將四千余兵先登將門軍敗績爲貞盛所誅。朝廷大賞諸將。授貞盛從五位下右馬助云々。ハ。備ヲ堅クシテ靜カニ
 シタイ來ル。時ニ將門并ニ舍弟御厨下野守平
 將賴。大葦原將平カ執事佐倉太郎。安房守興世

等カ勢千七百余人。落行味方ヲ尻目ニ白眼テ。勝チホコツタル秀郷カ九千余人ニ會釋モナク懸合セ。東西ニ破テ通り。南北ニ驅拔。巴ノ字ニ追ヒ廻リ。須臾ニ變化シテ。敢テ萬卒ニ當ル。秀郷モ亦自矢ヲ放チ多兵ヲ射ル。シカレモ秀郷カ軍士氣遣カレ漂フ體ヲ見テ。後陣ノ勢二千九百余人落失セヲハンス。既ニ討勝ヌト悦ヒ。將軍自攻ツ、ミヲ打テ競ヒ戰フ。秀郷馬ヨリ下リテ。運ハ天ニアリ。此ヲ逃ケタリモ。イツマテカ生クヘキ。キタナシ返シテ。秀郷ト相トモニ討死シテ。名ヲ萬代ニノコセト。牙ヲカンテ下知ス。コレニヨリテ。子息太郎午國。郎等ニハ今市太田佐野玉井新野等。命ヲ捨テ相ヒ戰フ。時ニ貞盛一萬余兵寄來テ。大山ノ崩ル、カ如ク。咄トヲメイテ討テカ、リケレハ。戰ヒ屈シタル將門カ兵。ナシカハタマルヘキ。四角八方ニ分散ス。僅カニ六七百。將門

引ツ、ンテ。靜カニ除敵モシタハサリレケハ。下總國ニイタリ。島廣山ニ楯コモル或ハ下島郡北山ニ引籠ルト云。同月十三日。貞盛秀郷追懸テ。下總國ニ到リテ見レハ。將門要害ヲ構テ引籠ル。貞盛相戰テハ。利アルヘカラスト思案シテ。風上ヨリ火ヲ放テ。將門并ニ其從類ヲヤク。同十四日。將門自出テ。辛島ト云所ニテ相戰フ。此時京都ヨリ朝敵追討ノタメ。下向ノ大將軍參議右衛門督藤原忠文。副將軍刑部卿藤原忠舒。散位源經基以下ノ官軍數萬人。駿河國迄來ルヨシ。披露アリケレハ。唯今迄將門ニ付シタカヒタル同勢トモ。聞ヲチシテ或ハ落行或ハ降ヲ請ヒ。ノコル勢僅カ千人ニタラサリケレモ。將門勇氣タユマス甲冑ヲ着シ。駿馬ニムチウツテ先登ス。堅ヲクタクキ強ヲ破ルコト。神ノコトシ。弓ヲ引テ百發百中スルニ。必シモハブクラヲ吞ム。彼矢中テ死者數ヲシラス。從軍等モ亦

コレニ類ス。貞盛秀郷カ兩勢。辟易シテ敢テス、マズ。アマツサへ後陣ヨリ引立ケル程ニ。寄手逃ケ走ル。將門氣ニ乗テ。一騎追テ敵ノ中ニ入ル。秀郷カ勢大將見シリケレハ。十人許リ取テカヘシ。コレヲ圍ミ攻ム。將門勃然トシテ面ヲ拂ヒシリヘヲ討テ。左右ヲ追ヒシリシケ。千變萬化シテ手ニ余ル。秀郷カ臣太小田次郎資方以下。百余人馳來テ。アラソイ討ツ。將門ステニ討ルヘク見ユル所ニ將平將武等舍弟。將門ヲ見付。五十余人カケ來リテ。將門ヲスクフ。秀郷カ兵ノジロニ成テス、ミヘズ。貞盛五百余人助來テ。ヨコアイニ入ル。將門カ兵又アラケ走ル。貞盛矢取テツガイ。親敵ナリ。アマスマシト喚テ放ツ矢。將門カ首ニ當テ。弓手ノ眼ヲ貫ク。將門サスカノ猛將ナレハ。此矢一筋ニヨハツテ。馬ヨリマツサカサマニ落ツ。秀郷馳寄テ。將門カ頸ヲ切ル。將門カ討死ヲ見

テ。從軍百九十七人。此彼ヨリ馳來テ。枕ヲ雙ヘ討死ス。其タクハヘ置ケル武具等。コト／＼クヲサメトル。其後將門カ舍弟御厨下野守將頼。并常陸介藤原玄茂。相摸國ニヲイテ討ル。安房守興世王ハ。上總國ニテ誅セラレ。坂上近高藤原玄明ハ。常陸國ニテ殺サレ。其同類數輩所々ニテ討殺ス。貞盛ハ常陸大掾平國香^{良望ト云}カ子ナリ。父ノ仇ナレハ。殊ニ戰功ヲ勵ス。

異本曰。將門與叙父良兼美女ヲ爭イアツメテ怨ヲ構ヘ。承平六年。遂ニ興干戈。旣而將門其事朝廷ニ聞クヲ懼ル。明年正月。入京罪ヲ謝ス。朝廷罪ヲ論シテ。輕ニ准ス。將門刑ヲマスカル。是トシ五月東ニカヘル。遂ニ反ス。初メ將門勇ニシテ大志アリ。其京師ニアルトキンハ。貞盛アラカジメ其徴ニヨリ。乘邪之志アルヲ知テ。コレヲ誅センヲ

ヲ欲ス。間ヲ得ズ。一日式部卿親王ヲ仁和寺ノ它(宅カ)ニトフ。路將門從徒五六人ニシテ親王ノ所ヨリカヘルニ遇フ。親王ニ謂テ云。サキニ臣。將門ニ王ノ門外ニテ遇フ。一卒ヲシタカヘサルヲ以テ。コレヲ殺ス事ヲ得ズ。恨トス。王故ヲ問フ。貞盛云。彼兒他日必ス大事ヲ起シ。以テ皇乾ニ違ハン。果ノ其言ノ如シ。初メ將門モロ／＼ニイツテ曰。我帝種ヨリ出テ。昭穆未遠カラス。天下ニ王タリトイヘトモ。誰カシカラズト云ハン。八年。兵ヲ起シテ。伯父國香ヲ常陸ニ殺ス。コト／＼其地ヲ并ス。遂ニ關東ニ王タリ。平親王ト號ス。下總國相馬郡ニ都ス。貞盛自其力ノ讐ヲ報スルノタラサルヲ知テ。山道ヲ經。京ニ入ル。將門聞テ曰。貞盛京ニ入ラハ。吾カ屬今コレヲカ爲ニ虜セラレン。是歲十二月。將門ミツカラ百余騎ニ將トシテ。

貞盛ヲ追フコト太々急カ也。貞盛信濃國ニ及ス。貞盛奮怒ノ大ニ戰フ。兵疲レ矢盡テ復當ルヘカラス。微服ノ逃。京ニ入ル。具ニ奏將門反狀。天慶二年。朝廷貞盛常陸大掾ニ任ス。既而朝廷。參議修理大夫兼右衛門督藤原忠文。刑部大輔藤原忠舒。右京亮藤原國幹。大監物平清基。散位源就國。源經基等。兵ニ將トシテ。將門ヲ攻ム。將門軍敗績シ。貞盛カ爲ニ誅セラル、ト云々。

或說ニ云。將門叛逆ノ告ゲアルニヨリテ。公卿僉議アツテ。討手ノ大將ヲ擇ル。其比良望ガ子上平太平貞盛ニ。大將軍ノ仰下サル。副將軍ハ宇治民部卿藤原忠文承ル。貞盛ハ例ニマカセ。節刀ヲ賜リ。禮義ヲ振舞。弓場殿ノ南ノ小戸ヨリ出ルト云ヘリ。此ヲ不審ナリ。貞盛。此時ハ常陸ニアリテ。勅命ヲ蒙ムラスト云ヘル。親敵ナレハ。秀郷ト談話シ

テ。將門ヲ滅ス。京都ヨリ下向セハ。忠文ノミ駿河ニト、マツテ。貞盛一人下テ戰フヘキヤ。或ハ云ク。秀郷矢ヲ放テ將門ヲ射殺ストモ云リ。將門ハ其身金鐵ノコトクシテ。米嚙許リ人身ナリ。秀郷是ヲ知テ米カミヲイル云ヘリ。不審。

坂東既ニ治リケレハ。三月九日。秀郷ニ從四位下ヲ授ラレ。下野武藏兩國ノ守ニ任セラル。貞盛ヲハ從五位下ニ叙シテ。右馬助ニ任ス。其後兩人。鎮守府將軍トナレリ。同二十五日。將門カ頸京着ス。

或說ニ將門カ頸ヲカクルニ。眼シバラクカレズ。剩彼首ヨナ／＼笑テ。ムクロアラハ今一度合戰スヘキトヨバフ。時ニヲコノモノアリテ。

將門ハコメカミヨリゾイラレケリタハラ藤太カハカリコトニテ

トヨミケレハ。眼忽チカレケルトイヒツタヘタリ。又將門カムクロ。首ヲ追テ武州ニ來リ。豐島之郡ニテ倒ル。其靈アレテ鄉民ヲナヤマス。故ニ一社ヲ建テ。隣(睦カ)明神ト號ス。隣ハ一目ナキ貞也。將門貞盛カタメニ弓手ノ眼ヲ射貫ル。故ニ鄉民社ヲヨンテ隣ト云フ。遙カ後ニ神田ト云。社ノホトリニ田アルユヘニ。シカ云フト云ヒ傳ヘタリ。今神田明神ハ將門カ靈トナン。或ハ法性房受命。將門ヲ調伏スルニヨリテ。神鑄將門ニ中テ死ル云ヘリ。カタ／＼イブカシキコト多シ。

四月。參議右衛門督藤原忠文。舍弟刑部卿藤原忠舒。并散位經基。右京亮藤原國幹。大監物平清基。散位源就國等。駿河國清見カ關ヨリ歸京ス。

或說ニ。秀郷貞盛ハ。將門追罰ノ恩賞ヲ賜

ル。藤原忠文ハ大將軍タレトモ。駿州ヨリカ
ヘリテ。軍功ナシ。恩賞アルヘキヤ否ヤト公
卿僉議アリ。時ニ左大臣實賴云ク。小野宮
殿是也今
度ノ合戰ハ。ヒトヘニ秀郷貞盛カ功有テ。大
將軍忠文ノ功ナシト云ヘリ。舍弟右大臣師
輔云ク。九條殿
是家也命ヲ受テ夷賊ヲ討事。何ソサ
アラシヤ。兩人ハ近國ヨリヲコリ。大將軍
ハ京都ヨリ下向ス。ソレ遲速ナカラサラン
ヤ。其上忠文以下。駿州ニ下着ヲ聞テ。將
門カ兵或ハ落失。或ハ降參ス。故ニ秀郷貞
盛。忽チカツコトヲ得タリ。イツクンソ功ナ
キト云ハンヤ。二人ノ賞ホトコソナクトモ。
下向ノ諸將等ニモ。勻様ノクンコウ然ルヘ
キカト云ヘリ。小野宮殿ノ云ク。忠ニヨル賞
ナリ。若恩賞アラハ無念ノヨシ。奏セラル、
ニヨリテ。遂ニ勸賞ナシ。忠文はヲウラミイ
カリ。大惡念ヲヲコシ。内裏ヲ退出スル時。

天ニ響キ地モクツル、ハカリノ大音聲ニ
テ。ノ、シリテ云ク。小野宮殿ノ御ハカラヒ
生々世々忘スルヘカラス。願ハ彼家門スイ
ヘイシテ。其末葉ノ人。永ク九條殿子孫ノ奴
婢トナルヘシトヨハツテ。拳ヲニキリ手ヲ
打ツ。時ニ左右ノ爪。手ノ甲ニ通リテ。血ノ
ナカル、コト瀧ノコトシ。則宿所ニカヘリ
テ。斷食シテ死ス。其亡魂アレテ。惡事ヲナ
ス。故一社ノ神ニ祭ル。今ノ宇治ノ離宮明神
是ナリ。シカルニ今小野宮殿ノ子孫タユル
カ如シ。タマ〜相ヒ殘ル人モ。九條殿ノ奴
婢トナル。又九條殿ハ一言ノ芳情ニヨリテ。
子孫ハンエイシテ。攝政關白今絶スト申シ
ツタユレトモ。將門ウタレシハ。朱雀院ノ御
宇。天慶三年庚子二月十四日也。秀郷貞盛ニ勸
賞ヲコナハレシハ。同年三月九日ナリ。忠文
以下ノ官軍。駿州清見關ヨリカヘルハ四月

ナリ。曆數八年ヲ歴テ村上天皇ノ御宇。天曆元年^{丁未}六月。參議藤原忠文。七十五歳ニシテ卒ス。村上帝ヨリ中納言ヲ贈ラル。シカレハ世俗ニ云ヒツタフルトコロ。イブカシ。

去程ニ。藤原純友ハ伊與讃岐阿波淡路ヲカスメケルカ。阿波介國風ト合戦シ。純友利ヲ失テ引キ除キ。其ヨリ又土佐國安藝國周防國等ヲ濫妨シ。直ニ太宰府ヘヲモムキ。官物ヲウバイ取ル。討手ノ大將軍小野好古。藤原慶幸。大藏春實等。純友ヲ追テ。太宰府ヘ赴ク。

天慶四年^{辛丑}五月。小野好古等。筑前博多ノ津ニテ合戦ス。純友イサ、カ勝ニ乘ル處ニ。藤原慶幸。大藏春實。身命ヲ捨テ相ヒタ、カフテ。火ヲ放テ賊舟ヲ燒ク。純友カ兵敗ル。六月純友又兵ヲアツメ。相ヒ戦フト云ヘトモ。終ニ軍敗レテ。ツキシタカフ者。或ハ降參シ。逃ケウセシカハ。純友ハ小舟ニ乗テ。伊與國ヘ逃ケカヘ

ル。當國ノ警固ニ居ケル。橘遠保ト云フモノ。純友并ニ其子重太丸ヲ討殺シテ。頸ヲ京ヘ送ル。或ハ純友生捕テ。獄中ニ死タリトモ云ヘリ。八月。小野好古飯京ス。十二月大赦ヲ行ル。東國西國之兵亂シツマルニヨリテナリ。同五年^{壬子}三月。伊勢宇佐ヘ奉幣使ヲ立テラレ。始メテ賀茂ノ社ヘ行幸アリ。是東西ノ兵亂シツマル故ナリ。カクテ四海浪シツカニシテ。治ル御代トナザニケリ。

將門純友東西軍記畢

泰衡征伐物語

昔虞舜の政を検する。四罪おこなはれて。天下伏し姫旦の辰を負し。三監討せられて。海内おさまりき。上古無爲の世。なを如此。末代澆淳の俗におゐてをや。我朝には。承平天慶より以降。亂臣やゝもすれは。義をそむきて。朝をかたふけんとすれとも。良將しはく功をたて。國をしつむ。しかれは皇家のいよさかむなる。武門のかたく守ゆへなり。近は倭藤太秀郷か後胤。鎮守府將軍陸奥守秀衡といふ者あり。祖父わたりの權太郎清衡。寛治年中に。武衡家衡を征伐せられし時。源將軍の士卒として。勳功あるによりて。奥六郡の押領使として。國中に又人なきかことし。しそく基衡孫秀衡か時にいたりて。そのいきおひますます強大にして。剩大樹の名をおひたり。陸奥出

羽兩國を筵のことくまきて。日ことに坑飯の禮をおこのふ。てんかの奇もの。きたしいたささるはなく。にんけんのゑいよう。きわめつくさすといふ事なく。九郎大夫判官源義經。今は前伊豫守義顯と號す。平氏誅伐の後。鎌倉の源二位頼朝卿と不和の事ありて。當國に下向。秀衡か館にきたりて。約をむすひ程を合せしかは。蛟龍の水を得たる思をなして。いよく虎豹の翅をおほす事をよろこふ。勇威つゐにかたふく事なくして。文治三年。壽算をたちて終りにき。前民部少輔藤原基成か女の腹。次郎泰衡をたてゝ家督とす。泰衡そのとく。ちゝに及はす。兵略漸々微なりときゝて。頼朝卿謀を廻らして。泰衡を語らひていはく。舍弟九郎冠者を。汝か館に隱しおくよし。そのきこえあり。朝敵與同の罪。爭天の譴をおそれさらん。はやく勅命にしたかひて。かれを誅

して。その首を奉らは。同意の咎をなためらるるのみにあらず。封するに數ヶ國を以てし。賞するに官と爵とを以てすへしと。ねんころにこしらへられて。貴命のあまきに感し。恩祿の厚からむにふけりて。則御旨に伏して。ひそかに誅戮の事^ツ誠す。文治五年閏四月廿日。つゐに數百騎の精兵を率して。よしつねをおそひ責。よしつね基成朝臣か衣川の館にして。防戦といへとも。其兵いくはくならず。悉に敗績しぬ。よしつね持佛堂にいたりて。先妻を殺し。次に四才の少女を殺して。其後自害す。六月十三日。泰衡か使新田冠者高衡。よしつねか首をさゝけて。かまくらへいり。こしこへの浦に着よしきこえければ。和田太郎義盛。梶原平三景時をつかはして。實檢せしむ。おのゝ鎧直垂を着して。甲冑の郎從廿騎を相具しけり。かの首黒漆の櫃にいれ。清美酒にひたして。二人し

てこれになふ。生年卅一。いまた二毛のよわひにたらず。武略の家にうけたるのみにあらず。心すなほになさけふかゝりしかは。貴賤。これをかなしみ。都鄙これをおしますといふ人なし。泰衡みつから其唇をうしなひて。齒を塞くす。禍敗ちかきにあり。累卵よりもあやうしと。人見おもへり。爰に源二位使をもちて京都に申つかはさるゝ事あり。奥州の泰衡。日來よしつね同心の科かるからず。はやゝ追討の宣旨を下さるへしとなり。則軍をめし。用意をいたさるゝあいた。勅答すてに到來。奥州征伐の事。よしつねはやくうたれぬ。今年造太神宮の上棟。東大寺造營。彼是計會す。追討の儀猶豫あるへきかとなり。これにつゐて。猶勅許あるへきむねをかかねて申さる。大庭平太景能は。殊に故實を存する老兵なり。二品これをまねきて。征伐の事を相談せらる。な

ましいに家人等をめしあつむる所に。勅許停滯。このうへの沙汰。いかゝはからひ申へしと、詞いまたおわらざるに。景能申ていはく。軍中には將軍の令を聞て。天子の詔をきかすといへり。すてに奏聞をへらるゝ上は。あながちその左右をまたしめ給へからず。累代の御家人の。綸命を下されすといふとも。治罰をくわへられんに。何條事かあらん。參あつまる武士數口をへて。さためてそのわつらひある歟。はやく發向せしめ給ふへしと申。直言のおもむきを感じ仰らるゝあまり。馬にくら置てこれをひかる。小山七郎朝光。御馬を庭上に引たてゝ。手繩のはしを景能か座の前におく。景能縁に候なから。是をとりて郎從につたふ。保元の合戦に疵を蒙りし後。歩行にたへず。たやすく地にくたりかたきあいた。朝光か所爲尤しかるへしと。二品甘心。景能又感悦す。千葉

介うけたまはりて御旗を新調す。又下河邊庄司行平承りて。御鎧を調してもてまいれり。紺地の錦の御直垂をそ相副ける。御はたをは三浦介よし澄を御使にて。鶴岳の八幡宮の別當坊にわたされて。社頭にして七日加持せらるへきよしを仰す。奥州發向の事。三の道より三手に分。東海道は。大將軍千葉介常胤八田右衛門尉知家。をのゝ一族并に常陸下總の軍勢を相具して。宇太なめかたをへ。岩城岩崎をめぐりて。逢隈川の湊を渡りて。參會すへし。北陸道の大將軍。比企藤四郎能員。宇佐美平次實政。下路をへて。上野國高山小林大胡佐貫の輩を相催て。越後國より出羽國念種關に出合へし。二品は大平中路より。畠山次郎重忠を先陣として。向はるへしとそきこえける。武藏上野兩國のうち。黨の者共は。加藤次景康葛西三郎清重等にともなふへきよし仰らる。彼兩

人。合戦のはかり事ありといへとも。無勢にして功をなしかたき歟によりてなり。城四郎長茂は囚人たりといへとも。勇士のきこえあるによりて。厚免ありてめしくせらる。七月十九日巳刻に。鎌倉をいて、發向せらる。その勢すへて壹千騎なり。先陣重忠人夫八十人に。征箭鋤鋤をもたせて。さきに立。前に馬三疋をひかせ。うしろに。郎從五騎を召具したり。いはゆる長野三郎重清大串小次郎本多次郎榛澤六郎柏原太郎等也。七月廿五日。宇津宮に奉幣の事あり。又上箭をたてまつらる。古多橋の宿にして。小山下野大掾政光入道。駄餉を獻る。紺の直垂上下を着するおのこ。御前に候けるを。政光入道かれは誰にか候覽と申ければ。本朝無雙の勇士熊谷小次郎直家なりと仰らる。何事に無雙の名を得候やらむと申けるに。平家追討の時。一谷以下の戦場にして。父子と

もに命をすてんとする事。度々なりと仰られければ。政光微笑して。君のためいのちをすつるは兵のこゝろさしなり。直家にかきるへからず。郎從なき輩は。身つから手をおろす故に。其名をあく。政光ことくは。只郎等をつかはして忠をいたさしむるはかりなり。今度におきては。身つから戦ふて。無雙の仰を蒙へきよし。子息朝政家政朝光。ならひに猶子頼綱等に下知す。二品入興し給けり。廿六日。宇津宮を立給所に。佐竹四郎。常陸國より參向す。しかるに所持の旗無文白旗なり。二品の御旗と。ひとしかるましきよしを仰て。御扇出月を給。佐竹則旗の上にこれを付けり。廿九日白河關にて。明神に奉幣の後。梶原源太左衛門尉景季を召て。秋のけしきまともたしかたし。能因法師か古風おもひいてすやと仰られければ。駕を扣て一首の歌を詠す。

秋風にミさきの露をはらはせて君かこゆれ
は關守もなし

八月七日。陸奥國伊達郡阿津賀志山の邊。國見の驛にそつかれける。泰衡か方には。二品すてに發向のよしを聞て。阿津賀志山に要害をかため。國見の宿と彼山の間に。俄に四五丈の堀をまうけて。逢隈川をかけ入たり。他腹のこのかみ西木戸の太郎國衡を大將軍として。金剛別當秀綱。その子下湊房太郎秀方以下をさしそへて。貳萬騎の軍兵。山内卅里の間にみち／＼たり。又荊田郡に。名取廣瀬二の川をおもてにあてゝ。大繩を引。楯をならへて城郭をかまふ。泰衡は國分原鞭楯に陣を取。又栗原三迫黒岩口一野邊若九郎太夫餘平六以下の郎從を大將として。數千の勇士をさし向けり。出羽國の警固には。田川太郎行文秋田三郎致文をさしつかはすと聞えし。夜に入て畠山次郎

召具する所の人夫をつかはして。山をくつし土をはこひて。件の堀をふさきて。人馬の路を通せしむ。八日卯刻。畠山次郎重忠小山七郎朝光加藤次景廉工藤小次郎行光同三郎助光等。金剛別當秀綱か。數千騎の勢にて。かためたる。阿津賀志山の前の陣に寄來て。時を作り箭をとはす。秀綱しはらく相防といへとも。大軍おそひかさなるあいた。堪すして巳刻に引退て。大木戸に馳歸て。大將軍國衡に。合戰の次第をしめして。かさねて。計略をめぐらし。八月朔日。泰衡か郎從信夫の佐藤庄司と申は。九郎判官のめしつかはれし。繼信忠信等か父なり。叔父河邊太郎高綱伊加良目七郎高重等と相具して。石郡坂の上に陣をとり。堀を構へ水をたゝへ。楯をつき。石弓を張。敵を相待處に。常陸入道念西か子息常陸冠者爲宗同次郎爲重同三郎資綱同四郎爲家等。先陣に心をか

けて。ひそかに伊達郡を出て。是の陣に忍ひきてかけ入り。軍甚強して。爲重資綱爲家おのゝ疵を蒙る。爲宗とに身命をすてゝ。責戦あいた。つゐに庄司以下宗との者とも十八人か首を取て。阿津賀志山のうへ。經の岡にそかけてける。九日夜に入て。明日あつかし山をこえて。合戦を遂へきよしおさためらる。三浦平六よしむら葛西三郎清重工藤小次郎行光同三郎助光狩野五郎親光藤澤次郎清近河村千鶴九年十三以上七人。相談するやう。明日大軍と共に嶮嶮をしのかん事。前後心にまかせかたし。夜をもちて。ひそかに山を越て。心のとく先を懸んといひて。同心にしひいてゝ。畠山が陣の前をすくる間。重忠か郎從成清この事を知て。主人をいさめていはく。今たひ先陣を仰らるゝは。となる面目なり。然を傍輩みたりかはしく。先登をあらそふ。人にさきせられ

ん事口惜かるへし。いそぎ馳向て濫吹之義をやめて後。先途にさいきらんといふ。重忠いはく。その事然らす。他人の力もちて。敵をしりそくといふとも。みな重忠か功なり。すてに先陣を奉るあいた。重忠かむかはさるさきに。ほこさきをあらそふは。一身のいきおひにあらずや。兵のすゝむ所制すへからすといひてやみぬ。さる程に。七騎の輩夜もすから山をこゆ。七騎の輩城のきはに馳付て。こゑゝに名乗。泰衡か郎從。伴藤八以下の兵とも。我も我もと打出。すゝみたゝかふあいた。狩野五郎うたれぬ。伴藤八は六郡第一の大力なり。工藤小次郎行光おしならへてくむて落。しはしは勝負ありとも見えさりけるか。つゐに藤八うたれにけり。行光その頭を取。取付に付て。なを木戸口ちかくのほするあいた。武者二人馬をはなれてくむてふしたり。一人藤澤次郎

清近と名のる。すてにあやうくみえけるを。落かさなりてあひよりに。その敵を打てけり二人しはらくいきをつくあひた。清近行光が合力に感するあまり。彼息男を聳とすへきよしそ。忽の約おそなしたりける。清重千鶴丸なども。敵あまた打取けり。式部大夫親能か猶子左近將監能直も。忍て山をこえて寄たりけり。國衡かむねとの郎等。佐藤三秀員父子を討たりける。十日卯刻に。二品あつかし山を越て。國衡か城にむかはる。大將の旗既に責ちかつくと見て。城の中の兵とも。進いてゝあらそひたゝかふ。城の構へ軍のおきて。たやすく破へしともみえさりけり。畠山次郎重忠三浦介よし澄和田小太郎よしもり佐野十郎よし連小山兵衛朝政下河邊庄司行平加藤次景廉葛西三郎清重等。武威をふるひ。身命をすてゝ責戦あいた。軍よばひかふらのをと。山谷をひゝ

かし。鄉村をうこかす。さる程に。小山七郎并宇津宮左衛門尉朝綱郎從紀權守芳賀次郎大夫以下七人去夜伊達郡藤田宿を出て。今津の方に向て山の案内者を前にたて。土陽のたけ鳥取越をへて大木戸の上。國衡か陣のうしろの山に寄來て。時のこゑを發し。矢をふらす。城中大きにさわきて。搦手既によすると稱して。しはしもさゝへす。國衡以下散々に落にけり。其中に一人残とゝまりて。防たゝかふ武者あり。朝霧ふかくへたてたる中に。黒駿なる馬に乗たる。工藤小次郎行光よき敵と目にかけてはせならふる所に。行光か郎從藤五男相隔て是をくむ。その顔を見るに。幼稚のもの成り。名をとへともなのらす。子細と思ひてその頸をとる。是下須房太郎秀方。よはひわつかに十三歳。多力なるを以て小年とせす。その父金剛別當は。小山七郎朝光に討れぬ。あつかし山の

城やふれぬときゝて。泰衡は奥の方へそおもむきける。國衡逐電のあいた。二品そのあとを追給ふ。軍士の中に和田小太郎よしもり。先にすゝみて其日の夕に。足田郡にいたる。栗戸太郎は。出羽道を経て。大關山をこへんと心さして。大高の宮の前をすく。紅おとしの鎧黒馬にのれり。義盛追かけて。返しあはせよと言葉をかけたなり。國衡と名のりて馬の鼻をかへし。十四束の箭をつかみて。弓手に逢所を。よしもり引まうけたる十三束の箭を持て。射向の袖の中の板をしたゝかに射て。ひらきのけて二の矢をとるところに。はたけ山次郎大勢にて中を懸入あいた。大串次郎。國衡に追てかゝる。國衡か馬は奥州第一の高楯黒とて一寸にあまり。ならひなき駿馬なり。しかるに國衡。義盛か二箭におそれ。重忠か大軍におとろきて。通路をさしおきて。深田に打入りけり。

さはかりの逸物。うてともあをれとも。あからさりければ。大串透間なくよりあい。是を打て頸をとる。泰衡か郎從等。金十郎勾當八赤田次郎を大將として。根なし藤と云所に城郭をかまふるあいた。三澤安藤四郎飯富源太以下押寄て相戦。凶徒更にひるます。手にあまるあいた。根なし藤と。四方坂の間をすゝみ。しりぞく事七ヶ度なり。つゐに金十郎うたれぬ。勾當八赤田次郎をはしめとして。卅人をそ生虜ける。此所の合戦無爲。ひとへに三澤安藤四郎か兵略也。十一日二品船迫宿に逗留し給。此所にして重忠。國衡か頸を獻す。甚御感の仰を蒙所に。義盛御前に參申ていはく。國衡。義盛か箭にあたりて命をほろほすあいた。重忠か功あらざるよしを申。重忠頗笑ていはく。義盛か口狀髣髴といふへし。是を誅する支證何事ぞや。重忠頸を持參のうへは。うたかふ所な

きか。義盛かさねて申ていはく。頸事は勿論。
いし國衛か鎧は定てはきとらるゝか。かれを
めしいたされて。實否を決せらるへし。その
ゆへは。大高宮のまへ田中にして。義盛と國衛
と互に弓手に相逢。義盛か射所の矢。國衛にあ
たる。その矢孔は鎧の射向の袖。二三の板の程
にさためてある歟。鎧の毛は紅なり。馬毛は
黒なりと申。是によりて件の鎧をめしいたさ
るゝ所に。先紅なり。御前に召寄て。是を御覽
するに。射向の袖三の板いさゝかうしろの方
によりて。いとほそあと掲焉なり。殆鑿のと
ほるかとし。時に仰にいはく。國衛に對して重
忠矢を發すや。重忠發せさるよし申。其後は非
につけて御旨なし。是件の矢の跡。他に異なる
あいた。重忠か箭にあらずは。義盛か矢の條勿
論なり。凡義盛か申詞。始終符合。敢て一失な
し。但重忠其性清潔にうけて。もて作僞なし。

本意とする物なり。姦曲を存せず。彼時郎從を
前として。重忠うしろにあり。國衛兼て箭にあ
たる事一切是をしらす。只大串かれか頸を持
來て與ふるあいた。討取よしを存す。物儀にそ
むかざる歟。十二日。此宿にして。河村千鶴丸
をめし出て。その父は誰ぞ。年はいくつそと尋
らる。小童。山城權守秀高か四男に候。年は十
三に成り候と申。此小童敵陣に入て。箭をはな
ち名揚事度々也。殊に感し仰らるゝによりて。
御前にて俄に首服を加て。河村四郎秀清と號
せらる。加冠加々美次郎長清なり。此秀清は。
兄義秀去治承四年。石橋合戰の時。景親にくみ
せしによりて。牢籠の者なりけるに。母二品の
宦女として。里にかくしをきたりけるを。此度
の御供に。譜代の甲の者に候とて。いたしたて
てまいらせたりけるとぞ。十二日晚景に。多賀
國府にそつかれける。海道大將軍千葉介常胤

八田右衛門尉知家。各一族等を引具して。逢隈川の湊を渡て參ける。おなし十三日。比企藤四郎宇佐美平次。出羽國に打入て。泰衡か郎從田河太郎行文秋田三郎致文をは誅てけり。同十四日。泰衡玉造の郡にあるよしその説あり。又國府中山のうへ。物見岡に陣を取るともきこえけり。兩端いまた決せずといへとも。なを玉造の説しかるへしとて。たかの國府より黒川をへて。かの郡におもむく。物見岡へも小山兵衛尉朝政同五郎宗政同七郎朝光下河邊庄司行平を被遣。各件岡にはせむかふ處に。大將軍は先達て逐電。幕計をのこしをきて。郎從四五十人そありける。相防といへとも。あるひは誅し或生虜てかへりぬ。廿日卯刻に。二品玉造郡に着て。泰衡かたか波の城をかこまる。泰衡はかねて城を去ていてぬ。殘止る郎從等は。手をつかねて歸降す。今日一昏の書を。先陣の士等

か中へつかはさる。其趣。敵を追てつくも橋にいたらむに。凶徒其地を去て。平泉にいらは。定城をかまへ。勢を調て相持か。後陣をまたすして馳向へからす。二萬騎の軍卒を調て。きはび入へし。すてに敗北の讎なり。壹人といふとも。卒の害なきやうに用意をいたすへし。各此狀を披て其旨を存すへし。違失する事なかれとなり。廿一日。二品岩井郡平泉におもむかる。泰衡か郎從栗原。三廻にして一箭を射といへ共。宗との者とも。若次郎は三浦介にうたれ。同九郎大夫は彌六郎朝光にうたれぬ。その外多く誅せられて。卅餘人生虜ぬ。かくて松山道を経て。つくも橋にいたる時。梶原平次景高。一首和歌を詠するよし。これを申ければ。祝言のおもむき御感あり。

みちのくのせいを御方につくもはしわたらてかけんやすひらか頸

泰衡鞭をあげて。平泉の館をすくろあいた。みつから入にいとまあらず。人をつかはして。高屋寶藏已下に火をはなたしむ。杏梁桂柱の構。三代の地をほらひ。麗金昆玉の貯。一時の煙となれり。廿二日。二品平泉館に着て。泰衡か逐電の跡を歴覽せらる。主はさり家は焼て人なし。西南角にあたりて。倉稟一字。餘炎にまぬかれたるあり。葛西三郎清重小栗十郎重成を遣して。是を見せらるに。沈紫檀以下の厨子數脚有。入る所の物牛玉犀角象牙笛水牛角紺瑠璃等笏金沓玉幡金花鬘蜀江錦直垂ぬわさる帷子金鶴銀猫瑠璃燈爐南近百金器にもれり。錦繡綾羅禹筆隸管。あけてかそふへからす。象牙笛ぬはさる帷子は。清重に給ふ。玉幡花鬘は。重成望申て給けり。廿五日。泰衡か行方いまたきこえさるあいた。軍士を方々へわかし遣して。追求きよしのさた有。亦千葉六

郎大夫胤頼を。衣川の館へ遣して。前民部少輔基成父子をめす。胤頼罷向て。基成并子息三人を相具して參り。廿六日。あやしの田夫一人。御旅館邊に推參して。一封の狀を投入て逐電。進上鎌倉殿侍所。泰衡敬白とかけり。其狀云。伊與國司事は。父入道扶持したてまつる。泰衡またく濫觸をしらす。亡父か後。貴命を受けて誅し奉る。是勳功といふへし。然るに今罪なくして。忽に征伐をかふむる。なにの故そや。是によりて累代の在所を去て。山林にまはる。尤不便なり。兩國はすてに御さたたるへきうへは。泰衡におきては。免除をかふむりて。御家人に列せんとおもふ。しからすは死罪を宥られて。遠流に所せらるへし。若慈惠をたれられて。御返報あらは。比内郡邊におとしおかるへし。その是非に付て。歸降して馳參へき趣を載たり。親能御前にして是をよむ。此狀

の趣。秦衡比内郡にあるか。郡内を捜求へきよし。軍兵等に仰らる。九月三日。秦衡戎か鳥をさして。糠部郡におもむくあいだ重代の郎從河田次郎をたのみて。比内郡贄棚にいたる所に。河田たちまちに舊好を變して。秦衡を殺害す。秦衡年廿五にそなりける。四日。二品志波郡に着て。陣の岡蜂松に陣を取。北陸道の追討使能員實政等。出羽國の狼喉をなひかして。まゝいり加はるあいた。軍士すへて廿八萬四千騎也。六日。河田次郎。主人秦衡か頸を持て。陣岡に參て。景時につけて是をたてまつる。重忠義盛に仰て。實檢せらるゝうへ。囚人赤田次郎を召て。是を見せらるゝに。相違なきよしを申。景時をもて河田次郎に仰られていはく。汝か所爲一旦忠に似たりといへとも。秦衡か首を得ん事。もとより掌のうちに有。汝か力をおかへからす。數代恩顧の主人を誅する科。たと

へをとるに物なし。抽賞に所なき間。身のいとまを給なりとて。朝光に仰て。その首をはねられて後。秦衡か首を懸。七日。宇佐美平次實政。秦衡か郎從由利八郎をいけとりて奉る。天野右馬允則景。亦是を得たるよしあらそひ申間。主計允行政におほせて。兩人か鎧ならひに馬の毛をしるさせられて後。囚人に尋へき旨。景時に仰らる。景時白直垂に折烏帽子。紫革の烏帽子かけして。由利八郎に立むかひて。汝は秦衡か郎從。その名をしらるゝ者なり。驕飭を申へからす。何色の鎧着たる者。汝を生とるそ。實にまかせて申上へしといふ。由利怒て云く。汝は兵衛佐殿家人歟。いまの詞こそ以外過分なれ。故御館は秀衡將軍の嫡流正統として。三代鎮守府將軍の號を釣（釣つ）。汝か主人なをかくの如くの詞を發せらるへからす。いはむや汝と我と對揚。いつれの勝負かあらん。

連盡て囚人となる事は。勇士の常なり。鎌倉殿の家人として。奇恠を現す。甚いはれなしといひて。問所の事。返答に不及。景時赤面して御前に參て。此男惡口をはくほか言語なき間。糺明に所なきよしを申。仰にいはいく。景時無禮を現する間。囚人はをとかむる。尤とわり也。はやく重忠めし尋へきよしを仰らる。重忠みつから敷皮をとりて。由利か前に持來て。是に座せしめて。禮をたゝしくし。こしらへてはいく。弓取ものゝ敵のためにとらはるゝ事。漢家本朝の通規なり。恥とするにはたらず。就中二品則永曆の昔囚人として。今天下の武將たり。貴客今生虜の號ありとも。始終の運それによるへからず。貴客六郡の内に。武備のほまれをきくあいた。勇士等功にたてんかために。おのゝみつから得たりと構申。鎧といひ馬といひ。その毛色を申されは。彼諍論をやめらる

へしといふ。由利云。客は畠山殿か。とに禮法を存らる。前の男の狼藉に似す。尤申へし。黒糸おとしの鎧に。鹿毛なる馬に乘者。まつ組て落。其後あらそひかさなる者。噉々にして分明ならずと申。重忠參て此趣を申。件の馬鎧は實政なり。すてに不審を散せらる。此男の申狀。心中を察するに。勇敢の者也とて。御前に召て幕をあけて是を覽す。仰に云く。おのれか主人泰衡は。威勢を兩國にふるふあいた。刑をくはへん事難儀のよしおほし召處に。尋常の郎從なきかゆへに。河田次郎一人かために誅せらる。兩國を管領して。十七萬騎の長たりといへとも。百日さゝへす。廿ヶ日中に滅亡。頗不足言の事なりと仰らる。由利申て言。尋常の郎從少々相從候へとも。壯士は所々の要害にわかちつかはし。老軍は家々にて自害。予かことく不肖のやからは。生虜と成て最後に

ともなはず候。抑故左馬頭殿は。海道十五ヶ國を御管領。數万騎の主として。平治の亂に一日をさへへられず。没落せしめ給て。長田庄司かためにたやすく誅せられ給。古と今と甲乙定かたく候。泰衡わつかに兩國の兵を持て。數十日の間。賢慮をなやまし奉る。ひとへに不覺に處せられかたく候と申。かさねて仰らるゝ事なし。幕をたれられぬ。由利は重忠にめしあつけられて。芳情をほとこすへきよし仰らる。九日。比企藤内朝宗を岩井郡に被遣て。清衡基衡秀衡三代のあいた。建立する所の數宇の堂塔。牢籠あるへからず。寺領僧侶等安堵すへきよしを仰らる。蜂松邊に高水寺と號するは。稱徳天皇の勅願。數百歳を經り。今日彼寺の住侶等。參訴の事あり。金堂の板十三枚を。士卒のためにはなちとらるゝよしを申。則景時に仰られて。件の犯人を衆徒の前に召出し

て。左右の手を板のおもてに釘にて打付らる。これ宇佐美平次か所從なり。義軍のすくる所社をやかす。并に竹木をきらす。其法まことにからし。人はをあをきをそる。兼又寺中興隆の事に付て。望申へき事有やと仰らる。愁訴たちまちに裁許をかふむるうへは。更に望なきよしを稱して衆徒まかり出ぬ。晩頭に右兵衛督能保卿の使者下着。京都に申こはれし。泰衡追罰の宣旨を下さるゝ所なり。十一日。陣岡よりくりや川の柵にうつらる。兩國の亂によりて。人民夫婦を分れ。子孫をうしなひて。山野に逃散のやからをめしあつめて。家々に歸住すへきよし仰らるうへ。老衰の者には。各綿衣一領を給。由利八郎は勇敢の兵を感じて。恩免せらる。但兵具をはゆるされず。十五日。桶爪太郎俊衡入道。并舍弟季衡各子息等を相具して。厨河に降參す。召出て其程を覽する

に。俊衡よはひ六旬に及て。老羸の形。哀憐するにたれり。八田右衛門尉知家にめしあつけらる。知家相具して旅宿に歸る。俊衡餘言をやめて。たゞ法花經をどくしゆす。知家天性佛法に歸して。隨喜尤ふかし。翌日知家參て。俊衡か轉讀の事を申。二品往日より此經を受持せらるゝ間。則ゆるしつかはして。本宅に安堵すへきよしを仰ける。十羅刹女の照覽に優し奉るよしをそ仰ける。同廿八日。二品奥州を立て。鎌倉におもむき給。十月廿四日。營中に歸着。進發より還向に至まで。旅店の間。其地の民をついやす事なし。上野下野の貢を運送す。又今度合戰無爲の由を。京都に申さるゝ飛脚進發の後。御家人等盃酒を獻す。

續群書類從卷第五百七十二上

合戰部二

承久兵亂記上

- 一 御烏羽院事
- 一 賴家實朝昇進并薨去事
- 一 義時追討御評定事
- 一 光季親廣被召事
- 一 官兵攻光季事
- 一 公繼公意見事
- 一 方々被下宣旨事
- 一 二位殿口說事并引出物事
- 一 關東合戰評定事
- 一 義時宣旨御返事

- 一 京都方々手分事
- 一 高重討死事
- 一 尾張國而官軍合戰事
- 一 秀康胤義落行事
- 一 阿曾沼小次郎渡大豆戶事

承久兵亂記上

ことはの院の事

にんわう八十二代のみかとをは。おきのほう
わうとも申也。けんとか院ともかうしたてま
つる。のちにはごとばの院と申けり。御いみ
なはたかなり。たかくらの院の第四の御こ。
こしらかはの院の御むまこなり。御はは七
てうの院。しやう三ふちはらののぶたかの
きやうのむすめなり。ちせう四年かのえね七
月十四日に御たんしやう。しゆゑい二年みつ
のとのう八月廿日。御とし四さいにて。ごし
らかはのほうわうのせうめいによつて。御せ
んそあり。けんりやく元年きのえたつ七月廿
八日。五さいにして太しやうくわんのだうに
て御そくゐあり。御さいゐ十五年かあいた。け
いのう。二をまなびおはします。建久九年つ
ちのえむま正月二日。御くらゐをおりさせ給

ふて。第一の御こにゆつり給ふ。つちみかと
の院これなり。それよりこのかた。あやうし
のために御かたをならへ。いやしきけしよを
ちかつけさせ給ふ御こともあり。けんわうせ
いしゆのみちをも御まなひありけり。又ゆみ
とつてよきつはものをもめしつかははやと。
ゑいりよをめぐらし。ふゆうのものを御たつ
ねありしかは。くにくよりすすみまいりけ
り。しらかはの院のぎように。ほくめんとい
ふものを。はしめさせ給ふて。さふらひを玉
體にちかつけさせ給ふ御ことありき。又この
御ときより。さいめんといふ事をはしめらる。
はやわさすいれむにいたるまで。ゑんげんを
きはめまします。ゆみとつてよからむゆうし。
十人まいらせよと。くわんとうにおほせけれ
は。ひたちのちくこの六郎。とをたうみのはら
の彌三郎やかにかまの、次郎さゑもんときつ

くをはしめとして。ふし六人をまいらす。す
まふのしやうす。おなしくまいらせよとおほ
せられければ。そのころをかへのきすけ五郎。
いぬたけの小太郎いへみつ二人まいりける
を。きすけをはさうして。くはんとうにとゝ
め。いぬたけの小太郎をまいらせけり。かく
て十三年をへて。せうけん四年かのえむま十
一月廿五日に。一のみこ御くらゐをおろした
てまつり。第二の御こを。御くらゐにたてま
つらせ給ふ。じゆんとく院これなり。これた
うふく御てうあひによつてなり。そのうち十
一年をへて。せうきう三年四月廿日。又御く
らゐをおろしたてまつりて。しんゐんの御こ
にゆつりたてまつり給ふ。これによつてしん
ゐんとも。ほうわうの御中御ふくわひなり。
御さいゐる四ヶ月にをよはすして。御くらゐこ
ほりかはの院にまいりて。わうほうつきはて

させ給ひ。にんしん世にそむきしゆへを。い
かにとたつぬるに。ちとうりやうけ。さうろん
のゆへとそきこえける。しやうこには。ちと
うといふ事なかりしを。こかまくらのう大し
やうよりどものきやう。へいけをほろほしけ
るけんしやうに。ふんじぐわん年のふゆのこ
ろ。につほんこくのそうついふしになり給ふ。
そのうちけんきう三年七月に。せい夷大しや
うくんにふし給ふゆへに。くに／＼にしゆこ
ををき。くんかうにちとうをすへ。すてに五
升つゝのひやうらうまいをあてとる。これに
よつて。りやうけはちとうをそねみ。ちとうは
りやうけをかるめけり。

よりいへさねともせうしん井こうき
やうの事

よりともは。いつのくにのる人たりしが。へい
けついたうのゐんせんをかうふりて。ちせう

四年のあきのころ。むほんをおこして。六ヶ年のあひた。天下やすからす。けんりやく二年のはるなつのころ。へいけをほろはしはて。せいひつにしよくする事十三年。世をとる事十九年なり。廿年と申しやうち元年正月十三日に。五十三さいにして。しゆつし給ふ。その御こさゑもんのかみよりいへ。世をつき給ふ。御はしはしゆ二ゐまさこ。とをたうみのかみたいらのときまさのむすめなり。わらはなは十万殿とかうす。けんきう八年十二月十五日に。しゆ五ゐ上にじよし。おなじき日うせうしやうになり給ふ。御とし十六歳なり。おなしき九年正月卅日。さぬきのこんのすけににんし給ふ。おなしき十一月廿八日。しやう五ゐ下にしよす。おなしき十年かいげんあつて。しやうぢとかうす。正月廿日。左中しやうにてんす。御とし十八さいなり。おなしき廿六日に。

しよこくの事をぶぎやうすへきよし。せんけし給ふ。正ち二年正月五日。しゆ四ゐ上にしよし。おなしき八日。きむじきをゆるさる。おなしき十月廿六日。しゆ三ゐにしよし。さゑもんのかみににんし給ふ。御年十九さいなり。おなしき七月廿二日。しゆ二ゐにしよし。おなしくせいゐ大しやうくんたり。おなしき三年七月廿七日。やまふをうけ給ふあいた。おなしき八月廿七日に御あとを。ちやうし一万殿にゆつり給ふ。御とし六さいなり。おなしき九月七日しゆつけし給ふ。おなしき廿九日に。いのくにしゆせんしにうつし給ふ。このしやくん世をしり給ふ事。しやうち元年より。けんにん三年にいたる。そのあひた五かねんなり。二代のしやくんとして。世をつき給ふといへとも。ふてうふるまひをし給ひしかは。しんりよにもはなされ。じんばうにもそむくゆへ

に。はつかに五かねんかうちに。けんきう元年七月十九日。おほちとをたうみのかみときまさかために。ほろほされ給ひけり。御年廿三さいなり。こゝに御をとうとの万じゆ御せん。いまたゑうどうにて。ちやうきやうの御あとをつき給ふ。建仁三年九月七日に。御とし十二さいにてしゆ五ゐにしよし。おなしき日。せい夷大しやうくんのせんしを下さる。おなしきとし十月廿四日に。うひやうゑのすけにんし給ふ。御とし十三にて。御けんふくあり。うひやうゑのこんのすけさねともと申き。おなしき四年かいけんありて。けんきうといふ。正月五日しゆ五ゐ上にしよし。けんきう二年正月五日。しやう五ゐ下にしよし給ふ。おなしき廿九日。う中將けむかゝのすけにんす。おなしき三年。かいけんありて。けんゑいとかうす。二月廿二日。しゆ四ゐ下にしよす。

二年にかいけんあつて。せうげんといふ。正月五日。しゆ四ゐ上にしよす。せうけん二年十月九日。しやう四ゐ下にしよす。おなじき三年四月十日。しゆ三ゐにしよし。おなしき五月廿六日。うちうしやうにふくにんす。おなしき五年かいけんあつて。かうほうとかうす。正月五日。しやう三ゐにしよし。おなしき十八日。みまさかこんのかみににんす。けんりやく二年十二月十日。しゆ二ゐにしよす。おなしき三年かいけんあつて。けんほうといふ。二月廿七日。しやう二ゐにしよし。おなしき四年六月廿日。こんちうなこんににんす。ちうしやうもとのとく。ずい人四人を給ふ。御とし廿四さいなり。おなしき六年正月十三日。こん大なこんににんし。おなしき三月六日。さ大しやうににんす。みちいへのきやうのあとなり。おなしき日。さまれうのしやうけんたり。おなしき

十月九日。内大じんになんす。大しやうもとのとし。おなしき十二月二日。う大しんにんし給ふ。大しやうもとのとし。これきんふさこのあとなり。おなしき七年四月十二日。かいけんあつて。せうきうとかうす。正月に大饗をこなはるへしとて。そんじやのために。ばうもんの大なごんたゝのふのきやうを。くわんとうに。てうしやうすへきよしとのきこえあり。このと。くげせんきありけるに。あせちの中なこんみつちかのきやう。申されけるは。そもくれいをわうたいにたつぬるにをよはす。さねともかしんぶよりとも。う大しやうはいにんは。すなはちしやうらくをうけ。きやくしきのとく。なんそさねどもしゆうに。そのみくわんとうにありながら。けつくけいしやうを。へんしうのさかひに下して。はいかをすべしや。百くわんをとていにさためられてよ

りこのかた。いまたかゝるれいをきかすと申されければ。そのときのせつしやうは。ごきやうこく殿にてましゝけるか。おほせられけるは。みつちかのきやうのいけん。てうゝそのいはれあり。たゝしなにとも。たゝさねともか申まゝに御ゆるしあるへしとおほゆ。きうきをみたり。きやくしきにいせは。くわんしよくは。わたくしにあらす。しんりよも御はからひあるへしと。おほせありければ。をのの此きにとうし給ひけり。おなしき正月廿七日。しやうくんげ。う大しんはいかのために。つるかをかの八まんくうへ。御しやさんあり。とりのこくに御いてありけるに。まつゐかひ四人。つきにとねり四人。つきに一ゐんしやうそうす。かのゝかけもり。ふしやうこまのもりみつ。しやうけん中はらのなりよし。以下(上カ)そくたいなり。つきにてんしやう人には。一てう

しゝうよしうし。とうひやうゑのすけよりつ
ね。いよのせうしやうさねまさ。むまのこん
のかみよりのりのあそん。中くうのこんのす
けのふよしのあそん。すいしん四人なり。一て
うのたいふよりうし。一てうのせうしやうよ
し^{つき}ふさ。さきのいなのはのかみもろのりのあそ
ん。いかのせうしやうたかつねのあそん。もん
じやうはかせなかのりのあそんなり。つきに
せんくとうこうたうよりたか。へいこうたう
ときもり。さきのするかのかみすゑとき。さこ
んのたいふともちか。さかみのごんのかみさ^(つカ)
ねさだ。くらうどのたいふもとくに。むまのす
けゆきみつ。くらうとのたいふくにたゞ。うこ
んのたいふときひろ。さきのはうきのかみち
かとき。さきのむさしのかみよしうし。さがみ
のかみときふさ。くらうとの大いふしけつな。
さまのこんのすけのりとし。むまのこんのす

けむねやす。むさしのかみちかひろ。しゆりの
ごんの大いふこれよしのあそん。うきやうの
こんたいふよしときのおそん。つきにくはん
人はたのかねみつ。はんのおさかけのゝあつ
ひて。つぎに御くるま。おなしくくるまそひ
四人。きうたう一人。つきにすいひやう二か
うなり。をかさはらの次郎ひやうゑながきよ。
こ櫻をとしのよろひをちやくす。たけたの五
郎のふみつ。くろいとをとしのよろひをちやく
す。いつのさゑもんせうよりさだ。もえき^(の脱カ)
いとをとしのよろひをちやくす。をかきのさ^(術カ)
ゑもんのせうもとゆき。ひをとしのよろひを
ちやくす。おふす^ほかの太郎みちのふ。ふちを
としのよろひをちやくす。しきふのたいふや
すときは。こさくらをどしのよろひをちやく
す。あきたのしやうのすけかけもり。くろい
とをとしのよろひをちやくす。みうらのこ太

郎ときむら。もえきいとをどしのよろひをちやくす。かはこえの次郎しけとき。ひをとしのよろひをちやくす。おきの次郎かけかす。ふちをとしのよろひをちやくす。つきにさうしき廿人。つきにけひいしのたいふのはうくわんかけかと。そくたいさやまきのたちなり。つきに御てうとかけ。さゝ木の五郎さゑもんのせうよしきよ。つきにけらう御すひしん。はたのきんうぢ。おなじくかねむら。はりまのさたふん。中とみのちかたう。かげのゝあつみつ。おなじくあつうぢ。つきにくげには。しん大なごんたいのぶ。さゑもんのかみさねうぢ。さいしやう中しやうくにみち。八でう三ゐみつもり。ぎやうふきやう三ゐむねながをのゝのりくるまなり。つきにさゑもんのだいふみつかす。おきのかみゆきむら。みんぶのたいふひろつな。いきのかみきよしけ。せ

きのさゑもんのせうまさつな。ふせのさゑもんのせうやすさた。をのてらのさゑもんのせうひてみち。いかのさゑもんのせうみつする。あまのさゑもんのせうまさかけ。むとうさゑもんのせうよりのり。いとうさゑもんのせうすけとき。あたちのさゑもんのせうもとほる。いちかはのさゑもんのせうすけみつ。うさみのさゑもんのせうすけまさ。さぬきのさゑもんのせうひろつな。ことうのさゑもんのせうもとつな。そうのさゑもんのせうたかちか。中てうのさゑもんのせういへなが。さぬきのうゑもんのせうまさひろ。みなもとの四郎うゑもんのせうひてうぢ。しほやのひやうゑのせうともなり。くないのひやうゑのせうきんうぢ。わかさのひやうゑのせうたいひで。つなしまのひやうゑのせうとしひさ。とうのひやうゑのせうしけたね。つちやのひやうゑの

せうむねなか。さかひのひやうゑのせうつね
ひて。かりのゝ七郎みつひろとうなり。ろし
のすいひやう。一千よきなり。みやてらのろ
もんに。いらしめ給ふとき。うきやうの大ふ
しとき。にはかにしん神いれいの事ありて。御
けんをなかのりのあそんにゆつりてまかりさ
り給ふ。しんくうし御はいたつのゝちにをい
て。こまちの御ていにかへらしめ給ふ。やゐ
んにをよひて。しんはい事をはつてやうく
まかりいたしむるところに。いつくよりとも
なきに。にようはう。なかのけはのはしのほ
とりより。うすきぬきたるが。二三人ほとは
しるとも見えし。いつしかよりけん。いしはし
のあひたに。うかゝひきたりて。うすきぬう
ちのけ。ほそみのたちをぬくとそみえし。う大
臣殿をきりたてまつる。一のたちをはしやく
にて。あわさせ給ふ。つきのたちにて。きられ

ふさせ給ひぬ。ひろもとやあるとそ。おほせ
られける。つきのたちに。もんせうはかせき
られぬ。つきのたちに。はうきのかみもりの
きられ。きすをかうふつて。つぐの日しす。こ
れをみて。一とうに。あとはかりをのゝきけ
り。くぶのくきやう。てんしやう人はさてをき
ぬ。つちくゝのすいひやう。しよくゝのかゝ
りび。とうざいにあはて。なんほくちそうす。
そのをと。おく千のいかつちのとし。そのゝち
すいひやう。きうちうにはせかすといへとも。
しうてきをもとむるに。ところなし。たけた
の五郎。まつさきにすゝめり。ある人申ける
は。かみのみやのみきりにをひて。へつとう
公曉こうきやう。ちゝのかたきをうつつのよし。なの
られけるとそ申ける。これによつて。をのゝ
くたんのゆきの下の。ほんほうにをそひた
るところに。かのもんていのあくそうら。そ

のうちにこもつて。あいたゝかふのところになかおのしん六さたかけ。しそく太郎かけのり。おなしく次郎たねかけら。さきかけをあらせひけり。ゆうしのをもむき。せんちやうのほう。まともつて。びだんたり。つゐにあくそうら。はいほくす。こうきやうは。此ところにはゐたまはさりければ。くんひやうとも。むなしくたいさんす。しよ人はうせんたるほかたなし。こゝにこうきやうは。かの二おんくひをもちて。こうけんのひつちうかしゆくしよに。むかはれけり。ゆきの下のきたゝにのたぐちせんのおひたも。なをてに御くひをは。はなしたまはす。こうきやうのたまひけるは。われもつはら。とうくわんのちやうにあたる。はやくけいきをめぐらすへきよし。しめしあわせられけり。これはよしむらのそくなん。こまわかまへ。もんでいにれつするによつて。そ

のよしみをたのまれりしいへなり。よしむら（ゆカ）此事をきゝて。せんくんのおんくわをわすれたるのおひた。らくるいすかう。さらにこんごにをよはさりけり。すこしさへきつて。まつほうおくにくわうりんあるへし。御むかひのひやうしを。まいらすへきのよしをそ申ける。ししやまかりさつてのち。又ししやをつかはし。くたんのおもむきをうきやうの大ふに申されけり。さてもこうきやうは。かくちうしたてまつるへきくはたてをはしりたまはす。さうなくあじやりを。ちうしたてまつるへきのよし。けちしたまふのおひた。一そくらをまねきあつめて。ひやうじやうをこらす。それあしやりといふは。大ぶようにたんぬ。すなほにあらざるなり。人たやすくこれをはからふへからす。すこふるなんきたるよし。をのゝあひきするところに。よしむらはようかんのきを

ゑらんで。なかおのしん六さだかけ。うつてたれけり。さたかけしたいにをよはす。さをたつてくろいとをとしのよろひをちやくし。さいかの次郎とて大かうりきのもあり。これら以下らうしゆう五人あひくし。こうきやうのさいしよ。ひつちうあしやりのいへにをもむきけり。おりふしこうきやうは。よしむらかむかひのつはもの。ゑんいんせしむるのあひた。つるかをか。こうめんのみねにのほつて。よしむらかいへにいたらむとし給ひけるところに。さたかけと。とちうにてゆきあひ給ひけり。さいかの次郎よつてかゝり。たちまちにこうきやうをいたく。たかひにしゆうをあらそふところに。さだかけたちをとつて。こうきやうの御くひをきりたてまつる。そけんのころものしたに。はらまきを給ひけり。しやうねん二十さいなり。そもくこのこう

きやうと申はう大しやうよりとものきやうの御むまこ。きんこしやうくんよりいへのきやうの御そくなり。御はゝはかもの六郎しげなりのむすめなり。こういんそうじやうのいへにいり。ていきやうそうつしゆはうの御てしなり。わかみやの別とうあくせんしのこうとかうす。むさんなりし事ともなり。御ちゝよりいへのきやう。御あとをちやうし一万殿にゆつり給ふところに。けんにな二年九月に。おちほうてうのたひらのときまさかさととして。よしときを大しやうくんとして。はつかうせしめ。これをうちたてまつる。このとき御とし六さいなり。をちひきのはうくわんふちはらのよしからうとう百よ人。ふせきたゝかふといへとも。かなはすして。をのゝしかいしてけり。これによつて。う大しん殿にをひては。しんきやうの御かたきなれば。こんど

かゝるむほんをくわたて給ひけり。このほか
れんしあり。おなしくへつたうゑいちんとて。
しやうがんほつきやうのむすめのはらの御
こおはします。わらはなをは。せんしゆ殿とそ
申ける。これをもおなしきとしの十月六日に。
うちたてまつりけり。おなしき御はらにせん
きやうとて。わらはなせんさい殿とそ申ける
は。せうきう二年四月十一日うたれ給り。又
きそよしなかのむすめのはらに。たけの御か
たとておはします。これはよりつねしやうく
んの。さいしつになり給ふ。さるほどに。さだ
かけは。かの御くひをもちてかへり。すなは
ちよしむらうきやうの大ふの御ていにちさん
す。ていしゆいてあひて。その御くひを見ら
る。あんとこの次郎たゝいへ。しそくをとり。
こゝにしきぶのたいふ申されけるは。まさし
くいまたあしやりのおもてを見たてまつら

す。なを御くひにうたかい有とそ申ける。そも
そもけふのせうし。かねてほんいをしめす事。
ひとつにあらす。いはゆる御いてたちのこに
をよひて。さきの大せんの大ふにうたう。さ
んして申けるは。それかしは。せい人のゝちい
またきうるいの。おもてにうく事をしらす。し
かるにこんじちつきん申のところに。らくる
いきんしかたし。これたゝことにあらさるな
り。事さためてしさいあるへきか。又きんう
じ。御ぐしをこうするところに。みつから御ぐ
しを一すちぬいて。つきににはのむめをとり
て。きんきのわかをゑいし給ひけり。
いてゝいなはぬしなきやとゝなりぬともの
きはのむめよはるをわするな。となん。もんを
御しゆつるとき。れいきうめいてんす。くるま
よりおり給ふきさみは。ゆうけんをつきおり
給ひけり。おなじき廿八日御たいところらく

しきせしめ給ふ。御かいのしは。しやうこんはうのりつしきやうゆうなり。又むさしのかみちかひろ。さゑもんのたいふときひろ。さきのするかのかみひてとき。あきたのじやうのすけかけもり。をきのかみゆきむら。たいふの

せうかけかと以下。御け人一百よ人。こうきよのあいしやうにたへすして。しゆつけをとけ

らるなり。いぬのこくにはしやうくんけちやうしゆゐんのかたはらに。そうしたてまつる。

さんぬるよ。御くひのあるところをしらさりければ。五たいふく。そのはゞかりあるへきによつて。きのふきんうしこふするところの

御ぐしをもつて。御くびにもちゐ。くわんにいれたてまつりけり。さてもこの世のなか。いかなるへきそ。まことにやみのよに。とほしひをうしなへるにことならず。かまくら殿には。たれをかすゑまいらすへきとそ申ける。さ

るほどに。こうきやう殿上人はむなしくかへりのほり給ふ。するがのくにうきしまがはらにて。きがんとづれてゆきければ。さゑもんのかみさねうぢのきやう。

はるのかり人にわかれぬならひたにかへるみちにはなきてこそゆけ。おなし年の二月八日。うきやうの大ふよしとき。大くらのやくしたうにまふて給ふ。このてらはれいむのつけによつて。さうくのちなり。さんぬる月の廿七日。いぬのこくくふのとき。ゆめみるかことくに。しろきいぬ。御かたはらにまみえてのち。しんしんうらんあひた。御けんをなかのりのあそんにゆつりて。いがの四郎ばかりをあひぐして。まかりいて給ふ。しかるにうきやうの大ふ。御けんのやくたるのよし。せんじかねてもつてそんちのあひた。そのやくにんをまほつて。なかのりかくびをきり

給ふ。たうじ此たう。いぬかみだう中にさした
まはすと申けり。さてもこうきやうは。こん
とのくはたてのみにあらず。此りやう三年か
あひた。御しよ中に。ばけやどりをうなのすか
たをして。ゆきいり給ふに。きはめてあしはや
く。みかろくして。しはしは。まみえ給ふを人み
けり。いまこそ此人のしはさなりとぞ。おも
ひあはせける。御ちゝには。四さいにてをくれ
たまひしを。二の殿はごくみたてまつりて。
わかみやのへつとうになり給ひけり。又おな
しき年二月十五日のひつしのこくに。二の殿
の御ちやうたいのうちへ。はとゝびいる事あ
りけり。かゝるところに。おなしき日のさる
のこくに。するがのくにより。ひきやくまいり
て申ていはく。あのゝ次郎くわんしやよりた
か。さんぬる十一日より。たせいをいつそつし
て。ちやうくわくをしんさんにかまふ。これ

すなはちせんしを申たまはつて。とうこくを
くわんれうすへきのよし。あひくはたつとぞ
申ける。これはこう大しやうけの御をとゝ。あ
のゝせんじせんしやうのじなんなり。はゝは
とをたうみのかみたひらのときまさがむすめ
なり。おなじく十九日二の殿のおほせによつ
て。よしとき。かねかくほひやうゑのせうゆ
きちかいけのけ人らを。するかのくにへさし
つかはす。あのゝくわんじやちうりくのため
なり。おなじき廿三日。するがのくにより。ひ
きやくさんちやくして。あのゝくわんしやふ
せきたゝかふといへとも。ぶせいなれば。か
なはすしてじかいするのよしを申ける。か
くてとうこくはふゐになりけり。さてもし
やうぐんのこうしたへはてたまはんことを
かなしみおもひ給ふ。二の殿のさたとして。く
わうみやうぶじのさ大しんみちいへこうの三

なん。よりつねのきやうを申くたし給ひ。けん
けのしやうくんのこうしを。つかしめ給ひけ
り。これによつて。二の殿の代として。よしと
きてんかのしつけんたりき。又みやこには。け
ん三ゐにうたうのむまこ。むまのこんのかみ
よりのりとて。たいりのしゆごにてありける
を。これもげんじなるうへ。よりみつがまつ
えふなりと。おほしめして。さいめんのもの
もにおほせて。させるつみなきをうたせられ
ける。おなしくしそくよりうちを。いけとられ
けるこそふびんなれ。ちんとうにひをかけて。
(いカ)
しかひしてけり。うんみやう殿に付てけり。な
いしところいかゝなり給ひけんと。おほつか
なし。

よしときついたう御ひやうしやうの事
をよそ。ゐん。いかにもしてくわんとうをほろ
ぼさんとのみ。おほしめしける。きやうわらは

へをあつめさせ給ひて。ぎじちやうとう／＼
たへとて。ものをたまはりければ。さなきだに
をいろごとゆひ。ぎじちやうとう／＼とそ申
ける。これはよしときくひをうてといふ。もん
しのひゝきなり。又ねんかうを。せうきうとつ
けられたるも。ふかきころあり。そのうへ。
なんとほくれいにおほせて。よしときをしゆ
そし給ふ。三てうしらかはに。てらをたて。さ
いせう四てんわうしとなつけて。四てんわう
をあんちし。しやうじに。しいかをゑいせらる
さねともうたれ給ひぬと。きこしめして。に
はかに此てらをこほたれぬ。てうふくのほう。
しやうしゆすれば。やくするいへなり。六てう
のみやを。かまくらにすへたてまつらんと。お
ほしめしけるが。きやうゐなかに。二人のせい
しゆ。あしかるへしとて。とゝまりけり。九て
うのさ大しんうちいへこうの三なん。二さい

にならせ給ふを。しやうくんにさためさせ給ひけり。これはかまくら殿御いもうとむこ。一てうの二ゐのにうたうよしやすのきやうの御むすめ。九てう殿のきたのまん所にてましませは。その御ゆかりなつかしさに。よしとき申くだしけるとぞきこえし。せうきう二年六月廿五日に。きやうをたゝせ給ひて。おなしき七月十九日。くはんとくにげちやく。たちまちにくわいもんだかくのまとをいてゝ。くんけんあしやりのとほそにとゝまり給ふ。そもそもうきやうのたいふけんむつのかみ。たいらのよしときは。かうつけのかみなをかたか五代のまつえふ。ほうてうのとをたうみのかみときまさちやくし。二ゐ殿の御をとうと。さねともの御をぢなり。けんゐおもくして。くにこほりにあふかれ。心たゞしくして。わうゐをかるくせず。こゝにしなのゝくにのじう人に

しなの次郎もりともといふものあり。十四五になるこ二人もちたり。そんちあるによつて。けんぶくもさせず。おりふし。ゐんくまのさんけいのみちにて。まいりあひ。やがてげんざんにいりたてまつり。しかゝと申ければ。すなはちさいめんにまいるべきよしおほせくだされけり。よろこひをなし。ちゝもりともゝまいる。よしときつたへきいて。くわんとう御をんのものが。よしときにあんないをへずして。さうなく。きやうけほうこうのでう。はなはだもつてきくわいなりとて。もりともがしよれう五百よちやう。もつしゆしをはんぬ。もりとも此よしをゐんへ申ければ。かへしつくべきよし。よしときにゐんせんをくださる。御うけふみには。かへすべきよし申なから。すなはち地とうをすゑられけり。ゐんきくわひなりと。御きしよくなのめならず。又そのこ

遠¹

ろ。きやうにかめきくといふ。しらひやうしあり。ゐん御こゝろさしあさからすして。つにくにくらはしのせうといふところをぞたまはりける。かのところは。くわんとうのちとうあり。ともすれは。つゝみうちともを。さんくにしけるあひた。ゐんにうつたへ申ければ。ちとうかいえきすべきよし。いんせんをなさる。よしとき御うけふみ。かのせうのちとうは。こう大しやうの御とき。へいけつというのをんしやうなり。いのちにかはり。こうをつみて。たまはりたるところなり。よしときがわたくしのはからひにあらすと申ければ。さる事なれとも。たうしさいくわによつて。かいえきする事なり。たゝもつすべきよし。かさねておほせくだされけれども。なをもつてかなひかたきよし。御うけ申けり。一ゐんひころの御いきとをりに。もりともかめきく。そどのかし

申けるあひだ。いよく御はらたてさせ給ひて。おほせられけるは。そもくう大しやうよりともを。かまくら殿となす事。こしらかはのほうわうの御ゆるしなり。そつとわうとは。みなこれ。ちんかはからひなり。しかるをよしとき。くわふんのしよそんにちうして。ゐんせんをいはい申こそ。ふしきなれ。天しやう太じん。しやう八まんも。いかで御ちからをあはせたまはざるべきとて。ないくおほせあはせられける人々には。はうもんの大なごんたのふあせちのちうなごんみつちか。なかのみかと中なごんむねゆき。ひのちうなごんありまさ。かひの中しやうのりもり。一てうのさいしやうよしのふ。いけの三ゐひつもり。きやうふきやうのそうじやうちやうごん。二ゐのほうゐんそんちやう。ぶしには。のとのかみひてやす。みうらのへい九郎はうくわんた

ねよし。^(にカ)みしなの次郎もりとも。さゝ木の彌太郎はうくわんたかしけなとなり。これはみな。よしときをうらむるものともなりければ。しんひやうの御はからひなりとぞ申ける。せつしやうくわんはくなど。くらゐおもき人には。おほせあはせられず。より／＼きゝたまひて。おほしめさるゝ事はことほりなり。しかれとも。たゝいま天下の大事いできて。きみもしんも。いかなるめをかみたまはんと。おそれまします。一ゐん。ひてやすをめて。まづたねよしがもとにゆきて。しよそのむねをたつねよと。おほせありければ。ひてやすかしゆくしよに。たねよしをまねいて。そも／＼御へん。かまぐらのほうこうをすてゝ。くげにほうこう。いかやうの御こゝろにて候ぞと。たづねければ。たねよしがぞくしやう。人みなしろしめされたる事なれば。いまさら申にもをよは

す。こう大しやうけをこそ。ちうたいのしゆくんにも。たのみたてまつりしが。このきみにをくれたてまつりてのち。二代のしやうぐんを。かたみにぞんせしに。これにもわかれたてまつりてのちは。かまぐらに。たねよしかしうとて。みるへき人があらはこそ。べつのしよぞんなし。大ていみなこれなるへきに。たねよしたうしあひぐして候をうなは。こう大しやう殿のとき。一ぼんぼうと申しものゝむすめなり。よりいへのかうのとゝめされて。わかきみ一人まふけたてまつりしを。わかみやのせんしこの御むほんに。どういしつらんとて。よしときにちうせられけり。このゆへに。かまぐらにきよじうして。つらきことをみしと申あひた。かつはこゝろならぬほうこう。つかまつるなりとぞ。申ける。ひてやす。まことにうらみふかきも。御ことはりなり。よしと

きかふるまひ。くわぶんともをろかなり。いかにしてほろほすへきといひければ。たねよし かさねて申けるは。きやうかまくらにたちわかれて。かつせんせんするには。いかにおもふともかなひ候まし。はかりとをめぐらしては。などか御ほんいをとげさるへき。たねよしがあにゝて候よしむらは。しよ人にすくれて一門はびこつて候。よしとかがたひゝのいのちにかはりて。こゝろやすきものにおもはれたり。たねよしなひゝせうそくをもつて。よしときうつてまいらせ給へ。日ほんごのそう御たいくはんは。うたがひあるべからすと申ならは。よのわつらひになさずして。やすらかにうつべきものにて候と申ければ。うちうなづひて。けにもしかるへしとて。ひてやす御しよへまいりて。此よしをそうす。一ゐん。たねよしを小つほにめして。御れんをまきあ

けさせ給ひ。みつゝに。ぢきに。御物がたりあり。たねよしが申でうさきのことし。すこぶるゑいかんをすゝめたてまつる。すでに此ことおぼしめしたちて。ひてやすにおほせて。あふみのくにのぶしをめさる。とはのしやうなんゐんの。やふさめのためにとひろふす。せうきう三年五月十四日。ざいきやうのものゝふ。きないのつはものとも。かうやうゐん殿にめさる。くらのこんのかみきよのり。けうみやうをしるす。一千五百よきとぞしるしたる。とも井の大しやうきんつねをめさる。よのけしきも。おぼつかなくおもひ給ひてければ。うしろみにちからのかみながひらをめして。いかのはうくはんみつすゑがもとに。はせゆきて。三ゐてらのあくそう。しつみやうとうをめされ。そのほか。なんと。ほくれい。くまのものどもおほくもよはさる。いかさましき

いのあらんするとおほゆるなり。きんつねを
めされて。たゞいまゐんざんす。かさねてつ
げしらせんとき。ゐんざんすへし。さうなくま
いるべからすとぞ。おほせつかはされける。大
しやう殿まいられければ。二ゐのほうゐんそ
んちやう。うけたまはりて。きんつねのきやう
のそでをとりにて。ひきむまはや殿にをしこめ
たてまつる。これは御むほんをれうしやうせ
ず。いかにもくわんとうほろぼしがたきよし。
御むほんにくみせさるによつてなり。いまの
さいをんしのせんぞこれなり。さてこそくわ
んとうには。さいをんじの御しそんをば。かた
じけなきことにはしたてまつりけれ。しそく
中なこんさねうちのかやう。おなしくめしこ
められけり。

みつすゑちかひろをめさるゝ事

又たねよしをめして。いがのはうぐはんみつ

すゑ。せうしやうにうたうちかひろをは。うつ
べきか。又めしこむへきかと。おほせあはせら
れけり。たねよし申けるは。ちかひろにうた
う。ゆみやとるものにて候はず。めされてす
かしをかせ給ふて。一かたにもつかはされへ
し。みつすゑはけんじにて候うへ。よしときが
こじうとにて。ゆみやをとるいへにて候へは。
めされ候ともよもまいりさふらはじ。うつて
をさしむけられ候べしとおほえ候。さりなが
ら。まつ兩人めさるべく候かと申す。まづせ
うしやうにうたうみつすゑかもとへ。みゐて
らのがうとうしづめんためにとて。いそぎ参
へきよしおほせくださるゝあひだ参候。御へ
んにも御つかひ候ひけるやらんといふたりけ
れば。はうくはんいまたこれへつかひも候は
は。めしにしたかつて。とう参候はめと返事
す。ちかひろにうたうは。百よきにてはせさん

す。殿上くちにめされて。いかにちかひろ。よしときすでにてうてきとなりたり。かまくらへつくべきか。みかたへ参べきかと おほせくだされければ。いかでかせんじをそむきたてまつるへきよし申ければ。せいしやうをもつて申すへきよしおほせらる。二まいかきて。きみに一まい。きたのに一まい参らせけり。此うへは一かたの大しやうに。たのみおぼしめすよしおほせあはせられけり。そのうち。みつすゑをめさる。はうぐわん。ゐんの御つかひにいてあひ申けるは。みつすゑは。かたのこく。かまぐらのたいくわんとして。きやうとのしゆごに候を。まつみつすゑをめてのち。しよのむしやをばめさるへきに。いまゝてめされす候あひだ。大かたふしんひとつにあらす候。やがてまいるべきよし申候。御つかひ一ときのうちにかさねてをそしとめされけれと

も。過にしころあやしき事をきゝしうへ。大しやう殿御つかひもやうあり。人よりのちにめさるゝも。かたゝもつてあやしければ。御返事には。いづかたへもおほせかふむりて。ちきにむかふべく候。御しよへは。まいるまじきよし申ければ。みつすゑめは。こゝろえてけり。いそきついたうすべし。けうは日くれぬ。みやう日むかふべきよし。たねよし申て。そのよは御しよをしゆごしたてまつりけり。

くはんへいみつすゑをせむる事

さるほとに。みつすゑもけふはくれぬ。みやうにちそ。うつてはむかひ候はんずらんと。おもひければたてこもる。そのよ。いへのこらうどう。なみゐてひやうぢやうす。人々申けるは。ふせいにて。大せいになかなひがたし。わたくしのいこんにあらず。かたしけなくも。十せんのでいわうを。御かたきにうけさせ給へり。夜

のうちに。きやうをまきれいてさせ給ひて候は。みのおはりになとかはせのべさせたまはさるべき。又はわかさの國へはせこして。ふねにめされ。ちこのせうにつきて。それよりかまくらへつたはせ給へと。くち／＼にせんぎす。みつすゑいひけるは。ひかしへもきたへも。おつへけれども。人こそ。はんとうにおほけれ。みつすゑをたのみて。代くはんとして。きやうとのしゆごにをかれたるものが。かたきもかたきにより。ところもところによる。さすがに十せんのでいわうを。かたきにうけたてまつり。ところはわうじやう。はなのみやこ。ゆみやとるものゝめんほくにあらすや。いまはせきをもすへられつらん。なましゐにうちうどゝなりて。こゝかしこにて。いけどられんこと。こそくちおしけれ。よしときかへりきかれんもはづかし。わかたうどものいはんと

ころもやすからねは。みつすゑは一そくもひくまし。おちんとおもはん人々はとく／＼おつへし。うらみもあるへからずといひければ。しはしこそありけれど。よふけゝれは。のこりすくなくおちにけり。おもひきりとどまるものは。らうどうに。小井^(お)えたの余三郎。つゞみの五郎。いひふちの三郎。おほすみのしんし。山むらの次郎。かはちの太郎。しふの次郎。うのての次郎。いぬむらの又太郎。こんわう丸。以上廿七人なり。をの／＼ふばさいしのわかれはかなしけれども。ねんらいのよしみ。たうざのぢうをん。又みらいのはぢもかなしければ。かばねをこゝのへのつちにさらすべしとて。とゝまりけり。はうくわんのこに。しゆわうくわんじやみつつなとて。十四さいになるものありけり。はうくわん。なんぢはありとてもいくさすへきみにもあらす。かまくら

へくたり。みつすゑが かたみにも見えたてまつれ。おさなからんとは。ちばのあねのもとにてそたてといひければ。しゆわう申けるは。ゆみやとるものゝことなりて。おやのうたるをみすてゝにくるものや候。又ちばのすけもおやをみすてゝにくるものを。やういくしられへきや。たゞ御ともつかまつり候へしといひければ。さらはしゆわうに。ものゝぐさせよといひければ。もえきのこはらまきに。こゆみにそやをおふて。いてたゝせたり。みつすゑもしろきおほくちに。きせなかまへにをき。ゆみ二ちやうに。やをふたつそへ。ていのまにゐたり。しらひやうしともめしよせ。よもすからさかもりし。よもあけほのになりしかば。ひごろひそうしけるものとも。ゆうくんともにとらせつゝ。かへしけり。おなしき十五日むまのときに。かみきやうに。せうもういできた

りとそのゝしりける。又しはしあつて。せうもうにはあらず。これへむかふ。くわんへいのむまのけたつるけふりなりとぞ申ける。すてにゐんよりさしつかはさるゝ。たいしやうぐんには。みうらのへい九郎はうくわんたねよし。せうしやうにうたうちかひろ。さゝ木の山しろのかみひろつな。彌太郎はうくわんしけたか。するかのたいふのはうくわんこれいへ。ちくこのせんしありのふ。ちくごの太郎さへもんありな。つかう八百よきに。ておしよせたり。たちのうちにはすこしもさはかす。さいこのしゆえんしてなみいたり。小井えたの三郎申けるは。きやうこくにしのおほもんをも。たかつちにしのこもんをも。ともにひらきて。りやうばうをふせひて。さいこのかつせんを。人にみせ候はんと申ければ。小井えたのうこん申けるは。ふたつのもんをひらくならは。大

せいこみいりて。ふせいをもつて。さゝえか
たし。大もんをはさしかため。つちもんはかり
をひらきて。いらんかたきをしはしさゝえて。
のちにはしかひせんと申。此ぎはよかりなん
とて。きやうこくおもてをはさしかため。たか
つちおもてはかりをひらきたり。つはものと
も。やさきをそろへてたちならひたり。一ば
んにはへい九郎はうくわんがてのもの。すゝ
みよりて。ときをつくる。しなのゝくにのぢう
人。しかの五郎さゑもんの。うちへかけいらん
とすゝみけるを。はうくわんのらうとう。と
うむしやの次郎に。ひさをいられてのきにけ
り。やしまの次郎はせよつて。小井^つえたの四郎
に。かひないられてひきしりそく。やしまの彌
せい太郎。小井^つえたの三郎に。むないたいさせ
てのきにけり。たるいのひやうへの太郎。い
れかへたり。うちよりはなつやに。むまのはら

いられて。あふみをはつして。ゑんのきはまで
よりたりけるか。たかもゝいぬかれて。ひい
ていつる。さいめんのたてはきのさゑもんの
せう。いしうまかされてしりそきにけり。その
のち。をしよせゝたゝかへとも。うちいるも
のこそなかりけれ。たちの中には。すこしもさ
はかすふせきけり。つちもんをはやふりゑす。
大もんをうちやふれとぞ。げちしける。はう
くわんこれをきゝて。かたきにうちやふられ
てはみくるし。うちよりあけよといひければ。
しぶの次郎をしひらき。とくゝ御いり候へ
とぞ申ける。つはものとも二てにひきわけて。
まつところ。ちくこのさゑもんをしよせた
り。いしうまかされてのきにけり。まのゝさ
ゑもんときつらいれかへたり。うちよりはう
くわんこれを見て。ひごろのことはにもにぬ
ものかなと。ことはをかけゝれば。もんの外よ

りかけいりてむまよりおり。たちをぬき。えんのきはまてよりたり。すたれのあひたにたちより。なにといふに。人とも。きみをすゝめたてまつりし。日ほん一の大事をおこすはいかに。大しやうくんとなのりつれば。や一たてまつらんとてはなつ。たねよしかゆみのとりうちいけつり。ならひたるむしやていたてたり。たねよし人をすゝませて。おもうやうありとて。ひきしりそゝ。彌太郎はうくわんたかしけとなのりて。もんのうちへをめひてかく。しゆわうくわんしや。ゑほしおやにておはし候へは。をそれ候へとも。や一まいらせんとて。はなつやに。たかしけは。いむけのそてにうらかゝせけり。たかしけひきかへす。みとのむまのせう。しかのへい四郎。いられてひきていつ。うちには。たのみつるふゐえたの三郎。大事のておふて。はらをきる。じふの四郎

じかひす。むねとの二人。しかいするをみて。のこるものとも。やはいつくしつ。うちへいりてじがいす。かたきはみたれいりければ。廿七人こもりつるつはもの。十餘人おちにけり。十人はじがいして。はうくわんふし。小井えたのうこん。まんところの太郎四人にぞなりにける。いへにひかけて。じかひせんとするところ。びせんのせんじ。をひのたてはきのさゑもん。二人かけいるを。小井えたのうこん。まんところの太郎。おりあひてうちはらひかへりいる。二人もておふて。じがいしてふしにけり。じゆわうまるすたれのあひだに。たちさりけるを。はうくわん。かたきにとらるゝな。みつすゑよりさきに。じがいせよといわれて。ものゝくぬきすてゝ。かたなをぬいたりけれども。はらをきりえさりけり。さらばひのなかへとひいりてしねといはれて。はしりいりつ

るに。おそろしくやおもひけん。二三とはしり
かへりくしけるを。はうくわんよひよせて。
ひさにすへて。めをふさぎ。はらをかきゝり。
ひのなかへなけいれて。わかみもひかしへむ
きて。なむ八まん大ぼさつ。みつすゑたいい
ま。大ぶ殿のいのちにかはつて。しに候と申。
三どかまくらのかたをはいして。にしにむか
ひてねんふつとなへ。はらをきり。ひにとひい
りて。しゆわうかしかに。いだきつきてふ
しにけり。さるほとに。たねよしちかひろい
げ。御しよへまいり。かつせんのしたいをぞそ
うす。きみもしんも。むかしもいまも。みつす
ゑほとのものこそ。ありかたけれとほめられ
けり。一ゐんこんど。けんしやうあるへしとお
ほせければ。たねよし申けるは。みつすゑはか
りにて候は。もつともしかるへく候。よし
ときほと。大事のてうてきををかれて。たゞ

いまのけんしやう。いかゝ候へきとそうす。き
みもしんも。いしも申たりとをおほせける。
一ゐんおほせけるは。よしときかために。い
のちをすつるもの。とうごくにいかほとかあ
りなん。さすがてうてきとなりてのちは。なに
ほと。事あるへきと。とはせ給ひければ。てい
しやうになみゐたるつはものとも。をしはり
候に。いくはく候へきと。申あくる中にしや
う四郎ひやうへなにかしといふもの。すゝみ
いてゝ申けるは。しきだい申させ給ふ人々か
な。あやしのうたれ候たにも。いのちをすつ
るもの五十人百人はあるならひにて候。まし
て代々のしやうぐんのうしろみ。日ほんの國
のふくしやうくんにて候。ときまさよしとき。
ふし二代のあひた。おほやけさまの御をんと
申。わたくしのこゝろさしをあたふる事。いく
せんばんか候らん。なかんつく。けんきうには

たけ山をうたれ。けんほにみうらをほろぼし
しより。このかたよしときがけんい。いよい
よおもうして。なひかぬくさ木もなし。此人々
のために。いのちをすすめるもの。二三萬人は候
はんずらん。それがしもとう國にだに候はゞ
よしときがをんをみたるものにて候へは。し
なんすにこそと申せは。御きしよくあしかり
けれども。のちにはしき代なきつはものなり
と。おほしめしあはせられけり。

きんつぎこういけんの事

大しやうきんつねふし。しぎいにをこなはる
へきよし。おほせければ。しよきやうくちをと
つるところに。とく大しの大じんきんつきの。
申されけるは。ちよくめのうへは。さうにをよ
はす候へとも。ごしらかはのほうわうの御と
き。ともやすと申。せんごをしらさるふとくし
んのものゝ。ざんそうにつかせ給ひつゝ。よし

なかをついたうせんとせられしが。きそいき
とをりをふくみ。ほうしゆうし殿へむかふて。
(め脱り)
せ。たてまつる。みかたのいくさ。一ときのう
ちにやふれて。きみもしんも。ほろひ給ひき。
いまさら。たねよしひろつなか。さんにより。
よしときをせめらるへきか。かたきをほろほ
さんにつきても。みかたのほろひんにつけて
も。大しんいけ。なうこん以上の人に。しぎい
をゝこなはんと。よくゝゑいりよを。めく
らさせ給へきかと。はゝかるところもなく申
されけり。一ゐんけにもとやおほしめしけん。
しさいをなためらる。さてこそ。かまくらにも
つたへうけたまはりて。このゑのにうたう殿。
とく大しのうたいしん殿。りやうしよをは。か
たしけなきことに申されけれ。

はうくへせんじをくださるゝ事

みつすゑ。ついたうのゝちは。いそき四ほうへ

せんしをくたすへしと人々申されければ。申なこんみつちか。うけたまはりて。せんしをかくそのしやうにいはく。

左辨官下

五畿内諸國

應早令追討陸奥守平義時身參廳蒙裁斷諸

國庄園守護地頭等事

右大臣宣奉勅。近曾稱關東之成敗。亂天下讒之政務雖帶將軍之名。偏假其詞。於命忒致裁斷於都鄙。剩耀威如忘皇憲。論之政道。可謂謀叛。早下知五畿七道諸國。令追討彼義時。兼又諸國庄園守護人地頭等。有可令言上之旨者。各參院廳。宜經上奏。隨狀聽斷。抑國宰并領家等亂事於綸綍。更勿致濫行緯是嚴密。曾不違越者。諸國承知。依宣行之。

承久三年五月十五日

大史小槻宿禰謹言

とぞかきたる。とう國の御つかひに。御むまや

のとねりをしまつまるを下さる。これにつけて。人々の内せうそく。おほくゝたしけり。へい九郎はうくわんたねよしは。わたくしのつかひをたてゝ。ないせうそくをくたしけり。十六日のうのこくに。とうざいなんぼく。五畿七だうにりんしをわけて下され。おなしき日。なんとさむもんをはしめとして。しよししよさんの一のあくそうともをめす。と／＼くまいるへきよしりやうしやう申す。よのほか。きみにこゝろさしをはこぶともから。しよこく七だうより。はせさんず。みのゝ國よりにしは。たいりやくはせさんしけり。とうこくのせんしの御つかひ。たねよしがわたくしのつかひ。せんごをろんじて。くたりけるが。十九日のひつじのこくに。はうくわんのつかひ。かたせ河よりさきにたて。かまくらにいりにけり。するかのかみよしむらかもとにゆきて。文

をさしあけたり。いそきとりてみるに。十五日
むまのこくに。いがのはうくわんみつすゑう
たれぬ。さんぬる十六日うのこくに。四方へ
せんしをくたされ候。又とうごくへ御つかひ
くたり候なりとて。ひころのほんいをそかき
つくしたる。よしむらうちうなつき。御つかひ
くたるなるは。いつくにぞ。かたせ河よりさき
にたちて候つれは。いまはかまくらにそいり
候はんと申す。返事をせんとおもへとも。い
まはかまくらより。せきくとかためらるら
んを。よしむらかしやうとて。ひけんせられん
こと。なんきぢしやうなり。申されたるとは。
さこゝろへたりと申へしとてししやをいそぎ
返しのほせ。ときをうつさず。つかひもんを出
ければ。よしむら。ちよくめいにもしたかはす
たねよしがかたらひにもつかず。あんじすま
して。文をもたせて。ごん大ふ殿のもとにゆき

むかふ。おりふしさふらひのげんざんして。す
きもなき中をわけてさしよりて。さんぬる十
五日。御しよゝりうつてむかふて。いがのはう
くわんうたれ。十六日うのこくに。せんし四方
へくたさる。とうこくへの御つかひも。たゝい
まかまくらへいり候なり。たねよしかないせ
うそくにて候とて。ひきひろげてをきたれは。
よしときみて。いまゝてことなかりつるこそ。
ふしきなれ。せんしにも。とうこくのものと
も。一みどうしんに。よし時もうつてまいらせ
よと候らん。人てにかけすして。御へんてにか
けて。きみのけんざんにいれさせ給へ。ちかく
なより給ひそとて。かひつくるひ給ひければ。
よしむら口おしくもへたてられたてまつる物
かな。御いのちにかはりたてまつると。たひ
たひなり。けんきうに。はたけ山をほろほされ
給ひし時も。よしむらみをすてゝ。六郎にくみ

つき。けんほうに一もんをすてゝ。みかたにま
いり候き。ちうしやう一にあらす。いくたひ
も。三代しやうくんの御かたみにて。わたらせ
給候へは。いかてかすてたてまつり候へき。ま
つたくせんしにもかたより。たねよしのかた
らひにもつくましく候。よしむら二こゝろを
ぞんせは。日ほんこく中大せうのじんきへつ
してみうら十二天じんの。しんばつをかふむ
りて。月日のひかりにあたらぬみとまかりな
るへしと。せいしやうをたてられければ。いま
こそこゝろやすくおもひたてまつれ。されば
三代しやうぐんよみがへりて。わたらせ給ふ
ところ見たてまつれとぞ。の給ひける。

の事
二ゐ殿くとき事ならひにひきて物

をしまつまる。たつね出さる。かさゐかやつよ
り。ひつさけていてきたり。しよぢのせんし。

七つうあり。あしかど。たけた。をかさはら。か
さい。みうら。うつのみや。ちくこのにうたう。
以上七人にあてらる。此せんしについて。人
人のせうそくおほかりける。こん大ふするが
のかみあひぐして。二ゐ殿にさんす。大みやう
小みやう。まいりこみたり。にはにもひまなく
を見へし。二ゐ殿つまとのすだれをしあげ給
ひて。まつうつのみやをめされて。そのうち
ちはのすけ。あしかとのをそ。めされける。
二ゐ殿。あきたのしやうのすけかけもりをも
つて。おほせられけるは。一ゐんこそ。ちやう
こんそんなちやう。ひてやすたねよしらか。さ
んけんにつかせ給ひて。よしときをうたんと
て。まつみつすゑうたれて候なり。きみをもよ
をもうらむへきにあらす。たゝわかみのくわ
ほうのつたなきなり。をうなのめてたきさま
には。わがみを世にはひくなれとも。われほ

どものをなけき。こゝろをくたくものあらし。こ殿にあひはしめたてまつりしより。ちゝのいましめ。まことならぬはゝのそねみ。おとこのゆくゑ。このありさまとりてくるしかりしに。うちつゝきてくにをとり。人をしたかへ給ひしより。御みをふつしんにまかせたてまつりし事。ちうやおこたらす。よをとりおさめ給ひしのちは。こゝろやすかるへしとおもひしに。大ひめこせんをは。こ殿とりわきてもてなしいたはりて。きさきにすゑんとありしに。よをはやくせしかは。おなしみちにとしたひしかとも。こ殿にいさめられたてまつりて。おもひをやめて過しに。小ひめこせんにもをくれて。おひもしつみしに。このためつみふかしと。いさめられたてまつり。それもことはりとおもひなくさひてありしに。こ殿にをくられたてまつり。月日のかけをうしなふこゝち

して。こどものなけきをも。此人にこそなくさみしに。此たひそおもひのかきりなると。おもひよりはりしに。二人のきんたち。いまたおさなくて。世のまつりにも。ふかんにして。二人のきんたちをばぐくみしに。さゑもんのかうの殿にをくれてのちは。よの中にうらめしからぬものもなく。こゝろよりしに。ひとへにしなんとこそおもひしに。う大しん殿。たれかはこならぬ。さねともかたゝ一人になりたるをすてゝ。しなんとおほせ候こそ。くちおしう候へと。うらみしかは。けにもしゝたるをとおもひて。いきたるこにわかれん事おや。これじひにもはつれたりと。おもひかへしてすきしほとに。う大しん殿。ゆめのやうにてうせ給ひしかは。いまはたれにひかれて。いのちもをしかるへしなれば。みつのそこにもいりなはやとおもひさためたりしを。よしときかこれを

みて。ことの御なこりとては。御方をこそあふきまいらせ候へ。よしときか人にところををかれ候も。またくかうみやうにあらず。しかしなから。御事ゆへにてこそ候へ。まことにおほしめしきられ候は。よしときまつしかいつかまつりて。みせたてまつり候へし。かたかたの御ほたいと申。かまぐらのありさまと申。むなしくなりたまはん御事こそ。こゝろよくおほへ候へと。なくく申しかは。げにもこ殿のすゑたえ。人こともかなしくて。おもひにしなぬ身となりて。せめてのゆかりをたつねて。しやうくんをすゑたてまつりて。此二三年はすきにき。たとひわかみなくとも。かまぐらのやすからんことを。くさのかけにてもみんと。おもひつるに。たちまちぎうばのはなしと。ならんずらんこそくちおしけれ。三代しやうくんの御はかの。あとかたなくうせんことこそ

あはれなれ。人々みたまばすや。むかしとうこの殿はらか。へいけのみやつかへせしには。かちはだしにて。のほりくたりしをかし。こ殿かまぐらをたてさせ給ひて。きやうとの。みやつかへもやみぬ。をんしやうちつゝき。たのしみさかへてあるそかし。こ殿の御をんをは。いつのよにかほうしつくしたてまつるへき。身のためをんのため。三代しやうくんの御はかを。いかてかきやうけのむまのひつめにかくへき。たゝいまおのく申さるへし。せんしにしたかはんとおもはれは。まつあまをころして。かまぐら中をやきはらひてのち。きやうへはまいり給へと。なきく^ののたまひければ。大みやうとも。ふしめになりてゐたるところに。あかぢのにしきのふくろにいりたる。こかねつくりのたち二ふり。てつからとりいたして。これこそこ殿の。みをはなしたまはぬ。

御はかせとて。かたみにもちたれとも。これか
かまくらのあるがはてなれはとて。あしかゝ
殿にまいらせらる。かしこまつてたまはられ
けり。うつのみやには。御つほねといふめいは
にくらをかせて。もえきいとをとしのよろひ
をひかせ給ふ。ちばのすけには。むらさきい
とをとしのよろひの。ながふくりんのたち一
こし。いづれもかしこまつて。たまはりけり。
そのうち。むつのくの六郎ありとき。じやうの
にうたう。さゝ木の四郎ざゑもん。たけた。を
かさはら。はんとう八か國のむねとの大みや
う廿三人。かはりくめされて。いろくのもの
のをたまはる。いなはのひろもとにうたう。御
しやくをとて。御しゆをたまはるををのを
の申けるは。いかてか三代しやうくんの御を
んをは。おもひわすれたてまつるへき。その
うへけんしは。七代さうでんのしゆくんなり。

しゝそんくまでも。その御よしみをわすれ
まいらすへきにあらす。やがてめうにちうつ
たちて。いのちをきみにまいらせて。かしらを
にしにむけてかゝれと申て。をのをのらくる
いして。一どうにたちにけり。

くわんとうかつせんひやうちやう

の事

そのうち。いりあひほとに。よしときのしゆく
しよに。くわいがうしてせんしの御返事。かつ
せんのしたい。ひやうちやうあり。するかのか
みよしむら申けるは。あしがらはこねをうち
ふさき。さゝへむとそ申ける。ごん大ふ殿。こ
のきあしかりなむ。しからは日ほんこく三分
二。きやうかたへなりなんす。たゝみやうに
ち。やかてはせのほり。かたきのあはんところ
をかきりにて。せうふをけつすへしとありけ
れは。此はからひさうにをよはすとて。一みと

うしんにうつたちけり。一ぢんはさかみのか
みときふさ。二ぢんむさしのかみやすとき。
三ぢんは。あしかゝのむさしのせんしよし
うち。四ぢんするがのかみよしむら。五ぢん
ちはのすけたねつね。これはかいとうの大し
やうたるへし。せんとうには。一ぢんをか
さはらの次郎なかきよ。二ぢんたけたの五
郎のふみつ。三ぢんとを山のさゑもん
ながむら。四ばんいぐのうまのにうた
う。ほくろくたうには。しきふのたいふ
ともとき。大しやうにてのほるへしとさ
ためらる。をのく申けるは。みやう日は
あまりにとりあへす候。いま一日のへ
られて。ゐなかわかとう。むまものくを
もめしよせて。のほり候はゝやと申され
ければ。よしときおほきにいきりて。い
はれなし。いま一日ものほるならば。み
うらのへい九郎はうくわんをさきとし
て。うちむかひなんす。くに

くにをうちとられんこと。あしかりなん。
みやうにちはあく日なれば。はまふちさ
はの。さゑもんきよちかゝもとに。か
といてして。みやうここに廿一日。は
つかうすへしとおほせける。さるほと
に。あくる日のうのこくに。すてには
つかうす。かいとうの大しやうくん
ときふさ。やすとき。よしうち。よし
むら。たねつなにしたかふつはもの
には。むつのくの六郎。せうのはうく
わん代。さとみのはうくわん代。よし
なを。しやうのすけにうとう。もりの
くらうとのにうたう。かのくすけに
うたう。うつのみやの四郎よりな
か。やまとのにうたうのふさ。しそく
太郎さゑもん。おなく四郎さゑもん。
おとゝの三郎ひやうゑ。むまこやく
そのくわんしや。するかの次郎やす
むら。おなしく三郎みつむら。さは
らの次郎ひやうゑ。をひ又太郎。あ
まのく三郎さゑもんまさかけ。こ

やまのしんさゑもんともなを。なかぬまの五郎むねまさ。とひのひやうゑのせう。ゆうきの七郎さゑもんともみつ。ことうのさゑもんともつな。さゝき四郎のふつな。なか井のひやう太郎ひてたね。ちくこの六郎さゑもんともしけ。をかさはらの五ひやうゑ。さうまの次郎。としまのへい太郎。こくふの次郎。おほすかのひやうゑ。とうのひやうゑのせう。たけの次郎。おなしくへいし。すみたの太郎。おなしく次郎。さのゝ太郎三郎。おなしく小太郎。おなしく四郎。おなしく太郎にうたう。おなしく五郎にうたう。おなしく七郎にうたう。そのさゑもんのにうたう。わかさのひやうゑのにうたう。をのてらの太郎。おなしくちうしよ。しもかはべの四郎。くげのひやうゑのせう。さぬきのひやうゑの太郎。おなしく五郎にうたう。おなしく六郎。おなしく七郎。おなし

く八郎。おなしく九郎。おなしく十郎（おなしカ）。えとの七郎太郎。おなしく八郎太郎。きみたの次郎。したかはの太郎。しむらの彌三郎。てらしまの太郎。しもの太郎。かといの次郎。わたりのさこん。あたちの太郎。おなしく三郎。いしたの太郎。おなしく六郎。あほうのきやうふ。しほやのみんな。かちの小次郎。おなしくたんだい。おなしくけん五郎。あらしのひやうゑ。めくろの太郎。きむらの七郎。おなしく五郎。さゝめの三郎。みかじりの小次郎。むまやの次郎。かやはらの三郎。くまかへの小次郎ひやうゑのなをいゑ。をとうとのへいさゑもんなをくに。かすかのきやうふ（強）。施瀬（瀬）のさこん。たの五郎兵衛。ひきたの小次郎。たの三郎。たけの次郎やすむね。おなしく三郎しけよし。いかのさこんの太郎。ほんまの太郎ひやうゑ。同しく次郎。おなしく三郎。さゝめの太

郎。をかべのかうさゑもん。せんゑもんの太郎。山田のひやうゑのにうだう。おなしく六郎。いひたのうこんのせう。みやきのゝ四郎。しそく小次郎。まつた。かはむら。そか。なかもら。はやかはの人々。はたのゝ五郎のふまさ。かねこの十郎。てつしかはらのこ四郎。しんかいのひやうゑ。おなしく彌五郎。いとうのさゑもん。おなしく六郎。うさみの五郎ひやうへ。きちかはの彌次郎。あまつやの小次郎。たかはしの大九郎。たつせのさまのせう。きしまの太郎。しふかはのなかつかさ。おんとうのひやうゑ。たゝみつをさきとして。そのせい十萬よきをさしのほす。

よしときせんし御返事之事

おなしく廿七日。せんたうのせんしの御うけ文に。ことはをもつて。よしとき申されけるはしやうくんの御うしろみとして。まかりすき

候に。わうゑをかるぐしたてまつる事なし。をのつからちよくめいを。うけたまはる事。せひみなたうりのをすところ。しゆちうのひやうちやうなり。しかるを。そんちやう。たねよし。さ。さんけんにつかせましまして。そつしにせんしをくたされ。すてにあやまりなきにてうてきにまかりなり候てう。いとふひんのいたりなり。たゝしかつせんを御このみ。ふゆうを御たしなみ候あひた。かゐたうの大しやうに。しやていときふさ。ちやくしやすとき。ふくしやうくんに。よしうち。よしむら。たねつなとうをはしめとして。十九萬八百よきをさししんす。せんたうより五萬よき。ほく六たうに。じなんともとき。四萬よきにて參り候。此はうのつはものともに。めしむかはせてかつせんさせて。御らんせられへく候。もし此せいしらみ候は。よしときか三なんしけときに。せ

んちんうたせ。よしとき大しやうとして。はせ
参へく候。そのため。ふるにうたうともは。せ
う／＼かまくらに。のこしとゝめ候て。たちま
ちにはせまいり候あひた。いまはばんどう三
分のせいをさきとし。よ三分二は。けふあす
こそ。はせきたり候らめと。そう申へしとて。
たびらうあくまでとらせてをひ出さる。をし
まつ。ゆめのこゝちしてのほりけるか。おなし
く六月一日とりのこくはかりに。かうやうる
ん殿にはしり参りて。御つほのうちにうちふ
しける。きみもしんも。いかにをしまつ。物を
は巾さぬそつかれたるか。よしときかくひを
はなにものかうつて参るそ。かまくらにはい
くさするか。又りやうはうさゝへたるかと。
くち／＼にとひ給ふ。あまりにくるしく候て。
いきつき候とて。しはしあつて申ける。五月十
九日へい九郎はうくわんの御つかひ。かたせ

河よりさきたて。かまくらにいり。よしむらに
内のせうそくつけて候へは。うけひきたるか
ほにて。ししやをはかへしのほせ。くだんの
でうを。よしときにみせられて候けるあひた。
をしまつからめいたされてなはをつけられ候
き。かいたうせんたうほくろくたう。大せいの
ほりてのち。廿七日のあかつき。をひいたされ
候。よしときかくこそ申されしか。大せいは廿
一日にかまくらをたち候ひしかとも。をくれ
はせのせいをまちて。うちてのほり候。あまり
に大せいにて。みちもさりあへす。みちに又
かつせんして。のほり候あひた。五日をくれ
て。かまくらをたつて候へとも。御大事にて候
しほとに。よるもはしり候あひた。おほせいよ
りさきにまいり候。いまははや。あふみのくに
へいり候つらん。かいたうは一ちやうと。むま
のあしのきれたるところ候はす。百萬きも候

らんとて。又ふしにけり。これをきゝて。みな
いろをうしなひ。たましゐをけす。

きやうとはうくゝてわけの事

ゐんは。をしまつが申てう。さこそあるらん。
をくすへからす。たとひ又みかたに。心さしあ
らんものも。かまくらいてをは。よしときかた
とこそなのらめ。日月はいまたちにおちたま
はす。はやくみかたよりもうつてをむくへし。
ほくろくたうには。みし^みなの次郎なかとぎ。み
やさきのさゑもん^みのせう^みさたのり。かすやの
うゑもん^みのせう^みありひさ。つかう一千よきを
くたしつかはしゝかは。かさねてさしくたす
にをよはす。かいたうせんたう。このみちに
うつてを。くたすへしとそおほせける。たねよ
しひろちかいけのつはものとも。をのくぞ
んちのむねを申へきよし。おほせくたされけ
り。中にも山たの次郎^みしけたゝ。すゝみ出て

申けるは。かたきのちかつかぬさきに。みかた
よりゐんくゝみやくゝを大しやうとして。か
たきのあはんところまで。御くたし候はゝ。そ
のくちくにくゝは。みかたに参り候へし。こ
のきあしく候はゝ。うちせたをかためられて。
じんばのあしをつからかして。しつかにみや
こにて。おんかつせんあつて。もしわうはうつ
きさせたまはゝ。をのくゝちんとうにて。はら
をきり。なをとめ。かはねをうつむへしと。こ
とはをはなしてそ申ける。ゐんきこしめされ。
此りやうでうにすくべからず。たゝしいまは。
かたきあふみのくにゝいりぬらん。うつてを
さしむくとも。いくほとくのくにをしたかへん
うちせたをかためて。みやこにてかつせんも
こゝろせはし。たゝかたきのあはんところま
て。はつかうすへきよし。おほせくたさる。た
ねよし此御はからひ。しかるへしとそ申ける

しけたゝはかりそ。りやうしやう申さすつふ
やきける。ひてやすかつせんのをうふぎやう
にて。たねよしもりつなしたゝ以下。六月三
日うのこくに。みやこをたつて。おなじき四日
おはりかはにつき。てんてをわかつて。大井
とのわたりは。せんたうのてなり。このてにし
ゆりの大ぶこれよし。そのこするかのたいふ
のはうくわんこれのふ。ちくこの六郎さへも
ん。かすやの四郎さゑもんのせうひさする。さ
いめんのものせう／＼。そのせい二千よき。う
るまの渡りにはみのゝもく代たてわきのさゑ
もんのせう。かんちのくろうとのにうたう。二
千よき。いきかせには。あさ日のはうくわん
代よりきよ。せきのさゑもんのせうまさやす。
一千よき。いたはしには。ときの次郎はうくわ
ん代みつゆき。かいてんの太郎しけくに。一千
よき。まめとは大てとて。のとかみひてや

す。みうらのへい九郎はうくわん。山しろのか
みひろつな。たねよし。さゝきしもふさのせ
んしよりつな。おなしく。彌太郎はうくわんた
かしけ。あきのそうないさゑもん。かゝみのう
ゑもんのせうひさつな。彌二郎さゑもんも
るとき。あすけの二郎しけなり。さいめんのとも
から。せう／＼あひくし。一万よき。ひゑしま
には。なかせのはうくわん代しけ太郎のさゑ
もんにうたう五百よき。しきのわたりに。あき
の太郎にうたう。うすゐの太郎にうたう。山た
のさゑもんのせう。五百よき。すのまたには。
かはちのはうくわんひてすみ。山たの次郎し
けたゝ。ごとうのはうくわんもときよ。にし
ごりのはうくわん代よしつき。さいめんせう
せうあひくして。そのせい三千よき。いちわき
には。かとういせのせんしみつさた。いせのく
にの住人あひくして。そのせい一千よきにす

きさりけり。とうこくよりのほるところの。一
かたのせい。はんふんにたにもおよはす。ち
よくめいのかたしけなき。ゆみやのおしく
て。おもひきりてそくたりける。ゐんの御は
た。あかちのにしきにひれとこんがうれうを
ゆひつけて。中にはふどうみやうわう四天わ
うをあらはしたてまつりたるはた十なかれ
を。十人にたまはりけり。わたくしのいへ／＼
のもんのはたさしそへたり。おひたゝしくそ
みえたりける。

たかしけうちしにの事

五月つもこりに。とうごくよりの大しやう。さ
がみのかみ。むさしのかみ。とをたうみのくに
はしもとにつきたる口。きやうかたしもふさ
のせんしのらうとう。つゝゐの四郎太郎たか
しけといふもの。そのしふんとうこくへくた
りけるか。此事をきゝて。はせのほるに。大せ

いにみちはとられぬ。のかれゆくへきやうな
くて。せんちんのせいにまきれてはしもとに
つきにけり。いまはのかれはやとおもひて。た
ちあかりむまのはるひつよくしめ。たかしの
山にうちあけ。あゆませゆく。そのせい十九き
なり。さかみのかみこれを見給ひて。此せいの
中にときふさにあんないをはゝからすして。
はせゆくこそあやしけれ。とめよとのたまへ
は。とをたうみの國のしう人うちたの四郎中
けるは。するかのせんしの申され候し。御かた
の大せいの中に。きやうかたさためであるら
ん。みち／＼やと／＼御ようしんあるへし。わ
かけの御事。御ころもとなきそと。申候ひ
つるものをといひもあへす。むちをあけてを
ひかくる。つゝゐこれをはしらす。うちすきう
ちすきゆくほとに。をとかはといふ河はたに。
おかのありけるにおりゐて。いまはなに事か

あるへきとて。むまのあしやすませてゐたる
ところに。よろひきたるもの。けはしけにきた
るなにさまにも。かたしけとめにくるものと
おほへたりとて。かたはらにこやのありける
に入て。ものゝくするところに。うちたをしよ
せて。此いへにこもりつるは。いつくのしう
人。けうみやうをは。いかやうの人にて。おほ
するそ。大しやうのおほせをかふむりて。とを
たうみのくにのしう人。うちたの四郎か參た
りといひければ。つゝゐすゝみいてうちわら
ひて。かねてはよもしりたまはし。さゝきの
しもふさのせんしもりつなけらうとうにつゝ
ゐの四郎太郎たひらのたかしけと申ものそ。
かの大勢をかたきにして。きやうかたにさん
せんとするより。かゝる事あんのうちなりと
て。うちた六郎かむないたかけす。もとはつ
かくるゝまでいたりければ。すこしもたまら

すおちにけり。これをみて六十よき。すこしも
ひるますかけいりける。あはのくにの住人。く
んしの太郎といふもの。小やにいりければ。た
かしけゆみをうちすてゝくみあひけるか。さ
しちかへてそしゝにける。たかしけがらうと
う七人は。ともにうたれにける。のこる十二
き。にくるかとみるところに。さはなくて。大
せいの中にいり。一きものこらすうたれにけ
り。十九人かくひ。一ところにかけてけり。そ
のゝちさかみのかみむさしのかみとをり給ひ
て。これをみて。しうゝともに。大かうのけ
なけなるものかなとぞ。かんし給ひける。

おはりのくにゝしてくわんくんか

つせんの事

六月五日たつのこくに。おはり一のみやのと
りゐのまへに。くわんとうのりやうしやう。と
きふさやすときいけ。みなひかへて。てんでを

わけてけり。かたきすてにおはりかはにむかひたる大井とをは。せんたうのてにあつへし。うるまのわたりは。もりのにうたう。いきかせには。あしかゝのむさしのせんしよりうち。あすけのくわんじや。いたばしには。かのゝすけにうたう。まめどは。大てなりとて。むさしのかみやすとき。するかのせんしよしむら。いづするかのりやうこくのせい。はせかゝりて。いよいよんかのせいになりけり。すのまたには。さかみのかみときふさ。じやうのすけにうたう。とをたうみのくにのせいにみしまあたり。ゑとかはこへのもから。あひくして。むかひたり。てんでにわけらるゝとき。いくさはせんどうのてをまちて。ところゝのやあはせたるへしと。むさしのかみふれられけり。大しほの太郎。うらたの彌三郎。くせのさゑもん次郎。わたりゝによせたりけれとも。

せんどうのてをあひまちて。ひかへたるところに。まめとのて。かたきむかふにありとみて。大しやうのゆるしなきに。さうなく。かはをさせわたし。やかてうちゝかへけり。むさしのかみこれを見て。おほきにいかりて。いくさをするもやうにこそよれ。さしもをさへよと。あひつをさしたるかひもなく。いくさをはしめて。わたりゝをさはかせんこと。せんこさういしてんす。かへすゝりよくわいなりとのたまへは。しつまりぬ。こゝにきやうがたより。あさいなの三郎たひらのよしすゑとなつて。やひとつ。むさしのかみのちんの中へいわたしたり。とりてみれば。十四そくふたつふせなり。やすとき此やをみて。おほきにわらひて。あさいなはゆみはいさりけり。やつか十二そくにすこしはつみたるはかりなり。これはみかたをくさせんとして。はかりことにした

るなり。たれかへすへきとのたまへは。するかのかみやすむら。つかまつらんとそ申されける。やすときあるへからず。御へんたちのとをやのいときはまりたらんときなり。かはむらの三郎。このやいかへすへきとおほせければ。いかへしけり。又せんだうのてに。せきの太郎といふもの。かたきありときひて。三てかひとつになりてはせ向ふ。をかさはらの次郎なかきよ。ふし八人。たけたの五郎のふみつ。ふし七人。なこの太郎。かはちの太郎。にのみやの太郎。へいゐ三郎。かゝみの五郎。あき山の太郎。きやうたい三人。あさりの太郎。なんふの太郎。とゝろきの次郎。へんみのにうだう。をやまのさゑもんのせう。いくのむまのにうだう。ふせのなかつかさ。あその四郎。きやうたい三人。もたひのちう三。しがの三郎。しほかはの三郎。やはらの太郎。をやまた

の太郎。彌五三郎。こみたの太郎。ちのの太郎。くらだのきやうふ。かたきりの三郎。ながせ六郎。もゝさはのさゑもん。うんの。もち月。やまにてむまともはせおろし。(いか)つかのゝ大てらに。かたきむかふときひて。おとしたれとも人もなし。ひとつかはらといふところに。ちんをとて。三か一てによりあひて。いくさのひやうちやうす。あすおほゐをはわたらんとて。をのをのやすむところに。たけ田の五郎申けるは。あすとはの給ひつれとも。めにみたるかたきを。いかてかひとよまてはのかすへき。人をはしらす。のぶみつは。こん日此かはをわたらんとて。うちたつて。たけたの小五郎に。こゝろをあはせてすゝみけり。二ちんのがすゝみければ。せんちんこちんいかてひかふへきとて。はせゆきけり。河ばたにはせてみれば。かたきかははたより。すこしひきあけて。ち

んをとる。かはきしにふねをふせて。さかもきをひきたり。たやすくわたるへきやうなし。かはかみのさこん。ちの、彌六。ときはの六郎。あかめの四郎。たいどうのにうだうこれつねら。わたりけるをみて。かたきのかたより。むしや一人をこして申けるは。一はんにわたるはたそ。かう申は。しなの、國のじう人。すはたうに。大つまの太郎かねすみなりとそなおりたる。はんどよりとりあへす。とうこくのしう人かはかみのさこんちの、彌六とそこたへける。さては一かなれは。ちの、彌六をは大みやうじんにゆるしたてまつる。さこんのせうをば申うくるとて。かはへさとうちつけたり。ちのをもてもふらすをめぐひてかく。ぬしをこそみやうしんにゆるしたてまつれ。むまをば申うけむとてきつゝけのあまり。はのかくるゝまていたりちのさかもきのうへにお

りたつて。たちをぬくところを。おちあひてくひをとる。ときはの六郎つゝひてよりけるを。五人おちあひて。くひをとる。あかめのないとうは。これもむまのはらいさせて。かちむしやにて。河をわたり。むかへのきしにわたりつ。かたきこれをはしらすしていさりける。たけたの五郎わたらんとしけるに。あひくしてわたるともから。おなしく六郎。ちの、五郎太郎。やしまの次郎。とゝろきの次郎五郎をさきとして。百きはかり。かはなみしろくけたて。わたらんとしける。かたきこれをみて。かはきしにあよませ。やさきをそろへて。あめのふることくいすくめられて。河なかにひかへたり。たけ田の五郎かちのふみつ。むちをあけてかはのひかしのきしにひかへて。あふみふんばり。いかに小五郎。ひころのくちにはにす。かたきにうしろをみせて。ひかしへかへす

ものならは。のふみつこゝにてなんちをうた
んするそ。たゝそのかはなかにてしねやしね
やかへすなとそをめきたる。小五郎のぶまさ
これをきゝて。たゝしねやゝものともとて。
一むちあてゝ百きおなしかしらにわたす。舟
もさかもきもけちらかし。くつはみをならへ
て。むかへのきしへさとかけあかる。ちゝこれ
をみて。小五郎うたすなとて。一千よきはせわ
たす。をかさはらの次郎なかきよ。をやまのさ
ゑもんこれをみて。むちをあけてはせつゝ。こ
れをはしめとして。せんたうのて五百よきは
たのかしらを一にして。一きも残らすうちわ
たり。するかのたいふのはうくわんこれのふ。
ちくこのさゑもんありな。かすやの四郎さ
ゑもんひさするをはしめとして。なをしむ
ともからとも。かへしあはせゝ。たゝかひた
たかひおちゆきける。なかにもたてわきのさ

ゑもんかへしあはせて。ふか入してかうつけ
の太郎にうたれにけり。みのゝはちやのくわ
んじや。それもふかいりして。いつの次郎にう
たれけり。いぬたけの小太郎いつみつといふ
もの。おもひきりて。かへしあはせたゝかひけ
るを。しなのゝくにのしう人いはまの七郎と
くんておつるところに。いはまかしそく二人
おちあひてうつてけり。ちくこかすや大しや
うにて。しはしこたへけれとも。大せいにな
ひかされて。ちからなくおちゆきけり。大つま
の太郎は。はしめよりいのちおしむとも見え
さりけり。大事のておひて。おちもやらす。な
かのゝ四郎と。こしまの三郎と二人つれたり
けるか。をかさはらの六郎。それよりまはし
うたんとするをみて。大つまひけるは。かね
すみはかたきのてにはかゝらすして山へはせ
いりて。しがいせん。わたのはら。これよりま

めとへおちゆきて。かつせんのやうをのと殿
以下の人々にかたり申せとて。山へはせいり
けり。ちくごの六郎は。をかさはらの七郎をゆ
んでならへて。きこゆる御しよづくりきくめ
いのたちにて。をかさはらがとう中(をカ)にきりお
とさんとしけるが。うちはづしてむまのかし
らをうちおとす。そのひまにしりそきけり。

ひてやすたねよしおちゆく事

なかの、四郎。こじまの三郎。まめどへはせゆ
きて。かつせんのしだひを申ければ。のとのか
みひてやすをはしめとして。くちをしきこと
かな。さりとともそこそおもひつるにとて。あは
てさはく。たねよしこれをきゝて。たゝいませ
んたうのてやふれぬれは。しもてのてゝは。こ
れをきゝ。しほれをちなん。いさゝせ給へ。彌
太郎はうくわん。せんたうのてにむかひて。
さゝへてみると。ときはの七郎。あんないし

やとして。五百きはかりあゆませけり。その日
よにいりければ。ののかみしもふさのせん
しいけ。よりあひて。へいはうぐわんは。たの
もしけにいひてむかひつれとも。よあけ。せん
だうのてあとへまはり。大て前よりわたすな
らは。かくともひくともかなふまし。よにまき
れてこゝをひきて。みやこにまいりて。ことの
よしをも申いれて。うちせたをかためて。せけ
んをしはしみんといひければ。もつともしか
るへしとて。おちゆきければ。たねよしも此こ
と。われ一人たけくおもふとも。こゝろしたい
にすきもてゆかは。かなふましとて。こゝをう
ちぐしおちてゆく。

あそぬまのわたりまめとの事

おなしき六日のあかつき。まめとにむかひた
る。ばんどうせいの中に。むさしのくにのしう
人。あそぬまの小次郎ちかつなといふものあ

り。かはにうちのそんて申けるは。せんたうの
いくさは。みやう日とあひつをさしたれとも。
はやはしまりて候けり。しゝたるむまなかれ
たり。せんだうのて。こちんにひかえんことこ
そくちおしけれと。いひあへすうちいるゝ。二
ぢんにむさしの太郎ときうぢうちいれ給ふ。
これをみて。三千よきにて。かたきのやかたの
うちへおめいてかけいりけり。つはものとも。
一人も見えず。ざう人とも十四五人そにけち
りける。

承久兵亂記上終

續群書類從卷第五百七十二下

合戰部二

承久兵亂記下

- 一官軍敗北事
- 一重忠防戰事
- 一相摸守師僉議方々手分事
- 一朝時從北陸道上洛事
- 一一院坂本御出事
- 一方々責口御固事
- 一勢多合戰事
- 一字治橋合戰事
- 一信綱兼吉渡宇治河事
- 一關東大勢溺水事
- 一字治手敗事

- 一秀康胤義等都歸入事
- 一被下院宣於泰時事
- 一胤義自害事
- 一京方兵誅戮事
- 一京都飛脚人々評定事
- 一公卿罪科事
- 一一院隱岐國被流給事
- 一新院宮々被流給事
- 一廣綱子息被切事
- 一胤義子共被切事
- 一中院移阿波國給事

承久兵亂記下

くわんくんはいほくの事

さるほとに。夜のあけほのに。むさしのかみや
すとき。小太郎ひやうゑをつかひとして。たゝ
いままめとわたり候なり。おなしく御いそぎ
候へしと申されければ。あしかゞすなはちつ
かひの見るところにて。わたらんとて。足曲まがりの
くわんしやあひとともにわたりけり。小太郎ひ
やうゑも。此てにつゐてわたりけり。こゝに
しぶかはの六郎といふものゝおちけるを。ひ
ころのことはにもにす。かへせといひて。大せ
いの中にかけいりけるが。又二どゝも見さり
けり。いけだのさこんとて。したゝかものあ
り。これもかへしあはせけるか。よしうちのと
に。太郎ひやうゑとくみてくひをとらる。すの
またのてにも。これをきゝてぞわたしけるに。
又太郎さきかけゝり。かたきさゝへやはかり

いて。おちてゆく。そのほかわたりゝをかた
めたるくはんくんを。六月六日むまのこく
せんに。みなをひおとしけり。きやうかた一き
ものこらす。にしをさしてぞおちゆきける。野
山はやしかはをもきはす。たのなかみその
中ともいはす。うちいれゝ。山もたにも。く
わんとうのせいにて。うめてゆく。きやうかた
のもの。むしろたといふところに。せうゝひ
かへてあひまつともからありけり。三日じり
の小太郎。きやうかた一人がくひをとる。せん
ゑもんたいのさこんせんひやうゑ。をのゝ
かたき一人つゝうつとる。やまたのひやうゑ
にうだうは。かたき二人かくひをとる。きやう
かたに。おはりのくにのしう人。しもてらの
太郎か。てのものおちけるを。おひかけて。き
の五郎ひやうゑにうたういけとりけり。

しけたゝさゝへたゝかふ事

きやうかたに。おはりのけんし山たの次郎は。みかた一人ものこらすおちゆくをみて。あなこゝろや。しけたゝはやひとついでこそ。おちすれとて。くぬせがはのしのはしに。九十よきにてひかへたり。くわんとうかたより。こかしまのきちさへもんきんなり。五十よきにてむまみ^(マ)やめ。まさきかけて川はたにうちのをそみたるか。山たの次郎がはたをみて。いかおもひけん。むらくもたつてひかへたるうしろのぢんにあゆませけり。さゝの三郎。はたのゝ五郎よししけ。かちのたんない。おなしき六郎なかつかさ。たかえの次郎。やへのへい次郎。いさの三郎ゆきまさ。三十きはかりにてはせきたるをみて。きんなり河にうちひたすにしのはしにうちあけて。ことはをかく。山たの次郎しけたゝとなつて。いあひけり。山だからうどうのひやうゑふし。山ぐちのひ

やうゑ。あらはたのさこん。をはたのむまのせう。かはへかけおとされて。くかへあかりて。かけめくる。かたきひきて。にしのかたへはせゆく。さゝの三郎ひたいをいぬかれて。わかつたうのかたにかゝりてあるく。みちにやすみて。やをぬくに。からはかりぬけてねはとまる。わつかに五分はかりしりの見へたるをいしにてうちゆかめて。くはへてひきけれともぬけす。かなはしにてひけともぬけす。さゝいかにもして。はやくぬけとをめきけり。ゆみつるをまかりめにゆひつけて。木のえたにかけ。はねきをもてはねたれは。ぬけたり。ぬけはつれば。しにゝけり。しはらくありて。いきふきいたす。此うへは國へかへすへし。たゝ大しやうの御めにかくへしとて。かひてかへるをきゝ。めを見あけて。口をしき事をするやつはらかな。にしへかくへし。しなはうち河

へなけいれよといひければ。力なく又かきのほる。かちのなかつかさ。はたのゝ五郎。やへの五郎。いられてかはらにとゝまりけり。のこりはかたきををひける。大しやうとみえて。つはものともはせゆくに。めをかけて。いさの三郎をしならへてくむ所に。ふかきほりのありけるを。かたきこえけるとて。むまゝろびけるに。いさがむまもつゝいてまろひけり。山たおきなをつて。なんちはなにものぞ。われはみなもとのしけたゝなり。いさは。しなのゝくにのじう人。いさの三郎ゆきまさなりとそこたへける。さてははちあるものにこそとて。太刀をぬきけるをみて。山たがらうとうに。とうのひやうゑといふもの。むまよりをり。いさの三郎をきる。三郎しりゐにうちへはられて。ゐなからたちをもてあはせけり。いさかのりかへのらうとう二人まかりゐたりけるか。しうの

すてにうたるゝをみて。二人はしりよりければ。かたきたちをとりをなして。うたとすれはにけにけり。又しうをうたんとよせければ。二人はしりより。かくのことくする事三四となり。そのゝちうしろより。大せいはせきたりにけり。山たをはとうのしんひやうへ。むまにかきのせておちてゆく。

さかみのかみいくさのせんきほう

ほうてわけの事

おなしき七日。さかみのかみ。むさしのかみのかみのたるゐに。中一日とゝまりて。せんたうかいとう。二のてを。一しよによせあはせ。ろしのつはものともはせあつめて。つかう廿万きになりけり。せきかはらといふところにて。かつせんのせんき。しよゝのてわけあり。むさしのかみ申されけるは。けふはうちせたのかつせんこそ。をばりにてあるへく候。よ

りよりいくさのせんぎも。てわけ大事たるへく候するがのせんし殿の。はからひにつきたてまつるへく候。はゞからずはかり給へと申されければ。よしむら申けるは。大しやうの御めいにより候へば。かた／＼ゆるし候へ。ほくろくたうのてに。^(はカ)いまたみへす候。せたの大てには。さかみのかみ。しやうのすけ入道。くごのせには。たけたの五郎。一かの人々とも。かひしなの／＼くんせい。よどのてには。よしむらまかりむかふへく候と。さため申けるに。さかみのかみのてに。ほんまの兵衛たゝいへといふものすゝみいてゝ。するかのかみ殿の御はからひ。さうにをよはす候へとも。さかみのかみ殿のわかたうに。いくさなさせそとの御事おほく候。むさしのかみ殿を。せたへむかはせまいらせて。うちへはさかみのかみ殿をむけまいらせらるへくや候らんとそさゝへける。

いじうも申ものかなとそきこえける。するかのせんよし村申されけるは。御中はさる事にて候へとも。いくさのうむはところにはより候はす。つはもの／＼ころにてこそ候へ。又さかみのかみ殿をきまいらせて。いかてかむさしのかみ殿は。せたへむかせ給ふへき。かつはわたくしのしんきにあらす。へいけひやうらんのてあはせに。木をついたうせられしときも。あにのかはの御さうしは。おふてせたへ。御おうとの九郎御さうしは。うちへむかはせたまひて候き。かのせんき。ききやうにして。いまゝてくわんとうめてたく候へは。よしむらかわたくしのはからひにはあらすとそ申されける。むさしのかみ殿。いまにはしめぬ事なから。此きにすくへからすとて。にしちへをかさはらの次郎。ちくごの太郎さゑもん。うへたの太郎をはしめとして。かひのけんし。し

なのゝ國の住人らをさしそへらる。をかさはらの次郎すゝみ出て申けるは。身をおしむには候はす。せき山にてむまともおほくはせころし。又おほ井とにて。てのきはのかつせんつかまつりて。むまも人もせめふせて候。ことにあはぬ人ともをゝかれなから。なかきよむけられしこと。へちの御はからひとおほえ候と。申されければ。むさしのかみ殿のたまひけるは。いたみ申さるゝところ。もつともそのいはれ候へとも。こゝろやすくおもひたてまつりてこそ。大事のてにはむけたてまつれと。のたまひければ。ちからおよはす。かさねてぢし申におよはすとして。むかはれけり。そのせい一万五千よきなり。

ともときほくろくたうよりしやう

らくの事

さるほとに。しきふのせうともときは。五月つ

もこり。ゑちこのこくふにつきて。うつたちけり。ほつこくのともから。ことゝくあひしたかふ。五万よきにおよへり。きやうがたに。みしなの次郎。みやさきのさゑもん。かすやのさゑもん。さきかけてくたりけれども。(兵とも脱力)をめすに。ゐてのさへもん。いはみのせんし。やすはらのさゑもん。いしくろの三郎。こんとうの四郎。おなしき五郎。これらをめしけり。まいらさりけるものゆへに。日かすをゝくるところに。みやさきといふところをもさゝへす。たのはきといふところに。さかも木をひきけれども。くはんとうのつはもの。みたれくゐのはつれ。うみをおよかせて。とをりけり。おなしき八日に。ゑつちうのとなみ山をこえつるところに。きやうかた三千よきを三てにわけて。さゝへんとしけれども。おふて山のあなたに。ちんをとりに。よをこめて。いがらしとうを

さきとして。山をこえければ。みしな。みやさき。一いくさもせずして。おちにけり。かすやはかりそうちにしける。はやしの次郎。いしくろの三郎。こんとうの四郎。おなしき五郎。ゆみをはつして。くわんとう方へまいる。ほくろくたうのさいくしよくのきやうかた。一こらへもせず。みなおちにけり。せうくあひたゝかふともからのくひと。みちくにきりかけて。いつれおもてをむかふへきやうぞなき。

一ゐんさかもとへ御しゆつの事

八日のあかつき。ひてやすたねよし以下。御しよへまいりて。さんぬる六日。まめとをはしめて。みなおちうせ候。又くゐせがはよりほか。はかくしきいくさしたるところも候はすと申ければ。君も臣もあはてさはがせ給ひき。たたいまみやこに。かたきうちいれたるやうに

ひしめきけり。一ゐんはかつせんのならひ。一かたはかならずまくるなり。さればとて。やもいぬことやはある。いまは世はかうにこそ。なましゐのいくさせんよりは。山もんにうつりて。三千人の大しゆをたのみて。われはあひいろはぬよしを。くはんとうへたいでうせんとそ。おほせられける。すなはちゑいさんへ御こうなる。御せい千きはかりありしかとも。ようにたつへきものゝ一人もなかりけり。みやこにはきみもしんも。ものゝふもみえす。くわんとうのせいもいまたまいらす。あきれてゐたるけしきなり。ともゐの大將。しそくさねうちめしくせらる。二ゐのほうゐんはらまきにたちはきて。世みたれは。大しやうのふしうたんとて。をしならへてめをつけ。たちをぬきかけて。あゆはせけれとも。一ゐん御めもゆるしましませねは。ひきのきくす。中なこん

大しやうにつかみつきて。ほうゐんかきしよくは。しろしめして候か。さいこの御ねんふつ候へし。又けん世をおほしめさるへしとのたまへは。きんつねもこゝろえたりとのたまへとも。わろくそみえ給ひける。ひよしさんわう。こんとはかりたすけたまへと。こゝろのうちこそきねんしたまひける。ほうゐん。大しやうにうちならへ給ふときは。中なこん中へうちいり給ひけり。ちゝにはにす。よくそみえさせ給ひける。

はう／＼せめくち御かための事

しゆしやうしやうくわうは。にしさかもと。かちるのみやにいらせ給ふ。ざす大そうしやうせうゑんまいらせ給ひ。なひ／＼御きしよくもなく。御こうのてう。まつたいの御そしりをもうけさせ給ひぬとおほえ候。口おしくも候ものかな。ようにもたつへきあくそうともは。

みをかささせたへむかひ候。いそきくわんきよなりて。うちせたをさゝへて御覽候へ。さりともしんめいも御たすけ候はんすらんと。なく／＼申されければ。げにもとおほしめし。十日四つ／＼ち殿へくわんきよなる。みやこには又よろこひあへり。いま一たひさゝへて。御らんあるへしとて。みのゝりつしやくわんけん三おさきの大しやうなり。そのせい一千よきせたのはしへは。山たの次郎。伊とうのさゑもんのせう。大しやうくんにて。三たうの大しゆをさしそへらる。そのせい三千よきくごのせには。さきのみんふのせうしやう。にうたう入道のとのかみ。へい九郎はうくわん。しもふさのせんし。ことうのはうくわん。さいめんのともからあひそへ。二千よき。うかひのせには。なかせのはうくわん代。かはらのはうくわん代。一千よき。うちにはさゝ木の中なこん。かひ

のさいしやう中しやう。うゑもんのすけ。大う
ちのしゆりの太ふ。いせのせんしきよさだ。こ
まつのはうゐん。さゝ木の山しろのかみ。彌
太郎はうくわん。さいめんのともから。二万よ
き。まきのしまには。あたちのけんさへもんの
せう。いもあらひには。一てうのさいしやう中
しやう。二万のはうゐん。一千よき。よとには
ばうもんの大なこん。一千き。ひろせには。あ
のゝにうたう。五百よき。つかう御せい三万七
千きとそきこえける。十三日。くわんくんで
んてにむかひけり。なんとの大しゆめされけ
り。さんもんの大しゆをは。うちにさしむか
ひ。なんとのしゆとをは。せたへむかへらるへ
きよし。けんしつすてにぢしやうするところ
に。ちさんいかていのことそやと。せんじがさ
ねてきたさる。せんきしけるは。ぢせう四年
に。わがてらへいけのためにほろはされしを。

よりともこれかなしみて。てらのかたき重
衡の卿をわたさるゝのみならず。くやうのご
にいたるまで。すいふんの心さしをたうしに
いたされき。わたくしのことにをいては。ひ
やうきにおよはす。くわんとうをみつくへき
事なれとも。これはちよくちやう。かたしけな
き事なれは。それまではなし。くはんとうをこ
えんこと。さためてぶついにこそむくへし。た
たいつかたへもまいらさらんにしかしとて。
せたへもむかはさりけり。しかれともあくそ
うの申けるは。このたひわれらさし出さらん
事。さんもんのしゆとの。のちにいはむこと
たへかたし。ひころゆみやたしなむともから
は。せうくかけ出て。いくさせはやといひ
て。たしまのりつし。さぬきのあしやり以下。
へうとうゐんのりつしらも五百よ人むかひけ
り。

せたにてかつせん的事

おなしき十二日。さかみのかみ。むさしのかみ。十三日のちにつく。十四日さかみのかみ。せたへよせてみれば。はしいた二けんひきて。なんとの大しゆともはんとうのものゝふをまぬきけり。うつのみやの四郎。とをやにいろ。むさしの國のちう人きたみの太郎。えとの八郎はやかはのへい三郎。をしよせて。いしうまかされてのきにけり。むらやまの太郎。なせのさこん。よしみの十郎。そのこ小次郎。わたりうのこん。おなしき又太郎ひやうる。よこたの小次郎も。かたきすきもなくいければのきにけり。中にもくまかへ。くめ。よしみふし五人。はしけたをわたりてよせたりけり。ならほつし二じうのかいたてにひきのく。大しやう山たの次郎。つかひをたて。いかに大しゆ。むけに。小せいにをはるゝそ。きしんとこそたのみ

つるにとぞわらはれける。大しゆいひけるは。にくるにあらず。かたきをふかくひきいれて。一人ももらさしとするそと。いひもあへず。鳥のえたをかけるやうに。廿三人きつてまはる。くまかへたけくおもへとも。なきなたにあひしらひかね。うつてにいろはんとうがた。くまかいうたすなと。をめけとも。はしけたはせはし。よるものそなかりける。くまかへはりまのりつしとくんで。くひをとらんとするところに。はりまか小ほつしにきくちん。くまかへかくひをとる。くまかへをはしめとして。七人めのまへにてうたれにけり。よしみの十郎。くめはかりはのかれてけり。よしみかこ十四になるを。かたにかけてかへりけるを。かたきゐるをかなしとやおもひけん。こをかはになけいれて。つゝゐてとひいりて。かはそこにてもゝのゝくぬき。大しやうのまへにあかはたかに

(めか)
てそ出きたる。くかのうこん。いすくめられて
たつたるをみて。ひらゐの三郎。なかはしの
四郎。やおもてをふせき。くめをたすけゝり。
うつのみやの四郎。二日ちさかりたるか。せい
まちつけて。三千よきになりにつけり。二千よき
をは。ちゝにつけて。一千よきあひくしてゆき
けるか。かたきにあふきにてまねかれて。はら
をたちて。わつかに五六十き。せたのはしへ
出きたつて。さん／＼にいる。きやうかたより
も。あめのふることくにいけり。一千よきをく
れはせにつきにけり。くまかへの小次郎さゑ
もんなをいゑは。たのみたるをとゝいられて。
しなんとそふるまひける。むまをいさせしと
て。やのおよはぬ所にひきのけゝり。しなのゝ
くにのちう人ふくちの十郎と。かきつけした
るやを。三てうよいこして。山たの次郎かるた
るところへいわたす。みおかさきかためたる。

みのゝりつしかてのものとも。舟にのりて。河
中よりこれをいる。その中にほうし二人。うつ
のみやにいられて。ひきしりそく。これのみ
て。さかみのかみ。へい六ひやうゑをつかひと
して。いくさはかならずけふにかきるまし。や
たねなつくさせ給ひそと。おほせられければ。
そのゝちはいくさもなかりけり。此一りやう
日は。もとよりふりけるあめ。十三日々さかり
より。しやじきのことし。人むまぬれしほた
れ。さう人はたらかす。

うちはしにてかつせんのこと

おなしき十三日。むさしのかみうちによせけ
るか。目くればたは。たはらにちんをとる。と
りのこくに。するかのかみ。よとへうちわかる
ところにて。するかの次郎は。よしむらにうち
くせよかしとおもふといひければ。かまくら
よりむさしのかみ殿につき申ては。たゝいま

御ともつかまつり候ひなは。おやこの中とは申なから。むけにこゝろなきやうにおほえ候。三郎みつむらつきたてまつり候へは。こゝろやすくはおもひたてまつり候といひければ。するかのかみうちうなついて。さもある事なりとそ申ける。やすむらは。二百よきに。あしかゝにつき。やまよりちゝにうちわかれ。うちのいくさのさきをかけんとやおもひけん。おはり河にて。あしかゝいくさよくしたりければ。やすむらこゝちあしくおもひけるを。あしかゝ殿もこゝろえて。やすむらにうちつれうちつれあゆませけり。やすむらからうとうに。さのゝ太郎。をかはの太郎。なかせの三郎。とうてうの三郎。十四五きうつたつて。あめのふり候に。うちに御やととりて。いれたてまつらんとてゆく。やすむらこゝろえて。わかとうともさきにたち候か。おほつかなく候とて。む

さしのかみ殿へ。ししやをたてゝ。はせゆく。よしうちもやかてまいるとて。うつたちけり。やすむらみちにあふ人に。うちにいくさやしまるとゝひければ。十五六き。はしにはせつきて。たゝいまいくさにて候といひければ。されはこそとて。はせてゆく。さきたちたるわかたうとも。むまよりをり。するかの次郎たいらのやすむら。うちのせんちゃんなりとなのつて。たゝかひけるところに。やすむらはせよりにてたゝかふ。らうとうともちからつて。いよくたゝかひけり。あしかゝむさしのせんし。をくればせして。うちのての一はんなりとなのりて。やすむらかはたのでおなしかしらにうちたてゝたゝかふ。きやうかた。はしのいた二まいひきて。さんもん大しゆ三千よ人。十へ廿へにくんしゆして。橋のうへにも。したにもひやうせん三百よそう。なみをうがつて。

三はうよりいるあひた。こらへへきやうそなかりける。するかの次郎馬よりをりたつて。三はうをいる。をかはのさゑもんといふらうと。大しやうてをくたきたゝかふことや候と。せいしけるが。やすむらかやに。てきのさはくをみて。さらはこゝい給へ。あそこあそはせといひけり。くまのほつし。こ松のほうゐん五十よきにてきたりけるか。いちらされてしりそく。はんとう方。おほくうたれ。ておひければ。あしかゝも。するかの次郎も。ひきしりそく。へうとうゐんにこもりければ。かたきいさゝかよろこひて。かへつて河をもわたりぬへくみえたり。よしうちむさしのかみのもとへししやをたてゝ。大てにまちうけて。みやうにちいくさつかまつらんとそんし候ところ。するかの次郎かわかたう。あまたうたせておひかすおほく候。へうとうゐんにこもり

て候か。ふせいとみて。よせられぬへくおほえ候。せいをさしそへられへきよし申されければ。むさしのかみおほきにおとろきて。みやうにちのあひづをたかへ。此いくさをつかまつりそんしぬるにこそ。こんやまへよりわたされ。うしろよりならほつし。よしの。とつかはのものと。ようちにかけんとおほゆるなり。へいひやうゑ。こんやうちへはせよせ。へうとうゐんをかたむへきよし。ふれられけれども。あめはふる。あんないはしらす。いかゝむかふへき。みやうにちこそ。くごのせにまいり候はめと。くちくちに申て。一きもすゝます。さゝ木の四郎さゑもんのふつなはかりそ。むかひ候はんと申ける。へうとうゐんには。かたきをすてゝひきしりそくにおよはすとして。よしうちやすむらこらへたり。むさしのかみ。つはものともをもよほし。かねてかたきを此

はうへわたらせて。此人ともをうたせては。いくさにかちてもせんなし。やすときこゝなりとて。かけ出給ふをみて。一きもとゝまらず。十八万よき。とうしにうつたち。はせゆくに。あめしやしきはかりなり。つはものともめをみひらかす。ゆみをとるてもかゝまりけり。てんのせめをかふゝるにこそ。十せんていわうにゆみをひくにやと。心ほそくそなりにける。へうとうゐんのかたより。らいてんしきりにして。身のけよたつはかりなり。大しやうくんやすときはかりそ。すこしもおそるゝけしきなく。あつはれ大しやうやとみえし。へうとうゐんにかけいりて。おほつかなきあひた。きたりたりとのたまひければ。あしかゝするかの次郎。てをあはせてそよろこひける。きやうかたに。ふせいとみへしかは。はたのしんひやうゑにうたう。むまもなし。下人もなく。てつか

らはたさして。大しやうの御まへに。山たの次郎すゝみ出て。つはものともせうゝ。むかへわたし。かたきうちはらひ。へうとうゐんにちんをとるならは。心さしあるものとも。なとかみかたにつかさるへきと申。それはしかるへしとて。けちすれとも。これよし。みつさた。ひろつなたかしけなと。ひやうゑのにうとうをたのみて。いくさすへきにあらすとて。れうしやうせす。おなしき十四日うの一てんに。あしかゝむさしのせんしよしうち。するかの次郎やすむらとなのつて。又はしつめによせて。ひきしりそく。せきのうゑもん^{ゑもん}にうたう。わかさのひやうへの四郎。たうたしまの四郎。ふせのなかつかさ。さうむまの五郎。かちのこん次郎。しほやのみんふ。おなしきさゑもん。しんかいのひやうゑ。なかえの四郎。をしよせていふせらる。その中にはたのゝ五郎。めての

まなこいぬかれて。やをたてなから。大しやうの御まへにぞ参たる。くゐせかはのひたいのきすたにも。しんへうなるに。誠にありかたし。かまぐらのこん五郎さいたんかとほめ給て。くんこうはやすときせう人なれば。うたかひなしとそなたまひける。たかはしの大九郎。みやてらの三郎。こみたのさこん。すゑなのむまのすけ。たるゐの小五郎。大たかの小五郎。かけ出。めんくにておふてかへりけり。しほやのさこんいゑともとなつて出るところに。山ほうしともさんくにいる。さこんあしをはしけたにいつけられてたちたり。あなぐちをしとて。この六郎やおもてにたゝかふまに。やをぬかんとするにぬけす。たちにてやのたちたるあしを。ふたつにきりわりて。ひきぬき。かたにひきかけてしりそきにけるを。人かんしける。なりたのひやうゑ。これもてお

ふてひきしりそく。やまのそう。かくしん。ゑんおう。はしのうへにて。なきなたふりまはしてそ。ふるまひける。あれいよとのしりけり。ゑんおうあしをはしにいつけられて。ぬけさりければ。なきなたにてあしくひよりふつとうちきりて。いよくとりのことくにかけりて。くるいけり。むさしのかみ。あんとこのひやうゑたゝいへをつかひとして。はしのうへのいくさやめられ候へ。かやうならは。日かすをくるとも。せうふあるへからすと。おほせられければ。まかりむかふて大しやうのおほせなりとさけへとも。あめはふる。かはをとうちものゝをと。一かたならさりければ。ききもいれす。あんとともみたれいりてそたゝかひける。むさしのかみ見たまひて。けつくあんとともいくさする。こさむなれとそわらひ給ひける。へい六ひやうゑといふものを。かさ

ねてつかひにたてられて。わきみも二のふるまひすなといはれて。手をたゝひてせいすれとも。みゝにきゝいるゝものなし。いよゝゝみたれあひてたゝかふ。へい六びやうへかお(カ)よはすしてかへりけり。ひとつのさこんのしやうけんかけつな。よろひをはぬきおきて。こくそくはかりにていくさは。たれをまもりてし給ふそ。はしのいくさは。御いましめなり。此のちいくさせん人は。大しやうの御めいそむかるゝうへは。かたきなり。かう申はひとつのかけつなゝりと申てかへりければ。そのちしつまりけり。

のふつなかねよしうち河をわたす事むさしのかみ。むつのくにのちう人しはたのきち六かねよしをめて。いくさはやめつ。かはをわたさんとおもふそと。おほせられければ。かねよしかしこまりて。うけたまはり。ま

つせふみつかまつりて見候はんとて。かわをみれば。よるのあめに。きのふの水より三尺五寸ましたりそうしてつねよりも一ちやう三尺をまさりける。かねよいいかおもひけん。けん見をたまはりて。せふみをさしつかはさる。かねよしすなはちときさたをともしなひ。かたなをくはへて渡りけるか。やすきところも大事かほにわたりける。まきのしまにあかりて。あなたをみれば。やすけなくわたるにをよはす。かへりまいりて。かわを御わたしあるへき事。さういあるへからすとそ申ける。むさしのかみよろこひ給ひて。うちたち給ふ。さゝ木の四郎さゑもんおもひけるは。此しばたがそゝめき申こそあやしけれ。このかはのせんちんせんとする。ごさめれ。此河をは代々我いゑにわたしたるを。こんと人にわたされんこそ口おしけれ。たゝつなこれをしりなから。

いきでもなにかせんと。かねよしうち出てけ
れは。さゝ木むまにうちのりて。しはたかむ
まに。わかむまのかしらするほど。あゆはせて
ゆく。あんとこのひやうゑのせうたゝいゑも。
こゝろえうちならへ。さゝ木につれてうちい
つる。四郎さゑもんのふつな。しばたにこゝは
せかとそとひける。きち六うちわらひて。御へ
んこそ。あふみの人にておはすれは。かはのあ
んないをはしりたまはめといひければ。のふ
つなことはりなり。えうせうより。はんとつに
あつて。此河あんないしらすと申せは。そのゝ
ちかねよしおともせず。こゝこそとて。河の中
へうちいれ。みつなみたかくして。かねよし
むまためらふところに。さゝ木は二ゑとのよ
りたまはりたる。はんとこのめいはに。む
ちもくたけようちて。あふみのくにのちう
人。さゝ木の四郎さゑもんみなもとのゝふつ

な。十九万きか一はんかけて。此河にいのちを
すて。なをのちのよにとむるそと。をめきて
うち出す。かねよしかむまも。これにつれてお
よかせけり。これをみて。あんどこのひやうゑ
は。うちいれけり。かねよしかむま。かはな
より三たんはかりそさかりける。のふつなむ
かひへするゝとわたして。うちあけてそな
のりける。かねよしいくほとなくうちあかり
てなのり。さゝ木かちやくし太郎しけつな。十
五になるは。はたかにてちゝかむまのまへに
たちて。せふみしけるか。かたきむかふよりあ
めのことくにいるあいた。はたかにてかなは
すして。とりてかへりけり。
(しカ)

くわんとうの大せいみつにおほる

る事

二はんにうちいるゝともからは。さのゝ與一。
なかやまの五郎。みその次郎しけつき。うすの

の四郎。よこみその五郎すけしけ。あきはの三郎。しらゐの太郎。たこのそうない。七きうちあかる。三はむに。をかさはらの四郎。うつのみやの四郎。さゝ木のゑもん太郎。かはのゝ九郎。たまのゐの四郎。しのみやのむまのせうなかえの興一。大やまの次郎。てつしかはらの次郎。これもさゝいなくうちあくる。あんとうのひやうゑ。わたりせにのそむて見けるか。みかたはおほくわたりけり。くたりかしらにて。わたりせもとをし。三たんはかりてすこし。せはみにさしのそき。こゝのせはみわたるならは。すくにてよかりなんと。三十きはかりうちいれけるか。一めもみえすうせにけり。かわのせはきをみて。あんとうかわたしければ。せんちんのうするをもしらす。大せいうちいれけり。あほうのきやうふのせうさねみつ。しはやのみんないへつな。こんねん八十四。をし

からさるいのちかなとて。うちいれけり。一めも見えすうせにけり。せきのさゑもんうたう。さしまの四郎。をのてらのなかつかさ。わかさのひやうゑのうたう。これも又ともみえす。此なかにさしまの四郎むまもつよし。しぬましかりけるを。たてわきのせきのうたう。ゆんてのそてにとりつく見えしか。二人なから見えず。四はんにふせのさゑもん次郎。みやまの彌とうた。あきたのしやうの四郎。すはうのきやうふの四郎。やまうちの彌五郎。たかたの小次郎。なりたのひやうゑ。かんさきの次郎。しな河の次郎。さうむまの三郎。子とも三人。しむらの彌三郎。としまの彌太郎。ものの次郎。したの小次郎。さのゝ次郎。おなしき小次郎。しふやのへい三郎いけ。二千よきこゑ／＼になのつてわたしけるか。一きも見えすうせにけり。五はんにてつかの小太郎。か

すかの太郎。なかえの四郎。いひたのさこんのしやうけん。しほやの四郎。といの三郎。しまのへい三郎。おなしき四郎太郎。おなしき五郎。たいらのさこの次郎。つかう五百よき。うちいれて。二めともみえず。六はんにさめしまの小次郎。つしまのさるもん次郎。大かはとの小次郎。かねこの與一。おなしき小次郎。さぬきのさるもん太郎。おはらの六郎。いひたかの六郎。さいとうのさこん。いまいつみの七郎。おかへの六郎。かすやの太郎。いひしまの三郎。ひせんはう。三百よきもしつみけり。七はんにおきのゝ太郎。をたのきち六。みやの七郎。をかへのやとうた。しやうのすけ三郎。いゝたのさこん。いひぬまの三郎。さくらゐの次郎。さるさはの次郎。かすかの次郎。子二人。いしかはの三郎。つかう八百よきわたしけるも。又もみえずうせにけり。むさしのかみこれ

を見給ひて。やすときかうんすてにつきてけり。ていわうにゆみをひきたてまつるゆへなり。此うへはいきてもあるへからすと。たつなかひくり。はせいらんとし給ふところに。しなのゝくにのしう人。かすかのきやうふの三郎。さたゆきといふもの。子とも二人はさきになかれてしぬ。わかみもうすへかりけるを。ゆみをさしいたしたるに。とりつきてたすかり。二人の事をおもひて。なきゐたりけるに。むさしのかみ殿。すてにかはにうちいれ給ふとみて。あなこゝろうやとて。はしりより。くつばみにとりつきて。こはいかなる御事候ぞ。みかたのくんひやう。いま河にしつむといへとも。三千きのうちそとなり。十か一たにもうせさるに。大しやういのちをすて給ふことや候へき。人こそおほく候へとも。大いふ殿たのむと候ひつるものを。もしこの大せいをゝき

なから。この大あくしよにうちいれて。見す見すしなせたまはんこと。まことにくちをしかりぬへし。いくせんまんのせいとも。きみしなせ給はし。みなきやうかたにつき候ひなん。これかへつて御ふかくなり。さこそ心ほそき人候らめとも。きみの御はたをまほりてこそ候らめと。むまのくちにとりつくをみて。むさしのかみものとも一二千き。まへにはせふさかりてひかへたる。よしとき此ことのちにきき給ひて。かすかのきやうふ。子とも二人うしなふのみならず。やすときかいのちをつきたるものなれば。こんとの第一のほうこうのものなりとて。かふつけのくに七千よちやうたまはりけり。むさしのかみやすときのしそく小太郎ときうち。ちゝわたさんとするか。人にとめらるゝとみて。かはにうちいれんとするを。あはのくにのちう人。さくまの太郎いへも

りとなのりて。むまのくつはみにむすとゝりつき。大りきものなれば。むまもぬしもうこかす。大いふ殿人こそおほく候へとも。見はなし申なとおほせ給ひしと申ければ。太郎殿はらをたて。なんてうさることあるへき。おやのひかへたまふたにくちおしきに。二人此河をわたさすしては。はんとうのものたれをとてわたすへきそ。にくいやつかなとて。むちをもてさくまかつらとりつきたるうてをうちたまひける。いへもりさかしき殿のきしよくふるまひかな。ゆるすましとて。さしつめたり。いよゝはらをたち。うち給へは。いへもりわ殿のことをおもひたてまつりてこそすれ。さらはいかになりはてたまはんとも。こゝろよとて。むまのしりをはたとうつ。なにはたまるへき。河にうちいれけり。さくまかいなはうたれて。いたけれども。見すつるにをよばす。

つゝくそよとうちいれ。すゝみわたしける。まんねんの九郎ひてゆき。おなしくまいり候とて。うちいれけり。さかみのくにのちう人かゞはの三郎。しやうねん十六さいとなのりてうちいるゝ。むさしのかみこれをみて。太郎うたすな。むさしさかみのとのらはなきかゝとのたまへは。一きものこらすうちいれける。廿万六千よき。こゑゝに名のりて。わたしけり。一きもしつまず。むかひのきしにうちあかる。さるほとにするかの次郎やすむら。これをみて。いまゝてさかりけるこそくちおしけれとて。をかはのゑもんとりつきて。しめしけれとも。わたしけるを。やすときししやをたてゝ。これにこそ候へ。これへわたり候へとのたまへは。やすむらも一所にひかへけり。あしかゝ殿も一ところに御いり候へと申されければ。いへのこらうとうは。みな河へうちいれさ

せて。これもひかへてそおはしけり。かゝわの三郎むかひにはやつきて。かたきにをしならへ。くむておちにけり。十六さいのものなれは。したになる。かゝわかけ人。うへなるかたきのくひをとる。大かはの次郎あらてなり。かけよと。むさしの太郎にいはれて。まさきかけてたゝかひけり。あまり亂れあひて。かたきもみかたもみえすといひければ。みかたは河を渡りたて。ぬれたるをしるしにせよと。むさしの太郎にけちせられて。おちあひゝゝくむたりけり。

うちのやふるゝ事

きやうかたの大しやう。さゝ木の中なこんありまさのきやう。かひのさいしやう中しやうをはしめとして。一きもひかへすおちにけり。けいしやうにはうゑもんすけ。ふしにはさ木太郎ゑもんのせう。ちくこの六郎さゑも

んともなを。かすやの四郎さゑもん。おきのゝ次郎。おなしき彌次郎さゑもんはかりなり。むさしの太郎。中しやうのかふとのはちをいはらひて。うしろのくひにいたてたり。うすてなれは。にけのぶ。又きやうかた。うゑもんのすけともとし。あせる弓矢とりて。ともいへにちうをいたすへき身にもあらぬか。のそみ申てむかひけり。大せいにむかひて。ともとしとなのりて。かけられは。とりこめてうつてけり。しいたしたることはなけれども。申しことばひるかへさすして。うちしにしけるこそあはれなれ。つきにちくこの六郎さゑもんありな。かたきのなかをかけわけておちゆく。つきにおきのゝ次郎。おちゆきけるを。しふゑのへい三郎。をしならへてくんとおつ。おきのかくひをとる。つきに彌二郎さゑもん。おちゆきけるを。むつの國の住人みやきのゝ小次郎。

しやうねん十六さいとなのりて。彌二郎さゑもんとくみけるに。彌二郎さへもんかのりかへ打てかゝり。みやきのいまはかうとおもひけるところに。みかた三百きはかりはせけるか。いかなるものかやとはしらす。みゝのねをいぬく。そのあひたに。みやきのゝ次郎。さゑもんかくひをとる。をかはの太郎。きやうかたよりいてきたる。よきかたきとめをかけ。くまんとするに。かたきたちをぬいてうつに。めくれてくむておち。おきあかりてみれは。わかみくむたるかたきのくひは。人とりてなし。やましゝの太郎さゑもん。かけめくるを。さゝ木四郎さゑもんかてにとりこめて。いけとりけり。さるほとにはんとうかたのつはものとも。ふかくさ。ふしみ。をかのや。くか。たいこ。ひの。くわんしゆし。よした。ひかし山。きたやま。とうし。よつゝかにはせちらす。あるひは

は一二万き。あるひは四五千き。はたのあしを
ひるかへして。みたれはいる。三(マ)くきやう。上
きたのまんどころ。によはう。つほね。うん
かく。あをさふらひ。くわんしよ。ゆうしよ。こ
ゑをたてゝ。おめきさけひたちまよふ。天ち
かいびやくより。わうしやうらく中の。かゝる
事いかてかあるへし。かのしゆゑいのむかし。
へいけのみやこをおちしも。これほとはなか
りけり。なをもをしみ。いゑをもおもふ。しう
代のもの共は。こゝかしこの大しやうにさし
つかはれて。あるひはうたれ。あるひはからめ
らる。そのほかは。あをさふらひ。まちのくわ
しやはら。むかひつふて。いんちなとゝいふ
ものなり。いつむまにものり。いくさしたるす
へもしらぬものともか。あるひはちよくめい
にかりもよほされて。あるひはけんふつのた
めにいてきたるやからとも。はんとこのつは

ものに。をひせめられたるありさま。たゝたか
のまへのことりのことし。うちいころし。きり
ころし。くびをとる。そくばくのはんとうの
つはもの。くひひとつつゝとらぬものこそな
かりけれ。大しやうぐんむさしのかみするか
の次郎。あしかゝ殿は。ふねにてをしわたる。
しなのゝ國のちう人うちゝ次郎。うちはし
のきたのさいけにひをかけゝり。そのけふり。
天にゑひしておひたゝし。よどいもあらひ。ひ
ろせ。そのほかのわたりゝに。これを見て。
いいくさもせず。みなおちにけり。するかのせ
んし。もりのにうたう。のやまのさゑもんは。
あるひはふねにのり。あるひはいかたをくみ
てをしわたる。よと一くちとうのようかいを
やふり。とはのたかはたけにちんをとる。うち
はしの河はたにきりかけたるくひ。七百三十
也。これをちつけんして。むさしのかみ。ちや

くしときうち。ありときなと。したしき人々。はつかに五十よきにて。ふかくさ河原といふところになんをとる。よにいりて。むさしのかみこれをこそと。するかのかみのもとへ。つかひをたてゝ申されければ。やすむら二三人うちくして。むさしのかみのちんにくはゝりけり。せた。うち。みおかさきおちぬときこえしかは。一人もいくさするものなく。みなおちうせにけり。なんとほくれいの大しゆも。おちゆきけり。たうにちの大しゆ。たかこゑにねんふつ申て。あはれなりけるわうほうかなと。たからかにくちすさひ。なく／＼ほんさんにかへりけり。

ひでやすたねよしとうみやこへか

へりいる事

きやうかたのとかみへい九郎はうくわん。しもおさのせんし。せうしやうにうたう。しよ

しよのいくさにうちまけて。みやこにかへりいる。山たの次郎も。おなしく京へいる。おなしき十五口うのこく。四つち殿にまいりて。ひてやす。たねよし。もりつな。しけたゝこそ。さいこの御ともつかまつり候はんとて。まいりて候へと申ければ。一ゐんいかなるへき身ともおほしめさぬところへ。四人まいりたれば。いよ／＼さはかせ給ひて。われはものゝふむかはゝ。てをあはせて。いのちはかりをは。こはんとおほしめせとも。なんちらまいりこもりて。ふせきたゝかふならは。なか／＼あしかりなん。いつかたへもおちゆき候へ。さしものほうこうむなしくなしつるこそ。ふひんなれとも。いまはちからおよはす。御所のきんりんにあるへからすと。おほせいたされければ。をの／＼のこゝろの中。いふもおろかなり。やまたの次郎はかりこそ。されは何せん

参りけん。かなはぬものゆへ。一そくもひきつ
るこそ。くちおしけれとて。大をんしやうをあ
けて。もんをたゝき。にほん第一のふかく人
をしらすして。うきしつみつる事のくちをし
さよと。のゝしりてとをるそかひもなき。をの
をのいひけるは。二なし。大せいにはせあはせ
てたゝかひて。もししなれぬものならは。しか
いするほかは。へちのきなしと申ければ。おの
おの此きにとうすとて。又とてかへす。四人の
せい三十きはかりなり。へい九郎はうくはん
申けるは。おなしきうちのおふてにむかふへ
きを。うちせた大せいにへたてられては。さう
ひやうにこそうちあはむすれ。これよりにし。
とうしはよきしやうくはくなり。こゝにたて
こもり候らはゝや。するかのかみはよとのて
なれば。とうしをとをらんするに。よきいくさ
して。しなと思ふそといひければ。又此きし

かるへしとて。とうしにはせつき。ゐんにはい
れす。そうもんのそと。くきぬきのうちにちん
をとる。たかはたけにひかへたる。三うらのす
けはやはらの次郎ひやうゑのせう。をひの又
太郎。あまのゝさゑもん。さかゐのへい次郎ひ
やうゑのせう。こはたの太郎。おなしき彌へい
三など。きこふるものとも。三百よきをめひて
かく。そのなかに。はやはらの次郎ひやうゑ。
あまのゝさゑもん。へい九郎はうくわんと見
て。かんせんしんちつなりければ。ひかへてか
がらさりける。ゆみやとるものも。れいきはか
くそ有へきに。はやはらの太郎しさいをはし
らす。ちゝひかへたるをこゝちあしくやおも
ひけん。なのりてをしよせたりけり。たねよし
いひけるは。さこそ大やけのいくさといひな
から。太郎ふれいなるものかな。かけよしもら
すなとて。たかいをはしめとして。なかにと

りこめられて。めてのたなかへかけおとされてけり。はせあからんとするところに。ゆんてめてよりせめければ。むまよりおち。かちになりてそたゝかひける。かけよしかをひ。へいひやうゑ。ちやくしひやうゑの太郎。こみたきやうたい。命をすてゝ。かけよしをうしろにをしなし。たゝかひけり。かなはすして。たねよしひきかへす。これをはしめとして。くわんとうのせい。一めんにおめひてかく。つくりみちをわれさきにとをしよせければ。ひてやすもりつなは。いかゝおもひけん。や一もいす。きたをさしておちゆく。山たの次郎はかりそ。さゝやせうゝいて。それもあとめにつきておちゆきけり。いまはへい九郎はうくわんはかりなり。たねよしは。とうしをはかところとさためければ。しよのもののおちもうせよ。一そくもしりそくましとて。いれかへたゝか

ひけり。されとも大せいしこみければ。心はたけくおもへとも。なましゐに一きれにもしにをはらす。ひかしをさして落ゆきけり。こみたのへい二すけちか。すぐやかものなり。たねよしにめをかけて。をしならへてくまんとしけるか。すけちかなはしとやおもひけん。たねよしかめのところへはたけ。はせとをりけるに。くんでおちけり。すけちかのりかへおちあひて。くひをとる。たねよしこれをしらすして。彌太郎ひやうへたゝ三四きになりて。ひかし山をさしておちゆく。次郎ひやうゑ。たかるの兵衛の太郎。これもひかしへおちける。か。六はらのれんけわうゑんにはせいり。小たけの中にて。二人ねんふつとなへて。さしちかへてうせにけり。たねよしは。こゝろさしつるひかし山にはせいりて。ものゝくぬきすてゝやすみにけり。

ゐんせんをやすときにくたさるゝ事

十五日みのこく。やすときうんかのこくの
せいにて。かみかはらよりうつたち。四つちの
ゐんの御しよへよすときこえけり。一ゐんと
うさいをうしなはせ給ふ。けつけいうんかく
せんこをわすれて。あはて／＼。せめての御事
に。ゐんせんをやすときにつかはされけり。そ
のてうにいはいく。

秀康朝臣胤義以下徒黨。可令追討之由。宣下既

畢。又停止先宣旨。(解部イ)亂都輩可還住之由同被宣下

訖。凡天下事。於于今者。雖不及御口入。御存知

趣畢不仰知畢。(爭力)就凶徒浮言。既及此沙汰。後悔

不能左右。但天災之時至歟。抑亦惡魔結構歟。

誠勿論之次第也。於自今以後先携武勇輩者。不

可召使。又不稟家好武藝者。永被停止也。如此

故自然及御大事由。有御覺知者也。悔前非被仰

也。御氣色如此。仍執達如件。

六月十五日

武藏守殿

權中納言定高

かくこそあそはされけれ。ゐんせんをめしつ
きにもたせて。やすときにつかはされたり。こ
とはをもつては。をの／＼申へき事あらは。そ
れより申さるへし。御しよ中にやかてまかり
むかはん事。人みんのなけきこうひさい女の
おそれおそるゝ事の。あまりにふひんにおほ
しめさるゝなり。たゝまけてそれに候へとお
ほせられければ。やすときむまよりをり。ゐ
んの御つかひにたいめんして。ゐんせんをひ
らいてみて。たかきところにまきおさめて。か
しこまりて。うけたまはり候ひをはんぬ。おや
にて候よしときかへりうけたまはりて。なに
とか申候はんすらん。まつやすときにあてゝ。
ゐんせんはいれう候でう。かたしけなくそん
し候。此うへにさうなく参り候はんことも。そ

のおそれ候へは。ごしんをしらす。まかりとまり候とて。をちさかみのかみときふさに申あはされければ。さうにをよはすとて。六てうのきたみなみにちんをととりてゐ給ひ。大せいみな六はらにうちいれけり。

たねよししかいの事

たねよしは。ひかし山にてしかいせんとおもひけるか。ひんきあしかりければ。うつまさにもをかくしをきけるところへ。おちゆきけるか。さきには又大せいゝれみたるゝと申ければ。これにかくれるて日(イナシ)をくらし。うつまさにむかはんと。にし山(イナシ)このひしまのやしろのうちにかくれるて。くるまをはかたはら(くろ)にたてゝ。をうなくなるまのよしにて。さうの人(くろ)まをそのせたりける。たねよしかねんらいのらうとうに。とうの四郎にうたうといふもの。かうやにこもりたるか。いくさをも見ぬしの

ゆくゑをもみると。みやこへのほりけるか。こをとをるを。もりのうちよりみて。いてあひたれば。とうの四郎にうたう。いかにともいはず。なみたをなかず。さてもなにとしてかは。かくてわたらせ給ふそと申ければ。にし山におさなきものとのあるを一め見て。しかいせんとおもひてゆくに。かたきすてにみたれいるときくあいた。こゝにて日(イナシ)をくらし。よにまきれてゆかんとて。やすむなりといひければ。にうとうかたきさきにこもり。御あとに又みち／＼たり。いつのひまにきんたちのもとへはつかせたまふへき。へいはうくわんは。とうしのいくさはよくしたれとも。さいしの事をこゝろにかけて。おうなくなるまにておちゆくを。くるまよりひきいたされて。うたれたるといはれさせ給はんこそ。くちをしく候へ。むかしより三うらの一もんにきつやは候。に

うたうちしき申へし。此やしうにて。御じがい候へかしと申ければ。たねよししくも申たるものかなとて。さらは太郎兵衛まつしかいせよ。こゝろやすく見をかんといひければ。ちやくし太郎ひやうゑ。はら十もんしにかきゝりてしぬ。たねよしもをひつかんとて。かたみともをおくり。とうの四郎にうたうは。ふしのくひとりとて。するかのかみかもとへゆきてくんこうのしやうにほりたまはんことこそ。をしはかられ候へ。たひくのかつせんに。三うらの一けをほろほし給ふをこそ。人くちひるをかへし候ひしに。たねよし一けをさへほろほし給ひ候へは。いよく人の申さんところこそ。かへつていたはしく候へと。たゝいもおもひあはせたまはんすらん。(とイ)申せとてはらかきゝり。くひをはとりて。もりにひかけ。むくろをはやきにけり。そのうちするかの

かみのところへゆきて。さいごのありさま申ければ。よしむらきやうたいならすは。たれかはくひをおくるへき。よしむらなれはとて。世のたうりをしらぬにはなけれども。ゆみやをとるならひ。おやこきやうたい。たかひにかたきとなる事。いまにはしめぬ事なりとて。おととをひのくひ。さうのそてにかゝへて。なきゐたり。きやうよりたつときさう請したてまつり。ふつしとりおこなひ。うつまさのめこひよせて。いたはりなくさめけり。

きやうかたのつはものちうりくの事

山たの次郎しけたゝは。にし山にいりて。さのはたにほんそんをかけ。ねんふつしけるところに。あまのゝさゑもんをしよせければ。しかいすへきひまなかりけるに。ちやくしいつかみしけつき。さゝゑつゝ。此まに御しかい候へといひければ。やまたはしかいして。ふし

にけり。いつのかみはいけとられぬ。ひてや
す。おなしきひてすみ。いけとられてきられ
ぬ。しもふさのせんしもりつなも。いけとられ
て。かすやきた山にてしかいす。あまのゝ四郎
さゑもんゝくひをのへて参りたりけれとも。き
られにけり。山しろのかみことうのはうくわ
んいけとられてきらる。ことうをは。しそくさ
へもんもとつな。申うけて。きりてけり。多人
にきらせて。首を申うけて。けうやうせよか
し。これやほうけんにためよしを。よしともき
られたりしにをそれす。それはしやうこのこ
となり。せんきなかりき。それをこそまつ代ま
てのそしりなるに。二のまひしたるもとつな
かなと。万人つまはしきをそしたりける。あふ
みのにしこりのはうくわん代。六はらむさし
のかみのまへにて。さのゝ小次郎にうたうき
やうたいうけたまはる。さふらひにて。手と

りあしとりしてきられぬ。六てうかはらにて。
むほんのともからのくひをきるに。つるきを
さすにいとまあらず。するかの大きいふのはう
くはんこれのふ。ゆくゑもしらすおちにけり。
二ゐのほうゐんそんしやうは。よしのとつか
はににけこもりて。たうしはからめとられす。
せいすいしのほつしきやうい月やのほつして
しひたちほう。みのゝほう。三人からめとら
る。すてにきらんとするところに。しはらくた
すけさせ給へ。一首のくゑいをつかまつり候
はゝやと申ければ。これほとひまはたまは
るへしとてさしをくに。

ちよくなれはいのちはすてつものゝふのや
そうちかはのせにはたゝねと

此よしむさしのかみに。はやむまをもて申た
りければ。かんくわいのあまりゆるすへしと
てゆるされけり。人はのふはあるへきものか

な。まつ代といひなから。わかのみちもたのみ
あり。やすときやさしくもゆるされたりと。上
下かんしけり。くまのほうし。たなへのへつた
うもきられにけり。

きやうとひきやくの人々ひやうち

やうの事

むさしのかみ。くわんとうへはやむまをたつ。
かつせんをしたい。うちしにておひのけうみ
やうちうもん。ならひにめしをくところのせ
ふみやう。きらるゝものゝふのけうみやう。
此ほかゐんくみやくの御事。けつけい
うんかくのさいしやう。きやうとのまつりこ
とあらため。さんもんなんとしたいは。や
すときかはからひかたし。きやうそくにうけ
たまはりて。ちしやうしてきさんすへきよし
申けり。はやむまくわんとうにつきたりけれ
は。こんたいふ殿二る殿。そのほか大せうみ

やう。めんくにはしり出て。いくさはいか
に。御よろこひかなにとかあると。くちくにと
われけり。いくさは御かち候。三うらのへい
九郎はうくわん。山たの次郎。のとかみひて
やす以下。みなきられぬ。御文候とて。大まき
ものさしあけたり。大せんの大ふにうたう。と
りあけて。一とうにあつとそ申されける。中に
も二ゐとのあまりのことに。なみたをなかし。
まつわかみやの。大ほさつをふしおかみまい
らせて。やかてわかみやへ参せ給りけり。それ
より三代しやうくんの御はかにまいらせたま
ひて。御よろこひ申ありければ。大せうみやう
はせあつまつて。御よろこひども申あへる。そ
の中にも。こうたれおやうたれぬときく人。よ
ろこひにつけ。なけきにつけて。くわんとうは
さいめきのゝしりあへりけり。ひやうちやう
あるべしとて。大みやうどもみな参りけり。一

はんのくちは大せんの大ふにうたうとりたり
ければ。申けるは。ゐんくみやくをは。を
ん國へなかしだてまつるへし。けつけいん
かくは。はんとうへめしくたすへしとひろ
して。みちにてみなうしなはるへし。きやう
とのまつりことは。とも井の大しやう殿御さ
たゐるへし。せつろくをは。このゑとのへ参ら
せらるへしとそんち候と。いけんをいたす。よ
しとき此き一ふんもさういなし。此きにと
すとおほせければ。大みやうともしかるへし
とを申ける。やかて此御返事をことかき。一つ
うあひそへて。よくしつ。きやうへはやむまを
たてられけり。さるほとに。とも井の大しやう
殿に。六はらより此よし申されたりければ。わ
れたうしやうくんのくわいそにあらず。よし
ときかおやむつふにあられとも。しやうろ
をまほりて。きみをいさめ申によて。うきめを

見しゆへなり。これもゆめなり。しかしなか
ら。さんわうに申たりしゆへなりとて。大しや
うきんつね。日よしをそあふきたてまつらる。

くきやうさいくわの事

さるほとに。さんぬる廿四日。むさしのかみし
つかにゐんさむして。むほんをすゝめ申され
候ひつらん。ちやうほんのうんかくを。めした
まはらんと申されければ。ゐんいそきけうみ
やうをしるし出させまし。けるそあさまし
き。御ちうもんにまかせて。みなく。六はら
へ。からめ出され給ふ人々には。ばうもんの大
なこんたゝのふ。あつかりちはのすけたねつ
な。あせちの大なこんみつちか。あつかりたけ
たの五郎のふみつ。中の御かとの中なこんむ
ねゆき。あつかりをやまのさゑもんせうと
もなか。さゝ木の中なこんありまさ。あつかり
をかさはらの次郎なかきよ。かひのさいしや

う申しやうのりもち。あつかりしきふのせう
ともとき。一てうの次郎。さいしやう申しやう
のふよし。あつかりとを山のさゑもんのせう
かけとも。をのく(衍カ)れいきくきやうをちして。
はんとうむしやうのいゑにわたりたまふ。そ
もく八てうのあまみだいところと申せし
は。こまくらうの大しんのこうしつにてお
はしき。はうもんの大なこんたゝのふのきや
うの御いもうとなりしかは。此むほんのしゆ
にかりいれられて。くわんとうへくたり給ふ
をしりて。かねてかまくらへ御つかひをたて
まつり給ふ。われう大しんにおくれて。かのほ
たひをとふらふよりほかたしなし。みつすゑ
かうたれしあさより。うちのおつるゆふへま
て。おうなのこゝろのうたてさは。むかしのよ
しみこゝろにかゝるきやうたいをもしらす。
きみのかたむかせ給ふをもわすれて。三代し

やうくんのあとのほろひんことをかなしみ
て。なむ八まん大ほさつ。まもらせ給へと。こ
ころのうちにいのりて候ひし。此ことたゝの
ふのきやうたすけんとて。いつはり申候はし。
大ほさつの御こゝろもはつかしかるへし。か
すならぬみのいのりにこたへて。かゝるへし
とはおもはねとも。心さしを申はかりなり。し
かるにしひこゝろにはうちたへ。しらぬ人を
もたすけあはれむはならひあり。(なカ)いかにいは
んや。まさしきあにをたすけさるへき。つみ
のふかさはさこそ候らめとも。これしかしな
から。われにゆるすとおほしめすへからず。う
大しん殿にゆるしたてまつるとおもひなし
て。たゝのふのきやうのいのちをたすけさせ
給へと。こん大ふ殿二位殿へ仰せられたりけ
れは。ゆるしたてまつれとて。御ゆるし文あり
けるに。八月一日とをたうみの國はしもとに

てあひたりければ。あつかりのふし。ちはのす
けたねつな。此二の殿よしときのとてうを見て。
ゆるしのほせたてまつる。あせちの大なこん
みつちかのきやう。これをきゝ給ひて。人して
御よろこひ申されたりければ。たゝのふのき
やう。これもゆめやらんとこそおほへ候へと。
返事し給ふもことほりなり。さるほとに。八月
二日。ちちこのくにへなかされたまひぬ。おな
しき十日。中みかたとにうたうさきのちうなこ
んむねゆきのきやうは。きくかはにて。昔南陽
縣之菊水汲下流延齡。今東海道菊川宿西岸(而)
失命(終)とそかきつけ給ふ。おなしき十三日。する
かのくにうきしまかはらにて。

けふすくる身はうきしまかはらにてそつゆ

のいのちをきりさためぬる

おなしき十四日のたつのこくに。あゐさはと
いふところにて。つゐにきられ給ひぬ。さゝ木

の中なこんありまさのきやうは。おかさはら
くしたてまつりて。かひのくにいなつみのせ
うなひとせむらといふ所にてきらむとす。二
の殿に申たるむねあり。その御返事こん日に
あらんすれば。いま二ときのいのちをのへ給
へとのたまひけるを。たゝきりてけり。一とき
はかりありて。ありまさのきやうきりたてま
つるなど。二の殿の御返事あり。しゆくこうち
からなしとはいひなから。一ときのおひたを
またすして。きられけるこそあはれなれ。をか
さはらも。いま二ときのいのちと。てをあはせ
てこひ給ふを。きりたるこそなさけなくおほ
ゆれ。三ほうのしるへもしりかたく。人ほうに
もうたてしと見えし。一條のさいしやう中
しやうのふよしは。みのゝくにとを山にてき
りたてまつる。おなしき十八日。かひのさい
しやう中しやうのりもち。あしから山のせ

きのひかしにてしすいせらる。六人のくきやうのあとのなけき。いふもなか／＼をろかなり。

一ゐんをきのくにへなかされ給ふ事

七月六日。やすときちやくしよしうち。ときふさのちやくしときもり。かす千きのくんひやうをあいくしゐんの御所四つち殿に参て。とは殿にうつしたてまつるへきよしを申さる。御しよ中のなんによめきさけひたふれまよふにようはうたちを。さきさまに出したてまつり給ふ。ときうちこれを見て。御くるまのうちもあやしく候とて。ゆみのはすをもて。みすをかきあげたてまつり。御よういはもつともさる事なれとも。あまりになさけなくそおほへし。御ともにおふみやの中なこんさねうち。さいしやう中しやうのふなり。さるもんのせうよしもち。以上三人を参りける。ものゝふせ

んこをかこみ。けふをかきりのきんけつの御なこり。思ひやりたてまつるもかたしけなし。

おなしき八日。御出家あるへきよし。六はらよ

り申あくるに。御くしをろさせ給ふ。のりの御

後鳥羽

良

然

いみなはりやうせんとそ申ける。大上天わうのきよくたい。たちまちにへんして。むけのしんほちとならせ給ふ。のふさねのあそんをめて。御かたちをにせゑにかゝせ給ひて。七てうの女ゐんへまいらせ給ひけり。にようゐん御らんしもあへす。御なみたをなかさせ給ひけり。しゆみやうもんゐん一御くるまにて。とは殿へ御かうなる。御車をおほゆかのきはにさしよせられたり。一ゐんすたれひかさせ給ひて。御かははかりさしいたさせ給ひて。御てをもてかへらせ給へとあふかせ給ふ。御くるまのうちの御なけき申もなか／＼おろかなりおなしき十三日。六はらよりときうち。ときも

り参て。おきのくにへうつしたてまつるへきよしを申ければ。御しゆけのうへは。るさいまてはあらしとおほしめしけるに。とをきしまときこしめされて。とうさいをうしなはせ給ふそかたしけなき。せつろくはこの系殿にてわたらせたまひけり。（軍物語）君防關見となりてとめさせ給へと。あそはされける御書のおくに。

すみそめのそてになさけをかけよかしなみ

たはかりはすてもこそすれ（軍物語）

とあそはされたりければ。せつしやうの御いほうも。きみのきみにてわたらせ給ふときのことなりとて。なけき給ひけり。一ゐんの御ともには。ようはうりやう三はい。かめきく殿。ひしり一人くすし一人。てはのせんしひろふさむさしのこんのかみきよのりとそきこえし。さんぬるへいけのみたるゝ世には。こしら河のゐんとは殿にうつらせ給ひしをこそ。よ

のふしきとは巾ならはしゝに。とをきくにへなかせられさせ給ふ。せん代にもこえたる事ともなり。みなせ殿をすきさせ給ふとて。せめてはこゝにおかれはやと。おほしめさるゝもことはりなり。御心のすむとしもなければとも。御なみたのひまに。かくそおほしめしつゝける。

たちこめてせきとはならてみなせかはきりなをはれぬゆくすゑのそら

はりまのあかしのうらにつかせ給ふ。こゝをはいつくそと御たつねありければ。あかしのうらと申ければ。おとにきくところにこそとて

みやこをはやみゝにこそいてしかとけふはあかしのうらにきにけり

かめきく殿

月かけはさこそあかしのうらなれとくもわ

のあきそなをそこひしき

かのほうけんのむかし。しんゐんの御いくさやふれて。さぬきのくにへうつされさせ給ひしも。こゝを御とをりありけるとこそきけ。御みのうへとはしらさりしものをとおほしめす。それはわうゐを論し。くらゐのをそみたまふ御事なり。これはされはな^にこととそ。おほしめしける。みまさかと。はうきのなか山をこえさせ給ふに。むかひのみねにほそみちあり。いつくへかよふみちをとゝはせ給ふに。ふるきみちにて。いまは人もかよはすと申ければ。

みやこ人たれふみそめてかよひけんむかひのみちのなつかしきかな

いつもの國おうらといふところにつかせ給ふ。みほかさきといふところより。みやこへたよりありければ。しゆみやうもんゐんに御せ

うそくあり。

しるらめやうきめをみほのはまちとりしまなく
なく(軍物語)
しましほるそてのけしきを

かくそ日かすかさなれば。八月五日。をきのくにあまこほりへそつかせ給ふ。これなん御しよとて。いれたてまつるを御らんすれば。あさましけなるとまふきのこものてんしやう。たけのすのこなり。身つからせうしのゑなとに。かゝるすまゐかきたるを。御らんせしよりほかは。いつか御めにもかくへき。たゝこれはしやうをかへたるよとおほしめすも。かたしけなし。

われこそはにゐしまもりにをきのうみのあらきなみかせこゝろしてふけ
(よ力)

みやこに。ていか。かりう。ありいへ。まさつね。さしものかせんたち。此御うたのありさまをつたへうけたまはりて。たゝむねはこかれ。

なきかなしみ給へとも。つみにおそれて御返事をも申されす。されともしやう三ゐかりう。ひんきにつけて。おそれく御歌の御返事を申されけり。

ねさめしてきかぬをきゝてかなしきはあら
いそなみのあかつきのころ

しんゐんみやく／＼なかされたまふ事

順徳

おなしき廿の日。しんゐんさとのくにへなかされさせたまふ。御ともには。ていかのきやうのそく。れんせい中しやうためいへ。くわさんのゐんせうしやうよしうち。かひのさひやうゑのすけのりつね。上ほくめんには。とうのさゑもんの大いふやすみつ。にようはうには。さゑもんのすけ殿。そつのすけ殿以下三人なり。れんせい中しやうは。一あゆみの御をくりをましたまはす。のころ三人そまいられける。くわさんのゐんせうしやうは。みちよりしよら

うとてかへられけり。ひやうゑのすけは。おもやまふをうけて。ゑちこのくにゝてとまりけり。やすみつばかりを候ひける。九てうとのへ御書あり。御かたみにふんこをたてまつるよしありけり。中にもしつしおほしめす八雲抄をも。さふらひたりし。九てう殿へまへらせける御書のおくに。

なからへてたとへはすゑにかへるともうきは
このよのみやこなりけり

のちのひんきに。九てう殿より御返事させ給ふ。

いとへともなからべてふるよの中をうきに
はいかてはるをまつへき

おなしき廿四日。六てうのみや。たしまの國にうつされさせ給ふ。かつら河より御こしにうつらせ給ふ。大江山いくのゝみちにかゝらせ給ひて。かのくにへそつかせ給ふ。おなしき廿

(軍物語)

五日れんせいのみや。ひせんのくにとよをか
のせうこしまへうつされさせたまふ。とはよ

り御ふねにめし。此ほかきやうふきやうのそ
うしやう。あはのさいしやう中しやうのふな
り。う大へんみつとしなともなかされけり。ゐ
んゐんみやくなかされさせ給ふ。人々御あ
とにのこりとまりて。たひの御よそほひい
かならんと。おもひやりたてまつるもをろか
なり。中にもしゆみやうもんゐんの御事も。か
なしければ。一ゐんしんゐんにしへながされ
給ひ。きたにうつらせ給ひぬ。御あにさいし
やう中なこんのりもちのあそん。しさいにあ
たり給ひぬ。しんゐんの御かたみにせんでい
わたらせ給へとも。御なくさみなきかことし。
七てうのにようゐんと申は。こたかくらのゐ
んの御きさき。一ゐんの御はゝにてそましま
しける。いま一たひほうわうを見まいらせは

やと。おほせられけるときこしめして。ほうわ
う。

たらちねのきえやらてまつそゆの身をかせ
よりさきにかくてとはまし
七てうのにようゐん御返し。

おきのははなか／＼かせのたえねかしかよ
へはこそはつゆもしほるれ

うへつかたの御なけきたくひなし。下にもあ
はれのみおほかりけり。

ひろつなしそくきらるゝ事

おなしき十一日。さゝ木のやましろのかみひ
ろつなかく。御むろにありしか。六はらよりた
つねいたされて。むかひしに。御むろ御らんし
をくりて。

むもれ木のくちはつへきはとまりてわか
きの花のちるそかなしき

やすときみて。ゆうけんのちこなりければ。た

すけてまいらせよと申されければ。はゝこれをきゝて。七代むさしのかみとのまじませ。いのちあらんほとはいのり申へしと。てをあはせておかみけるに。みな人わかこをたすく

やうに。おほへ候とよろこひけり。くるまにのりてかへるところに。をち四郎さへもんのふつな。いそきはせ參て。此ちこを御たすけ候はは。さしものほうこうむなしくなして。のふつなしゆつけし候へしとさゝへ申ければ。のふつなはこんとうち川のせんちゃんなりときぢやうのいもとむこなり。かたゝもつてさしをきかたき仁なれば。五てうとひのこうちにつかひおいつきて。かゝるしさいあるあひた。ちからおよはす。やすときをうらむなとて。めしかへしけり。此ことをきゝてのふつなをにくまぬものはなかりけり。やなきはらにて。しやうねん十一さいにてきられけり。ためしなしとぞ申

ける。きやうとにもかきらす。かまくらにもあはれなることおほかりけり。

たねよしこともきらるゝ事

はうくはんたねよしかことも。十一九七五三(まし)になる五人ありや人のむはのもとに。やしなひをきたるを。こん大ふ。おかはの十郎をつかひにたて。みなめされけり。あまもちからおよはす。こんと世のみたれ。ひとへにたねよしかしわさなり。おしみたてまつるにおよはすとて。十一になる一人をはかくして。弟九七五三を出しけるこそふひんなれ。をかはの十郎。せめてえうちなるをこそおしみもしたまはめ。せいしんのものをとゝめたまふこと。しかるへからさるよしせめければ。小あまうへたちいてゝ。手をすりていはれけるは。のたまふところはことほりなり。されとも五三のものは。しやうしをしらされは。あきれたるか

ことし。なましいに十一までそたて。みめかたちもすぐれたり。たゞ此事をしゆこ殿へ申給へ。五人なからきらるゝならは。七十になるあま。なにかいのちのをしかるへきといひければ。小河なさけあるものにて。ゆるしてけり。四人のめのとたふれふして。天にあふきかなしみける。ほうけんのむかし。ためよしかえうちの子ともきられけんこと。おもひ出されけり。さてあるましき事なれはくひをかく。

中のゐんあはのくにへうつり給ふ事

うるふ十月十日。つちみかと中のゐん。とさの國へうつされさせ給ふ。此ゐんは。こんと御くみなし。そのうへけんわうにてわたらせ給ひければ。かまくらよりも。なためたてまつりけるを。われかたしけなくも。ほうわうをはいしよへやりたてまつりて。そのこととしてくわらくにあらん事。めうのせうらんはゝかりあり。

又なにもゑきかあらむ。せうけん四年のうらみはふかしといへとも。にんかいにしやうをうくる事は。ふほのをんほうしかたし。一たんのうらみによて。なかふかうのみとならんこと。つみふかし。されはおなしきとをしまへなかされんと。たひくくわんとうへ巾させ給ひければ。をしみてまつりなから。ちからなくなかしたてまつりけり。ないくにみなちゝをうらみ給ひければ。まことのときは。いろはせたまはぬと。ちゝの御つみに。をんこくへくたせたまふそあはれなる。廳使までのこうちの御所へまいりければ。御をち。つちみかとの大なこん。なきくいたしたてまつる。御ともににはようはう四人。せうしやう雅具。へいしゝうとしひら。さたみち。御くるまよせられけり。これはおほしめしたつみちも。一しはあはれなれは。きやう中のきせんも。かな

しみたてまつることかきりなし。むろより御ふねにのせたてまつり。四國へわたらせ給ふ。やしまのうらを御らんして。あんとく天わうの御ことを。おほしめしいたしけり。さぬきのまつ山。かすかに見えければ。かのしゆとくゐんの御事も。おほしめし出たり。とさへ御つきありけるを。せうこくなり。御ふう米なんちのよししゆこならひにもく代申ければ。あはのくにへうつされさせ給ふ。山ちにかゝらせたまふおりふし。ゆきふりて。とうさい見えす。まことにせんかたなくて。きみも御なみたにむせはせたまふ。

うき世にはかゝれとてこそむまれけめこと
はりしらぬわかなみたかな

とあそはしきやうにてめしつかひけるはんせう。木にのほりえたをおろして。御まへにたきたりければ。きみもしんも。御こゝろすこしつ

かせたまひて。はんせう大せつのもなりとそおほせける。御こしかきせうくはたらきて。かのくにへつかせ給ふ。

うらくによするさなみにことゝはんおきのことこそきかまほしけれ

そもくせうきういかなるねんかうそや。きよくたいことくせいほくの。かせにぼつし。けいしやうみなとういのほこさきにあたる。天照太神。正八幡の御はからひなり。わうはうこのときかたふき。とうくわん。天下をおこなふへきゆいしよにてやありつらん。御むほんくはたてのはしめ。御ゆめに。くろきいぬ御身をとひこゆると。御らんしけるとそうけたまはる。ゐんのはてさせたまひしかとも。四てうのゐんの御すゑたえたりしかは。のちのこさかのゐんに。御くらゐ参りて。のちのゐんと申し。つちみかとのゐんの御こなり。御うら

みはありなから。はいしよにむかはせ給ひき。
此御こゝろばせを。しんりよもうけしめたま
ひけるにや。御すゑめてたくして。いまの世に
至るまで。此ゐんの御すゑかたしけなし。せう
きう三ねんのあきにこそ。ものゝあはれをと
どめけれ。

承久物語下畢

右之承久記上下二冊依所望染筆畢

權大納言信房花押

右承久記者八條家藏書鷹司信房公眞跡也信
房公者實晴公之男後號法音院慶長十一年左
大臣同年關白明曆三年十二月十五日薨年九
十三母敦實親王女也榊原長俊有故自八條殿
拜受傳于家依爲異本乞需之透寫了

天明二年壬寅三月念六日

布引山人源高敬

續群書類從卷第五百七十三

合戰部三

竹崎五郎繪詞

おきのはまにくんひやうそのかすをしらすう
ちたつするなかゝもんの人々あまたあるな
かにゑたの又太郎ひてゑることに申うけたま
はるによりてかふとをきかへてこれをしるし
にてあひたかひにみつゝへきよしを申すとこ
ろにいそくあかさかにちんをとるにつきて一
もんの人々あひむかふにたいしやうくんたさ
いのせうに三郎さへもんかけすけのたの三郎
二郎すけしけをもてゑたの又太郎ひてゑるの
もとにけんさんにいり候し時一しよにてかせ
ん候へきよし申候きあかさかはむまのあした

ちわろく候これにひかへ候はゝさためてよせ
きたり候はんすらん一とうにかけてをものい
にいるへきよし申さるゝにつきてけんしちの
やくそくをたかへしとてをのゝひかへしあ
ひたたいしやうをあひまたはいくさをそかる
へきほとに一もんのなかにてするなかひこの
くにのさきをかけ候はんと申てうちいつ
繪

日のたいしやうに三郎(せうに三郎)はまたのたかき
□さゝ□の□にしりをかけてちんをか
(てはられし)
ためられしところ□うちむかひしにおほたさ
ゑもんおりられ候へと申さきをかけ候はんた

めにあひ 　 し 　 は 　 ほ 　

「わつかに五きこれをもて御まへのかせ
んかたきをおとすへきふんに候はすすゝむて
けんさんに入候 　 ところな 　 よし 　 君の
けんさんに御いれ候へく候し 　 申 　 かけす
けそんめいすへしとはあひそんし候はともそ
んめいし候はゝけんさん 　 をうけ給 　 り
て 　 もておそれ入候

へともりなから申候と申すにかけすけたた
めされ候へとありしに一もんの 　 ともおほせ
にしたかてちむを 　 せめあか 　 に 　
むかふと申をもてはこさきのちんをうちいて
はかたにはせむかふ

繪

はかたのちんをうちいてひこのくに 　
ゑ 　 一はんとそんしすみよしのとり井の 　 (まゐなり)
すきこまつはらをうちとをりてあかさかには

(せむし)

　 かふところにあしけなるむまにむらさ
きさかおもたかのようひにくれなぬのほろか
けたるむしやそのせい百よきはかりとみへて
けうとのちんを 　 け 　 ふりそくとをひおとし
てくひ二たちとなきなたのさきにつらぬきて
さうにもたせてま 　 とゆゝしくみえしにたれ
にてわたらせ給候そすゝしくこそ見え候へと
申にひこのくにきくちの二郎たけふさと申
ものに候かくおほせられ候はたれそとゝふを
なしきうちたけさきの五郎ひやうへすゑなか
かけ候御らん候へと申てはせむかふ

繪

たけふさにけうとあかさかのちんをかけおと
されてふたてになりておほせいはすそはらに
むきてひくこせいはへふのつかはらへひくつ
かはらよりとりかいのしほひかたをおほせい
になりあはむとひくをおかゝるにむまひかた

にはせたはしてそのかたきをはすけうとは
すそはらにちんをとりていろ／＼のはたをた
てならへてらんしやうひまなくしてひしめき
あふすゑなかはせむかふをとうけんたすけみ
つ申す御かたはつゝき候らん御まち候てせ
う人をたてゝ御かせん候へと申をきうせん
のしほやのまつのもとにむけあはせてかせん
す一はんにはたさしむまをいられてはねをと
さるすゑなかいけ三さいたてをひむまいら
れてはねしところひせんくのくにの御け人し
ろいしの六郎みちやすこちんより大せいにて
かけしにもうこのいくさひきしりそきてすそ
はらにあかるむまもいられすしてゐてきのな
かにかけいりみちやすつゝかさりせはしぬへ
かりしみなりおもひのほかにもんめいして

たかひにせう人にたつちくこのくにの御けに
んみつともの又二郎くひのほねをゐとをさる
おなしくせう人にたつ

繪

關東へ參せむとするにしゆゑの御房御とゝめ
ありしをのほるによて御不審ごふしんをかふるを御と
とめあらむために一旦の仰にてそあらむすら
んさためて用途は給らむすらむとふかく身を
たのみて同六月三日うの時竹崎をたてのほる
にいよ／＼不審ふかくなるにつきてうちのも
のとも一人もうちをくりするものたにもなか
りし程にふかく恨をなし奉りて中間彌二郎又
二郎二人はかりあひくしてのほる用途には馬
くらをうりたりしはかりなり今度上聞に不達
は出家してなかく立歸事あるましと思ひしほ
とに熊野先達をかの法眼けうしむのもとに打
寄て御祈精候へしと申さむとおもひしを見參

(らむすい)

せははなむけなともあらすらむこれより御布施をまいらせてこそいのりにはなるへきあひたわつかなる用途一結使者をもてまいらせてよく／＼御きせい候へしと申てうちどをりて關につく時の守護三井新左衛門季成ゑほうしをやたりしにつきて見參せしに遊君ともをめしてなこりをおしみ海道にめされ候へとてかはらけなるこまにやうとうあひそへてはなむけにせらる八月十日伊豆國三島大明神にまいりてかたのこく御布施をまいらせ一心にゆみやのいのりを申同十一日はこねの權現にまいりて御布施をまいらせて信心をいたしきせい申 (此下圖紙切レタリ)

同十二日かまくらにつく三島のしやうしむをとおしてゆいのはまにてしほゆかきやとにもつかてすくに八幡にまいりて御布施をまいらせて一心に弓箭のきせいを申す (此下圖紙切レ

タリ)

かた／＼ふきやう／＼きて申すといへともちうけん一人はかりあひくしてわうしやくのありさまたるゆへにせひけんさんにいるゝふきやうなかりしあひたしんめいのかこならすよりほかに申たつへしともおほえさりし程に又八まんにまいりて一しんにきせいをいたしおなしき十月三日ときの御をんふきやうあきたのしやうのすけとのやすもりの御まへにていちう申事 (此下圖紙切レタリ)

ひこのくにの御けにんたけさきの五郎ひやうへすゑなか申あけ候きよねん十月廿日もうこかせんの時はこさきのつにあひむかひ候しところこそくとはかたにせめいり候とうけたまはり候しをもてはかたにはせむかひ候しに日のたいしやうたさいのせうに三らうさゑもんかけすけはかたのおきのはまをあひかためて

一とうにかせん候へしとしきりにあひふれられ候しによてすゑなかゝ一もんそのほかたいりやくちんをかため候なかをいて候てかけすけのまへにうちむかひてほんそにたつし候はぬあひたわかたうあひそひ候はすわつかに五き候これをもて御まへのかせんかたきをおとしてけんさんにいるへきふんに候はすすゝんてけんさんにいるよりほかはこするところなきものに候さきをかけ候よし（此下圖紙切レタリ）

君のけんさんに御いれ候へきむね申候しにかけすけもそんめいすへしとはあひそんし候はねとももしそんめいつかまつり候はゝけんさんにいれ申へく候と候しをうけ給てはかたのちんをうちいてとりかひのしほひかたにはせむかひ候てさきをし候てかせんをいたしはたさしのむまおなしきのりむまをいころされす

ゑなか三井の三郎わかとう一人三きいたてをかうふりひせんのかのの御けにんしろいしの六郎みちやすせう人にたて候てかけすけのひきつけに一はんにつき候し事御ちうしんにもまかりいりかきくたしの狀にものせられ候へきむねつねすけへ申候ところさきの一たんはしさいを申あけ候ておほせにしたかて申へく候と候てさしをかれ候て

君のけんさんにいらす候事きうせんめんほくをうしなひ候と申にしやうのすけとのつねすけちうしん申てや候つらむいらすとは御ちうしんのふん御そんち候かとおほせありしにかてかそんちつかまつり候へきと申に御そんち候とこそきこへ候へそんち候はてはふそくのよしをはいかて御申候そとうけたまはるにつねすけ申候しことくはさきの一たんはしさい申あけておほせにしたかてをて申へく

候と候へし(ひい)うゑかきくたしは御ちうしんの
ふんをかきいたされ候とうけ給はり候をもて
さきの事御ちうしんにあひもれ候とおほえ候
と申時かきくたしをとりて一けんありてふん
とりうちしにの候かと御たつねかうふるにう
ちしにふんとりは候はすと申すに候はてはか
せんのうちをいたし候ねてんきすをかうふら
せ給候とみえ候うへはなんのふそくか候へき
とおほせありしにさきをし候て一はんにつき
候しを御ちうしんにいり候はてけんさんにま
かりいらす候ふんをこそ申候へせんし候とこ
ろ御ふしんあひのこり候はゝかけすけへ御
けうそをもて御たつねをかうふり候はんに申
あけ候さきの事きよたんのよしきしやうもん
にて申され候はゝくんこうをすてられ候てく
ひをめさるへく候と申に御けうその事はひか
け候はぬほとに御申候ともなるましき事に

候とおほせありしにひかけは候へしとおほ
えす候と申にそんちせぬ事こそ候へさやうに
御そんち候うゑは御申あるへきに候はすと
うけ給はるにしよむさうろんの事にても候はん
てうのかせんにても候はゝひかけうけ給はて
申あくへく候かいこくのかせんにつき候てひ
かけ候へしとおほえす候ひかけ候はぬによ
て御たつねをかうむらす候て君のけんさんに
まかりいらす候はん事きうせんのいさみなに
をもてかつかまつり候へきと申におほせは
さる事にて候へとも御さたのはうひかけ候は
ては御申候ともなるましき事に候とうけ給る
にかさねて申あけ候事をそれいり候へともち
きにくゑんしやうをかうふり候はんと申そせ
うに候はすさきをし候し事御たつねをかうふ
てきよたんを申あけ候はゝくんこうをすてら
れ候てくひをめさるへく候しつしやうに候は

はけんさんにまかりいり候てかせんのいさみをなし候はんと申あけ候てうさしをかれ候はん事しやうせん□^(おほせな)なけきなに事かこれにすぎ候はんとさいさん申時御かせんの事うけたまはり候ぬけんさんにいれ申へく候御くゑんしやうにをきてはさうい候はしとおほえ候ゐそきくにへけかう候てかさねてちうをいたされ候へしとおほせかふるに君のけさんにまかりいり候はむにをき候てはおほせにしたかてまかりくたるへく候ところにはんそにたつし候はてむそくのみに候ほとにさいよいつくに候へしとおほえす候てにつき候はへり候はむと申候したしきものともは候へともなましにころはたをさゝむとつかまつり候によてふちするものも候はぬほとにいくに候てこ日の御大事をあひまつへしとおほえす候と申すにさやうに候はんにはなんち

の御事こそ候なれとあてやまのうちとのよりいそきまいるへきおほせに候御かせんの事はなをくうけ給るへく候とてさんせらる

繪

同四日あまなはのたちにさんするにひせんのかにの御け人なかのとう二郎こきりものにてめしつかはれしかすゑなかにたいめふてきのふ御ていちう有けるかとふにかたかた御ふきやうに申候へともとり申されす候をもてちきに申あけて候と中に御うちのかるへき人々あまた候しなかくて御ていちうのしたいおほせいたされ候てさきをし候し事三郎さゑもんにつ□^(ね)んにきよたんを申あけはくんこうをすてられてくひをめさるしと申すきいのこはものなとたまむらにおほせ候て二日の御大事にもかけつとおほゆると御ものかたりの候し御めんはくのおほせに候程に

いまたけんさんにいらす候へともつくしの人はなつかしく思ひまいらせ候て申候さためて御くゑんしやうは候ぬとおほえ候とつけしらせしをもてそれよりつねに申うけ給り候き同十一月一日八はんにまいりてひつしの時はかりさんするにたまむらのむまの太郎やすきよをもてするなか一人うちのけんさんところにめされてかみより御かせんのちうしやうに御りやうはいりやうの御くわしふみまいらすへきおほせにて候これへとめされしにさんしていまふたまおきてつしんてやすきよにめをきとみあはせて御くたしふみを給てするなかにとらすへきよしするにやすきよまいるをちきにしんすへきおほせにて候これへとかさねてめされしにまいりて御くたしふみを給りてつしんて候ところにやかて御くたり候かと(おほせをい)おほをかうふるにくたるへきよしを申さはく

んこうを給はらんためにさきの事は申けりとおほしめされんすらんとそんして申あけ候さきの事君のけんさんにまかり入候てくゑんしやうにあつかり候はゝよをもて日につきまかりくたり候て御大事をあひまつへく候そのきなく候はゝかけすけへさきの事御たつねをかうふるへきむね申あくへく候と申すにひろう申候しにて御ふんの御くたしふみはちきにしんすへきおほせに候いま百二十よ人のくゑんしやうはさいふにおほせくたされ候とおほせをかうふりしにさきの事けんさんにまかり入候はゝいそきけかうつかまつり候てかさねてちうをいたすへく候と申時むまくそくしんし候はん事いかやうに候なんとおほせをかうふるめんほくきはまりなきをもてせひを申にをよはすいよゝつしんて候所にくろくりけなるむまにこともゑのくらくおきて

れんしやくのしりかいにしんせいくつはを
はけてむまやのへつとうさえた五郎をもて
これを給はる十一月一日ひつしの時はかり
なり

繪

人々おほしといへともきくちの二郎たけふさ文
永の合戦になをあけしをもてたけふさのかた
めし役所の石つい地のまへにうちむかて將
軍の兵船はほはしらを白くきにぬりてしるく
候とうけ給候おしむかてひとやい候て君のけ
さんにかかり入候はむためにあひむかひ候御
存命候は、御披露候へといひてうちとをる

繪

同五日關東の御つかいかうたの五郎とをとしあ
むとうの左衛門二郎しけつな拂曉にはせきたり
しに季長ゆきむかて海上をへたて候あいたふ
ね候はて御大事にもれ候ぬとおほえ候と申に

かうたの五郎兵船候はてはちからなき御事
こそ候へと申ところ肥前國の御家人共名わ
するたかしまのにしの浦よりわれのこり候ふ
ねに賊徒あまたこみのり候をはらひのけてし
かるへき物ともとおほえ候のせてはやにけか
へり候と申に季長おほせのそくはらひのけ候
は歩兵とおほへ候ふねにのせ候はよきものに
てそ候覽これを一人もうちとめたくこそ候
へと申にかうたの五郎異賊はやにけかへり候
と申候せいをさしむけたく候と少貳殿へ申へ
しとて使者をつかはすに肥後國たくまの別當
次郎時ひて大野小次郎くにたかそのほか兵船ま
はしたりし人々をひかゝるといへとも季長か
兵船いまたまはらさりし程にせんはうをうし
なひしところに連錢の旗たてたる大船をしき
たりしをかうたの五郎城次郎殿の旗とおほゆ
るゆきむかて見よとて使者をつかはすこのふ

ねにのりておきのふねにのらむとまへをたて
つかひのふねにのらむとせしにのせさるをも
て守護の御ての物に候御兵船まはり候はゝの
りて合戦すへしとおほせをかふりて候と申に
のせられておきのふねにのりうつるにこたへ
の兵部房めし(殿イ)の御ふねに候御ての人よりほか
はのすましく候おろしまいらせよと申てしも
へをもてせきおろさんとするを(以下缺)

君の御大事にたち候はむためにまかりのり候
をむなしくうみにせきいれられ候はむ事その
せむなく候はし船を給候ており候はむと申に
おるへきよしおほせらるゝうゑは狼藉なせそ
と申に物ともものきしひまにかのふねにのる

繪

して一所に合戦候へしとおほせに候御ふねを
よせられ候へと申にとかまさかふとをぬきか
しこまてをしよすといへとものるへきやうな

かりしをもて甚深におほせつけらるへき事の
候ちかくふねをそへられ候へと申にとかまさ
ちかくをしよせて見て守護はめされけにも候
はすふねをのけよと申にちからなくておほせ
のごとく守護はめされ候はすこのふねをそく
候によて申うけてのり候はむために申て候と
申につもり殿同船し候てところなく候とてい
よいよのけしあいませむかたなくて手をすり
てしかるへく候はゝ一身はかりのせられ候へ
と申に戦場のみちならては何事にかたかまさ
にあひてこんはう候へきめされ候へとてふね
をおしよせしにのりうつるをわかたうこれを
みてすてられしとなけきあへりといへとも季
長なかこんはうしてのるうへはわかたうをする
にをよはず弓箭きうせんのみちすゝむをもてしやうと
すよて手の物一人もあひくせすたゝ一人はか
りあひむかふかふとはわかたうにしられしか

ためにもろさねにもたせてほんふねにをきし
ほとにすねあてをはつしてむすひあはせてか
ふとにせしときたかまさにいのちをおしみて
し候とおほしめさるましく候敵船にのりうつ
り候までと存候てし候ふねちかつき候へはく
までをかけていけとりにし候とうけ給候いけ
とられ候て異國へわたり候はむ事しにて候は
むにはおとるへく候くまでにかけれ候はく
くさすりのはつれをきりて給候へと申にたか
まさふかくつかまつりて候野中殿はかりはの
せたてまつるへく候つる物をと申て身ちか
くありしわかたうのきたりしこさくらをきに
かへしたるかふとをぬかせてめされ候へとて
えしを給候御事よろこひ入候へともかふとを
きられ候はてうたれ給候なほ季長ゆへに候と
妻子のなけれ候はむ事身のいたみに候給ま
しく候と申をかねてめされ候へとありしにち

かことをたて、申時御せいしやうのうへはぬ
しにきよととらすいますこしも身をかろく
して賊船にのりうつらむためにおひたりしそ
やをときすてゝひたゝ(以下缺)

繪

あくる六日拂曉にかうたの五郎のかりやかた
にゆきむかて合戦の事條々申におほせいせ
むにうけ給て候せむゝの御合戦も相違候は
しとおほえ候自船候はて一度ならずかり事の
みおほせ候てふねゝにめされ候て
御大事にあはせ給候御事は大まうあくの人に
候と上のけさむに入まいらせ候へく候式部屋
證人の事はうけ給候ぬ御尋候は、申へく候と
ありしにてよてかさねてせう人にこれをたつ

繪

陣におしよせて合戦をいたしきすをかふり□
事ひさなかのての物信濃國の御家人ありさか

の證人には盛宗の御ての人たまむらの三郎盛

[illegible]

ひうへをとひいたし

給てひかしのさくらゐのゑたに御ゐあてをかま
れさせ給し御事關東海東おなしもんしなりよ
て海東を給はるへき (イ) 四はうに (ニ)

ひかしのさくらに御ゐあ (ひろイ) のとくを

くゆみに

海東に入部し

てきうせんのとくをほとこさん (ためイ)

にさくら

には御ゐありけりとこれしるそのゑは同十 (これイ)

同十

一月一日御くたしふみを給はりてあくる正月 (みイ)

四日たけさきにくつ (同月六日イ)

海東に入部 (はイ)

る (き□□イ)

とをかねて御し

に御ゐありたるを (けし)

てこにちに

おもひあはするによて

神のめてた

き御事を申さんためにこれをしるしまいらす

永仁元年

歲次

癸巳

二月

九日 (九日イ)

舟 上 記

元弘二年三月七日。先帝ヲハ後鳥羽院ノ例ニ
任セ。隱岐國ヘ遷幸ナシ奉ル。供奉ノ人々ニ
ハ。一條頭大夫行房。禪林寺少將忠顯。御介錯
ハ三位ノ御局。宮女二人。御下部ニ金若トテ。
サカ／＼シキ仕丁一人。亦關東ノ住人成シカ。
近年所領ニモ離レテ。久シク在京シテ。成田小
三郎ト云田舎武者アリ。醫法ヲ知タル由ニテ。
笠置ノ皇居ヨリ雜色ノヤウニ召仕ハレケル
カ。此度モ聊見知タル者ノナケレハ。夫男ノ走
下部ニ成テ。隱岐國エモ供奉シケル。路次ノ御
警固ニハ。千葉介貞胤小山五郎左衛門佐々木
佐渡守高氏入道等也。五百餘騎前後打圍奉リ。
七條ヲ西ヘ東洞院ヲ下ヘ遷幸ナル。都ヲ御出
有テ。十三日ト申ニ。出雲ノ國見尾ノ湊ニツカ
セ給。爰ヨリ順風ヲ待テ御渡海アリ。四月廿一
日ニ。三尾カ關ヨリ御渡海アリ。隱岐前司清高

奉請取テ隱岐國ノ國分寺ニ入奉リ。キヒシク奉守護。伯耆隱岐出雲三ヶ國ノ武士。カハルカハル御警固ヲ仕ル。同三月八日。一ノ宮尊良親王ヲハ佐々木判官時信路次ヲ御警固仕。土佐國畑ト云所エ奉流。妙法院尊澄親王ヲハ長井左近大夫高廣路次ヲ御警固ニテ。讃岐國松山ト云處エ奉流。源中納言具行卿ハ同六月十九日江州柏原ト云處ニテ。佐渡判官入道高氏カ承テ打之。カヤウノ事_氏都ヨリ使モナケレハ。先帝聞召事モナシ。サレハ宮々ノ御行衛。亦ハ御供ニ參リ。笠置ニテトラハレシ。卿相雲客ノ人々如何成ケント。朝暮キカマホシク思召サル。カクテ其年モ暮。明ル正月ニ成シカハ。隱岐前司清高ハ。皇居ノ守護ヲハ近國ノ武士_氏ニ申付。出雲國エ歸リケル。先帝御歎有ケルハ。昔承久兵亂之時。後鳥羽院此國ニ御座有ケル時。刑部僧正御弟子淡路法印ト云人。深ク

哀ミ奉リ。毎度御使ヲ奉リ。京ノ御事_氏聞召ケル。昔シ御恩ヲ深ク蒙リシ公卿殿上人御文計奉リ。終ニ御使ヲモ不奉リケレハ。

間レテモウレシクモナシ此海ヲ渡ラヌ人ノナケク情ハ

トアソハサレケルソ。御怨ノ御歌ト語リ傳ヘタリ。昔ハカクモ有リシニ。如何ニ都ヨリ御文タニ奉ル者ノナキヤラント。御歎カキリナシ。閏二月ノ初ツカタ成田小三郎アマリニ御イタハシクテ。國分寺ノ僧ヲカタラヒテ。御守護ノ武士ノ中。伯耆國那波庄住人源小太郎長高カ舍弟惡四郎泰長ヲ招キテ。都ノ事ヲ尋ケル。泰長語ケルハ。君ハ未知シ召ルマシ。楠正成ハ御所方ニテ。金剛山城ニ楯籠リ。東國勢廿万騎ニテ攻候。城剛クテ寄手已ニ打負候ト聞エ候。又備前ニハ伊東大和二郎三石城ニ楯籠リ山陽道ヲ差塞キ。播州住人赤松ハ。大塔宮ヨリ令旨ヲ

給。攝州マテ責上ル。四國ニハ河野一族土居二郎得能彌三郎味方ニ成リ。河野ヲ背テ旗ヲ舉ケレハ河野ハ在京候間。中國探題北條時直。小島ヨリ押渡リ合戦シテ負。行方ヲ不知落行ケレハ四國皆土居ニ付。既打立。是エ御迎ニ參ルトモ申ス。御運已ニ開カセ玉フヘシ。アハレ此時分。君ヲトリ奉リ義兵ヲ起サハヤト存候。此趣ヲ達上聞サセ玉ヘト語リケレハ。成田アマリノ嬉サニ胸驚テ不及返答。則近クヨリ少聲ニ成リ。イサ、ラハ今度此趣ヲ披露可申。然ラハ和君カ今夜ノ當番コソ幸ナレ。奉咫尺龍顔如何ニモ計ヒ玉ヘト申シケレハ。惡四郎子細候ハシト領掌シテ。御前ニ參ル。先帝大ニ御感有ノ。先汝カ一族可然者アラハ。語ヒテ義兵ヲ起シ。御迎ニ參リ。何國ニテモ要害ヨカラン處ニ。皇居ヲ移シ奉レカシ。聖運開カレハ恩賞ハ可依請ト勅定有ケレハ。惡四郎畏リ。謀リ申

シケルハ。先己カ本國伯耆國舟上ハ。無雙ノ城郭ニテ候。小太郎長高ハキハメテヲコノ者ニテ候間。大將ニ頼ム由勅定アラハ。身ニ取テノ面目ト悦ヒ候テ。早々味方ニ參リ候ヘシ。然レトモ先出雲國中ヲ味方ニ被成。隱岐前司御追討ナクハ。如何ト存候。彼富田ノ住人鹽冶三郎高貞ヲ御頼ミ。如何ニモシテ出雲國エ御座ヲ移シ奉ルヘキ謀コソ第一ニ候ヘ。當番ニ候富士名三郎義綱ト云者。高貞カ一族ニテ候得ハ。語ヒテ見候ハント申テ。次ノ日頓テ義綱ヲ招キ六波羅ノ事ニ申出シ。金剛山四國ノ合戦ヲモ語リケル。義綱モ此時分ニ謀反ヲ起シ。此君ヲ取奉ラハヤト心ニ思ヒ。同心ノ族ヲウカカヒ尋ケル折ナレハ小聲ニ成テ。如何思玉フ。我等カ當番ニ此君ヲ落シ奉リ。大功ヲ成シ。恩賞ヲ蒙ントコソ存候ト云ケレハ。惡四郎手ヲ拍テ。我等モ其様ニ參テ候トテ。頓テ義綱ヲ御

前エ相具シ參リケレハ。御盃ヲ被下_レヒタスラ
御賴ミアル由勅定ナリ。惡四郎ハ閏二月廿日。
早天ニ御暇ヲ中。役所ヲ立テ出雲エ押渡リ。伯
耆國エヤ通ルヘキ。鹽治判官ヲヤ語フト案シ
ケルカ。先高貞ヲ語テミント思ヒ。高貞カ方エ
行ケルヲ。高貞ハ天下未兩方ノ勝負。何_レ落着
ナカリシカハ。一圓領掌セスシテ。惡四郎ヲ追
出シケレハ。急キ伯耆エ歸ラント通リケル處
ニ。其頃六波羅ヨリ。國司并ニ隱岐前司カ方エ
逆徒若差チカフテ。先帝ヲ奉奪取事モコソア
レ。能々御警固仕。アヤシキ者ヲハ。カラメト
ルヘキ由被下知ケレハ。大社國造ト云神人コ
レニ同心シテ。國中ニアヤシキ者ヤアルト尋
ケルニ。惡四郎ニ行アヒテ。生捕ニコソシタリ
ケル。案ノ如ク。先帝舟ノ上ニ御籠有シ時ニ。
終ニ同閏二月晦日。出雲國ニテ惡四郎ハ自害
シテウセニケルコソムサンナレ。義綱カ心ヲ

トラント。都ヨリ御供ニ參リシ宮女十八歳ニ
ナリケルヲ。義綱ニタマハリケル。義綱勅定
ノ忝サニ。是モ役所ヲ忍ヒ出テ雲州ニ渡リ。高
貞トカク思案半ナリケレハ。勅答モ不申。義綱
ヲ押籠テ不歸。閏二月廿三日。頭大夫行房ト成
田カ申上ケルハ。彼兩人ノ中ニ。惡四郎ハ伯耆
エ可通ト申シケル程ニ。遅ク歸ルヘシ。義綱ハ
早可歸ト申上ケルカ不歸。此事人ニシラレナ
ハ。後悔シテモカイ有マシ。明朝忍テ出シ奉ル
ヘシトテ。御番ノ兵トモ御酒ヲ被下。三位ノ局
近日御産有ヘシ。依之御所ヲ御出有テ。民屋ニ
出御アル由披露有テ。御輿ノ中ニ先帝ヲ横ニ
ノセ奉リ。御小袖アマタ上ニ積テ。三位殿ヲ上
ニノセカケ申シ。態ト御輿ノ戸ヲ細ク明テ。頭
大夫行房忠顯モ御供ニテ。義綱カ旅宿ノ民屋
ヘ落シ奉ル。金若ト成出ト。駕輿丁ニ成テ。御
輿ヲカキ奉ル。閏二月廿四日未明ニ御出有。三

位局ハ旅宿ニ留リ奉リ。頭大夫行房ハ殘リ。忠顯ト金若成田。富士名カ郎從ト四人御供申シ。ソコトモ不知。遠キ野ヲ遙々歩ミ落サセ給フ。忠顯モ先帝モ初メタル御歩行ニテ。歩カネサセ給ヒケルヲ。成田ト金若。御腰ヲ押御手ヲ引テ。千波ノ湊ノ方エト急キケル。爰ニ田舎ノ夫男一人。隱岐ノ駒ニ乘テ行逢ケルカ。先帝ヲ見進テ。痛敷ヤ思ヒケン。急キ飛ヲリ。駒ニノセ奉リ。忠顯朝臣ヲ輕々ト負ヒ申。御道シルヘ仕候ハント申テ。五十町行ケレハ千波湊ニ付。爰ニテ船人ヲ語ヒ。順風ニ帆ヲ舉ケレハ。忠顯朝臣舟人ヲ近付。屋形ノ中ニノセ奉シハ。日本ノ御主也。カ、ル時御船仕コソ幸ナレ。何クニテモ御運開ハ。汝ヲ所領ノ主ニ申成スヘシト宣ヘハ。舟人大ニヨロコヒ。同廿五日ノ巳ノ刻。雲州島根郡野波浦ニ馳着ケル。爰ニテ供御ヲ奉ラント求メケレモ不叶。御酒ヲヤウノ、

求テ奉ケル。四人ノ人々モ。舟人モ酒計參リテ。夫ヨリ同廿七日杵築ノ浦ニ着ケル。爰ニテ金若ト富士名カ郎從ト二人ハ。供御シタクシテ奉ラント。岡ニ上リケルヲ。大社ノ神宮仙^(家カ)間ノ國造カ郎從共。國司ト一ツニ成リテ。先皇ヲ尋奉ルニ行逢テ。金若ト富士名カ郎從ヲハ被生捕ケリ。是ヲハ。夢ニモシロシメサ、リケレハ。舟ヨリ上ラセ玉ヒテ。隱岐ノ駒ノ出雲ニモアマタ有シヲ。野人ニカリテ載奉リテ。大社ノ方エ趣ケルニ。此馬頻リニ跡エ歸リ。打テモ打モ本ノ道ニ歸リケル。アマリ不思議ニ思食。亦御船ニ歸御ナリケレハ。早敵ノ尋ル體。岡々ニ見エシカハ。舟人驚キ取梶面梶取合テ。片帆ニカケテ逃ノヒケル。隱岐前司清高舟十艘計ニテ。先皇ヲ追奉ル。船頭是ヲ見テ主上ト忠顯朝臣ヲ舟底ニ伏セ奉リ。上ニ海草ヲ引散。乾物入レタル俵ヲ積テ。船頭ト成田。其上

立雙ンテ櫓ヲ押ケレハ。追手人々此舟ニ乗移
リ見ケルカ。此舟ニハアヤシキ人ナシトテ。亦
舟ヲ押出シ帆立梶ヲ直テ馳テ行ク。折節海上
俄ニ風替リ。御舟ハ東エ吹送リ。追手舟共西
エ吹モトス。御座ノ船ヲハ。同月廿六日伯州
片見ト云處ニ着ニケル。是ヨリ名和ノ湊ハ何
程有ト尋ヌルニ。五里程ト申ス。サラハ今少モ
近クエトテ。御舟ヲ大坂ノ湊ニ着。是ニテ水キ
コシメスヘキ由。勅定ナリケレハ。成田小三
郎水ヲ求メニ上リ。水ヲ漸奉ル。先皇モ忠顯モ
供御ヲハキコシメサス。此水ニテ力ヲツケ給
フ。先成田ヲ以テ。小太郎長高カ方エ勅定有シ
ハ。舍弟惡四郎ヲ以テ。委ク勅定有トイヘ。厄。
重而頼仰ラル也。清高カ圍ヲ忍出テ。汝ヲ頼母
敷思食。是マテ行幸ナリタリ。如何ニモシテ勅
定ニ隨ヒ奉リ。義兵ヲ舉ケ朝敵ヲ亡シ奉ルヘ
シ。天下ヲ反復。偏ニ長高カ心ニ可有。若亦夫

レモ不叶ハ。急テ御迎ニ參リ。御命ヲツキ奉
リ。鎌倉エ申シ。汝カ高名ニ成シ奉リ。御菩提
ヲ奉吊。隱岐判官カ手ニカ、ルマシト思食。汝
カ方エ御舟ヲ被着タリト被仰下ケル。成田ハ
勅定承リ。岡ニ上リ。長高カ館ハ是ヨリ何程ア
リト尋ケレハ。二里程有ト答ケレハ。大ニ喜ヒ
唯一足ニト飛カ如ク急トイヘ。三日食事ナ
カリケレハ。手足ニカラナク。踏足更ニ働ラカ
ス。一所ニ跳ル心地シタトルタトル尋行。名和
殿ノ館ハ何方ヤラント問ハ。士民申シケルハ
名和殿ノ館ハ。今二十町程ニハ無下ニ近フ候。
名和殿ハ六波羅ヨリノ催促ニテ。先月千劔破
ノ城ニ向ヒ玉フトテ。御上洛ト申ス。成田是ヲ
聞テ力ヲ落シテ胸フサカリ。コハ如何ニト。歎
カシク。夫レハ何日ニ御歸リ可有ト問ケレハ。
亦人申ハ。イサトヨ。大殿ハ上リ玉ハス。若殿
計御上洛候。タシカニ昨日マテ犬ノ馬場ニテ。

蟻目ノ音ノ聞エ候ト申システ、通りケレハ。ウレシサ申計ナシ。此言葉ヲ力ニテ。同廿八日午ノ刻ニ。彼館ニ走着テ見レハ。誠ニユ、シキ門戸有。其中ニ大家アマタ作並テ。客殿ノ前ニハ若キ殿原アツマリ。馬ニ乘リテ見居タル處エ行着。ツト入テ見レハ。皆何者ソトトカメケレハ。成田。苦シカラス。名和惡四郎殿ヲハセヌニヤ。可申事有テ參リタリト云。惡四郎殿隱岐ノ御番ニテ御留守ト答フ。扱テハ未歸サリケルニコソ。道ニテ如何ナル遅引ソヤト思ヒ。小太郎殿ニ可申事有リト云。長高折節酒宴シテ居タリケルカ。是ヲ聞テ。人ヲ出シ何事ソト問ケレハ。全ク人傳ニテ申マシ。直ニ長高ニ對談可申ト云ケレハ。名和是ヲ聞テ。如何様子細有トテ。閑ナル處エ呼入ケレハ。成田ハスハ穀サル、カト思ヒケレハ。是非ヲ言ニ不及彼處ニ行テ。長高ノ手ヲ取。君ノ勅定念頃ニ初ヨ

リ終マテ申シケレハ。名和是ヲ承リ。首ヲ地ニ落テ。扱モ〱忝キ勅定カナ。十善ノ君ニ被憑奉リ。戸ヲ軍門ニ曝レ。何カ苦シカルヘキ。名ヲ後代ニ留ン事。生前ノ思出也ト喜ケレハ。成田ヨミカヘリタル心地シケル。ヤカテ干飯ヲ洗ヒテ居ケレハ。餘リウレシク覺テ。胸塞テ一口モ不食ケル。誠ニサコンウレシカリケメ。長高御迎ニ參ラントテ。鎧トツテ肩ニカケ。馬引寄セ打乗。馬上十騎計ニテ。逸足ヲ出シ。唯一サンニ馳着テ。船津ニテ馬ヨリ飛下リ。少將殿ハ御渡候カノト。高聲ニ問ケレハ。返答モナカリケル。舟人ノ食事ヲ尋テ。岡ニ上タルヲ尋ヌルトテ。少將殿モナカリケル。先皇聞召。アハヤ何者ソト思召。苦屋ノ中ニ深ク隠レサセ玉ヘハ。名和小太郎。君ノ御迎ニ參リタルト高聲ニノ、シリケレハ。其時苦ヲ明サセ給ヒ。如何ニヤイカニ長高ヨ。成田ハ參付ケル

(ト脱カ)

カ。御顔ヲ指出サセ給ケル。龍顔モ塵ニマヒレヤツレサセ玉フ御形ヲ。武士凡奉見。皆涙ヲ流シ。御前ニカシコマル。小太郎申ケルハ。成田小三郎ハアマリニツカレ候間。馬ニ乗候ヘニ未タ追付不申候。某ハ勅定ノ忝サニ片時モ早クト參リ候。若敵モヤ追懸奉ラハ防矢可仕存。加様ニ急候ト申處ニ。千種少將飯リ參リ。手ヲ拍テ喜ケル。扱御馬ニカキ乗セ奉リ。長高基長父子郎從以下廿四人供奉シテ。舟ノ上ノ山エ奉入。自船津二里計有ル野中ニテ。頻リ御草臥有テ。御休息アリタキ由勅定有ケレハ。長高カ舍弟長重着タル鎧ノ上ニ荒薦ヲ卷テ。主上ヲ負奉リ。舟ノ上ノ麓岩屋谷ト云處マテ。鳥ノ飛カ如ク走着。爰ニテ故キ輿一丁求メテ乗申ス。サシモサカシキ西坂ヲ。片時力程ニ入奉ル。馳參ル人々ニハ大將長高兄弟。長高ノ二男孫三郎基長。其弟乙童丸後號高光。日野三郎義行。子

息又三郎義泰。甥六郎太郎義氏。内河彦三郎義眞。長高舍弟鬼五郎助高。從弟信貞。同次郎三郎實行。同彦三郎忠秀以下廿七八騎ソ有ケル。カカル處ニ長高舍弟大山ノ別當信濃房源盛。大山寺衆徒二十四人引率シテ馳參ル。アハヤ敵カト見居タリケレハ源盛也。長高大ニ悦ヒ。當山ハ源盛末山也。急イテ供御調ヒテ參ラスヘシト下知シケレハ。承ルト申シテ。弟子同宿馳マハリ供御ヲ出來テ奉ル。此時君臣凡ニ力付テ。人ノ心地ソ有ケル。馬凡ヲ麓ノ林ニツナキ置ケルカ。嘶ケル聲岩ニ響テ夥シ。長高二男基長ヲ呼テ云ケルハ。汝ハ急テ館ニ歸リ。兵糧ヲ當山ニ入。其後妻子凡ヲ思ヒ〜ニ忍ハセ。館ニハ火ヲカケ燒拂ヘシト下知シケレハ。基長畏テ申シケルハ。加様ノ小勢ニテハ。侍ノ一人モ大切也。敵ハ定而寄ヘキニ。一天ノ君ノ御前ニテ可打死ト存スル也。餘人ニ此使ヲハ被

仰付ヘウモヤ候ハント申シケレハ。長高大ニ怒リ。汝ハ不覺ノ申ヤウ哉。弓取ハ我館ヲ敵ニケ散サル、ヲ耻トス。其上館ニ人一人モナカランモ無念ナリ。物トリ認メ。尋常掃地シテ妻子ハ皆方々エ可落。父カ最後ノ命ナレハ。爭テ背コト有ヘキ。急ケ〜ト云ケレハ。基長承リ候トテ。我館エ引カヘス。内河彦三郎ヲ召テ。近邊ノ在家人ニ觸廻シ思立コト有テ。船上ニ兵糧ヲ上ル事アリ。我倉ノ米穀ヲ一荷持運ヒタラン者ニハ。錢ヲ五百ツ、取スヘシト觸タリケレハ。即時ニ人夫五六千出來。五千餘石ヲ我劣ラシト持送ル。其後家中財物ヲ悉ク人夫ニトラセ。館ニ火ヲカケ焼上。内河彦三郎ヲ召テ。土用松丸ハ嫡孫ナレハ。舟ノ上エツレテ可來ト云捨テ。基長モ歸來ケレハ。長高ヲ初メ。イシクモシツル物カナト感シケレハ。内河彦三郎ハ。長高嫡孫土用松丸トテ。四歳ニ成ケ

ルヲ引率。其外長高ノ妻女并土用松丸カ母モ迎ヘテ來リケル。隱岐前司カ館ハ。小波ト云處ナリシカ。角トモ不知ケレハ。味方ヨリ忍ヒテ軍兵ヲ指遣シテ。夜打ニセヨトテ。馬上廿騎計雜兵六十餘人打立ケルニ。味方ニ稻瀬ノ五郎三郎弘義ト云者。清高カ方エ返忠シテ。清高惡處ニ待請。長高カ執事田所并舍弟五郎左衛門。植直若林等討死シテ引返ス。其夜除日被行。大將長高。左衛門尉被任。君ノ御諱ノ尊ノ字ニ同シヒ、キ有テ恐アリ。其上長ク高ハ危事也。カカタ不可然トテ。長年ト改名ス。長年カ一族名和七郎ハ。謀有者ナレハ。自布五百端有ケルヲ旗ニコシラヘ。松ノ葉ヲ焼テ。煙ニフスヘ。近國ノ宮方并人ノ知タル武者ノ紋ヲ旗ニ書テ。此ノ木彼ノ峰ニソ立置ケル。此旗共峰ノ嵐ニ吹レテ陣々ニ翻。山中ニ大勢充滿シタルヤウニ見エケレハ。近處ノ軍勢。吾モ々々ト馳

着ル。同二十九日隱岐前司清高。同名佐渡前司千餘人。南北ヨリ押寄タリ。此城ハ大山ニ繼キ。三方地僻ニ。白雲腰ヲ廻レリ。俄ニ籠タル城ナレハ。堀ヲモハカシクホリエス。大木ヲ切倒シテ逆木ニヒキ。僧房ヲ破テカヒ楯ニカケル計也。寄手坂中マテ責上リタレハ。ハヤ近國ノ宮方馳進ミタリト見エタリ。家々旗ノ紋アマタ見エケレハ。此勢計ニテ不叶トヤ思ケン。佐々木佐渡前司ハ遙ノ麓ヘ引返シ。散々ニ落行ケル。清高ハ是ヲ不知。大手ノ城戸口マテ責入。時ウツルマテ戦ヒケル。城中ノ勢ハ敵ニ勢ノ分際ヲ見エシト。木陰ニカクレ。射手ヲ出シ遠矢ヲ射サセ。日ヲ暮ス處ニ。天曇リ風吹キ。大雨頻ニ降ル事車軸ノ如シ。雷ノ鳴コト夥シ。寄手是ニ恐レテ敢不進得。味方ハ是ニ力ヲ得テ。射手ヲ左右ニ進メテ。散々ニ射サセ。大山ノ崩ル如ク打テカ、ル間。清高カ勢カケ

マケ谷底エ皆マクリ落サレ。己カ太刀長刀ニ貫レテ。死ル者數ヲ不知。清高ハ辛キ命タスカリ小波ノ館ニ飯リ。大息ツキ居タリケルヲ。國人皆改リ御所方ニ成リ。館ニ火ヲカケ焼上ケル。味方ハ此火ヲ見テイサミ。長年父子(二カ)ニ百騎計。其夜ノ明方ニ押寄ケル。清高父子小舟一艘ニ取乘リ隱岐エ逃飯ル。長年ハ當國ノ守護代糟谷カ館エ押寄。責落テ卅騎計打取。亦小鴨ニ忠長カ有シヲ押寄テ打取ケル。其外國中軍勢悉ク馳參リケル。出雲守護ハ八木ト云所ニ有ケルカ不參。鹽治近江三郎高貞ハ。富田ニ有シカ。義綱ト相具シテ千餘騎ニテ可馳參ルヨシ。先立テ申上ル。同三月二日長年カ一族出雲隱岐ヨリ馳參ル。舍弟長義。同弟六郎行氏。同七郎貞高入道法名學妙。八郎高重。同十郎行泰。從弟孫三郎。同四郎助貞。同五郎惟村。同九郎行實。同十郎行義。内河兵衛入道念西。甥左

衛門尉義重。内河新三貞員。同四郎太郎泰近。土屋孫三郎宗重。同彦三郎。同彦五郎信貞。舍弟阿陀伽井小次郎長貞等吾モト馳參ル。同三月三日曲水ノ御祝有。長年ヲ伯耆守ニ被補ケル。亦長年カ嫡子彦太郎義高ハ。千劔破ノ寄手ニ加ハリ上洛シタリケル。(カ脱カ)父カ方ヨリ先立テ此由ヲ告ケタリケン。夜ヲ日ニ繼テ馳歸ル。同九日舟ノ上參着急キ御前ニ參リ。上方ノ軍ノ有様申上ケル。同年三月十三日除日被行。忠顯朝臣ハ左中將ニ任シ藏人頭ヲ兼玉フ。頭中將_厩申ケル。同十五日。忝モ主上御宸筆ノ御詠歌ヲ被遊。長年ニ給ハリケルコソ難有ケレ。

忘メヤヨルヘノ波ノ荒磯ヲ御舟ノ上ニ留シコ、ロハ

長年カ家ノ紋ニ帆カケ舟ヲ用ヒシモ。此時主上勅定ニ依テ也。去ル程ニ御方ヘ參ル人々ハ。

淺山二郎八百餘人。金持黨三百餘人。大山衆徒六百人。石見ニハ澤善四郎三角入道安藝熊谷小早川。美作ニ菅家江見芳賀澁谷南三郷。備後ニ江田廣澤宮入道三吉。備中ニ新見成合那須三村小坂河村庄眞壁。備前ニ今木大富和田範長知間藤井射越小島中吉和氣石生我々前々ト馳參リ。船上山四方麓二三里カ間陣取ケリ。抑此長年カ先祖ヲ委ク尋ルニ。村上天王第七王子中書王トキコヘシ具平親王御末也。彼親王御孫右大臣顯房。其子丹波守季房。其子忠房。伊勢ノ國ニ居住シテ誕生セシ子息。成人ノ後マテ啞者ニテ有ケレハ。在京モ不叶。但馬國ニ小野房ト號ス。其子小野惡七郎ハ。仁和寺ノ御室ノ御代官ヲ殺シテ御トカメ重カリケレハ伊勢國鈴賀山ニ入。強盜ヲ催シ。往來ノ人ヲナヤマシケルヲ。藤原ノ景綱ニ仰セテ召捕レテ。但州ニ被配流。其子忍ヒテ在京シテ行勝ト號

ス。山門ノ神輿入洛ノ時。忠節ヲ盡シ上頭下頭
兩郷ヲ給ハル。其子二方二郎三郎行秋ト云者。
後ニ櫻田ト改名ス。此人ノ代ニ承久兵亂有。但
州ヨリ御所方ニ參。宇治ノ合戰ニ忠ヲ盡シ。關
東ヨリ本領ノ上頭下頭兩郷ヲ沒收セラル。其
子山徒ノ惡僧ト成シカ。但馬ノ禪師行盛ト云。
伯耆長田ト云處ニ下向シテ後。アマタ息男ヲ
産。一男村上禪師太郎行高トテ。去ル元徳元年
三月。行年七十二歳逝去ス。行高ノ嫡子今ノ伯
耆守長年是也。或時主上仰セケルハ。汝カ祖父
二方二郎三郎。承久ノ亂ニ院方ニ候テ。忠功ヲ
盡シケレ。不運ニ不遂ヨシ聞召ス。其執心
ノ代々ニ殘リ。汝今朕カ味方ニ參リ。如此大功
ヲナス事。誠ニ一生ナラサル宿縁也ト。叡感有
テ念頃也。去程ニ三位局御渡海アル。頭大夫奉
相具。亦其頃京都ノ合戰。官軍毎ニ打負ヌト聞
ヘケレハ。サラハ大將ヲ差上セテ。赤松等ニ力

ヲ合セ。六波羅ヲセメラルヘシト。頭ノ中將忠
顯ヲ大將トシ。那和ノ義高ヲ指添ヘ。一千余騎
ニテ三月十七日船上ヲ立テ責上ル。主上合戰
勝負。天下ノ安危如何可有。宸襟ヲ被惱。皇居
ニ壇ヲ被立御身ツカラ一字金輪ノ法ヲ行ハセ
給フ。其七ケ日ニ滿スル三月廿一日夜。金色ノ
佛光明カクヤクトシテ。船ノ上ノ山上ニ現シ
ケル。諸人見之悉ク奉拜。御願忽ニ成就スヘシ
ト。主上モ憑シク被思召ケル。

舟上記終

續群書類從卷第五百七十四

合戰部四

異本伯耆卷

抑承久ノ亂ニ公家打負玉ヒシカハ。一院兩新
 院ヲ配流シ奉ル。中ニモ後鳥羽院ハ隱岐ノ國
 ヘ移シ奉リ。義時父子カ計ヒトシテ。一院ノ御
 兄守貞親王ノ御子ヲ御位ニ卽ケ奉ル。是ヲ後
 堀川院ト申ス。御在位十一年アリテ御子四條
 院ニ御位ヲ譲リ玉ヒ。廿三歳ニテカクレサセ
 玉フ。四條院ハ御諱秀仁。御母ハ攝政道家公
 ノ女ナリ。御在位十年アリテ俄ニ崩御アリケ
 リ。御歳十二歳ト聞エシ。御幼帝ナレハ王子モ
 不坐。御連枝ノ御子モナケレバ。皇胤已ニ絶タ

リ。如何セント諸人アキレテアリシカハ。外祖
 父攝政道家公ノ計ヒトシテ。順徳院ノ其比未
 タ佐渡ノ國ニマシテ。其御子アマタ都ニ留
 リ玉ヒシ。是モ道家公ノ御孫ナレハ。如何ニモ
 シテ天位ニ卽ケ奉ラント。頻リニ關東ヘ仰遣
 サレケリ。然リトイヘトモ關東ノ泰時カ計ヒ
 トシテ。土御門院第八ノ王子邦仁親王ヲ御卽
 位ナシ奉ル。後嵯峨院是也。此帝ハ承久兵亂ノ
 時二歳ニナラセ玉ヒケルヲ。御外戚ノ大納言
 通方卿取頼立申隱置奉リシカ。御年十八ノ御
 時通方身マカリシカハ。便ナク成リ玉ヒテ。御

母承明門院ノ御方ニ坐シケル。關東ノ兩使秋田城ノ介義景。二階堂出羽前司行義尋ネ參リ。草深キ御庭前ニ蹲テ。土御門院ノ第八ノ宮ノ御坐候ヤト尋ネ奉レハ。老尼ノ淺間敷ケナルカ立出。是ニ御坐候ト答ヘケレハ。兩使重テ御位ハ此宮ヘ參リ候ト高ラカニ申上ケケル。是ヲ聞召ケル宮ノ御心如何ニウレシク思召ケン。御所中ノ人々。是ハ如何ニト悅ヒ合ケリ。今マテハ參リ仕ル人モ稀レナリシカ。攝政殿ヲ初トシテ。公卿殿上人吾モト參リケリ。行義モ義景モアマタノ兵士ヲ召ツレ。扉破レタル御門ノ脇ニ唐笠ヲ立テ守護シ奉リケル。サシモ苔深キ御庭前。一日ノ中黒土ニ成リケルソ日出度。後鳥羽院ノ御孫アマタマシマシケル中ニ。此宮ヲ撰ヒ奉ル事ハ。父帝ノ承久兵亂ノ初ニモ。後鳥羽院ヘイロノイサメ被申。

御謀反ヲ申シ留メ奉ラントアリテ。頻リニ仰ラレケル事。後日ニ關東ヘ聞ヘケレハ。義時父子カ計ヒトノ。土御門院ヲハ京ニ其マ、ナタメ置奉シカモ。後鳥羽院順德院ノ遷幸アル上ハ。都ニ殘ラセ玉ヒテナニカセント。自ラ阿波國ヘ移ラセ玉ヒケル。カヤウノ事ヲ哀ミ奉リ。其上御嫡流ニテカノ皇子ノ御心ハヘモヲタシク。孝行深ク聞エサセ給ヒシカハ。カク計ヒ申ケリ。カクテ御在位四ケ年アリテ。皇太子ノ四歲ニテ御坐ヲ御位ニ即ケ奉リ。院中ニテ御政務二十六ケ年アリテ。文永九年二月十七日ニ五十歲ニテ崩御アリケリ。其次ニ後深草院。諱ハ久仁。後嵯峨ノ太子ニテ坐シ。御母ハ大宮院御在位十三年アリテ。御弟ノ龜山院ニ御位ヲ讓リ申サセ玉フ。后腹ノ皇子ニ坐シケレハ御位ヲモ讓リ坐スヘキニ。此皇子イトケナク御坐シ時ヨリ。御病人ニテマシケレハ。

後嵯峨院ノ御計ヒニテ。龜山院御即位アリケリ。彼ノ帝ハ勝レテ父御門ニ孝行ニマシク。御心モ直ナリケレハ。世々ノ末マテ龜山ノ御末ヲ繼體ニコソト。後嵯峨院ハ思召ケル。サレハ龜山ノ帝ノ后腹ニ二歳ニ成玉フ皇子坐シケルヲ。後嵯峨院取頼申サセ玉ヒ。イツシカ皇太子ニ立被申ケル。後宇多院是也後深草ノ帝ノ太子四歳ニナラセ玉ヒケレトモ。御祖父法皇如何ニ思召ケン。引越被申東宮ニ立テ被申ケル。カクテ後嵯峨院隱サセ玉ヒテ後ニ。後深草上皇モ坐シケレハ。後嵯峨院ノ御遺勅ニテ。禁中ニテ御政務アリキ。文永十一年甲戌年三月。イ元後宇多院ニ御位ヲ讓リ被申ケリ。サレハ後嵯峨院ハ繼體ヲハ龜山院ノ御末ニト思召ナリケレハ。關東ニモ此赴ヲハ知リ奉リ。此ノ御末葉コソ正統ヲ受サセ玉フヘシト思ヒケレトモ。其時ノ

執權相摸守時宗慮リ有テ。世ヲ疑フ心深ク。皇統ヲ兩流ニ分チ奉リ。替リク御即位アルヤウニ定メ計ヒ申シケレハ。是非ナク關東ノ望ニマカセ今度ノ皇太子ニハ後深草院第一ノ皇子伏見院。其比ハ熙仁親王ト申シケルヲ春宮ニソ立タセ玉ヒケル。イ元此後宇多ノ御宇。辛巳ノ年。蒙古國ヨリ多ノ船ヲソロヘテ攻來テ。筑紫ニテ合戰アリキ。神明威ヲアラハシ。形ヲ現シテ大風ヲ發サモ玉ヒ。數万艘、賊船皆潦倒破滅シケルコソ目出度ケレ。此ノ天皇ノ御治世十三年アリテ後ニ東宮御即位アル。是ヲ伏見院ト申ス。是ハ後深草ノ太子ニテ坐。御治世十一年アリテ。皇太子後伏見院ヘ御讓國アリキ。カヤウニ兩流ヨリ替々御即位アルヤウニト定メ申シケルハ。若シ禁中ヨリ關東ヘ御謀反アラハ。一方ヲ奉仰ヘキトノ奥意也ト聞エ

シ。後伏見院御治世三年アリテ。後二條院へ御位ヲ渡シ申サル。是ハ後宇多ノ太子ニテ。後醍醐ノ御兄ナリ。天下ヲ治玉フ事六年アリテ。廿六歳ニテ崩御アリ。父ノ帝御歎アリテ御出家アリテ。嵯峨ノ奥大覺寺ト云所ニ引コモラセ玉ヒ。御寺ヲ被立。行ヒスマシテ坐シマス。戒律ヲ保タセ玉ヒ。大阿闍梨ヲヘサセ玉フ。難有法皇ニテ御坐マシキ。二條院ノ次ニハ伏見院第三ノ皇子花園院御即位アル。是ヲ後ニハ萩原院トモ申ス。御治世十一年アリテ御位ヲ後醍醐天皇ヘ渡シ御申シアル。御讓位イカヤウニ代々兩院打カヘ御即位アリキ。

其比關東ノ將軍ハ守邦親王。執權ハ相模守高時也。文保二年戊午三月廿九日。後醍醐院御即位。天皇イ此君ハ御若年ノ昔シヨリ稽古ノ聞エ御坐シ。三皇五帝ノ道ヲ學ヒ。諸道ノ廢タルヲ興シ玉ヒ。イ元宏才博覽ニマシテ。佛法ヘモ御志深

ク禪助大僧正ヲ師トシテ宗ト眞言ノ法ヲ學ハセ玉フ。後ニハ御灌頂ヲ遂ラレ。印可ヲモ受サセ給ヒケル。其外ニ諸宗ヲ尋サセ玉ヒ。亦禪法ヲモ常ニ學ハセ玉ヒキ。ヒイサレハ和漢ノ賢キ道ニ明ナル事中古以來ハ稀ナル御事也。カヤウノ御器量兼テ知シ食ケレハニヤ。龜山法皇ハ此君ノ御即位ノ御祈念トシテ。八幡宮ニ御願書ヲ納メサセ玉キトナリ。去ル正安三年後伏見院御讓國ノ時モ。父帝後宇多院モ此君ヲ御位ニ即申サント思食ケレトモ。第一ノ皇子ニテ捨テカタク思食。後二條院御即位アリキ。サレハ父帝ノ御志不淺シテ。ラレイ御元服ノ時村上天皇ノ例ニマカセ。太宰ノ帥ニ任セラレ。帥ノ宮ト申シケル。後ニハ中務卿ヲ兼サセ給。中書王トモ申ケル。後二條院世ヲ早フセ。玉ヒテ。儲君ヲ定メ被申ケル御時。二條院ノ御子邦良親

王ヲ太子ニ立奉ルヘキト定メ被申シカ。邦良親王鶴膝ノ御病アリテ。御命モ危ク見エサセ玉ヒシカハ。後宇多院此帝ノイマタ尊治親王ト申ケル時。皇太子ニ立セ御坐シキ。邦良親王ヲハ。此帝ノ御猶子トシテ傳ヘサセ玉フヘシ。若シ親王ノ御病重クマシ。御早世有ラハ。此帝ノ御末繼體タルヘシト定置カセ玉ヒケル。後宇多院ヨリ御政務ヲ讓リ申サセ給ヒシカハ。後三條院ノ延久ノ例ニナソラヘ。記錄所ヲ建ラレ。直ニ出御成テ訴^{有イ}ヲ聞召。理非ヲ決斷セラレシカハ。誠ニ理世安民ノ基。公家ノ故^{イヘ}ノ御政道ニ歸ルヘキ世ニコソト。高モ賤モカネテ歡ヒモテナシ申ケル。去ル應長元年ニ。關東ノ執權相摸守貞時逝去セシカハ。息男高時若年ナレハトテ。其間大佛宗宣熙時等加判シテ執權ノ司ニ代テ天下ノ下知ヲ成ス。正和五年高時十四歳ニテ執權ノ職ニ居テ。文保元年

三月ニ相摸守ニ任シケル。貞時最後ノ時。長崎入道圓喜。并秋田城介時顯等ニ後見ヲ申シ置ケレハ。兩人政務ニ代リテ。代々ノ掟ノマ、ニ行ヒケレハ。如形無爲ニ治マリケル。然シテ^{イ元}後圓喜入道老耄シテ。子息新左衛門尉高資ニ政道輔佐ノ職ヲユツル。高時ハ代々ニ替リテ惡主也。高資亦是ニ相雙テ惡人也シカハ。恣ニ^{ナ極メイ}オコリ。民ノ弊ヲ不思。政道不正ノ人ノ恨ミノ積リケル程ニ。万人ノ歎キ無申計。關東ノ運命此時盡果ヘキ瑞相ニコソト人申シケル。果ノ其比當今ノ寵臣別當中納言資朝。右少辨俊基等帝ヲ進メ奉リ。此時武家ヲ亡サント謀反ノ企アリ。此時元亨二年中宮ノ御懷妊ノ御祈禱トシテ。諸寺諸山ノ貴僧高僧ニ仰セテ大法秘法ヲ修ラル、其中ニモ。法勝寺圓觀上人。小野文觀僧正二人ハ。大内ニ壇ヲ構ヘ。肝膽ヲ碎テ祈リケル。カヤウニ數日ノ精誠ヲ盡テ

祈リケレ^{御産ノイ}。三年マテ・御沙汰ハナカリケリ。

後ニ子細ヲ尋ヌレハ。關東調伏ノ爲ニ事ヲ中宮ノ御産ニ寄テ。大秘法ヲ盡サレケル。怨敵退散ノ法ニ被修コト其例アマタアリトイヘ^{餘多イ}。

中ニモ此君眞言ノ法ヲ專ト御信用アリテ御勤メ有リケル故ニ。一入カヤウノ御祈禱モアリケルト聞エシ。正中元年六月。後宇多法皇御年

五十八ニテ崩御ナル^ア。此比東宮邦良親王ニ侍ル人々。内々關東ヘ使ヲ遣サレテ。當今ノ御位ヲ改メ奉リ。邦良親王^東御即位ナシ可奉由

高時方ヘ仰遣シケリ。高時^{モイ}・高資等モ此東宮ヲ最負

ヒイキシ奉リ。内々ハ御位ヲ可奉改由評定スル由聞エケル。カ、リシカハ當今ノ近臣日野

中納言資朝。藏人右小辨俊基。源中納言具行以下事已ニ急也トテ。便宜ノ武士ヲ語ヒケリ。美濃國住人士岐伯耆十郎賴藤關東ノ丹治比四郎

次郎國長等ヲ軍ノ大將ノ爲ニ催サル。則兩人カ進メニヨリ。足助二郎。小笠原孫六。土岐左近藏人。錦織飛彈守父子是ニ與力シ。處々ノ兵ヲ招キケル。其外山門南都ノ衆徒少々同心ス。然リトイヘトモ小勢ニテ如何カトタメラヒケル。折節左近藏人賴春ハ。六波羅ノ奉行人齋藤太郎左衛門尉利行カ聲ナリケレハ。賴春沈醉ノマキレニ此事ヲ妻女ニヤ知セケン。カノ女父カ許ニ行ヒソカニ夫ノ企ヲ父利行ニ語リケリ。利行大ニ騷^{騷イ}キテ賴春ヲ呼テ大ニ忿リ。カ、ル大事ニクミシスル事。以ノ外ノ大事ナリ。急^イキニ事ノ漏レヌ先ニ。六波羅殿ニ可被申トイサメケレハ。賴春忽ニ心變シテ。舅ト一味シテ六波羅駿河守範貞ノ館ヘ行。此事ハカク候彼企トコソ候ト返忠シテ。吾カ身ハ無罪モノニ成ニケリ。範貞大キニ驚キ。此由關東ヘ早馬ヲ立テ。扱京中ノ武士トモヲ六波羅ヘ召集テ。

先着到ヲ付ラレケリ。其比攝津國葛葉ト云處ノ百姓代官ヲ背テ合戰ニ及事アリ。是ヲ退治ノ爲ニ四十八ヶ所ノ篝火^{チ焼}・并在京人ヲ催サルル由被披露。是ハ謀反人ヲ落サントナリ。土岐ヲ初トシテ。吾カ身ノ上トハ思ヒモヨラス。明日ハ葛葉ヘ向フヘキ用意シテ。宿所ニ居ダリケルニ。正中元年甲子九月十九日卯刻計ニ。山本九郎時綱ハ土岐カ討手ヲ承ル。小串三郎左衛門範行ハ。丹治比カ討手ニ向ヒケル。六條河原ヨリ二手ニ分リ。錦小路。高倉。三條。堀河兩方ニテ合戰ス。土岐十郎不叶トヤ思ヒケン。自害シ。郎等凡皆切死ニ死ニケリ。丹治比ハ一族若黨二十餘人物具シテ。門ヲ開キ切テ出。大勢ヲ追マクリ。火出ル程戰ケル間。カラメテヨリ在家ヲ打破リ亂入ケル間不叶。是モ自害シテ死ニケリ。是ハ別當資朝。右少辨俊基ノ勅定ノ由ニテ謀反ヲ起サセ^レ彼等ヲ催サル、由聞エ

ケレハ。明ル正中二年乙丑五月十日。長崎四郎左衛門泰光。南條次郎左衛門宗直二人上洛シテ。資朝俊基兩人ヲ召捕テ鎌倉ヘ下向ス。此上ニ又何ナル沙汰ヲカイタサンスラント。君モ叡慮ヲ被惱テ。相摸入道カイカリヲ靜ン爲ニ。万里ノ小路大納言宣房卿ヲ勅使トシテ。一紙ノ告文ヲ關東ヘ下サレタリ。相摸入道秋田城介ヲ以テ告文ヲ請取。披見セントシケルヲ。二階堂出羽入道道蘊カタク諫。天子武家ニ對ノ。直ニ告文ヲ被下タル事未タ其例ヲ承ラス。只文箱ヲ不啓ノ返進セラルヘキト再往申シケルヲ。相摸入道何カ苦シカルヘキトテ。齋藤利行ニ讀セケルニ。俄ニ^{イ元}日眩テ讀ハテスノ退出ノ血ヲ吐テ死ニケリ。是ヲ聞ケル人毎ニ懼恐セヌハ無リケリ。何様資朝俊基勅定ニヨリ隱謀ノ企アリ。告文ヲ下サレタリト云トモ。主上ヲハ遠島ニ遷シ^ヘ奉ルヘシト評定一結シケレト

モ。利行俄ニ血ヲ吐テ死ニケルニオトロキ。舌ヲ卷キ口ヲ閉ヌ。亦資朝俊基モ今度ノ隱謀夢夢關東ノ御事ニアラス。東宮ノ御位ヲ申進ル人々ニ。恨ヲ報セン爲ニ催兵由陳シ被申ケレハ。俊基ハ赦免セラレ。別當資朝卿ハ佐渡ノ國へ被配流。亦君ノ御治世ノ事ハ朝義義イニ任セ奉ル上ハ。武家綺イヒ申ヘキニ非スト勅答申シ。告文ヲ返進シ奉ル。是ニヨリテ洛中シハラク靜リ。群臣色ヲ直シケリ。カ、ル浮世ノ有サマヲ見テ。行末トテモアシキナクヤ思ハレケン。此君ノ寵臣花山院大納言ハ官ヲ辭シテ北長尾山ト云處ニ引籠リ。閑居シテ居玉ヒケルカ。京ニオハシケル春宮大夫師兼ノ許ヘカクソ詠メテ送リケル。

師賢

更ニ又住佗ル身ヲ歎コン捨テモ同シ浮世成ケリ

返シ

春宮大夫師兼

更ニ又歎クトキケハカクハカリイトハシキ世モ捨ソワツラフ

其年嘉暦元年東宮邦良親王御早世アリ。御繼體ハ當今ノ皇子ニ定リ御坐マスヘキニ。關東ノトモカラ後伏見院イ・第一ノ皇子量仁親王ヲ皇太子ニ立申シケレ。當今ノ近臣具行・成輔等彌安カラヌ事ニ思ヒテ。亦思立事アリケリ。同年三月十三日。相州高時重病ニ犯サレ執權ヲ辭退シ出家セラル。法名ハ崇鑑ト號ス。長崎新左衛門高資カ計ヒトシテ。一家ノ宿老其仁ニ當リケレハトテ。金澤修理大夫貞顯ヲ執權ノ職ニ居テ政道ヲ司ル。カ、リケル處ニ。高時ノ舍弟左近大夫將監泰家若年タリトイヘトモ。一家ノ嫡流ナレハ。サリトモ思ヒシニ。貞顯ニ超ラレ。述懷泰イノ忽ニ出家ス。法名慧性ト號ス。是ヲ見テ本家ニ日比イ无ノ親シミケトモカラ。十七

八廿歲計ノ若キ者。鎌倉中ニ百餘人一度ニ皆出家ス。貞顯モ是ヲ聞テ苦々布ヤ思ヒケン。是モ無程執權ヲ辭退シテ出家ス。法名崇顯ト號ス。此上ハ力不及シテ。同四月廿四日赤橋相摸守時ト修理權大夫惟貞ト兩人ヲ撰出シテ。兩人加判シテ守時ヲシハラク執權ノ職ニ居ラレケリ。同二年ノ夏ノ比。奥州津輕ノ住人安東又太郎秀長。同郎從秀兼ト。同又三郎ト云者。所領ノ事ヲ論スル子細アリ。兩方訴ヘケルニ。高資賄賂ニフケリ。理アルヲ非トシテ惡サマニ下知シケレハ。兩方下知ヲ背。及合戰コトアリ。已ニ鎌倉ノ掟ニカ、ハラサリケレハ。打手ヲ指遣シケレトモ城ニ籠リテ已ニ御大事ニ及ヒケル。承久亂ヨリ久ク治リ。關東ヲ背ク者ナカリシニ。世末ニ成行武威輕ク成テカ、ル亂モ出來ケリ。則常陸國住人小田尾張守多勢ニテ馳下リ。安東兄弟ヲ討取ケリ。此安東

ト云ハ。義時カ代ニ夷嶋ノ押トシテ。安藤カ二男ヲ津輕ニ置ケル。彼等カ末葉也。カクテ長崎新左衛門高資。驕ノアマリニ諸人ニウトマレ。内々讒言モ多カリケレハ。高時モカレカ振舞ヲ奇怪ニ思ヒ。ヒソカニ長崎ノ三郎左衛門尉高顯ニ申合テ。高資ヲ可被誅由ヲ謀ラレケル。高資カ權勢ニ阿ネリ。返忠ノ者ヤアリケン。此企忽ニアラハレケレハ。高時ハ夢ニモ不知之。高顯カ企ナリト再三陳シケレハ。扱テハ子細ナシトテ高資ハ靜リ。高顯ヲハ奥州ヘ配流ス。カヤウニ關東ノサワカシキ折ヲ得テ。又申進ムル人アリケレハ思食立ケル。元德二年三月十八日。東大寺興福寺ヘ行幸アリ。代々ノ帝皆結縁ノ御志ハアリケレ。行幸ノ義モナカリシニ。此御時ニ鳳輦ヲ廻サレケレハ。南都ノ衆徒皆喜ヒ掌ヲ合セケリ。同廿七日亦比叡山ニ行幸アリ。是ハ大講堂大破ニ及ヒシヲ修造セ

ラレ。御供養ノ爲ナリト聞エシ。今君臣愁ヲ吞。天下安キ時ナキ折節。カ、ル大法會ヲ被遂コト何事ニヤト尋スルニ。關東ノ惡逆日來ニ超過シケレ^レ。武士共ハ關東ニ順ヒ勅定ニ難應。山門南都ノ衆徒ヲ賴ミ玉ハン爲ノ御謀コトト聞エシ。當坐主尊雲法親王ハ佛法ニハ御心ヲ寄セ^{ラレ}。只武藝ヲ好マセ玉ヒ。早業ノ兵法荒馬乘リ。日夜朝暮ニ盡サセ玉ヒケル。元德二年七月廿一日。左近將監時益。六波羅ニ被補上洛シテ越前守貞將ニ替ル。同十一月越後守仲時上洛シテ。駿河守範貞ニ代テ京都ノ成敗ヲ司ル。貞將範貞堅ク辭シ申ケルニ依テナリ。此比東宮ノ御方ニ侍ル人々。如何ニモシテ當今ノ御位ヲ改メ申シ。御卽位モアレカシトヤ思ヒケン。大塔宮ノ御行跡南都北嶺行幸ノ事。禁中ノ調伏法ノ有様。一々關東ヘ告ケ被申ケレハ。相州大ニ驚。トカク此君御在位ノ

程。御謀反靜ルマシ。當今ヲ遠國ニ移シ奉。尊雲親王ヲ死罪ニ處シ申。先年當家ヲ調伏^元セシ僧達ヲ召捕テ子細ヲ尋問ハントテ。二階堂下野判官行春。長井遠江守高廣二人上洛シテ。同年^イ五月十一日法勝寺圓觀上人。小野文觀僧正。淨土寺忠圓僧正等ヲ召捕リ。六波羅ヘ引テ參ル。同六月八日關東ヘ下向シ。同廿四日鎌倉ニ下着シ。カノ祈念ノ本尊并爐壇ノ跡ヲ畫圖ニ寫テ關東ノ一族ニ佐佐目ノ賴禪僧正ト云人ヲ請テ被見ケレハ。ウタカヒモナキ調伏ノ法ナリト申ス。サラハ噉問セヨトテ文觀忠圓ヲ水問シケレハ。俊基カ隱謀山門南都ノ衆徒ヲ語ハレシ事。白狀一卷ニ註シケリ。サラハ俊基ヲ召捕ルヘキヨシ早馬ヲ以テ被申ケル。同七月十一日俊基朝臣又六波羅ヘ召捕ラレ。關東ヘ下向ス。同廿六日鎌倉ニ下着ス。頓テ葛原岡ト云所ニテ被誅ケリ。別當資朝モ同罪、六ナ

レハトテ。佐渡守護人本間山城守承テ。彼國
ニテ被誅。元弘元年八月東使二人三千餘騎ニ
テ上洛ストキコエシカハ。何事トハ知ラス京
ニ又何ナル事ヤ有ランスラント。近國ノ軍勢
我モノト馳集。京中騒動不斜。花山院大納言
師賢ハ。山莊ニ閉籠リケルカ。是ヲ聞テ急キ都
へ出ラレシカ。一首ハカクソ聞エケル

思カネ入ニシ山ヲ立出テ、マヨフ浮世モ唯
君ノタメ

同八月廿四日ノ戌ノ刻。大塔宮ヨリ御使ヲ以
テ申サセ給ヒケルハ。今度東使上洛ノ事内々
皇居ヲ遠島ニ遷シ奉リ。尊雲ヲ死罪ニ行ン爲
ニテ候ナリ。今夜急キ南都ノ方へ御忍ヒ候ヘ
シ。城郭未調官軍集ラサル先ニ敵寄來ラハ。
御方防戰難叶。且ハ京勢ヲ遮リ止ン爲。又衆徒
ノ心ヲ見ン爲ニ近臣一人天子ノ號ヲ許サレ。
山門へ被^{登イ}上臨幸ノ由披露アラハ。凶徒定テ山

門ニ向テ合戰ヲ致シ候ヘシ。衆徒吾山ヲ惜故^{イ无}
ニ防戰候ヘシ。敵軍疲レ合戰ニ日ヲ送ラハ伊
賀。伊勢。大和。河内ノ官軍ヲ以テ京都ヲ被攻
候ハ。凶徒退治踵ヲ不可回ト申サレケレハ。主
上實モト思食。女房車ニ召サセラレ。三種ノ神
器ヲ乘奉リ。夜ニマキレ・出御ナル。万里小路
中納言藤房供奉セラル。中宮ハ野ノ宮へ行啓^{アイ}
ナル。御供ニハ宰相季房參ラル。主上三條川
原マテ出御アリケレハ。源中納言具行。按察大
納言公敏。禪林寺少將忠顯追付被申。爰ヨリ與
ニ召替。南都ヲ指シテ行幸ナル。同廿六日鷲峰
山へ入セ玉ヒ。同廿七日笠置ノ石室へ行幸ナ
ル。尹ノ大納言師賢ハ。三條河原マテ供奉セラ
レケルカ。行幸ノヨシニテ山門へ上リ。衆徒ノ
心ヲ伺ヒテ勢ヲ付テ後詰ヲモ致セトテ。袞龍
ノ御衣ヲ着シ瑤輿ニ乘リテ山門へ上ラル。
四條中納言隆資。二條中納^{將イ}爲明。中院左中將定

平。衣冠正ノ供奉ノ鉢ニテ參ラレケリ。西堂ノ釋迦堂ヲ皇居ト被成。此由披露アリケレハ。山

本歟

上坂本。大津。松本。仰本。絹河。和仁。堅田ノ者其不殘馳參。其勢雲霞ノ如シト聞エタリケル。

六波羅ニハ是ニ騷キ。大勢ノツカヌ。前ニ山門ヲ攻ヨトテ。四十八ヶ所ノ箒ニ畿内ノ勢ヲ合。

五千餘騎追手ノ寄手トシ赤山ノ麓ハ發向ス。

東イ

佐々木三郎判官。海道左近將監。長井丹後守。

波多野上野介。小田常陸前司七千餘騎。大津。

松本。唐崎濱ヘ馳向フ。搦手ヨリ戰初リ寄手

打負。海東左近將監父子ヲ初トシテ。佐々木カ

郎從數多討死シテ。白晝ニ京ヘ引返ス。山門ノ

大衆初度ノ戰ニ打勝テ大ニ喜ヒケル。爰ニ西

塔ヲ皇居ニ被定條本院面目無シ。急キ臨幸ヲ

本院ヘ可奉成トテ。衆徒御迎ニ參リケル。折

節山風嵐イニテ御簾ヲ吹上タルヨリ見奉レハ。主

賢イ

龍御イ

上ニハオハシマサス。師尹卿ノ衰衣ヲ着シタ

ル也。大衆コレヲ見テ何ナル天狗ノ所行ソヤ

ト興ヲサマス。シイ其後ハ參ル大衆一人モナシ。角

テハ惡カリナント。其夜尹ノ大納言并師賢イ隆

資爲明忍テ山門ヲ落テ野山ニ隱テ笠置ノ御所

ヘ尋ネ參ラル。路ニテ師賢卿

古ハ露分カネシ虫ノ音ヲ尋ネヌ草ノ枕ニソ

キク

同九月二日。六波羅勢笠置ノ城ヘ發向ス。九月

二日卯刻合戰。寄手敗軍シ。荒尾九郎以下多以

討死ス。九月廿日春宮量仁親王持明院踐祚有ル。

陸奥守イ

治部大輔イ

同廿七日東國ノ大將大佛眞直。足利・高氏。相

摸守基時入道以下。笠置爲退治發向ス。未タ京

着セサル以前ニ。河内國住人楠木兵衛尉正成

御所方ト成テ赤坂山ト云所ニ城郭ヲ構ヘ楯籠

入道イ

ル。又備後國住人櫻山四郎・御所方ト成。一宮

ヲ城郭トシテ楯籠ル。爰ニ笠置ノ寄手ノ中ニ

陶山藤三。小見山次郎等。後ノ嶮岨ヨリシノ
キ皇居ヲ夜打^{討イ}ニス。官軍忽ニ敗北シテ。宗徒兵
ニハ近江源氏錦織飛彈守義繼。同息判官代義
右以下十三人討死ス。先皇ハ御沒落。山城國
多賀郡ニカクレサセ玉フ。深須入道是ヲ尋出
シ奉ル^{リイ}。則南都ノ内山ヘ入御ナル。宮々供奉ノ
卿相雲客同是ヲ生捕中。同十月十三日六波羅
ヘ御移リ有ル。同^{十イ}・九日三種神器ヲ新帝ヘ奉
渡。堀川大納言具親。日野中納言資名是請取奉
ル。同^{廿殿}十三日新帝ハ登極ノ由ニテ長講堂ヨリ
内裏ヘ行幸。亦河内國楠木カ城沒落。備中國櫻
山入道自害シ。先帝供奉ノ月卿雲客。或ハ被留
位。或ハ被解官職。或被誅。或ハ被配流。源中
納言具行。平宰相成輔ハ被誅。中納言藤房ハ常
陸國土浦ヘ配流。花山院大納言師賢下總國千
葉ヘ配流。按察大納言公敏ハ上總國ヘ配流也。

元弘二年三月七日先皇奉遷隱岐國。同八日一
宮尊良親王ハ土佐國畑ヘ奉流。佐々木三郎判
官時信路次ノ御警固ニ參ル。其夜ハ攝津國打
出ノ濱ニ^泊ト、マリラセ給フ。御供ニ參リシ二
條中納言爲明^{將イ}。明日妙法院ノ宮讃州ヘ御下向
有ヘシ。此宿ニコソ御旅宿アランスラント思
ヒヤリテ。

イトセメテ浮人ヤリノ道ナカラ同シヤトリ

ト聞ソ嬉シキ

ト書付^{置イ}ケリ。

^{イ元}

同八日妙法院二品尊澄法親王ハ

讃岐國ヘ奉配流。路次ノ御警固ニハ長井左近
大夫將監高廣守護シ奉ル。是亦打出ノ濱ノ昨
日一宮ノ御宿リアリシ旅宿ニ其夜ハ留メ奉
ル。昨日爲明ノ書付シ歌御覽アリテ。同御歌ヲ
書付サセ玉フ。

末マテモ同シヤトリノ道ナラハ我イキウシ

ト思ハマシカハ

同第四宮聖護院宮ハ但馬ノ國ヘ流奉ル。大覺寺ノ宮ハ越中國ヘ流奉リ。其國ノ守護代名越兵庫助奉守護。又末ノ御子恒良親王ハ十一歳。成良親王ハ八歳。其御弟ハ五歳ノ宮。是ハ後二後村上院ト申宮何レモ同御腹ナリ。未御幼稚ニ御坐ハトテ。カタ様ノ公卿ニ一人ツ、被預テ。都ノ内ニ御坐ス。八歳宮父御門ノ御事ヲ歎カセ玉ヒテ。ツク／＼ト思慕シテ入逢ノ鐘ヲ聞ニモ君ンコヒシキトアンハサレケリ。アハレニヤサシキ御事ナリ。

元弘二年三月七日。先帝ヲ後鳥羽院ノ例ニマ

奉ノ人々

カセ。隱岐國ヘ遷シ奉リ。御供ニハ一條頭大

六條

夫行房。禪林寺ノ少將忠顯。御介惜ニハ三位局

ト官女二人。御下部ニ金吾トテサカ／＼シヤ

者アリ。又關東ノ住人成シカ。近年所領ニモハ

ナレテ。久シク在京シテ有リシ成田小三郎ト

云田舍武者アリ。醫法ヲ知リタル由申。笠置ノ

皇居ヨリ雜色ノ躰ニテ召仕ハレシカ此度人夫

男ノ走下部ニナリ。隱岐國ヘモ下リケル。扱路

次ノ御警固ニハ千葉介。小山五郎左衛門佐々

木佐渡守定宗。五百餘騎前後打圍奉リテ。七條

(高氏カ)

ヲ西ヘ。東ノ洞院ヲ下ヘ御幸ナル。都ヲ御出

アリテ十三日ト申。出雲國見尾ノ湊ニ着セ

給ヒ。爰ヨリ順風ヲ得テ御渡海ヲナサレ。卯月

廿一日ニ三尾カ關ヨリ遷シ申シ。隱岐前司清

高奉請取テ國分寺ニ入奉リ。キヒシク奉守護

伯者。隱岐。出雲。三ヶ國ノ武士共御警固ニ參

リ集ル。又都ニテ中宮ト申ハ。西園寺相國公實
ノ女ニテ第一ノ后也ケル。此君流サレサセ玉
ヒテ後ハ。帝ノ御女中宮ノ御腹ニテ齋宮ニ立
セ玉ヒ。野ノ宮ニ移セ玉ヒケレハ。中宮モ同野
ノ宮移ラセ玉フ。近臣ノ中納言具行ハ。同六月
十九日江州柏原ト云所ニテ。佐渡判官入道高
氏カ承リテ打之。カヤウノ事_モ都ヨリ便モナ
ケレハ。先帝聞召事モナシ。サレハ宮々ノ御
行衛亦ハ御供ニ參リ笠置ニテトラハレシ卿上
雲客ノ人々如何成ケント朝暮キカマホシク思
召テケル。カクテ其年モ暮。明ル正月ニ成シカ
ハ隱岐前司清高ハ皇居ノ守護ヲハ近國ノ武士
_モニ申付。出雲國ヘ歸リケル。先帝御ナケキ有
ケルハ。昔シ承久兵亂ノ時後鳥羽院此國ニ御
坐有ケル時。刑部僧正御弟子淡路法印ト云人
深ク哀ミ奉リ。毎度御使奉リ都_{京イ}ノ事トモ聞召
ケル。昔シ御恩ヲ深ク蒙リシ公卿殿上人御文

計奉リ。終ニ御使ヲモ不奉リケレハ。
問レテモウレシクモナシ此海ヲ渡ラヌ人ノ
ナケノ情ハ
トアソハサレケル_{ッイ}。御恨ノ御歌トカタリツタ
ヘタリ。昔ハカクモ有リシニ。今ハイカニ都ヨ
リ御文タニ奉ル者ノナキヤラント御ナケキ限
リナシ。同二月ノ初ツカタ。成田小三郎アマリ
ニ御イタハシクテ。國分寺ノ僧ヲカタラヒテ。
御守護ノ武士ノ中。伯耆國那波庄住人。源小太
郎長高カ舍弟惡四郎泰長ヲ招キテ。都ノ事ヲ
尋ケル。泰長語リケルハ。君ハ未タ知シ召ルマ
シ。楠正成ハ御所方ニテ金剛山城ニ楯籠リ。東
國勢廿万騎ニテ攻候。城剛テ寄手已ニ討負ト
聞エ候。又備前ニハ伊東大和二郎三石城ニ楯
籠リ。山陽道ヲ差塞ク。播州住人赤松ハ大塔宮
ヨリ令旨ヲ給。攝津マテ責上ル。四國ニハ河野
一族土居二郎得能彌三郎味方ニ成リ河野ヲ背

テ旗ヲ舉ケレハ。河野ハ在京候間。中國探題北條時直小島ヨリ押渡リ合戰シ悉打負行方モ不知落行ケレハ。四國皆土居ニ付。既ニ打立是ヘ御迎ニ參ルモ申ス。御運已ニ開カセ玉フヘシ。アハレ此時分君ヲトリ奉リ。義兵ヲ起サハヤト存候。此赴ヲ達上聞サセ玉ヘト語リケレハ。成田アマリノ嬉サニム子オトリテ不及返答。則チ近クヨリ小聲ニ成リ。イサ、ラハ今夜此赴ヲ披露可申。然ラハ吾君^{ワキミ}カ今夜ノ當番コソ幸ナレ。奉咫尺龍顏如何ニモ計ヒ玉ヘト申シケレハ。惡四郎子細候ハシト領掌シテ御前ニ參ル。先帝大ニ御感有テ。先汝カ一族可然者アラハ語ヒテ義兵ヲ起シ御迎ニ參リ何國ニテモ要害ヨカラン處ニ皇居ヲ移シ奉レカシ。聖運開カレハ。恩賞ハ可依請ニ勅定有ケレハ。惡四郎畏リ謀リ申シケルハ。先ス己カ本國伯耆國舟上ハ無雙ノ城郭ニテ候。兄ニテ候小太郎長

高ハキハメテヲコノモノニテ候間。大將ニ賴ヨシ勅定アラハ。身ニ取テノ面目ト悅ヒ候テ。早々味方ニ參リ候ヘシ。然レモ先ツ出雲ノ國中ヲ味方ニ被成。隱岐前司御追討ナクハ如何ト存候。彼國富田ノ住人鹽治三郎高貞ヲ御賴ミ。如何ニモシテ出雲國ヘ御坐ヲ移シ奉ルヘキノ謀コソ第一ニ候ヘ。當番ニ候富士名三郎義綱ト云者。高貞カ一族ニテ候ヘ。カタラヒテ見候ハント申テ。次ノ日ニ頓テ義綱ヲ招キ。六波羅ノ事モ申出シ。金剛山四國ノ合戰ヲモ語リケル。義綱モ此時分謀反ヲ起シ。此君ヲ取奉ラハヤト心ニ思ヒ。同心ノ族ヲウカ、ヒ尋ケル折ナレハ。小聲ニ成リ如何思玉フ。我等カ當番ニ此君ヲ落シ奉リ。大功ヲ成シ恩賞ヲ蒙ラントコソ存候ト云ケレハ。惡四郎手ヲ拍テ我等モ其様ニ參テ候トテ頓テ義綱ヲ御前ニ相具シ參リケレハ。御盃ヲ被下^{ヒタス}ラ御賴ミア

ルヨシ勅定ナリ。惡四郎・泰長イハ閏二月廿日早天ニ御暇ヲ申。役所ヲ立テ出雲ヘ押渡リ。伯耆ヘヤ通ルヘキ。鹽治判官・高貞イヲヤ語フト案シケルカ。先高貞ヲ語テミント思ヒ。高貞カ方ヘイ行ケルヲ高貞ハ天下未タ兩方ノ勝負・何共イ落着ナカリシカハ。一圓領堂セスシテ。惡四郎ヲ追出シケレハ。急キ伯耆ヘ歸ラント通リケル處ニ。其比六波羅ヨリ國司并隱岐前司カ方ヘ逆徒若差チカヤウテ。先帝ヲ奉奪取事モコンアレ。能々警固仕リ。アヤシキ者ヲハカラメ取ヘキ由被下知ケレハ。大社ノ國曹ト云神人コレニ同心泰長イノ國中ニアヤシキ者ヤ有ト尋ケルニ。惡四郎・泰長イニ行アヒテ生捕ニコソシタリケル。案ノ如ク先帝舟ノ上ニ御コモリノ時ニ。終ニ同閏二月晦日出雲國ニテ自害シテウセニケルコソムサンナレ。扱イ義綱カ心ヲトラント都ヨリ御供ニ參リシ

官女ノ十八歳ニナリケルヲ義綱ニ給ハリケル。義綱彌々勅定ノ忝ナサニ是モ役所ヲ忍出雲州ニ渡リ。高貞カ館ニ行テ勅定ノ赴ヲ語リケレハ。高貞トカク思案半ナリケレハ。勅答モ不申。義綱ヲ押籠テ不歸。閏二月廿三日頭大夫行房ト成田カ申上ケ、ル。彼ノ兩人ノ中ニ惡四郎ハ伯耆ヘ可通ト申シケル程ニ。オンク歸ルヘシ。義綱ハハヤ可歸ト申上ケ、ルカ不歸。此事人ニシラレナハ後悔シテモカヒアルマシク。イナシ明朝忍テ出シ奉ルヘシトテ。御番ノ兵匠ニ御酒ヲ被下。三位ノ局ノ近日御産アルヘシ。依之御所ヲ御出アツテ民屋ニ出御アル由披露アリテ。御輿ノ中ニ先帝ヲ横ニノセ奉リ。御小袖アマタ上ニ積。三位殿ヲ上ニノセカケ申シ。ワサト御コシノ戸ヲ細ク明テ。頭大夫行房忠顯御供ニテ義綱カ旅宿ノ民屋ヘ落シ奉ル。金若吾リト成田ハ駕輿丁ニ成リ。御コシヲ昇奉ル。閏

二月廿四日未明御出アリ。三位ノ局ハ旅宿ニ留奉リ。頭大夫行房ハ殘リ。忠顯ト金若成田。富士名カ郎從ト四人御供申シ。ソコトモ不知遠野ヲハル。歩ミ落サセ玉フ。忠顯モ先帝モ初メタル御歩行ニテ歩カネサセ玉ヒケルヲ。成田ト金若御腰ヲ押テ御手ヲ引テ千波ノ湊方ヘト急キケル。爰ニ田舎ノ夫男隱岐ノ駒ニノリテ行逢ケルカ先帝ヲ見近テ痛布ヤ思ヒケン。急キ飛オリ駒ニノセ奉リ。忠顯朝臣ヲ輕々ト負ヒ申。御道シルヘ仕候ハント申テ。五十町行ケレハ千波湊ニ付。爰ニテ船人ヲカタラヒ。順風ニ帆ヲ揚ケレハ。忠顯朝臣舟人ヲ近付。屋形ノ中ニノセ奉リシハ。日本ノ御主也。カ、ル時御舟仕コソ幸ナレ。何クニテモ御運開レハ。汝ヲ所領ノ主ニ申シ成スヘシト宣ハ舟人大ニ悅。同廿五日巳ノ刻雲州島根ノ郡野波浦ニ馳着ケル。爰ニテ供御ヲ奉ラント求メ

ケレモ不叶。御酒ヲヤウ。求テ奉リケレ。四人ノ人々舟人モ酒計マイリテ。夫ヨリ同廿七日杵築ノ浦ニ着ケル。爰ニテ金若ト富士名カ郎從ト二人ハ供御シタクシテ奉ラント岡ニ上リケルヲ。大社ノ神宮國曹カ郎從共國司ト一ツニ成リテ。先皇ヲ尋奉ルニ行逢テ。金若ト富士名郎從ヲハ被生捕ケリ。是ヲハ夢ニモシロシメサ、リケレハ。舟ヨリ上ラセ玉ヒテ。隱岐ノ駒ノ出雲ニテアマタ有リシヲ。野人ニカリテノセ奉リテ。大社ノ方ヘ赴ケルニ。此馬頻リニ跡ヘ歸リ。打テトモ。本ノ道ニ歸リケル。アマリニ不思議ニ思召。亦御船ニ歸御ナリケレハ。早敵ノ尋ル躰ヲカ。ニ見エシカハ舟人驚キ取梶面梶取合テ。片帆ニカケテ逃ヒケル。隱岐前司清高舟十艘計ニテ先皇ヲ追奉ル。船頭是ヲ見テ主上ト忠顯朝臣ヲ舟底ニ伏セ奉リ。上ニ海草引散乾物入タル俵ヲ積テ。

船頭ト成田其上ニタチナランテ櫓ヲ押シケル^レハ。追手ノ人々此舟ニ乗移リ見ケルカ。此舟ニハアヤシキ人ナシトテ又舟ヲオシ出シ。帆立梶ヲ直ニ馳テ行ク。折節海上俄ニ風替リ。御舟ハ東ヘ吹送リ。追手舟共西ヘ吹モトス^ハ。御坐ノ舟ヲハ同月廿八日伯州片見ト云所ニ着ニケル。是ヨリ名和ノ湊ハ何程アルト尋ヌルニ五里程ト申ス。サrah今少モ近クヘトテ御舟ヲ大坂ノ湊ニ着。是ニテ水ヲキコシメスヘキ由勅定ナリケレハ^{アイ}。成田小三郎水ヲ求メニ上ル^{リイ}水ヲヤウヤク奉ル。先皇モ忠顯モ供御ハキコシメサス。此水ニ力ヲ付玉フ。先ツ成田ヲ以テ小太郎長高カ方ヘ勅定有リシハ。舍弟惡四郎ヲ以テ委ク勅定アルトイヘトモ。重テ頼被仰ラル也。清高カ圍ヲ忍出。汝ヲ頼母敷思召。是マテ行幸ナリタリ。如何ニモシテ勅定ニ隨ヒ奉リ。義兵^{チイ}揚ケ。朝敵ヲ亡シ奉ルヘシ。天下反

復偏ニ長高カ心ニ可有。若亦夫レモ不叶ハ。急キテ御迎ニ參リ。御命ヲツキ奉リ。鎌倉ヘ申シ。汝カ高名ニ成シ奉リ^{イナシ}御菩提ヲ^{可イ}奉弔。隱岐判官カ手ニハカ、ルマシト思食。汝カ方ヘ御舟ヲ被着タリト被仰下ケル。成田ハ勅定承リ岡ニ上リ。長高カ館ハ是ヨリ何程アルト尋ケレハ。二里程有ルト答ヘケレハ。大ニ喜ヒ唯一足ニト飛カ如ク急トイヘトモ。三日食事ナカリケレハ。手足ニ力ナク。蹈足更ニハタラカス。一所ニ跳ル心地シ^{テイ}タトル^リ尋行。名和殿ノ館ハ何方ヤラント問ハ。土民申シケルハ。名和殿ノ御館ハ今二十町程ニハ無下ニ近フ候。名和殿ハ六波羅ヨリ催促ニテ。先月千劔破ノ城ニ向ヒ玉フトテ御上洛ト申ス。成田是ヲ聞力ヲ落シテ胸ヲサカリ。コハ如何ニト歎カシクテ。夫レハ何日御歸可有ト問ヒケレハ。亦人申ハ。イヤトヨ大殿ハ上リ玉ハス。若殿計御

上洛候。タシカニ昨日マテ、犬ノ馬場ニテ暮日

モイ

ノ音ノ聞ヘ候ト申システ、通りケレハ。ウレ
シサ申ス計リナシ。此言葉ヲ力ニテ。同廿八日
午ノ刻ニカノ館ニ走り付テ見レハ。マコトニ
ユ、シキ門戸アリ。其中ニ大家アマタ作りナ
ラヘテ。客殿ノ前ニハ若キ殿原アツマリ。馬ヲ
乘リテ見居タル處へ行着。ツト入テ見レハ。皆
何者ソトトカメケレハ。成田クルシカラス名
和惡四郎殿ハオハセヌヤ。可申コト有テ參リ
タリト云。惡四郎殿隱岐ノ御番ニテ御留守ト
答フ。扱テハイマタ歸ラサリケルニコソ。道
ニテ如何ナル遅引ソヤト思ヒ。小太郎殿ニ可
申事有リト云。長高折節酒宴シテ居タリケル
カ。是ヲ聞テ人ヲ出シ何事ソト問ケレハ。全ク
人傳ニテ申スマシ。直ニ長高ヘ對談可申ト云
ケレハ。名和是ヲ聞テ如何様子細有トテ閑ナ
ル處ニ呼入ケレハ。成田ハスハ殺サル、カト

思ヒケレハ。是非ヲ言ニ不及。カノ所へ行テ
長高ノ手ヲトリ。君ノ勅定初ヨリ終マテネン
コロニ申シケレハ。名和ハ是ヲ承リ。首ヲ地ニ
落^付テ。扱モ、忝キ勅定カナト。十善ノ君ニ
被賴奉リ。戸ヲ軍門ニ曝^ハ何カ苦シカルヘキ。
名ヲ後代ニ留シ事生前ノ思出也トヨロコヒケ
レハ。成田ヨミカヘリタル心地シケル。ヤカテ
干飯ヲ洗ヒテ居ケレハ。アマリウレシク覺テ
胸塞テ一口モ不食ケル。マコトニサコソウレ
シカリケメ。長高則チ御迎ニ參ラントテ鎧ト
ツテ肩ニウチカケ馬引寄打乘。馬上十騎計ニ
テ逸足ヲ出シ唯一サンニ馳ツキテ。舟津ニテ
馬ヨリ飛テ下リ。少將殿ハ御渡候カ、ト高
聲ニ問ケレハ。返答モ無リケル。舟人ノ食事ヲ
尋テ岡ニ上リタルヲ尋ヌルトテ。少將殿モナ
カリケル。先皇是ヲ聞召。アハヤ何者ソト思
食。苦屋ノ中ニ深ク隠レサセ玉ヘハ。那和ノ小

太郎・君ノ御迎ニ參リタルト高聲ニノ、シリ

長高イ

ケレハ。其時苦ヲ明サセ玉ヒ。如何ニヤ／＼長

高ヨ。成田ハ參付ケルカト御顔ヲ指出サセ給

ヒケルニ。龍顔モ塵ニマヒレヤツレサセ玉フ

御形ヲ。武士共奉見。皆涙ヲ流シ。御前ニカシ

コマル。小太郎・申シケルハ。成田小三郎ハ。

長高イ

アマリニツカレ候間。馬ニ乗候ヘル未タ追付

不申候。某ハ勅定ノ忝サニ片時モハヤク參リ

候。若シ敵モヤ追掛奉ラハ。防矢可仕ト存テ

カヤウニ急テ候ト申・所ニ。千種少將・歸リ參

上ルイ

忠顯イ

給ヒイ

リ。手ヲ拍テ喜ヒ・ケル。扱テ御馬ニカキ乗セ

奉リ。長高基長基長ハ長高
三男也父子郎從以下廿四人

供奉シテ舟ノ上ノ山ヘ奉入。自船津二里計有

ル野中ニテ頻リニ御草臥アリテ御休息アリ

度由勅定アリケレハ。長高カ舍弟長重著タル

鎧ノ上ニ荒薦ヲ卷キテ。主上ヲ負奉リ。舟ノ

上ノ麓岩屋谷ト云處マテ鳥ノ飛カ如ク走着。

石イ

爰ニテ故キ輿一丁求メテノセ申。サシモサカ

シキ西坂ヲ片時カ程ニ入レ奉ル。馳參ル人々

ニハ大將長高兄弟。長高ノ二男彌三郎基長其

孫カ

弟乙童丸後號
高光日野三郎義行。子息又三郎義泰。

眞イ

甥六郎太郎義氏。内河彦三郎義直。長高舍弟鬼

五郎助高。從弟ノ信貞。同次郎三郎實行。同彦

三郎忠秀以下廿七八騎ソ有ケル。カ、ル處ニ

長高舍弟大山ノ別當信濃房源盛大山寺ノ衆徒

廿四人引率ノ馳參ル。アハヤ敵カト見居タリ

ケレハ源盛也。長高大ニ悦ヒ。當山ハ源盛カ

末山也。急ヒテ供御ヲ調ヒテ參ラスヘシト下

知シケル。承ルト申シテ弟子同宿馳マハリ。

供御ヲ出來テ奉ル。此時君臣トモニ力付テ人

ノ心地ソ有ケル。馬山イ凡ヲフモトノ林ニツナキ

置ケルカ。イハヘル聲岩ニ響キテオヒタ、シ

長高二男基長ヲ呼テ云ケルハ。汝ハ急テ館一

歸リ。兵糧ヲ當山ニ人。其後妻子モヲ思ヒ／＼忍ハセ。館ニハ火ヲカケ燒拂ヘシト下知シケレハ。基長畏テ申シケルハ。カヤウノ小勢ニテハ侍ノ一人モ大切ナリ。討死可仕イ敵ハ定メテ寄ヘキニ。一天ノ君ノ御前ニテ可討死ト存スルナリ。候イ餘人ニ此使ヲハ被仰付ヘウモヤ候ハント申シケレハ。長高大ニイカリ。テイ汝ハ不覺ノ申ヤウカナ。弓取ハ我カ館ヲ敵ニケチラサルヲ耻トス。其上館ニ人一人モナカランモ無念也。物トリシタ、メ尋常ニ掃除シテ。妻子ハ皆方々ヘ可落。期イ父カ最後ノ命ナレハ。爭カ背コトアルヘキ。急ケ／＼ト云ケレハ。基長承リ候トテ我館ヘ引カヘシ。内河彦三郎ヲ召テ。呼イ近邊ノ在家人ニフレ廻シ。思立事有テ船上ニ兵糧ヲ上ル事アリ。我倉ノ米穀ヲ一荷。ナイ持運ヒタラン者ニハ。錢ヲ五百ツ、トラスヘシトフレタリケレ

ハ。卽時ニ人夫五六十出來。五千餘石ヲ我劣ヲシト持送ル。其後家中賤物ヲハ。財イ悉ク人夫ニトラセ。館ニ火ヲ掛燒上。内河彦三郎ヲ召テ。呼イ土用松丸ハ嫡孫ナレハ舟ノ上ヘツレテ可來ト云捨テ。基長モ歸來ケレハ。長高ヲ初メイミシクモシツル物哉ト感シケレハ。内河彦三郎ハ長高嫡孫土用松丸トテ四歳ニ成ケルヲ引具シ其外長高ノ妻女并土用松丸カ母モ迎ヘテ來リケル。隱岐前司カ館ハ小波ト云所ナリシカ。カクトモ不知ケレハ味方ヨリ忍ヒテ軍兵ヲ指遣テ夜討ニセヨトテ。馬上廿騎計雜兵六十餘人打立ケルニ。味方ニ稻瀬五郎三郎弘義ト云者アリ。清高方ヘ返忠シ。清高惡所ニ待請。長高カ執事田所并舍弟五郎左衛門。植直若林等討死シテ引返ス。其夜除目被行。大將長高左衛門尉被任。君ノ御諱ノ尊ノ字ニ同シヒ、キアリテ恐アル其上。長ク高キハ危事也。旁々。以イ不可

然トテ。長年ト改名ス。長年カ一族名和七郎ハ
謀有者ナレハ白布五百端有ケルヲ旗ニコシラ
ヘ。松ノ葉ヲ燒ノ煙ニフスヘ。近國ノ宮方并人
ノ知タル武家ノ紋ヲ旗ニ書テ^{畫イ}此木ノ本彼ノ
峯ニソ立置ケル。此旗トモ峯ノ嵐ニ吹レテ。陣
陣ニ翻ル。山中ニ大勢充滿シタルヤウニ見エ
ケレハ。近所ノ軍勢吾モ^ト馳付ケル。同廿
九日隱岐前司清高。同名佐渡前司定宗。千餘人
南北ヨリ押寄タリ。此ノ城ハ大山ニ繼ギ三方
地僻ニ。白雲腰ヲ廻レリ。俄ニ籠タル城ナレ
ハ。堀ヲモハカ^ノシクホリエス。大木ヲ切倒
ノ逆木ニヒキ。僧房ヲ破テカヒ楯ニカケル計
也。寄手坂中マテ責上タレハ。ハヤ近國ノ宮方
馳集リタリト見エテ。家々旗ノ紋アマタ見ヘ
ケレハ。此勢計ニテ不叶トヤ思ケン。佐々木佐
渡前司ハ麓ヘ引返シ。散々ニ落行ケル。清高ハ
是ヲ不知。大手ノ城戸口マテ責人。時ウツルマ

テ戰ヒケル。城中ノ勢ハ敵ニ勢ノ分際^セ見ヘ
シト木陰ニカクレ。射手ヲ出シ。遠矢ヲイサセ
日ヲ暮ス所ニ。天曇リ風吹キ。大雨頻リニ降コ
ト車軸ノ如。雷ノ鳴事オヒタ、シ。寄手是ニ恐
レテアヘテ不進得^テ。味方ハ是ニ力ヲ得テ。射手
ヲ左右ニ進メテ散々ニ射サセ。大山ノ崩ルコ
トク打テカ、ル間。清高カ勢カケマケ谷底ヘ
皆マクリ落サレ。己カ太刀長刀ニ貫レテ死モ
ノ數ヲ不知。清高ハ辛キ命ヲタスカリ。小波ノ
館ニ歸リ。大息ツキ居タリケルヲ。國人皆改
リ御所方ニ成リ。館ニ火ヲカケ焼上ケル。味方
ハ此火ヲ見テイサミ。長年父子二百騎ハカリ
其夜ノ明方ニ押寄ケル。清高父子小舟一艘ニ
取乘リ。隱岐ヘ逃歸ル。長年ハ當國ノ守護代精
谷カ館ヘ押寄責落テ。卅騎計打取リ。亦小鴨ニ
忠長カ有リシヲ押寄テ討取リケル。其外國中
ノ軍勢悉ク馳參リケル。出雲守護ハ八木ト云

所ニ有ケルカ不參。鹽治近江三郎高貞ハ富田
ニ有リシカ義經^{綱イ}ニ相具シテ馳參ヘキ由ニテ軍
兵ヲ催シケル。同三月二日ニ長年カ一族出雲
隱岐兩國ニアリケルカ不殘馳參リケル。其人
人ニハ舍弟長義。同弟六郎行氏。同七郎貞高
入道法名學妙。同八郎高重。同十郎行泰。從弟
孫三郎。同四郎助貞。同五郎惟村。同九郎行實。
同十郎行義。内河兵衛人道念西左衛門尉義重。
内河新三眞員。同四郎太郎泰近。土屋孫三郎宗
重。同彦三郎。同彦五郎信貞。舍弟阿陀伽井小
次郎長定等。吾オトラシト參リケル。同年三月
三日^{貞イ}曲水ノ御祝有リ。長年^{テイ}ヲ伯耆守ニ被任ケ
ル。又長年カ嫡男彦太郎義高ハ。千劔破ノ寄手
ノ爲ニ催促ニ應シテ上洛シタリケルヲ。父長
年カ、ル事有ト告タリケレハ。驚ヒテ急キ夜
ヲ日ニ繼テ下リケル。同月九日ニ舟ノ上ニ參
着キケルヲ主上ノ御前ニ召出サレ。上方ノ軍

ノ躰ヲ被聞食御悅ハカキリナシ。同月十三日
ニ除目被行。少將忠顯ハ左ノ中將ニ任シ。藏人
頭正四位ノ上ニ叙シ玉フ。扱又主上御悅ヒノ
餘リ。被染宸筆御詠歌ヲ被遊長年ニ給ハリケ
ル。長年而目身ニ餘リ。三度拜シ奉リ其後子孫
ノ重寶何事カ是ニシカンヤトテ文庫ニ深ク納
メケル。
^{以下イ低書}
漫々タル海上ニイツクトモナク漂テ。四日ハ
カリハ過ヌ。廿七日ノ夕方ニヤ杵築ノ浦ニテ
西風ハケシク吹テ。イカナルヘキニカト心騒
セシカモ。風ニマカセシニ。夜ヨリ海ノ上モシ
ツカニテ。明ヌレハ爰カシコモ見ユルニ。伯耆
ノ湊ニ着ヌ。楫取モ今ハ力盡スト云ヲ。兎角
シテ大坂トイフ所ヘ着ヌ。爰ハ荒磯ニテ釣舟
タニモマレナリ。此所ノ主ト云者モ都ニ有ケ
レハ。ヨシアシニツケテコトフヘキ者モナシ。
^{ト脱カ}
トモナル人一人二人猶人求メニトテ出ヌ。楫

取モニケ失ヌレハアヤシキ苦ノ下ニ只獨ウツ
モレ居タル心ノ中イハン方ナシ。ナホシナン
ト引刷テ。今ハ限ト待居タルニ。舟ノモトニ人
獨來リ。荒々敷モ無ハイカナルニヤトアヤシ
キニ。忠顯ヲ尋テ御迎ノ由ヲ奏ス。ウレシナ
ントハカ、ルタメシヲソイフヘカンメル。中
中其時ハ心モ詞モ可及ニアラス。思ヒ出ル度
毎ニ。其氣味ナホムネニアリ。致忠輩イツレモ
疎力可成ニアラネトモ。指當テ待出タリシ心
地ゾン。タトフヘキカタソナカリシ。

忘(新葉集)

忌メヤヨルヘモ浪ノ荒磯ヲ御舟ノ上ニトメ

ハ(新葉)

シ心ヲ

長年カ忠功後代ノ人ニモ知センカタメニシルシ置ナリ末々
去程ニ頭大夫・(行房)ハ三位殿ヲ相伴ヒ奉リ參
ノ君ニモ是ヲ見セ奉ラハ如何オロカナラン私ノ子孫マデモ
ラルハ。又其比京都ノ合戰ニ官軍毎度打負ヌ
此忠ハ朽シト思ヘバ正直ヲ以テ報國トシテ行末久數ツカヘ
ト聞エケレハ。大將ヲ一人差上セテ官兵ニ力

奉ルヘシ(伯耆卷ニアリ)
ヲ合セ。六波羅ヲセメヨトテ。頭中將忠顯ヲ大
將トシテ那和小太郎義高ヲ相添ラルハ。御祈
念ノ爲近國ノ諸社ヘ勅使ヲ被立。就中出雲大
社ヘハ宸筆ノ願書ヲ被籠。別テ奉幣使ヲ立ラ
ル。彼社ノ神官等悉宮方ニ參リケル。

被綸旨傳 右以王道之再興者專神明之加護
也殊仰當社之冥助欲致四海之太平仍退逆臣
爲令復正理舉義兵所被企征伐也速得官軍戰
勝之利可歸朝廷靜謐之化旨凝精誠可祈由勅
願令成就勸賞可依請者依天氣狀如件

元弘二年三月十四日

左中將

杵築社神主館

同三月十七日。忠顯朝臣義高一千餘人ニテ責
上ル。主上猶モ合戰ノ勝負天下ノ安危如何可
有カト宸襟ヲ被惱。皇居ニ壇ヲ被立御祈念ア
リテ。一字金輪ノ法ヲ行ハセ玉ヒケレハ。同三
月廿一日ノ夜。金色ノ佛光明カクヤクトシテ。

船上ノ山上ニ現シ。諸人悉ク奉拜之。御願忽ニ成就シスヘシト。主上賴母敷被思食ケル。彼一字金輪ノ法ハ。禪助大僧正ヨリ御相傳有シト聞ヘシ。其比九州ニ太宰少貳貞經入道^{寂阿}大友左近大夫貞宗入道^{具簡}・菊池肥後入道武時トテ三人多勢ノ大名アリ。トモニ勢カサ有。其身弓矢ヲ取武功ノ聞エ世ニシラレタル者^{（彼カ）}也ケレハ。今探題武藏修理亮英時ニ隨ヒ。皮下^{（彼カ）}知ヲ請ル事ヲ口惜ク思ヒ。時分モアラハ謀反^{叛イ}ヲモ起サハヤト。常ニ心ニカケテ思ヒケル。中ニモ菊池入道寂阿彌^イカ祖父。肥後守武房。親父時陸カ代ニ弘安文永ノ比。異國ヨリ責來リシ時。於九州所々合戰ノ忠ヲ盡シ。其賞身ニ餘リ。富貴榮花子孫ニ傳ヘ。アマツサヘ時陸カ息女無雙ノ美人ニテ禁中ニ伺候シテ官女ノ數ニ列リ。其後二條關白道平公ニ參リ。若君姫君アマタ出來。

彌菊池面目世ニ越テソ見エニケリ。道平公ノ姫君ハ先帝ノ后妃ニ備リ玉フ。安福殿ノ女御ト申ハ彼御事也。サレハ菊池入道寂阿彌^イ二條殿ノ御親ミアリテ。先帝ヘ無二ノ味方ニテ有ケレハ。君モ深ク賴母敷思食サレ。船上ノ皇居ヨリ別勅ヲ承リ。此度ノ謀反^{叛イ}ヲモ起シケリ。其外大友少貳モ内々探題ヲ背事アリト聞ヘケレハ彼三人方ヘ秘カニ勅使ヲ被立。賴思食山被仰下ケリ。三人トモニ畏リ悅ヒ。内々便宜ノ軍兵催サント。已ニ其用意有ケル。カヤウノ事三人ノ外ハ未タ知人モ有間敷ニ。如何ニトシテカモラシケン。探題修理亮英時。此事傳聞ア野心ノ實否ヲ知ヘキ爲ニヤ。菊池入道ヲ博多ヘ呼玉ヒケル。菊池此使ニ驚キ。一門ノ者^{（彼カ）}寄合評定シケルハ。是ハ只船上ヨリ九州ノ大將ヲ給ハリシ事ヲ。英時ニ告ル者アリテ可討タメニ博多ヘ呼玉フラン。然ラハ人ニ先ヲセラル

マシ。此方ヨリ逆寄ニシテ勝負ヲ決スヘシ。然
 ラハ大友少貳ヲモ催セトテ。二人ノ方ヘ此由
 ヲ申送ル。大友ハ天下落居未タ如何ナルヘシ
 凡思定サリケレハ。分明ノ返事モセス。太宰少
 貳ハ其比京都ノ軍ニ宮方毎度打負ルト聞テ叶
 フマシトヤ思ヒケン。忽ニ飜テ菊池カ使ハ幡
 ノ彌四郎ト云者ヲ討テ。其首ヲ探題ノ方ヘ出
 ス。菊池入道大ニ怒テ。日本一ノ不覺人共ト不
 知シテ。此一大事ヲタノミケルコソ無念ナレ。

覺イ
 クイ

サレ凡左様ノ不當人凡ハ中々同心セヌコソヨ
 ケレ。小勢ナレハトテ軍ハナルマシ。事ニヤト
 テ打立ケル。相伴フ人々ニハ。伯父ノ重富ノ與
 一武村。嫡子ノ肥後守武重。二男掃部助武敏。

四男イ

三男肥後三郎賴隆。ソノ弟阿日房隆舜。其外赤
 星三郎四郎。城長瀬大輔。伊倉。小野崎。長島ヲ
 先トシテ。一族ノ軍兵百五十餘騎。元弘三年三

月十三日卯ノ刻博多ヲ指テ押寄ケル。是皆義
 兵金石ノ者凡ニテ。一騎當千ト可謂。菊池入道
 肥後國櫛田ノ社ノ前ヲ打過ケル時ニ乗打ヲ尤
 メ玉ヒケン。又軍ノ凶ヲ示玉ヒケン。大將
 菊池入道寂阿イ
 武時カ乗タル駒俄ニスクミ。一足モ前ヘ不進
 得。菊池入道腹ヲ立テ。如何ナル神ニテモ御坐
 アレ。神明正直ノ頭ニヤトリ玉ハ、カ、ル凶
 敵ノ逆賊ヲ爲退治テ世ヲ靜メンカ爲ニ。蒙勅
 命ヲ罷向戰場ナレハ。神助冥感ニコソアツカ
 ルヘキヲ。某カ乗打ヲ尤メ可給ニアラス。其義
 ナラハ鏑矢一ツ進シ候ヘシ。受テ御覽セヨト
 上差ノ鏑矢打番テ一首ノ歌ヲ詠ミケル。
 武士ノ上矢ノ鏑一筋ニ思ヒ切トハ神モ知ル
 ラン

ト云モ果サスヒヤウト放ツ。其時馬ノスクミ
 忽ニ直リテ本ノ如ク步行。扱コソトイサミテ
 打通。不思議ナルカナ櫛田宮ノ拜殿ニ長二丈

計ノ大蛭有リテ。菊池カ鐫ニ當リテ死ケル。

右伯耆卷二局以百花庵所藏本書寫書中往々有他書所無見者誰不珍之乎

辛卯七月

隅東□

片見

池田氏所藏

異本伯耆卷畢

續群書類從卷第五百七十五

合戰部五

永享記

仁王五十六代之帝清和天皇第六の皇子貞純親王。始て賜源氏之姓を。其子經基號六孫王と。其子多田新發意滿仲と云。其三男河内守賴信。其一男伊豫守入道賴義。其一男八幡太郎義家。義家一男對馬守義親。二男河内判官義忠。三男式部大輔義國。四男六條判官爲義。爲義の嫡子下野左馬頭義朝。義朝三男右大將征夷將軍賴朝也。此御代壽永元暦の頃。源平兩家之闘諍あり。平家追討之蒙院宣御弟範賴義經を大將軍として。諸國の源氏を相催し。數萬騎之軍兵を

引率して。在々に合戰す。中にも攝州一の谷。雀の松原。深草の森。八島。水島。壇の浦にて合戰。或は海上にて日を暮し。船中にて夜を明し。或は鎧の袖を片敷。甲の鉢を枕として。治承の秋の初より。元暦の春に至て。斯やかしこに相戰。暫くも安堵の思ひをなさず。雖然。矢島壇の浦において。被牽祖父清盛公之戚縁に。帝海底に沈み給ひしかは。一門の卿相雲客も皆亡ひ給ひ。三種の神器も海底に沈み畢。適々殘る公達も。或は入水し。或は討死し。平家の一門悉滅じす。陰謀野心の輩悉く令誅伐。日本

一遍に治て後。諸國の惣追捕使と成て。號征夷大將軍。彼御子二人。賴家實朝。相雙て號三代將軍。扱又式部大輔義國。康和年中常陸國佐竹冠者追討の大將軍として。下野國足利太郎基綱の館に下着有て。基綱の息女を最愛すと云云。其御腹に子二人出來給ふ。嫡子大炊助義重。法名上西。新田殿の先祖也。二男足利判官義康。其一男義長十九にて早世。二男義清號矢田判官。三男義兼號赤御堂殿。長九尺二寸。母熱田大宮司藤原秀範二女なり。法名號ええ。駿河守殿と云。其一男義純岩松殿。二男義助桃井殿。三男左馬頭義氏。法名號法樂寺。其一男長氏。今川吉良の元祖也。二男泰氏平岩殿。法名證阿。號知光寺。其一男家氏斯波殿の先祖。二男義顯澁川殿之元祖也。三男治部大輔賴氏。法名義仁。號玄祥寺。其子家持伊豫守。號報國寺。其子讃岐守貞氏。號淨妙寺。其一男左馬助高

義。號延福寺殿。二男高氏治部大輔。後には征夷大將軍尊氏公是なり。號等持院殿。又號長壽寺。法名仁山妙義大禪門。其弟直義。三條錦小路殿。法名惠源。號大林寺。尊氏の御子四人あり。嫡子竹君殿。元弘三年之亂の時。伊豆の走湯山密嚴院賴中御坊にて自害す。次男直冬。號筑紫左兵衛佐。今も其子孫九州にあり。三男義詮。宰相中將。號寶篋寺殿。是京都公方の先祖也。四男基氏。鎌倉殿。關東公方の先祖なり。法名道新。號瑞泉寺殿。其御子氏滿。法名道仙。永安寺殿。其御子滿兼。號勝光院殿。其御子持氏。長春院殿。其御子正四位下左兵衛督成氏公の御時こそ。初て鎌倉を去て。下總國下河邊庄古河の城に移り給ふ。其由來を尋るに。永享八年丙辰。信濃國住人小笠原大膳大夫と。村上中務大輔と確執の事有て。合戰に及ふ。村上連々關東の公方へ申通しける間。御加勢を請奉ら

んとて。家の子布施伊豆守を鎌倉へ托越ける。明窓和尚是を吹舉し給ひければ。御加勢可遣由被仰出ける。

公方管領不和の事

去程に村上加勢として。桃井左衛門督を大將として。上州一揆武州一揆那波上總介高山修理亮等。已に打立よし聞へける。鎌倉の管領上杉安房守憲實。諫言を以申されけるは。信州は京都の御分國也。小笠原は彼守護人。京都の御家人也。彼を御退治。京都への御不義たるへしと。頻りに被申ける間。此加勢は事ゆかす。同九年四月。上杉陸奥守憲直を大將として。武州本一揆打立へき由被仰付けるを。如何なる野心の者か申出したりけん。是者信濃へ御加勢に非ず。管領を誅伐せらるへきよし風聞しければ。憲實の被官舊功恩顧の輩。國々より馳集る。あはや天下の大事と。人肝をひやさすと

いふ事なし。同六月六日より。鎌倉中猥に騒不斜。上下男女逃迷ひ。資財道具を持運ふ。依之公方七日之暮方に。憲實の宿所へ出御あり。いろいゝ被仰分しかは。少し静りける。然れ共。世上あふなくみへける間。管領父子同月十五日。藤澤へ罷退き給ひしか。猶身の上不安とて。憲實の嫡子七歳に成給ひしを。ひそかに上州に落し給ふ。是は直兼憲直等。色々の讒言を以。無故憲實蒙御勘氣。身におゐては無誤旨頻りに被申聞ければ。讒者の實否を糺して。同廿七日。一色宮内大輔直兼等。三浦へ追下さる。又管領家にて。大石石見守憲重長尾左衛門尉景仲。色々讒説をかまゆる由。公方被仰出ける間。景仲憲重。山内殿の御前に參り。我々在鎌倉故。屋形の御爲惡しく候はんにおゐては。下國いたすへきよし頻りに申けれども。縦ひ兩人下國致すと云とも。世上無異たるへから

すと見へければ。扱留りぬ。同八月十三日。公方持氏。憲實の屋形に御出有て。色々なため給ひ。管領職政務の事。如元被仰付ける。再三辭退被申けれども。強て被仰付ける。然れども。武州の代官職不施判形をいたされず。萬事苦々敷て。其年は暮ぬる。明る永享十年六月。公方の若君吉王殿御元服有へしとて。御祝義の用意。善盡し美盡せり。管領被申けるは。代御元服は。みな京都へ御使ありて。一字を御申あり。任先規御字御申有へし。節に莅て御使御難義ならは。某か弟上杉三郎重方。幸用意の馬なんとも候。罷登候へき由被申けれども。此條曾て無御承引して。彼御祝義に付て。國々より名字を指て御勢を被召直兼憲直等も。蒙御免許罷歸る。又何者か申出したりけん。御祝義の時。憲實出仕の時。於殿中可被誅由聞えければ。憲實虛病して出仕を止め。舍弟重方代官

として出仕し給ふ。管領是を漏聞給ひ。彌君を恨み奉る。公方も是を聞召。房州無實の説を信し。予を恨る事短慮の至なり。然は若君義久公を憲實の宿所に奉置へし。此上は遺恨有へからすと被仰下ければ。管領忝き山中上。諸人も開喜悅眉けり。かゝりける所に。若宮の社務尊仲。ひそかに參り。此條不可然と。色々讒言しけるを信し給ひ。若君を憲實の屋形へ移らせ給はす。依之管領彌奉恨ける。誠に君臣不快の基ひ。歎ても餘りあり。此世の中はさても歎かしく。長尾尾張入道芳傳。同八月十二日。御前近ふ參り。只憲實をなためさせ給ひて。世上無爲に可被成由。再三諫言を以申けれども。無御許容。其後上杉修理大夫持朝于時彈正少弼千葉介胤直等。一味同心して。色々管領和融の義。世上無爲の由を訴訟申けれども。無御領掌。放生會を限として。十六日に武州一揆を初とし

て。奉公外様の軍勢。山の内へ可押寄申聞えければ。憲實大きに驚き。身に於て誤りなくして。被向御旗。御敵分に成て討れん事。不忠之至り。末代迄の瑕瑾也。所詮御糺明以前に。自害して御憤を散し。忠儀を可殘とて。押肌拔て。已に刀を抜給へは。御近習數十人走寄。奉奪腰物て。前後左右より令警固。かゝりける所に。長尾新四郎實景と。大石源三郎重仲進出て申けるは。道にもあらぬ長僉儀して。頓て討手を被向。闇々と御損命は一定也。御分國へ御下向有て。無科旨再三歎き御覽候得かし。相州河村之館へ御開き尤に候。若さもなく御自害候は。各我等雜人等か手にかゝり。淺ましき死をすへき事必定せり。同しく死せん命を。御馬廻と打合。晴なる討死すへきそや。各大藏邊へ打出て。殿中にて屍を曝すへき由。詞を不殘。血眼に成て申ければ。憲實つく／＼と聞

召。いや／＼某自害したりとも。各左様にあらんに。憲實か惡名末代まで遁難し。さらは今宵鎌倉を開へし。乍去河村は分國豆州の境也。河村にて不得申開。豆州へ令下向は。上様の御惡名を。京都へ申立る様に。人之思ひ給ふへし。上州へ下向すへし。其用意せよとて打立ければ。同名修理大夫持朝。同名廳鼻性順。長井三郎入道。小山小四郎。那須太郎以下。一味同心の大名相伴ひ。八月十四日戌刻計に。山の内殿を御出ある所に。光明赫奕たる日輪一ツ出現して。憲實の馬の草頭の上に掩ひければ。諸人大に驚き。希代不思議哉と訝りける。如何様是は氏神春日大明神の。行末迄守り給へき御靈光可成。此時御運を可開事疑なしと。賀し申さぬ者無りけり。

三浦介逆心事

去程に。武州一揆とも馳集て。上雷坂に陣を取

て憲實を待懸たり。管領の勢共是を聞て。何程の事か有へき。蹴散して捨んとて。各甲の緒をしめ。旗の手を下しければ。憲實堅く制して。いや／＼不可然。某下向する事。無罪由可申開ためなり。御勢に向て。弓を引へからす。あなたより切てかゝらは。無力防ぎ戦ふへし。從是打てかゝるましき由。強に下らし給へは。無力皆陣を取て。忿を押へ對陣す。一揆の勢とも。管領の大勢を見て。叶はしと思ひけん。其夜上雷坂の陣を拂て。散り／＼に成にけり。扱しも道聞け。憲實上州へ下り給ふ。鎌倉には宗徒の兵かけ參り。憲實の下向の事如何と。評定區々也。或尊宿貴僧達を御使として。下向の子細を御尋尤也と云義勢もあり。又は召返しなためさせ給へと申族も多かりけり。然とも是を次てに可追討とて。其夜兩一色直兼并同名刑部少輔時家を大將として。御旗を賜り。

十五日の夜半計。其勢二百騎計。路次の人數を駆催し。上州へ下向す。公方持氏。同十六日の未の刻。武州高安寺へ御動座なり。御留守の警固。任先例三浦介時高被仰付。時高近年領地少く。軍兵なければ。不肖の身として。如何難叶旨辭し申けれども。御成敗嚴重たる上。先々奉隨仰。時高思ふやう。先祖三浦大介。右大將家に忠ありしより以來。代々功を積て。御賞翫他に異也。然るに當御代になりて。出頭人に覺え劣り。内々失面目無念に思ける處に。持氏公内々勅命に背き給ひ。京公方より。三浦方へ御内書を被成ければ。則此留守を打捨て。忽に逆意を起し。鎌倉を罷退。わか宿地へ歸りけり。十月三日。三浦介鎌倉を退きければ。此由公方へ早馬を以申ければ。大きに驚き給ひ。誰を打手に遣すへき由被仰ける處に。同十七日。三浦介二階堂一家の人々と引合て。鎌倉へ押

寄。大藏犬懸等へ令夜懸。數千軒の在家え火を懸たり。鎌倉中の僧俗。上を下へと北迷ふ。營中變化の分野。目も當られぬ次第也。

箱根早川尻合戰の事

抑今度京都鎌倉不和と成ける濫觴は。持氏關東中の禁中の御料。京方の所帶等。御支配の事不可然と諫申ければ。忠言逆耳。還而憲實を被亡。上意の儘に可有由思召ける。山京都へ聞えければ。大に忿り給ひ。則奏聞あつて。綸旨を賜り。御旗を被下。不日に追討すへきよし。御教書を被成ける。

被^{カウムツテ}綸旨。稱從三位源朝臣持氏累年忽緒朝

憲^タ近日與^ノ擅兵^ノ匪^ノ營^ノ失^ノ忠節於關東。剩致是鄙輩於上國。天誅不可遁。帝命何又容早當課虎豹武臣。可令拂豺狼賊徒者。綸言如斯。以此旨可令洩入給。仍執達如件。

永享十年八月廿九日

謹言

三條少將殿

左少辨責任奉

右御幡には。辱も帝御詠歌を被遊と云々。

禪^{ヤルヘク}振海中雲の幡の手に東の塵を拂ふ秋風

去程に。同九月十日。京都よりの討手大勢。足柄箱根二手に分押寄る。箱根へは横地勝間田の軍兵共。伊豆の守護代寺尾四郎左衛門尉を案内者として。既に山を越んとしければ。大森伊豆守箱根の別當之を聞。水呑の邊に。究竟の惡所の有ける所をかたとり。搔楯かいて待懸たり。箱根山と中は。四方嶮岨にて。谷深く切れ岸高く峙り。敵を見おろし。我勢の程敵に見。虎賁狼卒かはる。射手を進めて戰ひければ。敵縱何万騎ありとも。難近付見へけれども。寄手は大勢。防く兵は小勢なれば。何また此山に怵へきと。哀なる様に覺て。掌に入たる心地しければ。五百騎皆馬より下り。射向

の袖を差簪し。太刀長刀の鋒を揃へて。只一息にあかりける。大森か兵箱根の衆徒。石弓を懸。一度にはつとはなす。數万の軍勢。是にまくり落され。遙の深き谷底へ。人雪ナメレ類をつかせて落重なれば。敵に討たれ死する者は少といへとも。己か太刀長刀に貫れて。死する者數を不知。大森伊豆守勝に乗て。短兵急に撫んと。揉に揉んで攻ける間。石巖苔滑にして。荆棘道を塞たれば。引者も不延得。返す者も敢て不被打といふ事なく。横地は討死す。寺尾兄弟三人共に深手を負けければ。十方へ分れて落行ける。軍散して四五ヶ月は。山中草腥して。血野草に淋き。戸は路徑に横たはれり。大手の軍は味かた打勝といへとも。搦手の軍勢。足柄山を越て。相州西郡まで押寄ると聞へしかは。上杉陸奥守を大將として。二階堂一黨。穴戸備前守海老名上野介。安房國の軍兵を相添て。西の郡の

敵に押向らるゝ所に。此人々九月廿七日。相州早川尻へ押寄。鬨聲を合。矢一筋射違ふる程こそあれ。大勢の中へ掛入て責ければ。魚鱗鶴翼の陣。旌旗雷戰(戦カ)の光。須臾に變化して萬法ホウイに相當れは。野草紅に滿て。汗馬の蹄血を蹴立て。河水チヤダ派せかれて。士卒の尸忽に流を斷。かゝりけれとも。續く味方もなし。只今を限と戰けれとも。目に餘る程の大勢なれば。憲直の頼切たる肥田勘解由左衛門蒲田彌次郎足立萩窪を初として。一族若黨悉く討死し。憲直海老名終に討負て。散々に成て落行けり。

持氏鎌倉へ飯給ふ事附鎌倉合戰事

同廿九日。持氏相州海老名道場へ被移御陣。千葉介胤直。初より憲實と御和談ありて可然旨。再三申けれとも。少も御承引なかりしか。武州府中にて。亦諫め申けるは。初も再三申けれとも。御許容なく候に。申上る條は憚有といへと

も。主暴不諫は非忠臣也。畏死不言非勇士と云事あれは。縦ひ蒙御勘氣とも。指當る一事なとか申さゝらん。管領は全く異義なく見え給へは。召返され。本の如く政務を給り。水魚の思ひを被成。關東靜謐のはかりとを廻し。御座ますへし。彼憲實は。内には匡君の過。外には揚君美。無雙の良臣に候へは。召に參らすと云事有へからず。但讒者群狂に恐て。遲參之儀も有へし。君達を御使として。召返させ給ふべくもや候はん。某若君御伴申て。憲實を同道仕り。飯參すへき事は案の内に候と。憚所なく申ければ。當座の評定一決して。九月廿四日。既に若公御下向に究りし所に。若宮の社務尊仲。此由を聞て。築田河内守方へ以飛脚。彼御下向不可然旨。しひて申けるを信し給ひ。若君御下向止ければ。千葉介諫言徒に成し程に。胤直大に忿りて。相州へ御動座の時。御供不申罷留

る。分陪河原に安駕可參と。御使有ければ。畏て承候とは申けれとも不參詣。爲關戸山御越の時。千葉介手勢引具し。神田寺原へ打出。下總國市川へ張陣。是のみならず海道の討手。大手搦手一に成り。宮根の陣を押破て。大將上杉中務少輔持房。相州高麗寺に陣を取。さらは是を防くへきとて。木戸左近大夫將監持季を大將として。御旗を給はりて。相州八幡林に陣を取。箒を燒て待明す。又憲實追討の爲に。下向し給ふ兩一色の人々も。相伴ふ軍兵は。管領の方へ驅付ければ。手勢計にて。大敵を可除様なくして。一戰にも不及。同四日海老名の御陣へ引返す。上杉安房守數萬の軍勢を相具して。同四日上州を打立て。同月十九日に分陪に着陣す。是を見て御旗本に有し人々。御内外様の侍奉行頭人に至る迄。公方を捨置申。管領の勢へそ馳加はる。今は宗徒の御一揆。普代舊

功の御勢より外は。残り止る人もなし。去程に同十一月一日。三浦介時高を大將にて。二階堂の人々。持朝の被官一味同心して。大藏の御所へ押寄ける。折節警固の兵少なければ。案内は知たり。大庭へ亂入る。御所方の人々。若公をは扇か谷へ奉落て後。殿中鳴を靜て待かけた。三浦介を始め一枚楯を引側め。門の内へ込入ければ。甲の鉢を傾け。鎧の袖をゆり合ひり合切捨て。天地を動し。火を散す。切て落し。突落し。爰を先途と防けるか。寄手若干疵を被て一度にはつと引たりけり。寄手は大勢なれば。追出せば荒手を入替。責入々々戰ければ。築田河内守。同出羽守。名塚左衛門尉。河津三郎を初として。防矢射ける人々。一人も不殘討れにけり。去程に方々より亂入。人々の屋形に火を懸。神社佛閣に入て。戸帳を下し。神寶を奪取。狼藉止事なかりしかは。三浦介が被官

佐保田豐後守。馳廻て制止てければ。軍勢暫く靜りけり。同十一月一日。長尾尾張入道芳傳。爲鎌倉警固。分陪を立て上りける所に。同二日。持氏海老名より歸らせ給へは。相州葛原にて參合。あはや敵と見てんければ。御供の人。甲の緒をしめ。馬の腹帶を固めて。色めき渡る所に。一色持家を御使として。憲實の代官芳傳か方へ被仰けるは。累祖等持院殿。天下の武將たりしより以來。汝等か先祖上杉民部少輔長尾彈正。當家譜代の家僕として。主従の禮儀を不亂。而に重代忘餘身恩。穩に不伸子細。大軍を起す。是縱持氏を滅すとも。天の譴を不可道。心中に憤る事あらは。退て所存を可申。但讒人の眞僞に事を寄せ。國家を傾んと企。ならは。再往の問答に不及。自害白刃の前に命を止め。忽に黄泉の下に汝らか運を可見と。只一言の中に若干の理を盡して被仰ければ。芳

傳馬より下り。いや／＼是迄の仰を可承とは
 不存 只讒臣憲直兼此間欠文アルカ・不誤所を申披き 讒者
 の張本を承て 後人の惡習を申こらさん爲に
 へと。楯をふせて畏る。依之憲實申給に任せ。
 憲直直兼罪科に可被處と被許ければ。芳傳喜
 悅の眉を開て。則裝束を改め。遂出仕銀劔一振
 進上す。則又御劔を被下けるにぞ。諸人皆色
 を直し。安堵の思を成ければ。子細なく鎌倉へ
 歸らせ給ふ。芳傳御供申ける 永安寺へ入らせ
 給ふへきと。御駕を進めける所に三浦介か郎
 等佐保田豐後以下。八幡宮邊赤橋に馳塞り。凱
 の聲をそ上にける。依之御駕を被返。淨智寺へ
 入御なる。芳傳大に忿て。豐後に近付。以の外
 狼藉なりとて。荒らゝかに申ければ。赤橋の軍
 勢引退ぬ。扨こそ事故なく。永安寺に入らせ給
 ける。

持氏御出家并憲直以下自害の事

同月四日。金澤の稱名寺といふ律宗の寺へ移
 らせ給ふ。猶も角ては始終の御身の爲惡かる
 へしとて。世に望なく御身を捨られたる心の
 中知せんとや。同月五日に御髪を落し給ひ
 けり。未強仕齡幾程も不過に。剃髮染衣の姿に
 飯し給ひし事。盛者必衰の理とは云なから。方
 見かりける事とも也。法名をは長春院殿揚山
 道繼とぞ號し奉る。同月七日。長尾尾張守入道
 大將として。憲直以下の讒臣退治の爲に。數千
 騎金澤へ發向す。憲直も一色も運の窮達を見
 て。是非を不悲。(有イ)主憂則臣辱らる。主辱らる則
 臣死すと云り。今何の爲に命を惜むへきとて。
 心閑に最期の出立して。靜り飯て居たりけり。
 去程に追手の大將芳傳入道。あはひ半町計に
 成て。馬を一足に颯とかけ居へて。同音に鬨を
 作る。直兼の郎等草壁遠江と名乗。紺糸の鎧
 に。同毛の五枚甲の緒をしめ。瓦毛なる馬に乗

て 最前に進み父子四人少も不擬議大勢の中へ懸入。馬焔を立て切合けるか。切ては落し。八方をまくりて。一足も不引討死す。是を見て。帆足齋藤饗庭場喜。并板倉西大夫以下の侍。聲々に名乗。敵の真中へ會釋もなく懸入て。一騎も不殘被討にけり。其隙に直兼父子三人憲直父子二人。并淺羽下總守以下一族門葉の人々心靜に念佛申。指違々々算を亂したるごとくに。重り合て死にけり。憲直の次男上杉小五郎持成。山の内の德善寺に在けるか。是を聞て。乳母の鱸豊前を呼。已に自害に及ひけるか。又居直り。硯を取寄。筆を染て。辭世の詞に云。

合受百年煩惱業。今朝端飯轉身清。滅却心頭化。緣盡本來空。 性行

くるくると押疊み。西にむかひ手を合。念佛百返計唱へて。雪の肌を押肌拔。九寸五分の刀を

拔。左の脇より右の乳の下迄引廻す所を。豊前守後より主の首を打落す。其太刀を取直し。己か心もとへ。鑢本迄指貫てそ失にける。譽ぬ人こそなかりけれ。其外三戸治部少輔をは永安寺の内。平雲庵と云寺にて。長尾出雲守討てけり。海老名尾張守入道は。六浦引越の道場にて自害しぬ。其弟上野介をは。上杉大夫持朝の家人とも取籠。扇谷の會下寺海藏寺にて腹を切ける。此人は兄には不似して。公方へ度々諫言を以。世上無爲こそ肝要に候へと。申上られける由聞へければ。命計助け置へき由。管領以專使被申けれと。其使以前に自害しける。不運の至り餘りあり。若宮の社務尊仲も被生捕けるを。是は張本の讒人なれば。尋仰らるゝ事もあるへしとて。京都へ上せけるか。終に被誅とかや。同月十一日。持氏永安寺へ飯り入せ給ふ。上杉修理大夫持朝。大石源左衛門尉憲儀。

千葉介胤直等番替て奉警固。さなから禁籠の如くなり。

持氏満貞御最期の事

去程に持氏の御命計助け奉り。自今以後。政務綺はせ奉るまじき由。再三京都へ被申けれども。年來の無道重疊せり。奢侈梟惡不誠におゐては。後日の禍となり。天下の變親^{マノアタリ}なるへしと評定有て。終に可奉討に定りしかは。永享十一年二月十日。持朝胤直奉押寄。永安寺を稻麻竹葦の如く取巻。打圍て御自害を奉勸。依て御近習祇候の人々は是を聞て。木戸伊豆入道。冷泉民部少輔。小笠原山城守。設樂因幡守。印東伊豆守。武田因幡守。加島駿河守。曾我越中守。設樂遠江守。治田丹後守。木内伊勢守。神崎周防守。中林壹岐守。敵の中を破て。卿手十文字に懸散さんと喚て蒐る。追つ返しつ。引組々々差違。寄手左右へ颯と分て。散々に射る。御所

方引色に成けるか。取て返し討死す。満貞の御馬廻り。南山上總入道。同左馬助。里見治部少輔。今川左近入道藏人。二階堂伊勢入道。同民部少輔。下條左京亮。逸見甲斐入道。石川民部少輔。新五十郎左衛門尉。岩淵修理亮。泉田掃部助。横合に懸て。兩方の手騎^{テマ}を追ひまくり。真中へ會釋もなく懸入て。引組て落。差違て死す。其間に公方持氏。御舍弟満貞御自害。哀成ける次第也。御馬廻り舊功の人々も。一人も不殘討死す。神妙にこそ見えにけれ。二階堂信濃守は。此公に深く頼まれまいらせたりしか。如何思ひけん。御没落以前より。行方不知落行けり。同廿八日。若公義久。十歳にならせ給ひけるを。奉討へき由聞えければ。報國寺に御坐せしか。人々馳集て。此由申されければ。佛前に焼香被成。念佛十返唱へさせ給ひ。御守り刀を引ぬき。左の脇に突立て引廻し。うつふき

に伏給ふ。哀といふも愚也。討手に参し人々、一同にあつと感して、袖を顔に押當て、泣々歸り参りけり。梅檀は二葉より香はしとは。是等之事をや申へき。天晴武門の棟梁ともならせ給ふへき御器と。惜まぬ人こそなかりけれ。

憲實出家之事

于茲管領上杉安房守憲實。しはらく關東の成敗を司て。鎌倉に在しかは。諸大名頻に媚をなし。彼下風に立んとを望ける。元來忠有て誤なしといへとも。虎口の讒言に依て。君臣不快となりし事を思へは。未來永劫迄の業障也。公方連々京方御退治の企を中止めんとて。度々上意に背し故なれとも。有爲無常の世の習。明日をも不知命の中なれば。因果歷然。忽身に報せん事を思ひ。又譜代の主君を傾け奉る。末代の嘲を恥て。其身の罪を謝せん爲にや。俄に出家し給ひて。法名を高岳長棟庵主と號す。舍弟

同兵庫頭清方を。越州より呼寄て。子息成人の間の名代と定て。管領を譲り。永享十一年己未六月二十八日。長春院へ参詣して。公方の御影の前にて。焼香念佛し。泪を流して申されけるは。臣今度讒者の申様にて。御勘當を蒙り。不意御敵と成る。雖然心中に無不義。宜在天鑑と云もはてす。腰の刀を引拔て。左の脇に突立給處を。御供の侍高山越後守。那波内匠介。走寄て懷付。御脇差を奪取。其時皆々馳集て。屋形へ還し奉て。能々養生し奉れば。定業ならぬ事なれば。程なく平癒し給ける。同十一月二十日。山内殿を辭し。藤澤へ御出あり。猶も世間物憂て。同十二月六日。伊豆國名越の國清寺に引籠り給ひけり。

結城籠城事

同十二年庚申正月十三日。一色伊豫守鎌倉を落て逐電し。相州今泉に有と聞えければ。あは

や天下の亂近に有と云程こそあれ。今度降人に成て命を續たる人々。世の聞耳を口惜く思。哀謀叛を興さはやと思けるに。所願の幸哉と悦て。即與力して。密に寄合々々評定すと聞へければ。事の大にならぬ先に退治すへしとて。長尾出雲守憲景。太田備中守資光を大將として。相州今泉の館に押寄ければ。國內通計して往方不知落にけり。依て同類なればとて。舞木駿河守持廣をは。長尾入道芳傳か方へ謀寄て管領へ出仕をいたし。本領安堵可然と云ければ。持廣實と心得。太刀一腰馬一疋用意して。正月廿二日尾張守か宿所へ行ければ。究竟の兵共五十人物具せさせ。竊に是を隱置。亭主出合。勸酒好時分を見て。前後左右より出合。持廣をは討てけり。持廣か寄騎の侍。赤井

若狹守。腰刀許にて切て入る。尾張守か郎等數多討取。終に討死してんけり。爰にまた故長春院殿の御子達。去年御滅亡の刻。近習の人々日光山へ落し申たりけるか。其後は禪院彼・律寺に一夜二夜を明し。世上の様を隱聞てましませしか。何まで斯て可有。急一味同心の輩を招き。再關東を治め。先考の鬱憤をも可散申として便宜の大名を憑まれける所に。結城氏朝無二。奉被憑。子息七郎光久御迎に參られける。其後氏朝家老一門を召集め。此條如何と評定す。家老ともは未被申御請とおもひければ。水谷伊勢守・築修理亮・同將監・黒田民部丞一同に申けるは。當家は及累代差せる名家にあらされとも。代々與義士。一日も未取不忠之名を。依之關東にては。誰か獨し可申なれば。若君達の憑

敷思召事さる事なれとも。「るべし然れ共イ」 去年の一亂に京方

へ御和談ありしかは。京公方も管領も。殿をは

二心あらしと深く頼み給ふ處を引替。謀叛の

張本とならせ給ふへき御恨何事そや。人而無

遠慮。則必有近憂と云へり。能々可有御思案と

中も終らす。「果如にイ」 厚木掃部介馳參して。若君達御入

有と申處に。氏朝の一男結城七郎御供申し。若

君御入有ければ。家老一門大に驚き。扱々是程

の一大事を吾々に被仰合迄にも不及。思召立

事。「我々イ」 人々をは屑共思召さりけるそや。今度の御

大事に逢て無詮とて。水谷以下四人の家老共。

誓切て一同に遁世者「の棄門イ」とそなりにける。其中に

水谷伊勢守許様々の問答して。亂を見て捨つ

るは弓箭の道ならず。無力所なり。討死するよ

り外之事有問敷とて。取て返す。殘三人は終に

出家人道してんけり。然とも近國他國の牢人。「内ニ」

并に志の大名少名馳集り。結城の城に楯籠る。「志を通じけるイ」

元來構密なれとも俄に又大堀を堀。塀を塗り「本より構へ假しければイ」

櫓を搔せ見せ勢を出し。御旗を打立。白旗赤旗

二引左巴釘貫穀「ガダ」の葉の紋書たる旗とも其數風

に翻て充滿たり。又野田右馬介を大將として。

矢部大炊介以下。古河城を繕て楯籠る。此由早

馬を以て京都へ披露しければ。急可追伐由。被

成下御教書。御旗を下され。依之自管領清方

武藏國司上杉固廳鼻性順に罷向ひ可有退治と

下知し給へは。無勢にて難叶と申けるにより

て。長尾左衛門尉景仲を加勢として被遣ける。

同三月十五日。兩大將二手に成て鎌倉を立つ。

性順は若林に張陣。景仲は入間河原に取陣。馳

付勢を待居たり。又其比新田。田中。佐野小太

郎。高階。傍士飯塚修理亮。桃井か被官の輩。野田右馬介か郎等加藤伊豆守以下御所方に成て。足利莊高橋郷野田の要害に馳集て旗揚。可討平上州（トイ）評定す。上州之守護代大石石見守憲重。當國一揆を催促して是を退治の爲に發向すへき由相觸る所に兩（イ）方の安否をや伺けん。一人も不應催促。然れとも非可默止置とて。手勢許にて。四月四日同國扁淵（角イ）に出陣す。去程に近所の人々。少々馳付ける程に。是を待合せ。同九日高橋の城へ押寄。堀際に楯を突雙へ。大勢を一所に集め。向城の如くに備へたれは。城に籠る敵の軍勢機を屈し勢を吞れて。不叶（本イ）と思ひけん。寄手は大勢なり。城の構へ。未始終如何あるへし。是（愛をイ）を落て重て可起大軍とて。其夜拂城引て行。雜色國府野美濃守。同

舍弟殘留て。爲大石討れにけり。鎌倉（等殘なくイ）の警固には三浦介時高。同四月廿日馳參る。又上杉中務少輔持房。同五月一日京都の御旗を帶して。鎌倉へ下向す。上杉兵庫頭清方。同修理大夫持朝は。四月十九日。鎌倉を立。在々所々を催促して。軍勢を集らる。東海道は不及申。武藏上野の一揆の輩。越後信濃之軍勢數万騎馳集事。不遑註之。亦安房入道長棟禪門も。伊豆國に御座けるを。京都より頻に被仰ける程に同四月六日。伊豆國を立。山田庄（山の内イ）へ歸參り。長尾郷に令滯留。同五月十一日。神奈川へ出勢ある。

村岡合戰事

同七月一日。一色伊豫守。武州北一揆を相語ひ。利根川を馳越て。武州の一騎須賀土佐入道か宿城へ押寄。悉く燒拂。須賀か郎等共暫支て

討死すと聞へければ。同三日。固廳鼻性順。長尾景仲。成田の館^(がい)へ發向す。一色少も不騷^(ごうイ)。馬を陳頭^(ちん)へ立直し。閑に敵を待懸たり。兩陣馳合追つ返つ。烟塵を捲て戰事十餘度に及へり。一日戰暮し。夜に入ければ相引にしけるに。同四日。兩方戰屈して見へけるところに。一色方へ馳加る軍兵雲霞の如し。味方に加る軍兵。入西には毛呂三河守。豐島には清方の被官の輩許にて。以の外無勢也。此勢計にて如何にと引色に成處に。伊豫守是を見て。すはや敵は引けるをや。何迄も追蒐て討捕者共とて荒河を馳渡し。村岡河原に打立る。乗勝所はさる事なれとも無^二手分の沙汰も。事體餘りに周章して見えたりける。性順景仲只一手に成て魚鱗に連て。荒手を先に立。卿手十文字に懸破しかは。伊豫

守急に討負。一返も不返。手負を助けん共せず。親子の討るゝをも不顧。物具を^(捨て)小江山迄引退。其より散々に成て落行ける。修理大夫持朝此由を聞て。岩筑より後詰の人衆^(戦イ)を出しければとも。軍は退散しければ。引還し給ひける。勝^(イモ)豐後守逆徒に與してんければ。同七月廿五日。足利の町屋にて。同名八人爲^二持朝^一被誅にき。長棟庵主は七月八日神奈川を立。野本唐子に逗留し。同八月九日。小山庄祇園の城に著給ふ。其比信濃國住人大井越前守持光。御所方に成。旗^(イ)・揚。臼井^(のイ)・峠迄押來ると聞へければ。爲^レ防^レ之。上杉三郎重方。國分に取陣。爲^二相州警^{亮イ}固。上杉修理大夫。相州高麗寺の下德宣に取陣。又宮根別當。大森伊豆守元來無貳の御所方なりければ爲^二結城後攻馳參共申ければ。今川上

總介。平塚に取陣。蒲原播磨守は。國府津の道場に陣取て待懸・たり。^{〔居イ〕}持朝與管領清方は。路次の軍勢を駈催し。同七月二十九日結城にこそ着給ふ。

結城落城の事

彼結城・城と申は。天然形勝の地。要害之便有。兵糧卓散に・て。^{〔藏山イ〕}籠る所の人々は。一騎當千の兵なれは。^{〔たやすく羽賛イ〕}力攻には落かたし。城中の人々は。結城中務大輔。同右馬頭。同駿河守。同七郎。同次郎。今川式部丞。木戸左近將監。宇津宮伊豫守。小山大膳大夫。子息九郎。桃井刑部大輔。同修理亮。同和泉守。同左京亮。里見修理亮。一色伊豫六郎。小山大膳大夫・舍弟生源寺。^{〔以下イ〕}寺岡左近將監。内田信濃守。小笠原但馬守・究竟の軍兵を盡して籠りける。寄手は八方を包て攻寄た

れは。先坤の方の惣大將清方。^{〔はい〕}諸卒を下知して張陣。西は上州一揆。乾は持朝を大將として。安房國の軍兵。^{〔勢イ〕}坎艮は京勢并宇津宮新右馬頭。土岐刑部少輔。上杉治部少輔。小田讃岐守。常陸の北條駿河守。^{〔不元〕}震巽は越後信濃の軍兵。^{〔イ字〕}武田大膳大夫入道。南は岩松三河守。小山小四郎。武田刑部。武藏一揆。千葉介。上總下總の軍勢也。敵の陣・味方之間。僅に三町許を隔たり。其間に大堀二重堀。逆茂木を引。是は城中の兵糧運送の路を止んためなり。清方持朝千葉土岐等か陣の前には。十餘丈の井樓を二里三重に組上たり。然とも城中には死生不知の溢者共。^{〔安イ〕}是を先途と捨命戰ふ。寄手は功高く祿重き大名共か只味方の大勢を憑計に。^{〔不元〕}誠吾一大事と思ひ入たる事な^{〔けイ〕}れは。毎日の軍に。無不

乘勝事。因茲城衆聊雖爲得機。寄手は日本半國の兵。四方に成圍。味方は此城一ツにて。始終如何か有へからん。城の本人氏朝の舍弟山内兵部大輔。降人と成て。管領の方へを出にける。是は若討負。結城一門今度絶終らん事を歎て。爲可續結城之跡とそ見し。即屬長沼子細を申しければ。即蒙免許。可在陣由宣ける。管領上杉兵庫頭。以太田駿河守。諸大將へ合戰の意見を尋給ふ。宇津宮右馬頭申けるは。結城事非他國事。某如以前一族被官同心申候者。可退治事不_レ可_レ借_二他力_一。雖然近年無勢罷成。其上此城如此大勢籠候へは無及力。他國之軍勢御發向無面目候。急て御責尤と存候。自然攻損手負多く出來なは。古河山川の御敵。乘弊蜂起出張せは。勇々數御大事なるへし。信濃の大井。甲

州の逸見等縱五百騎千騎出張候て。後攻に來候とも。此御勢にて御退治容易かるまほし。御延引候ても。敵の勞れたる様に御計ひ尤と存候と。餘義もなけに申ける。長沼か申けるは。此城殊に寄手大勢にて候得は。致惣攻候は、外城・易攻候へし。然とも先年某か要害僅の事候得とも。被向御所之御旗に。桃井岩松以下之人。七十日迄責しか共。某手勢軍兵三十騎。上下百餘騎にて。度々討勝。御敵被討。況や是は廣大の名城。數万の軍勢籠候得は。山川以下。案内者に相謀て。以策可攻候。覽。但愚按短才の身。非可_レ漏_二申公義_一を。兎も角も可隨御下知候と申す。京勢仙波常陸介申けるは。去年永安寺にて長春院殿御最後の。時。隨分四方の警固したりしか共。此君達を落し申させ。及箇様の御

大事候。況や是大城にて合戰の紛（れに一人イ）・二三人も

落させ給へは（はい）。重ての御大事不遠候得は。能々

廻謀（謀を回らるゝ御賞め候べしイ）。急可攻城候。若猶豫の評定候者。必可有

後悔候。但當所不按内にて候（得イ）・者。諸勢の僉議

に任へくとそ申ける。城中の兵共（候べしイ）。構究竟城。爲

積置數萬石兵糧者。見勢程懸合々々合戰をす（命のイ）

る共。又籠て戰とも。一年二年の内（間イ）には容易に（難イ）

落されし物をと。初は勇嘗ける。凱箭叫（聲イ）の音。

毎日止隙なく。上は梵天（玉天イ）四天王。下は黃泉金輪

際迄響らんと覺へける（イ）。要害善ければ。寄手敢

不近（付イ）・得。城中の兵被圍四方。氣疲勢減しかは

懸合て不（のイ）（合イ）・戰。打立て不及散敵。互に掛目對陣（戰イ）

して。徒にのみを過しける。去程に改年立回（所玉のイ）

り（明るイ）。翌永享十三年辛酉（イ）。改元有て嘉吉と云。四

月十五日。大將兵庫頭清方。向諸軍宣ひける

は。自昔攻敵城事。對陣而雖有送二三年事。其

は五百騎千騎の國諍也。是は（又イ）・日本半國の勢か（イ）

向て。一城を攻兼て。當地にて數月不及合戰（イ）。

而徒煩皇民事非本意。京都の公方も定て。未練（果イ）

にぞ思めすらん（あむイ）。且可爲末代の恥辱。明日吉日

なれば。可有惣攻と相觸。嘉吉元年四月十六日

辰の刻に打立。靡旗進兵ければ。城中の兵共。元

來機變蒐引心に得て。死を一時に決たる氣分（定イ）

なれば。何かは少も可擬議（ちとイ）（擬ふべきイ）。大勢の真中に蒐入

蒐入懸散し。鶴翼魚鱗に連て。東西南北に不惱（悔イ）

馬足敵の勢を駟靡たれば。朱に成し放馬不知（放イ）

其數。蹄の下に切て落したる敵。算を亂して臥（臥イ）

たりける。蒐ける處に。如何成野心の者のした（イ）

りけん。城の櫓に火を放ち時節大風吹落堀（堀イ）の

内へ吹懸（イ）。屋形城中一字も不殘燒ければ。防・

兵共烟に咽て。悉く東西に失氣・引ける間。^(イモ)寄手乗機。追懸攻ける程に引立たる者共か難所に追懸られ。なしかはよるへき。^(たま)城の東の切岸田川に被追入被討。溺水者其數をしらす。一日の合戦に被討兵數万人。籠る所の人々一人も不殘討死す。惣大將安王との春王殿をは。^(改撰イ)越後勢の大將長尾因幡守虜に申ける。^(リイ)則乗申籠輿に御上洛とぞ聞へし。^(イモイ)其御弟六才にならせ給ふをは。^(ひし赤王殿をな)御乳母潜に落し奉りけるを。伊佐の庄にて。小山小四郎生捕申ける。^(イ)小山大膳大夫兄弟は落たりしを。長尾因幡守に被虜。是も京へそ上りける。同十七日。可^(イモ)被^(イモ)攻^(イモ)古河城よし。被相觸所に。野田右馬介以下の人々。城を爲^(ニ)根城と一楯籠けるか。聞^(ニ)落城之由を。寄手未近以前に。舟に取乗て。不行方知落にけ

る。^(イモ)矢部大炊介以下殘留て。野田讃岐守に被誅ける。^(イモ)又今度所討捕首共。同十七日被付著到。被^(イモ)遂實檢。惣大將上杉兵庫頭清方。小具足許にて出給へは。侍所長尾出雲守憲景。紫下濃の鎧に。鍬形の五枚冑。^(甲イ)瀬下治部少輔景秀。黒糸の鎧に同毛の三枚冑。鹿の角を打立て著たりける。此兩人付役にて。其外伺候の人々半袴にて參ける。

一清方被官人々分捕。

根本五郎首。加茂部加賀守首。磯將監首。已上三。并^(レ)不知^(ニ)名字^(ニ)四。合七。大石石見四郎取之。江戸八郎首。長井六郎取之。今川式部丞首。上洛。白倉周防守取之。眞田首。山縣美濃入道取之。^(五郎がイ)藤刀首。^(山口次郎四郎兵衛後藤彈正忠)相討。結城右馬助首。上洛。小串六郎取之。小笠原但馬入道首。發知平治左衛門取之。大賀對馬守首。村山越後守取

之。小幡豐前守首。豐島大炊介取之。香川周防

守首。高山越後。長尾因幡守。相討。大城首。倉俣左近將監取

之。小幡三河守分捕首不_レ知_二名字_一。八捫首。後

藤彈正忠取之。山縣左京亮。那波内匠助相討

首不_レ知_二名字_一。土岐修理亮分捕首同前。岡見

大炊介分捕首不_レ知_二名字_一。大藏民部丞首。大

石源左衛門尉取之。寺岡左近將監をば長尾新

五郎生捕之。和田隼人佐分捕首不_レ知_二名字_一。

慈光寺井上坊首。吾那次郎并野田右馬助家人

高倉首。合三。於_二古河城_一。田島太郎左衛門尉

取之。中谷首。於_二當所_一椎木城。入野出羽守討

進之。已上廿九。

一上野一揆分捕首。

木戸左近將監首。上洛。北平遠江守首。合二。高

山宮内少輔取之。筑波伊勢守首。高田越前守

取之。筑波法眼首。赤堀左馬助取之。小河常陸

介首。和田備前守取之。和田八郎分捕首不_レ知_二

名字。桃井僧號_{號左衛門督伯父。}首。和田左京亮。大類中務

丞相討。倉賀左衛門尉分捕首不_レ知_二名字_一。寺尾

上總入道。同名右馬助相討首不_レ知_二名字_一。長野

周防守。同名宮内少輔相討首不_レ知_二名字_一。田

賀谷彥太郎首。白井五郎首。彼二。長野左馬助

取之。諏訪但馬守分捕首不_レ知_二名字_一。筑波首。

一宮駿河守取之。神澤首。一宮修理亮取之。倉

賀野五郎分捕首不_レ知_二名字_一。發知上總三郎分

捕首同前。大繩孫三郎首。那波大炊助。同左京

亮相討。大森六郎首。那波刑部少輔入道取之。

玉井首。沼田上野三郎取之。小林山城守分捕

首不_レ知_二名字_一。綿貫越後守分捕首同前。綿貫

名利房丸。同龜房丸代相討首不_レ知_二名字_一。頸

以上廿四。

一小山讚岐守分捕首。次第任。到來。

厚木掃部介首。金井伯耆守首。能興首。並名字

不知二。合五。小田讚岐守取之。

一土岐刑部少輔分捕並生擒。

前宇都宮伊與守首。上洛。篠田山城守首。加園

家人首。淡州家人首。合七。並不^レ知^二名字^一首

四。都合十一。同生捕龍澤右京亮。神山三河守。

厚木掃部助。家人關十郎左衛門尉二人は則被

討畢。龍崎家人高知尾隼人佐。並後藤五郎左

衛門尉並高田大夫新發依^レ有^二申方^一赦^三免^二三

人。合十三人。大岐刑部少輔生捕之。

一小山小四郎分捕。

小笠越後守首。大膳大夫息小山九郎首。上洛。

二階堂左衛門首。同家人若菜安藝守子僧。首。

高橋首。已上五。小山小四郎取之。

一上杉治部少輔分捕。

結城中務大輔首。上洛。〔落シ〕比樂十郎首。野田

遠江守家人加藤尾張守首。小林出羽守首。并不

知^二名字^一首。合五。上杉治部少輔取之。

一長尾因幡守分捕并生擒。

香河周防守首は高山越後守ト相討。此外首

二。不^レ知^二名字^一并生擒。桃井刑部少輔首。上洛。

多賀谷。才川伊賀守。矢加井。同四郎。伊曾野。

菊地五郎。鹽谷。蓬田。山田玄蕃。八角兄弟。伊

曾山。礪孫次郎。臼井。上須。篠木。阿美次郎。

加園將監。酒谷。藤本入道。朽木。加園修理亮。

高野兵庫助。河島大炊助。武相山左衛門五郎。

築田四郎。林五郎。明石大炊助。已上三十人。

長尾因幡守生擒後誅伐畢。此内築田四郎。林

五郎兄弟。預^二山河^一之。於^二波手^一討之。

一野田讃岐守分捕。

關彈正首。野田右馬助家人矢部大炊助首。此

一は古川にて取之。野田遠江守家鳩井隼人

佐。是は虜後討之。首合三。野田讃岐守取之。

一千秋民部少輔分捕。

桃井和泉守首。上洛。小山大膳大夫息首。上洛。

小幡九郎首。結城被官須釜首。内田信濃守首。

人見次郎左衛門尉首。結城駿河守首。上落。已上七。千秋民部少輔取之。

一武田刑部少輔入道分捕。

結城七郎首。同次郎首。上落。桃井修理亮首。上落。築田出羽三郎首。梶原大和守首。已上五。武田刑部少輔取之。

一中條判官分捕。

里見修理亮首。上落。大須賀越後守首。蘆田刑部少輔首。上曾三郎首。水谷大炊助首。森戸宮内左衛門首。大野左近將監首。已上八。并不知_レ名字_一首_一。合九。中條判官大夫取之。

一羽河越中守虜人數。

吉田次郎。山田下野守。吉里三郎。筑波法眼息帝妹。千壽丸。小山大膳大夫息僧首。上落。彼五人。羽河越中守取之。後誅之。合首五。

一人々分捕。

一色伊與六郎首。上落。新田羽河越中守取之。

桃井左京亮首。上落。藥師寺安藝守取之。舞木家

人須俣首。細戸式部丞取之。桃井家人長首。一

色家人泉大炊助首。彼二是小幡伊賀守取之。

小栗次郎首。宇都宮右馬頭取之。粗宿坊首。秋

庭三郎首。彼二北條駿河守取之。榛谷彌四

郎首。彌津伊豆守取之。武田右馬助分捕首。不

知_レ名字_一。師但馬をば茂木筑後守家人虜之。

稻村下野入道。長沼淡路守生擒之。當日に被

誅畢。筑波法眼弟子首。根岸彈正忠首。彼二。

森刑部少輔取之。合首十四。

見_レ之ける大名小名僧俗貴賤。哀かな。昨日迄も

詞を_レ通し_レ。雙方見馴れし朋友なれば。拭泪を_レ悲

あへり。大將分之首二十九。若君に添申し。五

月四日。京都に著。若君を濃州垂井の道場金蓮

寺迄。兩佐々木參迎て。同五月十六日。御兄弟

共奉害。是歲十三十二にそ成せ給ひける。自關

東上る處の頸共は。六條河原に被懸ける。若君

の乳夫二人。德利文左衛門。漆桶三四郎共に出家す。

成氏の御事

去程に關東鎮りければ。憲實彌世を物憂思て。徳丹清藏主二人の子を相伴ひ。諸國修行に出給。三男龍若丸をは。伊豆の國に打捨給へは。

(訴カ)

上杉之一門家老寄合て。奉祈京都。關東にも。公方管領なくて不叶事なれば。故長春院殿の末の御子永壽王殿とて。信濃の住人大井越前守持光か隱置申けるを取立。元服有て。左兵衛督成氏と號す。龍若丸を元服させ。管領に居中ける。右京亮憲忠是なり。山内殿に移り。長尾一家の長者共左右に相連て。政務を補佐し。關東無爲になりけるか。蒐る所に。幾程なくて。嘉吉元年六月廿四日。赤松左京大夫滿祐。京都四職の其一にて。無雙の出頭人なりけるか。企逆心。其頃の公方普光院殿義教公を奉討ける。

其前にて一の不思議あり。縦は京都室町殿の御殿の或小座敷に。二寸計の人形數多出來て。猿樂をしけるに。鶺鴒の能をぞ囃しける。諸人不思議に思ひ。集て見て。餘りに珍事なればとて。彼人形散りくゝに成し時。一ッ捕て入鳥籠置しかとも。食物をも不知は。頓て其儘飢死けるとを聞へし。其後程なく。赤松入道の館に有御成て。御遊始りけるに。猿樂等舞臺に出て。鶺鴒をぞ拍子ける。能未終に。軍兵ともを隱置て。切て出。奉討公方を申て。天下黒闇に成はて。本國播州へ馳下。己か城に楯籠る。細川畠山山名各責下。討捕赤松を。義教公の若君義政公を奉備征夷大將軍に。天下如舊の成にけるとは申せとも。已澆季に及驗にて。臣弑君子敵父世と成て。下剋上奴原か。王公貴人をも不恐翔へ有様。時節到來とは申なから。三年の内に忽報て。京都公方の御生害に及はせ給ふ。

因果の程こそ怖けれ。關東の管領憲忠。雖若輩也と涯分執政道を。責已施徳しかは。國豊に民樂む。是は扇谷修理大夫持朝の聲にて在せしかは。持朝以下の御一門。政務を補佐し給へは。國靜にして。十ヶ年の春秋を送迎る所に。享徳三年甲戌十二月二十七日。公方成氏。鎌倉西の御門にて。管領右京亮憲忠を被誅けり。是者父長春院殿持氏。爲憲實か被亡給ふ事を。恨思召ける故に。上杉一家を有御退治可奉止御憤との御企とを聞へし。爰に上杉の老臣長尾左衛門尉入道昌賢。知謀無雙の古兵なりしかは。廻謀其比上杉民部大輔顯定十四才にて。越州におはせしを呼越申し。楯籠上州の境に。與公方家及合戰事已に四ヶ年なり。竟に退治八ヶ國の軍兵を。而顯定移山内殿に。司關東の成敗を。可爲執權之由。自京都御教書到來す。公方成氏終に討負給ひて。打捨鎌倉。下

總國下河邊庄古河の郷に。被移居給ふて。奉中古河御所とける。自是關東大に亂れ。三十餘年在々處々に戰ひ。一日も靜成事なし。委く記さは。筆の海も底竭すへし。されは此時。山内殿顯定。扇谷殿定政持朝子此二人。與公方家の侍。或は敵となり。或者閔となつて。閔關カ爭更無止時。依之國弊民窮。年貢をも不備。王化をも不恐。利潤を先として。暴惡頻なりければ。只國土可滅亡時節到來しぬと歎あへり。

堀越御所御下向の事

兎角自京。被出御馬。被靖四海逆浪。可然とて。勝鏡院殿政知義教公御子伊豆の北條へ御下向あつて。被立御旗しかは。關東中は不及申。伊豆駿河甲斐信濃の軍勢參集。不靡草木も無けり。先達て被下御教書。其書曰。就關東發向事に。可相觸出羽陸奥兩國之軍勢等條々。

一 成氏誅罰未落居之事。

右敵及鋒楯、挿不忠、構私曲之條。非疑貽々於進發不參之族者。一段可被經其沙汰矣。

一 諸軍士多勢無勢之類出陣之事。

依分限に各可勵忠節之處。御成敗於難澁之仁體者。可註進交名。但可隨在處之遠近。子細同前也。

一 關東隣國之士卒等出陣之事。不可准遠國。所示可遲々一條。且令存野心歟。且引組朝敵輩太難遁避其科所詮左右一途に。可仰付近所之輩焉。

一 官軍等猥稱有遺恨之族。着陣之日。對顏之義不快之類。事互開宿意成和融之樣。可專忠功由。(事)被仰出候畢。

一 諸勢雖遂參陣。不請大將之儀。任雅意之事。甲乙人等共以被停止者也。所詮云手負之淺深。云當病之輕重。可有糺明之沙汰焉。

右任條目之旨。嚴密可觸廻之。依忠否之次第。每度載起請文。其詞註進於戰功者。可被恩賞之趣。皆可申合軍兵等矣。

寛正二年辛巳十月日

去程に堀越殿伊豆國御座ける程に。關東の兩上杉。已に公方と奉仰。政知卿有御逝去御子茶茶丸君を北條に留め給ふ。是を後に成就院と申ける。山内扇谷の兩管領。東海の掟を司り。關東の執權たり。中にも山内殿は。上杉の惣領にて。長尾一家の長者とも。家を補佐し。政務を執行ふ。上州越州豆州武州等。分國なれば不及中。其外家來共の領知も廣大なれば。軍勢凡二十萬騎とぞ記しける。扇谷殿は。上杉家にても庶流にて。分國も少し。御家老にも大軍の兵なし。漸々山内の家中。長尾の領知程ならてはなし。少身なれとも。大將定政智謀深き人にて。諸家も重之。萬人傾首寄心。中にも家老太

田備中守入道。智仁勇の三徳を兼たりき。君明に臣正く。國福あれば。其下の軍勢。何も義を專にして畏天命。國土豐饒にして。民富佞人自ら去。賢臣更に集しかば。大家の山内より人の渴仰も多かりき。古河殿は。只公方の御名計にて。御牢人の體なれば。分國もなし。築田一色とて。御家風少々ありしかとも。軍勢も領知も少ければ。増て東國の成敗を綺はせ給ふ事もなし。然とも公方家の舊功を思人々も有繫サスカ多ければ。今更上杉の下知に付なん事も口惜とて。上州武州兩總州之間にて。上杉の兩勢と公方家の軍兵と。國を爭ひ處を論し。挑戰ふ事限なし。

京都軍之事

關東はかく亂しかとも。五畿内西國は靜なりし處に。應仁元年丁亥五月二十六日。京都に合戦起て。天下大に亂ける。其由來を傳聞くに。

其比公方義政公。可續御代無御子。而淨土寺殿を還俗せさせ奉り。爲御養子奉爲續公方しに。其後實子の若子出來給へしかば。公方はを取立申て。御代を續せ參らせんと思召て。御臺所の御方より山名右衛門佐持豐入道宗全を憑せ玉へは。淨土寺殿號今出川義親管領細川右京兆勝元。京極武田以下一味同心の大名を引率し。謀叛を起して。今出川殿を取立公方に仰き申さんとす。山名入道畠山義就以下一味して。若君を取立申さんとて。京都に有て大合戦あり。洛中燒拂けるとぞ聞へし。

古河城の事

其後世治り。公方御代に續せ給ひしに。又關東は彌亂て。文明三年辛卯關東の公方成氏。古河の城をも爲上杉被責落。憑千葉介爲遷千葉城給ふ。世已に雖及澆季。偏に衰行は今の武士の心根なり。弓矢取の本意にて。死を善道に

守り名を義路に不失ところ嗜へきに。僅の欲心を合て、譜代の主君を傾け、聊遺恨を憤て。年來の恩顧を忘れ。忽に背て敵となり。閔となる等持院贈左府公。爲武將以來。戴恩荷德事。諸人皆是幾千万そや。持氏將軍御運盡果て。終に御自害の後。諸家忽に翻て。鎌倉を追落し申。剩古河城さへ落させ給ひし事。如何に口惜く思召けん。然とも末世雖及濁亂有繫サス日月未墮地にしるしには。隨ひ奉る者多くして。其後度々の軍に打勝給ひ。終には君臣和睦在て。文明九年丁酉七月十七日。古河の城へ。還入らせ給ふ。其比は御歳四十二歳にならせ給ふ。即古河の續。關宿の城に。築田中務大輔を被籠。成氏之移らせ給ふは。故下河邊庄司行平か館と聞えし。古河城也。其後城南鶴の巢と云處に在御所作て。自京都御和睦の事調りて。關東の權柄をこそ。御心に任せ給はねとも。兩上杉

も八家も。先古河殿と崇申けり。所謂八家とは。千葉小山見佐竹小田結城宇津宮那須是なり。此古河の城は。昔日賴朝卿の御弓の師と聞へし下河邊庄司行平より。代々住ける舊館なり。城南東方に龍崎と云所に。有源三位賴政之廟。一説伊豆守仲經尋其由來。三位入道於平等院自害之後。郎等下河邊三郎行吉と云人。此地之住人也けるか。賴政の首を討て。衰老の頸を獄門にさらされん事を。無念なりと宣しとて。不違遺言。作山伏之姿。彼首を入桶納笈裡。諸國修行して。後歸本國に。此處に笈を置けるに。此笈少も不動。大石のとく。是は不思議なり。此地に住せ給ふへき驗にやとて。此館の鎮守に奉祝崇一社神。金銀幣帛の祭奠蘋蘩蘊藻の禮物。善盡美盡せり。されは靈神感應。日々に新にして。當城凶事有らんとては。此社鳴動す。其驗揭焉也。此社前に。菩提樹生たり。奇特な

りける事多かりき。

太田道灌之事

(信名藏本太田道灌條以下無之爲是以下宜削去)

爰に扇谷の老臣太田備中守資清入道道眞者。武州都筑郡太田郷地頭也。此人若年よりも文道を心をよせ。政道を佐け。武備を以て亂を治ける程に。關東の諸將靡隨事。吹風の草木を如動すか。道眞の一男鶴千代丸とて。世に隱なき童形あり。九歳の比より學牕に入。十一歳の秋迄終に不歸父家。螢雪の功積て。五山無雙の學者たり。十一歳の冬の比。父入道の方へ文を造て送りければ。其時父始て家へ迎へ取給ふ。其名譽天下に聞へし程に。管領の重寶。政務の器量共可成とて。白山内殿。彼兒を有御所望しかとも。扇谷殿萬金にも不換とて。彼鶴千代を召寄給ひて。頤有加冠。太田源六資長と號し給ふ。後には備中守といふ。道灌是也。此人十能七藝に心を寄て。好所一として無不顯名。さ

れとも。和歌の道は。父の入道には少劣りや侍らんととも沙汰しけるとなん。其後彌鎮^{トコシタヘニ}入學窓。専ら五常守三德。鑑和漢之記錄。賞罰是非を分て。善惡明察にして。慈悲を行給へは。諸將是を重しもてなしける。謀を行は。張良か傳えし道を學ひ。陣を破る事。孫吳か秘する術を得たり。扇谷殿は。山内より分國は少く。軍勢も微なれとも。太田父子の善政を聞及ひ。武功之者集事不知其數。武道未練の族は。自身を退ける。依之人も禮を學。公方管領も聞義諮道給ふ。されは大名高家も重之。萬民傾首をけり。今の如ならは。末々扇谷殿。上杉家を主とり。關東は一向に彼下風に隨ひなんと。人々さゝやきければ。山内殿の御内の侍。并越後の相摸守房定も。偏執の思を成し給ふ。其比資長思ひけるは。上杉關東を治る事三十餘年。果報の淺深により。聊國を治と云とも非眞實。山内殿

雖大名。昌賢死去の後。彼一流も一人而善政を
不爲。欲心熾盛にして。君臣の禮をも不思。只
空他の國を我者にせんと許の貪心多し。國家
亂ん事近かるへし。然者當方に。諸大名可隨付
事無疑。如何にもして取名城。大勢を籠んと宣
ひける。扱資長は。武州荏原郡品川の館に居住
したりしか。有靈夢告とて。同國豐島郡江戸の
館に移り給ふ。勝れたる名地にて。雖無山見下
四邊を。有入海爲諸國往還の便。誠に目出度處
なればとて。此城を靜勝軒と號す。康正二年
丙子の年より始て。長祿元年丁丑四月八日に。
功匠の功成就しけるとぞ聞へし。峻宇高臺は
雲を凌ぎ。松風の黃簾を動す聲も。萬歲をと
なへる響かと疑はる。白峰の金屏に映するは。千
秋の窓雪を含むに似り。寶塔の林間より見た
るは。遠寺を畫くに似たり。釣舟の蘆邊に浮
めるは。歸帆を移かと訝。西湖十景もよそなら

す此城之景を述て。五山の名宿詩を題せり。

景畫

兵鼓聲中築受降
聞君延客日臨廳
風帆多少載詩去
吹雪士峰晴墮江

龍澤

籍々威名關以東
又知天下有英雄
鼓聲不起城邊靜
驅使江山入殼中

景三

江戸城高不可攀
我公豪氣甲東關

三州富士天邊雪
収作青油幕下山

見人聞者賞歎するに堪たり。太田資長。是歲二
十五才迄。數多の城を取しかとも。此城に勝り
たるは無とて。登櫓四方を詠め。一首の和歌あ
り。

我庵は松原遠く海近し富士の高根を軒端に
を見る

と讀れしより。此江戸城此櫓を富士見亭と號

す。

長祿元年。管領廣威院殿年十四歳にておはしけるか。太田入道命して。武州河越の南仙波城を。今の河越三芳野郷に移し。要害の繩張畢て。卽城を築けり。北方此城の鎮守三芳野太政威徳天神の宮居まします。是を三芳野天神と申す。何の御代より御垂跡ありて。如何成靈感之故やらん。御神體は。銅の五本骨の扇を納め奉り。御寶前の嚴飾にも。みな扇の繪に書たり。神祕の事は不知共。風を靡かし炎蒸を去なれば。如何よふ。此城より靈場之北院中院とて。三十餘箇寺並覺へたり。かゝる砌に建られたる城なれば。勇々敷かりし事共也。或記曰。文明年中。道灌江戸城にも河越の如くに。仙波の山王を城の鎮守に崇め。三芳の天神を平河へ移し給ふ。文明十年戊戌六月五日。日河社に視へ。津久戸明神を崇め給。又神國の牛頭天

王。洲崎大明神は。安房洲崎明神と一體にて。武州神奈川品川江戸。何も此神を祝ひ奉る。或人の云。平親王將門の靈を。神田明神と奉崇とかや。又城東淺草寺は。推古天皇御宇定居二年戊子に建立せり。佛法最初の靈場にして。關東無雙効驗掲焉の觀音なり。此道灌をは。世人太公望か再來と云へり。されは。文明八年丙申四月廿三日。豐島合戰に。敵二百餘騎を。五十騎にて。平塲の軍に討勝。同十年戊戌正月五日に。平塚の城の敵七百餘騎を。五十餘騎にて。責落し。伐頸事三百餘。同十一年己亥七月十五日。下總國白井城を責しにも。鶴臺に初搆城。七十餘騎にて。二百餘騎を責落す。文明十五年癸卯十月五日。上總長南城を責落したりしに。味かたの旗の上に山鳩二つ飛來。羽を休しこそ不思議なれ。是等非凡夫之所爲。偏是生摩利支天なるへしと。人みな不思議の思をなせりとか

や。

(朱筆)永享記終

太田最後之事

(朱書)是條非永享記後人
撰人也別本無之可除去

逸政には忠臣多く、勞政には亂子多き風俗なれは。上杉家の出頭人評定の輩共。太田入道。扇谷の執事として。万心に任せたる事を猜し。境に着て吹毛の咎を擧て。讒言する事度々なり。然とも扇谷殿定政。道灌なくては。誰か天下の亂を靜むる者可有と。無直事被思ければ。少々の咎をは耳にも不聞入給。只佞人讒者の世を可亂をそ悲給ふ間。道灌の出頭も自若也。かゝる所に道灌江戸河越の城を構え。その普請に心を勞して隙なかりしかは。久敷出仕もせさりければ。彼讒臣共よき隙也と悦ひ。道灌父子爲可退治山内殿。構要害。候條無疑と中上げる間。自山内此事を扇谷へ有談合。定政大に驚き。事實ならは一家不和の基。國土亂逆の端たるへしと。度々被下專使しかは。

道灌父子。嗟乎堅子不足與謀。近年當家不才庸愚の者。爭政務亂眞なれは。讒者の糺明も可有。只忠功之下死を賜て。衰老の尸を曝さん事。何の傷か有へきとて。兎角の陳謝にも不及。依之讒臣頻なりければ。文明十八年丙午七月廿六日。扇谷殿定政。相州糟谷へ被立御馬。道灌を退治し給ふ。山内殿顯定も。鉢形の城より加勢として。高見原迄旗を出されたり。去程に道灌入道打て出たりしを。鎧にて突倒し。首をとらんとしければ。道灌其鎧の柄に取付て。かゝるときさこそ命の惜からめ兼てなき身と思ひしらすは。

只忠のみ有て咎なかりつる道灌。一朝讒せられて。百年の命を失ふ。彼左納言右大史。朝受恩夕賜死と。白居易か書しも理哉。道灌の馬廻齋藤加賀守安元をは。分別才覺軍法故實有とて定政へ被召出けり。扨河越へは。朝良の執

事曾我兵庫頭を被籠。江戸城には同豊後守を
そ居住せられける。

山内扇谷不和之事

翌年改元有て。長亨元年丁未に移る。其比山内
顯定憲房有談合。扇谷修理權大夫定政を可有
退治と聞えける故。道灌か子息太田源六郎甲
州へ忍出て。山内殿御下知に隨ひ。軍勢を催し
ける。關東八州の大名小名。道灌有し程こそ。
扇谷殿へ志を寄んに。いつしか扇谷の柱石を
摧ぬ。因何扇谷殿へ可參とて。みな山内殿へ
馳參る。定政朝良は糟谷有りなから。河越に會
我を籠。小田原に大森式部少輔を置。僅に三
百騎計にて。八箇國の大軍を覆さんと。少も不
騷氣色なり。定政使者を古河の公方へ參らせ。
今度太田入道當家へ無貳忠功を積。度々の勞
勳不可勝計。然とも山内へ對し。企逆意候間。
加誅罰候得者。無程自山内當方退治之企。抑依

何事忘一家之好。可討定政支度難得心。東八ヶ
國滅亡の基なり。縱自山内雖有退治當方之
企。於御所者任正理。當方へ被成御下知於御
旗本可定安否由。盡言被申ければ。古河公方政
氏有御納得而。定政へ爲御加勢及御動座しか
は。上杉譜代之老臣長尾左衛門尉景春入道伊
玄。定政へ馳着ける。是を初として。左右良臣
何も勝たる義士有ければ。縱小勢の味かたに
ても。敵何万騎ありとも不足恐と。案のなか
に推算して。氣色かはらすをはしける。長亨
二年戊申二月五日。山内の軍勢を引具して。顯
定憲房兩大將にて一千餘騎。相州實蔭原に出
陣す。依之定政僅逞兵二百騎相具して。長途を
一日一夜に打越て。填然として少も不擬議。不
憚敵を勇銳追かゝりて。関を三度作て。颯と亂
て。追つ捲つ半時計戰て。兩陣互に地をかへ。
南北に分て。其跡を願れば。原野染血。山林易

縁。暫休て又亂合て。縱横無碍戰しか。山内大勢。扇谷の小勢に打負て。四方に亂て落行は。定政も以小勝大。喜悅の眉を開つ。凱歌を唱て還りける。

高見原合戰之事

其後所々の糺合止時なく。不分晝夜戰けり。就中長亨二年戊申六月八日。山内殿上杉民部大輔顯定同兵庫頭憲房。須賀原へ出陣す。坂東八ヶ國の勢兵。我もくと馳集て如雲霞。甲冑の光は輝わたりにて。明殘る夜の星の如くして。烏空の陣をぞ堅めける。扇谷殿上杉修理大夫定政子息五郎朝良。古河の公方の御動座を申し成し。打立御旗。長尾景春入道參りしか。小勢なれとも家の安否身の浮沈。唯此一軍に可定と。各勇進て。敵東西に有とも不思議也。然とも。定政弟ならひに子息五郎朝良若輩にて。今日初の戰なれば。眞先かけ。長尾新五郎同

修理亮に掛合。散々に追立られて。顯定憲房是に横合に掛て。散々に追立て。諸軍機を得て拔連て掛る所に。定政高處に馬を打揚。追返せと下知して懸定^{足イ}を出し玉ふ。左右の軍兵大將の前に馳拔々々。一度に破亂離^{ハラリ}と切てかゝる。喚叫に戰ふころ。さしも廣き武藏野に。餘許を聞へける。かゝる處に。長尾伊玄入道藤田^{藤田イ}□□と掛合追散して。其軍勢を其儘横に立直し。山内殿の旗本へ突て懸る。顯定憲房兩方の敵に追付られて。終に打負引退く。其後懸定政。公方の御動座を申成。高見原へ出張す。顯定聞て即押寄攻給ふ。扇谷の先手の軍兵被懸惱。引色に成ける所に。定政と伊豆入道。荒手を替て攻立ければ。顯定の兵戰疲て引退く。是迄は扇谷殿毎度雖乘勝。人馬皆疲ぬ。若黨不知其數被討けり。されは山内方は何も大名高家にて。軍勢澤山なれば。縦軍に負る事度々なりとい

へとも。分國廣ければ。重て大勢を催し退治せしに。最容易るへしとぞ申ける。

早雲蜂起之事

爰に伊勢平氏葛原親王の裔孫伊勢新九郎長氏入道宗瑞と云人あり。備中の國の住人たりしか。壯年の頃より京へ上り。公方に奉仕しける。少年の初より漁獵を好て。身を山林河海に寄て。馬に乗ては惡處を落し。越巖石事得神變。偏造父か執御。千里に不疲も是には不過とぞ覺ける。水練は憑夷か道を得て。驪龍領下珠をも自奪つへし。弓は養由か跡を追しかは。弦を鳴らして遙なる樹頭の棲猿をも落しつへし。射巧にして人を懷け。氣健にして膚不撓しかは。戰場に臨度毎に。堅に當り強を破て。敵を靡けすと云事なし。されは似たるを友とする事なれば。其頃伊勢國に荒木山中多日荒河佐竹大道寺早雲。以上七人何も不劣人々也。此

勇士共常に親遊ひけるか。或時七人一同に關東へ弓矢修行に下ける時。七人神水を飲て誓けるは。此七人如何なる事有とも。不和の事有へからず。互に助成して軍功を勵し高名を極めつへし。中にも一人勝て大名とならば。殘人々家來と成て。其一人を取立。國を數多可治とて。各東國に下つく。思々に有付ける。伊勢守新九郎は。駿河の國司今河氏親へ仕へてけり。度々の戰功ありければ。今川殿其功を感じ。富士郡下方の庄を賜て。高國寺城に居す。于時長享二年戊申十月、葦山へ移ける。此時伊豆國は上杉の分國也。幸高國寺より程近ければ。如何にもして伊豆國を討取はやと。宗瑞常に思ひけるに。伊豆國に堀越御所とて。公方おはします。政知の御子也。成就院殿是也。彼御所時に外山豐前守秋山新藏人と云忠功の者有しを。佞人放埒の奸臣共。渠か出頭を猜み讒

言しけるを。御所御運の末にて。無御糺明も二人の侍を討玉ふ故。家中の面々大に騒ぎ。各心を置合て。國中更に静ならず。蒐る時を得て。早雲伊豆國に湯治して有しか。此形勢を見澄して思けるは。今日此比。兩上杉の合戦に。伊豆國中の軍兵并御所侍共。跡を拂て關東に發向し。殘る人々纔なれは。早雲大に悦ひ。彼荒木山中大道寺多目荒川佐竹六人の兵を招きぬ。今川殿へも此旨を申。加勢を請。伊豆へ急發向せり。御所方には俄事にてあるなれは。無可楯籠兵。如何せんと驚て。即山林に引籠らせける。御所の侍關戸播磨守と名乗て切て出。數^シ數^シた^シか^シひけるか終に討死してけり。其のち堀越殿も不叶して自害ありしかは。早雲伊豆へ推移り。北條に旗を立。韭山に在城し。家を興して。竟爾五代の榮耀を開き。武勇の名をそ殘しける。

右此書浪花之市中ニ得之終日ニ寫之
于時寶曆十年^{庚辰}十月廿五日也

永享記大尾

續群書類從卷第五百七十六

合戰部六

永享後記

永享の末かとよ。關東公方管領の中。不和に成給ふか。持氏たちまち亡ひ給ふ。安房守憲實は。隨分の忠臣成しか。如何おもひけるにや。去ル正月の比。都よりの御使に。柏心和尙下り給ひし時。持氏の御振舞ありのまゝに申上し程に。武田刑部入道佐々河川野等の諸勢。かさねて責下り。關東の諸家にふれ廻し。永安寺にて終に御生害ありし。若公北の政所も皆ほろひ給ひ。殘る公達兩人。日光山にかくれ給ふ。いつまでかくてあるへきとて。永享十三年三

月四日。常陸國中那濃庄木所の城にて義兵を御起し給ふ。其時小田の一門熊野別當朝範のすゝめにより。其兄筑波法眼玄朝弟美濃守定朝同伊勢守持重以下舊功の輩。木所之城に馳集る。同國小栗へ御出有。是も分内せはしとて。同十八日。伊佐の庄へ御出ありしを。同廿八日結城中務太輔氏朝。子息七郎御迎に參り。結城へ御座を移し奉る。同卯月十八日に。中畑へ御出。長沼の淡路守御供をは。不申。忽に陰謀を起し。己か本城に引籠る。氏朝大に腹立。時日不廻をしよせ。合戰度々およひける。桃井

岩松打立。七拾日責戦しかとも。長沼か城名
城にて。終に責不落して。筑波法眼以下の味
方。數ヶ所の疵を蒙る。本城へ引返す。同十四
年。改元して嘉吉元年卯月十六日。惣責に落城
して。結城氏朝子息七郎其身朝兼氏朝の弟原
の三郎光義駿河守朝助以下の侍。悉討死或は
自害しけるに。若君達落給ひしを。長尾因幡守
生捕申て。御上洛有しか。美濃國垂井の金輪寺
にて。佐々木太夫参りてさしころし奉る。其
弟を。めのとかいたきて。信濃國に落行。大井
越前守源持光を頼。山中にて養育し奉る。其後
都公方義教も不慮に生害に逢給ふ。其比古老
の歎きけるは。あはれむかし康暦元年の事に
や。尊氏の御孫永安寺殿。御在世の時。御威勢
たくましくて。十一ヶ國隨ひ申奉る。御子あま
たおはしまし。奥州へも御下向有。篠川の御
所と聞へしは。彼氏滿の一男滿貞の御事也。關

東をたなころのうちに。已に京都を
責落し。一天下を一旗にとおほしめしたち給
ふ。そのころの管領上杉刑部太夫憲春に請合
られしかは。上杉承り大に驚き諫しは。扱は
此殿は武威にはこり。終に御身を亡し給ふへ
し。其故は等持院左大臣殿。天下を治め。京鎌
倉に御子を置。行すへまでも兩方水魚のおも
ひをなし。天下安全と。ちかひ給しそのかひも
なく。幾ほとなくして。惣領家を亡し給はし。
又京方の御一門。又は普代の大名有。縦一旦
勝事有も。却て關東も亡へし。只兩口の鳥のつ
たなくて。毒のむしを食ひて。一つの體を失ひ
しに異ならず。足利家の絶事なるへしと様々
申上ける。去にても。故尊氏の掟をそむき。京
都へ弓を引給はん事。歎てもあまり有。たと
ひ打ち給ふとも。關東の諸家皆悉滅ひん事
うたかひなし。其上公の御元服有し時。左馬

頭の御望ありしに。左馬頭あかされは。去ル應安六年十一月廿九日。鹿苑院殿未左馬頭にて御座候か。忽にあげられ。君を左馬頭に任し給ふ事。御懇情の有難きは。つゝの間に忘給ふへき。方々天罰をそれ有と。かきくとき諫しかとも。聊用不給。已に上洛の御用意有し時。憲春いさめかね。出家し閑居せんとおもはれしかとも。いやとよ。弓取の不覺なるへし。しよせんかなふましくよしの諫狀を奉り。自害せんとおもひつめ。女房を近付。いかに女房所望の候かなへ給はんかと云。女房さる人なれば。何事にか君か事のかなはさらんや。とくとくとのたまへは。上杉よろこひ。今夜尼に成て得させ給へと有。女房聞て。こは不思議の所望かなと。歎かしくおもへとも。男に隨ふ女のならひ。いかてかそむき可申候。さりなから物くるし(ひ)をしてもや有。かくのたまふかと。色

色心見けれども。さもなし。とかくすれば夜更る。とくこしに打乗り。脇と云所のびくに寺へ行。尼に成けるそあはれなる。扱上杉は持佛堂を入。内より戸さして。公の御謀叛難叶由の諫狀。一通書置。康暦元年七月十九日。自害して失給ふ。氏満聞召。大に後悔有て。忽京都の望を留給ふ。彼の壹人の自害により。諸人の命をたすけ。國土安全成しをもて。是を大沼院高源道珍と申て。いまに鎌倉中奉吊は彼の憲春の御事也。憲實も正敷一門をかし。いかにためしなく。二代の主君を責じしけるそやと。諸人口々につふやきしかは。安房守もさる人にて。いよく後悔にて。さすかに世になからへんも耻敷思ひ。二人の若公諸共に出家し。兄を。は徳丹。弟は清藏主。我身は長棟庵主と號し。衣鉢を持て。大衣を着し。佛道修行に出。いくともなく失給ふか。後に因幡國にて。應仁

の比終り給ふと聞へし。さるあいだ。京にも義
教の公達を。公方に仰き奉り。又關東にも。上
杉太夫持朝。長尾左衛門兼仲以下相計。持氏の
末子永壽王丸殿。信濃にしのひたまひしを取
出し。成氏と號し。公方に仰き。又安房守三男
龍若丸。伊豆に捨置しを呼越。上杉右京亮憲忠
と號し。長尾一家補佐して。十年の春秋を靜に
送りむかへける。又結城氏朝父子三人自害し
ける時。三男長朝北殿と號しけるは。武州へ出
發し。四男成朝は其比三歳なりしを。家老多賀
谷彦四郎抱取て。佐竹へ遁出。十年の春。十三
才にて鎌倉へ申立て。則本領安堵し。結城へ歸
りし。鎌倉殿より一字被下。結城七郎成朝と號
し。普代のやから來集り。威勢父祖にをとら
す。或時は在鎌倉しけるに。御前近く寄り。直
に往事を語り。只涙計にて有しか。扱も上杉
は。公方の御ためにも。父の御敵。結城にも大

敵也。如何にもして。憲實をこそうたんと思へ
とも。出家して死ぬ。もし死もやしけん。憲忠
は彼か子也。安房守におとるまし。いさや討
たん尤ホナマかのと談合有て。享徳三年十二月廿七
日。結城成朝大將にて。鎌倉西御門管領の亭へ
打て入る。成朝か家人に。武州牢人金子と云も
の兄弟あり。大手より責入。憲忠を害し。御首
取てまいりたり。成朝大にようこひ。則かれら
をめしつれて。御所中へ參上仕。御白洲に畏
る。彼兄弟は無位の者なれとも。憲忠の御首平
地置へからすとて。たゝみを敷。彼兩人を置。
公方兩人の名字を御尋あり。成朝かねことは
不呼。結城家老の多賀谷か同名に被成。多賀
谷とめす。此兩人則常陸の下妻の多賀谷の元
祖祥永祥賀兄弟是也。依之多賀谷の庭たゝみ
と云は此由來也。又家の紋に瓜を用し事も
彼の首に敷きたる紙に。瓜のことく血の付た

るゆへに。此家のもんに定る也。此時上杉大夫并長尾左衛門入道。憲忠の弟兵部少輔房顯を取立。同月廿八日。鎌倉赤坂にて合戦あり。成氏の御方小田中務大夫結城七郎先陣して。ことごとく。おひちらすといへとも。敵猛勢にして。結城以下數ヶ所の疵を蒙り。馬もいられて。かち立に成。武州さしてをちて行。成氏御めしかへの鶴毛の御馬も成朝に給りし。かくて翌年正月廿七日。長尾上杉長野光阿彌を先かけの大將として。武州の原に陣を取。御所かたに。結城筑波定て。安藝守松川左衛門大森式部大夫以下の侍。命を塵芥。義は金石と思ひつめ。入亂合戦し散々に追ちらし。明日廿二日。同國府中へ押寄る。御所方の人々。昨日の戦に草臥。ことごとくかけまけ引退。それより相州武州の一揆とも。管領にしよくするもあり。又總州上總野州の待とも。御所かたに心

をよせ。或は管領かたに成。己か城に籠り居ける。長尾昌賢謀を廻し。康正元年十月十七日。八ヶ國の軍兵を催し。武州瀧山の城主大石源左衛門を先かけの大將として。岡部の羽繼原に陣を取。御所方にも木戸將監一色を初め。結城筑波二階堂高相馬山名佐野千葉介小山四郎加勢しければ。原高城ことごとく馳加り。魚鱗に陣を張たりし。鎌倉勢三方より押寄。荒手を入かへ。責ければ。御所かたに。むねとゝたのみ給ふ野田齋藤討死し。成氏も御手をおひたまへは。一陣破れて殘黨不全。ことごとくうちまけ引返す所に。千葉介同城主大須賀大夫荒手となりて。佐々木本郷足達本庄爰にて討死しける程に。管領方二度めの戦に討負相引にこそ引にける。羽繼原の一戦是也。

永享物語終

上杉憲實記

永享己未十一年。管領上杉憲實惣持氏于義教。持氏。以鎌倉叛。義教承綸命發兵討之。持氏恃宮根險戰敗績。二月十日持氏義久於永安寺自害。春王安王遁日光。

去應永二十三年持氏鎌倉ニ復歸シテヨリ二十余年。關東靜謐ニシテ。京都義持ヲ貴ヒ。年々ノ使節不絶御中ヨカリケリ。應永卅一年義持ノ一子將軍ニ任シ。大將ヲカケ給ヒシカ薨逝シ給フ。義持ノ歎キ中々申モ愚ナリ。義持ノ林光院義嗣ヲ先考義滿公寵愛シ。義持ヲ捨テ義嗣ニ位ヲサツケント。既ニ北山ノ行幸ヲナシ奉ル。義嗣ノ天命至ラルニヤ。三月八日行幸有テ五月六日義滿公薨シ玉フ。是ニ依テ義持義嗣不和ニシテ互ノ參會無リケリ。義持寛仁ナル生質ナレハ。父ノ時ノ如ク萬事不易レトモ禍ハ下ヨリ起ル事ナレハ。互ニ心ノ下紐解ヤ

ラテ。義嗣二十五歳ニテ薨シ玉フ。三男義教ハ出家セサセ青蓮院門室ニ入リ給。玉泉ノ流ニ心ヲ澄シ給フ。角テハ嗣君ナカリケリト歎キ餘ニ。持氏ノ長男賢王丸ヲ養子ニシ御代ヲ渡シ給ワントノ御心ツキケリ。此由關東ヘモ達シ。ヤカテ上洛可有ナント營アヘル處ニ。三管領四職ノ人達一同ニ思ヒケルハ。現在ノ弟ノマシマスニ是ヲ指置。遙ニ遠キ縁ノ持氏ノ子ヲ可立様ヤ有トツフヤキケル。義持聞召。如何アラント仰ケレトモ。持氏ノ御子ニ讓リ給ワシ事ハ意ノ外ニ候由達テ申ニヨリ。義教ヲ落墮セサセ給ヒ御位ヲ讓。正長元年正月十八日薨逝シ給フ。永享元年義教征夷大將軍ニ任シ。天子ヲ守護シ。三管領四職モ其命ニ順ヒ。寵愛シ奉ル。持氏心ノ狹キ人ナレハ。是ヲ心ニ服シ。義持ノ如クニ使節ヲモ上セス。政道モ雅意ニ任セ。京都ヘ尋無間事。義教モ持氏ノ恨

ヲ知リ給ヘハ。天下ヲ亂ンハ此人可成ト思コメ給ヘリ。同四年義教富士一見ノ爲ニ駿河ヘ下リ。公家武家少々供奉シ今河範政響應沙汰シケリ。是モ鎌倉逆威ヲ振ハ、速ニ下向シ誅伐セン爲ノ支度ナリ。同十年ノ春持氏管領ヲ呼被仰ケルハ。賢王丸今年十三歳ナリ。元服サセンニ烏帽子親ニスヘキ人天下ニナシトノ給フ。上杉安房守憲實申ケルハ。天下太平國土豐饒ナル事。當家ノ初メ尊氏怨敵ヲ悉ク亡シ。二人ノ御子ヲ京鎌倉御所ト定。互ニ扶ケト成事車ノ兩輪烏ノ兩翼ノ如シ。然ルニ義教御世ヲ被召テヨリ不和ニ成。使節ノ往來モ無。是諸人ノ愁ル處ナリ。所詮和睦有テ若宮ヲ京都ヘ被登セ。京ノ御所ニテ御元服マシマサハ。當家長久ノ基タルヘシト理ヲ盡シテ被申ケル。持氏氣色替リ。是非ノ問答ニモ不及。管領モ重テ申ニモ不及退出シケリ。其後近習ノ人ヲ

召テ房州異見如何ント御尋アリ。自古諂諛ノ人ハ多ク。忠直ノ臣ハ稀ナル事ナレハ。皆云管領ハ京都ヲ最負仕候間。心ヲ置レ御聞可被成。義教帝都ニマシマセハ。威重ニ似候ヘトモ。當家八州ヲ領。出羽奥州其命ニ順ヘハ牛角ノ位ニ候。然ヲ京都ノ御所ヲ烏帽子親ニ取覽事。口惜カルヘシト。後ノ禍ヲ不願旨ヲウケ意ニ順ヒ申上ケレハ。持氏ノ運ヤ盡ケン。面々ノ申様其謂有。賢王丸元服ノ事禁裡仙洞ヘ申サシモイト安キコトナリ。去トモ義教ト不快ナレハ上洛シテ不入儀也。先祖八幡太郎義家ノ例ニ任。八幡ヲ烏帽子親ニ可取ト。若宮社頭ニテ元服シ義久ト名乗セ給フ。管領ハ出仕ヲモ止。御祝ノ坐ヘモ不被召。憲實カ恨骨髓ニ入深カリケレハ。頻ニ當職ヲ上表セラル。讒臣國ヲ亂ス習ナレハ。憲實ハ管領ヲ上表シ。謀叛ヲ發シ京方ヲセラルヘキノ由鎌倉中ニ風聞ス。

持氏聞テ大ニ怒リ。憲實結構奇恠ナリ。時日ヲ不移誅戮スヘシ。軍勢ヲ被催憲實鎌倉ニ不叶シテ。武藏ノ國ヘ逃下。城郭ヲ構籠城ノ支度ナリ。角テハ始終難叶ト思案ヲ廻シ。京都ヘ檄ヲ飛シテ申ケルハ。持氏謀反ヲ企。京都ヘ攻上覽トノ催ナリ。某シ教訓申シケルハ。御旨ニ逆ヒ。舊宅ヲ拂ワシ。武藏ノ領地ニ楯籠候討手ノ御勢下向アラハ。一族ヲ催シ。可盡粉骨ト申上ケル。義教披見シテ言語道斷ノ事ナリ。持氏多年緩怠ヲ致トイヘトモ。一家ノ好ニ付。宥恕仕候處ニ。剩軍兵ヲ催。京都ヘ攻入覽トノ結構奇恠ナリ。急キ討手ヲ可差下トテ先傳奏ヲ以テ此旨ヲ禁裡ヘ奏セラル。諸卿僉議シテ永享十年八月廿八日ノ宣旨ヲ被下。可令追討從三位源持氏トノ綸言ナリ。此上ハ諸大名ニ仰テ軍勢ノ先後ヲ定ム。上杉兵庫頭ヲ惣大將トシテ數萬ノ勢ヲ被催。一色修理大夫ハ若狹丹

後參河遠江之軍勢ヲ率シ。滿方信長ヲ前後ニ打セ。六萬餘騎ニテ向ワル。斯波左兵衛尉ハ越前尾張能登越中ノ軍兵ヲ引率シ。七千餘騎ニテ被下。土岐美濃守ハ國中ノ勢三千余騎ニテ向ワル。小笠原美濃守ハ四國ノ軍勢ヲ召上セ。後陣ニ被爲打。其外諸國ノ大名小名。我モ我モト面々ノ家ノ旗指物。思ヒ／＼ノ馬物具ニテ。我先ニト急ケル。又關東奥州ノ諸侍ニ便宜ニ付。味方可參由ノ御教書ヲ被下。持氏モ關東八ヶ國ノ勢ヲ催。出羽奥州ノ軍兵ヲ被召數萬騎ニテ宮根山ヘ出張シ。險阻ヲ前ニ當ル敵ヲ追落サントノ支度ナリ。上方勢三島ニ付矢合シ。一ト分ハ伊豆ノ御山ヘ廻シ。一ト分ハ足柄ヘ廻リ。一度ニ攻入覽ト日々夜々ニ攻戰。寄手大勢ナレハ打トモ射トモヒルマス。攻入跡ヲ取切覽トセシ間。角テハ叶マシ。鎌倉ニテ可拒トテ引入給フ。軍ノ習勝ニ乘テ進時

ハ鼠モ虎ト成。利ヲ失ヒ引退トスル時ハ。虎モ鼠ト成事ナレハ。付順フ軍勢綸旨ニ事ヲヨセテ。降人ト成テ出者多ク。或妻子ヲ退ントテ捨鞭ヲ打テ逃行ハ。鎌倉中ニ有勢百騎ニ不過。角テハ敵ニ被捕ナントテ永享十一年二月十日卯ノ刻ニ。永安寺ニ入御自害アリ。義久モ報國寺ニテ自害シ給ヘハ。御供ノ侍三十余人一所ニテ自害シ畢。折節吹風烈シテ。鎌倉中ノ堂舍佛閣谷七郷在家迄一字モ不殘灰塵ト成。中ニモ哀成シハ。永安寺三重ノ塔ニ御臺所ヲ初數十人ノ女房達形ヲ隱御坐シヲ。其トハ不知下ヨリ火ヲツケ燒殺ケルコソ悲シケレ。春王殿安王殿ハ乳ノ女房甲斐々々敷テ。下野國日光山ヘ落シ衆徒ヲ頼深ク隱奉ル。京勢ハ思ノ外ニ早速ノ大功ヲ成。鎌倉ノ制法憲實如本被仰付。各上洛シ御暇被下。各々國々ヘ下リ畢。十二年春結城七郎藤原光朝。迎春王安王保結城

(ナカ)
ノ上杉憲實攻圍ミ。十三年夏四月擒春王安王。光朝一族死シ。春王殿安王殿容顏美麗心操閑雅ナレハ。一山ノ衆徒イツキカシツキ奉ル故ニ兩君存生ニテ坐ス山世上。風聞セリ。結城七郎光朝是ヲ聞テ累代ノ主君ニ御坐セハ。御迎ニ參リ結城ノ館ヘ入申籠城ノ支度シ。京都ヘ訴ヘ。哀此君ノ御命ヲ扶ケハヤト計ケル忠誠。流石武士ノ義ヲ先トスル道ナレハ。皆人感ケリ。安房守憲實鎌倉山ノ内ニ居テ此山ヲ聞梅檀ハ二葉ヨリ伊蘭ヲケシ。椽梓ハ七年ニシテ衆木ニ勝ケリ。此人幼少ナリトイヘトモ將軍ノ末ナレハ長生シ給ハ。人ノ思ツク事可有。其上我爲ニ怨敵ナレハ曾ヲサキ肝ヲ拔テモ可取ト思。急京都ヘ注進ス。義教聞召。禁中ヘ奏シ春王安王可令誅伐之綸旨ヲ申シ下。御教書ヲ添安房守ニタヒ給。安房守此山觸聞セケレハ。關八州ハ申ニ不及。北國出羽奥羽ノ

軍兵夜ヲ日ニツイテ下野ノ國へ馳來ル。其勢十萬余騎。結城ノ城ヲ十重廿重取卷ク。如何成鐵廓銀城成トモ。此大軍ヲ可防トハ不見。去トモ此城ハ前ニ大河有。後ニ大城有テ大船ヲ浮へ。烏ナラテハ難通。楯籠入ハ結城七郎光朝。次男八郎光義。瓦江彈正顯憲。千葉備後守成吉。長井齋藤兵衛尉。高尾權太夫。松井筑前守。藤岡左兵衛尉。今河修理助。小山善太夫。高崎四郎左衛門尉。大田和備中守。石橋太郎兵衛尉。久堅主膳。宮井左近太夫。森彌兵衛尉ヲ始メ。宗徒ノ侍五百余騎役所々々ヲ請取。日番夜廻リ其透ナカリケレハ。寄手大勢成トイヘトモ攻寄スヘキ様モナク。唯大手ニ向テ矢軍計ニテ日ヲ送ル。光朝申ケルハ。兩軍未合戰ヲ見給ハス。イサヤ軍ヲ御目ニ掛ント。兩君ヲ高矢倉ニ登セ置。大手ノ戰場廣カラネハ。貳百余騎ニテ家々ノ旗指物ヲ指。大將軍ニハ光朝サ

ヒ月毛ノ八寸余ノ駒ニ白覆輪ノ鞍ヲカセ。小櫻威ノ鎧著。半月ノ指物ヲサシ。打乗テ大手ノ門ヲ押披。團扇ヲ上テ衆ヲ諫。眞先掛テ切テ出ル。追ツ。マクツ。懸ツ。返シツ。四方八面ニ當ル風情。焚噲ヲモ欺クヘキ程ナレハ。敵モ味方モ目ヲ驚ス計ナリ。左右ニ堀有テ互ニ加勢モ叶ネハ。一時計ノ戰ニ。城中每度勝ニ乘ル。光朝ハ敵ト馬上ヨリ組テ落。押ヘテ首ヲ取。太刀ノ鋒ニ貫キ高ク指揚。兩君ニ見セ奉ル。從是兩方互ニ引テ光朝兩君ノ御前ニ參レハ。今日ノ振廻由々敷トノ給ヒ。諸卒ヲモ御前ニ被召。面々ノ忠戰ヲ感シ。光朝ヲ始皆御盃ヲ被下ケレハ。各涙ヲ流シ鎧ノ袖ヲヌラシケル。名城ナレハ數十日ヲ經テモ寄手モ遠卷シテ不寄攻。城中モ打テ出。寄手ヲ可掃術モナク。秋往霜來テ無程荒玉ノ春ニ成ヌレハ。早城中ノ糧米盡。如何セント智慮ヲ廻ストイヘトモ。十重

ナ脱々

二十重ノ圍ヲ可破様モ・ク。寄合テ互ニ心ノ臆ヲ語ルニ。武士ノ家ニ生。主君ノ爲ニ一命ヲ弃ルハ人臣ノ本懷後世ノ思出可成ト。一同ニ申ケルニ。暫可存命世ノ憂ヲ慰ケルツ哀成。四月ニ成ヌレハ。彌兵糧乏クシテ。人皆氣モ屈シケレハ。光朝大手ノ矢倉ニ上リ。大音揚テ被申ケル。兩君ノ爲ニ死ナン事元ヨリ思儲タル事ナレハ。命ハ露塵ヨリモ不惜。然トモ光朝ヲ始老母ト幼キ女子ヲ持ニテ候。彼等ヲ殺サン事不便ナレハ扶ケ給ハンヤ。纔ニ廿人計ノ事ナレハ。城内ヲ出シ申サン。曲テ宥恕シ給ヘト呼ワル。憲實聞テ越後一揆ノ中ヨリ爽カニ鎧タル武者ヲ撰出シ。城近ク乗寄返答申サセケルハ。女性ノ儀ナラハ幾人モ出シ候ヘ。命ヲ扶ケ縁ヘ送り奉ラント申ケル。光朝悅テ兩若君ヲ姫君ノ形ニ作り。女房廿人ノ内五六人同様ニ出立。輿ニ乗。城中ヨリ出ス。憲實諸卒ニ向テ

下知シケル。此輿ノ内兩若君ノ御坐ス事可有能ニサカセト申ケル。我先ニト輿ノ戸ヲ開キ見ニ。常ニ鎌倉ニテ見馴申セシ君ナレハ。爭テ見損ヘキ。兩君是ニ御坐ス由ヲ申。異ル輿ニ乳母女房乗ケルカ。輿ヨリ倒出テ。其ハ若君ニハアラス。我カ養ヒ女ナル由ヲ申セトモ耳ニモ不聞人。闕ヲトツト作ル。光朝是ヲ聞扱ハ若君ヲ敵見露ヌト涙ヲ流シ。イサヤ人々切テ出討死セント。此世ニ殘千年ヲ振トテモ夢幻ノ如ナリ。増テ城中ニ圍幾程ノ命ヲ可述哉ト。四月十六日辰ノ刻ニ。五百余騎門ヲ開打テ出。大勢ノ中ヘワツテ入。今日ヲ最後ノ合戰ト思切タル事ナレハ。一族郎從五百余人。四角八面ニ切テ廻ハ。二時計ノ戰ニ寄手千余人討ニケリ。去トモ荒手ヲ入替々々息ヲモ不次攻戰ニヨリ。次第々々ニ味方ハ薄ク成。未ノ刻計ニ光朝兄弟討死スレハ。相隨兵一人モ不殘討死ス。

前代未聞ノ忠烈ナリ。安房守ハ思ノ儘ニ兩君ヲ生捕。上杉兵庫頭角ト申セハ。急キ此由京都ヘ注進ス。義教大ニ悅ハセ。春王安王ヲ輒生捕事莫大ノ勳功ナリ。堅ク誠京都ヘ可差上トノ仰ナリ。兵庫頭籠輿ヲ抬若君ヲ乗セ奉リ。乳母女房并德利文左衛門漆桶三四郎兩人ハ乳母ノ夫ナリ。是等張輿ニノセ警固ノ武士ハ長尾因幡守ヲ始。百余騎ヲ添。京都ヘ上セラル。四月下旬常陸ノ國ヲ立。五月上旬鎌倉ニ著。兩若君先考御腹被召所ヲ御覽シ。双眼ニ涙ヲ浮ヘ。誦經念佛シテ。二親ノ菩提ヲ訪仰ケルハ。親ノ第三年ニ思ワサルニ其ノ廟所ヲ拜申事不思義ノ孝行ナリ。我モ今月中ニ害セラレ。冥途ニテ父母ニ逢奉ント仰シニ。警固ノ武士共皆鎧ノ袖ヲヌラシケル。鎌倉ヲ立伊豆國宮根山足柄宿著給フ。此山ハ先考ノ合戦セシ所ナリ。遂ニ此山ヲ越給ハスシテ空成給フ。我等ハ越

行果報哉ト和口シ給ヘハ。安王殿兄ニヲトラシト高ラカニ仰ケルハ。我モ思事有。昔賴朝ノ御時。曾我十郎五郎建久四年五月ニ兄弟二人此山ヲ越テ。親ノ敵ヲ討。名ヲ後代ニ舉シナリ。其モ五月。今モ五月。其モ兄弟。我等モ兄弟。越シモ此山。通モ此道ナリ。我等モ親ノ敵ヲ討テ。本望ヲ達セン事。何ノ子細カ可有ト。高ラカニ仰ケレハ。警固ノ人々はヲ聞。皆舌ヲ振テ御顔ヲ詠居タリ。後ニ思合スレハ。義教將軍赤松カ爲ニ弑セラレ給フハ。嘉吉元年六月廿四日ナリ。安王殿ノ憤リ天ニモ通シケルニヤ。五十日ノ内不慮ノ害ニ逢給フソ怖シケレ。日ヲ經テ美濃國青野カ原ニ著給時。京都ヨリ急ノ飛脚注進狀ヲ持因幡守ニ渡ス。若君御覽シ。京ヨリ注進狀ハ定テ路次ニテ害セヨトノ事可成。兄弟互ニ最後ノワルヒレヌ様ニ辭ヲカワシ給フ。心ノ中コソ哀ナレ。扨因幡守ニ

向テ。何事ノ注進候ヤト御尋有ケレハ。因幡守
悦ノ注進候。御心安思召サルヘシトスカシ。翌
日十六日亭午ニ垂井ノ宿ニ著。金蓮寺上人古
へ藤澤ノ道場ニ在テ。持氏芳情ヲ厚ク蒙リシ
事ナレハ。爰ニテ若君ヲ慰ント。兼テ因幡守
ニ申ヨル。因幡守思ケルハ。京ヨリ路次ニテ害
シ奉リ。頸ニテ都ヘ可上注進候ナレハ。時刻ヲ
不移今宵失ヒ奉覽トテ。先乳母ノ女房夫ヲ分
シ爲ニ久ク御風呂ヲ不被召候。此所水ヨク候
間被召候ヘト進ケレハ。悦思召風呂ニ入セ給
フ。是ヨリ兩若君ヲハ與ニ乘。金蓮寺ヘ入奉
リ。女房ヲハ垂井ノ宿ニ置ケリ。上人不慮ノ對
面ヲ悦。盃出シ酒ヲ進ム。若君モ此間ノ窮屈ヲ
慰。孟度々廻レハ。上人ノ前ニテ若君舞給フ。
古郷ハ跡ニ鳴海ノ差敷ヤ。袖行水ノ哀ヲハ。誰
弔ラワン後ノ世ヲタスケ給ヘヤ上人。ト舞ヲ
サメ給ヘハ。上人モ墨染ノ袖ヲシホリケリ。夜

モ更ケレハ御寢ナラセ給フ。因幡守人靜リテ
後。郎從鳥取隼人。佐染前兩人ヲ召御兄弟ヲ
害シ奉レト申付ル。辭退ニ及子ハ蠟燭ヲトホ
シ。太刀ヲ拔持。屏風ノ中ニ入。其儘害センハ
最易ケレト。若君ノ仰ニ。我ヲ害センナラハ起
シテ念佛唱ヘサセヨトノ仰ナレハ。本意ヲ背
カンモ情ナシト起ケル。心得タリト起アカリ。
春王丸安王丸念佛高ラカニ唱ヘ給フ。乳ノ下
ヲ三刀サシ。太刀ヲ取ナラシ首ヲ搔。春王丸
十三歳。安王丸十二歳ナリ。翌日早天ニ二ツノ
首ヲ籠與ニ入垂井ヲ出ケリ。乳母女房今日ノ
御氣色ヲ窺ト申ケレトモ。與昇早メケレハ路
ニテ追付不事成。其晩小野宿ニ著。爰ニテ對
面セント與ヲアケテ見レハ首計ナリ。乳母女
房ソツトサケヒ臥マロヒ悲コカレ絶入シケ
ルヲ。因幡守面ニ水ヲ灑キ樂ヲ當。此人京都
ヘ友ナヒ可申。御尋有事モヤト思ヒ。様々ニス

カシ都へ登リケリ。案ノ如ク其女房ニ問フヘキ事有トテ。庭中ニ引スエ。持氏ニ子十人餘リ有。何方へ落行候ヤ。在所ヲ申ナハ恩賞可被行。隱ナハ噉問スヘシト責ケレハ。女房中ケルハ。此二人ノ外ハ御子有トモ不承。増テ落行方ヲ可存様ナシト申ケレハ。扱ハ隱ナリトテ。水火ノ責ニ及。其上今度謀叛ニ與スル人々有様ニ可申ト責ケレトモ。女ノ身トテ何トテ謀叛與同ヲ可知ヤ。若君モ此二人ノ外ハ存シ覺ヘスト申セハ。既ニ責殺サントセシ時。女房舌ヲクヒケレハ。此上ハ問ヘキ様ナシトテ放チケル。因幡守モ下向シケリ。

上杉憲實記終

結城合戰繪詞

鎌倉殿の次男三男のわか君に。春王殿安王殿とて。兄弟二人まし／＼けり。めのとかしこくして。しもつけの國へくだしたてまつり。日光山の衆徒をたのみてすませ申たてまつりけり。其御姿人にすぐれて御心誠にゆうにましまして。詩歌の道にも達したまへば。一寺のてうあい近山のしやうくわん。此君にそきはまりけり。しかるを常陸國の住人。ゆうきの七郎此よしをうけたまわりて。譜代の御主なれば。わが城に入れたてまつりて。けいこをかたく申けり。此事天下にかくれなければ。京都より又御勢をはむけられけれ。かのゆうきか城は二方に大河ながれて。四方におほほりあり。その底ないりをきはめ。せい水をたゝへていとふかし。水のうへのきりざし三十よ丈にして。其内のへいしよきのこしらへ。いしゆみ

やぐらのかまへ。彼秦の始皇帝のかんやう宮において。鐵のついちを四十余丈ついで。四方のえびすをふせがれしも。これにはすぎじとぞおぼへし。此城には雁門なければ鳥だにもかけらざるしるに。ゆうきの七郎をはじめとして。はんくわいをあざむき。ちやうりやうをそしる程の勇士一千余騎。おもひきりてぞこもりける。日本一の城に。をに神のごとくなるあら武しこもりける間。さうなくおとすべき様こそなかりけれ。しかる處に京がたの勢はせあつまる事雲のごとく霞のごとく。日夜朝暮の合戦。はこね山のいくさにすぎたり。しかりといへども。一ぢんやぶれぬれは。ざんたうまたからざる道理にやありけん。つるに城衆はかなはずして諸方の通路をとどめられき。兵糧つきてぞみへし。いまはかなはじとやおもひけん。嘉吉元年四月十六日の早朝に。

ゆうきの七郎よせてにむかつて申けるは。われらはこれにてはらをきらん事今日をすぐすべからず。しかるに城のうちに女房ども十よ人こもりたり。害せん事もいとふびんなり。契入て申候。御なさけをもて。かれらをおとしたまはらば。來世にて御れいをば申すべしといへければ。越後一きのちん中より。おりをえたる卯花おどしのよろひに。おなじけのかぶとのをゝしめ。大なきなきもちたる武者一きすゝみいでゝいひけるは。自身だにはらをめされ候はゞ。女房達の御事は。こゝろやすくおとしたてまつるべしとこたへければ。ゆうき大に悦て。こし七八丁に女房をのせ。其中に若君二人を女子のやうにいでたゝせたてまつりて。敵陣の中を分ておとしける處に。よせてのいくさ奉行かけいで。大音あけて下知しけるは。此女房こしの中に。さだめて若君御座

あるへし。いけどりなしたてまつりて。高名せよやとはせめくりてぞふれたりける。つは物どもこれをきゝて。われもくとしを一々にさがしみける處に。中ほどのこしにとし十三ばかりなるひめぎみ二人おはします。その御すがたこゝろこと葉もおよはぬほどゆうにみへ給ひしを。ねんれいをあやしみてこしよりとりてひきおろしたてまつりけるを。あとのこしにめのとの女房のりけるが。此由をみてこしよりころびおちて。これはいかなる御事ぞや。わかぎみにてはましまさずとちんじけれども。こゝのちんばうはありとて。やがていけどりとてまつり。大勢の中にぞとりこめ申ける。城の中より此よしをみたてまつりて。さては御うんめいつき給ひけりとして。ゆうきをはじめとして。こもりけるつは物とも。城の木戸をおしひらきて。うちものきつさ

きをとゝのへて。おもてもふらず大せいの中にきつて入る。ひかしより西へとをり。北より南へわけて行。くもてくなく十文字といふ物にさんくきりめくる。よせ手はまうせいなれば。あらてを入かへくかつせんすと云へけれども。ゆうきがせいはいきをつくべきひまもなく。辰のはしめよりさるのおはりにいたるまで。ほねをくだきてかつせんしぬれば。つゐにつかれて。或はかぶとをうちおとされ。或は太刀をうちおりて。さんくになりて。いきものこらず。ひとつまくらにうちじにせしめおはんぬ。

圖

右結城合戦の繪卷物。同僚河田氏所藏の本を以てすきうつしに寫しぬ。繪の姦色もはげうせたる所もあり。詞の文字もすれてうすくなりたる所もあり。紙も黒くふるびた

り。いかなる人の書しや詳ならず。繪は土佐と申傳へたれどたしかならず。むかしは此卷の前も後もありつらん。みなくほろびうせて。今はこの一卷のみ残れるなるべし。

明和五年戊子十一月七日

伊勢平藏貞丈記

于時嘉永三庚戌年水無月廿二日。中島姓之所藏之本を以てすきうつしに寫しぬ。元本彩色なく。文字にて青黄赤白と記したり。即文字に随つて彩色を加ふるもの也。

再朽木氏之藏本ヲ以テ彩色加フルモノ也。

倉橋藤原正勝誌

結城合戦繪詞終

續群書類從卷第五百七十七

合戰部七

嘉吉物語

夫春の花の樹頭にのほるは。上求菩提の機をすゝめ。秋の月の水底にしつむは。下化衆生の相を顯。人間有爲無常のありさま。因果の道理のかれかたき物也。抑嘉吉元年六月廿四日の事成に。當將軍普廣院殿を。赤松殿のやかたへ御申有けり。去程に。山海國土の珍物をとゝのへ。ふるきをやふりて。あたらしくつくり。主殿雜舍申におよはす。前代未聞のありさま。中々申計なし。然所に。あるかたよりひそかに申されけるは。今日將軍の御成は。よきにあら

す。赤松の一門とくく日のうちに。御退治あるへきとの御たくみ也けるよし聞へければ。一門のさわき申にをよはす。去程に。赤松の左馬助殿。ひとま所に立入給ひ。彦二郎御曹司をちかつけ給ひて。おほせられるやうは。抑赤松の一門。代々天下の御用に立。一命をかるんして名を上。四海靜謐におさまると。我々か先祖の忠勳によりてなれば。當御代までも。心さしふかき兵とて。御ふちこそ御入なくとも。御對治あるへきとの御たくみは。あまりに不便きはまりなき事也。そうして此ほとは一門

御かんとうをかうふりて。入道さひくの出仕にてなきあひた。此事をこそ明暮侘つるに。思ひもよらす。御成あるへきとの仰なれば。まことに一門一家のよろこひ。この事成とて。有もあらざるもたのしみをなし。喜悅の眉をひらき。安堵アントのおもひをなし。大慶也し處に。思ひもよらす。一門ことく御對治あるへきとの御所存。中々申に及はす。所詮思ひ出したる事有。善と云もあくと云も。みな是前業よりしからしむる所也。かやうにおもひ立事も因果にてこそ有らん。後の代のためしに名將軍の御頸を給て。名を末代にとめはやと存するなり。乍去我々か事は庶子の事なり。萬事は貴方の御はからいたるへし。よく御思案候て。一門にもひらう有へしとのたまひければ。御曹司はらくは返事もなし。良ありてのち。助殿にむかつてのたまひけるは。仰尤

やすき所なし。乍去思ひわけたるかたもなし。一門をたすけんとすれば。三代そうおんの主君の御命をたまはらん事。天命もいかなり。きみをかなしみたてまつれば。我一門一家たちまちにほろひぬへし。かなしき哉や。前生の宿因。おしからざるは。我命也とのたまひて。あんしわつらひしか。よしちからなし。提婆かあくも觀音の慈悲。盤特か愚癡も。文珠の知恵と承はれば。善有はあくあり。すなはち仰にしたかい申さんとて。御座敷立給ひて。御一門の人々に。宇野柏原十一月ならひに喜多野浦上の一族。安積中村彈正をめしよせ給ひて。此事を御たにかう有しに。我もくうつたつ兵。數百人ありけれども。大勢は叶ましとて。物のくして。御座敷に御出ある人々には。先赤松の彦二郎との。同左馬助殿。御内かたには。浦上の四郎。安積中村の彈正。そのほか大

かうの兵廿一人御供申て。御前に參る。助殿は右の御手にとりつき給。彦二郎殿は。左の御手にとりつき給ふ。其時御所様。こはそも何事と仰られしかは。助殿。かまへてく御恨有へからすと申され。かたしけなくも。御頸をは安積給はりて。御狩衣の袖につゝみ奉り。大門小門さしかため。彦二郎殿を大將にて。喜多野浦上安積彦五郎をはしめとして。大剛の武者七八十人。御座敷の御供の大名に。切てかりけれとも。かねてより。御なさけなききみにてましませは。心をよせず。みなくおちゆかせ給ふ。赤松方にも。さすか敵にてもなかりければ。おひにかし給ふ。時刻うつしてはとて。彦二郎殿左馬助殿。みな御させなかをぬきおき給ひて。おもての廣縁にしき皮しかせ。大門ひらき。うつてむかひなは。腹きらんと仰られで。御一門一々(同カ)。ならひに若黨百三十六人。ひ

とつ座しきになをりて。御曹司助とのをはしめとして。我先に腹を切らんす思ひ切たるいきほひは。ほうわうの羽つかひもかくやとおもひしられたり。然其諸大名は。一人も赤松殿のいきほひにおそれて。うつてにむくへき了簡はなくして。めんくの覺をこそめされけり。去程に。赤松の一門。かくて有へき事ならず。うつてもなく敵もなし。さらは國へ下るへし。急きみなく用意せよとて。御みつから酌をとり。さけをすゝめ給ひて。よろこひの中のなけき。なけきの中よろこひとて。やかて屋形に火をかけ給へは。さすか薨をならへし。玉の宮殿樓閣も。一度に煙とたちあかりければ。赤松の一門。都合其勢三百八拾九騎にて。馬をはやめてうち給ふ。先陣は浦上の四郎宗安。二番常陸彦五郎殿。三番は赤松伊豫守。四番は赤松大膳大夫殿の御輿。五番には安積。

青黄糸の腹まきに。同じ毛の五枚甲の緒をしめ。ひやくたんみかきのすねあてに。くり毛なる馬にのり。かたしけなくも。將軍の御頸をさへけて。笑を含て下りければ。心なきものともは。あらさてこりの御ありさまや。あれをみよとて。さゝやきわらふもあり。又はあらあさましの御事やとて。泪をなかすものも有。人の心ほとまぢくなる物はなかりけり。さて一門みなく御供申て。六番には彦二郎曹司。七番は左馬助殿。八番は能登守。九番は喜多野兵庫。十番は中村彈正。都合其勢七百餘人。西の洞院をくたりに。馬をはやめ。むちをすゝめ給ふほとに。程なく六月廿五日の午の刻に。はりまの國河合の堀殿の城につき給ふ。備前美作の御勢は申におよはす。國々の。大名小名のあつまり給ふ程に。七月廿四日の着到に。三千九百七騎とそしるされける。去問。御所様の御

頸をは。安國寺にて御茶毗をめされけり。諸出家數百人御供にて。御たひの儀式おひたし。さる程に。赤松の大膳大夫殿。白しやうそくのひたしれをめされて。三重に床をかきて。金地のにしきのうへに御くひをすへ。御まへにかしこまりて申させ給ふ様は。あかまつの一門。代々天下の御用にたち。むほんのともからをしつめて。ふたこゝろなく。奉公にくらからぬやから也。そのゆへ。一とせ尊氏將軍。都のいくさにうちまけさせ給ひて。此赤松を御たのみありて。御下向ありければ。三ヶ國の勢を率して。きの山白^(旗)の城をかまへて。諸國の勢をうけとめて。三ヶ年間ふせきたしかふ。もとより天下にならひなき城なれば。つゐにおつる事なし。去程に寄手もちからなく引のきけり。雖然なをも御本意をとけさせ給はんとて。赤松の則村かしそくしなのゝかみ則助。二

男ちくせんのかみ定則。三男權律師則祐をはしめとして。都合その勢二千八百餘騎にて。都へせめてのほるよし。都へ聞へありければ。こやかしこに要害をこしらへて。ふせきたゝかふといへとも。一門かたをならへ。おもてをふらてたゝかひ。十三ヶ所の難所きりしたかへ。なんなく都にせめてのほり。今すてに君となり給ふも。是しかしなから。赤松かくんかうにて候はすや。またそのうち。徳應三年の事にてあるに。南方の平家おこり。すてに河内國森口と申所に陣をとりて。同國の住人楠木の一門を大將にて。津の國の中島と雀か松原。小野のやとをかこひまわして。都にせめのほり。てんかをうちとらんとせしに。六人の諸大名は。御所様にうらみのしさいありとて。ふせくへき手たてもなし。さて有へきにてあらされは。赤松とふやう。都みたれてかなふましと

て。三ヶ國の勢を率して。津の國中島に陣をとりて有しを。一方におひなして。七日七夜晝夜のあひたせめたれば。さすがに心たけかりし平家の勢も。のこりすくなにうちなされて。ついにむほんかなわすして。心よわくも又吉野のをくの。あをねか峰をさして引こもりけり。その時の御恩賞に。馬の飼料にとて。中島を我々に永代たまわりし事。これもつてかくれなし。又そのうち明徳二年正月一日の事なるに。山名奥州氏清。これむほんを思ひたち。都をくつかへさんとて。おゝくの勢をあつめて。八幡山に陣をとり。すてに都にうつてのほりけり。さるほとに。都のさわざ申にをよはす。さ。御所様の御勢には。先一色左京大夫殿五百餘騎にて。三條おもてにひかへらる。去程に。小林二百餘騎にて。きつさをそろへて。おもてをふらす切てかゝりければ。一色殿

の勢も。こゝをせんとしたゝかいけれとも。さ
すか小林名人なれば。御所かたの御勢をや。
俄に九十餘騎打とりて。いきほひ。いさみてあ
りければ。小林にひるみて。はせむかふものも
なかりける所に。あかまつか勢。東寺のよつみ
かとにひかへて有しか。小林なればとて。いか
ほと的事か有へきとて。赤松か手勢わつかに
三百騎にたらすして。小林かひかへたる陣へ
きつてかゝり。半時計おふつかへしつたゝか
ひけり。去程に。又一色とのゝ勢もいきおひを
なし。とつて。かへして切てかゝりけり。あまり
にせめたてられて。名人の小林も。多勢に無勢
かなはねは。かくるも引も時にこそよれとて。
西の朱雀の觀音の町まへまで引のきけり。然
共いきをくれすおつかけゝれば。小林いまは
かなはしと思ひて。むらさきの糸のよろひを
ぬひて。さいこのいくさなりとて。君よりは

しめて十二代つたはりたる黒皮のよろひをき
て。同毛の五枚かふとの緒をしめ。四尺八寸の
長刀。くきなかにとりのへ。大勢の中にわつ
て入。抑奥州の御内に。小林上野守なり。じふ
のいくさのさきかけ也。敵にふそくはよもあ
らし。我とおもはんものあらは。いさやくま
んと名乗もあへす。大勢の中へきつて入。さん
さんにたゝかひけり。しかりといへとも。小林
運のきはめにや。敵の中より矢一すし來りて
小林か左のまなこをいぬきければ。たけぎ心
もよはゝと成て。終にむなしくなりにけり。
一門みなゝ。ちからをおとしける事。申に及
はず。弟の三郎も小次郎も。みなゝはらを
きりけり。奥州も一日のうちに。天下をうつ
とらんと。いきほひをなし給しかと。諸方のあ
いつたかひて。たのみたまひし小林もうたれ
ければ。心すこくも。たゝ一人御自害ありけ

るに。御かいしやくさへなくて。内野の露ときへ給ひし事も。是赤松かくんこうにて候はすや。そのうちまた。和泉の國御退治のとき。先陣を給て。分國の勢をあつめてむかひけるに。駒のあしたち難儀にて。衛門の大夫秀則をさきとして。天下の御勢七百餘人うたれ。それのみならず。惣して天下の御大事に。くんかうをいたす事。たひくにおよへり。かやうの御感こそ。御代替には御わすれありとも。よしなき大夫か申事に御つき有て。とかもなき我々か一族を御うしなひあり。ゆへもなく若黨をきつてすてられ。あまさへ我らを御對治あるへきとの御たくみにより。現在にそのむくひありて。我々か若黨の手にかゝり給ふ事。しかしなから。御先祖の御起請に。赤松絶は。我もたえんと。七枚あそはして。八幡と御所様と我々か家とに御おき有なから。それを御わす

れ候て。かやうの事をおほしめしたち候ゆへかとおほゑて候。さりなから。今度の事は。さらさら入道夢にもそんし申さす候。さためて京都よりも。討手むかひなは。入道も腹切て。みつせ川しての山にては御とも申へし。もしまた命すこしもなからへ候は。御菩提をはねん比にとふらひ申へしとて。御かりきぬにつゝみたる御頸をひきあをのけて。三度禮し給へは。座中にまします人々も。けにとほりの御事也とて。みなくひたれの袖をそしほられける。かくてあるへき事ならねは。梅檀くわりんの木をもつて。御輿をつくり。助殿は後。彦二郎殿は御前にて。手すから御こしをかき給ふ。入道殿もわきこしにまいられければ。其外の一族百餘人。若黨千人はかり御ともにて。御茶毘ありけり。怨をは恩にてほうするとかや。孝養眞實報恩者とゝかれけるとかや。

されは涙もさらにとゝまらず。なをも入道殿は。まことに御なけき深くして。せんたんだき木につみこめ奉る所にて。涙をなかし申されけるやうは。あさましの御事や。都にて御いたはりありて。御他界はあるならば。國々の大名たちにあふかれて。貴賤上下御ともにまいりなは。さもしく御入あるへきに。我々か一門はかり御とも申。御頸はかりを爰にて御けうやう申。すかたは都にとゝまり給ふ事。いたはしきかな。かなしきかなや。よく／＼一念は御うらみあるとも。二念を御つきなく。現在の御かたき我々計とおほしめし候はて。過去の因果ほうへんのためしとおほしめし。あくしんひるかへして。一佛淨土の縁と成。おなし佛果にいたり給ふへし。すてに觀見法界なれは。見佛聞法の徳。なとかなからん。草木國土悉皆成佛ときく時は。いつれの輩か。佛果

にいたらさらんや。けにたのもしき御事なり。せん世の業因にて。今はかくのどく御入候とも。來世にては。佛果にいたり給へとぞ申されける。さるほとに。都よりは山名修理大夫殿大將にて。細川讃州その外諸大名。都をうつたつて。赤松たひしのために下給ふ。あかまつ方にも。おもひさためたる事なれば。今さらさわくへき事にもあらずとて。書寫坂本にましましけるか。あまりに平要害なればとて。木の山白はたの城をこしらへて。亂杭さかも木くるまひしをうへ。たてはりよこほり重々にこしらへて。まことにおひたゝしきふせいなり。さるほとに。あか松かた。あなたこなたへ。勢つかひせられけり。但馬口へは。赤松龍門寺殿を大將にて。上原備後守をあひそへ。都合そのせひ一千餘騎さしつかわす。又一谷口蟹坂へは。常陸の彦五郎殿大將にて。都合その勢八

百餘騎さしつかわす。丹波の三草口へは。能登守殿國祐を大將にて。五百餘騎さしつかはす。その外口々つまり／＼に鬪をすへ。要害をこしらへて。よせくる敵をまちかけたり。さるほとに。京勢細川讃州。伊豫のかうの殿。あきの武田殿。その外の御勢八万三千八百餘騎にて。八月十二日。すてに一谷口までつき給ふ。本よりおもひさためたる事なれば。あかまつ方には。常陸の彦五郎殿を大將にて。こゝをせんとゝふせきたゝかひければ。よせての勢七十三きうたれて。蟹坂をはひきしりそき。人丸塚に陣をとる。赤松方には。わつかに人八騎うたれけり。さる程に。此よしを書寫坂本におはします。大膳大夫殿にちうしん申ければ。入道殿申されけるやうは。いさや一黨達。京方勢我をたいちのために下たれとも。さしたる事はよもあらし。いはらの御所を御供申。よせ

くる勢をけやふり。すくに都へうつてのはるへしとのたまひて。やかて着到をつけ給へは。都合その勢二万七千餘騎にて。坂本をうちたちて。明石蟹坂につき給ふ。去程に。坂本の御勢をまたすして。浦上四郎中村彈正。夜まきれに。敵の城にきつていりけり。天命にてや有けん。ともうちをして。赤松方の勢三十八騎うたれけり。此事をやかて赤松大膳大夫殿にちうしん申ければ。おほきに腹をたて。やかて人丸塚におしよせて。七重八重にとりまはし。一度に時をつくりけるは。帝釋修羅のたゝかひも。かくやと思ひしられたり。さるほとに。細川のさぬきのかみ。伊豫のかうの殿。あきの(リカ)國の武田との。こゝをせんとゝたゝかひけふ。あかまつかたの勢も。こゝをせんとゝたゝかふて。せめけるほとに。京方の勢三百餘騎うつとりけり。あかまつかたにも二百餘騎うた

れけり。しかりといへとも。赤松方は大勢とはいひ。能兵ともなれは。いきをくれすせめけるほとに。京勢かなはすして。すてに腹をきらんとし給ひしか。よきようしともにてましませは。細川さぬきのかみ。あきの武田殿。伊豫のかうの殿申されけるは。上意なれはかなはす。一色これまでまかり下たりといへとも。さらさらわたくしのいこんなし。御免あらは降参申。涯分忠節をいたすへしと。いろ／＼こんはう有ければ。赤松運のきわめにてや有けん。手に入たる敵をさしおきて。降参の上は。まつ／＼陣をひけやとて。又蟹坂へひきのきて。いくさの僉儀をせられけるところに。天命のかれさるにや。赤松方にいろ／＼の物いひといてきつゝ。但馬口へ山名殿大將にて京勢三万騎はかりむかわれしか。赤松方うちまけて。龍門寺殿は腹をきり給ふ。上原備後守も

うたれて。京勢國中へせめ入よしきこえしかは。うしろをつゝまれてはかなふましとて。手に入たる敵をうちすてゝ。又坂本へ引しりそき給ふ。去程に赤松勢。こゝやかしこにおち行つゝ。手勢わつかになりしかは。坂本をうちすてゝ。みな／＼木の山の城にそたてこもられける。さるほとに。京勢夜を日につきてつゝく程に。追手讃州のせひと。からめ手山名殿の勢とひとつになりて。もみあはせ。木の山の城を取まわして。息をくれす。せめたゝかふ。本より名城なりしを。いよ／＼こしらへたりければ。すこしもさはかす。ふせきたゝかひけるほとに。おつへきやうこそなかりけれ。かゝりける所に。城のうちには運命のつきけるにや。赤松伊豫のかみ。同ひたちの彦五郎との。三百騎にて。京方へうらかへり給ふ。是すなはちかやうのたくみを。天下の御敵になりまいら

せ侍らん事をかなしひて。かくのとく降参ありとぞ聞えける。しかる間。あかまつ勢おもふやう。一番に御はらめさるへき御一門さへ。御うらかへり有は。いか様こゝろ元なしとて。みなくかくれしのひておちけるほとに。城には御勢のこりすくなくなりにつけり。さるほとにあかまつとの。今はかなはしとおほしめして。御曹司彦二郎殿をちかすけて仰あるやうは。かく有へき事はおもひさためたる事なれとも。いまさらのやうにこそおほゆれ。此城たゞいまおつへきならは。大勢せめ入て。雑兵の手にかゝらんもくちおしければ。それかしは心しつかに腹をきるへし。汝は是より伊勢の國へ下りて。國司をたのみ侍へし。ちうおんのものなりしうへ。又内縁といひ。よもみはな(き脱カ)しとおもふなり。さりなから。たのまれさる物ならは。熊野のをくにおちゆきて。よから

んする出家をたのみ。もとゆひきり。しのひて。世をまつへしと申されしかは。彦二郎殿聞給て。なみたをなかし申さるゝやうは。仰はもつとも去事にて侍れとも。天神七代地神五代のはしめより。今にいたるまで。親子のわかれをは。かなしむならひとこそうけたまはれ。いかにいはんや。弓矢とりの身として。親をみすてゝ。わか身をたすからんと思ふ事。まつたくもつて有へかすと申さる。その時入道殿は。涙をおさへてかさねての給ふやう。何事もうやまはゝ。したかへと申たとへあり。なんちたとい我と一所に腹をきりたりとも。親子は一世のちきりなれは。又むまれあふともなきとこそきけ。今入道か命をそむく物ならは。我よみちのさわりと成て。こゝろうかるへし。汝はわかきものなれは。あとにとゝまりて。我かこ世をもとふらい。又は自然の代をもまち侍る

へし。けに／＼入道かいふ事をきかぬ物ならは。弓矢八幡も御照覽候へ。二せまでの勘當そとのたまひしかは。其時彦二郎殿。此うへはちからなし。ともかくも仰にしたかい侍へし。さらは御最後の御さかつきをたまはらんと申されしかは。すなはち安積御酌に參りつゝ。たかひにさかつきをさしかわし。御いとまこいを申されて。御曹司はなく／＼御前立給ひけり。さる程に彦二郎殿は。こゝはの兵六十人はかりめしくして。よにまきれ。敵の大勢にてとりまわしたる中をとをらせ給ふに。彦二郎殿も左馬助殿も。兵法をきはめられし威徳によつてなんなくおちられけり。さて室の津にいたりて。ふねにのり。堺のうらにあかりつく。それよりも伊勢の國にくたりて。國司をたのみ給ふ處に。いつしかこゝろかわり給て。なさけなくも。國司は手勢三百騎はかりにて。彦

二郎殿のおはします所へ押よせられけり。その時彦二郎殿は。たのみてきたるかいもなく。うらかへり給ふこそくちをしけれ。さらはさいこの一合戰して。こゝろよく腹をきるへしとて出たち給ふを。御ともの人々申すやう。御最後の出たちは。尤さる事にて御座候へ共。もし自然いふかひなき雜ひやうの手に御かゝり候なは。くちおしかるへし。たゝ／＼すみやかに。御腹めされてしかるへしと。いさめ侍ければ。けに／＼是もとほりなりとて。年十九と申に。つゐに御腹めされけり。御さいこの御時。一首の歌に。

たのむ木のかけに嵐のふきくれはまつのみ
とりもちりはてにけり

また御ふみをあそばして。菊童丸に給わりて。室の津に御手をかけ給ける。おもひ人のかたへ遣し給ふ。さて／＼ゆみやとる家にむまれ

ぬれは。かく有へきとはおもひさためたる
事にて候へ共。いまさら御なこりおしうこそ
候へとあそはして。おくに一首のうた有。

ちりはつる松のみとりの木末より花のすか
たをおもひこそやれ

とあそはしてつかはされければ。おもひ人。此
御ふみを見て。さめくとなきかなしみつ。
いたはしや。なさけとひとしきみとりのかみ
をそりおとし。しはしはおこなひ侍りしか。我
なから世になからへは。もし秋風にふきかへ
されて。葛の葉のうらめしき身ともなりなは。
草のかけて。なき人の見給はんともはつか
しかるへきとて。年十七と申には。室の入江
に身をなけて。つひにはかなくなりにつけり。そ
の時一首のうたを。まれけり。
うきとのまさりもやせん世にすまはいのち
のありてなにゝかはせん

扱も赤松殿は。御曹司のおち給ひし時。その御
うしろかけを見をくりて。しはしはたゝすみ
給ひしかとも。つゐに大勢の中へまきれ入給
へは。さすか親子のわかれをかなしみつ。御
袖をかほにおしあてゝ。なみたにむせひ給ひ
けり。そのうち安積をめされて。城のうちの
體は。いかやうに有そとゝひ給へは。あつみ申
やう。城中には御勢もなく候。いまは御はらめ
され候へしと申ければ。入道殿。さては心得た
りとて。先東にむきて手をあはせ。伊勢天照
大神へ御いとまこひを申されけり。さて又や
はた山のかたを禮し給て。南無八幡大菩薩。入
道にたゝ今腹をきりすまさせ給へと。きせひ
をなし。又西にむかへて。南無や西方極樂世界
の彌陀修覺。われらたとひ極重の惡人なりと
も。彌陀は超世のちかひおはしませは。かな
らす我等を安養世界にむかへさせ給へと。た

なこゝろをあわせて。ふかくさせひをなし。御とし六十一と申には。つゐに御腹をめされけり。むねとの御一門六十九人。おなし座敷になみいて。みなく腹をきられけり。さる程に。安積は此人々のしかひともを。とりひそめてのち。城中に火をかけて。腹をきらんとしたるしか。何とかおもひけん。こさくらおとしのよろいをきて。おなし毛の五まい甲の緒をしめ。八尺あまりのしらえの長刀つゑにつぎ。南むきの勢樓にあかり。大音あけて申やう。是は赤松とのゝ御内に。安積と申て。かたしけなくも。普廣院とのゝ御くひをたまはりたるものにて候か。今までいのちなからへて。たひたひのかせんに。敵にうしろをみせず。高名仕り候也。よせ手の中に。大剛のつはもの我とおもはん人あらは。いさやよせ合。せうふを決せんと。たからかに名乗ければ。山名修理大夫

殿の御内。村の助影安といへる兵。五人はりの弓に。矢をつかふてすゝみ出。安積殿のあまりに人もなけにのゝしり給ふに。ほそやづかにて侍れとも。矢一すしまいらせんとて。十三そく三ふせよつひき兵とはなちけり。安積かもちたるなきなたの石つきの上。三寸はかりをいとをして。あまる矢か。矢倉のふせきいたに。籠中すきてそいたてける。安積こゝろにおもふやう。いや／＼かやうのものに。矢一すしにていころされん事は。くちをしき事なるへしとて。矢くらより下にとんとおり。大勢の中へわつていり。件の影安をめにかけて。おめきさけんできつてまはる。本より安積は一騎當千の兵なれば。四かく八はう。八はなかた十文字にきりまはり。きつておとす程に。手にたつものそなかりけり。やにはに敵十三騎きつておとしけり。去程に影安。いせんあたや射

つる事を。むねんにおもひければ。安積なれはとて。鬼神にてもあらしと。馬より下にとんとて。安積とのいさやくまんとて。六尺あまりの大たちを。まつかうにさしかさしかゝりけり。安積につことわらひ。我等もそこそ存すれは。いさやせうふをすへしとて。くたんの大なきなたを小わきにかいこんで。おとりかゝる。影安も大たちにてたかひに剛の兵なれは。半時はかりたゝかひしか。さらに勝負はみえさりけり。安積心におもふやう。いせん影安かいたりし矢にあたりなは。さこそくちをしかるへきを。かくてわたり合たる事のうれしさよと。よろこひつゝ。大長刀をくきなかにとりのへて。まつかうを丁とうちければ。影安か運命のきはめにてやありけん。きつさきはそくひにあたりて。廿七歳と申には。安積が手にかゝりてうたれけり。弟の平三影光。兄をう

たせてくちをしく思ひければ。安積にきつてかゝる。安積につことわらひ。あらやさしの影光や。侍のならひとて。兄をうたせて。身をすてんとおもふ心さしこそあわれなれ。さりながら。手にたるましき事のむさんよ。おなしくはいのちをなからへて。兄の後生をとふらひ給へかしといひければ。いよく影光はらをたて。いかりをなしてかゝりけるを。なさけなくも安積殿。長うち物をすてさまに。とつてひきよせ。わたかみつかんで。ひたりのわきにかいこんで。しや頸ねちきりすてゝけり。是をみてみなく。かなはしとおもひけん。城のふもとまで引しりそきけり。さる程に。安積は本の城にかへりて。御かたの勢をあつめけるに。わつかに百人にもたらず。うちなされけり。安積此うへはみなく。おもひくにおち行て。世をすくし給ふへし。我々事は。入道

殿のさためて死出の山三途の川にてまち給ふへければ。いそきをつゝき奉るへしとて。入道殿の御しかいにとりつきて。南無や西方極樂世界の彌陀善逝。すてに我等ははかひ無慚の凡夫なれば。かねて後生の善をいとなむ事なし。其うへ弓矢の家に生れぬれば。いつも殺生をのみ事とせり。かなしきかなや。さりながら彌陀方便の御ちかいをあふき奉れば。攝取不捨の本誓。不取正覺の悲願。たのもしきかな。たとい極重惡人也とも。せいぐむなしからすんは。罪障のまよいの雲をふきはらつて。眞如の月の影をやとし給へつゝ。ちかくはふたらく山の大悲觀音。とをくは西方極樂世界の彌陀如來。われらをむかへ給へと。ねんくわんしてのち。抑赤松殿の御内に。安積とてたひたひのかせんに。高名したる兵の。たゝ今腹をきるをみおきて。心あらん侍者のちの手本に

せよといふもあへず。腹十もんしにかきゝり。腹わたをつかみ出し。矢くらの下へなけおとしけり。しかれとも。大剛のものなれば。いまた死なす。又本の城へかへり。入道殿の御座ありし所に火をかけ。入道殿の御跡をまくらとして。みつからとゝめをさして。やけ死にけり。そのうち城中のこる所なく火をかけて。雜兵はみなく落行けり。其時山名右馬頭との郎等とも。炎の中へはしり入て。入道殿の御くひと。安積かくひとり侍るよしきこえしかとも。誠の頸にて有かなきかを人しらさりけり。さるほとに。赤松左馬助殿は。水田の城に御入有よし聞えけり。天下の御敵となる助殿にてこそあれとて。京勢はやかて水田の城へをしよせけり。左馬助殿は中に及す。浦上四郎喜多野兵庫をさきとして。一騎當千の兵十人はかり有けるか。すこしもさわくけしきな

く。さかもりしてそゐたりける。かくてはかなふましとて。京勢の中よりも。石見勢七百餘騎。おめきさげんてかゝりけるか。すてに一二の木戸をうちやふり。三の木戸まで面もふらす切ていりけり。城にはもとより覺悟のまへなれば。左馬助殿大將にて。浦上四郎喜多野兵庫まつさきにすゝんて。究竟の兵一度にきつて出。けふいわみせひ大勢とは中とも。かなはすして人數あまたうたせつゝ。三町はかり引しりそき。大息つひて居たりけり。石見の彈正近宗。石見守の御前に参りて。此城と申は尊氏將軍の御こもりありし時。かたしけなくも天照大神を勸請し給へは。つねの城にはかはるへし。その上天下に弓取おほしといへとも。此ものともはすくれたる名人とものあつまりたれば。平城なりとも。率爾にはおつへからすと申て。いろ／＼の調儀していたりける所に。

左馬助殿。尊氏將軍よりたまはつたる龍よろいを着し。同じ毛の五枚甲の緒をしめ。打て出下知し給ふやふ。唯今さいこの太刀うちなれは。めん／＼敵にうしろを見せず。こゝをせんとゝあひたゝかふへしとありしかは。浦上四郎喜多野兵庫。その外くつきやうの兵六十人はかり。かけ出てきつてまわるに。おもてむくへきやうそなき。助殿の手にかけて。十三騎うち給ふ。浦上四郎か手にかけて十三騎。喜多野兵庫も十六騎うちとりけり。其外の人々も。二三人つゝうつほとに。矢庭に百騎はかりうたれしか。さしもにたけき石見守殿も。あきれてこそは給ひけれ。近宗申やう。かくるも引もおりにより候へは。ひとまつ御ひき候て。人馬のいきをつかせらるへしと有ければ。すなはちはるかの山の麓まで引のき給ふ。近宗は雜兵よりもあとに引さかつて。下知をしつ

つうちけるを。左馬助殿み給ひて。三人はりに十三束三伏とつてうちつかひ。よつひきしほりはなたれければ。近宗かおめくくとひかへたるむないたを。つゝといとをし。同じき郎等源兵衛かきたる甲の吹返しを。いとをして。あまる矢か楯にたちければ。人々きもをけし。みなくちりくちりにそ成にける。大剛の近宗もたゝ矢一すしにて。草葉の露ときえにけり。さる程に左馬助殿は。手に立てきもなかりければ。其れよりもつくしの松田とのをたのみておち行。又それより高麗國にわたり給て。清水の將軍とあふかれ給ひしかとも。ひたち殿を世にたて申さはやとて。また日本にかへり給ふ。雖ふくろに脱するならひなれは。つゝむとすれと。此事京都にきこへしかは。やかて討手をさしむけられしほとに。河内國太子にてつひに腹をそきられける。抑木の山白旗の

城は。天下ふそふの名城なりといへとも。主の運命つきぬれは。ついにあへなくおちにけり。さて山名右馬頭殿は。赤松入道のくひと。安積か頸とをとつてのほられけり。あまたの軍勢ともをはうたせ給ひしかとも。上洛のいきほひはるいもなし。さて頸實檢あつてのち。則五條河原にかけらるへしとありしかば。諸大名達のひやうちやうには。すてに天下の御敵なるを。河原にかけられん事しかるへからすとて。三條の西の洞院に。梅壇の木をほりたてゝ。獄門の形をつくり。一の木には赤松入道のくひ。二の木には安積かくひをそかけられけり。さて左のかたは京極殿。右の方は六角殿のたまわりにて。大名小名着到をつけて。都合一万三千騎。番をおきて頸のけいこをし給ふは。誠に前代未聞の有様也。此物語をみきかん人は。眞實のおもひをして。奉公を仕るへ

し。就中普廣院殿は。地藏菩薩の化身にてましましける故に。善惡ともはけしき將軍にて。おはしましける。むかしより天下に弓取おほしといへとも。此赤松ほとのだけき人は。たくひなかりしとぞ聞えける。

嘉吉亂記終全

續群書類從卷第五百七十八

合戰部八

長祿記目錄

畠山義就都落至若江城事

交野業平事

宇治十貼義就軍兵四十二人并若黨等七十二人

討死事

義就於嶽山籠城事

聖德太子法隆寺建立事

壬子四月十日於金胎寺諸國軍兵責寄事

十五日金胎寺籠勢於嶽山被加事

寛正四年癸未三月十五日嶽山沒落入高野山事

并高野緣起事

五月粉河合戰事

義就於吉野北山沒落事

甲申畠山政長管領事

乙酉花御覽事

長祿記

去長祿四年庚辰九月十八日。公方樣ヨリ伊勢兵庫助飯尾下總守兩使ニテ。畠山右衛門佐義就ニ。早々屋形可開。遅々セハ猶背^{ケリト}。上意^{ケリト}被^ス仰出。義就被^レ仰樣ニハ。更以無緩意何謂雖不存。至^テ今子細雖^モ申上^{ルト}。御耳ニ入ル、輩不可在所詮先在國シテ。靜ニ嘆キヲ可^キ申上^ト。既ニ可^キ打立給^ヲ。御用意在ル。御心中左コソ被^レ召思^ケント。上下申沙汰シキ。去程ニ須屋甲斐庄ト云荒者共ハ。屋形ニ可^レ懸^ラ火ト云。義就被^レ仰ニハ。面々儀尤ニテ侍^レ共。火ノ手ヲ上ケハ。イト、上意ニ敵對申ナント可^シ申沙汰。其上次郎政長トテモ非^ス他家。義就カ政長ニ替ル迄也。亦屋形ヲ燒拂テモ。幾程敵ノ弱リ肝要ニモ不在トテ。白燒ヲシ不^レ給。去程ニ明^レハ十九日辰ノ一天ニ。都ヲ落サセ給。御在樣驚^ス目計也。斯^カ處ニ。亦義就ノ仰ニハ。但シ我等

コソ隨分ノ隱便ヲ存スル共。何ノ雜說モ在ナシ。其上指敵在。又諸大名ニモ訴人有リ。彼是可^シ有^シ用心ト被^レ仰ケレハ。尤トテ老タル衆ハ。小具足計ニテ。若衆ハ直冑ニテ。譽田黨一門。後陣ハ須屋甲斐庄以下打^レ之。東洞院ヲ下リニ急トスレ共。日モ早ヤ竹田河原ヲ打過キ。鳥羽ノ戀ノ塚ト成ヨリ苦敷^キハ。我カ思ヒ。草葉ノ枯ル秋ノ山本見渡セハ。紅葉モ末ノ秋蕭テ散散ニ成在樣モ。憂身ニ添テ哀也。狹ク成行造リ道。人之心ノ底深キ。淀大橋ニテ。河内ノ國衆來リ遇フ。從^{ヨリ}其^レ彌猛勢ニテ。八幡繩手ヲ直ニ南ヘ。御社ノ邊ヨリ下馬シ給テ。放生河ノ邊ニテ。祈念ヲ深ク致シツ。夫八幡大菩薩ハ。日本無雙ノ廟神。鎮護國家ノ道場也。垂迹ハ妙覺果滿ノ阿彌陀如來。御悲願ノ力ヲ以テ。二世ニ一世ハ責テ助ケ給ヘトテ。神馬太刀以下被^レ參ラセ。色々立願畢。猶御身ニモ大義企。社

參ヲハシ給。砂粉橋ヨリ馬ニ被召。男山ノ女郎花モ。我レ落ニキト人ニ語リナント戯レ。過行セ給ヘハ。所カラ螺峠ニテ。未ノ貝キ、給。都ノ方ヲ顧ミ給テ

憂カリケル都ノ何ノ情在リテ袖引計殘ル面影。ト打詠シ給ツ、是ハ面々ノ思出モ無シテ無面目。一家ノ相論及度々。輕一命終ニ此度義就ニ奉一命事。不便也ト被仰。又峠ヲ下リ玉ヘハ。遊佐河内守國助。天ノ川ニテ御下向ヲ待申ツ、古ヘ業平朝臣此所ニテ詠シ玉ヒツル事。何ト無ククチスサミシケリ。

カリクラシ七夕妻ニ宿借ラン天ノ河原ニ我ハ來ニケリ。トアリセヲ思出ツ、最馴敷キ處ニ。連錢葦毛ノ御馬ニ。小袴計ニテ御下向アリケル。其ヨリ後河内守先陣ニテ。其夜ハ眞木ノ城ニ留リ給ツ、最長キ夜モ終。都ト紀州ノ御物語共。互ニ語リ給ツ、明レハ眞木ノ城

ヲ立テ。交野原ヲ通り給シ時。國助御物語申ス様。此交野ニテ一年セ。業平連日ノ御狩在リ。比ハ三冬ノ末。雪万天ニ滿。其時業平何トナク濕ス。宿借ス人シ無レハト御口號在シニ。何共無ク女來テ。御宿ヲ參ラセント云フ。聽テイサナイテ。一夜契給シニ。情ノ深カリケレハ。都ニ列テ飯リ。無程明ル春ノ長閑氣。顔ハセ白ト成ツ、姿モ消テ失ニケリ。雪ノ精トハ其時コソ被思知ケレ。非情ノ者タニモ心ヲ懸シ美男也。増シテ有生女人ノ思ヒヲ色ニ露スハ尤ノ理也。彼伊勢物語ニ。業平ノ一生涯ヲ沙汰セルト也。契給女人ノ數三千三百三十三人也。然共彼物語ニハ。其數ヲハ不書。只十二人ノ美人。第一紀在常娘。第二文德天皇染殿后也。第三小野小町。第四閑院左大臣ノ女。仁明天皇五條ノ后也。第五中納言長良卿ノ女。清和天皇ノ二條ノ后トテ。業平ノ特更ニ打モ不

忘。晦事ナク思食。第六長谷雄卿ノ妹ニ戀死
ノ女也。第七文德天皇ノ姫宮伊勢齋宮女御。第
八筑紫染河女也。第九中納言行平女。清和天皇
ノカウキ貞スミノ親王御母也。第十大納言登
卿女メ也メツラシノ前也。第十一周防守在原
中平女。是ハ妹ヲ養子ニス。第十二大和守月影
カ女。今ノ齋宮伊勢也。歌ノ其數ヲ、ケレ共
此比讀ル歌ニ

秋ヤ來ル露ヤマカフト思マテ在ルハナミタ
ノフルニソ在ケル

君ヤ來シ我ヤ行ケンオモホヘス夢カ現カ寢
テカ覺テカ

伊勢齋宮女御

カキ暗シ心ノ闇ニ惑ニキ夢現トハ世人サタ
メヨ

業平返歌

此二首。伊勢物語肝心ナリト云リ。雙紙ヲ繙ケ
テ讀如ク申クレハ。義就仰ニハ。國助ハ文武二
道ノ仁タル事。今コソ委ク被知タレトテ。有

御感ケレハ。當時國助面目無極。不珍事ナレ
共。弓箭家ニテハ。如何ニモ文武二道ヲ可_カ寮_{カシヤム}

文道闕テモ不納。武道闕テモ不納。去程ニ義
就手馴ノ駒モタテナラシ。身ハ何故ソ旅衣。草

ノ枕ニ子アカリノ。松モ齡ノ盡ヌルカ。枯タル
古木ニ向テ。古人詞ヲ思出給ヒテ。松樹千年終

是朽。槿花一日自爲榮。只義就カ身ノ上也。但
其モ千年ノ御誓ヲ思ヘハ。イマタ憑モシ。去程

ニ茄子造コウツノ里ヲ打過テ。餘リノ事ノ恨
メシサニ。年ヲ守リノ星田ノ里。打恨ツ、行程

ニ。駒モ靜ニ打上リ。蕭敷秋ノ野崎ノ里猶裏枯
草賀ヨリ。一宮ヲ伏シ拜ミ。若江ノ城ニ入給。

自昔諸大名及度々。都ヲ落行シニ。白晝ニシ
トヤカニ落給フハ。今ノ義就ト皆々沙汰シケ

リ。去程ニ次郎殿ハ。同廿三日家督ノ御出仕在
テ。次ノ閏九月九日。和州ニ下リ給フ。義就ハ

愁ノ西路ヲ下給。政長ハ悅ヒノ東門ヲ開テ。天

ニモ上ル計ナル。高倉ヲ下ニ。法性寺ヲ見渡セハ。晚稻ヲ蒔テ稻荷山^{サケ}。懸ル憑ミハ深草ノ。鶉ノ床ニ伏見里。自菊笑ル野ヲ見レハ。萩ノ枯葉ニ紫ノ。サナカラ藤ノ森過テ。木幡ノ里ニ馬ハ在レ共。步ニテ下ル人々カ。八十宇治川ノ邊ニテ神保宗次郎御馬ニ近ク參リ。御物語申様^ス。此宇治ト巾ハ。久敷名所也。特更源氏ニ縁多キ處也。先ツ宇治ノ橋姫ヨリ。椎カ本^{アケマキ}上卷^{ツサク}。初薇。東屋。宿木。浮舟^{シナフネ}。幻。手習。夢浮橋。是宇治十貼^{シツ}。歌ノ數難盡^シ。先祝言上卷ニ長キ命ヲ結ヒコメ。同心ニ寄モ會ナン。又兵部卿宮。泊瀬ニ詣給フテ。宰相モ御伴ニ參シカ。宇治ノ御中宿セントテ。二月廿日ニ。且笑花ノ都ヲ立テ宇治ノ尼公侶イツ。山里ノ雪間ノ若菜摘ミハヤシ。猶生崎^{ヲヒサキ}ノ憑敷哉。布留川ノ杉ノ村立知子トモ過ニシ人ニヨソヘテソ見ル。此布留川ノ歌ハ。御舍兄彌次郎殿ノ御事ヲ思食テ申ト也。

或歌ニ君カ爲折レル髮搔^{カサシ}ハ紫ノ雪ニ劣ラヌ花ノ氣色ヲ。世ノ常ノ色ニモ不見^ミ雲井迄立上リケル藤波ノ花是等皆彌生卯月ノ歌共也。此ニ似合タル歌。山里ノ松ノ影ニモ只亘^{カラハカ}リ身ニ占秋^{シム}ノ風ハ無リキ。何モ源氏ノ祕歌也其後喜撰法師。此宇治山ニ隱居シテ。草木國土皆歌ニ通ス。中ニモ柳ヲハ。橋姫明神ノ神木ト號シテ。貴賤是ヲ賞翫ス。柳ノ絲ノ一筋ニ。今神明ヲ伏シ拜ミ。被^レ急給^シケル程ニ。指タル宿リモ無シ。間ノ宿鷹羽屋ニテ有御一献。聽テ打立ツ出テノ里。蛙ニテ在ランニハ。歌讀ナント戲レテ。過行方ハ處カラト。コマノ爪弦枯殘リ。籬ニ懸ル道終^{スカラ}。無程爰ニ木津川ノ舟ニ始テ乘給^フ。去テ奈良坂ヤ。此手柏モ廣ク說。法ノ師毎^ノ母ト聞ク。大聖文殊ノ淨土ナル。般若ノ知門打通リ。八町ニ入給。法相天台ハ左右ノ眼ニ明ニ。日モ不暗亦雲井坂ニ着ヌレハ。ナヲ

モ雲井ニ名ヲ上^{アケル}。三笠ノ山ノ影移ル。綠モ池モ不^レ淺^ム。憑^ム春日ノ大鳥居ヨリ。下馬シ給。五所明神伏拜ミ。吉祥院へ入給。同十六日。菩提院ヲ立テ。立田ノ里ニ着陣シ給。去程ニ若江城ヲ可^キ被^レ責。内外評定色々ニ計略共在處ニ。十月九日ノ夜。自河内國申様。明旦早々從此方於^テ立田^ニ。夜討可^キ在事一定候ト注進ス。御返事ニハ。神妙ニ委細申上訖。重而可^キ有^ニ御感^トトテ。使者ヲハ返訖。又其外從^ニ万方^ニ分明ニ申セ共。立田ニハ曾^テ不^レ用。爭^ヒ力^キ左様ノ事可^キ有^ニ上意云^ヒ猛勢云^ト。隔^テ國遙々ト可^キ寄^セ來^ル事。誠ニ難說ノ中ノ物云也トテ。更ニ用心モ無シ。角テ夜モ既ニ深更ニ及ヘトモ沙汰モナシ。漸ク東ニ横雲引テ。人々ノ篠目モ覺^{サメ}。立田ノ關ノ鷄鳴テ。夜モ明方^ニ成^レトモ。究メテ世間モ。ナトヤカニ天氣モ誠ニスコシサル。平羣谷ノ早鐘事外鳴ニケリ。其故ハ河内勢。若江ヲ立テ高安ノ馬

場先ニテ。二手ニ分テ。島ノ領内福基^{フキ}ノヲウタウト云處へ。遊佐彈正忠大將ニテ。自^ニ若江北河内衆五百餘騎ニテ寄^セ來^ル。即^チ島ノ衆取合セ合戰セシカ。寄勢シ負テ。河内ノ國衆ニ鹽田父子次戒新左衛門尉。其外彈正忠ノ若黨共ニ十人餘リ被^レ討。殘ル勢共万方へ引。南へ直ニ上ル勢ニハ。遊佐河内守大將ニテ。千五百騎ニテ寄^セ來^ル。大川ノ南ノソイラノホリニ。片岡ノ端ノ郷ヲ通りニ。摠持寺ノ芝ニテ勢ヲ汰へ。案内者ナレハトテ。立野大和守ニ冑百餘騎ヲ副。御輿河原ノ松本エ一手ハ向ク。殘ル勢ハ神南山ノ北細繩手ノ在^ル東へ向テ。金山ノ敵ニ當ル。又越智備中守大將ニテ。久度ノ古橋ノ上ノ瀬ヨリ五本松ヲ通テ鹽田川拔^キノ瀬ヲ越テ。法隆寺ト吉田ノ間ノ一番ノ太刀打ニ。人コソ多ケレ。筒井勢ト渡合^ヒ。好處ト兩方共ニ名乗合^ヒ。火出計戰シカ。越智勢シ負。備中守ヲ始メツ

ッ。古市彦三郎父子共木下以下討死ス。彼備中守ハ。先年山城入ヲ始ツ、度々ノ合戦ニ名ヲ上ケ。既ニ上聞ニ達ス。今度ハ鹽田川ニテモ。可逃ナラハ何ノ煩イモ不_レ可_レ在。其上同道ノ勢モ皆々引ケレ共。彼備中守思様ハ。此合戦ノ在様。千ニ一ツモ難_シ勝_チ。爰ニテ北歸テ。再面ヲ曝_{サシ}ヨリハト思切テ。華_ヤカニ討死スル事。若氣ノ到ル處也ト乍_レ申。正直ナル弓矢取リ。誠ニ自國他國ノ名譽也。又筒井ノ若黨ニモ。上ノ庄二郎三郎山本二郎五郎討死ス。是ハ辰刻ハカリ一番ノ太刀打也。又巳刻計ニハ。御輿河原ニ太刀打始マリ。其寄セ勢シ負テ。先西ノ山際迄引逃カントスルトテ。皆小松原ノ邊ニテ被_レ討ケリ。去程ニ負軍ノ習イ。殘ル勢ハ無_レ幾程モ見ヘケリ。然_レ共遊佐。譽田。龍泉。甲斐庄。爰ヲ逃テ誰ニ可_ヤ向_ヲ面。唯捨_テ一命_ヲ。名萬天ニ上_ル迄也ト。思究メタル究竟ノ兵共。百五十騎計。神南

山ノ頂ニ上テ。腹可_シ切ト許定セシ在様。譬ン方ソ無_リケル。中ニモ物ノ哀_レナルハ。河内守ノ小者一人近付ケテ。汝ハ急キ忍落テ都ニ上_リ。唯今ノ在様北ノ方ニ可_シ語。都ヲ出シ時如_ニ申定シ。今更嘆_キ給フ不_ス可_{カラ}。小法師丸ハ御屋形様ノ御伴申間。兎モ角モ可_レ成。末ノ子ヲ一人出家ニ成シ。父母ノ菩提ヲ可_レ弔ハス。今ノ際ノ事ナレハ。一筆ニモ不_レ及トテ。手ヲ破_リ血ヲ出シ。小者カ身ニ一首ノ歌ヲ書キ。同ク髮ノ髮ヲ切テ。形見トテ出シ給。其歌ハ女性唯一目見玉フヨリ外不出。去程ニ冬ノ日ノ短キ命ヲ。無常ノ鐘。晚鐘ヲツクツクト聞ニモ。都ニ殘ス者共ニサモアレ。名殘惜クテ涙クム處ニ。譽田遠州是ヲ見テ。何ソ國助。唯今ノ振舞難_シ心得。歌連歌ハ烏帽子直垂著シテノ態也。今ハ只憐慢懈怠ノ肉身ヲ打死シテ。永ク不生不滅ノ西方ノ淨土ニ可_シ生。先ツ入道ハ討死ノ手本

シテ。面々ニ見セントテ。南無阿彌陀佛ト唱ツ
ツ。年八十歳ニ餘リ。神南山ノ頂ニテ一番ニ討
死ス。遠江入道振舞。樊噲張良共可云。不褒人
コソ無リキ。角テ從四方被責東ハ大手遊佐
次郎左衛門尉。筒井。南ハ。神保兄弟。古市器
瓦。西ヲハ互ニ持ツ。少々ノ取集勢ハ。來ツ
ル方ヘ志シテ逃クル也。去テコソ城ヲ責ルニ
モ。三方取卷一方ヲ開レハ。落間敷城モ落ル事
有リ。以其理西ヲハ弱クス。從北遊佐新左衛
門尉大將ニテ。大和ノ北脇ノ勢悉ク責向。關ノ
聲ヲ相圖ニテ。同時ニ責合ス。修羅帝尺ノ戰モ
是ニハ不過。鋒ノ勢モ天下ニ其名聞ル程ノ人
人ナレハ。一騎當千ノ秘術ヲ盡。最後ノ太刀打
華ヤカニ。黒烟ヲ起テ戰ケリ。雖然自元多勢
ニ無勢ノ道理ニテ。悉ク討死。驚目在様也。仍
討死人數少々隨分。先大將遊佐河内守舍弟左
京助譽田參州入道舍弟肥前入道伯父遠江守入

道之孫同孫三郎同彦次郎龍見孫左衛門尉甲斐
庄民部尉舍弟新右衛門尉。此外河内衆ニイツ
シカ岡孫左衛門尉父子讃岐守舍弟四郎立野大
和守岡村父子土師孫左衛門尉菊並次郎左衛門
尉酒勾三郎萩原三郎仙波三郎長尾孫太郎若黨
中村與五郎高柳野崎與五郎。此外河内紀伊國
越中伊賀山城近江衆數百人討死。又遊佐若黨
岡邊彌太郎鰐左衛門次郎廣瀬高屋原父子中村
孫七布施藤次郎惣々四十二人。譬田若黨岡村
藤左衛門尉高田掃部尉宮田四郎左衛門尉法樂
寺民部丞同左衛門尉江川入道同新左衛門尉國
府式部同兵庫前戸七郎左衛門尉ヒロノ小若江
ノ原五郎古市七郎庶子惣領ノ間譽田若黨七十
二人。其外神南ノ三室ノ岸ヤ頼ルラン。立田川
ノ水濁レル。人馬不知數落重ナレハ。從元名
所ノ白波ハ。折ヲ得テ討取剝取事無限。母衣
笠驗塵ニ成テ。立田ノ川ニ流ケレハ。紅葉ノ筏

ヲ出スカト被疑。渡ラハ錦中ヤ絶ナント。足
ウヲ蹈。板橋ノ危キ命計ヲ扶ル人モ有リ。角
テ河内ヘハ悉ク死ニ果タリト云。又今神南山
ニテ合戦最中共云。兩説ニ聞ヘシカハ。左衛
門佐殿仰ニハ。何レニ義就可立立。此者未タ今
生ニ在ナラハ。後詰シテ合戦セハ。始終ノ勝チ
ニコソ無共。彼等ヲ引具シ。國境迄ノカン事。
何ノ子細ノ可在ソ。又早討死セハ。義就モ討
死シテ。三途ノ大河ヲ師友ニ越サントテ。若江
ヲ立立テ。高安ノ馬場ヘ御出有ル在様。昔秩父
畠山嫡子重安ヲ湯井濱ニテ討セ。鶴岡ノ峠ニ
テ怒リ玉ヒシ事モ。角ヤト被思知タリ。斯見處
ニ。自南京大路ヲ北ヘ馬乗一騎。息ノ尾ヲ切
テ懸ケ來ル。何事ソト皆恠シミ思處ニ。河内守
陣僧懸ケ著ケテ申様。神南山ノ在様。今ハ何ト
云共難助ト申。乍去御屋形様直ニ有御出。若
シモヤト云テ。ハラノト泣ケレハ。義就モサ

ラス體ニテ。御涙ヲ流シ給テ。片時モ急ケ人々
トテ。駒ニ鎧ヲ探副テ急カセ給。御心ノ中喻ン
方モ無シ。今ハ憑ミモ淺ク成。山ノ井里ヨリ濱
屋ト平トニ冑三百餘騎副。雁道ノ峯ニヨリ上
テ火ノ手ヲ舉ケレハ。神南山ノ合戦已ニ一所
ニ成リ。様々ノ評定共有ツレ共。被討漏ノ者
共。彌和州ノ合戦生便敷云。其上一騎當千ト憑
ミ給ツル兵共。皆被討ケレハ。大剛ナリシ義
就モ。惘然ト成給。西林寺ヘ引入給御在様。唯
平家ノ八島軍共可云。有繫平家ノ名將達モ。
負軍ニ成ヌレハ。水鳥ノ羽音ニ噪キ。白鷺ノ
羣入ヲモ。源氏ノ旗カト噪キ給。是等皆聞處不
足成ルニ似タレ共。更以非其儀衆生ノ眼ニ
ハ見ヘサレ共。諸神皆冑ノテヘンニ在テ。時刻
ヲ以テ。合戦ノ勝負シ給フト云。角テ西林寺モ
要害惡シトテ。其夜ニ即寛弘寺ヘ移給。或人ノ
異見ニ。嶽山城ヲ敵ニ被取不可叶トテ。嶽山

ニ上在ル要害取繕イ。兵糧并矢楯ヲ籠メ。腹切處ト定給。誠ニ鬼ノ城共可謂。去テモ無敢一日ノ内ニ。加樣ノ負果給者哉。若江城ニモ義就籠リ給テ。天下ニ聞ユル將者相具シ。四方ハ深田也。口ニツニ拵ヘテ。處々ヲ堀切り。搔楯箭藏。木戸逆茂木。思ノ儘ニ拵ヘテ。今一日モ疾々寄セヨカシト待給イ。又若江城ヘ寄セハ。大和落人共集テ。和州ニテ合戰シ出。布施高田筒井箸尾ノ館ニ烟ヲ立テハ。必ス大和勢ハ可引。サアラハ。土民ニ先ツ矢ヲ射サセ。時分ヲ見テ。自城出ント内評定メ有リト聞ル間。無左右彼城ヲ可被責事。大事ノ中ノ一大事ニテ在シニ。思外返リ寄セソ。如此負果テ給事。肝要ハ御治罰ノ故也。又南都ニ在ル僧。同九日ノ夢。春日五所明神。各諸神ヲ催シ。指西ヲ御行在ル。彼僧夢心ニ問テ曰。爲何如何成所ヘ御幸ント問フ。答云。當西ニ逆臣ノ族。

欲惱吾國爲人力難叶。所詮以神發爲御退治也云。夢覺テ大ニ驚キ。聽テ此由披露ス。六方學徒之有テ評定。卽立田ヘ注進之。後思合スレハ。神軍ニテ在。昔用明天皇ノ王子聖德太子。佛法王法ノ相論ニ依テ。與守屋大臣御合戰在シ。神力ヲ以コソ勝給。其時ノ御約束也。佛法建立セハ鎮守ニ勸請可申ト。御契約ノ末透リ。法隆寺ヲ有テ建立神南山ノ三室ノ山ヨリ。立田里ニ勸請申。抑彼法隆寺ト申スハ。法相眞言兩流ノ砌也。然ルニ聖德太子以來佛法ノ深味ヲ下賤ノ下ニ味イ。初生死輪廻ノ煩惱ノ衆生ヲ可助給トテ。上宮ノ御室ヲ。八面ニ造リシ事ハ。八苦ヲ可除トノ表相也。御本尊ハ十一面觀音。諸佛ノ御願多シト申セ共。觀音ハ三十三身ニ變シ。不淨ノ塵ニ交リ。依氣應機法ヲ說。濁世ノ衆ヲ引導シ給トテ。觀音ヲ安持ス。毎日々中ニ出シ給御舍利。釋尊左眼

也。一心ニ頂禮セハ。萬徳圓滿セン。仍彼神南山トハ。立田明神八葉紅葉ノ袴ヲ着シツ、毎日毎夜ニ被通給山也。彼山其年ノ自春ノ比。常ハ鳴動シテ神火夜ナ夜ナ立シモ。今思合スレハ。此事ニテ在シト。皆人申シキ。去程ニ明レハ十一日ニ。政長島ノ城迄陣替也。奥ノ御幡衆計伺候有テ。吉日タル間。遊佐神保ヲ始トシテ。自大和。悉ク河内へ被入。同十五日政長河内入國。若江城被固。成身院島中務尉御供也。同十八日。譽田古市へ陣替。同廿三日寛弘寺陣替。同十二月七日。政長上引川着陣也。去程ニ寛弘寺ノ軍勢。皆々嶽山ノ際へ取倚野陣也。斯是處ニ。同廿七日。城衆打出。伊勢國衆ノ陣へ寄セ。太刀打。長野勢數多被討。河内衆ニハ。大方新兵衛尉同彦左衛門尉花田宗左衛門尉ササノ虎口ニテ討死ス。其間野陣少々被破。皆弘川ニ一處ニ成ル。年號ハ十二月ニ改寛正。

明年辛巳正月二日ニ。自嶽山下ル。譽田道明寺ノ邊。寺庵神物共不云。兵糧米ヲ取テ。太子河原ニテ藏シ勢シテ合戰ス。敵見形卅餘人討死云々。去程ニ其夏ノ半迄。異ル事モ無リシニ。嶽山ノ面々ノ評定スル様。去テモ加様ニ冥冥トシテ。兵糧詰メニセラレンヨリ。イサ弘川へ亂入。古傍輩ニ對面シテ。最後ノ廣言物語シ。有無ノ實否ヲ究メン。尤ト同心シテ。六月廿日ノ夜ニ入。六十二人今生後生ヲ契リ。義就ニ參。此由申ス。義就案シ煩イ給テ。暫ク御返事モ無リケリ。斯是處ニ。須屋左京助進出テ中。此際ニ成テ不及是非。唯御曹子様ノ御酌可爲トテ。最後ノ酒盛仕テ。屍ヲ弘川ニ留メ。名ヲ万天ニ上ントテ。義就ノ御盃ヲ被下。様々廣言シテ御前ヲ立。後ニ思合スルニ。誠ニ最後ノ門出也。角テ須屋平小柳等ヲ先トシテ。一日モ不知ヌ大山ニ分人。我先ニト急ク在様。蟪蛄

カ斧トモ可^レ謂。此山ハ上ハ金剛山。下ハ二上ノ
嶽ニ續キ。虎狼野干ヨリ外ハ不通。昔役優婆
塞此山ニ入給シカハ。衆生濟度ノ爲ニ。捨身ノ
行ヲ成ス。是ハ又未來必無限ノ業ニ墮チ。二世
共ニ身ヲ捨果ル事ナレ共。一旦ノ名利ヲ思ッ
ツ。自^レ人先ニ敵ニ逢ント急ク心差シ。弓矢取
身程哀ナル事ナシ。角テ人々時々患之。峰上
一念ノ谷下リ。何クトハ知テ共。三重ニ木戸ヲ
打。矢藏ヲ上タル處ニ付テ。勢ヲ汰エントスレ
共。前後遲速有テ不^レ汰。夜ハ早明方ニ成間。僅
ニ七八人如形鬩聲ヲ上テ責入。太刀打^ス。始メ
ハ弘川討負テ。神保宗次郎丹下備後守長倉大
炊介草賀新左衛門尉岸信濃守二見三郎左衛門
尉勢木山下新右衛門尉服部川七郎左衛門尉同
掃部尉池田修理亮藥師寺以下討死云々。然レ
共御屋形様ノ陣迄ハ火モ不^レ懸。其故ハ殿下ノ
御輦ト。院宣ノ入タル御唐櫃ノ在ルニ依ルト

云ヘリ。今ノ如クハ危シトテ。御旗ヲ被舉レ
ハ。懸テ寄セ勢ノ眼ニ。露降氣モ魄モ身ニ不
添シテ。ハツト引逃。然レ共殘テ討死スル人
數ニハ。須屋左京助嫡子孫次郎馬場次郎左衛
門尉長尾三郎五郎酒勾堀片岡龍泉孫次郎花田
式部丞木屋堂高向餘邊是等ハ殘テ討死ス。先
代未聞ノ將者。恐ラクハ異國ノ樊噲張良カ戰
忠ノ術ヲ設ケテ。秦漢兩帝數度ノ戰イモ。是ニ
不^レ過。特更須屋孫次郎カ振舞。鬼神トモ可^レ謂^ッ。
又辨慶カ衣川ニテ立スクミニモ可^レ増在^マトモ
不^レ可^レ劣。死シテモ未タ兩眼ハタラキケリト云
リ。暫ク人モ不^レ近付。六月廿一日ノ日ノ内ノ合
戰果テニケリ。又明レハ壬午四月十日。金胎寺
ノ城ヲ責ラル。其諸勢ニハ河内紀伊國越中大
和山城ノ事ハ申ニ不^レ及。細川讃州同淡路守山
名霜臺泉州兩守備前守護攝津守護安藝小早川
佐々木六角伊勢國司同長野管領方ノ勢秋庭ヲ

初トシ。攝津衆丹波衆凡廿餘ヶ國ノ諸勢ヲ以テ雖^ル被^ト責。兩城共ニ痛ム氣色露塵程モ無リケリ。然處ニ至テ。金胎寺寄セ勢討死。特ニ泉州衆大敗軍ニテ引退ク。其外諸勢餘多討死ス。雖然日累リ。二城共ニ可^{キルモダ}被^ル持事無益也トテ。金胎寺ヲ開キ。本城嶽山ト一所ニ相固マリ。十五日ノ曉。不^レ被^ル敵ニ嶽山ニ被^ル加。又其中ニ龍泉寺ト中ハ。昔此山龍女成道ノ地也。經云。變成男子。具菩薩行。卽往南方。無垢世界。坐寶蓮華。成等正覺。コレ卽龍女南方ニ居シテ。直道トシテ。龍池于今爲顯然者也。仍名龍泉寺。又金胎寺ハ胎金爲眞言之間所名也。秘密教法ノ靈地。兩部秘藏之經界也。彼堂社ヲ破。要害ヲ構。貪取寺領寺物。卽兵糧ニ用之。密教莊嚴ノ淨土。惣脩羅道ト成テ。胎金一千二百餘尊之寶罰モ。大ニ怖敷トテ。金胎寺ヲ開キ退城了。去程ニ嶽山三方ヲ取卷キ。雖責。南ハ越智紀伊

國ノ通無煩ニヨリ。強^{アナカチ}無痛リ。斯見處ニ。寛正四年癸未三月十四日。成身院計略シテ。國見山ノ頂ニ陣取。南口ノ通路ヲ堅ク被^ル停。仍四月十五日嶽山曉忍テ落城了。木實峠ニテ暫ク續^タ息。一首カクナン。落人ノ中ニ夏落ル木實峠ノ行末ヲ不知ハ怪ニモ道理也ケリ。打詠シテ牲川サウカノ里ヲ打過キ。ライチカ城ニ着ヌ。角テ色々評定在處ニ。高野衆進ミ出申ス。御敵ハ定テ川ヲ越テ可^ル寄ス。然レハ此小城ニテハ。何ノ益カ可^{キル}待。所詮我カ山ヘ有^リ御入。暫ク御座アラハ。要害モ可^レ被^ル好。兵糧矢楯モ可^レ被^ル多。一山ヲ被^ル相付レハ。難默止テ。同心可^レ仕。サ在ラハ。五年十年責ル共。不可有^ル其煩ト申。此儀尤ト同シ。卽廿二日高野山ニ上着。寺中此事聞ヘテ。一山一同ニ大塔ノ庭ニ集リ評定ス。抑彼義就ハ背^キ上意^ヲ天下ニ被^ル挾。既ニ日ノ旗ヲ被^ル向上ハ。爲^ニ朝敵

事無^シ隱^レ。其上當山開闢以來。甲乙人亂入スル事ナシ。公私共ニ不可^レ然。堅ク防キ可^レ被^レ申且ハ大師ノ奉公。且ハ天下ノ外聞ト云人在ケレハ。此儀ニ可^レ同^ストテ退散ス。其内ニ義就最負ノ族云。更以朝敵ニテモ無シ。只一家ノ相論也。特ニ義就ハ故德本ノ實子ト被^レ定。被^レ歷上意義字ヲ被^レ賜義就ト云々。然則當國ハ皆義就ノ御分國也。御分國ノ當山ニ往テ。主君ヲ防可^レ申事。太緩怠ナリト。咄^ツヤク人モ多カリケレ共。何クモ同シ習イ。時ノ勝方ヘ多クシテ。此義ハ不立。去程ニ不動坂ハリ道ト。兩處ニ猛勢集リ。今ヤ^{／＼}ト待處ニ自本高野衆案内者ナレハ。彼兩所ヘハ不通シテ。摩尼越ト云自間道。奥院ヘ通リ。自後関ヲ上クレハ。防カン事思モ不^レ寄。只身可^レ逃^ル計ニテ。逃噪キケリ。四月廿二日夜半ハ。夏ノ夜ノ霜カト思イ。タトロタトロ政長ニ參リ此山ヲ申。政長ノ義ニハ。面

面志シ返ス^{／＼}神妙也。合戰ノ習イ。勝負ハ時ニ依者也。先面々無^キ何事コト目出度トテ。太以歡喜了。抑義就高野山ノ淨光院着陣。後ニハ西院ヘ御移リ在。先ツ心靜ニ寺中ノ巡禮御伴ノ人々口號。一首カクナン。不動坂ノ邊

ハリ道ニテ

夏衣ヌウテウ絲ノハリ道モ破レンメテハタ

マラサリケリ

聲高カニ戲レケリ。仍老僧一人被^レ召具。寺中ノ義共御尋在ケリ。僧云抑大師此山ヲ開闢シ給フ事。御年二十。延曆十二年癸酉。泉州本福寺ニテ出家。同十四年乙亥和州東大寺ニテ受戒。同廿三年甲申歲三十一入唐。參^シ見青龍和尚。密教并傳^シ受諸法了。自大唐明州之津向日本。三站ヲ投給。落著キタラン處ヲ。佛法ヲ建立セ

ント。御定誓在シニ。處コソ多ケレ。此高野山ニ飛來リ。時ハ平城天皇御宇年號大同元年丙戌有歸朝。即開此山。年ハ弘仁癸巳御歲四十六。嵯峨帝御宇也。摠而大師一生之間。佛法建立不知其數。角テ御年六十二。仁明天皇之御宇。承和二年乙卯三月廿一日寅刻。入定^{シス}了^ル。願^ハ曰。

我昔遇^テ薩埵^ニ。親^ニ悉傳^ニ印明^ニ。發^ニ無比誓願^ニ。陪^ハ邊地異域^ニ。晝夜愍^ニ萬民^ヲ。住^ト普賢悲願^ニ。肉身證^ニ三昧^ヲ。待^ニ慈氏下生^ヲ。不闕^ニ日々影向^ニ。檢^ニ知處々^ニ遺跡^ヲ。雖^レ不見^ニ祖師吾願^ヲ。有^レ心者聞^ニ吾名號^ヲ。知恩德之。由是吾悲欲^ニ白冢上更々人々芳護^ヲ。繼^テ密教壽命可開龍華三會^ヲ。謂也ト委敷申。摠而當山ハ。彌勒佛ノ淨土ニテ。一念至念ノ人ハ。必次テ慈尊出世シ遇シカ故ニ。御廟ノ橋ノ徒ニ。被^レ棄輩モ。世ヲ捨ル類イモ。導^ク絲ノ針道ヲ。通^フ三鉢ノ松風ニ。憂世ノ夢モ可^レ覺ヌ。又玉川ト申ハ。

惡魔ノ在所ニ定給^ヲ。仍多魔川ト書ス。依^テ之手水ウカイニ禁^レ之。然モ大師ノ御詠ニ云。

忘^レテモ結モヤセン旅人ノ高野ノ奥ノ玉川ノ水

又二社ノ鎮守。一ハ丹生大明神トテ。胎藏界ノ曼陀羅也。次ハ高野大明神トテ。金剛界曼陀羅也。惣シテ當山無雙ノ靈地ニテ。愛別離苦。怨憎會苦ノ惡心。自消滅。帝都ヲ去^リ二百里。鄉里ヲ離^レテ。無人城。世ノ常ノ不^レ有所。誠ニ貴ク被^レ申ケレハ。怪ミツ、此山ヲ見ルニ。甲冑ヲ對シ可^ニ入堂事不可^レ然。其謂ハ義就住山セハ必敵可^ニ責入^ニ。サ在^ラハ。佛法破滅ノ基イ也トテ。同五月二日。岡ノ城トテ。生地カタチト彼間イ。廿餘町東ヘ下給。近所ノ知行被^レ所務ト云々。其後政長菖蒲谷長山ナントニ。諸勢共取陣。自五月ノ末。於粉川合戰及度々。六月廿一日大合戰。岩狹二郎遊佐若黨中村左

近將監。其外究竟衆卅人討死。中ニモ岩狹ハ
既ニ被責詰。義就御腹被召ントシ給ヲ。岩狹
御着長ヲ給リ。御身替リ太刀打シ。時刻ヲ移
シ。其間ニ靜々ト有御落。去程ニ岩狹。義就ト
名乗討死シケリ。名人也ト申キ。同秋ノ末方
迄。所々ニテ義就究竟ノ將者共討死。其外手負
餘多。泉州和州ヘ引逃ク間。義就大剛ノ名大將
トハ乍申。簍々思食。一騎當千ト憑ミシ者共
被討。殘テ無甲斐モ。其末ノ少無キ者共。義就
兎モ成リ給ハ。彌道狹ク成。隠レ家ヲ借ス人
モ在マシキ事。返々不便也。乍無甲斐。自山山
ノ奥ニモ忍テ。可然時代ヲモ待チ。又其間ニ
上意ヲモ可奉繰トテ。自岡城内ノ郡越ヘニ。
吉野ノ奥。北山ト云在所ヘ忍ヒ給。遙々ノ道
ノ程ナレハ。在所々々人ヲ憑テ通り給在様。中
中不及申。大勢ニテハ叶間シトテ。從天川末
末ノ人ヲハ。御暇ヲ給リ。思々縁々ニ可忍ト。

然ル可キ有^{ラハ}時節。何クニテモ可^ハ出合ト。被仰
ケレハ。無力シテ隨仰。散々ニ被^レ成風情。日モ
不被當有様也。角テ義就三十餘人計ニテ。何
ク共不知。深山ヲ凌キ。北山トヤランニ在御
著。在所ノ者ヲ憑ミ。其體中無^シ言葉。李陵カ入
胡ニ同シ。更々姿モ振舞モ似タル者無シ。異
類ヲノミ見給。明暮都ノ戀敷思食ケル次ニハ。
所々ニテ討死シタル者共ノ不便サ。兎ニ角ニ
遣ル方モ無キ御在様。去程ニ政長ヨリ京都ヘ
此旨ヲ注進在テ。何ク迄モ追ヒ可責由在ケレ
ハ。上意ニモ被^レ思召煩。奉行頭人被^レ召出。如何
ト在シカハ。面々申上ル様。既ニ平家ヲ始メ。
南帝其外代々。於南方。牢人幾多不知其數。雖
然至^テ于今。幕々敷事モ不^レ御座。限^リ右衛門作。
如何程ノ事可^キ在乎。紀伊國河内ノ名城共。彌
好々被^レ搆。可^レ然勢ヲ籠置キ。政長ハ可有^ニ上
洛ヤト申ケレハ。上意ニモ尤ト思召。其旨被^レ

仰下^{ケレハ}。政長誠ニ開^ノ喜悅^ヲ眉。同十二月廿四日。河内國若江城ニ有^ニ下着^ニ。次年寛正五年甲申正月十四日有^ニ上洛^ニ。驪^テ其年ノ秋。管領成リ。明ル春。東山西山花御覽共在^ニ之。又糺河原勸進猿樂。御代ノ一度ノ見物ナレハ。申モ愚ナル事共也。其後若君餘多有誕生。政長ノ管領。上意ニモ珍重ト被^ニ思食^ニ。諸大名皆々被^ニ羨ケル。因^テ茲^ニ三社之御參詣。酉戌兩年在^ニ之。誠天下泰平也。

河州若江寺

右筆主祐全

文明十四年仲春下旬之比如本寫之畢

右長祿記以屋代弘賢本校合了

享和元年八月日

長祿記終

應仁亂消息

今度就一亂可入字凡注侍也。天下屬靜謐。先以目出度候。雖然山名金吾宗全入道依惡逆謀叛反逆凶徒廻計略引率軍勢。既欲覆天下。露顯條。御内仁左右人^侍垣屋太田垣最初一往加樣之題目太不可然之由。再三雖教訓申更無承引。結句突鼻^ヲ追籠^同。昂山右衛門佐義就澁川治部大輔義廉一色左京大夫義直筑紫大内新介政弘土岐美濃守等我館誘城郭。猛勢楯籠。無微所辭案^{スルニ}。熟案^{スルニ}。此事^ヲ。只天魔障碍歟。旁以無勿體事也。但看野馬臺并聖德太子碣^ノ記等。於戲悲哉。吾朝滅亡時節到來于今極覺悟候。惣近年怪多。其中取分寛正六年^{乙酉}九月十三日亥尅計仁自坤艮方光物飛行。殊今宵名名月事。上下萬民嘯^ニ月澄^ニ心意刻。俄如此天地震動出來間。人民大消肝魂。至遠國巴島者不存知。先洛

陽五畿内一同也。亦若干

幾行經何

過日數。翌歲同月

同刻本方仁飛飯。希代不思議凶事也。去程被成

下治罰御教書。上者。下給御旗。御所勢惣大將

軍細川右京大夫勝元同六郎勝之。於細川一族

悉令一揆。斯波家督相傳武衛_{松竹王}兩入畠山尾張

守政長山名彈正是豐同七郎賴忠同名右馬助豐

熙佐々木大膳大夫入道同名六郎四郎政信赤松

次郎政則同名伊豆守土岐世保武田大膳大夫舍

弟治部少輔。其外諸大名近習外樣彼戰場馳向

破却。御所中警固神妙之由御感候也。抽戰功面

目不可過之。就兵革洛中洛外物念々劇物云。

都鄙平均動亂大騷動猥騷曲事也。元弘建武之

間南帝北帝兩家鬪爭如之哉。

一敵味方押分而牛角屋角構要害_ヲ櫓_ヲ征樓左間

城戶遼垣弓藏打亂櫓杭逆木。階楯大堀築地

蹈鞞壁驚耳目。候。爭輒兩方難有一途之落

居覺候。去間隨分限所々拘陣口攻口詰口

出張籠口_ヲ。宿直人燒箒御用心。時聲_波矢叫。

軍奉行懸野伏。射手大將矢合鍵推投。合戰者

見相懸。若武者達好糸具足金作太刀額當頻

當肋脇當腰當小泉甲緒卜。喉輪四手鍵刳小幡

重簾弓寶同脛楯赤狸熊權丸_{卷簾旁}上花麗母

衣貂皮間塞弦袋_{鼠付天}大和樣射手立相効。腰小

幡思々出立。輕一命_ヲ專進事_ヲ聊無退事取

寄取除_假馳挽達者近比可謂_{トモ}勵_{トモ}焚_{トモ}暗張良。敵

身方乍兩陣舉眉見物。大剛若衆樣後陣能々

可有御用心候。逐手搦手先陣後陣夜詰殿夜

番當番先懸虜分捕搦被誅之。或捕頸伐捨_{并剪}

討死。被疵人々嗜害取次第也。軍忠粉骨軍慮

屈勵忠節。名譽高名規模無比類。就其褒美

受領官途勳功意趣。切紙御感狀火打袋。恩賞

無所持无_レ人國中軍勢著到勢揃勇士武者羣

集者如稻麻竹葦。

一於_二武具甲冑鎧付脇楯腹卷胴丸袖。甲_九鍬形_方

手蓋半首唾瀉懸鏐袴籠手。太刀長太刀鉞戈同。弓

弦卷柔簾胡錄尻籠祖矢筈矢鉞矢雁俣。木

鉞釘尾楯破火矢手楯鏈楯疊楯馬楯。家々笠

驗効腰小幡。御陣立之幡竿幕串。太逞乘馬鞍

皆具油單雨皮敷皮尺木結橋。小者裳束者。同

絹股緋袖紬四布袴馬鹿帚子帟。絹腰袋。免有茶子

索小手捧。緒付箸筒陣杓。土脫腰袋。免有茶子

風情物不可絕。井兵糧八木糲味贈鹽。雜事鍋

鐵輪肝要。雜具慇調。夫丸無退堀。程隨器量見

計配分可被荷持者也。

爰人中間小者相語而誇凱。號足輕徒黨誑。

人心不寄思風度懸敵合戰仕。彼等宜無具

自在了簡工截襲城急決勝負。懸事者自元所

好逃事非耻辱。前代未聞出來者也。

一今出川殿御身之上事。依子細時計略。伊勢國

司館下被申暫御座候。就其色々依有雜說。

以上意儀。聊事無故有御入洛。而目出度刻又

爲上意伊勢守有出頭。然問今出川殿上樣含

恨忍出指比叡山御座候。敵方頻捧內書語

中間有御同心有西方御出敵陣一旦雖競

在樣存セ有。何子細哉。此間每度雖有大儀合

戰。右衛佐金吾入道左京大夫。彼人々者爲天

下者非勅。今者既今出川殿爲朝敵間被成

下院宣治罰上者天命如何。

一國之牢人沒落仕歲久輩相觸同類。寄合寄除

令蜂起。一味同心神水仕。由緒遺跡之古反具

取出。闕所地安堵佗言事堅訴訟之段。皆無相

違相叶御教書御奉書國遵行郡代渡狀奉行折

紙等分明也。理運至極最歟。綺無用懸探木无

理沙汰強取務者始終落居弓手妻手生涯之不

覺歟。皆々能々可有思案者也。

一痛敷者公家上臈郎家。燒三四年落涙百千度。

所領者被武家取无渴名分。御大事及浮沈

者。給人被官人遁世者得時出世。此間被詰

貧乏神、高野等様大疲勞計會忤侍加世者。今俄求蟬子。以好具足ヲ曩其身。不思議時代也。仍降參人參。下手人解死人者臆病未練之事歟。但今度興者他人與他人非諍。身與身之弓矢也。然間親子兄弟押分之儀。就其者時計略者或依籌策或時々依時宜。相互稔體不失儀更深難成越度覺候。

一田舎籠屋入用意切剝山堀落シ時車菱子張石弓優人色々巧構資財家具贓物牛馬眷屬悉運山内齋食物國土人民幾千萬費中々難及是是非候。當世者剩寄事左右惜我物忒欲人物上下萬民任雅意言語道斷無道之儀歟。所詮哀領佛神加護。窵上意枝葉止皆々以和睦之儀有和談。無爲無事候者最生前大慶本望此事也。

文明十八年丙午八月十日

主小入丸

應仁記一札

大永三年己未閏三月十四日書之

惡筆比興々々

應仁亂消息終

續群書類從卷第五百七十九

合戰部九

細川勝元記

寛正五年十二月二日。令淨土寺還俗。任左馬頭。以細川勝元爲傳。欲讓政務。同六年冬十二月廿三日。義尙誕生。竊以山名入道宗全爲傳。天下亂自是起。

將軍義政之御齡。未々四十ニタニモ。ナラセタマワヌニ。アラヌ心チ出來サセ給テ。淨土寺殿ヲ還俗サセ申サレテ。大樹ノ位ヲ相續セシメ。今ヨリ後。恣ニ老樂ノ榮花ヲ開カハヤト。思召立テケルコソ。世ノ可亂前表ナレ。夫君子ハ。七十二而心ノ欲スル所ニ從ヘトモ。不踰矩ト

コソ云ルニ。サハナクテ。早既ニ淨土寺殿ヘ御使ヲ被立。御世ヲ渡シ申サルヘキナリ。不日ニ御還俗アレトソ被仰出ケル。ケ様ニ頻波ノ御使雖立。理髮ノ御事夢々有間敷由。再三辭シ申サセ給ヒケレハ。重テ御使ヲ立ラル。若今ヨリ以後ニ於テ。若君出來ラセ給テ候ハ。襤褸ノ裏ヨリ則法體ニナシ可被申上ハ。御家督ノ事。改易アルヘカ(ラ)ス候。尙以テ僞ナラヌ所ヲハ大小ノ冥道神祇ノ照鑑ニマカスト被書。御内書ヲ遣サレシカハ。淨土寺殿此由ヲ被聞召。是程ニ御契約有ル上ハ。何ノ相違カ有ヘキト

テ着シ給ヒタリケル法衣ヲ解テ。加冠アツテ。俗體ニ歸シ。頓テ淨土寺殿ノ御外戚ノ事ナレハ。三條殿ハ移ラセ給テ。今出川殿トソ中ケル。近習外様ノ人々。日夜朝暮ニ出仕ノ装ヲ刷ヒ。兩御所ヘノ御番ヲ勤仕セラル、事。寢々トシテ誠ニ嚴重也。雖然如何思召ケルニヤ。御隱居ノ御事ハ。御沙汰ニモ不及シテ。結句御臺所コソ御懷妊アレトテ。世ノ人時メキアヘリシカ。程ナク御産ノヒホヲトキ。然モ若君御誕生ナラセ玉ヘリ。桑ノ弓逢ノ矢ノ慶賀。天下ニ聞ヘシカハ。京中ノ男女僧俗後ノ禍ヲ不知。アツハレ大果報ノ若公ヤト。云ヌ者コソナカリケレ。於是御臺所如何ニモシテ。此若公ヲ世ニ立テマイラセテト思召テ。御氣色俄ニ替テ。今出川殿ヲサミシ被申底見ヘテ。イカナル不審モ出來ヨカシト。思召サレケル心根コソ。果シテ天下ノ亂ト成ニケル。去程ニ御臺所キツト御

思案アルニ。諸國ノ諸大名ノ中ニ。山名入道ヲテハ。一家モ心カサ有テ。諸大名ヲ婿ニ取威勢并ナキ人ナレト思召テ。密ニ此人ヲ憑テコソ。若公ヲ世ニ立ハヤト思召テ。混テ頼ミ侍ル也ト理ヲ盡シ。黒ミスクル迄。自ラ御文ヲ遊ハサレテ。若公ノ御事ヲハ。山名入道殿ニ參セサフラフ上ハ。我身三十ノ春ニ過テ。優曇花待得タル心地シテ。適出來サセ玉フ若公ヲ。剃髮染衣ノ形ニヤツシ進センコト。夜晝トナキ物思ト成テ。本意ナクコソ覺ヘ候ヘ。穴賢ト云々。返々モ此事ヲ。人ニ漏シ玉フナトソ。被仰遣ケル。時ニ山名入道。御文ヲ披見シ奉リ。能々遠慮ヲ廻シ。扨モ細川右京大夫ハ。今出川殿ノ執權ニテ。御父ノ儀ナレハ。又ナラフ人モナク。萬事計ヒ申シ沙汰シテ。此今出川殿天下ノ武將ニ備リ玉ハ。爲我惡カリナン事必定ナルヘシ。其故ハ此右京大夫ハ。我婿ト云

ナカラ。入道カ生頸ヲ拔ントスル。赤松ノ次郎法師ヲ取立ル事。心得難キ事也。去ニ付テハ。入道モ内々其覺悟ヲ不致ハ。向後ノ不覺出來シテ。嚙臍トモ益ナカルヘシ。然ラハ御臺所ノ仰ニ隨ヒ。若公ヲ豫リ申勝元カ次郎法師ヲ取立ル上ハ。我モ畠山右衛門佐ヲ取立。同左衛門督ヲ外都遠島追失フ物ナラハ。勝元カ方ハ自然ニ勢ヒヲ失ヒ。味方ハ忽ニ力募リナント。案シスマシテ。御内書ノ旨畏テ承リ候由。御臺所ヘ御返事ヲコソ被申ケレ。

寛正六年。斯波義敏上洛。十二月廿九日。與父修理大夫入道明嚴。謁見兩御所。斯波右兵衛佐義敏。多年上意ニ違テ沒落シ。大内左京權大夫教弘ヲ頼ミ。西國ヘ下向シテ。數年在國アリ。大内被頼上ハ。連々義敏皈洛ノ事中達セントスル折節。伊勢守貞親。新造トテ寵愛ノ新女アリ。彼新造ト義敏ノ新女ト兄弟ナリシカ

ハ。貞親ヲ以テ取成。先義敏ノ息松王丸ヲ。鹿苑院ノ蔭涼貞葉西堂ノ弟子トシ申成ケル。貞親ハ御所様ノ御父也。新造ヲ御母トシ申奉リケル。是程ノ遠慮ナシナレハ。天下ノ御大事可出來ヲ不顧シテ。彼西堂迄。義敏赦免ノ事。連申サレケル。子息兵庫貞宗ハ。用捨アル人ニテ。父ニ向テ被申ケル様ハ。義敏身上ノ事。專ラ御取持ノ事。恐レナカラ不可然存候。自然一大事ニ成事モアルヘキカ。然ハ遂ニ天下ノ御騷ニモヤト存シ候。吳々無勿體之由。時々被申シカトモ。承引ナシ。結句ハ貞親遠隔セラレケル。誠ニ忠言逆耳。良藥苦口。且ハ清盛入道ヲ小松内府重盛教訓セラレシヲ。聞入玉スシテ。叡心ニ背キ。家ヲ長久ニ持玉ハサリシ也。今ノ貞宗モ未來ヲ覺悟シタリケリ。君ノ爲家ノ爲メヲ存シテ申サレケルト。後ニソ諸人申アヒケル。

文正元年夏四月。武衛義敏。與義廉諍家督。騷動及天下。初貞親。甲斐カ妹ニ嫁セシ内縁タルニ依テ。澁川治部少輔義廉ヲ取立。不移時日。歷上裁。五六年過ケルニ。彼義敏ノ妹。貞親カ妾トナル。此女房口入ヲ以テ。義敏赦免ノ事ヲ。貞親ニ歎キ訴フ。頃上意ハ兎モ角モ。貞親ノ儘ナリシカハ。應テ公儀ヲ申^{ヒロケ}緋。義敏赦免トソ聞ヘケル。應テ此由申達シケレハ。大内介モ是ヲ祝着シ。上洛ノ儀式ヲ調ヘ成ス。義敏上洛シ。兩御所ヘ謁見シ奉リ。大名マワリノ禮義如常也。此年ノ夏義廉出仕ヲ可被停止ノ御使立テ。剩ヘ勘解由小路ノ宅ヲ。義敏ヘ去渡スヘキノ上意頻波ナリケリ。於是義廉ハ。此間山名入道ノ婿ノ契約也ケリ。然間此儀ヲ山名入道ニ告知ラス。時ニ入道聞之。大ニ怒テ云フ。言語道斷ノ次第。不及是非奇怪也。於此儀如何雖爲上意。入道勘解由小路ノ宅ヘ下テ。上使ヲ可

相支トテ。以ノ外ニ違亂剛毅ニ及ハレケレハ。垣屋太田垣等ノ大殿原共十三人。此由ヲ聞テ。以連署諫テ云。於今度武衛ノ儀ハ。如御本意。無餘儀令存之所也。雖然義廉御縁邊ノ事ハ。是内儀之昵契。上意ハ又主君ノ恩道也。今更公儀ヲ違背シ。私縁ヲ專ラニシ玉ハン事。如何思召候哉。聖德太子ノ憲法ノ書ヲ拜見仕リ候ニ。君ヲハ天トシ。臣ヲハ地トス。地欲覆天。則致壞候ヘハ。上意於御違背。偏ニ御瑕瑾不過之存也。就是此ノ家ヨリ上臈ノ方ヲ一人。公方ヘ進セラル、事ニテ候ヘハ。彼武衛ヘ遣參ラセラレン御料人ヲ。哀レ公方ヘ上臈ニ入參ラセヲキ給ヒ候ヘカシ。若此旨於無御承引ハ。此愚輩皆拂^{モトリ}髻。高野粉川ノ棲ヲ可仕ニテ候トテ。振心底諫メケリ。其時入道。此諫言ヲ見テ。大ニ啞テ曰。旁ノ忠言ハ依道沙汰。入道曾テ是ヲ不足トハ不思也。水上濁則下流不澄。政道紛則民

不安候へハ。入道馳下リ。廻此謀計。奴原ニ箭一射付テ。無念ヲ散スヘキナリ。縦ヒ又入道雖致緩怠。苦シカルマシキ其證據ハ。赤松滿祐入道。若輩ノ身トシテ。普廣院殿ヲ奉討。其時細川ノ一族衆。讃岐守ヲ始トシテ。六角武田等ノ諸輩。雲霞ノ如ク。播州へ發向スト云ヘトモ。蟹カ坂ノ合戰ニ切返サレ。人丸塚へ引退キ。對陣取テ在シトキ。此某但馬口ヨリ攻入テ。滿祐カ楯籠所ノ城ノ山ヲ切テ落シ。將軍ノ御親ノ敵ノ首ヲ取テ。御本意ヲ達セシ事ハ。此入道ソカシ。然ルニ幾程モナク。六七年有テ。滿祐カ弟彦五郎ヲ召出シ。播州へ被入。其時旁達ト播州へ下リ。彦五郎ニ腹ヲ切セシ也。面々能々心得ラレ候ヘ。禮記ニ云。父ノ讎ヲハ共ニ不戴天トコソ有ニ。如何ナル田夫野人ノ身ナリトモ。親ノ敵ニハ其遺恨ヲ可含ニ。亡父ノ讎敵。幽魂ノ鬱憤ヲ思ヒトリ玉ハヌ程ノ。公方ニ

テ御座シマセハ。私コソ上意ニ違フトモ。面々達ハ身ヲ謹テ。最負ニ付カハ。苦キ事有ヘカラス。高野粉川ノ棲マテハシヨウサウトテ。居ラレタル座敷ヲツ、ト立テ間ノ障子ヲハタト立テ。高聲ニノ、シツテ云。抑大名ノ身上ニ於テ。若不義不忠ノ子細アラハ。時ノ管領ニ被仰出。諸大名ト評定有テ。隨其過失被停止於出仕者歟。又ハ寛宥アル者歟。否ニテ有ヘキニ。彼貞親等カ分トシテ。三職ノ家ヲ進退シ。畠山ノ家督ノ如ク。又武衛ノ家ヲ捫着ス。依彼ニ念之。今日ハ義廉カ上。明日ハ我等カ身ノ上ニカキラン事。踵ヲ不可廻。然ラハ入道一人。勘解由小路へ馳下テ。義廉ト一所ニ腹ヲ切ヘキ也トテ。瞋ラレケレハ。其長者共聞之云。父若不聞子之諫。則易語而從父。君若不用臣之諫。則拊口而從君ト云フ。本文アレハ。如何難澁スヘキヤトテ。公方勢立ト聞ハ。武衛ノ屋形へ馳

スヘシト。追付用意シケレハ。山名ノ一族ノ事ハ。中々不及申。土岐一色六角等ノ人々。同事ニ在テ騷ケレハ。昨日迄出仕ヲ遂シ義敏。今日ハ落所ヲカクシ。公方儀モ猫ヲ扞テ。是非ノ沙汰コソ無リケレ。角テ山名入道ノ云シ如ク。二三十箇日アツテ。義敏赦免ト聞ヘテ。ヤカテ出仕ヲ被遂ケリ。

一同年。武衛義敏走北國。伊勢守貞親賜追放御教書。一家沒落。義視遜細川勝元家。義政遣告文。請和還住本所。

一山名入道宗全モ。義廉ハ智也。親類也。旁以弓矢ニ及ハ、合力有ヘキト。分國ヨリ軍勢ヲ催シ上セラル。義廉ハ尾張國守護織田兵庫助ハ舍弟與十郎ニ猛勢ヲ差副上落ス。越前遠江勢モ悉ク召シ上セラル。京都ニハ。甲斐朝倉田宇二宮ヲ始トシテ。被官トモ悉ク召上セケレハ。多勢ト云モ無限。屋形ニハ所々櫓ヲ上。搔

楯ヲカイト相待ケル。去程ニ誰レ敵共味方トモ知ス者モ。身ノ用心ノ爲ニ。國々ヨリ軍兵ヲ召上セケレハ。天下ノ忿劇無限。又何ナル者カ申シ出シケン。今出川殿ハ義廉ヲ最負有テ。天下ヲ亂ラントノ結構也ト。巷ノ說區々ニシテ。兩御所義絶ノ様ニ成ニケリ。然ル間今出川殿。直ニ陳シ給フヘキ様モナケレハ。先忍テ細川右京太夫勝元ノ屋形ヘ御成有。御供ニハ一色伊豫守範直。同九郎親元兩人計也。伊勢守貞親ハ。雜說有テ。陰涼直葉西堂ト貞親ト。天下ヲ亂スノ間。面目ヲ失フヘキノ由。上意ヲ伺ヒ申シ。則細川山名ヨリ討手ヲ被指向ノ由。告知セケレハ。五月六日ノ夜。陰涼ヲ始トシテ貞親同備前守新造ヲツレテ。近江路差テ落テ行ク。有馬治部入道モ。貞親ト近付顔ニ。同道セントソ聞ヘシ。此亂偏ニ新妻ヨリ起リケリ。誠ニ牝鷄ノ晨スルハ。家ノ索^{ツク}ル也ト申モ。カ

ヤウノ事ナルヘシ。義敏モ同日ニ北國ヲ差テ落ラレケリ。同元日。惣大名連判ニ而。伊勢守貞親不義ノ條々訴ヘ申サレ。傷害セサセ玉ハスハ。各出仕ヲ致スヘカラサルノ由。被申上。依之貞親追放ノ御教書出ニケリ。山名ハ別シテ蔭涼ヲ惡ミケル。此人赤松次郎法師出頭ノ事。専ラ馳走ノ故也。是モ山名被申テヨリ。御教書出ケレトモ。蔭涼モ貞親モ。ハヤ疾ニ落ケレハ。其曲ナシ。同十一日。室町殿ヨリ今出川殿ヘ。日野ノ内府ヘ御使トシテ。聊御意趣ナキナリ。早々還室有ヘキ由。御自筆ノ御罰文有。猶以テ御存分有ニ於テハ。可御申有ノ由也。然レトモ今出川殿兎角ノ仰モナク。案シ煩テ見ヘケル所ニ。一色伊豫守進ミ出テ既ニ御自筆ノ御告文ニ候。其上内府子細御申ノ條。尤ニ候。殊更等持院殿ヨリ以來。御自筆ノ御告文細々不承及。此上還御ナカランハ。不可然ノ由

被申上。義視早速御同心有。内府モ勝元モ。伊豫守ヲ感セラレ。即チ還御有ケリ。勝元御所中守護ノ儀式。誠ニ耳目ヲ驚セリ。義政公モ伊豫守カ忠言ニ感シ給フト聞ヘシ。角テ暫クハ天下靜謐ノ休也。山名人道。自去年屬御臺所。乞賜畠山義就安堵。今茲秋。義就蒙恩免。九月日自熊野發駕。先入河内國領河内紀伊。十一月上洛。謁兩御所。直往山名宗全家修盟。畠山右衛門佐義就ハ。尾張守政長ニハイトコナカラ。義就ハ惣領タル處ニ。去ル享德ノ比。如何成天魔破句ノ謂レニヤ。遊佐神保ヲ始トシテ。被官共悉ク違背ノ心付ケリ。只尾張守ヲ仰候ハ。ン由聞ヘケリ。此趣上聞ニ達ケレハ。公方モ義就若氣ニテ。連々於殿中。雅意ヲフルマフ事多ケレハ。頓テ御同心有。然間上意惡ノ由。以ノ外ニ沙汰シケレハ。義就京都ニタマリカ子テ。伊賀國ヘ引入ル。父左衛門督入道德本。近年

病氣ニテ。建仁寺ノ西來院ハ、德本カ塔頭ナレハ。寵居セラレケル。尾張守ハ上意トシテ。德本カ請一跡相續ノ義。可申定ノ爲ニ。同名阿波守入道ヲ。迎ニ被遣ケレハ。卽德本出京シケリ。一族ニ西方ト云者。出京ノ事口惜ク思ヒ。父子從類七人腹搔切リ。同シ枕ニ死ニケリ。德本ヲ諫レ共用ヒサルニ依テ。死諫ヲ殘セリ。史魚カ尸諫ニハ。勝リテソ覺ヘシ。其後又。左衛門佐義就ト尾張守政長ト。可有和睦トノ上意ニテ。義就上洛有シカ。重テ上意ニ背キ。河内國ヘ下リ。若江ノ城ニ在ケルニ。政長此次テニ義就ヲ失ント。御下知ヲ蒙リ。近國ヲ催シ。立田ヘ打越ケル。小勢ノ由。義就聞テ。遊佐河内守。譽田三河守。同遠江守ヲ始トシテ。猛勢ニテ押懸タリ。政長ハ近國ノ兵。御下知ニ應スト云トモ。未馳集京勢モ未着陣。小勢成シカハ。如何セント諸人機ヲツメケル。政長ハ龍

田明神ノ御前ニ祈念シテ。少モ不騷御座シケル。爰ニ寄手ノ遊佐カ内ニ。馬場ト云初參ノ者。勢類有ケルニヤ。先陣ヲ申付タリ。義就カ一仁ニ中村ト云者有。イツモ先陣成^{ナリ}ケルカ。國ノ守護代ノ下代ナレハ。若江ニ殘シ置ケリ。然レハ岡部ヲ先陣ナラント存ル所ニ。當參ノ馬場ニ被申付。常々ノ御公事忤^ナコソアレ。軍ノ先陣ハ口惜キ事ト申ケル。案ノ如ク進ミ得スシテ。猶豫スルヲ。岡部彌六彌^{（脱有歟）}成行ク濫觴。專ラ此入道ノ張行ナレ共。ウツ、ナキ心ニテ。今ノ世ニ誰カ是程ノ弓矢取有ヘキ。入道ト此人ト和談スルナラハ。洛中ニ恐ロシキ者有間敷ト思ヒ寵ケル。又義就モ今度諸家ノ軍兵ヲ受テミタリシニ。山名勢ニ續ク者ナシ。天晴是ト一味ナラハ。誰カハ畏レント思ヒケレハ。頓而兩家内通ノ人有テ。外ニハタシカニ知子トモ。内ニハ雲龍ノ交リヲ修セリ。又當夏武衛騷動

ニ折ヲ得テ。義就河内ノ國ヘ打テ出ツ。政長方ヨリ遊佐河内守ヲ差下シ。拒カセケルカ。即時ニ追立ラレ。大和ノ方ヘ落テ行。見苦シカリシ有様也。義就ハ河内紀伊國打頼カヘ。分國思々ニ知行シテ。日野内府ト北小路殿ヲ頼ミ申。御臺所ヘ時々申達ス。サレトモ公家女房ナトヲ頼ム迄ニテ。上洛ノ便リ無リシ所ニ。山名金吾思ハル、様。今度武衛故ニ。既ニ上意ニ背ヌ義就上意迄罷上ハ。當家一大事タルヘント。身ノ上ヲ分別スルニ。右京太夫勝元ト左兵衛佐義廉ハ聲也。一色修理太夫ハ孫聲也。土岐美濃守ハ一味也。自餘ニ手ニサワル者天下ニナシ。義就ヲ我カ口入ニ赦免シ玉ハ。彼共ノ恨ヲ讎シ。第一ノ味方ト成ヘシト思案シテ。姊ノ比丘尼安清院ヲ御臺所ヘ參セテ。日々義就恩免ノ事ヲ申サセケル。御臺所ハ山名カ申ス所。何事ニテモ許容シ玉フ事ナレハ。義政公ヘ申達

シ。赦免ノ上意ヲ成下サル。山名喜悅ノ眉ヲ開キ。其比義就ハ熊野ニ居ケレハ。即チ使者ヲ差下シ。然々ノ由ヲ申ス。義就多年ノ熱懷。一期ニ開テ。暫モ不可猶豫。急ケヤ殿原トテ。文正元年九月上旬ニ。熊野北山ヲ立。河内國ニ入ラントス。遊佐河内守長直。若井ノ城ヲ拵ヘ。二重三重ニ堀ヲホリ。兵糧塚ヲツキ。矢楯岡ヲナス。軍勢四五千許ニテ籠リケルカ。義就コソ早熊野ヲ立ヌト聞テ。國中ノ人民右往左往ニ騷動ス。此時長直。臆病神ヤ付ケン。義就ハ天下無雙ノ勇者ニテ。我カ思ヒカケン所ハ。イカナル鬼カ城也。恐クハ攻落サンスル物ヲト。平生齒カミスル程ノ人ソカシ。増シテ此平城ニ長居シテ。詰腹切テ詮ナシ。未敵ノ近ツカヌ先ニ。アワテ騷テ。舅ノ奈良ノ筒井カ所ヘ落ニケリ。是程ヨク構タル城ニ。兵糧澤山ニシテ。猛勢持テ一軍モセスシテ。マタ／＼落行ハ。云

甲斐ナクソ見ヘシ。義就ハ手足ニサソル物ナク。河内ヘ入國シケリ。同年十一月二十五日ニ上洛ス。路次ノ行粧。馬物具ノ休。一手ハ勝レ

テ。一騎當千ノ士卒五千餘騎ニテ。千本ノ地藏院ニ着キ。日ヲ點シテ出仕ヲ遂ラレ。直ニ山名入道ノモトニ行テ云ク。今度某出頭仕候事。御芳恩ニ在ト。畏悦ノ頭ヲソ傾ケラル。山名モ佐殿ノ御歸洛ノ事。只一身ノ大慶ト賀シ申サレテ。通宵酒宴ニ數盃ノ興ヲソ被催ケル。是ヨリ山名入道ノ威風盛ニナリシカハ。世舉テ肥馬ノ塵ヲ望ミ。殘盃ノ冷カナルヲカンスト云者ナシ。角テ今年暮ヌ。新玉ノ年立歸リヌレハ。文正ノ年號ヲ。應仁ニ改メラル。

應仁元年正月二日。管領畠山政長罷。同十日山名宗全^レ乞^レ遂^レ政長。賜當職于義就。兩家及鉾楯。同十八日。政長火吾館。以御靈ノ森爲城郭。欲與義就戰。即日義就發兵。攻御靈森。勝負不決。

日既暮矣。兩軍勢交綏。入夜政長火御靈構。出奔。時人僉言。政長焚死スト。義就威風日ニ振。益與山名親。

打續キ兵亂止ムコトナケレハ。又文正ノ年號ヲ應仁ニ改メ。仁德ノ四海ニ普チカラシム事ヲ欲シ。内裡ニ元日ノ節會行ナハセ玉ヘハ。武家ノ御所ニモ。三管領四職ヲ先トシテ。近習外樣ノ人々。出仕ノ儀式ヲ刷ヒ。今年ハ太平ナラント。各祝辭ヲノヘケリ。朔日。塙飯ハ時ノ管領畠山左衛門督政長。常ニ勝レテ被勤。嚴重ノ休也翌日二日ハ。管領ヘノ御成始メナレハ。今更事新ク上意ヲ伺フニ不及ト。其設ケヲスル所ニ。明日ノ御成ハ。被思召子細アル條。可被期後日之由被仰出。其時政長。公儀ノ不定ナルコトヲ。述懷シテ申サク。此四五年ノ間。八ケ度迄ノ大儀ノ御晴ヲ勤メ。奉公他ニ異ニ合存之間。別シテ御感ニコソ預ンニ。コハソモ何事

ソヤトテ。忙然トシテアキレタリ。義就^{ヨシツク}是ヲ聞テ大ニ悦ビ。政長既ニ蒙^{モウ}勘氣上ハ。一日片時モ。ヤハヤ在洛セラレ候ヘキ。イサヤ彼館ヘ移ラン。假令忍テ在ト云トモ。御勘ノ身トシテ。否トハヨモイハシ。義就馳セ向テ。政長ヲ追出シテコソ。累年ノ鬱憤ハ散スル所ナレ。面々ハ如何思ヒ候ヤト被申ケレハ。遊佐譽田隅屋甲斐庄尤々ト同シケル。サレトモ政長モ名將也殊ニ勝元最負ノ事ナレハ。ヨモ見放シ申マシト。彼是廻遠慮ヲ時ナレハ。我先ニ無左右。屋形ヲ請取ント進ム者ナカリケリ。爰ニ政長ノ執事神保右衛門尉長誠^{ナガマコト}。聞此事ヲ。義就ノ思ヒ玉ノ如ク。佐殿ノ御在所ヘ取カケテ。可散本意ノ處ニ。屋形請取ニ。勢遣ヒアラソコソ。所招ノ幸ナレ。然ラハ某モ屋形ノ近所ニ移ラント。二條京極ノ宅ヨリ。屋形ノ前ナル佛院寺ヘ上テ。一所ニ持ツ、ケ。櫓搔楯密クカイテ。今

ヤ遲シト待懸タリ。義就^{ヨシツク}是ヲ見テ。兎ヤセン角ヤセマシト。僉議評定區々ナレハ。程ナク正月モハヤ中ノ五日ニ成ニケリ。今日十五日ハ。山名ノ家ノ塙飯ナレハ。嘉例ノ如ク勤メラル。塙飯事畢リナハ。定テ退出コソセラレメト思フ所ニ。サハナクテ。日比昵ヒ近付所ノ。大名達ヲ招キ集メ。花ノ御所ノ前後左右ヲ打廻ラシ。訴訟被申ケル。抑畠山右衛門佐蒙御赦免候上ハ。萬里ノ小路ノ館ヘ被移候ハン處ニ。細川右京太夫政長ヲ許容仕リ。及違亂候條。且ハ上意ヲ背キ。且ハ企叛逆者歟。被立上使。政長合力ヲ止候様ニト被申ケレ。山名入道カ申處。其謂レ有トテ。頓而被立上使ヲケル。勝元曾テ不承伏。御返事ヲハ。自是可言上トテ。御使ヲハ被歸ケリ。一兩日經テモ。御返事モ不申レハ。花ノ御所ニハ。細川方ヨリ寄來ルトテ。日番夜廻リ隙モナク。奉警固。又細川方ニハ。御

所ヨリ討手向フトテ。手分ヲシ口々ヲ堅ム。先西大路ヲハ。安富民部丞元綱。入江殿ノ西ノ釘貫ヲ打テ。其勢三千計ニテ堅ム。安樂光院ノ門ヨリ上ヘハ。内藤備前守。是モ三千計ニテ堅メタリ。犬ノ馬場ヨリ下。小川迄ハ。攝津國近江。并ニ四國ノ兵共。敵寄來レカシ。高名セン。ト小跳シテソ扣ケレ。扱屋形ノ内ニハ。蔀遣戸ヲ取拂ヒ上ケ。土門ヲ押開キ。猶子六郎ヲ大將ト定メ。庭上ニハ一門他家ノ人々。并馬廻ノ衆甲ノ星ヲ輝シ。鎧ノ袖ヲ汰合^{ユリ}テ並居タル。凡ソ五千計ソ見ヘシ。御所方ニハ是ヲ聞テ。右衛門佐。爰ハ他ニ讓ラヌ所也トテ。我手勢ヲ以テ。勢賦リヲセラル。先一番ニ譽田甲斐庄平。此三首ノ衆千計ニテ。入江殿ノ門ノ前ニ西ニ向テ扣ヘタリ。中ニモ甲斐庄ハ名ヲ得タル勇士ナレハ。我ニ不劣兵共。三百計引率シ。鎧ヲ小膝ニ載テ西ヲ睨ンテ。床机ニ居ル。先陣ハ遊

佐ソ堅メタル。扱諸家ノ衆ニ。甲斐朝倉垣屋大田垣等ノ諸卒。一條室町ヨリ上ハ。光照院迄。尺寸ノ地ヲモ不餘。軍勢充滿シタリ。將軍家。此由ヲ聞召サレ。諸家如此最負シ。互ニ合力セント欲スルニ於テハ。天下安穩成マシトヤ思召ケン。今度政長ト義就トカ事。諸家各不可合力。只相手向ノ取合ニシテ。可決勝負被仰出ケリ。山名入道此旨ヲ承リ。去ル十五日ヨリ至今日。夜晝四日ノ間。歎キ申ス甲斐モナク。綺ヲ可止御下知ノ旨。尤庶幾スル處也。獨身ニシテ。勝負ヲ決セン事。累年ノ本望ニテ候ハスヤ。義就カ手勢計ニテ。明十八日。政長カ宿所春日萬里ノ小路ヘ押寄テ。家ノ興亡ヲ。合戰ノ勝負ニ見候ヘシ。敵味方ノ剛臆ノ程。御見物候ヘトソ申サレケル。勝元ヘモ其外諸家ヘモ。觸聞セラル。義就政長兩人取合ニ付テ。合力ノ仁ニ於テハ。御敵ニフセラルヘキ檢使兩人迄

立チ。勝元モ御請被申ケル。此由ヲ聞テ。神保宗右衛門尉。向政長申ス様。此程義就取カケ玉フトモ。前々御約諾ノコトナレハ。定テ勝元ヨリ合力有ヘシ。然ハ又京極モ助ラレント存處ニ。公方ヨリ被立御使ノ間。不可合力仕ノ由。京兆御請フ被申上ハ。誰カ當方ヘ合力有ヘキ。先敵諸家一所ニテ。室町殿ニ候ヌレハ。イカニ上意ナリトモ。義就ヘ密々ノ加勢ナキ事ハ候マシ。其上。此屋形ハ。要害モナキ平原ニテ。殊ニ猛勢ヲ引受テノ合戰。難成存候。懸ルモ引モ折ニ寄ト申ス事ノ候ヘハ。爰ヲ捨テ。上ノ御靈ヘ上リ。藪ヲ小楯ニ戰ハ。一往抱ヘ候ヒナン。萬一合戰及難儀トモ。京兆ノ矢倉ノ前ナレハ。ヨモ討死セサセテ御覽センヤ。又安富民部丞ト。拙者ト。斷金ノ契約ナレハ。縦ヒ京兆コソ。上意ヲ重シ申サレテ。合力ノ儀ナクトモ。ヤハ民部ハ見放シ申マシ。若又安富心

替リ仕リ候トモ。京兆臨難救ヒ玉ハサランヤト。理ヲ盡シ異見申ケレハ。政長モ諸卒モ。此儀尤ト被甘心ケル。然ハ時尅ヲ不移。打テ上レヤトテ。屋形ニ火ヲカケ。都合其勢六千餘騎。兎テモ角テモ。甲斐有間敷人々ノ。ソラタノメナル君故ニ。雨モタマラヌ御靈ノ森ヘウカレヨル。諸軍勢ノ心ノ程。思ヒヤルコソ哀レナレ。運ノ盡タルシルシニヤ。政長モ神保モ。東河原ヘ廻テ上ラレケルヲ。諸軍兵ハ只落行ト心得テ。子ハ親ヲ捨。郎從ハ主ヲ不顧。散々ニ成行ハ。義ヲ金石ニ比シテ。御靈ヘ取入ル勢讒ニ二千ニ不足ケリ。サテ政長コソ無云甲斐聞ヲチシテ。館ヲ開テ。夕部上御靈ヘ。引退ケリト。風聞シケレハ。義就頗負ノ人々ハ。サモコソ有ラメト悦アヘリ。義就此由ヲ聞テ。手ノ者共ニ向テ。凡臨合戰場ノ習ヒ。一足モ前ヘ進ムトナレハ。匹夫モ猛卒ト也。一分モ引ント思

へハ。英雄モ處女ノ如ク也。軍ノ利ハ。勝ニ乘リ北ルヲ追ヨリ外ノ質ナシ。不移時尅攻戰ヲテ。勝コトヲ瞬目ノ中ニ可得トテ。十八日ノ早天ニ。御靈へ押寄タリ。御靈ノ森ノ體。南ハ相國寺ノ藪大堀。西ハ細川方ノ要害ナレハ。責口唯北ト東ノ方也。此方ヨリ攻入レト下知シケレハ。遊佐河内守。馬ヨリ飛ヒ下リ。一揉ニモミ破ント。眞先へ進メハ。アレ打スナ續ヤトテ。一族郎從ノ兵共。馬ヲ乗放チ乗放チ。我先ニト爭競テ攻入リ。鳥居ノ脇ナル。唱門士村ニ火ヲ懸タリ。春立ト云計ニソ有ケル。餘寒サヘカヘリテ。猶ハケシケレハ。士卒ノ手龜リ。弓ヲ彎ニ不自由。進メヤ兵共。今日ハ賭弓ノ春ベソカシト思ヘ共。愛宕嵐ノ山下風ニマセ降雪。烟ト共ニ寄手ノ口ニ入テ。眞クラ闇ニナレハ進退失度。忙然トノ立ヨル外ノ事ソナキ。ケ様ニ雪ニ咽ヒ。烟ニ目クレテ。アキレ迷ヘル處

ヲ。内ヨリ見スマシテ。此諸家ニ無隱。竹田ノ與次ヲ先トシテ。究竟ノ手垂精兵共カ。指攻引攻。矢前ヲ揃テ。思樣ニ射ケル間。寄手ノ大將ノ坂戸。左手ノ脇ヨリ右手ノ脇へ射透サレテ。立所ニ死ニケル。内ヨリ射出ス矢先ニハ。楯モ武具モタマラネハ。浮矢一ツモ無リケリ。遊佐カ手計ニテ。手負死人五百人ニ餘レリ。北ノ口ニモ。大藪ノ中ヨリ。透間ヲ數テ。彼手垂カ散散ニ射ケル間。死人手負ハ中々數ルニ不遑。爰ニ誰トハ不知。寄手ノ中ヨリ。年ノ程十二三計ナル小兒。薄假粧ニカネ黒ナルカ。髮カラワニ上テ。イト花ヤカナル具足ニ。袴ノソハヲ高クアケ。金作ノ太刀拔テ。眞甲ニサシカサシ。是ハ義就ノ御内ニ。父祖代々譽ヲ取侍ル。隅屋ト申ス者ノ子ニテ候。政長ノ御内ニ志アラシ人。出合ヒ玉ヘ。打物シテ忠ヲ父祖ノ尸ニ備ント。名乗モアヘス所ヲ。只徒ニヤミノト射伏ケ

レ。郎等ハ是ヲ見。餘リノ悲サニ。空キ死骸ヲ取テ。楯ニノセ。前後左右ニ取付。聲モ不惜ナキ歎ク。構ノ内ニモ是ヲ見テ。アレ程花ノ様ニ匂ヒ深キ兒武者ヲ。射殺サントハ思ハヌ物ヲ。中々ニ何ニ引テカ梓弓。取モハカナキ夢ノ世ニ。今日コソアラメ。明日ハ又我身ノ上ニヤカ、ラント。鎧ノ袖ヲソ絞リヌ。又京中ノ僧俗男女。街ニ立テ。此死骸ヲ見テ。アノ兒ノ親ハ。先年嵩山合戰ノ時。義就ノ狩セラレシ時。鷹ノシケミニカ、リ見ヘサリシヲ。彼方此方尋ルニ。政長ノ陣屋ニ在ト聞テ。花ヤカニ出立テ。廣川ノ陣屋ヘ行テ。取テ歸ル程ノ大剛ノ者也。今又此兒モ。數千ノ軍兵ノ其中ニ。眞先カケテノ討死。前代未聞ノ勳也。去ハ此隅屋甲斐庄和田等ハ。皆楠カ苗裔也。嗚呼好堅樹ハ地底迄芽百圍ヲ生シ。頻伽鳥ハ穀ノ中ニテ。聲衆鳥ニ勝レリト。天下ノ人感歎セリ。兩方終日戰

ヒ暮シテ。日西山ニ沈メハ。寄手モ構ノ内モ。互ニ夜合戰ハ。成間敷トテ。攻口ヲ少シクツロケテ。對陣取テ。人馬ノ息ヲソ繼セケル。扱神保宗右衛門尉。安富民部カ許ヘ。使者ヲ遣シ。今日ノ未明ヨリ。今迄ノ合戰ニ鬪屈シ候。御合力ノ段ハ。諸家各停止ノ上意ニ候ヘハ。達テ不及申。餘ニ疲レ候間。樽一荷贈リ玉ヘ。政長ニ献シ。最期ノ宴仕リ。同心ニ腹ヲ切候ハン。又今朝箭負ノ夫。河原ヨリ落失テ着陣セス。木鋒ヲ少シ合力アレト申シケリ。安富曾テ耳ニモ不聞入候。神保力落シ。角テハ叶フ間敷トテ。其曉。御靈ノ拜殿ニ火ヲ懸。相國寺ノ藪ヲク、リテ。諸卒皆行方不知ナリニケル。寄手勝ニ乗テ。アマスナモラスナトテ。喚キ叫フ。焼靜テ後。拜殿ヲ見レハ。焼損シタル尸骸三ツ有。人皆是ヲ見テ。此内一人ハ。定テ政長ニテヲハスラン。其故ハ政長終日拜殿ニテ。下知セ

ラル、聲聞ユ。アナ哀ヤナ。昨日迄ハ。天下ノ
管領ニテ。數ノ御晴ヲ勤メ。諸人ニアカメラレ
シ人ノ。今日如此トハトテ。袖ヲ絞ラヌハ無リ
ケリ。細川カ働キ餘ニ無云甲斐ト。人口ノ誹
ハ不止。ケニモ見危致命ハ。士ノ道也。況ヤ既
ニ我館ヲ放火シテ。細川ヲ頼ント。隣へ來ル人
ヲ。目ノ前ニテ討死サセテ。ヨクソコラヘタ
リ。古モ今モクメシナキ次第也ト。後ノ事ヲハ
未知。憚ル所モナクソ沙汰シケレ。又細川ヲ引
人ハ。勝元ハ忠臣也ト云ハ是也。今度ノ儀。弓
矢ノ瑕瑾ト云ヒ。無念ト云。尾張守合力スヘ
キ事ナレトモ。上意ニ恐レ慎ミ。公私ノ御大事
ヲ耻辱ニカヘテ。勘忍セラレケルコソ奇特ナ
レ。今山名ト爭ンニ。勢ヒモ謀モナトカ可劣。
只忠臣ノ筋ナレハ。角君命ヲ重シ玉フト。先祖
武藏守頼之カ事迄。申出シテ褒ケリ。政長ハ死
タリトモ云。又落タリトモ沙汰シケルカ。行

方何地トモ知ラネハ。洛中ハ先靜謐シケリ。サ
ラテタニ奢ヲ極メタル山名人道。畠山義就ナ
リケレハ。末トテモ手ニ立ツ大名有間敷トテ。
明テモ暮テモ。酒宴猿樂田樂ノ外無他事。此上
ハ何事カアルヘキトテ。先諸軍勢共。國々へ可
下トテ。ヤカテ暇ヲ出シテケレハ。此程長々
在洛シテ窮困セシ兵。白鷗ノ籠ヲ出テ走リ。兎
ノ罝ヲ脱タル心地シテ。己々カ國ヘソ下リケ
ル。同年三月。細川與山名構難。細川竊ニ召援
兵。固城壁堀塹湮。山名又構要害集軍兵。一色
左京兆退出走。勝元ノ伯父右馬頭入道内々勝
元ニ向テ申サレケルハ。去ル五月ノ耻辱ヲハ。
如何ニ思玉フ。一度會稽ノ耻ヲ雪メ候ハテ有
有ヘキヤ。情ナキ人々ノ覺悟哉ト。勝元ノ深キ
心ハシラス悲涙ヲ押ヘテ諫ラル。勝元ヲ始メ
トシテ。香河内藤安富藥師寺秋庭ヲ先トシテ。
當座ニ有ケル人々尤トソ中ケル。暫ク有テ勝

元被中ケル。尾張守合力ノコト。中留メラル、ニ付候事ハ。當家未一日モ敵ト成事ナシ。此時ニ於テ。武名ヲ先トシ。御敵ノ名ヲ可取コト。口惜次第也ト。涙ヲ流シ玉フ。此後兼々契約深キ人々ニ。内談セラレケルトソ聞ヘシ。山名細川聿舅ノ間也。兩家下々迄モ。軒ヲ並ヘタル處ニ。俄ニ隔心ノ堀ヲヌリ。堀ヲホリ。釘貫ヲナシ。互ニ用心稠ク見ヘシ。如何ナル馬嫁者カシタリケン。山名入道ノ方ヘ。込矢射入ケル事度也。或時ノ矢ニ「ウテナクハヤメヤ山名ノ赤入道手詰ニナレハ御所ヲ頼ミヌ」是ハ花ノ御所ノ四足院ノ前ハ一色左京太夫家也。實相院ト御倉ノ正實カ在所ヲ。此所ヨリ陣取ナハ。左京太夫カ在所西陣ト隔リ。洛中ノ細川方。ヨモタマリ候ハシトノ謀ヲ聞シ故也。今出川殿ハ。天下ノ事無爲ニ治マルヘキ事ヲ思召テ。勝元方ヘ御成有テ。又山名入道ヘモ御成有。何モ

辱キノ由被中。暫ノ間。兩所ノ間ナル柵ヲアケテ被置シカ。頓テ又サシ堅ム。春スキ夏モ漸ク半ニ成ヌレハ。勝元諸國ノ兵ヲ召上セラル。五月十日。赤松次郎。播磨牢人共ヲ引率シテ。播磨備前兩國ヘ亂入ス。本國ノ事ナレハ。早速手ニソ入ニケル。是ヨリ美作ヘ發向セント思ヒケルカ。山名修理太夫政清カ伯父掃部頭在國シテ。隙ヲ伺フ便無リケレハ。先京都ヘ可罷上ノ飛脚到來セシニ依テ。先閣テ上洛仕ル由ヲ申ス。伊勢ノ國ヘハ。土岐ノ世保五郎殿政康打入。サレトモ一色被官石川佐渡守入道道悟。其子藏人親貞。爲守護在國シタリ。彼石川先年伊勢志摩ノ國人共。左京兆ヲ背シ時モ。ヤス／＼打順ヘ。其後度々手柄ヲ顯ハセシ者ナレハ。其儘世保ヲ追出ス。世保伊勢ヘ打入事ハ。關豊前守盛元カ。世保ヲ聿ニ取ントテ。惡黨共ヲ催シ迎ヘシカトモ。石川事共セス。此時京ヨリ飛脚

到來シテ。其國ノ軍ヲ闇キ。急キ可上觸アレハ。城ヲ堅固ニ持セ。石川ハ上リケリ。又尾張守モ遠江ヘ義敏ノ牢人共ヲ打入レス。若狹齋所今富ノ兩庄ヘハ。武田下向シテ。一色方ヲ退ケリ。是皆勝元ノ謀也。諸國軍兵日々ニ上レハ。着到ヲ付テ。勢カサヲ見ントテ。記スニ。先勝元ノ手勢攝州丹波兩國并ニ土佐讃岐諸國ノ被官等。馬廻ノ衆。都合六萬餘騎也。同讃岐守政之。阿波三河兩國ノ勢八千餘騎。同備中守四千餘騎。同淡路守三千餘騎。同和泉守護二千餘騎。同下野守二千餘騎。同左馬頭二千餘騎。他家ノ衆ニハ。斯波右兵衛佐義敏五百餘騎。畠山左衛門督政長。紀伊河内越中ヲ催シテ五千餘騎。京極大膳太夫持清。隱岐出雲飛驒江州ノ勢一萬餘騎。赤松次郎法師。播磨備前美作三ヶ國ノ勢五百餘騎。是三ヶ國未知行時也。富樫介五百餘騎。武田大膳太夫國信。安藝若狹兩國ノ

勢三千餘騎。其外官軍公軍近習外様ノ大名小名。諸國同心ノ士卒。是モ六萬餘騎也。惣シテ都合十萬一千五百餘騎也。山名方ニモ。勢ノ多少ヲ知ントテ。着到ヲ付ラル。先山城金吾入道ノ勢。但馬播磨備後。并ニ諸國ノ被官等ヲ引率シテ。三萬餘騎。一族ニハ相摸守入道。伯耆備前兩國ノ勢五千餘騎。同因幡守護三千餘騎。同修理太夫。美作石見ノ勢ヲ率シテ三千餘騎。他家ニハ武衛義廉。越前尾張遠江ノ衆一萬餘騎。畠山右衛門佐義就。大和河内熊野衆ヲ馳催シテ七千餘騎。修理太夫義純能登勢三千餘騎。一色左京太夫義直。丹後伊勢土佐ノ勢ヲ引率シテ五千餘騎。土岐左京太夫成賴。美濃ノ勢ヲ催シテ。八千餘騎。六角ノ四郎高賴。江州ノ勢五千餘騎。大内ノ新介政弘。周防長門豐前筑前安藝石見六ヶ國ノ勢ヲ引率シテ。二萬餘騎。伊豫ノ河野二千餘騎。

此時大内河野在國後上洛以爲勢揃故豫記之 此外諸

國合力勢一萬餘騎。惣シテ都合十一萬六千餘騎トシテ記シケル。勝元是ヲ聞テ。先スル則ハ制人ト云ヘリ。敵ノ未出ヌ先キ。實相院ヲ取レトテ。武田大膳太夫ニ被申付。五月廿四日ノ午ノ刻。武田打寄。又正實力在所ヲハ。大和ノ淨心院ニ諸勢ヲ副テ打入ントス。一色左京太夫正實坊ヲ堅メラレシカ。片時モタマリエス。其夜花ノ御所ノ裏。築ノ館ヲ捨テ。取物モ取アヘス。西陣ヘ退キ去リケル。京中ノ貴賤スハヤ天下ノ破レコソ出來レト。上ヲ下ニ騒動シテ。財寶ヲ持連ヒ。倒レフタメキニケ隠ル、有様。目モ當ラレス。五月廿五日。細川勝元。自詣營中。下賜旌旗守四足院招集部將。分兵拒隔山名陣營。同廿六日曉。發兵欲破山名館。山名又發兵接戰於洛中數十所挑戰。至廿七日夜而止。一色左京太夫引退上ハ。兼テ内談セン如ク。某ハ公方ヲ可致警固トテ。翌日ニ即遂出仕。御旗竿

ヲ申下シテ。四足ノ御門ニ御旗差上テ。誠ニ用心稠クソ見エシ。ヤカテ。一門他家ノ人々。并ニ家ノ子郎等召集評定シ。勢賦リヲセントテ。諸士ニ申聞セケル。山名西陣ノ體ヲ伺ヒ見ルニ。去ル正月。御靈合戰ニ勝テ。天下ノ人不足恐ト思ヒ。軍勢共ヲ國々ヘ下シ候ナル。其上山名畠山心アクマテ奢リ。遊宴ヲ事トシ。弓矢ヲ忘レタリ。語曰。戰勝テ將驕リ。卒愒ル則敗スト云ヘリ。山名滅亡此時也。時尅ヲ不可移ト。勇ミ進テ。手賦ランセラレケル。先大手ノ口ノ北ヲ。藥師寺ノ與一ニ攝津國衆ヲ相副。大和勢ヲ加ヘテ。大田垣カ前ヘ被向。又大手ノ南實相院ヲハ。香川安富ニ讃岐衆ヲ相副。香西長鹽奈良秋庭等ノ人々。并ニ武田ヲ指向テ。舟橋ヨリ上ヲ責ヨトナリ。舟橋ヨリ下ヲハ。細川下野守。丹波守護内藤赤松伊豆守ヲ向ラル。又百々ノ透リヲハ。三宅吹田茨木芥川等ノ諸士

ニ仰テ。熊成寺ヲ南ヘ。平賀カ所ヲ攻ヨトナリ。又安居院大宮ヲハ。安富民部カ手勢六千餘騎。伊勢ノ世安。并ニ六角四郎武衛義敏ノ衆。凡テ一萬計ニテ。十王堂ヲ下ヘ。花開院鹽屋カ宿所ヘ向ラル。又中筋花ノ坊ノ透リヘハ。細川右馬頭ニ土佐衆ヲ添テ。寺ノ内ヨリ。典厩ノ笠掛ノ馬場ヲ經テ。相國寺ノ延壽堂ヲ南ヘ打出テ。花ノ坊ト集好院ヲ燒落セト也。如此人々ノ攻口ヲ定テ。大手藥師寺與一カ攻口ニ。関ノ聲舉レハ。同時ニ攻入レト牒シ合ケル。諸口ノ相圖已ニ定テ。五月廿六日寅ノ尅ニ。大手ノ口ニ関ノ聲ヲ噓ト舉ケレハ。諸方ニ聲ヲン合セケル。山名方ニモ兼テ相手組ヲ定メケレハ。先垣屋越前守。嫡子次郎左衛門尉。同越中守嫡子孫左衛門尉次男平右衛門尉。同駿河守。同平三郎。并田原持瀬金澤大坂宮田。此外山名一家ノ人々。攝津守。同伊豆守同左馬丞合テ其勢一

萬五千。實相院ト御倉ノ正實坊カ在所ヘ打向ヒ香西安富武田等ノ衆ト取合。自其南大鼓堂ノ前ヲハ一色カタメラル。舟橋口ハ美作修理太夫因幡守護。并ニ六角カ衆固メラル。大手大田垣カ在所ヲハ。大田垣カ一族。并田公同美作守能登守等ノ三番衆雖相抱。軍勢國々ヘ下ケレハ。火箭ヲ消シ不得。宿所ヲ燒落サレテ。芝ノ藥師ヘ引退テ。防キ戰フ處ニ。備後衆加勢シテ相支フ。花ノ坊ヲハ右衛門佐大將ニシテ。大和衆熊野衆固メケル。大宮口ハ山名入道ノ嫡子伊豫守ヲ大將トシテ。土岐成瀬カ勢ト。二番衆ノ佐々木黨是ヲ拒ム。日比ハ樊噲ヲモ欺クホトノ者共。鹽治カ所ニ火ヲ懸レハ。南ノ水落ノ寺花ノ坊集好院花開院皆燒落サレテ。灰燼ヲ楯トシテ鬪ケル。細川方ニハ。御靈合戰ノ會稽ノ耻ヲ雪ント。牙ヲ咀ンテ。此度鬱憤ヲ散セント。入亂レテ戰ヘハ。射違ル矢ハ。夕立ノ

軒端ヲ過ル音ヨリモ重ク。打合太刀ノ鐔音ハ空ニコタナル山彦ノ。鳴リ休隙ソナカリケル。敵味方二三萬騎ノ猛勢ナレハ。雖ヲ卓ル許ノ地モナク。攻入レハ追出サレ。又追出サレテハ攻入。其猛卒ノ機ヲ見ルニ。千騎カ一騎ト成トモ。ハツヘキ軍トハ見エサリケリ。又廬山寺ノ南一條大宮ハ。細川備中守カ館也。爰ヲハ武衛義廉ヲ大將トシテ。甲斐朝倉織田鹿野等ノ勇士。一萬餘騎ニテ押寄タリ。館ノ中ニモ兼テヨリ思ヒ儲タル事ナレハ。一族ノ讃岐守カ衆ト。淡路和泉兩守護ノ軍兵共。重家輕命。爰ヲ先途ト防キ戰ケル。是ニ依テ。寄手モ可攻入様モナク。又館ノ中ヨリモ無左右切テ可出様ナクテ。龍虎ノ雄ヲ爭フ。角テハ寄手ツカルヘシトテ。山名相摸守ト。同布施左衛門佐ヲ加勢シテ。荒手ヲ人替攻戰フ。館ノ中ニモ戰勢テ。荒手替レト招キケル。一條大宮ノ攻口。及難儀

由聞ヘケレハ。時ニトツテ弱カラン方ヘ可被差向ト。兼テヨリ用意セラレシ事ナレハ。京極大膳太夫持清ヲ被遣。其勢一萬許ニテ。関ノ聲ヲ咄ト作カケテ。力ヲ戮スルソト呼リ。戻リ橋ヲ西ヘ打テ行ク。此時讃岐守淡路守等。雲ノ寺淡路守館ニ暫ク息ヲ繼。梅酸ノ渴ヲ休メケル所ニ京極衆猛勢ニテ。未手分ヲモ不定。我先ニ館ノ中ヲ援ント揉合ケルヲ。武衛ノ内ニ鹿野朝倉屹ト見テ。敵ノ備ヲ不立タ、ヨフ所ヲハ。息ヲモ不續セ攻ルニコソ利ハアレト。士卒ヲ勵シ。ソツト呼テ突テ掛ル。甲斐織田瓜生ナト云大剛ノ武者共。續テ切テ懸リケル間。持清猛勢ナレ共。打物ヲ取テ合スル隙ナク。矢番フ間ナクメ。ナダレ行程ニ。歸セト云。曾テ耳ニモ不聞入。我先ニト具足長刀。弓鍵合符ヲモギ捨テ。還橋ノ狭ク危ヲモ不云。馳重リケル間。人馬共ニ橋ノ上ヨリセキ落サル音ハ。サナカ

ラ山ノ崩ルヽカ如シ。是ニ驚キ騷テ。雲寺ニ息ツキ居タル兵共。コハ何事ソ。蓬シ返セト云斥前ノ難所ヲ不顧。逃立タル武者ナレハ。橋ノ上ヨリセキ落サレテ。川ハ自然ニ埋テ平地トナル。逃延タル者共。這々讃岐守カ館ヘニケル。館ノ本人備中守ハ。昨日ノ軍ニ手勢過半討セ。纔ニ千計ニテ。四方ヨリ攻入ル敵ヲ切り出テハ。屋形ノ中ヘ引入。百度千度ニ至ル共。ヒルムマシキ形勢ナレトモ。角テハ今半日モ怵ヘカタク見ヘケルヲ。赤松次郎法師カ衆。纔ニ三百計有ケルカ云様。アノ備中守ヲ眼前ニテ無下ニ討セテハ。弓矢取身ノ瑕瑾。武士ノ耻辱タルヘシ。イサヤ人々馳入テ備中守ト討死シテ名ヲ後代ニ揚ント。正親町ヘ折下。猪熊上ヘ鋒ヲ揃テ込ノホリ。赤松ト云フ剛ノ者。備中守ニ力ヲ戮スルソ。勇メヤ館ノ中進メヤ兵ト。面々ニ大音聲ヲ上テ。攻上リケレハ。一條大宮猪熊

ハ未四方共々ニ。人家ノ軒端重リテ。小路軍ノ事ナレハ。武衛衆ノ甲斐朝倉カ軍兵。昨日今日ノ合戦ニツカレ。一軍モ不戦。荒手ニマクリ立ラレテ。廬山寺ノ西迄颯ト引ク。其透ニ備中守ヲ引取テ。館ニ火ヲ懸。讃岐守カ館ヘソ入ニケル。寄手備中守カ館ニ火ヲ懸。落ルヲ見テ。機ニ乗テ。爰ヲノカサヌ處也ト勇ミ進テ讃岐守カ館ヘソ押寄ケル。去程ニ堀川ヨリ西ナル淡路和泉ノ兩守護。雲ノ寺ニ火ヲ掛テ。村雲ヘ押渡テ。百萬遍草堂ヲ焼立テ。讃岐守カ館ニ入ル。讃岐守カ方ニモ。前ノ引退勢ニ。淡路守并和泉衆。備中守カ勢京極衆二萬計。百萬遍ノ南ノ門ト村雲ノ橋ヲ越テ。追ッ追レツ攻戦フ時節。魔風烈ク吹テ。餘烟四方ニ吹懸レハ。赤松伊豆守カ宿所モ焼ケ。又備中守カ類火ニ。平野神主カ所。山名左衛門佐カ館モ焼ケレハ。前後左右ノ猛火ノ中ニ攻戦フ。敵味方二三萬騎ノ兵共。安

否ヲ一時ニ定メテ。剛臆ヲ累代ニ殘サント。左ハ右ヲ不顧。右ハ左ヲ不待。草堂百萬遍ノ燒ル炎ノ中ニ入亂テ。村雲ノ川ヲ互ニ渡リツ渡レツ變化應機ニ。前ニ在カトスレハ。忽然トシテ後ヘニ在。味方カト思ヘハ屹トシテ敵也。或時ハ猛火ノ中ヘ頽レ懸リ。或時ハ炎々タル灰燼ノ上ヲ蹈テ。進退歩ヲ失フ有様。譬ヘテ云ンタメシモナシ。加様ニ敵味方。互ニ勇氣勵シケルトモ。更ニ勝負ハ不見ケリ。又大手ノ口モ。大田垣カ搆ヲハ。究竟ノ手垂共カ。火矢ヲ以燒落スト云ヘトモ。芝ノ藥師ヘ引退テ相支ヘケレハ。奈良ノ淨心院ト藥師寺與一。火水ニナレト攻入ントスレ共。館ノ中ニ。命ヲ鵝毛ヨリ輕ンスル兵。鏃ヲ汰ヘテ散々ニ射ケル間。百鍛千鍊シテモ。可攻入様ハ無リケリ。廿六日ノ曉軍始テ。翌日廿七日ノ西ノ終迄。息ヲモ不續戰ヒ。寄手彌重リ。勇ミニ勇ンテ攻入ント思ヘトモ。

搆ノ中大勢ナレハ。込返サレテコラヘタリ。搆ノ中モ防クニ術ヲ失ヒ。只アキレ迷ヘルサマナレトモ。大軍ナレハ持コラヘケル。兩方互ニ軍ヲ止テ。颯ト引退ク。軍散シテ後見レハ。先西陣又ハ。千本北野西ノ京迄ハ。手負死人ノ不臥所ハ。尺寸ノ地モ無リケリ。又東陣モ。上ハ犬馬場西藏口。下ハ小川一條迄。足ノ踏處モナク算ヲ亂スカ如ク。手負死人ハ重リ伏ス。況ヤ千萬ト云數ヲ不知。今度敵味方ノ勢。親族朋友相分レテ戰ヒシ事ナレハ。翌日互ノ様体ヲ聞ニ。今一日攻ル者ナラハ。山名方ハ可落モノヲト。沙汰スルヲ聞テ。細川方ニハ後悔ス。勝元ハ馬廻衆四五千ニテ。花ノ御所ノ四足ヲ堅メ。殿中ヲ圍ントテソ御座シケル。抑此亂ノ起ハ。山名細川ハ智鼻ニテ。互ノ隔心モ無リシカ。東山殿御治世ヲ。舍弟淨土寺殿ヘ譲リ奉ント。左馬頭ニ任シ。勝元ヲ傳ニツケラレ。殊ニ當管

領ナレハ。天下ノ人共命ヲ謹メリ。其後東山殿ニ。義尙公生レサセ玉ヘハ。御治世ヲ讓ラン事ハ扱置。又此若君ヲ御治世ニ立ント。御臺所ノ結構ニテ。山名ヲ頼セ玉フ。山名モ重上意頼マレ申シ。サテ武衛兩家ト。畠山兩家トノ諍ヒ出來テ。互ニノカレ難キ故有テ。兩家ヘ引分レテ敵對セラル。然レハ始終。山名ハ東山殿ノ味方人ナルヘキニ。此人勇有餘テ智不足。天下ノ武士。我カ鋒端ニアタリ難キト思ヒ。カホドノ確執ニ。御所ヲ味方ニスヘキ心ナク。只一戰ノ上ニテ。勝負ヲ決セント計也。古ヘ山名氏清カ振舞ニ。其同姓トテヨク似タルハ。勇者ハ不懼ノ性質アレトモ。智謀ナキニ依テ。自ラ公方ノ敵トナル。勝元ハ東山殿ニ其恨有ト云ヘトモ。此度御敵ノ名ヲ取ナハ。始終難叶ト思慮シ。自營中ニ祇候シ。御警固可仕トテ。御旗竿ヲ申シ下シ。四足ノ門ヲ堅メ。軍ヲハ諸大名。

并一族同心ノ衆ニマカセ。其身ハ營中ヲ固メケレハ。官軍公軍ハ皆勝元ニ屬シ。今上リノ遠國武士。公方ノ御大事ト聞テ。上洛セシ事ナレハ。山名一族同心ノ士ノ外ハ。皆勝元ニ屬ス。是ニ依テ軍勢日々ニマサリケリ。今ノ分ニテハ。山名方難叶見ヘシ。

六月八日。山名與赤松戰。依藤豐後守。斬山名常陸守。又赤松臣明石越前守。斬片山備前守。赤松孫四郎。山名兵衾及晚景。京極與武衛義廉戰。義廉カ臣朝倉孝景。破京極陣大勝。山名賞孝景軍功。京師火延燒三萬餘宇。

六月八日。一條大宮猪熊ノ間迄。山名相摸守陣ヲ備ヘタルヲ。赤松次郎政則懸合テ。數刻合戰有。赤松方ニハ。浦上小寺ヲ始トシテ。爰ヲ詮度ト戰フ中ニモ。依藤豐後守弓手ノ臉ヲ射ラレ。其矢折カケテ。相摸守カ一門常陸守ト組テ。上ニ成下ニ成シカ。常陸守ヲ取テ押ヘ。頭

カキ切。太刀ノ先ニ貫キ。山名常陸守ヲハ。依
 藤豊後守打捕タリト。高聲ニ名乗ケル古ノ鎌
 倉ノ權五郎ニモフトラヌ高名哉ト。人々稱美
 セリ。是ヲ無念ニ思ヒ。相摸守カ内片山備前
 守ハ大力也。明石越前守是又世ニ聞ユル力量
 ノ者也。引組テ上ニ成下ニ成シカ。明石組勝
 テ片山カ頸ヲ取テ。立舉ル處ニ片山カ傍輩
 赤松孫四郎。押並テ組所ヲ。明石事共セス組伏
 セ。是モ頸ヲ取り指舉タリ。惣シテ此合戰ニ。
 相摸守一族若黨廿八人討死ス。同日京極大膳
 太夫入道三百餘騎ト。武衛義廉ト相向。時ニ朝
 倉彈正左衛門尉孝景京極ト渡リ合。朝倉馬ヨ
 リ飛テ下リ。自身敵五六人切伏セ。郎從等押ツ
 ツキ。敵三十七人討取ケル間。京極勢一タマ
 リモタマラス引退ク。山名入道ハ。今朝相摸守
 カ負軍ニ朦氣セラレケルカ。朝倉カ働ニ目ヲ
 醒シ。祝着スル事限リナシ。先朝倉ニ賞ヲ行ン

ト。着替ノ具足馬太刀ヲ被出ケリ。畠山義就今
 日ノ朝倉カ馬ヨリ飛テ下リ。打物追取戰シ休。
 古今無比類。ト常々感歎セラレケリ。今日ノ
 合戰ニ。濫妨人折ヲ得テ。猪熊ナル一色ノ五郎
 カ宅ニ火ヲ懸。又吉田ノ神主カ宅ニ。物取共火
 ヲ付ケレハ。同時ニ火ノ手舉リ。九夏三伏ノ炎
 天ニ。折節南風烈ク吹テ。敵味方ノ軍勢ハ入亂
 テ物ヲ取。町人地下ノ者共ハ。父母ヲ懷キ妻子
 ヲ引連テ。迷隠ル、計ナレハ。火ヲ消者更ニ
 ナクテ。下ハ二條。上ハ御靈ノ辻。西ハ大舍人。
 東ハ室町ヲサカイ百餘町。細川兵部大輔勝久。
 淡路守成春。刑部少輔勝吉ノ屋形。佛心寺窪ノ
 寺。此外公家武家大小ノ人家。凡三萬餘宇。皆
 灰燼トナルコソ淺増ケレ。

山名軍兵應召上洛。内藤備前守遮之。戰于丹波
 夜久郷。内藤敗走。山名軍兵。六月十三日入洛。
 山名方ニハ。去御靈合戰ニ勝利ヲ得テ。敵ノ分

際何程ノ事カ有ヘキトテ。軍勢ヲ國々ヘ下シ。在京ノ侍纔ナレハ。此度ノ軍ニ大田垣カ宿所ヲ無下ニ燒落サレテ。人口ノ嘲哂ヲ塞ニ所ナシト。無念ニ思ヒ飛脚ヲ指下シ。分國ノ軍勢ヲ召上セ。會稽ノ耻ヲ雪ント。早馬ヲ以テ。數並ニ相催シケル。依之ハケ國ノ諸侍大ニ驚テ。取物モ不取敢。夜ヲ日ニ繼テソ打立ケル。但馬ノ國ニハ垣屋大田垣八木界ノ庄カ與力被官ヲ先トシテ。我モく勇ミ爭テ。出張ノ用意不日也シカハ。其外ノ輩ハ數ルニ不遑。因幡ニハ伊達波多野八部山口。伯耆ニハ小鴨南條進士村上。備後ニハ江田和智山内宮ノ一族等。都合其勢三萬餘騎。先但馬國ニ馳集テ。六月八日ニ。丹波國ヘソ打入ケル。丹波ノ守護代内藤備前守。此由ヲ聞テ。兼テ思ヒ儲シ事ナレハ。國境夜久郷迄打出シ爰ヲ先途ト防キ戰フ。サレトモ小ヲ以テ。大ヲ防ク事ナレハ。内藤孫四郎

貞徳ヲ始トシテ。身ニ不替一族若黨。數十人討死シ。殘ル兵共散々ニ落行。防止ル者一人モ無リケリ。山名物始ヨシト悦ヒ。在々所々ヘ打入テ。放火民屋。追捕牛馬。財寶ヲ奪取テ。同十三日京都ヘ着陣シタリケリ。

七月。細川カ兵。攻武衛館。至廿餘日不拔。大内介政弘。援山名催分國兵。細川欲於攝州截テ住之。遣守護代秋庭及赤松防之。秋庭赤松敗走。京都已ニ破ヌト聞ヘシカハ。大内介政弘。長門周防豊前筑前。并ニ伊豫ノ河野ヲ語ヒ。其勢二三萬騎ニテ。上洛スト聞ヘケレハ。細川方ニ僉議シテ。其勢ノ着陣セサル以前。勘解由小路室町ノ武衛ノ構ヲ攻ヨヤトテ。諸勢ノ番ニ置テソ攻ケル。其人々ハ。細川右馬頭。同下野守武田大膳太夫。香川安富等也。面々我モくトヲリ立テ。廿日餘ハ。火水ニナレト攻レトモ。朝倉ト云剛ノ者甲斐々々敷。要害ハナケレトモ。

寄手質ヲ替テ攻レハ。朝倉質ヲ替テ防キケレハ。赤松カ一族ニ。加賀守護代間島河内守。櫓ノ下迄責ヨリケル。大石ニテ碎ヨト打ケル。冑ノ鉢打レ。犬居ニ打伏セラレテ死ニケル。廿五日ノ大攻ニ。寄手能勢源左衛門尉頼弘。同子息彌五郎討死ス。搆ノ中ニモ甲斐左京亮ヲ始トシテ。究竟ノ者共數人討レケレトモ。朝倉少モヒルマス。今迄ハ午角ノ體ニテ。イツ落居スヘキトモ見ヘサリケリ。大内介カ大軍。近日罷リ上ノ由。細川聞テ洛中ヘ大軍ヲ入シ。謀ナキニ似タリ。遠境ニシテ一先可防トテ。攝州ノ守護代一條秋庭備中元明。秋庭豐後守ニ。國侍共相副テ下シ。赤松次郎カ衆。在田本郷永良下野宇野間島柏原ヲ始トシテ。浦上小寺中村駿河守依藤安丸明石等ヲ差下ス。接川猪取野ニテ。河野四郎政通。後陣ニ打テ通リケル。取合一戰ヲトク。大内介カ手ノ者後陣ニ軍有ト聞

テ。間云陶杉内藤廣仲安富神代ヲ始トシテ。取テ返テ引ツ、マントス。赤松衆爰ヲ先途ト戰ヘトモ。大内河野カ兵。面モ不振切テ懸リケレハ。秋庭靡キ崩レケリ。手サキヲマハサレテ。心ハ武シトイヘトモ。赤松カ勢取廻サレテ。魚住ヲ始メ大半討レニケリ。死殘ル者共播磨ヲ差シテ落テ行。赤松カ勢。先途還橋ノ軍手柄ヲ顯セシニ依テ。今度ノ敗軍ハ是非ニ不及次第ナリ。三百騎ヲ以。四五千騎ニ包レテ。ヨクソ切抜タリト沙汰シケル。大内介河野四郎。手ニ碍ル者ナクテ。八月淀山崎ニ着ニケリ。八月廿三日。主上上皇。潛幸室町殿。義政遣吉良赤松等。警衛禁裡仙洞左馬頭義視。遜于勢州。寓居北畠館。大内介政弘淀山崎迄上ルノ由其聞ヘ有ケレハ。禁裡仙洞行幸御幸ヲ室町殿成可申ノ由。勝元執シ被申ケル。故ヲイカニト尋ルニ。八月十八日。勝元。香川安富秋庭等ノ

長者衆ヲ。花ノ御所ノ四足ヘ呼テ云ク。旁ハ未被聞候哉。殿中伺候ノ奉公衆ノ内ニ。敵同意於有テ。蜜々ニ通案内。時々廻籌策トキク。然ハ此趣ヲ上聞ニ達シ。彼阿黨ヲシテ不出ハ。必ス殿中不思議出來セント覺ル也。此分如何ト被中ケレハ。長者共仰天シテ。談合評定モ事ニヨル儀ニ候。是ハ火急ノ事也。若擬議スル程ナラハ。禍蕭牆ノ内ヨリ出テ。制シ難カルヘシ。去レハ天ノ與ルヲ不取ハ。却テ其咎ヲウク。時至テ不行ハ。却テ受其殃ト申事候ヘハ。片時モ急キ。被經上意。叛逆ノ輩ヲ追出シ申サルヘシト申サル。依之進テ被申ケルハ。西陣最負ノ事ハ。不限若輩。上ノ御心ヲ西ヘ引玉ヘハ。下々ノ奉公人モ。上意ヲ奉思。蜜々ノ雜談ニモ。敵方利ヲ得ルト聞テハ笑ヲ含。味方ノ勝軍ト聞テハ。顰眉候ト。兩使ヲ以テ言上ス。殿中伺候ノ衆聞テ。身不肖ニ依テ。只今殿中ヲ被

選出。惣ノ箭代ニ立ツ事。不運ノ至リ。不及是非次第ニ候。雖然當時又是面目ニテ候カ。其故ハ山名同心ノ人々。御所中ニ多ク候間。四足ヘ罷出テ。右京太夫カ前ニテ腹ヲ仕リテ。山名ニ組セヌ事ノ志ヲ遂候ハント皆々申ケル。兩使歸リケレハ。物具セヨヤ若者共。殿中ニ於テ討死ハ。日本國ノ諸侍。棧敷ノ前ノ振舞也。尋常ニ合戰シテ。名ヲ後代ニ殘スヘシ。未練ノ勵シテ。名字ニ疵ヲ付ルナトテ。思々ノ具足ニ。混甲キタル究竟ノ勇士八百計。物ノ小鳴セハ。切テ出ント。打物ヲ小膝ニノセテ扣ヘタリ。御所中ニハ此者共死狂ニ狂フナラハ。御所モ破レ。公方モ安穩ニ御座有マシト。上ヲ下ヘト騒動スレトモ。門役キヒシクテ。通入ニ難義成ケレハ。爲方ナクソ見ヘニケル。此日西陣ヨリ内裡ヘ切テアカリ。君ヲ奉レ取ト云巷説有。是又火急ノ事也。延引セハ後悔出來ントテ。奏聞ヲ

歷テ。畠山尾張守ヲ三位ニ任セラレ。供奉ノ御供仕リ。花ノ御所ヘ行幸ヲ奉成ト。勝元執シ中サレ。已ニ玉輦ニ召レケレトモ。殿中騷動ニ依テ止ヌ。先急キ殿中祇候ノ山名方。共ニ退出延引ノ條。緩怠ノ由シキリニ御使立ケレハ。比來山名最負ノ上意モ。思ヘハ風前ノ浮雲。跡ナキカ如クナル折ナレハ。何ヲ頼ニシテ。奉公ノ勞ヲセンヤ。イサヤ人々。御殿ニ火ヲ懸テ。四足ヘ切テ出右京太夫ト一太刀打。殿中ヲ汚サントソ慍リケル。時ニ三條殿ト吉良殿ト。此人ニ異見申サセ玉フハ。山名ハ當家譜代ノ侍トシテ。鎌倉ヨリ御伴衆也。然レハ上意ハ全思召被捨ニ非ス。先事ノ無爲ナラン様ニ。一旦御所中ヲ出テ。京兆カ憤ヲ止メ玉ヘ。然ルヲ傲儀ニ及ヒ。上意ヲ不恐。殿中ヲ穢ントハ何事ソヤ。若達亂ニ及ハ。其身ノ没スルノミニ非ス。先祖累代ノ忠誠ヲ失ヒ。子孫ニ至ル迄不忠

ノ罪ヲ天下ニ殘サント。盡理申サセケレハ。人實ニモト甘心シ。上意ノ御請ヲソ中ケル。兩人即チ御前ニ參シ。此趣ヲ言上シ玉ヘハ。御所中ノ人々。皆喜悅ノ眉ヲ開レケル。サラハ退出セヨト有ケルニ。勝元方ノ者。一條室町烏丸ニ待請討留ントスル由ヲ聞テ。飯尾下總守案内者ニテ。鹿苑院ノ長老ノ。花ノ御所ヘ參リ玉フ。小門ヲ明サセソレヨリ相國寺ヘ入ケレハ。寺中ノ廣サニ行方不知成ニケリ。齋藤藤五郎計ハ。故有テ討レニケリ。後ニ飯尾下總守ヲ殿中ニテノ暗打ハ。此衆ヲ手引セシ恨トソ聞ヘシ。サラハ行幸ヲ成奉ント。花ノ御所ノ御會ヲ構ヘ。天座トシ。若山名方ヨリ碍ル事モ有ヘシト。路々ヲ固メ。禁中仙洞警固ニハ。吉良左兵衛佐。同上總介。赤松伊豆守。名越次郎ニテソ有ケル。同八月廿三日。御迎トシテ細川下野守。同五郎兄弟參上セラレケレハ。三種ノ神

器ヲ先立奉テ。御幸行有。供奉ノ公卿殿上人。
并武士ニハ下野守教春弟五郎甲冑ヲ帶シ。御
先打也。後陣ニハ吉良兩人赤松伊豆守名越次
郎等。非常ヲ誠テ候内裡ノ御留守爲警固。吉
良一族。并赤松土佐守宮内少輔等相殘テ。ヤウ
ヤウ御門ヲ守護シテソ有ケル。室町殿ニハ。思
ノ外ノ御事トテアキレタル體也。女官局女房
達興ヲサマシテ。アハテ騒キタラレフタメキ
玉フ事無限。中御門西園寺殿ニハ。京極陣ヲ取
ル。二條烏丸ニハ武田陣ヲ取。此内ヘト逃集ル
人多カリケリ。山名方ニハ。大内介カ猛勢ニテ
上洛スレハ。龍ノ水ヲ得。虎ノ山ニ靠ル勢ヒヲ
振ヒ。下京ノ細川方ヲ。悉ク追拂。武衛ノ構ヲ
根城ニシテ細川陣ノ東ノ面ヘ攻上テ。内裏ノ
警固ヲ致シ。兼テハ相國寺ヲ陣取テ。御靈口ヲ
塞テ。細川方ノ通路ヲ留ントノ事(支度イ)也。此
時武田大膳太夫カ弟安藝守基綱。三寶院ヲ固

テ。内裏ノ御警固ヲ致ケル。右衛門佐ヲ始トシ
テ。能登太夫大内介土岐六角一色等ノ諸大名。
都合其勢五萬餘騎。東陣ノ一ノ木戸ナレハ。三
寶院ヘソ取懸ケル。安藝守基綱ハ。世ニ無隱
大刀打物取テ名ヲ得タル大剛ノ者ナレハ。三
寶院ノ門ノ片扉ヲ開キ切テ入。勢ヲ請留テ。卯
ノ刻ヨリ申ノ終迄。太刀打事十餘ケ度也。僅ニ
二千ニ不足小勢ニテ。五萬ノ勢ニ打合テ戰ヒ
ケレハ。郎從共ニ手負疲レテ。只基綱一人ソ戰
ケル。斯處ニ熊野侍ノ中ニ。野老源三ト云者。
奥三山ニ隱レナキ大力也ケルカ。基綱ト組テ
名譽ニセントテ。持タル打物カラリト捨テ。大
手ヲハタケテ掛リケル。基綱是ヲ屹ト見テ。惡
キ奴ノ振舞哉。捨太刀一ツ受テ見ヨト云儘ニ。
振上テ丁ト打。三枚重ノ鉄甲。磐石ヲ打カ如
ク手答ヘシテ。七尺三寸ノ太刀。ハヽキ際ヨ
リ打折テ。柄計コン殘リケル。基綱手ヲ失ヒ。

牛ノタケルカ如ク飼テノキケレトモ。敢テ追カクル者無リケリ。扱野老源三ハシタ、カニ打ルレトモ。少モ痛ム氣色見ヘサリシカ。一(ナカ)太刀キレトモ。大力ニ鉢ヲ打レテ。頭ノ内顔口ヨリ血出テ。堅立木ニコソ死ニケレ。三寶院落ヌレハ。ヤカテ其日淨花院ヘ取懸ケル。此淨花院ヲハ。最前還橋ノナダレヨリ。京極方ニ持セケル。一陣破レテ殘黨不全ト云ヘハ。初合戦ニ後レヲ取武者ナレハ。一支モ不支。アケ退ニケリ。今出川殿ハ始五月廿五日ノ合戦ヨリ。室町殿ニ御一所ニ御座有ケルカ。世上溟溟トアル間。還御有。扱細川勝元。屋形ヘ御成アレト被申ケレハ。八月廿日。御成アラントシケルニ。京極カ内多賀豐後守相支申ス。ケニト一色伊豫守種村入道ニ御尋有處ニ。御所様ノ御事。山名ヲ最負アレハ。此御所ヲ頼入タルト被申計ニテ。其日モ暮ヌ。廿二日。一色伊豫守ヲ以。

御一所ニ御參ノ事。勝元相支ルニ依テ。御延引ノ由御申アリ。御返事ニハ。無等閑事肝要也。唯御所ニト。コマ／＼成シ御返事ナリシカトモ。同廿三日戌ノ刻ニ。御所ヲ忍ヒ出テ。先北畠中納言教親自身河原マテ同道シ。其ヨリ坂本ヘ渡御御供ニハ一色伊豫守。畠山式部少輔。北畠中納言殿ノ舍弟心性院。高倉兵衛佐殿。同朋西阿彌計也。種村播磨守入道。一色九郎。同三郎。矢島那須ナトハ。坂本衆召具。六日計ニテ參ケリ。坂本ノ石川次郎所ヘ御成有。京極依念劇。御臺所坂本ヘ御忍有。御暇乞ノ御對面。御一献有。御劔御腰物善鬼包平藤四郎小鍛治鳩作等持タシメ。御船十二艘ニテ。廿四日明方ニ。江州山田ノ浦ニ着玉フ。希代ノ事也。雜掌船ニ鱸飛入ヌ。周武王般ノ紂王ト合戦ノ時中流ニテ武王ノ舟ニ。白魚躍入テ。俯テ以テ天ニ祭り。遂ニ紂王ヲ亡シケリ。又本朝ニハ。平

清盛熊野へ參詣ノ時。舟へ鱸飛人ケルヲ取テ食ヒ。是大權現ノ吉兆ヲ示シ玉フト悦ヒ。後太政大臣ヲ極メ。天下ヲ掌ニ握レリ。如此吉例ヲ以テ。人々タノモシクソ思ハレケル。山田ヨリ勢田越中山田上黒津へ御通ノ時。北畠殿被官海津カ兄福壽參上ノ。山中ノ春日ノ拜殿ニテ御一献有。是ヨリ數日ヲヘテ。廿九日伊勢國小倭庄ノ掌光寺ニ着御。國司御賴有テ。御下向ノ由ナレハ。國司御請申サレ。同六日。長谷寺ヲ御立ノ時。國司參上有テ。對面シ。ヤカテ御所ヲ立テ。安シ置奉ルヘキ由申サレ。御飯有テ無二心崇敬シ玉ヘリ。此度今出川殿。俄ニ伊勢へ赴キ國司ヲ賴マセ玉フ事。勝元ノ智慮ノ深キニヨレリ。東山殿何トシテモ。山名ヲ引セ玉ヘハ。自然夜ニ紛レ山名カ館へ渡御有事モ有ヘシ。此時今出川殿御一所ニ渡ラセ玉ヘハ。勝元ハ公方ノ御敵ト成テ。諸國ノ軍勢。山名ニ同

心スヘシ。今事ノ見ヘヌ先ニ。今出川殿ヲ伊勢へ下シ。兩御所各別ニ御座シマセハ。縱義政。山名ヲヒカセ渡御有トモ。當御所ヲ呼ヒ上セ。天下ノ爭ヒヲ兩君ニサセ奉リ。己レ其勢權トシテ下知セン爲也。若又今出川殿ノ心替リ。御上洛ナクハ。天子ヲ挾ンテ天下ニ綸言ヲ下シ。己官軍ノ將トシテ。山名ヲ朝敵ニナサン爲ニ。禁裏仙洞ハ御用心惡ク候間。花ノ御所へ行幸ナツテ。將軍ト一所ニ御座被成可爲尤ノ由ヲ傳奏ニツイテ言上シケル。實ニモ此間ノ戰鬪ニ。禁裏仙洞ヘモ。餘煙カ、ランカト危ミ思召ナレハ。再往ノ問答ニモ不及勝元カ申處神妙也ト。歡感アツテ。時日ヲ點シ行幸ナル。禁裏仙洞ノ警固ハ。勝元同心ノ諸大名ニ申付。花ノ御所ノ警固ハ。自身四足ニ居テ。勤メラレケレハ。義政何ト思召テモ。山名方ヘノ通路ハナカリケリ。山名ハ元來思慮ナキ勇者ナレハ。

我鋒端ニ當ル者有マシト。自ノ勇力ヲ自慢シ。
勝元カ深キ謀秘計推量スルモ不及。只我一戰
ノ上ニテ。雌雄ヲ決セント思ケル心アサシ。角
テハ始終ノ勝成カタカラント。智アル人ハ眉
ヲ蹙マリ。

續群書類從卷第五百八十

合戰部十

官地論

竊以夫人臣之法儀。以五常爲最。以六藝爲殿。左者奉君以忠。撫民以德。用之爲良賢。背之爲逆臣。故取先哲之要。爲後人之誡者矣。爰近江源氏之末葉。佐々木大膳大夫高賴。蔑公儀宗。自專剩語。叛逆之賊徒。倡野心之奸士。企謀叛之大巧。欲准漢王莽。掠國位。唐祿山傾洛城先跡。依之去長亨元年甲戌秋八月上旬之候。忝被下高賴追討之宣旨。將軍家蒙勅發。向江州南郡。御供人々誰々。武衛細川烏山土岐山名赤松黨。大内上杉小笠原武田京極富樫介。其

外諸國受領衛府諸司。不殘一騎打立。又北陸之餘勢。西國之義軍。拂底出陣。都合其勢及十萬餘騎。中富樫次郎政親。容儀骨柄諸藝勝人。健弩精兵大力究竟荒馬乘。寔千兵易得。一將難求者也。然間相叶上意事。並肩無傍輩。去程當陣師奉行武田富樫被仰付兩人。於富樫之家。前代未聞之面目。聞角其儘昵近被申可。然事運盡人滅。必思立惡事習也。時々上意歎被申條々子細某分國加州之土民等。建立專修念佛之一法。依勵勤修。土貢地利一塵不運上。剩結黨分羣。各々立一揆之與。爲緩怠之至。不及言語之

由。讒訴被_レ申上。哀々越中越前兩國被_レ下。御教書被_レ仰付合力之下。知急度罷_レ下加州。加退治。可_レ達_レ意望之由。頻被_レ達上聞問。越之兩國被_レ仰付合力儀。然間暫申_レ請御暇。同年十二月下旬之候。蹈分北越之深雪。令_レ下國。長途之間窮屈。雪中放駒朝尋跡。雲外聞雁夜射聲之體。誠相似管仲用_レ得老馬之智。歸_レ本國云々。角暫不及_レ在府之儀。鱧而石河郡之內楯。籠高尾之城。相待鄰國之合力。運_レ一揆退治之計。略於帷幄之中。欲_レ奏凱歌於千里之外者也。凡高尾城有樣。後削_レ嶮岨。山白根連。白雪不知_レ夏。麋鹿道路斷畢。前深田渺茫。末連湖水。人馬無所_レ置足。弓手石岸高聳。無_レ往復之路。妻手流水遠漲。絕_レ去來之船。加_レ之外郭穿_レ堀築_レ築地。迫_レ々颺_レ矢倉。所々搔_レ垣楯。亂株逆門木。筒木矢石重々構。宛勝_レ田單之卽墨之城壘。超_レ勾踐之會稽之絕巔。雖_レ爲_レ天之運。不_レ如_レ地之利者也。寔有便城郭矣。將所_レ楯

籠_レ軍兵誰々。富樫一門不_レ及_レ中。國中之官軍不殘_レ一騎。馳加。其外大和甲賀健弓精兵。究竟手聞五百餘人。同意惣而與力輩一萬餘人。矢倉矢倉礮膝置居。搆々連_レ袖羣集。矢倉之下。鞍置馬十重廿重引立。非_レ鬼魅少緣可_レ破。輒不見。去程國中之一揆。付_レ山河參河守_レ歎申子細。先年屋形樣從_レ山內御出頭之後。亂劇打連。民間無安。或被_レ放_レ火住宅。有_レ伏_レ山野時。或被_レ追_レ出在所。有_レ搆_レ城郭時。然間不_レ事_レ東作之業。西收之利乏。依_レ之怠_レ稼穡土貢。不_レ務_レ公方之諸役事。是非私之如在。併依_レ公道之紛也。此趣被_レ分_レ聞召。有_レ寬宥之儀。自今以後拋_レ緩怠之邪儀。可_レ抽_レ奉公懇志之由。再三歎申。此趣參河守中_レ上屋形。諫被_レ申。民是國之基也。有_レ退_レ治國之基。枝葉之我等不_レ可有_レ安穩。執_レ義治國。棄_レ欲撫_レ民。是安泰之政道。靜謐之先兆也。去_レ義勝。欲則其國自治。欲勝_レ義則其國必危言。政歸_レ直道。庶民讓_レ畔。蒼生擲_レ壤。世

不事奸邪。賢人被割心。朝涉被截脛。誠殺人刀從口出切之。害吾種自身出蒔之云。金言在耳。能々可有御思惟。殊更御幼稚之御時。山內被召塾居。爲一揆引出中。致度々戰功。奉仰國之守事。是不一揆之恩。思食忘彼莫太之恩。猥信少人之浮言。不用庶民之愁鬱。有御成敗。不可然。得恩不顧恩。不異野鹿踏草集鳥枯枝。拋捨萬事之先兆。上和下睦申事。可速返於掌如此。函蓋相應。可爲積善餘慶滿家門。榮花永傳子孫基。若又方圓不合。可爲貪善利。不顧後害類。朱雲折檻。辛毘引裾。種々雖被教訓申。終無御承引。是政親所運命之輩也矣。此不叶訴訟之間。一揆之衆時々評定。此儘爲優々緩々。以肉如與飢虎。一々被刎運氣事。不可轉時日。去來如形構城郭。欲遁一旦害。洲崎和泉入道慶覺河合藤左衛尉宣久爲大將。久安云在所付屏。獅子垣重縛廻。構要害。去程一

揆若者共替々爲警固。不捐晝夜。去從臘月當年五月迄。前鋒相柱。兩軍之際纔二十餘町也。角送日次處。越兩國頂戴御奉書之上。急打立可富樫於合力之由。其聞無隱。去程國中諸勢談合。傳聞吳子胥拔眼懸吳之東門。終看越之蜂起。彼乍聽先跡。爰本遲張。防三方事。可爲敗北之基。急爲腹心之病。責落高尾城。合力之諸勢自退散打立梟。先河北軍旅。指向越中口。俱利伽羅笠野松根城取陣。亦江沼郡諸勢。指使越前口。敷地福田取陣。同廿六日。國中諸勢打立。所取陣。先政親祖父泰高奉仰當國之守護職。間率家子郎等。其外諸勢都合二千餘騎。野市大乘寺取陣。鳥越吉藤磯部木越彼四頭衆。寄合寄合僉議。先月氏國釋尊有御出世。於菩提樹下。三七日思惟之間。提婆引率五百眷屬押寄。欲奉害瞿曇。弓箭刀杖却害己身。悉自滅。又震旦惠性天皇以軍兵令滅亡佛法。清涼山之衆徒

遂合戰防之。又吾朝聖德太子誅戮守屋逆臣。就于佛法。禦調達魔障。不可勝計。彼專修念佛之一法。依爲末世相應之要法。愚鈍道俗男女等。結現生之善因。欲免當來苦報。是非費公務。抽私之志也。然號大罪。可有罪科之條。佛法計大敵王法之怨敵也。不可有不加退治。以一味同心之儀。忝剃除鬚髮之頂。戴金剛堅固之甲。脫置解脫幢相之法衣。著衆怨悉退之鎧。橫惡魔降伏之刀劍。負魔障退散之弓箭。同宿若黨引率。都合其勢四萬餘人。伏見山崎淺野大衆見所取陣。劍白山兩山之衆徒彼僉議國中一大事不可過之。萬一國破家亡兩社不可有安穩。去來欲合力。其勢二千餘騎。諏訪口打立。洲崎和泉入道慶覺同十郎左衛門尉正末。相具一萬餘人。打出外張上久安取陣。笠間兵衛尉家次引具箕衆七千餘人。野市馬市取陣。安吉源左衛門尉家長倡河原衆八千餘人。額口取陣。山本圓正入道

與同輩十人。一萬餘人。山科之山王林取陣。高橋新左衛門尉。以六箇軍兵五千餘人。押野山王林取陣。山八人衆四山々內之諸勢。山々峰々無透間取陣。其外能美郡軍勢五萬餘人。野市諏訪之森取陣。思々幕紋。色々旗註。飄天有樣。旌旗靡雲。劍戟爲林。山々野狼屎之烟如春霞。構々箭火不異夜之星。兩陣之際懸足輕。言戰矢師。送日次無隙。孔明八陣之圖。七雄戰國之軍旅不可過之。彼處六月五日申尅終。從城中武者一騎出來。黑糸腹卷肩白威下金物重打責胸板。星白甲打鍬形猪頸着成。金作腰刀兵庫鎖帶太刀。切生矢筈高負成。持塗籠籐弓。懸紅之母羅。白葦毛馬置金覆輪之鞍乘。舍人男楯計挾脇。開木戶堀板橋靜々步出。敵陣近掛寄。鎧踏張通立上大音聲名乘。是本鄉修理進春親。只今掛出意趣者。汝等乍住王土。荷擔佛法計。曾無納法之既得。剩欲奉傾國主。言語道斷之所行也。風聞。

昔年折蕨賢人。依背勅命終飢死。彼先規殘澆季。抑尋富樫之先祖。事忝北斗七星化現利仁將軍之裔苗。物清入道以來。携弓箭之藝。代々不取不覺之名。殊更彼政親文武二道之達者。武勇三略之賢者也。依之相叶上意。得無雙之名。彼奉向貴人。控弓放矢事。冥之照覽。其憚不少。爲下逆上中事。豈爲人臣之禮。急脫甲負荊面縛降參可中。不然一々勿運氣事。不日可梟其頸。苟良有暫從久安之構。武者一騎出來。青黃綴腹卷。同毛五枚甲之緒。有三尺八寸。鬼物作太刀。熊皮尻鞆引籠。足緒長結下。大中黑之征矢頭高負成。持節卷之弓。烏黑馬大逞鑄係地之鞍懸。小房鞆。由良利乘。抓大幕拋上。駉打足疾步出。以大之音鏃枯高名乘。是河合藤左衛門尉宣久也。國中面々代罷出。御返事中。將諸勢打立事。強非可敵對申。全自身之命。爲仰。後日訴訟。抑治國如砥矢。則不招民自歸伏。去賢人

隔國來。奸士超境去。政屬無道。則常切刑轡。打諫鼓。剩募權威。借耕夫牛。奪飢人之食體。寔吹毛兌過怠之疵。故也。是百姓之所歎也。次佛法修行之事。貧窮下根我等。不堪難行之勤修之間。捧半粒宛覺路之資糧。挑一灯爲昏衢之炬燭。是掠公物非資助後冥福。然稱重科欲令停止事。現當二世之怨敵也。是愁嘆專一矣。次倩案此濫觴。是非政親之意巧。併依佞人讒言也。左叢蘭欲茂。秋風敗之。王者欲明。讒臣暗之。讒人破國。妬婦破家理也。顧令達民間之愁訴。如然之輩被誅戮者。急度註交名。可捧申。然者御屋形樣奉仰國主。參州用郡代可中。如此羣訴有御承引者。羣衆各々可啓喜悅之眉。不然者乍緩怠責上山城。御生涯可爲今日之間。乍恐此趣所仰上察也。彼處從城中是御覽。春親討連哉兵共不云了。撤甲五十騎計掛出。亦自久安之陣步卒百人計出合。散々矢師。夕日

漸傾。紅輪欲沉海間。師可爲明日兩方相引。撒引。角明六日。早天諸陣之面々。大將御陣大乘寺打寄。思々評議。爰洲崎入道進出中。看此城之體。容易不可成力責。攻物人馬之死骸築山。兵革緋血可流河。所詮諸勢從四方詰寄。打留糧道可爲兵糧詰。殊更明日明後日惡日。其上爲天一天上。不可攻山城。中亦河合進出中。洲崎殿御意見雖爲一途。私愚慮諸勢各々取姥。取昇山々。經日次程。城衆不忍定里可打出。引出其時可決勝負中。彼處木越光德寺進出被中。面々意見何々雖爲無餘義子細。爰本遲張。從鄰國可亂入。可爲亡國之基。次擇吉日良辰。事無一代之教文。被立善惡不二邪正一如。亦指方所。聽本來無東西何處有南北時。何指天。何可指地。任運於天道。拋命佛法。混攻攻。卽日可責落事。案內存也。不存餘人。於法師翌日早天打立。可晒骸於城之麓。殘名於世之末心。

底趣。無所憚被申。諸勢一同尤同。彼處從越中口註進申次第。越中四郡之郡代。雖頂戴奉書。賀與越如唇如齒。無唇齒寒。今度合力可有如何。雖僉議上裁。頻間不及力。去來打立。東方郡諸勢濱放生津取陣。中郡之衆吉江日澤取陣。利波郡之軍兵打寄蓮沼。爰當國之牢人阿曾孫八小杉新八郎被中。我等爲本人間。一番合戰可仕。都合其勢二千餘人。從俱利伽羅口亂入。去程河北之軍旅。莫田光濟寺爲大將。不敢取遂合戰。入衆戰負引退處。追懸々々。究竟之兵矢庭三十餘輩討取。其首進上中。猶々は競宛。通宵諸陣可打立用意也。山城箭火映天連星。寄手箭火滿地續日。爰慶覺入道向河內私語潛傳。聞城衆之僉議。若衆意見。一陣破殘徒不全。明日師懸額口弱手掛磊程。諸陣不可留手云。亦老衆異見。獅子云獸爲畜類王。捕大象全其威。捕小虫全其威。不可侮額口之弱手。敵目近招寄。詰。

寄堀之際者件車橋堀擲渡々々。從四方同切出追散八方。以其競推寄在々所々。燒拂一々。切頸事不可回踵云。若衆不用此評議。可懸額口議定云有內通。去來加額口可決勝負。河合尤同意久安之陣。見勢計殘置。潛々忍夜陰紛。額口一手成。城衆是不知夢。去程及七日之早天。諸勢各々揚合度之野。糧屎未若闇打立。從四方詰寄。同時揚時之聲。大山爲是崩。湖水爲彼傾。忽疑落輪際。城中敲楯鼻調聲合時。宛如繫布鼓於雷門。如案從城方究竟之骨切二千餘人。楯三百帖計突撰打出。政親宣。今日之合戰可爲國之分。濫不可懸。楯一面突並勝手間。五人十人宛雙箭可射。一筋空矢不可射。敵楯鼻閃有洗間。射向袖宛額。一同可截懸。一人敵看總角程。八幡有照覽。政親懸手可討棄被下知。尤承候。額口近詰寄。時聲撒揚。散々射合。矢種互盡。爰石黑孫左衛門尉申。日比荒言此本。去

來面々欲決勝負。各々楯投懸々々切懸。城衆齋藤彥八郎安江彌太郎。先此面々不振。面截懸互入亂。此先途攻戰。一揆之衆尾引城衆。少取外處。遂懸深入。弓手洲崎。妻手河合。打圍敵之後。追取籠最中。成火水責戰。短兵已交。或有組落者。或有指違死者。立腹十文字搔切。思々心決勝負。前徒逆鋒血漂杵。遂被追掛返。削篠角破鏑。從切崎出火燭。喚叫其聲上非相非々相天。下奈利八萬底。堅牢地神驚玉炎。爰城衆本鄉修理進春親。敵數打取。我身負痛手。有小基靠伏所。兵數落合欲取頸無術起直。追取伸太刀甲金。敵裔波羅利々々々雄伏。敵二三人討取。腹十文字搔切失鼻。三時計合戰之趣。吳越之戰。漢楚之師。是爭可增。終城衆打負。散々成。打出其時二千餘人見僅三百餘人被打成。見成緋這這城中引退。將戰場有樣。手負死人如散。算亂麻也。寄手競懸。去來此儘爲夜詰。四方之諸勢

堀嗜必示々々詰寄。振盪本縛。廻獅子垣。十重廿重打圍。是偏項王不異漢軍被圍。雖不行。雖不行。虞姬々々如何。有御嘆現。角城中親宣。註。今日之討死交名。可擎。閻魔之廳。被註宗徒人誰々。額丹後守同八郎次郎林正藏坊舍弟六郎四郎本鄉修理進高尾之若狹守槻橋彌次郎齋藤彦八郎安江彌太郎同三郎宇佐美八郎右衛門尉山田彌五郎廣瀬源右衛門尉同又七德光次郎松本新五郎阿曾孫六石田帶刀和田次郎三郎同朋智阿彌陀佛越前衆滿江一之本兄弟此人々爲先。侍名字者五百餘人。其外雜兵不知數被討。去程寄手諸勢。射籠火矢。以熊手薙鎌。抛懸拋懸。屏矢倉引倒々々責入。城衆雖爲大小之面。下上返。唯周章騷計也。今者不叶被思。屋形屋形陣々。各々懸火燒拂。被取上山城。魔風頻吹來。猛火燒云。餘烟覆四方。其中喚叫責戰有樣。阿鼻大城之焰中。獄卒阿防羅利。呵責罪人。

是爭可增。角山城政親宣。最期合戰可爲明日。去來名殘惜欲。酒盛被仰。從老衆至。若衆迄。參御前。大瓶共立並。無上下推並被遊。政親女中常雖裏人目。限今遊宴從簾中立出給。御齡未壯坐。柳五衣被召紅袴。嬋娟兩髮秋蟬翼。宛轉雙蛾遠山色。桃顏綻露。楊妃却妬。柳髮亂風。李氏起猜粧。不及心詞。其外近習外樣女房達。皆御座敷被參。歌舞指。盃被指。取杓被取。與夜共亂舞。酒宴半時。從女房達之中。揚伽陵頻之聲。燈暗數行。虞氏淚。夜深四面楚歌聲云。詩。二三返被歌。亦末座女房達。霜草欲枯虫思苦。風枝未定鳥難栖。被歌澄座列人々皆被催。感淚不寢。明夏夜千年永思。心內無墓。互睡言未歇。閨遠風風夢易覺。春榮連理花句裏。袂無程。時移景去。遠山寺鐘音誘。別響。露契不結。小篠一節。明告鳥音恨敷。小夜漸欲曙處。山河參河守進出。女中樣其外足弱落可申。御心安可被召御。

腹被中。尤有其謂。左被固北之口。憑礮部木越遣書狀。使節給書狀。卽時屈礮部木越之兩陣。木越右筆九代信濃入道其狀有仕。脫甲懸高紐。推跪高讀上臬。遠尋往昔近思。當近世途間。以士臣之直道。治國之政。以黎民之稼穡。爲世之營。云士臣云黎民。互奉守國士故矣。然處依不慮之勸誘。引起大逆。互結怨讐。事併爲前因所也。始而不可駭。左雖飛羽檄催鄰邦之士卒。編殺竿招。近國之突騎。遲參移時經日之處。於昨日七日。群騎競來合戰。其戰強盛。羽翼悉失利。曝尸原上之露。然間天責歸一人。自刎不可隔時。沒後羞耻恐落萬口。左雖欲移幼稚於越。無使解圍。無由尋緣。古西施從越獻吳。今幼女自賀移越。彼爲國謀。此爲怨敵。無比類之條。沉辱之至矣。雖然不顧慙愧。奉憑兩所之意度。隨有其屈。二世之恩儀。何事如之。心趣粗如件。恐々謹言。季夏初八日。政親判。礮部

木越同宿中。讀上臬。兩處聽書狀之趣。無相違領掌被中。左返牒在仕。信濃入道雖爲短才不敏。不及辭。一筆勾下畢。御使給報書。急立飯捧政親御前。規橋三位房其狀在讀上。小具足參御前。略讀上臬。秦領雲橫藍關雪擁無往復之使處。青鳥飛來。投一芳札。高願之至。珍重々々抑以武略國土討奸士。以仁政撫邊鄙之蒼生。是爲治國撫民之基也。去世屬靜謐。國歸安泰之砌。有何意越趣力時々企讒訴盡上察。引起鄰國庶民退治之謀。是何過怠。是何遺恨。且云諸家之風聞。且云自門之滅亡。旁以無所謂之條。難轉筆舌。次其等愁乍表法器之體。捧劍戟之事。是不本意。雖然依難默止羣議。其引率之萬一矣。就中御幼稚他邦之由示賜。不日可任其屈。努力不可有虛誕之儀。一諾豈有變異心緒。雖爲多端。令省略候畢。誠恐誠惶敬白。林鐘上旬八日。木越礮部判。富樫御奉行中御報。被書使請

取御返事急立飯。政親被聞召報書之趣。不斜
 悅。左急可有御出。女中奉出立給處。女中被
 仰。昔東婦節女替夫命。灌法妻後夫投身於玉
 泉。爲武士之妻。彼事一度可逢。從兼思儲也。自
 先拂露拔持守刀。既及御自害。政親取付御刀。
 御靜候身一代名末代。御死骸曝高尾之山。賤奴
 原見事口惜次第也。姬共有御倡。都有御志纏
 身於墨染籠居片邊。祈菩提給。速離八苦充滿
 之國。同生九品無爲之樂。不可有疑。樣々教訓
 被中。奪取御刀。不可及力。淚伏沈坐。將政親
 從幼少之古。不離御身。手馴御琵琶之撥與尺
 八取出宣。不數物共。無之形見御覽。女中被參。
 夫尺八中。王昭君胡國戀都泣悲。學其聲作。左
 古人詩吹起無常心。一曲王千里外絕知音。昔奏
 昭君之嘆。今助御身別淚。常々通御目處置玉。
 御覽可慰玉御意。又琵琶中。妙音大士詣雲雷
 音王佛所。奏伎樂奉供養。左四絃彈之中爲宮

商彈。第一第二之絃。索々秋風拂松疎韻落。第三
 第四之絃。冷々夜鶴憶子鳴籠中。風香調之間。
 花含馥郁之匂。流泉彈之曲。月添清明之光。依
 之鬼神垂納受。人倫和憤怒。左源氏宇治卷。優
 婆塞之宮御女。有明月不遣出御撥招之。夫招
 出該月。是招別行人。招共々々無甲斐。互打詫
 于手取組手玉。袖行水不關敢。落花放枝無再
 咲習。殘月傾西亦無歸中空。互御心之内被推
 量。哀可有左不事。引切名殘袖。女中自御淚隙。
 一首歌角計

秋風ノ露ノ草葉ヲ吹分テ同ク消ヌ身ヲ如何
 セン

政親不取敢角計

神懸テ末ノ世契ル梓弓引留ヘキ袖ニアラネ
 ハ

被遊押而奉乘御輿。翠黛紅顏錦繡粧。泣尋沙
 塞出家鄉御別有樣。王昭君趣胡國悲。角被思

遣。香之烟面影焦。身武帝之御思。雲雨音信碎。心

陽臺之御歎迄。思出給覽哀也。將御供女房達二

百餘人。或別親別子。或離主離夫。泣悲宛遙々

下坂有樣。哀申中々愚也。翠帳後閨之契。一炊夢

飮。月賞花之榮片時樂也。此政親坂中立徘徊遙

見送給御體。松浦佐夜姬慕唐船風情也。去程磯

部木越御迎。城之麓迄被參處。御輿出給從馬混

混下。畏被奉請取。先陣磯部。後陣木越有御供。

被成敗。女中樣之御透也。立並事緩怠。脫甲脫

笠。畏可透申。萬一奉向御供之女房達。有致狼

藉族者。矢庭可討捨被下知。無相違。若松之

御坊奉移。明廳而奉移。木越數十日之間。朝三

暮四之營。種々被盡申。其後加賀與越中之境。

俱利伽羅之宿迄。木越自身奉送。越中之御迎被

奉渡。木越居情等一聞。將女中樣於田舍。相留

可被中。親御方不渡給。間廳而都上玉。旅行之

間御歎被思遣哀也。逐客何人付眼見。大行千里

送征鞍。回首叫虞舜。蒼梧雲正愁。

物思涙ヤ染ル三越路ノ雪ノ白根モクレナイ

ノ山

被遊。旅泊之徒然慰玉。或時傳山館幽谷之岩

間。路染沙足血。終日物ヤ思覽。亦或時馴野宿

旅邸枕夢路不結取。通宵與涙共明。不急旅思

共日數漸重。越過有乳中山。着近江路。湖水漫

漫風翻白浪。花千片。山岳峨々鴈照青天。一字一

行。打詠宛借枕於磯之蓬屋。九枝灯盡唯期曉。

揚帆於浪之沖津。一葉舟飛不待秋。無程即日

比叡山之麓著坂本之宿。無高車寶馬之御迎。

但駕驢馱衰二披之蹄。泣々入故鄉之都。古買臣

翻錦袖會稽山。今自晒涙袂於洛陽城。故里其儘

有任。貧被思召共。指九重之裡。人目繁憂世之

嵯峨覽。往生院之邊可爲厭世思食立宛。知邊

落涙尋入玉鳧。日影脆露身。宿終柴之菴。暫計御

栖家思定玉宛。與長等御髮。唯一筋思切玉。嬋娟

秋之蟬初髻。竊々蛾眉之黛勾跡消。可妬無花。
可猜無月。羅綾之衣上。引替蘭麝香之薰。香衣
香袈裟。未摘花之馥計。左嵐劇春朝登峰摘懺悔
花。露滋秋夕下澗汲。阿伽水。日夜朝暮御勤無
怠事。古革提希婦人受釋尊之金文。極西方不退
快樂。八歲龍女依文殊之化導。唱南方無垢成
道。今自以政親之別爲善知識。而終可證妙覺
果滿之位。事無疑。行澄坐見。左諸佛薩埵垂順
逆之化導時。有罪從邪入正。無緣自惡導玉善
希有事共也。爰觀橋近江守依爲木越之所緣。
遣數通之狀。呼取被申共。遂不被出。最結句返
事無言歌計

思切道計ナリ武士ノ命ヨリ猶名コソ惜ケレ
讀終不被出。政親之御共被申。誠是重虎之一
毛。名之萬代之儀也。次八屋藤左衛門入道覺妙
者。於富樫之家。入萬死不顧一生。雖爲代々
大忠之仁。依傍輩之譏言蒙勘氣。遁世令倚住

越前之宅羅事。既及十箇年。然處傳聞當國之
亂劇出來之由。被思案。體雖爲眞諦之器。意馳
塵囂之岐。擬遁世。今度政親之御供不仕。可爲
先祖代々忠節之疵。心爲思使。命依義輕。思切
下當國。乍爲黑衣之身。及七日之晚。走入城
中。不及尋奏者。政親之御前參。庭中被申上。御
折檻爲善知識。雖表法體之儀。主從之契未盡
候間。今度御供申參候由申。政親志程爲怡悅。雖
然幸爲出家之質。急立歸可訪政親菩提宣。覺
妙重而申。眞俗不二迷悟同一承候時。劒及之一
句。死底之活路。唯有此時節。前后遲速不可有
差別。死天嶮山可待申。卽欲切腹。政親取付刀。
其儀左右可爲望宣。覺妙隨御誑。捨刀畏祇候。
左爲引物。拈繩目腹卷。同毛三枚甲。聚鏑之太刀
四尺計。取副政親之御杯。被下八屋。施面目。
戴御盃申。生前思出死後之誑。不過之。啓喜悅
之眉。雖爲老武者。最後高名揚焉。聞是賢人不

仕二君云。相叶本文者也。彼處寄手之軍兵。昨日師疾間。鬻人馬之息。師可爲明日僉議。諸勢從入方詰。寄城之麓待夜明。爰慶覺人道唯一騎掛遶諸陣。被下知運計略。可喚取城中勢。一人不可生涯。有左程城中爛洗可弱。明日師案內也觸遶。去程脫甲有降參者。尋知音有落人。成曉方城中悉落失。及九日早天。政親御前纔三百餘人祇候。去程九日卯之尅諸勢打立。一同揚時之聲。喚叫從八方攻上。其勢力震動大千世界。殆越修羅之軍衆。爰山河參河守其日裝束。菊閉大荒目洗革腹卷。高角打甲緒縮六尺三寸之太刀舞。水車。郎等三人撰切先。截懸山內之衆。去程四山々內之衆。奉向參河守申次第。平生御成敗廉直間。山內軍兵最中追取籠申。看城中體。唯今可有御生涯。全命可有御待自然之代。打圍欲落申。參河守宣。志程雖嬉穢富饒之御紋。有猿者都鄙共無隱。只今引退程可

爲弓箭之家之疵。推融切腹玉處。兵數落合奪取刀。打圍山內之祇陀寺奉牢。鱣而紛夜越前奉越。宛忍猛虎之怨。逃鰐魚之口。燕丹相似歸本國。有暫從國中。立疾馬。申毒草截根枯。葉云。參河守奉遁。飼虎之子可爲放千里之野邊。急生涯可申雖云。落給後。賊過張弓心地也。爰本折越前守一人當千之兵。雖被憑切。穢被空言。成降人被出。可爲撫龍之鬚。蹈虎尾。心地云。在人。亦或方猛虎在深山。則百獸爲之惱裂。擒入陷阱中。則寥々向人云。猛者武渡敵手。有慮之意思也。有云人。將大將之御陣衆被參處。大將郎等數多落合。主從三人被討。古韓信爲公儀降走受戮。今越州重私命。爲敵被宰。見事非當失忠勤之道。瘞譽名於泥土者也。將政親之得手具足。藤右馬尉打白柄長刀。有柄六尺身六尺之如茅葉。曾利。推立弓手方。次峯枯立樞之棒。長切八尺。削八角。六十四鐵鍛必示々々

打被立妻手之脇。將藤島友重鍊澄打九尺三寸大太刀從中程。鏑本迄以手繩吉利々々卷。推立被置。將政親御年積卅四長高六尺八寸。如丈六仁王之荒作也。紫下濃御着脊長。在四人持取引懸陶而上帶下。同毛四方白甲打大鍬形。豬頸着成。追取件長刀宣。面々可禦搦手。大手可任政親一人。三尺劍光氷在手打振。破入猛勢中。散火攻戰。八方拂四方楯。獅子高臥龍一曲。不殘長刀之秘術責戰。究竟兵矢庭八十餘人切伏。殘黨不忍。風如木葉之散。羣々發被逐。頽城麓。將長刀拋懸弓手肩。由良利々々登玉本陣。威勢海底修羅王飛石降。氷雨攻。上帝釋天威角覺。將懸床儿於腰。暫繼息處。自弓手方。一萬人計喚叫責颺。今度看。捧手宣。追取件棒。指搦三方。追向一方。不振面打懸。芝雄石突木葉返水車德山手段。秋山之秘密之手。不殘一手。故々打回不牽一足。百餘人被打伏。殘軍兵

少不留被逐崩。譬如大山之崩時。大石兼大石伴打埋淵間。將引返本陣。四方急度御覽。從妻手側。多勢一同競懸。件棒彼颺擲。追取太刀。嫉奴原見手次之程。切入多勢中。碎手責戰。提切袈裟懸拂截退待。一太刀切象基。倒撥切打。浪翻切亂紋菱。檉手角繩四角八方追立々々切回手下被討者不知數。又友具足被貫無慙。將驛城山上見戰場有樣。手負死人瘞溪間。弓箭劍戟數簀子。將搦手合戰之次第。寄手軍兵數萬人。各々戴帖楯。入替々々責上。城方先。槻橋之一黨。三百人我先々々防戰。寄手大勢不云被討。不顧手負。防手案內者。此彼迫々寄合追立々々責戰。或時被追上山城。亦或時被逐崩城之麓。敵御方入亂互責戰。勢百千雷電同時如鳴懸。多勢無勢不叶習。大略被討。殘官兵不留足被追立。本城颺引退。將合戰場之趣。手負死人之緋血染山粧。不異龍田泊瀨之紅葉朝霜染葉夕日。

晒色。將政親宣。強不可作罪。怖來世之報。去來面々切腹宣。左承候。疊五六十帖。擲出廣庭。敷並並居。既欲切腹。政親宣。濫不可切腹。盃取添腹切刀。可爲思指宣。承候打立大瓶。早始酒宴。亂舞半事。爰宮永八郎三郎追取扇子。通立蹈一拍子揚一聲。歡花欲盡春三月。命葉易零秋一時。二三返歌一舞々。見聞人々。皆濕鎧之袖。將畏申。乍緩怠。中有之旅路。露拂可仕。取舉土器。三度酌腹。十文字搔切。乍恐勝見與四郎殿可持參。杯添刀指勝見。珍敷戴御盃。三度酌腹切。指福益之彌三郎。其後那緣吉田小河白崎進藤黑川與津屋五郎谷屋入道德光西林坊金子田上入道八屋藤左衛門入道立入加賀入道長田三郎左衛門尉宮永左京進澤奈井彦八郎安江和泉守神戶七郎御園筑前守同五郎規橋豐前守同三郎左衛門尉同近江守同式部承同燭六同燭次郎同三位房山河亦次郎本鄉興春房。如此次第次

第思指切腹面々已上卅人聞見。其外殘給人。大將政親本鄉駿河守童千代松丸計也。將駿河守被申。前代未聞之見物哉。早浮世無思置事。急可召御腹。某殿可仕被申。政親宣。老衆立蹤事無謂次第也。若役政親可殿。互爲相論。終駿河守負被申。去某先達仕覽。推融。腹切十文字。一首歌計。

陰弱キ弓張リ月ノ程モナク我ヲ誘テ入ヤ彼國

ト讀生年五十六失。其後政親急追付被仰。千代松丸九寸五分鎧徹。中程以檀紙吉利々々卷參。甲斐敷械錫申。將政親追取刀。推融推立弓手之脇。妻手吉利々々引回。取返刀突立水走。臍下活推下。以緋血一首辭世角聽。

五蘊本空ナリケレハ何者カ借テ来ラン借テ返サン

ト被遊刀之切先含口俯ニ切先柄口迄被貫失

玉將千代松丸取認御死骸。屋形々々懸火。飛入猛火之中。御供申。誠艷事共也。一業所感之趣。自業自得之道理也。當來之苦報被思遺哀也。將諸勢亂入。政親取御首。御大將懸泰高之御目。唯一目御覽兎物不被仰。一首此聞。

思キヤ老木ノ花ハ殘リツ、若木ノ櫻先ッ散
ントハ

被遊咽御涙玉理也。老身難面永。見彼憂目事。有御歎理也。其後御首與身箕送大乘寺被中。僧侶數羣集取行葬送之儀式。奉成一堆之灰。哀事共也。彼所及九日之晚。從越前口注進其趣者。堀江南郷杉若藤左衛門尉志比笠爲大將。五千餘人昨日八日。從國境立花亂入。燒拂在々所々。振鑿木構要害取陣。將今朝早天敷地福田之諸勢。願正入道爲大將。七千餘人打立。不移時尅推寄。成火水責戰。入衆戰負究竟兵數十人討。不留足被追立。矢楯鍵具足脫捨。這

這金津之上野迄引退。何度亂入候共。越前口事。此方可有御任注進。三ヶ所之合戰。何々爲理運事。希代不思議之子細也。去從古至今。佛法破滅企。其罰在立所。凡佛法王法者。車之兩輪。鳥雙翼。雙輪一闕難走地。片翼豈翅天。一闕不可叶。以佛法護持王法。以王法尊敬佛法。是天下安全之基。國土豐饒之瑞想也。積善之餘慶從信心來。積惡之餘殃從不信來。好善家如春草日々見生長。好禍家如磨砥刀。時々有損失云々。從三皇五帝以來。代々聖主以佛法歸依之渴仰。成就現當二世之願望。唯勘賀陽劇亂之意趣。闔國之判主。可備萬代之龜鏡者也。

官地論全部終

長亨年後畿内兵亂記

長亨元年九月十二日。義尙將軍至江州動座。同廿五日東寺火。

同二年

延德元年三月二十一日北野廟火。同二十六日。

若公薨於江在陣中。九月義材將軍後號義尹江州進發。

同二年正月七日。東山相公義政薨。

同三年正月七日。今出川殿薨。八月今出川嫡男

作將軍。江州御動座。

明應元年十二月。相公自江州御歸陣。

同二年四月二十二日。細川政元立香嚴院。爲相

公。由是河内軍潰。畠山左衛門佐自殺。物部

紀伊擒義材。六月廿八日。義材脫身入越中。

同三年三月七日大震動。

同四年十月廿二日長谷寺火。

同五年

同六年十月十一日寅刻。大地震。

同七年六月十一日大地震。八月二十五日。大地震。伊勢大湊諸國浦。高潮。

同八年義材至坂本上洛。合戰失利依賴防州七月二十日。山

門中堂講堂炎上。卯刻。

同九年九月二十八日後土御門崩。

文龜元年四月二十一日。雨雹如梅子。七月廿八日。失火洛中。

同二年

同三年日野蒲生城。京勢立開隙。六月一日。八

月大洪水。眞淨院流。

永正元年。天下飢。冬德政。是歲藥師寺與一。背

政元陣于淀河。

同二年

同三年

同四年六月二十三日夜。福井四郎竹田孫七殺

政元。同二十四日。香西一黨圍阿波六郎於

京。六郎潰逃江左。九郎自丹入京。爲細川惣領。八月朔日。細川右馬助同民部少輔殺九郎澄之。香西以下戰死。波々伯部伯耆自殺。六郎自江州上洛。爲細川惣領。

同五年二月二十三日子刻。八幡宮炎上。三月十七日。東寺講堂火。民部少輔高國。號參宮逃伊賀。四月十六日。義澄入江左甲賀。高國自伊賀上洛。爲細川惣領。義材相公六月八日入洛。

同六年。三好筑前守如意嶺出張。六月十七日則沒落。

同七年。江州二月二十日。雲龍軒出張。同二十日打死。八月八日大地震。天王寺石鳥居。河内堂塔崩裂。人民多死。

同八年於舟岡細川右馬助殿遊佐赤澤孫二郎山中討死。八月十六日。將軍並右京兆大内左京大夫逃丹波神吉。同二十四日。將軍以下入

洛。舟岡山戰。義澄疾薨于江左。是歲。諸兵同時入京。官軍失利。

同九年

同十年三月十七日夜。義植甲賀御出。五月朔日御入洛。二月七那智山千手堂火。

同十一年二月十九日。伊庭貞說父子沒落。二月二十五日。鑄天王寺石鳥居笠木。

同十二年

同十三年八月。伊庭自北郡出張。同月敗北。同冬。玉松自岡山出仕。四日雨雹如梅實。

同十四年十月。義植相公至有馬湯治。細川畠山大内供奉。義興至堺滯留。次夏下國。

同十五年四月四日。山門中堂供養。義植相公御成。近江守氏綱公薨。同冬高國與岡山日々合

戰。十月十三日。梅尾春日住吉兩神開張。限十日。十二月十三日。八幡棟上。

同十六年冬。澄元至兵庫。西宮出張。

同十七日。高國二月十七日自池田沒落。三月三
好以下上洛。高國自江州山上。同四月十六日
出張。五月澄元敗北。三好父子三人。於三條
生擒自害。六月十三日。圍岡山。七月二十七
日。行貞請取城。伊庭九里退出。

大永元年三月七日。義植相公潛行至淡路御出。

三月二十一日御卽位。四月三日高國出張。同
五日入京。

同二年。定賴公七月圍日野蒲生城。

同三年。北郡上坂治部信光沒落。閏三月京極宗
意出奔。

同四年

同五年。定賴公淺井城大津見江發向。九月淺井
亮政沒落。

同六年。波多野柳本。阿州江通。三好衆至堺津
出張。

同七年二月。義晴將軍至江州長光寺。道永供奉

移御座。同七月至坂本御進發。十月至東福寺
被進御馬。定賴公供奉。

享祿元年四月。義晴將軍自東寺至相國寺御歸
座。六月至坂本又御下向。九月高島郡朽木江
移御座。細川道永四月江州山上江下向。九月
定賴公歸陣。

同二年_{己丑}二月。高野瀨家澄爲使。細川六郎殿江
婚姻禮有之。

同三年_{庚寅}。柳本賢治至播州依藤城發向。於陣中
浦上村宗以賄通近侍士。刺殺賢治。常植至有
馬郡進發。八月義晴相公光_(先)勢三雲資胤
蒲生至坂本出陣。木澤反。上洛。

同四年_{辛卯}年正月。義晴自朽木至堅田進發。二月至
坂本被進御座。六月赤松心替。常植生擒。自
殺。八月相公至長光寺下向。四月六日。箕浦
合戰。淺井敗北。定賴得勝。

天文元_{壬辰}年八月二十四日山科本願寺燒敗。

同二癸巳年。上野玄蕃頭至高雄畑着陣。六月十八

日。藥師寺備後其外法華衆陣立攻玄蕃。玄蕃得勝利。藥師寺備後於仁和寺討死。

同三甲午年六月二十九日。義晴相公至坂本進發。

七月二十日。木澤左京三好甚五郎。西山谷山城圍之。西芳寺地藏院最勝寺等炎上云々。

同四乙未年。將軍自坂本南禪寺江被移御座。佐々

木四郎被供奉。細川六郎建仁寺被供奉。九月九日。木澤左京亮以人數發向。

同五丙申年三月二十一日。御即位。七月二十三

日。自叡山日蓮黨爲退治。佐々木定賴人數等軍于東山。同二十七日。落居。下京悉火。同二

十八日。上京並誓願寺火。八月十七日。於清水寺大施食。

同六丁酉年四月。細川右京兆。與佐々木定賴婚姻於山科河原。三上下笠後藤百々木澤波多野池田請取之。

同七戊戌年。於嵯峨釋迦堂自三月十八日萬部經。

同八己亥年。三好柳本背細川晴元云々。閏六月逃于高雄山。七月二十五日至嵯峨陣。八月十六

日大洪水。同二十一日至山崎出陣。十月佐々木定賴上洛。於萬松御成。定賴爲扱。三好柳

本出仕。十二月定賴下國。六月二十三日大心院殿三十三年忌。

同九庚子年。天下悉疾疫。人民多死。天子御惱。相

公若公病。五月十三日。於北野經堂諸五山大施食。同十四日夜。洛中大洪水。上京家屋多

流。人民死。八月十一日大風。同皇帝御惱。同十辛丑年八月十日夜。大風。内裏公方建仁相國

伽藍吹倒。其外民屋倒。

同十一年壬寅三月十七日。木澤左京亮討死。同二

十八日。公方樣自坂本入洛。八月四日。弘源寺殿百年忌。就于弘源追善。天龍當住天用上拈香。

同十二^{癸卯}年

同十三年^{甲辰}七月九日。大洪水。山岳崩裂。同六

日。公方樣細川殿依和睦。佐々木少弼殿上洛。

同十四^{乙巳}年五月十三日。畠山尾張守死去於北野經堂。十月四日萬部經。

同十五年^{丙午}四月二十五日。霞降。八月十八日。

右京兆晴元於嵯峨出陣。九月十三日。河内勢衆同上野玄蕃頭亂入于洛中。卽同十四日嵯峨取懸。同十五日三好宗三高尾着陣。同十六日丹波江晴元御伴。十一月洛中德政。十二月九日。若君御元服於坂本。同御參内。

同十六^{丁未}年三月三日。三宅城落。四月相公義晴。東山御城江三好宗三四國衆取懸。慈照寺打破。五月五日。芥河城取懸。六日落。又七月十二日。晴元御入洛。東山城江州勢衆相伴取卷。同十月五日。上野玄蕃河島城攻。同六日

至大將軍討死。

同十七^{戊申}年四月十九日。清水寺塔供養。千部經

有之。六月七日相公自坂本御入洛。同八日佐佐木少弼殿上洛。同十四日祇園會。相公少弼細川殿御見物。於四條道場。同二十八日霞降。同廿九日。於細川殿相公御成。池田生害。

同十八^{己酉}年。三好長慶謀反。六月二十四日。於

中島江口與宗三及合戰。宗三山中高島伊豆平井丹後波々伯部左衛門尉兄弟打死。右京兆自三宅城被引。退自丹波。二十五日上洛。同二十七日相公御伴被申。自白河至坂本。廿八日御下向。

同十九^{甲戌}年五月四日。萬松院殿曄山道照大居士義晴他界。天龍寺開山夢窓國師二百年忌。

同二十^{乙亥}年三月十四日夜。於勢州貞忠宅與三好長慶並諸侯之衆遊宴。進士九郎掄長慶欲殺之。雖然手數々所負之。長慶不死。九郎者

卽座自殺。五月五日晚。遊佐河内守長教生害也。遊佐歸依之時。宗有珠阿彌者。不計殺遊佐。珠阿彌卽席打殺之。自敵人以賄賴彼珠阿彌如此作策者歟云々。一時之沙汰也。七月十四日早天。晴元諸兵楯籠于相國寺。則三好筑前將攝丹阿三ヶ國諸勢責之。其夜晴元諸勢敗北。于時相國寺悉炎上。

同廿一_{壬子}年正月二十八日。上意義藤御入洛。同

聰明殿御上洛。四月十三日雹降。五月二十三夜。丹波多紀郡高城雖三好長慶取卷。芥河池田小河依逆反雜說取退。十一月十二日。三好筑前丹之城取退。同十三日夜。建仁寺西門前自火。其火自西門至方丈寢堂法堂佛殿五頭首維那寮山門僧堂護國院並西來院。其外東塔頭等燒却。同二十八日于時冬至。晴元士卒自丹波小持山口將諸兵郡西院城破却。公方御城靈山取懸。五條口放火。其火建仁寺之十

如大龍南塔頭放火如此東拂及夜陰勤之。

同廿二_{癸丑}年。上意四月廿四日御歸座。七月至水坂御退陣。同靈山山口城放火。松田監物自

殺。

同二十三_{甲寅}年冬十月。至播州明石城。三好豐前

同筑前人衆取懸。

弘治元_{乙卯}年九月十九日。愛宕祭禮延在斯日。暴

大風起法輪寺同塔婆吹倒。

同二_{丙辰}年

同三_{丁巳}年四月卅日。尊氏將軍二百年忌。就于等

持院有追善。于時院主常德内有牧軒臻長老。慣相國々例行道。諸五山之先云々。南禪天龍無謂旨申之。兩寺者不赴行道。立班而逢半齋。大旱。八月大地震。同二十五日。大風大洪水。九月四日。帝崩。十月二十八日踐祚。後奈良院於安全寺中陰。就于彼寺諸五山渡諷經。十一月二十三日葬。

永祿元

戊午

年二月廿七日改元。五月九日。松永彈

正三好日向守其外攝丹之衆。吉祥寺四條道場七條千乘寺中堂寺梅小路陣取。同廿日。上京下京打廻各退散。三人衆。寺町松山岩成殘置。同晦日。勢州三好久助三人衆。陣取于勝軍。六月四日。至如意峰。公方衆三好下總香西越後甲賀衆自坂本出張。陣取淨土寺。鹿谷放火。其夜中。松彈爲大將攝丹衆出張。同八日。勝軍衆取退之處。如意峰衆白河表打出。雙方可及一戰處。大雨降。人馬羸疲。雙方退也。如意峰衆其儘勝軍取也。如意峰松永同法雲攻上。其夜陣取。三人衆也。伊丹池田典厩衆神樂岡取張也。明九日。公方樣晴元御出陣。勝軍籠城。則松彈法雲者如意峰打下。白河西方取退。神樂岡衆歸陣。上京打入處。勝軍衆田中村燒。神樂岡居取處。松永彈正其外攝丹一同取歸。白河村內外亂戰。公方衆討

死。松田右衛門大夫松任殿龜井岩室其外五十人許。三好方松山內衆卅騎討死也。十一月廿七日。自勝軍城上意御入洛。御伴大館上野大館兵庫也於御殿。則氏綱典厩馬頭三好筑前松永彈正伊勢守其外歸參奉公衆御對面。翌日自相國寺德芳。御歸城。十二月三日。於二條之本覺寺。公方樣御座ノ大館兩人上野三好筑前典厩五騎御伴云々。閏六月六日。公方衆粟生新介。小將松山內土山打取。七月二日大雹降。

同二庚未年六月二十六日。三好松永到。十七ヶ所出陣。同畠山高屋城入城。松永大和入國。

同三庚申年臘月七日。自曉雷電。正月廿七日御即位。七月二日三好豐前入河內。趣高屋合戰。

十月八日。香西越後守於宇治五ヶ庄出張。九日木幡燒。十日三栖鳥羽深草燒。同十日蓬雲自丹州出張。同十二日。香西越後波多野右衛

門兄弟惣領波多野弟堀和源三郎木澤神太郎其外馬廻打死。卽炭山放火。及三四五六月。旱天不堪其愁。六月十八日入土用雨降。種苗稻生長。長蘇天下。

同四年辛酉三月十三日。御參内。七月二十八日六角承禎父子出張于勝軍。同十一月廿四日。三

好諸勢取懸於白川口合戰。永原安藝守(寺脫リ)藥師

兄弟柳本兄弟其外諸士討死。同日於泉州島

山殿安見美作守根來衆。與三好豐前入道實

休四國衆合戰。四國衆隨分數多射死。同十一

月廿五日。勝軍鹿谷修學寺放火。白山一人人數不出。

同五年壬戌三月五日。於泉州島山高政安見美作

根來寺衆三好豐前入道實休號物外軒合戰。實休當

于鐵炮死去。數百餘討死。卽敗軍。同六日。三

好筑州松永彈正少弼至山崎被取退。松山新

介池田衆居陣西岡。勝隆寺之城。今村紀伊守

高野瀬備前守等相籠。同十日比。三好筑前松永彈正至鳥養柱本居陣。島山高政安見根來衆等圍飯盛城。同廿九日德政之札。松尾之鳥居打之。公方樣六日至八幡被移御座。岩成主稅助爲御警固御伴中。又德政之札。嵯峨釋迦堂大門四月十一日打之。梅津正法院一揆等被破之。同十六日一揆等悉上壽寧院責。其日ヨ後日々倉方責之。又自佐々木承禎。德政之札四月廿日比洛中ニ被打之。京中德政悉行也。

五月十四日。爲飯盛城後卷。三好筑前松永彈正松山池田衆伊丹安宅阿州衆二萬餘被越河。同二十日合戰。高政安見根來衆敗軍。紀州湯河討死。根來大將岩室坊逃忍信貴山。數日後。岩成方爲討手相越。岩室ヲ討取。飯盛ニハ三好修理大夫籠城。同籠衆岩成寺町左衛門大夫吉成以下也。安宅者至泉州。則彼國

屬安宅方。松永彈正八至和州多聞山城。卽彼國屬松永彈正方。

六月二十二日。自八幡公方樣御入洛。一番若君樣板輿。御伴御劔典廐。後陣上野民部少輔五騎御出奉行松田主計助。御出同朋春阿彌。大御所樣御馬也。御伴御劔大館十郎。後陣松永彈正少弼以下五騎。同日三好筑前上洛。伴加地權介奈良一右衛門二騎。於泉州正元安見根來寺衆出張。阿波河內衆同松永對陣。

七月十三日。若君樣御他界。同二十一日。丹波多地郡竹內下總植木一雙出陣。一揆起卽退。八月二十五日。伊勢守柳本藥師寺諸牢人於上意取懸。北山二在陣。同二十六日取懸。御所近邊燒畢。爲上意御警固。多羅尾山本今村武衛陣々居陣。其後三好久助爲警固在陣西院。小泉城同名助兵衛入城。德政爲上意同廿八日被打高札。又自伊勢守被打白札。

九月十二日。伊勢守同息兵庫於水坂龍城之處二。松永諸勢八千許引催。則上意被伺候。

卽時取懸水坂。伊勢守父子討死。其外百餘討死。公方德政雖被懸之。三好筑州依訴訟德政不行。至十二月以公入洛中洛外至邊土。德政不行旨被相觸者也。然間倉役各出之也。

同六^癸年二月三日。至杉坂柳本藥師寺。長鹽以下出張。安井木辻常磐等所々放火。翌日退陣。

四月二日曉丑刻。雷大鳴而落懸于東寺之塔。則炎上。國中明如晝時。人云以雷放火燒之。自往代至今時及三ヶ度云々。燒自丑刻至卯刻。猶以燒。燄及翌日。

五月三日夜。星入月。時人謂爲凶。八月二十五日。三好筑前守義興逝去。于時城山在城。廿二歲。十月一日。爲佐々木四郎殿後藤父子三人生。

害。然者永田刑部少輔三上池田進藤平井其
外後藤家來衆自燒。面々館江取退。于時觀音
寺騷動。八日曉。四郎殿二千計日野蒲生館御
退。九日巳刻。御親父承禎三雲館江御退。于
時軍卒觀音寺亂妨。一字不殘燒失。觀音寺本
堂迄回祿。麓石場寺三千家屋一時燒却。自北
郡軍勢至愛智川四十九院取懸。其日廳而打
歸也。其時淺井者至高宮居陣云々。永田刑部
三上池田平井進藤與北郡同心也。

十一月十五日。三好筑州葬禮。下炬大德守大
林和尚。于時泉堺南宗寺住持。其外諸佛事大
德寺紫衣衆勤仕。代諸大名葬禮下炬。一人者
依檀那勤之。諸佛事諸五山之衆被勤之云々。
下炬其外諸佛事之事。爲會下衆勤之事未聞
之。一時之沙汰也。號瑞應院前筑州太守光岳
璉公太禪定門云々。

長亨年後畿内兵亂記終

延寶戊午歲 京師新謄本

續群書類從卷第五百八十一

合戰部十一

細川大心院記

去ル永正二年ノ春ノ比武山伊豆守元信丹後國
入國ノ御合力ノ事ヲ大和彥三郎元行ヲ以テ大
心院殿ヘソ被申ケルヤカテ彥三郎并内藤彈
正忠貞正ヲ被指遣雖然一色五郎義有方ノカヨリア
ツカワル、子細アリケルニヤ各歸陣アリサ
レ共武田ハ猶丹後國ニ殘テ重テ御合力ノ事御
佗言申間同三年卯月廿九日九郎殿出陣アリ内
藤彈正忠新馬廻衆打立石河勘解由左衛門尉カ直
經カ籠タル丹後國加屋ノ城ヲソ攻ラレケル義
有ノ方ヨリ又九郎殿ヘ被申子細アルニヤ和睦

ノ分ニテ歸陣アリテ九郎澄之ハ丹後國ニソ在
國アリケル然共猶重テ御合力ノ事元信申間香
西又六元長ニ被仰付早々可出陣分被仰置テ大
心院殿ハ永正四年三月下旬ノ比奥州御下向ノ
由被仰テ御供ノ人々ニハ波々伯部源次郎柳本
又次郎須知源太横河彥五郎井上又四郎登阿彌
此五六人計ナカソ可被召具分ニテ殘面々ヲハ九郎
澄之六郎澄元ニソ付置レケルサテ大心院殿ハ
若狹國マテ下向ノ處ニ跡ヨリ馳參者ニハ藥師
寺三郎左衛門ト澤藏軒「名宗益氏无カ赤澤小笠原之
族也」長鹽彌五郎以下也奥ヘ御供ノ事ヲノヲ

ノ歎申トイヘテ御承引モナク又御對面モナシ
申ト、メン爲カツハ御禮ノタメトテ武田伊豆
守元信丹後ノ陣ヨリ馳參ル又京都ヨリハ六郎
澄元三好筑前守元長ヲ召具下向アリテ色々留
被申トイヘトモ御承引ナキ間サテハ奥へ供可
有分ニテ同在國アリケリ然ハ元信被中事ニハ
奥へ御下向候ハ、丹後陣一定可失利候哉以御
合力思召タル事ニ候難儀ノ由歎被申ニヨリテ
サラハ奥州御下向ノ事思召ト、マラル、ニ
テ候丹後ノ陣無一途ノ間自身可有御合力ニテ
五月中旬ノ比若狹國ヲ御立アリテ丹波國何鹿
郡高津ト云所ニ御陣ヲメサル御出陣ノ刻澤藏
軒ヲ被召出可忠節ノ由被仰付御太刀ヲ被下ノ
間澤藏軒面目ヲホトコシ京都へハ使者ヲ差上
大和河内上山城ノ勢馳可來ノ由申上我身ハ内
堀次郎左衛門萩野彌十郎以下ノ與力少々同道
シテ僅ニ二百騎計ニテ不移時日丹後國へ馳

越^テ義有^ルノ楯籠ラレケル阿彌陀カ嶺ノ城ニ押寄
テ其間四五^{アハヒカ}町^テヘタ、リタル成相寺ニ陣^シ取テ
ヲクレ馳^テノ軍勢^モトモヲ相待ケル然ハ香西又六
元長我身ハ嵐ノ山^ノ城ヲ可守爲ニ嵯峨マテ馳
下テ在庄シケリ弟^{弟ニ}孫六元秋其弟ニ彦六元能辨
弟ニ心珠院宗純藏主ヲ先トシテ其勢一萬五千
餘騎計ニテ丹後國へ差遣内藤彈正忠貞正波多
野孫四郎元清各言合テ石川勘解由左衛門^尉直
經カ籠リタル加屋ノ城ヲ取卷^テ日々夜々攻戰
トイヘトモ合戰ニ利ナクシテ城難落^ソ有ケル然
間阿彌陀カ峰ハ木人^{木カ}武田伊豆守澤藏軒數萬ノ
勢ヲ待付ケ十重廿重ニ取卷^テ攻戰事隙ナシコ
レモ城強ク可落様ナシ大心院殿ハ高津ニ陣ヲ
メサルレハ澄之ハ牧ト云所ニ宿陣ス澄元ハ丹
後國田邊ト云所ニ陣ヲ取^ラカ、リケレハ大心

院殿可有御上洛間近日一途有様ニ合戦スヘ
キ由香西孫六方ヘモ又澤藏方ヘモ被仰遣之間
各忠節ヲ勵ストイヘトモ名城トモナリケレ
ハヲチカタカリケリ爰ニ一色下山ト云人ノ被
籠タル三戸口ノ城ヲ香西孫六以武略計略シ引
取間下山降人トシテ城ヲ孫六ニ渡被出ケル其
刻彼下山内ノ者ニ肥後左京亮・申ケルハ惣領
ヲ捨被申・敵ニクミ可被申事御當家ノカキン
世ノシリタルヘキ哉可被思留由諫ケレトモ
無承引間不及力左京亮父子引ノキ阿彌陀力峰
ノ城ヘ馳越延永修理進春信ヲ以義有ニ志意趣
ノ通具ニ云入ケレトモ彼力主既ニ敵ニ成上ハ
不能對面又城ノ内ヘ可入事不可叶ノ由被申間
春信カ申事ニ所詮二心ナキ處ヲ顯シ忠節アラ
ハ其時重テ可在披露由申テソ返シケル然ハ彼
左京亮・助八ニ相談シテ折節五月雨車軸ヲ下

シ降ケル其マキレニ逸見駿河守カ陣ニ押寄テ
面モフラス身命ヲ捨テ攻戦フ逸見一黨數十
人討死シケリ或ハ手ヲヒチリノニナリケレ
ハ駿河守モ痛手アマタ負テ本國若狹國マテ引
退肥後左京・モ討レケル子・助八七ヶ所手負ト
イヘトモ分捕頭トモ其外生捕少々召具シテ延
永ニ此旨ヲ云入タリケレハ頓テ披露ス此上ハ
トテ對面アリテ城内ヘソ入ラレケル然ハ城
トモハ彌コハウシテ急・落居シカタカリケレ
ハトテ大心院殿ハ五月下旬ノ比御上洛有ケレ
ハ同澄元上洛アリケリカ、リケレハ香西孫六
モ石川カ籠タル加屋城ヲ計略シ直經ヲ降人
分ニ云合テ城ノ内ヘ人ヲ入請取ニシテ歸陣
シ嵯峨ニソ居タリケル大心院殿ハ其比京都
ニ・テ様々御遊トモアリ六月廿二日伏見ノ澤
ニテ舟遊トモアリテ同廿三日ニ御歸洛アリ明

日ハ愛宕ノ御縁日トテ御精進ノ御爲御行水ア

私云惣別御行水ハ毎日ノ事ナリ

然ニ廿三日戌刻計ニ御湯殿ニ入ラセ給フ其夜ノ當番ハ竹田孫七ニ打キ心ヲ合テ御湯殿ニ忍入り御湯カタヒラ參スルカケヨリ小太刀ニテ二太刀マテ切マイラセケレハ御手ニテアツセ給フト見ヘテ御ウテヲ二太刀切マイラセ取ナヲシテ御ソハ腹ヲツキタマツリハネコロハシ進ラセテ御首ヲソカヒタリケル御足ノウラマテカキ奉リ御湯帷子ヲ引カケ進ラセ御湯殿ノ戸ヲタテ、ソ出タリケルカクテ御坐所ニ忍入色々ノ物盜取出ケル去間波々伯部源次郎ハ毎ノ如ク御トノヘニ可參心中ニテ參ケルヲ是モ二太刀切ケル大心院殿ニテ御坐ト心得ア源次郎畏テ申ケルハ御手ヲヨコサル、マテモナキ御事ニテ候、トカ腹ヲ可仕候ト申テ中ノ御局マテ退出シテ御女房ニ刑部卿殿ト申ヲ以テ

御檢使ヲ被下腹ヲ可仕ノ由申ケレハ御坐所ニモ御寢所ニモ御見ヘナキ由申テソ返ラレケル不思議ニ思ヒ源次郎御湯殿ニ參リ見レハアサマシキ御有様無是非題目ナリ其マ、源次郎御屋形様ヲハ竹田孫七カ討マイラセタルソヤトソカノサケヒケルサテ澄元ノ方ヘ馳參此由ヲ申ケルコハソモ何ト成行世中ソヤト我人涙ノ雨ニカキクレテ此マ、トコヤミノコトク可成カト思シカサレトモ夏ノ夜ノ習トテホトナク明テ廿四日ニモ成ケレハ巳刻許ニ香西又六元長同孫六元秋同彦六元能兄弟三人蟻峨ヲ打立、テカ三千人計ニテ馳上リ其外路次ニ於テ馳付勢ハ數ヲ不知京都ニハ又六弟ニ心珠院宗純藏主香川上野介滿景安富新兵衛尉元顯馳集リ室町ヲ上リニ柳原口東ノ方ヨリ澄元ノ居所安富カ私宅ニ押寄ルコハソモ何ト云事ソヤト辨ヘサル所ニ香西彦六ハ大宮ヲ上リニ欠通リテ上

ノ御犬口^{无カ}ノ馬場口ヨリ押寄ル同孫六ハ大宮ヲ

上リニ安居院^{アゲイ}ヨリ百々^{トウ}ノ橋口ニ押ヨセケリ又

六モ輿ニテ跡ニソツ、キケル三方ノ寄手六郎

殿ニ押ヨセケル處ニ藥師寺三郎左衛門尉長忠

申ケルハ今日被及合戰事ハ延引候ヘカシ澄

元ヨリ被申子細ノ候間明日ハ同心可申由兩使

ヲ以テ孫六カ方ヘ申送リケル孫六申・ハ是マ

テ思タチタル合戰ノ儀ト、マルヘキ事ニモア

ラス如何可有ト申ケレハ猶重テ長忠兎角申間

同心有間敷ニテ候ハ、無力題目ニテ候一合戰

仕マテニテ候由返事シケレハ三郎左衛門尉

ハ澄元ノ方ヘモ不參香西カ方ヘモ不出シテ見

物シテ居タリケルヲニクシトイハヌ者ハ無リ

ケリカクテ犬ノ馬場口ノ合戰ニ澄元内東條修

理亮一宮十郎次郎ヲ始トシテ數十人ウタレケ

レハ香西^ノ孫六^モ討死シテケリ思ヒノ勦記

スニイトマ非ス目ヲ驚ス計ナリ扱^{无カ}モ百々ノ

橋口ニテハ大和彦三郎若槻又太郎ヲ始トシテ

數十人ウタレケレハ佐々木小三郎奈良修理

亮^{亮カ}ヲ始トシテ澄元ノ馬廻ノ衆武略ニタツサハ

ル程ノ者此口ニ於テ太刀ヲ打鍵ヲ突ヌハナカ

リケリ香西孫六ハ鬼神ノ如ク勦テ敵アマタ討

捕ケルカ大事ノ痛手ヲヒテ明ル廿五日辰ノ

刻計ニ死タリケル^{リカ}晩ニ及テノ合戰ニハ波々伯

部源次郎元繼昨夜ノ痛手煩ナカラ輿ニ乗リテ

出タリケルカコシノ内ヨリ小太刀ニテ切テ

出中路七郎左衛門ト云者ト引組討死シケリ是

ハ大心院殿ノ御供ニ腹ヲ切可申ノ由^{无カ}ニ候^{申カ}ヒケ

ルカ幸ノ事トテ討死シケルノ哀ナル同名五郎

左衛門・モ見捨難シト是モ討死シテケリカク

テ三方ノ合戰思ヒノ攻戰事今朝巳ノ刻ヨ

リ西ノ終ニ及ケルサテ澄元ハ三好以下死殘

タル馬廻少々召具江州ヲサシテ落玉フ其夜ハ
 青地ノ城ニ落付玉ヒ明レハ甲賀山中新左衛門
 尉ト云者ヲ頼給テ暫ク御人アリケルナリ去程
 ニ京都ニハ澄之家督ノ御内書頂戴有テ丹波
 國ヨリ上洛アリ大心院殿御茶毘七月八日十一日イ被
 取行七日々々ノ御佛事御中陰以下大心院ニ
 於テ嚴重ニソ其沙汰アリケリ香川上野介滿景
 内藤彈正忠貞正安富新兵衛尉元顯寺町石見守
 通隆藥師寺三郎左衛門・長忠香西又六元長心
 珠院宗純長鹽備前守元親秋庭修理亮元實其外
 ノ面々各出仕申萬談合トモ如先々有テ國々ノ
 成敗等モ尤可然様ニソ有ケルサテ丹後國ヘモ
 大心院殿・事聞御カヘケレハ澤藏モ不移時日馳上
 リケル路次ニテ合戰アリテウタレニケリ武田
 伊豆守カラ／＼分國若狹國ヘ逃カヘル同大和
 國ヘモ此由聞ヘケレハ國ノ浪人・トモ折ヲ得

テ取カケ、ル間澤藏留主ニ置ケル蘆田助次郎
 和田源四郎ヲ始トシテ八百餘人ウタレニケリ
 カ、リケレハ佐々木六角四郎□□義澄將軍ヘ
 御方可爲ノ由申上テ在京シケル間御褒美アリ
 九郎澄之モ萬事ヲ云合頼ミ思ワレケリ四郎カ
 被官ニ甲賀山家ノ強盜ナトノ様成者ニ三雲
 トヤラム云者アリ澄元ヲ討テ參ラスヘキ由申
 テソクタクノ鳥日マテハヤ請取・打トケ心安
 ク思ハル、處ニ四郎京都ヲ出拔テ七月廿五日
 白晝ニ逃テ落下リケルソレヨリ京都以外ニ騷
 動シテ女童ンヘ逃マトヒ資財雜具ヲ持運身ノ
 隠レカラ尋タル有様ハ中々言ノ葉モ無リケリ
 其比六角四郎カ働ヲニクシト思フ者ヤシタリ
 ケン
 高綱カツラマテヨコス四郎カナタラスバカ
 リカ錢ヲ盜ミテ
 ト云落書ヲソ立タリケル實ニ保元ノイニシヘ

ノ亂ノ時大和路ノ守護ノ事安藝判官平基盛承
リテ法性寺大路ヲ堅メタリケルニ大和國ノ住
人宇野七郎親治カ上リケルヲ綸旨ニヨリテ上
ルカ院宣ニ隨テ上ルカト問ヒシ時イカ、セン
ト思ヒケルカカリニモ武士ノ僞タルハイヘノ
キス後代ノ名折ト思テ院宣ニ隨テ上ルントマ
ツスクニ名乗テ討死シタリシニハ替リタル者
哉トソ京童ヘ笑ケル・同廿九日ニ右馬助政賢
民部少輔高國淡路守尙春以下同心シ方々ヘフ
レメクリ又ハ邊土洛外ノ鄉民西岡ノ浪人共マ
テ云合テ澄之ノ居所遊初軒ヘ可取懸支度成ケ
レハ澄之ノ馬廻ノ者トモ落散寺町石見守長
鹽備前ナトヲ始トシテ政賢ノ手ニ馳加ハルモ
アリ高國ヘ屬スルモアリ・國々ヘ逃下モアリ
殘ル者ニハ香川安富香西又六同心珠院藥師寺
三郎左衛門尉一宮兵庫助以下計也サレハ此間
集置テ寺社本所領ヲオトシトリ恩ヲ與ヘタル

侍トモ落失テ自身計ノ體也ケレハ哀成シ有様
也只此比タヘタルハ兵ノ道可成口ニ荒言ヲ云
ヒアリキシ者モ恩ヲ忘テ盲々タル風情ハ淺間
敷有様也又タマ／＼首ヲソリタレ共佛法ヲモ
修行セスサラハ樹下石上ニモ居ヲ示ス唯蝙蝠
ノ鳥ニテモナク鼠ニテモアラヌ風情シテカ者
トモ無ク朋友トモ見ヘス體ニテ出頭シツイ
セウヲ專ニシテ世ヲ諛イタル有様ハ我人耻敷
餘所日也・八月朔日卯ノ刻ニ澄之ノ居所遊初
軒ヘハ淡路守尙春ヲ大將トシテ大勢ニテ押寄
ル香西又六ハ私宅ニ火ヲ欠テ藥師寺三郎左衛
門カ宿所ニ馳加ル同香川安富モ一所ニソ集リ
ケル哀レ成シハ又六先使者ヲ以テ藥師寺三郎
左衛門尉カ方ヘ云遣シケルハ其方ヘ參候テ腹
ヲ可仕候カ又此方ヘ御渡候テ腹ヲ可被召カ何
レニモ同道可申由言ヒ遣タリケレトモ返事何
トヤラム延引也其儘甲ノ緒ヲシメ長刀馬ノ平

頸ニ引ソヘ家ニ火ヲ懸サセ出ケルニ皆落散僅
 ニ二三十人ニ過サリケルサテ此人數計カト弟
 ノ心珠院ニ問ケルニ此衆計ニテ候ト返事シケ
 レハヨシ／＼腹ヲ切ニ行ニハ是程モヨク勘忍
 シタリトテ馬ノ上ニテソ笑ヒケル三郎左衛門
 宿所ヘハ民部少輔高國ヲ大將トシテ是モ猛勢
 ニテ押寄ル澄之ノ方ヨリ一色兵庫助切テ出散
 散ニ戰テ大勢ヲ切チラシ澤藏カ燒跡ニテ討死
 シケレハ矢野八郎左衛門尉以下同ツ、イテ討
 レニケリサテ澄之御腹ヲメサルレハ波々伯部
 伯耆入道宗寅ハ御座所ニ火ヲカケ心靜ニ御介
 錯申其刀ニテ腹カキ切テソ死タリケル淺間
 敷有様也サレトモ遊初軒ハ一字計燒テ殘ハ不
 苦其後三郎左衛門尉宿所ニ殘留者僅ニ二三十
 人ニハ過サリケリ一番ニ香西又六同心珠院三
 野五郎太郎門ヲ開ヒテ切テ出サン／＼ニ戰フ
 ト申セトモ大勢待カケタル事ナレハ一人モ不

殘同枕ニ切殺シテケリ其次ニ香河上野介討死
 スル同肥後守ツ、イテ討死ス三郎左衛門モ討
 死スレハ與力ニ能勢源次郎毛利丹後守久々智
 掃部助内者益富孫六以下ツ、ヒテ討死シテケ
 リ安富ハ落行ケルヲヤカテ道ニテソ討レケ
 ルトテモ捨ル命ヲ一所ニテ死タラハイカニヨ
 カリナンサレハス、メトモ死セス退ケトモ不
 助ト申侍レハイカニモ思慮可有ハ兵ノ道ナル
 ヘシトソ京童申ケル香西五郎左衛門尉又六見
 捨カタシトテ討死シテケリ哀ナリシ有様也又
 六最後ニ云ヒケルハ自然ノ時ハ着テ討死セン
 ト思テ具足ヲオトシタテタレトモ此間ノ病
 氣ニ身弱リテケレハ腹當ニテ討死スヘシ此具
 足ヲ用ニ立サルコソ無念ナレト云ケレハ又六
 カ與力ニ讃岐國住人前田彌四郎ト云者はヲ聞
 テコヒウケ一宿シテ又六カ見所ニテ討死シ

タリシハ哀ナリシ事トモ也カクテ嵐ノ山ノ城

元カ

ヘモ郷民トモアマタ取カケル間城ノ大將ニ

入置タル香西藤六原兵庫助氏明討死スル上ハ

嵐ノ山ノ城モ落居シケリサテ京都ハ先靜謐

ノ様ニ成ケレハ澄元近江國甲賀ヨリ上洛シ玉

ヒケリ京都ノ成敗ハ萬事三好ニテソ有ケルサ

レハ前ニハ澄元方トテ方々闕所ケンタンシ

テチクテンニ及者多ク今ハ又澄之ノ方トテ地

下在家寺庵ニ至マテカラキ目ニソアヒケル科

有ルモ罪無キモセン方ナキハ唯此比ノ反復

トカナキモカ

也兩度ノ取合ニ善島院上野治部少輔故安富筑

後守故藥師寺備前守同三郎左衛門尉香西又六

同孫六秋庭安富香川私宅等ヲ始トシテ或燒失

或ハコホチ取テ廣野ノ如シ見シニモ非ス荒ハ

テタルアリサマハ只枯蘇城ノウテナ咸陽宮ノ

亡ヒシ昔ノ夢ニモカクヤト思ハル、計ナル諸

リカ

道トヒニスタレ果タル理非ト云事ヲモ辨ヘネ

ハ政道モ無上下迷亂シタル有様ハイカニ成行

世中ソヤト歎カヌ人モナカリケリ前ニハ香西

又六嵐ノ山ノ堀ホリノ人夫トテ山城ノ國中ニ

人夫ヲカクル今ハ又澄元ノ屋形ノ堀ホリト

テ九重ノ内ヘ夫丸ヲカケラレケレハ三好モ私

宅ノ堀ホリノ人夫トテ邊土洛外ニカケホリヲ

ホル城ヲ都ノ内ニコシラヘケレハ寔ニ靜謐ノ

世ニ兼テ亂世ヲ招グニ似タリケレハイカナル

者カシタリケン落書ヲソシタリケル

キコシメセ彌々亂ヲヲコシ米又ハホリ

又ハホリ

京中ハ此程ヨリモアフリコフ今日モホリ

ホリ明日モホリ

サリトテハ嵐ノ山ヲミヨシトノヒラニホリ

ヲハホラストモアレ

又或落書ニカ

ナカラヘハ又ミヨシヲヤシノハマシウキカ

ウサイソ今ハコイシキ

此返事トヲホシクテ

ナカラヘテ三好ヲ忍世ナリセハ命イキテモ

何ニカワセン

何トテカ是ホト米ノヤスキ世ニアワノミヨ

シヲヒタサ、ルラン

花サカリ今ハ三好ト思フトモハテハ嵐ノ風

ヤチラサン

此外色々ノ落書多シトイヘトモ中々シルシツ

クルニ及ハス去間畠山尾張守尙順ト澄元和睦

アリテ畠山上總介義英ヲ可退治ニ内談定リケ

ル京都ヨリノ大將ニハ細川民部少輔高國同淡

路守尙春ヲ差下シ其外奈良修理亮元吉高畠與

三以下ヲソ下サレケル同攝津國ノ衆ヲタテ

ラレケル三宅出羽守秀村伊丹兵庫助元扶池田

筑後守貞正ヲ始トシテ數萬騎打立由聞ヘケレ

ハ義英ハ嶽山ノ城ニソ籠ラレケル然ハ尙順

ノ勢ト成合テ永正四年十二月廿三日嶽山ノ城

へ押寄各陣取息ヲモツカセス攻レ厄名城ナレ

ハ・落カタカリ・然トモ十二月廿八日ヨリ詰陣

ヲ取テカツキツレテソ攻ケル間明ル永正五年

正月十七日マテ諸勢トモニ詰口ヲ不退責戰城

・ノ内水ツキケレハコラヘカネテ終ニ十七日

寅ノ刻計ニ落ケリ・大將義英・無恙落玉ヒス畠

山右馬助ヲ始トシテ木澤兵庫助以下六十人計

討レニケルカクテ各歸陣シテ目出度春ニ立カ

ヘルトソホノメキアヘル扱義英ヲハ高畠與三

カ手ニカ・請取テ境ノ津ニ隱置參ラセケルトナン行末

ノ事イカ、侍ラムモシラスカシ

扱モ久不申通候此間攝州邊ニ罷下候テ徘徊

仕候折節急使ノ由此者申候間今度世上ノ時

宜一日ノ内ニ如形記シ付候テ進入候定テ

越度ノミオホカルヘク候ヘトモ御殿者ノ事

ニ候間其憚ヲ不顧候御一覽ノ後早破云々
拙者モ大心院様ニヲクレ參セ候テヨリセメ
テノ事ニト入道仕候其刻タ、ナランモ無念
ニテ

黒髮ノミタレクル世ノ秋ノ霜ハラフニツ
ケテスル、袖哉ト

憚多候ヘトモ如何ニモヨキ僧ニ成候テ今戒

名宗福ト申候應量一鉢ノ空キ事ヲモ不歎挂

杖一枝ノ力ヲカリ入禪室工夫面壁ノ外無

他事候ラカシ候哉萬事ウキ世ノ氣ニアイ

候ハヌ事見聞ヌ方モカナト存候ヘトモ中々

市ノ中カクレ家ヲト存候テ未都ノ内ニコソ

候ヘ乍去有ニカイナキ命モウラメシク候テ

ナカラヘテカ、ルミタレノ世ノウサニ命

タニコソカコタレニケレ

筆ニスカリ候テスチナキ事ヲ申候コレ又比

興ニ候尙旁期後便候恐々謹言

永正五年

二月十日

太平山城守殿

御宿所

下村五郎左衛門入道事也

宗福在判

細川大心院記終

枉若物計カ

瓦林正賴記

近比ノ事ニヤ攝州下ノ郡ノ内ニ一人ノ大名アリケル當國ノ太守細川右京大夫高國ノ爲ニモ外シヤクニ付テハ餘所ナラスナカラ代々忠節ノ家臣也凡此比ハ當國ニカキラス諸國亂レテ取合ケレハ彼戰國ノ七雄ノ昔ニモ不異唯朝夕寄セツ寄ラレツ責戰フ鬭諍堅固ノ時節ト成アルコソカナシケレ

奉カ

抑當御所樣義植公ト・申ハ清和天皇廿一代ノ後胤等持院贈左大臣源朝臣尊氏公六代ノ苗裔普廣院贈太政大臣源朝臣義教公ノ御孫大智院贈大相國義視公ノ長子也去程ニ義視公ノ御舍兄慈照院贈大相國義政公征夷將軍ノ御時畠山左衛門督持國德本子無ニヨツテ舍弟尾張守持富ヲ養子ニセラレシ處ニ落胤ノ實子出來ニケスカリ右衛門佐義就ト名付實子爲・ニ依家督ニツル上ハトテカ

成ラレケリ持富ハ素・家督ノ望モ無リケリ但ヨリカ

子息カ

遊佐河内守カ女ノ腹ニ・男女ノ子十餘人有其

中ニ彌三郎彌次郎トテ兩人殊ニ器用ノ人ニテ

ソ有ケル彼内ニハ遊佐神保二テン也神保ノ何

カシイカナル事カ有ケン義就ヲ背彼彌三郎ヲ

家督ニ可用造意有シニ程ナク彌三郎死スル間セラレケルカ

舍弟彌次郎政長ヲソ取立ケル遊佐ノ惣領ハ元

ヨリ外シヤク也ケレハ神保ト同心ス其外ノ家

僕等思ヒ／＼ニ引別享德二年癸酉以來兩家取

合テ討ツウタレツセシカ遂ニハ天下ノ亂ト

成テ應仁元年丁亥正月十八日御靈合戰ヲ始ト

シテ同五月廿六日ヨリ京都二ツニ破テ大動亂

ト成ニケル子細ハ山名金吾持豐入道宗全ハ義

就ヲ取立ントス細川左京亮勝元ハ政長ヲ家督

ニセントス其外諸大名・二ツニ分・ル其後七ケテ漢楚ノ戰ニ相

似タリカ

年ヲ經テ文明五年癸巳三月十九日ニハ山名宗

全入道死・同五月十一日ニハ細川勝元逝去ア

トアリカ

マラスカ

リシカトモ亂ハ未靜・十餘年ニ及ヘリ然ハ敵
モ味方モ合戰ニタイクツシテ終ニハ和睦ニソ
成ニケル然トモ畠山ノ兩家ハ和與ニモナラス
シテ今ニ至迄七十年ニ及フマテ爰ニテ戰カシ
コニテ爭ヒケリ去程ニ延徳元年己酉三月廿六
日ニ義政公ノ御子常徳院贈大相國義熙公江州
鉤ノ陣ニテ薨逝有シカハ當將軍ノ御世ニソ成
ニケリ去間彼兩家河内國ヲアラソヒテ義就
ハ畠田ノ城ニ有リ政長ハ橘島ノ正覺寺ニソ陣
被取ケル合戰ハ止サリケリ然間延徳□年十
二月十二日義就死去後其子・次郎義豐退治ノ
爲ニ明應二年癸丑二月十五日ニ御動坐有シニ
細川左京亮政元心替有テ同年閏四月廿五日ニ
彼陣ノ軍破レ大將畠山右衛門督政長自害ノ上
ハ一家ニハ播磨守駿河守ヲ始トシテ家僕ニハ

遊佐河内守同加賀守同兵庫助ヲ始トシテ討
死自害數ヲ知サリケル然ハ將軍モ色々ノ御事
有テ初ハ北國越中國ニ暫御坐ヲアタメラル
其後越前へ御上リ有・明應八年己未十一月末
ツカタニ山陽道防州へ御下向トシ聞ヘケル京
都ニハ政元ノアツカイニテ義教公ノ御孫左兵
衛督政知御子香嚴院ニ御成リ可在ヲオトシ
中左馬頭義遐ヲ將軍ニナシ被申御名ヲ被改中
比ハ義高ト申後ニハ義澄トシ申ケル政元ハ女
中モ無間九條前關白ノ御息ヲ一人申請二歳
ノ御時ヨリ養子ニ奉リ十五歳元服ノ後ハ九郎
澄之ト申ケリ其後一族阿州守護前讃岐守政之
入道有テ慈雲院道空ト號彼孫備中守護ノ次男
六郎澄元ヲモ養子セラレケリ何レヲ家督トモ
辨ヘカタシ去アイタ彼兩人ノ間不和ニ成テ永
正四年丁卯六月廿三日ノ夜政元遂ニ生害有ケ
リ同廿四日巳刻ニハ香西又六元長舍弟孫六

先カ

元秋其弟彦六元能尙其弟ニ心珠院宗純藏主同心シテ猛勢ヲ率シ澄元ノ屋形安富筑後守カ宿所ニ取カケ一日大軍有テ澄元方ニハ家子天竺孫三郎家僕ニハ東條修理亮一宮十郎次郎京衆ニハ大和彦三郎元行波々伯部源二郎若槻又太郎波々伯部五郎左衛門尉ヲ始トシテ數十人死ス彦六元能ハ當座討死ス孫六元秋ハ痛手負明廿五日辰刻ニ・死・去間晩ニ及テ屋形ニ火ヲカケル間澄元ハ三好筑前守以下討殘サレタル馬廻トモ召具江州差テ落タリケル其夜香地ノ城ニ落付明レハ甲賀郡ニ下テ山中新左衛門尉ヲソ被賴ケル玄蕃頭元治子思源五郎元全手ノ定戰テ手勢十餘人ニテ若狹國ヘソ落ラレケル都ニハ九郎澄之家督ノ御内書頂戴有テ丹波ヨリ七月八日ニ上洛アル同十一日ニ政元葬送取行ハル大心院トソ申ケル中陰ノ儀式大心院ニテ嚴重ニ取行ハレ同廿五日ニ七日ノ佛

事被勤畢其晩景ニ佐々木六角四郎大心院ニ參テ燒香シ直ニ江州ヘ逃ケテ下ケル間其ヨリ京都以外ニ騷動シテ資財雜具ヲ持ハコヒ目モアテラレニ體也ケル果シテ八月一日ニハ澄元ノ御方トシテ右馬助政賢淡路守尙春今ノ右京兆其時ハ未民部少輔高國ト申セシ時各同心ニ猛勢ヲ率澄之ニソ取カケ・ケル・澄之馬廻一合戰可致覺悟トモナル處ニ大心院生害ノ事澄之内々存知ノ由風聞シケレハ扱ハ無曲次第トテ皆心替アリケレハ遂ニ澄之遊初軒ニテ自害有波々伯部伯耆守入道宗寅心靜ニカイシヤク中遊初軒ニ火ヲカケ腹ヲソ切タリケル其刻ニ一首詠シテ殊ノ兒高雄ニ居タリケルニソ使ハシケル

ナカラヘテ思ワスイト、ウカルヘシワカ世ノハテノ近キウレシサ
其外討死人數ハ香河上野介同肥後守安富新兵

衛尉香西又六舍弟心珠院藥師寺三郎左衛門尉
長忠與力ニハ能勢源次郎與利丹後守久々智掃
部助被官數人其外一宮兵庫助矢野八郎左衛門
三野五郎太郎前田彌四郎ヲ初トシテ討死數十
人香西藤六原兵庫助氏明ハ嵐山ノ城ニテ鄉民
共取懸討レニケリ香西五郎右衛門・ハ痛手負
テ三日ノ朝死ケリ然間京都靜謐ノ體ナレハ澄
元モ江州ヨリ上洛有京都ノ成敗萬事三好ニテ
ン有ケルサレハ落書ニ

ハケシカリシ嵐ノ風ハ音タヘテ今ヲサカリ
ノミヨシノ、花

山中新左衛門尉今度忠節ノ賞トシテカケノ郡
ヲン賜リケル是ハ代々寺町知行ノ郡也シカト
モ敢放テ打田ニ賜ル打田ハ山中
カ在名也イカ成者ノシケ
ン落書ニ

昔ヨリ天王寺ニハ奇特アリウツタカモツモ
七不思議カナ

サテモ又正體ナシノ寺町ヤカケノ郡ハウツ
田モノカナ

六郎澄元ハ上洛アリテ右京大夫ニ任シ義澄將
軍ヲン扶佐被申ケル初ハ岩栖院ニ居セラレシ
カ後ニハ波多野孫四郎カ宿所村雲ニソ住マレ
ケルカクテ其年ハ無爲ニ暮テ永正五年ニ成リ
ニケリ去間畠山尾張守入道ト山ト澄元和睦ス
リテ故畠山霜臺義豐子息上總介義英ヲ退治ス
ヘキニ定リテ京都ヨリ合力ノ大將ニ民部少輔
高國淡路守尙春其外奈良修理亮元吉高畠與三
以下攝津國衆ニハ三宅出羽守秀村伊丹兵庫助
元扶池田筑後守貞正ヲ初トシテ數萬人馳向フ
永正四年十二月ヨリ義英ノ籠ケル嶽山ニ押寄
テ同五年正月十七日ニハ遂ニ責落シケル木澤
兵庫助ヲ先トシテ六十餘人ソ討レニケル其刻
義英ヲ生害サセ可申ヲ高畠與三カ手ニ請取、
堺ノ津ヘ落シケレハイト無覺東子細也其意趣

ヲ尋レハ故澤藏軒宗益カ養子赤澤新兵衛・其
比和州一國ヲ切治テ進退ス島山入道ト山ハ高

爲ニハカ

國ノ・姉智ニテソ有ケリ彼ト山和州ヲ知行ノ

望アリケレハ高國モ定テ同心可有ト推量シテ

義英此時生害アラハト山ハサス敵ナクシテ高

國ト被申合一定和平ニハナルヘシトテ澄元ニ

申様義英ヲ生害サセ申シ事御思惟可有高國ト

由ト申合一定不思議可出來由連々讒言スルニ

依テ義英ヲ落サレケルトナリ去程ニ澄元サツカ

ハ高國謀叛ノ心有ト心得既ニ浮沉ニ及ヘキ由

ヲ有人潜ニ告知ラセ・ケル間伊勢參宮ト號シ

京都ヲハ俄ニ取ノキ參宮以後伊賀守護仁木四

郎ハ高國ノ從弟也甲斐々々敷事ハナクトモ涯

分合力可申ト也其後諸勢加リ又此間澄元ノ不

審蒙タリケル天竺上野介此間四字程アキカ寺町石見守通隆長

鹽備前守元親内藤備前守貞正ヲ始トシテ馳加

ル然ハ玄蕃入道一雲子息源五郎甥治部少輔政
益秋庭修理亮元實香川平五元綱藥師寺與一元
房萬徳同與次岩干奈良修理亮元吉香西孫五郎國
忠波多野孫四郎元清柳本又次郎入道宗雄太田
藏人保定以下馬廻等大略心替ヲソシタリケル
是ハ強テ澄元ニハ飽不申トイヘトモ三好筑前
守高島與三忠阿彌ナント萬緩怠至極ナルニソ
タイクツシタリケル然ハ澄元モコラヘ兼テ
三好筑前守以下ノ馬廻少々相具四月九日ノ夜
ニハ屋形ニ火ヲカケ又江州甲賀ヘヲノカレケ
ル高國ハ伏見ノ津田兵庫助カ城ニ楯籠シカ相
違ナク飯洛アリ・去程ニ御所様ヲハ大内左京
大夫義興猛勢ヲ引率御舟ヲ出サレ永正五年ノ
春ノ末ニハ・堺泉カノ津ニ着岸アリケル近日御上
洛可有由聞ヘケル間義澄將軍同四月十六日夜
江州ヘソ没落有ケル然間高國家督可爲由ノ
御内書頂戴シテ堺ヘ御迎ニソ下向アリケル爰

ニ池田筑後守貞正ハ澄元一段ト扶助セラレシ
子細アリシカハ在所ニ城ヲコシラヘ高國ヲ追^負
間猛勢ヲ以テ遂ニ攻落筑後ヲ先トシテ一族若
黨數百人討死自害シテケリ同六月八日ニハ御
所様御入洛アリ大内ヲ始テ長門周防安藝石見
豊前筑前山陽山陰ニアリトアル奉公衆不殘御
供申ケレハ見物貴賤市ヲナシテソ待申ケル一
條室町ナル吉良殿屋形兼テヨリ修造アリテ
御所ニ成ケル上下萬民悅ヒアヘル事限ナシ
サテ高國ハ右京大夫ニ任^{シテ}・永ク國家ヲソ治メ
ラレケル同六月十七日三好筑前守大將トシテ
三千餘騎ニテ江州ヨリ打テ上リ如意カ嶽ニ旗
二十流計ソ打立ケル然共京都ニハ少モ騷給
ハス則十七日未ノ刻ニ猛勢方々如意ケ嶽ヘ責
上ル間一合戰シテ其夜落ニケル十八日ニハ落
人方々ニテ被生捕數十人切レニケリ義澄將軍
ハ九里カ拵ヘタル岡山ノ城ニソ御坐アリケル

澄元ハ甲賀ニモタマラス潛ニ阿州ヘ下有
同六年十月廿六日ノ夜江州ヨリ究竟ノ夜討ノ
上手圓珍トヤラム云時衆義澄將軍ニ被賴申御
前ニテ被召遣ケル繁阿彌ト申合ムマ〜ト御
所ニ忍入其外手柄ノ者三人計リ推參仕既ニ
太刀長刀ニテ切奉シニ御所様モ御打刀ニテヒ
ヤウシアイシ給ヒケレトモ知人サラニナカリ
ケリ御立烏帽子御衣ナントハ繼ク所モナク切
奉リケルカ御身ニハサシテ深手ハマシマサス
薄手少ソ・アリケル・御^{御座}所^{不思議ト申モオロカナリカ火カ}様^{燈・ヲワ}
サト打ケシタマヒシ時御トノイモノヲサンサ
ンニ切リツ又ハツナトシテソ出タリケル一定
討止奉タルソト心得罷出江州ニテハ討スマシ
タル由申タルト聞^{ケルカ}ヘシ
御用心サウケタマハル御所様ノ御ハタラク
ハ^{アカ}カツコヽチヨシ

トッ落書ヲ立タリケル不思議成事トモ也去間
 彼下郡ノ大名ト前ニ聞ヘシハ瓦林河原カ對馬守平正
 頼ト申セシ人ノ事ソカシ彼正頼ハ豐島里ニ常
 ノ宿所ハ在ナカラ城ナクテハ叶フマシトテ四
 里計西ニ武庫山ノ尾崎難太ノ内鷹ノ尾ヲ城
 郭ニソ構ラレケルナタノ五郷ハ本ハ本所領ニ
 テ守護代ニモ隨カソス侍數七八百人モアリテ
 自然ト勢揃スル時ハ三四千人モアル在所也彼
 鷹尾城アラハ定テ六ケ布事アナントテナダノ
 内ノ本城ト西宮トハ多年中不和アシグシカニテ度々取
 合ケルカ俄ニ中直リケルリカ是ハ同心シテ彼城ヲ
 サミセムカタメ也ト正頼ヤカテ心得憎企ナリ
 ケレトモ面ニハミヘス事ナレハヲツトヲサ
 セテ成敗セハヤト思ソレケル處ニナダ五郷ノ
 内ニ正頼カ同名足高ノナニカシ并ニ下村ト云
 者ヲ先トシテ澄元ヒイキノ者アマタカ多ク有先彼兩人

ヲ地下トシテ討テ可參ト下知ヲ高國ヨリ被成
 ケレトモ地下人恐テ此在所ニハ居ス候トテ
 難澁シケル間永正八年五月一日ノフケウニ鷹
 尾ノ城ヨリ究竟ノ手柄ノ衆廿餘人一里計アル
 在所ヘ打コシ彼足高ヲ討取宿所ニ火ヲカケ
 テノキケル處ニ本城ノ者トモ起リ合テ城ト討
 手ノ間ヲシキリ討手ヲ取卷テ討ントセシヲ一
 人當千ノ者トモ也ケレハ散々ニ戰テ結句敵多
 ク討取一人モ不討レ城ヘシツノト人ニケル
 サレハ御下知ノ下リケルニ地下ヨリ難澁スル
 サヘ曲事ナルニ剩彼討手ニ取掛ル事ハ一向御
 敵ニテコソアリケル其科ヘ其後鷹尾城ニ外
 堀ヲホレハ用水ヲハ樋ニテカクヘシト正頼申
 處ニ本城衆ウケコワス剩五郷ノ衆ヲ催シ二十
 人計鷹尾城ヘ五月六日ニ取カケ、ル兼日ニカ正
 頼舍弟吹田又五郎瓦林四郎次郎與力ニ齋藤新
 五郎富松彦三郎稻津小五郎鈴木與次郎ヲ初ト

シテ其外可然侍數十人堅メケル中ニ別シテ此
廿二人中合神水ヲ飲同心ニ合戰スヘキ契約ヲ
ソ結ケル彼與ノ中ノ證人ニ宿老一人入テ可然
トテ麻田入道宗圓ヲソ被人ケルカクテ廿三人
ノ人々申合セシ事ナレハ敵二千人計ノ中ニ
本城衆三百人ハ取分城近ク攻寄テ居タル處ヘ
廿三人ノ人々面モフラス一日ニ切テ入ケレハ
河島濱兄弟同西坐福庵トテス、トキ惡僧ノア
リケルヲ先トシテ廿餘人討取ケレハ殘者トモ
ハ蜘蛛子ヲチラスカコトクニソ逃タリケル是ヲ
見テ二千人計ノ寄手トモ皆足ヲモタメスシテ
本城ヲ追コシテ本城ニ打入・家々ヲ破却シテ
寺庵サヘ七十餘ヶ處マテ打コホチテソ引タリ
ケル其後ハ手次ヲ覺テ我々計ニテハ思ヒヨラ
スシテ當國中ノ浪人并ニ淡路守入道以久ヲ相
語同六月六日又猛勢ニテソ取カケ、ル爰ニヨ
キツカイヲ守テ城ヨリ一度ニ切テ出ケレハ寄

手多討レテ皆々・逃散ケルカ、リケル處ニ畠
山上總介義英遊佐河内入道因宗ヲ大將トシテ
吉野ヨリ打テ出ケリ先年澄元ニ付シ馬廻^{衆カ}并
ニ細川右馬助政賢和泉上守護刑部大輔打田新
左衛門尉ヲ先トシテ七八千ノ軍兵ト攝津國衆
上下郡ノ旁池田伊丹三宅茨木安威福井太田人
江高槻ヲ首トシテ二萬餘人ト同七月十三日
和泉國深井ニテ合戰アリケルニ御方餘リニ大
勢ニテ調義相違シケルニヤ國衆ノ軍敗テ大略
討死シテケリサレハ小敵ヲハヲソレヨト云ハ
爰可成尾州ノ手ニハ遊佐筑前守被討ケル^{リカ}去間
大和河内和泉モ敵隨ヒケレハ京都ヘ攻上ル
ヘキニソ定リケル^{タカ}サレハ此刻彼ナタノ衆又力
ヲ得テ淡路守入道以久モ先日ノ耻辱ヲ雪メン
トテ猛勢ヲ率シテ七月廿六日ニ又鷹尾ヘソ取
懸ケル此企前日ヨリ風聞アリケレハ此度ハ難
義至極可爲トテ御合力ノ事京都ヘ被申ケル京

ヨリ安富民部丞宗綱齋藤三郎右衛門尉元隆柳

伯カ

本入道宗雄波多野孫右衛門尉元清波々自部

三郎右衛門尉盛幸宇都二郎左衛門尉元朝能勢

因幡守賴豐富田又三郎吉春井上又五郎國就井

上中務丞正朝都合二三下サレケル正

賴ハ山ノ手ヲ堅メ京衆ハ濱ノ手ニアイテ責

マクツツマクラレツ逐ッオワレツ火化チテラシテ戰シカ

戰・寄手二百餘人討レケレハ又取

テ・返テ逃ケルカ餘リニ追ハレテ淡路入道ハ

有馬郡湯山マテン逃ラレケルトカヤ去程ニ

澄元ノ舍兄備中ノ守護細川九郎ハ播州赤松二

郎カ爲ニハ姉舅也赤松ヲヒラニ賴ム由コンセ

ツニ被申ケル間侍ノ縁ニ成ハカル大事ノ時

互ニ可合力ト云事ニコソアレサラハ打立トテ

先一家ニハ七條伊豆有馬宇野柏原眞島上月

存田廣岡別所得平侍ニハ明石依藤小寺兄弟堀

喜多野櫛橋藥師寺阿保等ヲ初トシテ二萬人ニ

及同八月ノ初兩度マテ取掛鷹尾城シ息ヲモサ

セス責タリケルサレ共手柄ノ者共ニテ・散々防戰カ精兵

コ、ヲ專ト射ケル間手負三千人ニシ及ヒケル

又重テ十一日ニ大責可有聞ヘケレハ詰テハ

猛勢ノ事ナレハ責破ナハ一人モ助・マシ引モ

折ニヨルトテ十日ノ夜城ニ籠タル由ニテ潛ニ

落テ伊丹ノ城ニ加リケル城ヲハ敵入テ米錢雜

具トモ思樣ニ取テ後ニ火ヲコンカケタリケル

播州ノ猛勢又伊丹ヘ取カケタリ色々々ツクロヒ

ノ子細アリテサノミニキツクハ攻サリケル正

賴ハ手勢ヲハ伊丹ニ殘シ置涯分ノ合戰可仕ト

テ自身ハ小者一人ニテ忍テ丹波國多紀郡波多

野城ニシ籠ケル

問カ去程ニ其比近江・ヨリ義澄將軍奉公ノ衆本郷

三上ヲ先トシテ九里カ弟竹内モ一方ノ大將ト

シテ猛勢ニテ上洛ス河内ヨリハ遊佐入道因宗

ヲ大將トシテ大和和泉河内三ヶ國ノ勢又細川

右馬助政賢和泉上守護刑部大輔猛勢ニテ上洛

シ當國ヨリハ三宅出羽守入江九郎兵衛尉山中
新右衛門尉其外諸浪人^{牢カ}數千人上洛ス播州ノ猛
勢モ續イテ上ルヘキ由聞ヘケレハ兩京兆談
合有テ畠山修理大夫奉公衆御供・同八月十六
日將軍京都ヲ御取ノキ丹後國上吉ト云所ニソ
御坐・十六日夕方ニハハヤ敵數萬人京都ニ入
テ落人ノ跡トモ少々ハ燒拂或ハ入替リ壞取リ
地下ヲハ堅ク成敗ヲ加ヘケル是ハ先難人ニハ
取セスシテ以後我々カ手ニ入レンカタメノ計
事トソ聞ヘケルカクテ先暫ク安堵ノ思ニ住
セシムル處ニ同廿三日丹波ヨリ兩京兆衆取テ
返シ長坂ニ陣ヲ取廿四日ニハ京攻ト聞ヘケレ
ハ京都ニ打入タル衆悉申合二三萬ノ勢紫野
ノ寺ノ門前ニ一勢其外ハ船岡山ニ構ヘ魚鱗鶴
翼ノ陣ヲ張テソ相待ケル兩京兆ノ士卒同廿四
日午刻面モフラス一目ニ切テ掛リケレハ兩陣
トモニ一タマリモナク崩ニケレハ逃々ウタレ

タル者二千餘人トソキコヘシ疵ヲ被ル者ハ數
ヲモ不知殊ニ大將タル右馬助政賢誓願寺ノ
邊マテ取テ遁ケルカ羅漢ノ橋ノ上ニテ討レヌ
一方ノ脇大將山中新左衛門尉モ水落ノ邊ニテ
父子トモニ討レニケリ和泉ノ守護ハ落ラレヌ
遊佐入道因宗赤澤孫次郎萩野彌十郎等ヲ始ト
シテ生捕數十人皆腹ヲソ切タリケルトテモ
捨ル命ヲ舟岡山ニテ討死アルナラハイカニヨ
カリナントソ沙汰シケル船岡山ニテ討死ハ三
上三郎本郷宮内少輔松田豊前守竹内^{无イ}扱澄元ノ
馬廻ニハ井上孫次郎與利四郎兵衛・保積八郎
等也中ニモ三上三郎ハ大内家子問田ノ何カシ
ト引組互ニ討死・^{シテケリイカメシキヲ也去程ニカ}扱京都靜謐シケレ
ハ將軍モ御歸洛・^{アリ然レハ上一人ヨリ下カ}萬民・眉ヲ
^{喜悅ノカ}開ニケリ播州ノ猛勢モ京都治リケレハ皆播州
ヘ引返ス自ラ^{シケルカ}當國モ無爲ニ成ニケリ其後色々

ノ扱ヒトモ有テ播州ト京ト和睦ニ成トハ申
セトモ底ニハ無由斷其外四國モ大略御敵也當
國ニ可然城無テハ不可叶トテ國守ハ上郡芥川
ノ北ニ當リ可然大山ノ有ケルヲ城郭ニシ構
ラレカヘ・ケレ晝夜朝暮五百人三百人ノ人夫普請更
ニ止時ナシ正賴モ又鷹尾城ヲモ構ヘ又其東一
里隔テ西宮ヨリ八町北ニ小清水トテ小山ノ
アルヲ家城ニ拵ヘ日夜只此營計也毎日五十人
百人シテ堀ヲホリ壁ヲスリ土居ヲツキ矢倉ヲ
上ケレハ鍛冶番匠壁塗大鋸引更ニヒマコソナ
カリケリ加之透隙ニハ連歌ヲ興行シテ月次モ
アリケリ夜々ハ古文ヲ學ヒ道ヲ尋ケレハ實ニ
文武二道ヲ嗜ム人ニテソ有ケル殊連歌ハ長處
ニテ近比宗祇法師カ撰ケル新撰兎玖波集ノ
作者ニモ入ニケリ彼鷹尾城ニハ與力鈴木與次
郎ヲ城掛トシテ其外・士可然カ卒守之小清水ノ頂本
城ニハ軒ヲ雙テ作り廣ケテ正賴常ノ居所トス

外城ニハ子息六郎四郎春綱ヲ始トシテ同名與
力被官棟ヲ雙テ居住ス其外居餘タル家人トモ
ハ大略西宮ニ居ス凡日ヲ驚ス風情當國ニハ雙
少キ大名也去間ナタ五鄉内澄元ヒイキノ者ト
モハ皆浪人ニテ或阿州ニ下向シ或淡州播州
邊ニ徘徊シケル中ニ河島兵庫助ハ播州ニ有ケ
ルカ正賴ノ與力ヲ縁ニ取テ降參スヘキ由ヲ連
連言入ケル間正賴返事ニハ誠ノ降參ノ望アラ
ハ河島カ一族ニテモアレ又浪人ニテモ可然者
ヲ討取首ナント持參セハ許容スヘシト有リ兵
庫助申事ニハ尤ニテ候乍去他國ニテ左様ノ
事仕テハ路次ニテモイカヤウノ事モ可有間先
御免サレタニ候テ其方ニ安堵仕候者連々ニ調
法ヲ以可致忠節由アリケレハ是モ尤道理也ト
テ喚寄ラレケリ兵庫助ヲハ鷹尾城ニヲカレ本
知ノ外ニ又扶持ヲソ加ヘケル子息松若トテ十
六歳ニ成ケルカ容顏見ニクカラス心又タクヒ

ナシ剩歌道ヲモ心ニカケ、レハ心ヲヒク人
ソ多カリケル是ヲ正頼膝モトニテソツカヒケ
ル去程ニ彼兵庫助カ進退ヲ見ニ萬ニ心ナキ體
トモ見ヘタル普譜ナント有ニモ自身手ヲオロ
ス事モ無テ下人トモニ申付不祥々々ニソシケ
ル又彼約諾シタル題目ナントモ無沙汰シテ年
月ヲ送リケリ結句ハ敵ヘ内證ナントスル由風
聞シケレハ所詮彼人ヲハ生害サスヘシトテ既
ニ談合ニ及ケレハ此内談ヲ子息松若ニハ聞セ
シトテ其夜態ト外城ヘコソ出サレケル松若大
利根成者ナレハ凡推量ヲメクラシ此子細ヲ父
ニ知セテ落サハヤト思テ鷹尾ヘ行ケルカ一
人行ナラハ人ノ不審モアルヘシイカ、セント
ヲモヒシ處ニ今參ノ若黨ニ山中ト云者アリ彼
者ニ・云ケルハ鷹尾城ヲハ未見玉シイサ、セ
玉ヘ我等モ用事有テ只今行也ト云ハ山中ハ子
細ヲハ不知則・同道スヘキトアルモ心ヨセナ

リ又鷹尾城・籠ニ松若カ姊ノ比丘尼有ケルカ
ケリ鷹尾ノ城
庵ヲ持テ住シケルアリ山中ヲ此庵内ヘ同道シ
茶ナシトノマセシハラク待給ヘトテ松若一人
城ニ上リテ父ヲ尋ヌレハ今朝ハヤ拂曉ニ正頼
方ヨリ鈴木ニ被申付ケル間兵庫助ハ、ヤヲキ
コメラレテ生害スヘキ計也或人此松若ヲ見付
テ如此ノ儀アリ御身トテモ遁レガタシ何方ヘ
モ一先落給ヘトイヒケレハサラハ早我推量違
ワサリケリ父ハ生害ニ究リ我ヲモ見ノカシ、
アラ・ハトテ上ノ山路ヲ分テ落ニケリ山中ハ
今ヤノト待ケレトモ松若ハ不來城ノ事ハ一
向不知案内ナレハ一人小清水ヘソ歸ケル此由
正頼聞付テ扱ハ此者同道シテ松若ヲモ落シタ
リ近比ノ曲事ナリトテヤカテ生害ヲセラレケ
ル・不便ナル次第也去間松若ハ上ノ山ノ森ノ
木陰ニ暫忍テ居タリケルカ麓ノムシヨニ烟ノ

立ケルヲ見テサテハ早親ハ生害サセラレテ是
ハ一定彼ノ葬火ノ烟ナリト思ヒケレハ念佛暫
ク申テ涙ヲ流シツ、ツク／＼ト案スルニイ
ツクマテカ落行ヘキ父ノ供シテ生涯ヲ果シ死
出ノ山三途ノ川ヲモ同シクコサンコン侍ノ本
意可成ケレト思返シ今西將監ト云伯母聲ノ
宿所ヘ走入親ニテ候者ハ殿ヨリ早生害サセラ
レ候我ハ何クマテモ一先ヲチハヤト存シ鷹尾
上武庫山ノ奥マテ分人シカトモ父カ生害ヲ
見捨テ何ク迄カ可遁ト思返テ參タリ殿ヘモ此
由被申入如何様ニモ生害サセラレ候ヘシトソ
申ケル是ヲ聞ケル老少男女アワレケナケナル
人カナトテ皆袖ヲヌラシテケリ伯母聲ノ事ナ
レハ不便ニ思フ事カキリナシイカ様ニモシテ
スカシ落ハヤト思ヘトモ皆人早知タル事ナ
レハ隠レ有間敷然ハ我生害ニ及ヘケレハ力不
及繩ヲカケ正頼ニソ申ケル松若申事ニハ發起

シテ參ヨリ何クヘカ取ノクヘキ繩ヲハツシテ
刀ヲ賜リ候ヘ尋常ニ腹ヲ可仕候ト申ケレハソ
レモコトワリナレ共一注進之間也其後ハ兎モ
角モ心ニ可任ト云フサテ正頼ハ此由ヲ聞不便
サカキリナシ思ワレケレハ今一度是ヘツレテ
可來トアル則ナワツケナカラ本城ヘソ上リケ
ル近比ケナケノ振舞神妙也此者ノ事ハ差當テ
トカモナシ助ハヤト思ヒテ内談アリケル處ニ
或人ノ異見ニ弱年・^{ナカ}カラ是程ノ所存アルナレ
ハ助ケヲカレテハ後悔アラント申間實ニ毒ノ
虫ヲハ腦ヲワリテスイヲヌケトテ又生害ニソ
定リケルコソムサンナレサラハ西宮ノ六湛寺
トテ會下寺ノ有ケルニ遣シテ生害サスヘシト
テツレテ行ケルヲ見ル人皆涙ヲ流シテソ惜ミ
アヘル無程六湛寺ニ行着テ松若申ケルハ繩ヲ
免シ暫イトマヲ給リ候ヘ一人ノ母ノ許ヘ一筆
遣シ度由申間則硯料紙ヲアタヘケレハ心靜ニ

文ヲソ書タリケル

サテモ、親ニテ候人不忠ノ由風聞有ニヨ
ツテ今朝生害サセラレ候ワレ、モ定メテ
ウタレマイラセント思ヒテ一マツ落候ヘト
モ何クニ候トモ何カシコンヲヤノ生害ノ砌
ヲ見捨テ逃タルモノヨト人ニ指ヲサ、レテ
ハ生カヒモナク何ノ面目アリテカ浮世ニモ
ナカラヘ候ヘキ所詮親ノ供ヲ致シ同生害ヲ
果スヘシトテ思ヒ返テ參候上ハ相カマヘテ
聊モ御歎キハ有間布候サリナカラ親ニテ候
者ノ名殘ト申我々モ唯今生害仕候ヘハサン
不便ニ思召候ハスラン是ノミ心ニカ、リテ
ヨミチノ障トモ可成候唯何ヨリモ念佛ヲヨ
クヨク御申候テ御吊ヒニ可預候

先立テ消行露ノ命ヨリ殘ルハ、ソノ歎ヲ
ソ思フ

又奥ノ御庵トテ正頼ノ姉ノ比丘尼ノアリケル

カ天性慈悲ノ深キ人ニテ上下ノ人ニ目カケラ
レケリ殊ニ此松若幼少ヨリ不便ニ思ワレ別テ
等閑モ無リケレハ是ヘモ一筆書テ參セケリ言
葉ハ大略カハラサリケレハ記ニ及ハス但奥ニ
我等カ老母一人殘留リテサン歎キ候ハスラン
是ノミ不便ニ存心ニ掛リ我等ノ目ヲ被下候ト
思メシテ自然ノ時ハ御音信ニモ預リ候ハ、草
ノカケニテモ忝思ヒ參ラスヘク候トテ
は、木々の露の恵を頼哉身はあらしの、草
のかけにも

カヤウニ二通ノ文書置テ慥ニ傳ヘテ給ルヘシ
トテサシ出ケリ此砌ニテハ萬ホウキヤクスヘ
キ事ナルニカヤウニ心靜ニ文ヲ書歌ナントヲ
ヨミケルハ世ニスクレテケナケ成者ニテソア
リケルアワレ助置テ自然ノ用ニ立ハヤトテ惜
マス人ハ無リケリ六満寺衆僧達モアワレ浮世
哉命ニ替ル事ナラハ我々モ、替コンセメト

テ皆衣ノ袖ヲソシホリケルラレカ扱六湛寺ノ庭ニ敷

皮ヲシキケレハムスト居直リカ辭世ニ云

父ニ我ツカン願モ三瀬川トモニ越ヘキ道ノ
ウレシサ

トテ頸ヲノヘテソ居タリケル切テハ澁谷ノ彦

二郎ト云者也太刀引ソハメテ後ヘ寄ケルカイ

カニモ太刀ノアテ所不覺トテ涙ヲ流シテアキ

レテソ居タリケル松若申ケルハ何トテヲクレ

給ヘル人スカ・ソヤサノミニ物ナ思ワセラレソトク

トクトコン申ケレサテアルヘキニアラサレハ

袖ヲオサヘツ、邪見ノ劍ヲ振トソ見ヘシ花ノ

ヤウナル松若カ頸ハ前ニソヲチタリケル見物

ノ貴賤一度ニワツトサケヒケリアワレト云モ

ヲロカ也サテ澁谷彦二郎是ヲ幸ヒノ善知識菩

提ノ縁ト思ヒ葬送以後ヤカテモトイヒ切靈佛

靈社ニ參詣シテ松若カ跡ヲソ弔ヒケルアワレ

ニヤサシキ事トソ聞ヘシサテ彼老母ノ方ヘノ

文ヲ遣ハシケレハ母ハ此文ヲ見テ天ニ仰キ地

ニ伏テリウタイコカレテナケキケルハ實ニ理

トソ聞ヘシ其日ヤカテ髪ヲソリヲトシヲコナ

イスマシテ兩人ノ跡ヲソ弔ヒケル今一ノ文ヲ

モ御庵ヘツタヘ申ケレハ御覽シテ中々カ・ナケカル

ルヲ申ハカリハ無リケリ此事カネテ夢程モシ

リタリセハ涯分コヒウケテ出家ニモナシ置ヘ

キモノヲトシウシヤウアリケレトモ今ハカイ

コン無リケレ彼最後ノ言ノカ・葉モ哀ナリトテ老

母ノ行ヒテ居タリケル處ヘ常々ハ音信アワレ

ミヲタレケレハ松若ハ草ノ陰ニテモサソウケ

喜フラムト有カタクソ覺ヘケルトナン

右以前田家所藏古寫本校合了本書ハ平假

名ニテ書ス

明治十二年一月廿二日 塙 忠詔

瓦林政頼記終

續群書類從卷第五百八十二

合戰部十二

道家祖看記

抑禁中御廢壞無正休之間。立入左京進萬里小

宗繼法名隆佐

路大納言惟房へ申上次第。禁中之御領所山科

岩倉ナトモ。近年ハシタカヒ不申。御當番ノ御

公家衆モ。京都ノ御住居成難故ニ。國々へ御下

三好修理大夫長慶薩摩守源元長男松

向被成候アマリ。三好松永ナト。ホシイマ、ノ

永彈正少弼久秀有様也。コ、ニ尾張國ニテ

織田彈正忠信定男

申仁。父ニ少年ニテオクレ候へ共。少モ跡ヲ

治部大輔

ハタラカサス。其上駿河國今川義元。三河遠江

駿河伊豆四ヶ國之軍兵ヲ引率シ。三州ト尾州

ノ間ニ。信長方ノ城大タカ。クツカケニヶ所ノ

高沓懸

取出ヲ一刻ニセメホシ。永祿三年五月十八日

桶狭間

ノ晚。ヲケハサマト申所ニ。今川義元陣取也

尾州清須城ニテ。林平手ヲハシメ。清須日本一

林佐渡守通勝平手監物時秀

ノ名城ナレハ。御立籠可然由申上候。信長キコ

シメサレ。ムカシヨリ籠城シテ。ウンノヒラ

クコトナシ。明日ハ未明ニナルミ面へ打出ト

テ。義元首ヲハ子候力。我等打死セント被申候

可成勝家

日比心カケ候侍。森三左衛門柴田權六ナト申

者。心ヨキ仰事。我等ハ御馬ノ先ニ立。打死仕

候ハント申。其外イツレモ可然ヨシ申上座敷

ヲタツ。十八日ノ夜半過ニ。信長公ヒロマヘ出サセタマヒ。サイト申女房ニ。時ハ何時ソトタツネタモフ。夜中過ト申。口ク、シメサセタマヒ。馬ニクラヲカセヨ。ユツケイタセト被仰。御セン過。コンフカチクリモチテ參候。卽キコシメシ。床机セウキニコシラカケ。コツ、ミトリヨセ。ヒカシムキニナリタマイ。人間五十年。下テンノウチヲクラフレハ。ユメマホロシノアヒタナリ。一度セウヲウケ。メツセヌモノアルヘキカト。三度マハセタマヒテ。城ノウチヲハ。御小姓七八キニテ出タマフ。大手ノ口ニテ。森三左衛門柴田權六。其外三百計ニテヒカヘタリ。兩人ハヤシハヤシトノタマヒテ。アツ田源大夫殿ノ宮ノ前ニテ。千七八百ニナリ政次タマフ。ホシサキ面ニヒカヘタル佐々下野守三百アマリニテ。六萬餘キノヲサヘヲ仕候者。信長ニ出ムカヒ。ソレカシ一人ナリ共。今川

トクミ打死セントタクミ申ニ。サテモメウナル御出也。ソレカシ命ヲステ候ハ。今日ノ御合戦ニ御カチ候事必定ナリ。今日天下ヲケメノカツセンコレ也。天下ヲヲサメタマヒ候時。弟内藏成政佐我等セカレヲ。御ミステサセタマハテトテ。我々ハ東ムキニ。今川ハタ本ヘミタレ入ヘシ。殿ハワキヤリニ御ムカヒ。テツホウユミモウチステ。タ、ムタヒニ。ウチテカ、ラセタマヒ候ヘトテ。ヲシムカフ。義元ユタンシテ有所ヘ。三百五十計ウチコシタリ。アンノコトク。本チンニケンクワ出來タリトテ。六萬餘キノ者トモサハキタツ所ヘ。信長二千アマリニテ。一人モノカサシトテ。ラメキサケンテ大音ヲアケテ。キツテカ、リタマフ。ヒトサ、ヘモサ、ヘスシテ。トツトハイクン。義元首ヲ毛利新助秀高トル。折節西ヨリ大風吹。アラレフリ。大タガ。クツカケノ大木。ンキコロヒ中也。五

月十九日巳ノ刻。首數五千計打トリ。大利ヲエ

サセ給フ。信長廿七歳也。家康徳川殿ハ廿四歳。今

川殿ノ先カケ。大タカノ城ニ。信長殿ノ人數三

百アマリ立籠。信元家康セメヲトシ。大タカニマシ

マシ。伯父水野宗兵衛トテ。信長カタノ兵義

元打死。ハヤノカレ候テ。岡崎ノ城ニ三日カ、

ヘ候ヘ。我等ノアツカイ。信長ト一味サセ可申

ト使有。心エ候トテ。大手ノロマテ被出候。イ

カニヲチナリ共。敵テキカタノ使ニヲトロキ。ノ

キ候ハン事トテ。本丸ヘ馬ヲ入タマフ所ヘ。

敗軍ハイクンセヒナキ次第。岡崎チカキヤハキノ

川ハタニ。日暮マテチン取ヒカヘタマヘトモ。

ト、マルモノ一人モナシ。其夜半過ニ。永ハシ

キリヲトシ。岡崎ヘ入タマフ。信長アマリナカ

ヲヒモシタマハテ。其日七ツ時ニ。清須ノ城ヘ

カヘラセタマフ也。右ニヨリ内々申上通。信長

ヘ御奉書リンシヲ被遣。綸旨天下被仰付可然通。萬

里小路殿ヘ立入申上。惟房サテモ大事申出シ

モノ哉。三好松永ナト聞候ハ、君ノ御タメ。

ソレカシナンチモウキメニアワン事按ノウチ

也。立入承。御意ノコトクニ。兩人ノ者少ノ事

ヲサヘ大事ニサハキ候。然共イカニモイカニ

モ。ランミツナサレ。上上臈秀房公女正親町院妃ラウサマ。御里ヘ御出

之刻。ソウモン有。ケニモト仰事候ハ、御奉

書ヲハ上ラウアソハシ。綸旨ヲハ御手前アソ

ハシ。尾州ヘノ案内者ニハ。山中之イソカヒ

可仕通。切々我等ニ申也。我等一所ノ者ナレ

ハ。身ノ大事ヲ仕出シ候ハン。惟房シハシ物モ

申ナク。大事々々ト計也。オクヨリ御用有。シ

ハシ御タチナシ。又上ラウノ御參。幸ノ事。コ

レニマチ候ヘトテ。御タチ有。立入心ノウチニ

ハ。採神佛ノ御メクミト存。前後ノ事ヲシアン

也。サテキトクニ御イテサレハ。上様ヨリタ談ン

合

告

カウノ事。仰アリテ參也。上様御ユメノツケ
有。尾州アツ田ヘハ日カスナニ程ニ參宮仕候
ハン。君ヨリハ近年レイナシ。上ラウタメト
テ。インキキツカヒナキ者下シ候ヘト御意也。
幸イ面ニ立人^居中^也也。タツ子可申トテ。右之通
御物語有。扨天ノアタフル事ト存。四日ニハ可
參山中上。右之ヲモムキノフモン可然通也。イ
ソカイヲモヨヒヨセタンカフシカルベシ上ラ
ウモ此通インキ人ヲ遣上リ候ヘト御申也。然
處ニインソカイ程ナク參。萬里小路殿如此通。上
ラウキコシメシ。サテハ二人ノ口ヨクカタメ
サセタマヒテ。上様ヘ申上。ソノ上ノ事トテ。
輔房^{上時頭左中辨}弁殿ノヘヤニテ。上ラウ御タイメン。右之次
第ヒトツカキニ仕。二人ノ宿ヘ歸。近年シアン
仕タル事ナレハ。早々書タテ惟房ヘ進上。ウケ
取ナサレ。大事々々計ニテ。オクヘ御入候也。

上ラウ一ツ書御ランシ。又フシンナル所ヲ。直
ニ御尋被成候テ。御參内之事ハ。ワキヘナリ。
コノ事大事ニ思召候。然處ニクレカタニ。上ラ
ウメシ有。インキ參内。アツ田路次御タツ子。
アリノマ、ニ御申上。扨ヨキツイテトヲホシ
メシ。右之次第ソウモン有處ニ。二人ノ者ノ
存次第。一ツ書御ランシ。御キケンヨク。トカ
クニ内司所ニテ。御クシ御取アツテ。チヨクコ
ンアルヘキヨシ被仰。明日ノアカツキ。御ハラ
イニテ。二ツ一ツアカリ候ヲアケ。御前ヘモチ
テ被參候ヤウニ仰也。夜半過ニ御里ヘ御申シ
コシ。二人ノ者モ明日ハ早朝ニコレヘ參候ヤ
ウニ。惟房御申也。二人門ヘ出申時。ヨシ返シ
インガイ尾州ニテノチインノ者ノ名字ヲ。今
夜ニテモ明日ニテモ。御尋之刻。分明ニ候テ
ハ如何。書立ヲキ候ヘ。道家^{トウカ}尾張守トテ。光明
峰寺殿御名乗ヲ。名字ニ成被下。ミノヲハリ三

川三箇國ノ御調物。カハ御自分ノ御知行ヲモ
ヲサメ上申者ノ子孫ニテ。代々尾張守ト申候
へ共。イマハ尾州守ト名乗可申フセイモナシ。
近年織田備後守ニシタカヒ。其後信長ヲサナ
キ時ヨリモ奉公仕。國々ノ目付ヲイタシ候テ。
多分冬ヘナリ候テハ。國ニキ申候。ナニタル
事ヲモ心ヤスク申ト、ノヘ申者也。道家留主
ニテ。女房信長ニ申度申候。信長モツネニヤス
イト計被申候ト申上候。三人ノ人々ハソノ夜
一日モマトロミ候ハテ。アクルマチカケ候。ア
ンノコトク。早朝ニ惟房ヲメシアケフタミセ
被成候。此上ハヨキニ分別シテ。イカニモラン
ミツ專一也。チンハ内司所ノハカラヒ。ナンチ
モ心ツヨクヲモフヘシ。二人ノ者シメシ合。イ
ンシンノ物ヲモ用意仕候へ。
一退轉之公家相續之事
一御領所之事

一御修理之事 如此アマリトキ事ハ無用。御
タキ物御調合之事也。二人ノ者申分ニハ。御ト
ウフク御タキ物可然由申上也。今月廿七八日
比ニハ。尾州清須ヘ參候ヤウニト申合。イツカ
イモ山中ヘ歸。立入ヲマチ可申由也。萬事相
調。立入十月廿四日ニ京都ヲ立。山中ヘ參候。
同廿五日二人罷立。同廿八日ニ。清須道家處
ヘ。礪貝新右衛門參候。折節馬ニユアラヒサセ
キ申所ヘ參。サテ大儀ニテ御下リ。門ニツレト
ヲホシキ人コナタヘ申也。サテ内ヘ入引合。右
之次第申也。マツフルマヒナト申付。信長今朝
未明ニ鷹野ニ被出候。歸ニハイツモコ、ニテ
休。是其時刻具ニ申キカセ。取次禮ノ事。信長
次第ニ可仕トテ。其様子具ニタツネ。マツユヘ
御入トテ。コシラヘ候ヘト申。御奉書リンシ。
道家ツ、ミナカライタ、キ。手ヲウツテコレ
ハサテモ。信長カキリナクマンソクイタシ候

ハントテ。ヤカテ女房ニカタル。御歸ノ事。程有間敷候。カミユイコシラヘ御マチ候ヘト申。悦候事カキリナシ。アンノコトク七ツ時ノ事ナルニ。信長歸リ。馬ヲエンマテノリカケ。イツモノコトクフル舞出シ。ユヘイラントシタマヒシ時ニ。右ノ次第申上。即ユヘ御入ナカラクワシクタツネタマフ。使ハ山中ノイソカイ案内者ニテ。御藏ノ立入左京進ト申者參候由申上。大内様ヨリ。日本國ヲ殿へ被參候ヨシ。御リンシツキ申。勅使參候。御キケン大カタナラス。ヤスイヲメシ。アタラシキ小袖ユカタマテ。用意アルカト御タツネ。ナニモンロイ申由。使ニヤカテ對面ト御申候。道家申上候ハ。取次ハタレト申。シノヒノ事ナレハ。タ、コ、ニテ對面ナンチ仕候ヘ。重而申上様。リンシ奉書ノ取アツカイ如何ト申。サラハ村井ヲヨヒ候ヘ。ヒルヨリコレニアリト申。御リンシ

奉書ヨミ申事村井。サテハ又取次ハ道家仕候

菅谷長頼

ヘ九右衛門久太郎計ヲキ候ヘ。キウシハナンチ子供二人仕候ヘ。六人ノ者共ナカハカマ。我我ノ長ハカマ。チイサ刀是ニ候ヤ。村井道家日比心カケシシツケカタ。今日御用ニタツ事。家ノ面目。イニシヘニカヘルカト心中ニ存。御小性二人四人御供申。ヲクヘイラセタマヒ。御コシラヘアツテ。サテイソカイヲメシ。勅使ノアヒシライハ。タカヒニムツカシキ事。我ニハクルシカラス候ヘ共。上ノ御タメ。又ハ二人ノタメ。イカニモイカニモランミツニテ。人ノシラサルヤウニ申付候ハントテ。御悅無申刻許候。御奉書御リンシ三ヶ條ノ書立ヲハ。立入持參。此外進物披露ハ。道家可仕通被申付也。座敷ノ次第。ヲク六疊敷。中間八條。次十二條敷。信長ハ中八疊敷ニ御入。右之入タル箱。立入持參。直ニ信長請取被成。イタ、キ。トコニ御ヲ

キ候。サテヲクノ六條敷ニ。御ナヲリ候。上様ヨリノ進物。道家披露仕。兩人ノ進物進上候テ。立入ヲクヘセウシ被成候ヘ共。タ、コレニト申。サテ上様ヨリ御トウフクメシ。村井御リンシ奉書ヨシ申三ヶ條ノ書立。信長請取。先日付ノ下ニ判クワセ。コ、ヒテ。我等イマタ尾州サヘ半國ノアルシタルニ。天下被仰付候。此御力ヲ以テ。當國ヲハ年内ニシタカヘ。來年ハ美濃國令退治候ハン事。此二通ノ御力也トテ。三ヶ條ヲ立入ニ渡シタマフ。即イタ、キ候。サカツキノシキタヒ。度々也。信長マイリトテ。マツ立入ニサシタマフ。立入被下。信長キコシメシ。礮貝被下。村井ニサス。又礮貝被下。立入ノミ。道家ヲサメ。其時信長相伴可被成候ヘ共。心安ハカマカタキヌヲ取タシ被下候ヘ。我等レウリシテ。フルマハントテ。五三日モユルリト逗留仕候ヘ。鴈鶴ヲアマタ取。京都ヘノ兩

人ミヤケニサセ候ハントテ。御タチ也。ハカマカタキヌ御トリ候テ。ヤスイヲメシ。コレコレヲカミ候ヘ。ナンチカタヨリ人ヲ遣^{森可成}三左衛門柴田勝家^{丹羽秀長}木下秀吉^{左近一益}權六。五郎左衛門。藤吉郎。瀧川五人イソキヨヒヨセ候ヘ。此事シラセ候ハント御申。トシヨリトモヲハ如何ト申ランミツノ事ナレハ。此者計ト被仰候。サテ御レウリイテキ申候。鴈ノ汁。鶴ノサシミ。村井相伴ニテ。以上座敷三人。信長二三度出サセタマヒテ。ヨク／＼マイリ候ヘ。酒ノ儀ハ心ノマ、ニイタシ。レウリノ様子出來タルカト御尋。兩人被申様ニハ。カヤウノアタラシキ鴈鶴。一世ノハシメト申上。御キケン大カタナラス。酒二三ヘンニテ取。申刻右五人ノ者參候。兩通拜見。サテ五人ノ者。信長自心メシツレ。立入ニ御引合候。イツレモ大慶不過之面目也。上様ヨリモ。アツ田ヘノ御タイ參事申上。二三日過。霜月朔日比。吉日ヲエウ

ヒ。可然案内者ハ村井道家仕候へ。右五人ニモ御メシ被下。座敷九人也。暮カタニ舟ニテ御城へ御歸。ユルリト休足。明日ハ未明ニ。タカノニ出候。明日ノ晩ハコレニテ御レウリ可被成由也。明日朝メシ過テ。城ノマハリヲアミヲウタセ。舟ニテ兩人フルマヒ候へ。右五人ノ小性ノ外ハ。一人モ兩人ニアハセ候ハヌヤウニイタシ候へト御タチ也。明日夜過ニ。門ヲ自身タ、カセタマヒテ。ハヤタカ野ニ出候トテ御出也。村井道家二人逗留ノ間ハ。ヒマヲトラスル也。ユルリトヤスミ候へト被仰候。同廿九日。夜ノ明ヲマチカネ。ウラヨリ舟ニテ參。而テノ門ニ人ヲ、キ。一人モ入マシキト被申付ケ候。テイ主ヲキ出。各ニハナニトシテ。シノヒノ所へ御出候ヤ。カヤウニネホレトテハイカ、ハヤレウリイソキイタセト被申候。マツマツユヲタカセ候へ。トモニヒトツニ入カタ

ラント申候。ユノ中ニテレウリメツラシキト申。カ、ル處ニ鴈鶴トリヨセ。各ニリヤウリ有。メシ過。舟二三ソウアツメ。五人ノ衆アミヲウツ。子供二人。以上六人シテ舟ヲサス。シツケヌセントウ。舟マハリテアミウタレ不申候。道家申ヤウニ。瀧川藤吉郎舟サシ候へ。ソレカシアミウタント申候。藤吉郎申様ニハ。タ、イツモノウチ候者ニ申付ケ。舟アソヒト申。各々尤トテ舟アソヒ。瀧川小ツ、ミ久太郎大ツ、ミ。村井笛。子共太コ。京衆ウタヒ候へトテ。舟アソヒ也。七ツ時ニ信長御歸候テ。二人ノ者御タツネ也。右之通申上。小舟ニ取ノリ。二三人御ツレ候テ。頭巾ツキンフカ〜トメシ。舟アソヒ所へ御出候。ナニモノニテ候ヤシノヒアソヒノ所へ。クセモノ、ト申ス。シノヒノ舟アソヒ。ハヤシメツラカナル物トテ。御キケンナノメナラス。サテサカナハト御尋。ス

コシモトリ不申候ト。アリノマヽニ申。イヨイ
ヨ御^(ワカ)ハラヒニテ。小ツヽミ御ウチ候テ。シノヒ
ノハヤシ有。ヤカテ舟ヨリアカラセタマヒテ。
御レウリ也。御フル舞過候テ。朔日比。アツ田
參宮ト申候ヘ共。テンキヨク候ハヽ。明日可
然ト。吉日ハリンシイタヽキ日。吉日也。參宮
ノ様子被仰付候。五人ノ人々ニハ。霜月朔日ニ
倉ヘ打入。兩人ノ者ニミセ候ハン内ニ。五人先
カケニテ。其心得可然通被仰付候。同晦日參宮
心シツカニイタサレ候ヘ。明日モ又未明ニタ
カノ。右之約束ノミヤケ用意仕候ハント被仰。
御歸有。晦日天氣能。參詣被歸候。夜ニ入御對
面。カヽル處。雨フリ候。岩倉ヘノ御テツカヒ
モノヒ。二人イトマコヒ。カンツル。ミスキニ
シテ。アマタ被下其外金子ナト被下。萬里小路
殿ヘ御返事不申候。態
禁中樣ヘモコトハニテ申渡シ候。一兩年中ニ

出京仕。急度御奉公可申通。御心得奉憑計無之
候。朔日逗留。霜月二日未明。清須罷立。伊勢通
歸京。關役所道家サハキヲクリ申也。霜月^{十二月}朔日
カルカルト岩倉ヘアシカルヲカケラレ。イツ
モノコトク。岩倉ヨリモアシカルヲイタシ申。
先手五人衆アシカル。ヨハヽトカケ申ヲミ
テ。カツニノツレ。岩倉ヨリ城ヲウチステ被
出。信長御ランシ。ワキ道ヨリ岩倉ヘムタイニ
ノリコミ被申候。サキテノ五人衆。ソレヲトラ
シト。先手ヲ、ツタテ。信長ト一所ニナル。岩
倉殿ハタカ城成。御ワヒ事被申。其日夜ニ入候
^{左衛門尉信清居城}於久地^羽黑樂^{織田十郎}田
テ。犬山ヘノカレ候。大クチハクロカクテン御
ワヒコトカウサン中。前々コトクタテヲカレ。
信長二日三日岩倉ノ城ニ御座候テ。コトヽ
ク破却ノ御奉行被仰。犬山一城取コメヲカレ
候テ。同四日ニ清須ヘ御歸御マンソク也。其
年ハ餘日無御座故。清須ニテ御年ヲ取。正月末

小真本

普請

ヨリコマキ 山御フシン被仰。春中ニ小マキヘ

信輝

御ウツリ。犬山アケ進上申間。池田勝三郎ニ被

宇留摩

仰。永祿六年三月上旬。ミノ、國ノ内ウルマノ

北ニ。サルハシト申取出ヘ被懸トテ。其近所ニ

堂洞

トウホラトテ。御敵城ヘ御手遣被成。一刻ニセ

メヲトシ。三月半ニ。森三左衛門。東美濃ヘ手

遣。金山ト申城ノツトリ。三左衛門居城ニカマ

ヘ。其外城々アマタ御ワヒ事申ニヨリ。前々ノ

美濃

コトクテヲカレ。東ミノヲサマリ申候。信長

加治

御ミカタカチ田ト申所ヘ。井ノ口ヨリ手遣ノ

齋藤右兵衛尉龍興居城

由キコシメシ。森三左衛門先カセイヲ被入。小

マキヘ御馬ヲ被入候。其年ハ。北イセヒカシ

ミノ、法度被仰付。同七年ノ春ヨリ。ミノ、國

ヘ御手遣。程ナクミノ、國御手ニ入。同其年ニ

井ノ口ノツトリ。御居城被成。大カタミノ、國

手ニ入。如先々ワヒ事申者。タテヲカレ候也。

其年ハ井ノ口ニテ御越年。永祿八年五月十九

左京大夫義次右衛門佐久通

日。光源院義輝公鹿苑院殿三好松永ヲシヨセ。

御腹メサセ候。信長キコシメシ。御ナケキカ

覺慶還俗義昭

キリナシ。二男御舍弟一乘院殿。三好松永カタ

藤孝

宥暫御在寺。細川兵部大輔。内々御ノキ可然

通。度々申上候。或時南都潛ニ出御有。和田伊

左京大夫義賢法名

賀守ヲ御タノミ。佐々木承禎ヲ御憑候。其後越

左衛門尉義景

前ヘ被成御下向。朝倉ヲ御憑被成候ヘ共。御歸

洛之事一言モ不申上候條。無御料簡。此上ハ織

田上總介信長ヲ偏ニ憑入度之趣。被仰出候。既

隔國信長雖爲庭弱之士。天下ノ被致忠功。輕一

命被成御請。永祿十一年七月廿五日。和田伊豆

守村井民部不破河内守島田所之助爲御迎被參

候。濃州西莊立正寺御成。御馳走不斜。此上ハ

片時モ御入洛可有御急ト思召候テ。八月廿七

日。江州佐和山ヘ信長被成御出。上意御使ニ。

使者ヲ相添。承禎御憑。七ケ日御逗留候テ。御本意一途之上。天下ノ所司代江州廿四相添可被遣通被申候へ共無同心。此上ハ不及是非。江州へ可被及御行御退意頻ニテ。同九月七日ニ。御暇ヲ被申。江州一篇ニ申付。御迎進上可申ヨシ被仰上。尾濃勢三四ヶ國ノ軍兵ヲ引率シ。九月七日打立。平尾御陣取。八日ニ江州之内高宮御着陣。同十二日觀音寺并箕作山へ懸上サセラレ箕作ノ城。申刻ヨリ夜ニ入攻落。其夜ハ信長ミツクリ山ニ御陣被居。翌日佐々木カ館可承禎男右衛門尉義弼被攻上。御存分之處ニ。佐々木父子二人致廢北。九月十三日ニ。觀音寺山へ御上。御契約之爲御迎。不破河内守。十四日ニ立正寺被差遣。廿一日被出御馬。廿二日桑實寺へ御成。廿四日信長守山マテ御働。廿六日被成御渡海。三井寺極樂院ニ被懸御陣。廿七日一乘院殿御渡海。同光常院ニ御成。廿八日信長粟田口マテ御越。

カ、ル處ニ立入左京進。萬里小路殿爲御勅使御供申也。其時信長粟田口ニ陣ヲヒカへ。御勅使ニ對面有。自禁中御折ヲ被下。信長イタ、キ近年ハサソ御マチカネ候ハン。此上ハイカヤウニモヲシ出シ候テ。禁中之事御馳走可申也。小性衆御馬廻衆。信長手ツカラ。大内様ヨリ被下イタ、キ。一世之面目トテ悅タマウ。ハヤイソキカヘラセタマヒ候へ。京中へ一人モ武士之者入不申。五畿内二三日中ニシタカへ。參内之望有之。其上御憑之上ハ。一乘院殿ヲ公方ニシタテ可申心中通。ソウモン一篇ニ。萬里小路殿ヲ奉憑通。被仰上候テ可被下者也。スクニ信長東福寺へ被移御陣。敵城ヨリアシカルヲ出シ。輕卒ヲツハライ。津國面大カタシタカヒ。十月二日ニ。池田筑後守楯籠當城。大軍ニテ推□外垣御放火。池田致降參。御人數被打納。五畿内津國被任御下知候。十四日芥川ヨリ

公方様御歸洛。六條本國寺被成御座。天下一同ニ開喜悅眉訖。信長モ被成御安堵ノ思。當年之勢衆被召列。スクニ清水ヘ御出。諸勢洛中ヘ入不被中候。十月廿二日。公方様御參内之儀。以萬里小路殿被仰上候テ。マコトニ職掌之御出立。儀式相調。奉備征夷將軍。城郭御安座。信長日域無雙之御名譽。末代之御面目。不可勝計候。今度粉骨之輩。見物可仕旨上意ニテ。觀世大夫ニ御能被仰付。御能クミ。弓八幡。御書立十三番。信長キカセラレ。未津國御望ミ有之。弓矢納リタル處御存分ニ無御座。五番ニツ、メラレ。ワキ能高砂。觀世左近大夫金春大輔觀世小二郎。大ツ、ミ大藏二助。小ツ、ミ觀世彦右衛門。笛チヨウメヒ。太鼓觀世又三郎。二番八島。大ツ、ミ深谷長助。小ツ、ミ幸五郎二郎。三番ニ定家。四番ニ道成寺。此時信長ニ御ツ、ミ所望ニ候。雖然辭退被申候。今春大輔。

大ツ、ミ大藏二助。小ツ、ミ觀世彦右衛門。笛伊藤宗十郎。五番ニ吳羽。御能過候テ。一坐ノ者田樂カツラ等マテ。信長ヨリ御引手物被下。其後往還旅人御憐愍之儀ヲ被思召。御分國中ニ數多在之諸關諸役上サセラレ。都鄙之貴賤一同ニ忝ト拜シ申。滿足候訖。十月廿四日。御歸國之御暇被仰上。同廿五日ニ御歸國也。永祿十二禁中之事。御廢壞無正體之間。是又可被成御修理旨。日乘上人村井民部丞。爲御奉行被仰付候。元龜四年ノ春ノ比ヨリ。公方様内々御謀叛思召立之由無御隱候。子細ハ非萬之御勸共。無御勿體之旨。去年被捧十七ヶ條。御異見有。然處ニ遠州表ハ武田信玄サシ向。北國表ハ朝倉被向候。雖然信長年來之御忠節空ク候ハ如何。日乘上人島田所助村井長門守以三使。御理候テ。御和談也。又公議御敵之色ヲ御立。不及是非。三月廿五日。信長御馬被出。御搦ヲ

大膳大夫晴信入道

貞勝

押難拘思召。又御和談有。四月六日。信長爲御名代。津田三郎五郎立御禮也。七月三日。公方樣御敵之色ヲ被立。眞木島日本一ノ節所。被成御楯籠候。七月七日御入洛候テ。二條妙覺寺御陣。猛勢ヲ以而御搆取マカセラレ候。公家衆大軍ニ驚目。御佗言申。人質進上申候。七月十六日。眞木島ヘ信長御馬ヲ寄ラレ候。五ヶ庄之上。ヤナキ山ニ被居御陣。宇治川乗渡シ。眞木島可攻破之旨被仰出儀ニ。名モ高キ宇治川。漲下逆卷流。大河表渺々トシテ冷シク。輒チ打越事大事ト。各々被存候ヘ共。可有御用捨御氣色無之。於延引者。信長可被成御先陣之旨。難遁題目也。然而兩手ヲ分テ。任先例。川上平等院前。又下ハ五ヶ庄之前面。向ニ被越候。七月十八日巳刻。兩口一度ニ其手々ヲ爭。中島ヘ西ヘ向テ。噓ト被打渡候。誠事モ无便大川。以御威光無難相越。暫人馬之息ヲツカセ。其後無程セ

メヲトシ。公方樣サセル御不足無御座處ニ。無程御恩忘ラレニテ。御腹メサセ候ハンスレ共。御命ヲ助。先々ニテ人ノ褒貶ニ乘申サル由也。七月廿一日。京都ニ至テ。被納御馬。天下所司代村井長門守被仰付。致在洛。諸色被申付候也。

掟條々上下京五畿内之事

一上下京ヘ非分ノ課役不可申懸。但差當子細有テ於申付者。我々ニ相尋隨其可申出事

一今度上京放火付而。町下可迷惑候間。地子錢課役等。可指置候。但下京同前之事

一公事篇之儀。順路憲法タルヘシ。帑々最負偏頗ヲ不存。但上下京二日ハ。立入所ニテ可裁許。其後ハ長門守所ニテ可申付事

八月四日濃州岐阜ニ至テ御歸陣珍重々々

此一卷ハ生國尾張國春日郡安井之住人道家

尾張守末子及八旬頽齡已ニ縮而拭澁眼雖老
眼之通路心之浮所染禿筆訖曾非私作私語直
ニ不除有事不添無事父申置シヲ如此一笑一
笑

寛永廿天十二月十六日

祖看判

立入川内守殿御所望付而如此也以上

直頼
宗繼孫康善男河内守

道家祖看記終

立入左京亮入道隆佐記

宗繼

私加之

荒木村重叛逆并一類刑罰事

惟任光秀丹波國退治事

信長公馬揃事

武田誅伐事

朝鮮國征伐事

天正六年の秋の比より。津國有岡面に。雜説
申書。しきりに信長へ御敵に罷成由風聞候。さ
様には有間敷事哉と。れきく被差下。調共依
有之。荒木信濃守も雜説可申方由申。茨木城ま
て罷上。則安土へ罷越候處。中川瀬兵衛尉茨木
城守候處。是非共安つちへ御越不及覺悟候。安
土にて腹を可仕より。津國表へ引請。及合戰
候共。手にためず切崩可申處を安土にていぬ
死さたのかざりと申留。既有岡に荒木立歸。お
もはず不計。御敵を仕候。其刻國中之年寄共よ

せ及談合候處。中川瀬兵衛申處尤と各同心申。中に高つきの城も高山右近。親は高山飛驒守言語道斷。荒木攝津守覺悟相違。曲事之子細也。信長の御芳志忝處。只今相忘御敵申さるゝ段。沙汰限と一人申破といへとも。悉以同心いたし。高山申處一圓に各同心申さず候により。不及是非摠次にどうし申候。九月の末より十月中。御扱共にて。福すみ平左衛門佐久間右衛門尉堀久太郎矢部善七郎。此衆中。上下及度々候へ共。其しるしなく。扱相破候。然者十一月四日。信長二條之御殿御座候て。村井長門守を以。爲。禁裏様。大坂本願寺へ以。勅定。和談之儀可被仰出候由候處。俄に庭田大納言。勸修寺中納言爲。勅使被差下。則御倉立入左京進入道被差副被成御下向候て。平野に被成御逗留。使者大坂へ被差遣候。種々談合出入無申計候。本願寺より被申様子。又立入罷上。信長

様へ村井長門守宮内卿法印以申上候處。數ヶ條之申分。大略相濟。又立入罷下候。本願寺より申分者。兎角本願寺まで御免候ても。西國安藝森右馬守同事に被成。御しや免無之候へは。本願寺も西國より近年之芳志にて。かんに仕候處。手前まで無事いたす事。迷惑由被申。津國こおり山に。信長御陣すへられ。津國中を焼入にいらせらるゝ處へ。則立入さしこされ。本願寺被申様申上候。然者本願寺森右馬守同事御しやめん可在之由。御返事請取。立入道罷下。もりへの御勅使被差。可有御下向由被仰出。丹波越に既路次すからけいご。信長殿より被仰付申候。霜月廿六日に可有御立に相定候處。中川瀬兵衛(衛)廿四日に歸參仕候故。勅使之御下向御延引と。信長より被仰出候。其まゝ扱され申候。其まゝ高つき茨木歸參中。天正六年霜月より。七年之十二月まで。せめつ

められ。其内に荒木者。尼崎へ九月比有岡を忍出候。女子共をは有岡に置。其身忍出。荒木父子共は。尼崎に籠城候。有岡には荒木久左衛門請取。籠城仕候處。惟任日向守。丹波國ことく切したかへ。荒木新五郎は。惟任日向守むこにて候まゝ。則日向守扱入られ。種々調共にて。有岡を明て渡可申に相究。先日向守むすめをうけとられ候。其跡に久左衛門も十一月廿八日九日を日限さし。尼崎表へ罷出。荒木攝津守と種々調雖仕。荒攝同心不申。久左衛門も尼崎をぬけて。あわ路のいわやへ舟にてのき申。跡に信長殿二條之御殿に御座候御息中將殿は。有岡表に御陣をすへられ。れき／＼の者共。男女子共四百六十計。家を二間つくり。二間之家へ追こみ。裏表よりやきくさをこみ。火懸やきころさるゝ。其刻尼崎表に久左衛門女房をはしめ。九十七本はたものをあげられ

候。こと／＼くうつくしきいしやうきせられ。めもあてられぬ事無申計候。又京都へは荒木つのかみか女房。城の大手のだしにをき申女房にて候故。名をはだし殿と申候。一段美人にて。い名はいまやうきひと名つけ申候。一條より六條河原へ。車十二りやうにてわたされ候。其人數は出殿年廿四だし殿いもうと二人。つのかみ弟十九はうかへ。つのかみむすめ十六御局。荒木久左衛門子十四一段の若衆。其外下衆。妙願寺へこしにてのほり。自せいをよみ。十二月十六日五ツ時分に。車にてわたされ候。上下京の見物。くんしゆ數しらす。涙をなかしめもあてられす。かやうのおそろしき御せいはいは。佛之御代より此方のはしめ也。源平の合戦にも。五人三人のせいはい。腹をきり申なとゝこそ承及候に。津國にて。せいはいやきうちはた物。京にての車さき。上下卅六人。

以上六百人計之御成敗候か。

いまやうきひ大坂にて川なう左衛門尉と
申者むすめなりおとゝい三人

みかくへき心の月のくもらぬは光と共に西
へこそ行

荒木女房ちよほ

たし殿廿四

晴元の御内に田井源介孫共也源介孫か此
内に五人有男女共に

のこし置そのみとり子の心こそすて置し身
のさはりともなれ

ちよほ

たし殿

書置も袖やぬれけんもしは草きゝはてし身
のかたみともなれ

ちよほ

たし殿

露の身のきえのこりても何かせん南無阿彌
陀佛にたすかりをする

三つ子をいたき共に生害

いはらき

隼人か御地

世中のうきまよひ共書すてゝ彌陀のちかい
にあふそうれしき

荒木與作女

おさい

さきたちし此身は露もおしからし母の思ひ
そさわり共なれ

おさい

なけくへき彌陀のおしへのちかひにて光と
共に西へこそ行

局たし殿御地

もへ出る花は二たひさかめやとたのみをか
けし有明の月

御つほね

たのめたゝ彌陀のおしへのくもらねは心の
うちは有明の月

あらき與兵へ

きへ

車に二人つゝ八兩。すいぶん衆其外は大勢也。
天正七年十二月十六日五ツ時。村井長門守奉
行。けいこの衆。越前之大名衆也。

佐々藏助殿 森五郎八殿 前田又左衛門殿
村井専次 村井長門守内衆

以上警固衆三千驚目候

丹波國惟任日向守。以御朱印一國被下行。時に
理運被申付候。前代未聞大將也。坂本城主志賀
郡主也。多喜郡高城波田野兄弟。扱にて被送
刻。於路次からめとり。安土へ馬上にからみつ
けつゝをさしほだしをうち。はたのおとゝい。
はたのものに被上候。前代未聞也。

天正七年六月十日京都を通也

美濃國住人ときの随分衆也

明智十兵衛尉

其後從上様被仰出

惟任日向守になる

名譽之大將也。弓取はせんじてのむへき事候。
天正九年辛巳正月十八日に。江州於安土。御爆
竹を信長させられ。諸大名をよせ。金銀をちり
はめ。天下に其聞無隱事候。就其於京都可有御
興行之由。被及 叡慮聞召。同二月五日。以内
内上臈御局様。御さこを被差下候。同下之御所
さま若御局様之五いを被差下候。則立入立佐
入道を被差副。安土へ御下候。八日信長之御機
嫌なめならず。御返事被出。内々御請被中
候。御使之衆上下共。けつこうほんそう御振舞
にて。九日に京着仕候つる。就中惟任日向守
へ。正月廿三日ニ御觸狀を被出。五畿内を被相

觸候。觸狀如此候。上先度は爆竹諸道具こしらへ。殊きらびやかに相調。思よらすの音信。細細の心懸神妙候。然者重而京にては。切々馬を乗可遊候。自然にわかやき。思々の仕立可有之候間。其方事者不及申。畿内之直々奉公之者共。老若共可出候。其方請取申可觸之候。於京都陣參被仕公家衆。又只今信長に扶持を請候公方衆。其外上山城奉公者共。不殘内々可用意旨可申聞候。於大和者筒井順慶。其外國持取次直參いたす者共。可用意事尤候。津國にては高山瀬兵衛親子。池田是は子共兩人。親者伊丹城之留守居たるへく候。從多田者。鹽川勘十郎同橘大夫是兩人。河内にては。多羅尾父子三人。池田丹後。野間左橘。同與兵衛。其外取次者。山城安見新七郎。三好山城。是は安波へ遣候間。其用意可除之。但於望者。覺悟次第可乗候。和泉にては。寺田又右衛門。松浦安大夫。沼間任

世。同孫。其外直參之者共。根來寺連判扶持人共。其外杉坊佐野一流之者共可用意。次大坂在之五郎左衛門蜂屋かたへも。其用意可申送候。若狹よりは武田孫大内藤熊谷栗屋逸見山縣下野可出候。是は五郎左衛門可申遣候間可申候。六十餘州へ可相聞候條。馬數多可仕候。其外手寄之あとに可乗もの之者可申付候。長岡父子三人。但兵部大夫は。丹後に在之候。よく候。兄弟二人。一色五郎これも可乗旨。可申送候也。

二月二十三日

御朱印 信長

惟任日向守とのへ

抑禁裏様東之御門前にて。東西へ馬場廣さ一町半町。南北へ馬場之長さ四町半町。一條通りより近衛通より下まで。東西にらちをゆひ南北に御馬を被立畢。禁裏様には東之堀之土居に。立入立佐。御奉行被仰出。禁裏様御さ

んしき五間三間。御女中方之御さんしき二間五間。たうしやう方之御座候御さんしき二間五間。以上十五間。御橋を被懸候。其橋より北へ。見物之女房衆之さんしき。思々うち中され候。東へり御覽候體。さなからかつきの小袖花のことし。信長も田舎の事をこそしろしめし候へ。都之見物程御始也。被驚御日候。則爲禁裏様被成御勅書。今度之見物。筆にも御言にもつくしかたく。唐國にもかやうの事有間敷と被遊候。信長へ五人御勅使被立候。庭田大納言。中山殿。甘露寺殿。廣橋殿。勸修寺殿。忝候由御禮被申上候。然者御官位を被仰出候はんとて。上臈御局さまを。三月朔日に爲勅定。御勅書を被參候。左府に被仰出山候。其内に爲御使。村井長門守入道春長軒を。二月晦日夜。初夜以後立入所迄御出にて。庭田大納言殿。勸修寺中納言殿。甘露寺殿。中山殿。廣橋殿。五人御

内談子細有之。立佐入道馳走仕。則叡慮様へ被仰上候。爲其御使。上臈さま信長之御屋鋪本能寺へ御成候。上下京之小屋方材木方より。御さんしきの道具出用意仕候。御馬乘大名國々馳走不得申候。江州越州若州丹波丹後津國河内泉州和州伊勢美濃尾州山城。京之御公家衆には。日野殿正親町殿藤中納言殿御子息衛門佐殿竹内兵衛佐殿以上五人御馬乗候。其外公方衆は沼田殿彦部殿小笠原殿荒川殿松田監物殿才阿彌正實坊。其外名字不存候。又三月五日に御馬乗有之。はや馬共をすくられ。三百餘騎にてくろき赤き頭巾思々出立。とうふく皮袴皮立付にて御見物者。御方之御所様御忍にて。御かつきの仕立にて。御女房衆にうちまされられ。御見物なされ候。信長之御出立者はたにこうはい。叡慮より白ふく御拜領。則色々御小袖をめさ

れ。度々候へ共。御ふく拜領を御うわぎにて。きんらんのそばつぎ。しやうぶかわの皮袴。なんばんすきん。并秋田城介殿はしやうく皮の御どうふくに同すきん黒皮袴。其外思々御馬乘に御出候。御子立城介殿。伊勢之御本所。三七殿御三人。以上御子立に候。男女五十人計有之由候。

就今度東國之儀申付。種々御感之趣被染。勅筆之儀。再三頂戴。無冥加奉承候。抑武田年來對天下可成惡逸造意。甚以不輕其科條。爲遂退治。今春向信州令進發。數ヶ城追破候。然處仁高遠城。信甲兩國依爲鹿目地。武田四郎弟仁科五郎在城候。彼要害數代丈夫相構。於此庄。歷歷者共楯籠候條。去月朔日押寄。衆口取詰。翌日二日悉攻崩。仁科始其外數百人討捕候。從其甲州押入候。以右響四郎居城令退散。彼國之山與節所相構。雖逃入候。卽時追詰。同十一日。

武田類身共。一人不漏打果候。然間信甲駿上毛頭無相滯。平均申付候。依之北條初。關東諸侍不殘令出頭候。如此上東國之儀。島々外迄屬下知候。彌國々末代別儀無之樣。置目等申付。隙明次第致歸陣。頓而上洛仕。是迄叡慮御禮旁可申上旨。以御次而於預奏達候は可爲本望候。恐謹言

卯月三日

信忠列

萬里小路殿

天正十年二月十四日夜。從北方赤雲天下チ、イ。其色光明しゆのとし。信長大吉事云々。卽三月五日に。信州表に被出御馬。信忠者二月初に御出陣候間。信忠之御手前にて。瀧川手にて。悉被討捕候。其首上洛候而。こく門に被相懸候。武田四郎子太郎典殿以上三ツ。又四月廿一日比ヨリ、いぬいにあたり。白雲にちのとく。白地直ニ立。未は長太刀なりにゆかみ。よひの問立。四ツ前よりきへ申候。〔以下虫〕隆さ□□此雲何にあひたるへき哉。不審々々〔食アリ〕

三月廿八日に大閣様高麗國へ御馬を被出候。禁裏様にも御人數爲御見物。四つ足と唐門之間に御さんしき被仰出。我等爲奉行、御棧敷

申付候。御馬廻計にて御通り。三四萬計かと存候。警こうき驚目候。おもひくの出立。金銀をちりはめられ。一日見きたひれ申候。則棧敷に御座候て。てんはい被參候。院の御所様にも。御棧敷被懸。同前に御見物。御兩御所共に奉行仕候。國々關東衆北國衆。人數持者。二月より先勢被罷立候。三十萬のつもりにと承候。何も大名小名不相殘。被罷立候。

文祿二巳五月廿八日に。高麗國へ諸勢被取懸。伊達一段働被仕。御かん狀天下一武篇と被仰出候由候。赤國もくそうか城へ被取懸。大將分者共四人討捕首。京着候て。聚樂かや木橋に首を被相懸候。

もくけう

せんらこう

ちやういそ

けくしやくたう

へゝそ

はくしやうういへいき 先代未聞之儀候

大明國よりあつかいに 兩勅使歸朝。一人は五

月末に被罷歸候。御返事は來後九月候と可相聞候由候。然は大閣様。淀殿上様に若君様御たん生。八月初に御注進候間。近日なこやより御上洛之由候。定日は不存候。古今かやうの御名譽之御大將様御座有間鋪。兩年なこやに御在陣候へは。京都之地下人ことくくめいわく仕候。地下ひつまり候。法印さへ無御座候て。めいわくく無申計よし候。御上洛を待かね申候。御福力之御大將様にて候。地下中。惣間之屋地子御ゆるし參候由候。千年萬代御長久之三國共に如御存分之被仰付候様にと念願計候

文祿二年八月十一日夜。大雨ふり候。八月初よりてり候て。諸人迷惑仕候處。水につまり候得は。大ふりにふり候。とくしく雷なり候て。長妙寺前のつきぬけへおち候。小家二間高へ落候。棟木の柱みちん

にくたけ。手鍵一本見へ不申候。となりには。佛たんみちんくたけ。刀一こし。つかさや。みちんにくたけ候。みくるしからす候。進物仕候。

右立入左京亮宗繼入道隆佐記以七世孫中務大丞經德校正寫本書寫畢

立入左京亮入道隆佐記終

續群書類從卷第五百八十三

合戰部十三

舟岡山軍記

舟岡山合戰事

永正八年大内介義興帝都ニ上リ。將軍ヲ尊崇シ。我身威望ヲ挾テ。中國諸卒ヲ順ヘ。號令ヲ天下ニ行ハント志シ上洛ス。此比四海大ニ亂レテ。列國君ヲ立テ。政ヲ分チ。爭亂無止時。丹波半國ヲ押領シ。五畿内ヲ切取ント隣境侵掠ムル竹内大夫ト云者アリ。大内介洛中ニ威ヲ振ハ。大望難遂思ヒ。同年八月廿三日丹波ヨリ千余騎ニテ上洛シ。舟岡山ニ陣取リ。大内介ヲ洛中ヘ入レ立ジト支ヘタリ。大内介是ヲ

聞テ今程將軍ヲ守立ン爲メニ上ル者ヲ。片夷中ノ者ノ支フル様ヤアル。其儀ナラバ一戰ヲ遂ント洛中ヘ押上リ。西京ニテ士卒ニ兵糧ヲツカハセ。宿所ヘモ不入。直舟岡山ヘ押寄セ。其勢五百余騎。射共突共不用。山ヘ押上ゲヨト拔連レテ進ンダリ。竹内モサル勇士ナレバ。山半分ヘ下テ鎧ヲ入レ戰ヘ共。大内カ勢少モ不擬議懸リケル。先手五騎射取タレ共。今上リノ猛將死人ヲ乗越進ンタレバ。竹内カ勢マクリ立ラレ。山上ノ構ヘ引入ル。得タリ賢シト中卷ノ勢五百騎。構ノ内ヘ切入ンバ。諸卒悉崩落

テ。丹波路サイテ逃行。竹内ハ主從十余騎踏留テ討死シケル。大内介一戰ノ上ニ竹内ヲ射取シカバ。丹波丹後ハ申ニ不及。五畿内ノ勢共其日ニ靡キ順ケリ。大内介ハ本姓唐人タル由申傳へ。大明國へ年々ニ貢船ヲ遣シ。寶物ヲ買取。朝鮮へモ使節ヲ通シ。本朝未渡リシ書箱珍貨多クハ此時來レリ。種々ノ寶貨ヲ將軍并管領へ奉レバ。殊ニ執シテ天下ノ政道ヲアツカリキク。此餘威ヲ以テ中國ノ過半ヲ打順へ。十三年ノ間洛中ノ政務ヲトリ行ヒ。國用空ク耗へ。士卒疲勞セルニ依テ。周防へ下リ無程逝去セリ。嗣子義隆カ時ニ雲州ノ尼子叛テ服セス。義隆自向テ攻破ラント戰へドモ不利ノ。其後爲家臣殺國亡ビケリ。

細川高國奔于江州事

永正十六年己卯。細川高國管領トシテ天下政務ヲ行フ。弟右馬頭尼崎ニ住メ西國ノ沙汰ヲ決

斷セリ。高國カ家臣香西ト云者アリ。陪臣トシテ諸事ヲ執行シ。威主君ヨリ重ク。其弟柳本又高國男色ノ寵ニヨツテ俸祿身ニ餘リ。榮耀人ニ勝レタレバ。魯ノ哀公ノ季孫叔孫魏ノ曹叡カ司馬父子ノ如ク。寵ニ媚ル者交ヲ厚シ。陸ヲ成シ。當家モ他家モ推双テ。門下ニ奔走セリ。尼崎ノ城ヲ築シ爲香西兄弟モ下向。細川一家ノ人々日夜土木ノ役ニアツカリシ内ニ。右馬頭カ人歩ト香西カ人歩ト土一簣ヲ爭ヒ。口論ニ及ヒ。下部共數百人兩方立別。瓦礫打ニ成リケルガ。アツカヒ入テ兩方へ引分ケ。右馬頭者ヱハ城中へ入歸リ。香西ガ者ハ我カ丁場へ歸リケルニ。下知不聞ノ溢レ者居殘リテ。城中へ瓦礫ヲ打込タリ。右馬頭驚テコハ何事ゾト問へバ。シカ／＼ノ事也ト申セバ。腹立ナガラ下人ニ對シ扱ノ上ニ又打擲スベキニモアラズト靜リケル。右馬頭日比香西カ振廻雅意也ト思

フ上ニ。此事出來ケレバ密ニ高國へ申シ。様々
讒詐セラル。高國モ兩葉不去將用斧柯ト云譬
アリ。サラバ香西ヲ誅戮スベシト思定メケル
ガ。香西ヲ誅セバ柳本我ニ仕ル事成マジ。彼
カ心ヲ計リタメライケルガ。我命ニ替ラント
志ス柳本ナレハ。ヨモ仰セニ背クマジ。柳本ニ
如在ナキ眞實ヲ誓紙ニカキ文箱ニ入レ。兼テ
コシラヘ置。正月廿日香西ヲ殿中へ呼寄セタ
リ。香西ハ何心モナクイツモノ如ク出仕シケ
ルヲ。兼テ謀リシ事ナレバ。殿中ニテ即時ニ
誅ス。其マ、彼文箱ヲ柳本カ所へ被遣。國家ノ
爲ニ誅セリ。其方恨ヲ含ムヘキニアラズト懇
ニ仰傳。サスガノ柳本ナレバ。文箱ヲ不開持參
シ。殿中ヘマイリ。香西カ此中ノ僞逆カヤウニ
コソアラメト存シ候。國家ノ爲ニ候ヘバ某少
モ恨ヲ含ミ不申。御誓文ヲ開キ見ルニ不及ト。
頂戴シ。文箱ヲ返シ奉リ。舍兄不義連坐ノ罪科

ヲ御宥免アツテ。如元被召仕事生々世々忝ク
存候ト申。御前ヲ罷立。宿所ニ歸リ平生ノ行儀
ニカハル事ナケレバ。漢ノ光武ノ兄劉演ヲ更
始王殺シケルニ。言語談笑如故ト云シニタカ
ハズ。アツハレ斗量廣キ國家ノ忠臣ナリトゾ
申ケル。柳本カクテハ主君ト云ナガラ兄弟之
讎ニハ不反兵ニト云謗ヲ免レ難ク思ヒ。廿日
計過テ不圖思立。丹波ノ領知ヘ引退キ。兄ノ
讎ヲ報ント正月廿七日夜ニ入テ。嵯峨ヘ夜川
引ニ出ルニ事寄セテ。家子郎從打連立出ケル。
高島甚九郎ハ男色ノ因アリ。是ニ知セント北
野邊ノ宿所ニ行被申ケルハ。此事人ノ謗免レ
難ケレバ。主君ニ對シ弓ヲ引ント存ジ。丹波ヘ
立退候。貴方知音ノ事ナレバ。告知セ申ス也。
同心アルマジヤト申ケル。高島ヤ、暫ク思案
ヲ廻シ返事シケルハ。貴方ト知音ノ事人ノ存
タル儀ナレバ。同心申度ハ候ヘ共。君ト臣ト

上下ノ禮。恩義至テ重シ。エコソ領堂申マジ。思召立ツ事ナレバ留メ申スニ不及。疾々下向アツテ用意セラルベシ。某ニ告知セ玉フ義朋友ノ交尤モ深ケレバ。君ニカヘ申テ丹波ヘ入玉ハン程ハ告知セ申マジ。貴方讎ヲ報ント大軍ヲ起出サセ玉ハハ。某不肖也ト云共罷向テ拒キ戰フベシト。此ハ君臣ノ義ヲ重シ。彼ハ朋友ノ睦ヲ厚シ。互ニ引別レケル。心ノ中コソマサシケレ。柳本ハ嵯峨ニ行キ。角倉カ家ニ立ヨリ。心閑ニ酒飲ミ打甘タル體ヲ見セケルカ。角倉推量ノヤアリケン。鎧腹巻取出シ。首途ヲ祝ヒケル。柳本嬉シト喜ビ。コレヨリ丹波ノ領所ヘ歸リ。丹後但馬近國ノ勢ヲ催シ。二月十七日都ヲ指テ攻上ル。高國并右馬頭打テ出。拒戰フトイヘ。競進タル勢ニマクリ立ラレ。散々ニ懸マケ既ニ危ク見ヘケル處ニ。高島甚九郎先度ノ辭ヲチカヘジト乘入名乗カケ。一

先ハモリ込シタル共。引立タル共（引立タル共カ）勢ナレバ。ツ、イテ返シ合スル者ナカリテ。高島終ニ討レニケリ。高國都ニタマルヘウモナクテ。江州サイテ落テ行ク。柳本ハ本望ヲ達シ。暫ク都ニアリケルガ。江州ヨリ佐々木加勢ノ攻上ル由ヲ聞テ。又丹波ヘ引返シケリ。

細川晴元與三好不和事付宗三討死事

天文十八年己酉。攝津國ノ侍三好筑前守長慶。同名宗三入道。恨ヲ含ム事アツテ。確執ニ及ヒケルニ。細川右京大夫晴元。偏ニ宗三入道ヲ最負アリシカバ。舍弟右馬頭晴賢ノ館中島ノ城ニタテコモリシカ。軍利ヲウシナイテ三月朔日榎並ノ城ヘ引サリ。又此城ハ元ヨリ宗三カ館ナレバ。要害ヲ搆ヘ。日比ハ子息右衛門大夫政勝ヲコメヲキタリ。此時同國ノ住人三宅トイフモノ。晴元ノ被官タリシガ。俄ニ敵ニナリ。城ヘ敵ヲ引コマントセシヲ。香西越後守

元成ヲサシ向ケ。不日ニ攻メヲトシ。晴元入城シテヲハシケリ。佐々木彈正少弼定朝臣ハ。晴元ノ舅ナリ。兼テヨリ合力ノ志シアリシカバ。彼ノ勢ヲ今ヤ〜ト待レケル。三好筑前守長慶ハ。細川次郎氏綱ヲトリ立テ。河内國住人遊佐河内守長教。大和國住人筒井順昭ヲ相語ヒ。大軍ヲ動カシテ中島ノ城陣取。敵ノヨセ來ルヲシ待カケル。六月十一日ノ早天ニ宗三入道ハ榎並ノ城ヲ立チ出テ。晴元ノ近習外様ノ大名小名ヲ催シ。其勢三千余騎。〆レハ惣大將トノ三軍ノ下知ヲツカサドリ。江口ノ渡リヲコヘ。中島ノ城ニ近ヅキ。江口ノ里ニ打アガリ。水澤ノ陣ヲソナヘケル。此江口ト申ハ四方ニ大河流レテ。沙頭路セバキニ。波打際マデサカモ木モ引カケタレバ。輒ク敵モ寄セ難シ。又打出ンモ船ナラデハ叶ヒガタカリケレバ。只イツトナク近江勢ヲ待居タルニ。定賴朝臣

ノ子息左京大夫義賢山崎ヲ越テ陣ヲ寄スベキ由。度々注進ハアリナガラ。未タ國ヲモ打出ズ。難義ノ大河ヲバ越エカヽリ。又敵ハ猛勢ニテ兵糧運送ノ路ヲトリキリタレバ。三好宗三セン方ナクテ廿三日ノ月ヲ待テ。一首ノ狂歌ヲヨミテ。士卒ノ心ヲ慰メケル。

河船ヲトメテアフ見ノ勢モコズトハントモセヌ人ヲ待カナ

去程ニ。三好筑前守ハ。中島ニテ諸大將ヲ聚メ評誼シケルニ。或ハ江口ノ城ニ推シ寄セント云モアリ。又ハ天下ノ安否ヲ此一戦ニカケタレバ。多ハ口ヲ閉テ居タリシニ。長慶カ舍弟十河民部ノ大夫一存進ミ出テ。何ノ異論ニカ可及。見義不爲無勇也。敵サマデ猛勢トモ聞ヘ候ハズ。若シ江州ノ勢着ナバ。味方理ヲ失フヲアルベシ。急ギ晴元ノヲハスル三宅ノ城ニ推シ寄セ。腹キラセ奉リ其ヨリ江口ニ推シツ

メ。ヒラ攻ニ攻メテ勝チタランコソ。心チハヨ
カルヘキト謂ヒケレバ。皆此義ニ同ジケル。長
慶ハ猶モ主君ニ腹ヲキラセ奉ラレバ本意ナル
マジト思フ氣色ナルニ。十河民部大夫一存終
夜馬ニ秣カヒ。若黨ニ物具サセテ。明レハ六月
廿四日ノ朝霧ノタヘマヨリ。三百余騎大旗小
旗サシツレ。一枚楯ヲツキシトツテ三宅ノ城
ニ推シ寄セ。矢一二射チカフル程コソアレ。ヤ
ガテ打物ノサヤヲハヅシ。大手ノ木戸逆茂木
ヲ引キ破リ。二ノ木戸マデゾ寄セツメケル。城
中ニハ纔ニ百人ニタラヌ勢ナリシカモ。サス
ガ名アル侍共ナレバ。二ノ木戸ヲ推開キ。魚
鱗ニカケ出。鶴翼ニヒラキ。追ツ。マクラレツ。
鰐本ニ火ヲチラシ。鋒ニ血ヲソ、イテ戰ケレ
バ。十河モ少シ引退キ。人馬ノ息ヲゾツカセケ
ル。十河進ンデ士卒ヲ勵シ。此城ノ休ヲ見ル
ニ。今一攻セメバ落ヌベシ。乍去譜第ノ主君ニ

腹ヲ切セ奉ランモ本意ナラズ。イサヤ人々江
口ノ城ニ推寄セ。宗三ヲ打取。長慶カ宿意ヲ
達セント。三百騎ハ引返シ。淀川ノ東ノ岸ニ打
ノゾミ。江口ノ城ヲ見渡セバ。逆卷水ハ岸ニタ
タヒ。ヨセクル波ハ巖ヲツクガ如クナレバ。寄
ベキ様ナカリシニ。四國ノ海賊ニ馴タル者廿
余騎。一度ニサツト打入レ。一文字ニ流ヲ切
テ。向ノ岸ニカケアガリ。具足ノ水シタデ、ゾ
立ニケル。十河士卒ヲ下知メ。アレ打スナツバ
ケトテ。三百余騎打入レ。馬筏ニ水ヲセカ
セ。ヤス／＼ト打渡リ。進ミ勇メル形勢ヲ見
テ。江口ノ西ノ木戸口ヲカメタル勢。未タ戰ス
ノ崩ニケリ。別府ノ手破レシカバ。筑前守長慶
二万余騎ヲ率メサンバ堤ヲスデカヒニ江口ノ
東ノ木戸ニ推寄タリ。城中ニコモル兵二千余
騎。皆雄兵鐵騎ノ勇士ナレバ。手痛キ合戰ト
思ヒシニ。城中ニ野心ノ者アリトテ。互ニ心ヲ

ヲキアイテ戰ントスル者更ニナシ。其ノ上四
五日兵糧盡テ食ヲ斷ケレバ。心バカリハ勇ド
モ拒ニ力ナクシテ。木葉ノ風ニ散ル如クムラ
タテバ。打ル、者ハ數ヲ知ラズ。宗三ハ河ヲ
ヲヨキテ向ノ岸ニアカラントセシヲ見テ。河
内國ノ足輕追カケテ打取ケル。宗三八世ニカ
クレナキ勇士ニテ。兵法ニ達シケルカ。運盡キ
ヌレハ雜兵ノ手ニカ、リケルコソ無漸ナレ。
此處ニテ討レテ死スル者總シテ一千三百八十
一人也。其外河ニ沈ミ。水ニ溺レ。生死不知ノ
者凡ハ數ルニイトマアラズ。宗三討レタル由
三宅ノ城エ聞ヘケレハ。晴元爰ニタマリエス
ノ。主從十一人三宅ノ城ヲ忍ビ出テ。丹波地ニ
カ、リ。上洛セント思ヒシガ。アマリニ面目ナ
クテ嵯峨ニシハラク逗留アリケル由。將軍聞
召メ。伊勢守貞孝ヲ御使ニテ。何カハ苦シカル
ヘキ。漢楚七年ノ軍ニ高祖戰フコトニ打負シ

カ。一度鳥江ノ軍ニ利ヲ得テ頂羽ヲ亡サレ
キ。合戰ノナラヒ勝負時ニヨル事ナレバ。急ギ
カヘリ參ラルヘキ由被仰出シカバ。廿五日ノ
西刻ニ潛ニ入洛トゾ聞エシ。

佐々木敗軍事付將軍奔於江州事

佐々木左京大夫義賢ハ。去廿四日三万六千余
騎ヲ率メ。晴元ニ力ヲ合セント上洛シ。諸軍勢
田唐崎志那梢濱柳木衣川和爾堅田ヨリ打アカ
リ。大津松木今道山中ヲ經テ。四條五條ヲスチ
カイニ打テ。西岡鳥羽竹田山崎神南ニ陣ヲト
レバ。大將左京大夫義賢ハ。東寺九條ニヒカヘ
タリ。義賢カ先手進藤山城守貞治ハ。廿五日
ノ寅刻ニ山崎ニ陣ヲ取。永原太郎左衛門ハ西
岡ニ陣取タリケルガ。昨日ノ合戰ニ宗三討死
シ。晴元逐電ノ由ヲ聞テ。ナジカバ爰ニタマル
ペキ。我先キニ引ハラハント騷キ立ツ。敵ハ慕
ヒモセザレ。大勢ノ引立タル事ナレバ。暗

サハクラシ。雨ハフル。深田ニ馬ヲ馳セ入レテ。打トモユカヌモノモアリ。或ハ桂川ノ逆卷水ニセキ落サレテ。白波ノタツキモ知ヌ者モアリ。主從ワカレ／＼ニナツテ。江州サイテ引退ク。サレドモ大將義賢ハ。將軍ノ御事心元ナシトテ。北白川ニ陣ヲ張ル。將軍モ晴元ト御心ヲ合セ玉ヘバ。廿七日ノ巳ノ刻計ニ都ヲ去セ玉フ。攝家ニハ近衛准后。同内大臣晴嗣公。門跡ニハ聖護院准后道増。大覺寺准后義俊。三寶院僧正義堯。其外久我大納言晴通ナドモ皆馬ニテ打タセ給ケリ。武士ニハ晴元ヲ始メ。舍弟晴賢播磨守之常等供奉シ玉フ。其日ハ東山神樂岡ニ御陣ヲスエラレ。佐々木義賢ヲ始メ。御前ニ召レ。軍評詔マチ／＼ナリ。將軍義晴仰ケルハ。敵ハ爰ニテ待ウケ死ヲ士卒ニ同フシ。功ヲ一戰ノ中ニ立テ。名ヲ萬世ノ末ニ殘サント思フナリ。運ハ在天退ク事アルベカラズト

仰シカレ。晴元義賢ヲ始メ。老者評詔衆ニ至ルマテ。不知退者取禍ヲ之道也ト云コトアリ。天下ノ安否必シモ此一戰ニ限ルベカラズ。先ツ都ヲ去セ玉ヘ。再ヒ大軍ヲ起シ。逆從ヲ退治セラルヘシト。面々ニ被申ケレバ。先ヅ其夜ハ東山慈照寺ニ御逗留アツテ。明レバ廿八日三好寄セ來ル事モアルヘシトテ。東坂本ヘト急キ玉フ。御旅館ハ東坂本常在寺也。爰ニ月日ヲ送り玉ヘバ。御歸洛ノ事ヲノミ御心ニ思召ケレドモ。晴元其催シモナケレバ。天下ノ安否小勢ヲ以テ大敵ニ勝テ平場ノ合戰ニテ叶ガタシ。要害ヲ搆ヘテ馬ノ足ヲヤスメ。兵ノ氣ヲタスケ。勝負ヲ決ント思召。同年十月二十八日甲子ノ日慈照寺ノ大嵩中尾ト云山ニ鍬始メヲセサセ玉フ。サレドモキリ／＼ト普譟モナカリケレバ。御進發ノ事ハ中々沙汰ニモ不及。唯何トナク明シ暗シ玉フ。心ノ中コソ哀ナレ。

將軍義晴薨逝事

將軍ハ久ク東坂本ニ御座アツテ。御歸洛ノ思ヒニ沈ミ玉フユヘニヤ。臘月ノ比ヨリ不例御心地ソヅラハセ玉ヒケリ。上池院紹胤常ニ御持藥ヲ奉リシカバ。召シニ應ジテ藥ヲ參ラセケリ。サレドモ御身ニカ、ラヌ事故。都ヲ出サセ玉ヒヌルヲ。御心ニ思召シ嘆ケバ。其驗モナシ。セメテ御慰ニトテ。伊勢國住人加太ト云者逸物ノ大鷹持テ侍ル由聞セ玉ヒ。則召上サレテツカハシメ御自愛アリ。コレニテ少シ慰マセ玉フ中ニ。荒玉ノ年立カエリ。春ノ光モ長閑ナレバ。御心地モ快クテ。元日出仕ノ人々ニ御對面アリ。近習外様ノ老若今ハ異ナル事アルマジト悦ヒケル處ニ。申刻計ヨリ又ワヅラハセ玉ヘバ。片岡大和守晴親ヲ召メ。御藥ヲ參リケレドモ。其驗ナシトテ。五日ニ又上池院ノ紹胤御藥ヲ參セタリ。御足聊カ腫出サセ玉

ヘバ。御祈リ事アルベシトテ。正月八日比叡山根本中堂之藥師如來ノ寶殿ニテ。千度ノ巡禮ヲイタシケリ。其外太神宮ノ百日詣四ヶ大寺ノ祈禱无止ム。同九日午ノ刻ニ東ヨリ鞠ノ勢ナル光物西ヲサシテ飛ヒ去リ。又近國ニテ見ル者多カリケリ。白晝ニ出現スルヲ折ヨカラズ。アハレ徳ヲホドコシ。妖ヲケス謀リゴトラセラレヨカシト智アル者ハ眉ヲヒソメシカド。異ハ聖人語ラズ。妖言ノ罪ハ法制輕キニアラズト云本文アレバ。申沙汰スルマデハナクテツブヤケルヲ。聞召。從二位在富卿。刑部卿在春卿ニ仰セ有テ占セラレシニ。占文ノ面。未ノ年人ノ玉ト見ヘタリト申セシカハ。驚カセ給。招魂ノ祭ヲゾ修セラレケル。同廿三日ヨリ定賴朝臣叡山ノ住侶ヲ請メ溫座ノ護摩ヲ燒セラル。二月ニナリヌレバ。一身腫サセ玉ヒ。唯何トナク臥シ暮シ玉ヒケル。中ニモ城山

ノ事ノミ御心ニカケサセ。晴元定頼ニ御談合
アツテ。二月十六日又御普請始メアリ。此城山
高ノ一片ノ白雲嶺ヲ埋ミ。谷深ノ萬仞ノ岩路
ヲ遮レリ。攀折ナル道ヲ廻リテ登ルヲ七八町。
南ハ如意カ嵩ニツバキ。尾サキヲバ三重ニ堀
切テ。二重壁ヲ付テ其間ニ石ヲ入タリ。攝丹ヲ
日ノ下ニ見ヲロシケレバ。金城湯池モ角ヤト
思ヒ知レタリ。サレドモ御心地ハ日ニ添テ惱
ミ玉フ。先ヅ山中マテ御進發アルベシトテ。陰
陽頭ニ仰テ。日時ヲ定メ玉フ。三月七日同廿七
日トゾ勘ヘケル。御不例ノ中不可然由。定頼朝
臣シキリニ諫メ被申ケレモ無御同心。七日穴
太ノ新坊ト云所マデ御座ヲヨセラレケリ。御
入城ハ來二十七日ト被定。城中ノ衆モ御迎ヒ
ニ參シニ。廿六日伊丹大和守親興俄ニ心カハ
リノ由注進アリ。晴元此ニ驚テ。切リニ留メ
被申シカバ。力ナク留ラセ。諸奉公ノ輩ヲバ城

ヘカエサレ。城中ノ制法二十ヶ條計記セラレ
テ。城中ヲ堅固ニフマヘ。御出張ヲ待ベシト直
ニ被仰付ケル。卯月ニモ成リケレバ。彌御惱
ヲモラセ。醫療驗シナクテ。神明モ守ラセ玉ハ
ヌ御有様ナレバ。在城ノ人々ヲ召セトテ。上野
民部大輔信孝。伊勢守貞孝。三淵掃部頭晴員。
飯川山城守信堅。急ギ馳セ參ケリ。大館左衛門
佐晴光攝津守元造朝臣ハ。在城ノ人ナラ子モ
召シニ應ゾ御前ニ參シカバ。イトタユゲナル
御眉ニテ。人々ヲ御覽シ仰ケルハ。今ハ早ヤ露
ノ命ナガラフベクモ覺ズ。我ナクナリヌモ。君
臣水魚ノ思ヲツクシ。宰相中將殿ニ力ヲ付ケ
奉リ。謀ヲ運シ威ヲ振ヒ。世ヲ治メヨト仰事ア
ツテ。御涙ヲ流シ玉ヘバ。御前ノ人々モ涙ニ
ムセビテ立ヤラズ。同五月四日辰刻御年四十
ニテ薨シ玉フ。同七日穴太ノ新坊ヨリ御カラ
ヲ東山慈照寺ニ出シ奉ル。万松院殿ト號ス。右

大將ニテ薨ジ玉ヒケルヲ。一品左相府ニ贈リ玉フトゾ聞ヘシ。

佐々木與三好勝軍合戰事

三好筑前守長慶威勢日々ニ倍シ。紀州畠山ニモ討勝チ。五畿内ニ手ニ碍ル者ナカリケレバ。江州へ働キ佐々木ヲ攻ントス。佐々木定頼朝臣逝去シ。左京大夫義賢初メテ國ニ立シカバ。大津へ軍勢ヲ出シ度々セリアヒアリ。佐々木モ江州へ推込レナバ惡シカリナント思ヒ。先年將軍ノ築立玉ヒシ慈照寺ノ大嵩中尾ノ城ヲ重テ改メ筑キ。勝軍ト名ケテ。江州ニ武勇ノ譽アル永原安藝守ヲ籠置キ度々打テ出テ。洛中洛外ヲ目ノ下ニミヲロシ。三好ヲ働カセジト構ヘタリ。是ニヨツテ三好飯盛ヲ木城トシ。堺浦尼崎兵庫ヲ堅メ。四海往還ノ便リヲ本トシ。洛中ヘハ時々働クトイヘドモ。足ヲタメズ歸リキ。三好ガ家臣松永彈正忠久秀勇武ノ譽レ。

ソノ上才智モ人ニ勝レケレバ。軍ノ惣大將トナツテ。七千余騎ニアマレリ。筑前守旗本モ七千騎ニ不過。其外一族千騎二千騎拘ヘタル者。四國ヨリ在番ニ上リ。飯盛ニ詰居タリ。安藝守モ手勢三千騎。其外江州大名共在番ニ上レバ。松永隙ヲ伺フ便リモナク。一兩年ハ過ニケリ。或時城ノ要木ノ爲ニ北白河ノ近邊ノ竹木ヲ不殘キリ取。此城ハタカニ見ヘケレバ。コハヨキ時分ナリ。安藝守イツモ早リテ出ル者ナリ。常ハ山ノ麓ノ黒ミニ勢ヲ置ケバ。胸勢ヲ見キラズ候故ニカ、リ不得。今ハ城ノ後キラリト見レバ。ソレノ手アテヲメ戰ハント。十一月廿四日ノ早天。松永松山三好ノ一族一万余騎ニテ押寄せタリ。佐々木負クベキ天運ヤ至リケン。大師講トテ江州ニモテハヤス事アレバ。今日在所ニテ大師講ニアハント。安藝守カ勢過半江州ヘ下ニケリ。其上愛宕精進ノ

火ノ物タチ酒ヲモノマズカケ出タリ。其勢五百騎ニハ不過。在番ノ馬淵等一段高キ嶽ニ軍取テ勢ヲ下サズ。義賢ハ折節的ヲ射サセント神樂岡ニヲハシケルガ。コレモ二千騎ニハ不足。安藝守敵ヲ見テ。常々擬議セズカ、ル者ナレバ。義賢ニモ馬淵ニモ牒シ合セズ軍ヲ初ム。松永是ヲ見テ。カホドノ小勢ニテ此大軍ニカ、ルハイカサマ後ニ伏兵アルベシ。引出ノ討テト下知シ。二ノ手ヲ入替ヘザレバ。先手千騎ハ安藝守ニマクリ立ラレ。二三丁バカリ引退ク。安藝守勝ニ乗テ進ミケルカ。松永ヤカテアトヨリツ、ク勢ノナキヲ見テ。引裏テ討ト下知シ。七千余騎ガマン中ニトリコメ。アマサジト戰フ。安藝守ガ兵過半討レ引退ク者多カリケリ。殘留テ名ヲ惜ム侍六十三人。面モ不振ウツ、ウクレツ火花ヲチラノキリアヒケル。安藝守名乗カケ。十文字ヲ以テ七八人ツキ

伏セ。ソノアマリ岩ノカトニアタリ。岩石クタクテ今ニ鎧ノ跡殘テ往來ノ人其名ヲシラヌハナカリケリ。角テ助ノ勢ハナシ。六十三人モ皆討レ。十人ハカリニナリニケリ。松永カ手者中西權兵衛ハ世ニ隱レナキ大力也。兼テ安藝守ヲ見知タル者ナレハ。名乗カケクマントス。安藝守鎧モ刀モ打ヲリケレバ。イザクマントクミ合ケルガ。數刻ノ戰ニ力疲レ。中西遂ニ首ヲトル。安藝守ヲ討トリ松永眉目ヲ開キ。勢ヲ休メント五町計引退ク。今日ノ軍ニ手ニアハヌ後軍ノ勢我先ニト勝軍ヘアガリ。馬淵ガ勢ヲ追散ント進ミケル。三卿修理亮ハ一番ニ嶽ニカケアケ、ルガ。ツ、ク勢ノナキヲ見テ。堀伊豆守ガ若黨ヨキ敵也トテ鎧ノ柄ヲトリノベ。馬ノ足ヲナイタリ。ナガレテ人馬トモニカケヨリコボレヲチケルヲ。伊豆守押ヘテ首ヲ搔タリ。アトニツバク三好ガ勢。修理亮討レ

タルニヨツテコレヨリ引退ク。修理亮カ面ヨク松山ニ似タレバ。江州勢コレヲ見テ味方ニ安藝守討レタリトイヘトモ。松山ヲ討トレハ。牛角ノ戰也ト氣ヲ直シ。義賢其外江州ノ大名共心ヲシツメテ敗軍セズ。面々ノ陣所ヲ堅メタリ。松永ハ勝ホコツテサラバ神樂岡ヘカ、ラント。一万余騎ヲ北ヘ推シ。神樂岡ヘカル。義賢ノ寵男三雲某的ヲ射シ爲ニ吉田流稽古セシ弓ノ上手三百余人具ノ上リケレバ。コレヲ先手トシ。シゲリヲ後ニアテ。二千余騎ニテヒカヘタリ。キヲヒキヅタル松永カ勢。エタエタトカ、リ已ニノボリトノボリ入違フホトニ見ヘケル時。三百余人射立ケレハ。タマリモアヘズ引退ク。松永敵ハ小勢ゾ射ルトモツクトモカマハズ推入レト。二ノ手ヲ下知ノ進ミケル。三雲ハ幾度寄セ來ルトモ。浮矢ナ射ソ。手ト手ト取クムホドニノ。射立ヨト下知ヲ

ナス。二ノ手進メドモ又如前射立ラレ。手負死人數不知ケレバ。松永アタラ兵多ク討セテ詮ナシ。安藝守ヲ討タルコソ大勝ナレ。イザ引トラント引退ク。義賢多クノ敵ハウツコ、ヲツケント勇ミケレバ。アノ大軍ニ氣ヲ失フタル小勢ニテカ、リナバ。叶フマジト。諸人申セシニヨリ。是ヨリ軍ハ果ニケリ。三雲カ働無比類トテ。莫大ノ恩賞ヲ玉フ。堀ガ修理亮ヲ討テ松山也ト思。諸軍ノシツマリタルハ万夫ノ雄也トテ恩賜ノ地ニ感狀ヲ添被下ケリ。義賢モコレヨリ勝軍ヲステ、國境ヲ不出。三好モ五畿内紀州ノ敵ヲ退治シ。江州ヘ不働其内ニ筑前守長慶四十三ニテ病死スレバ。松永カ威勢日々ニ倍ノ。遂ニ義輝公ヲ弑シケリ。

播州三木落城事

天正六年戊寅ノ歲。信長公筑前守秀吉ヲ大將トシ。播州ヲ征伐セシム。菅家ノ城ヲ攻落シ。

ソレヨリ別所小三郎長春カ楯籠ル三木ノ城へ
押寄タリ。三木ニハ八千余騎ニテ楯籠レバ。無
左右寄ヘキヤウナシ。三十町バカリ引キノキ。
高山ニ城郭ヲ構。兵糧ノ手ヲ取切。其外處々
ノ要害ニ取出ヲ取リ。敵ヲ一二里外ニ縮メリ。
春長同舅ノ山城守是ヲ見テ。秀吉纔五千騎ニ
不足。城中多勢殊自國ニテ彼ニ縮ラレン事不
思議也。耻辱也。廣場ヘ打出寄手ヲ帶キ出シ
戰バナドカ追拂ハザルベキト評定シ。長春ヲ
バ城中ニ殘置シ山城守二千余騎ニテ打出。秀
吉ノ陣場近ク陣ヲハル。秀吉モ敵ノ出タルコ
ソ幸ナレ。サラバ足輕ヲカケ。クヒ留ヨト鐵砲
ノ者一二百人出シ。互ニ鐵砲軍ヲサセ十町バ
カリ隔。甥小一郎忠秀ヲ先手トシ。二千余騎
ヲ谷々ニカクシ置待カケタリ。山城守イツマ
デ鐵砲軍ニテ時ヲ移スヘシ。胴勢ヲ突崩ナン
ト馬上三百騎バカリ息ヲモ不繼胴勢ヘツイテ

カ、ル。秀吉御覽ジ。十町バカリヲ人馬共ニ息
ヲモ不繼馳來バ。コレゾ味方ノ利ナルベシ。手
本近クノリ込バ。先勢ヲ一度ニ崩シツキカ、
レト下知シ玉フ。千里ヲ一足ト急ケバ我先ニ
ト小一郎ガ備ヘノリ込ム處ヲ。五百騎ドツト
ツイテカ、ル。山城守モ一戰ノ上ニテ勝負ヲ
決セント思儲シ事ナレバ。士卒ヲ勵シ。一足
モ不引ト亂マフテ戰フ。秀吉ノ胴勢コ、彼ヨ
リ打テ出。前後左右ヲ遮レバ。名ヲ惜義ヲ重ズ
ル兵二百余人討死ス。山城守モ既ニ危クミヘ
ケレ共。西國一ノ名馬ニ乗レバ。辛キ命ヲタス
カリ。纔五十余バカリニ打ナサレ。遙ルカノ
路ヲ凌ギ。城中ヘニグ入ケリ。一里余ノ路死人
ニテコソ埋タリケレ。秀吉是ニ機ヲ得テ十町
バカリ陣ヲ寄セ。處々ニ取出ヲ構ヘ。城中ノ通
路ヲ遮リ留ム。此年冬荒木攝津守謀反ヲ起。攝
州處々ニ城郭ヲ構。播州ノ通路不自城中是ニ

由説カ

機ヲ得テ。毛利輝元ニ加勢。并ニ兵糧ヲ乞。毛利隣國ノ急ヲ救ハント。小早川駿河守。大船數百艘兵糧ヲ積。播州ノ湊ニ着ク。城ヨリ人數ヲ出シ。兵糧ヲ取入ントスルヲミテ。路ノ要害ヲ構。逆母木柵ヲ付。烏モ通ハヌヤウニ拵ヘタリ。サテ止ベキナラ子ハ。一方打破テ兵糧ヲ入ント。數千騎ノ勢打出。谷大膳ガ堅タル構ヲ押破ントス。大膳剛ナル兵ニテ。數刻戰ヒ。多勢ニ無勢叶ハネバソコニテ討レニケリ。是ヨリ勢ヲ打入レバ。大ナル利ナルベキヲ。大膳ヲ打取猶モ兵糧ヲ入ント人數ヲ立直ストコロヘ。秀吉懸來リ。大勢ノ中ヘ切入。アマサジト戰。城中ノ勢卓散也ト云ヘ。馬武者ニカケ立ラレ引退ク處ヲ。追討ニノ六七百人討留。城中ヘ追入タリ。此後ハ城ヨリモ出ヤラス。小早川吉川モ船ヨリ上ラズ。舟手ヘ勢ヲ分遣攻戰ヘバ。小早川吉川是マテ也トテ。藝州ニ歸ル。去

年ノ暮ヨリ。一萬ハカリ楯籠タレバ。兵糧盡テ牛馬鷄犬ヲ殺シクヒケルガ。コレモ盡ケレバ。十一月ノ比ヨリ人ヲ喰ヒ。鎧腹卷ヲ煮テ喰ヘトモ。援兵ノ頼モナシ。日々ニ弱リ果。セン方ナキ休ヲバ。小三郎長春見テ。弟彥進友行ニ向テ申ケルハ。一家ノ滅亡此時也。一門ノ者腹ヲ切士卒ノ命ヲ可扶ト山城守ニ可申聞ト申ケル。友行尤也ト同ジ。山城守ニ申聞ス。山城守モ尤也ト同ズサラバ。矢文ヲ射ヨトテ。正月十五日淺野彌兵衛方ヘ事細ニ書載。一門ノ者腹ヲ切。城可渡。士卒ノ命ヲ扶給ヘト申送シ。秀吉聞召シ。アツハレ勇士也。最後ノ酒宴ノ爲ニ。酒肴ヲ贈ベシト返事ニ添贈遣ヒケル。長春大ニ悅テ。士卒ヲ宴シ。暇乞シ。來二十七日腹切ラント。山城守ニ申フル。處ニ。山城守イカカ思ケン。約ヲ變ジ。城ニ火ヲカケツイテ出討死スヘシト申ケル。是ヲ聞テ。城中士卒山城守

カ矢倉へ押寄攻殺シケリ。既ニ其日ニ成ケレバ。長春三歳ノ幼子ト女房ヲ指殺シ。友行モ女房ヲ指殺。客殿へ打テ出。士卒ヲ集メ銘々ニ辭ヲカケ暇乞シ。敷皮ノ上ニ居直リ。腹十文字ニカキ切レバ。友行モ同切ル。三宅彈正ト云家老ノ者アリ。口比ハ懇ニモアツカラサルガ此度友ヲ仕ラント。長春ヲ妨^マ灼シ。其刀ニテ頸カキ落シ死ケリ。三人共ニ辭世ノ歌アリ。短冊ニ書タリシヲ。小姓持テ秀吉へ進セケル。天正八年正月廿七日。別所一族亡シテ秀吉城ヲ請取。卽時ニ掃除シ城ヘウツリ。播州備前美作與力ノ衆ヲアツメ。城郭ヲ拵。數千ノ家ヲ作り信長ヘ申達シ。コレヨリ因幡伯耆ヲ攻隨ヘリ。菅家ノ城主ハ三木藤兵衛。

舟岡山軍記終

續群書類從卷第五百八十四上

合戰部十四

豐臣記上

豐臣秀吉卿

天文五年丁酉生尾州。慶長三年八月十六日於伏見城薨ス。遷廟於東山阿彌陀峯。行年六十二歲。生愛智郡中村凡家。幼稚ニシテ離父母家漂泊此彼。

弘治二年ノ比二十歳ニシテ仕遠州松下加兵衛。兩年ニシテ飯舊國。

永祿元年九月朔日。直訴信長從之。不寢夜勤仕。抽忠功。立身如飛龍上天。

永祿九年七月。信長招老臣至濃州度々雖盡

狼藉。敵更ニ不屈。越川構要害入兵可計敵云云。依之從北方組筏。九月五日至濃州地。構塀柵從岐阜以八千騎襲之。信長發矢石堅固ニ被防之。七八日ニシテ城郭速成ス。爰ニ篠木柏井科野秦川小幡守山北方ノ川筋ニ。溢者有千余人。扶之入置城番與頭被命秀吉。蜂須賀彥右衛門。稻田大炊。青山新七郎。川口久助。長江半之丞。梶田隼人兄弟。日比六太夫。松原内工等也。本ノマ、雜兵及五六千人召秀吉。武具兵糧丈夫ニ籠置。不成楚忽慟。堅ク可守。下知被定制法。

一今度於美濃地番等。無油斷相勸勵勇功者記付淺深可令注進。隨輕重或感或帖可施恩賞地事。

一不寄上下。討捕雜兵首者ニハ爲褒美料足百疋。士分ノ首ニハ千疋。不及注進早速可分與事。

一鎗下。又ハ太刀討ノ高名ハ。別ニ記付可差越事。

一敵ノ城。假令以謀略攻取リ勿論及合戰攻落

其款ハ具城主ニ可被仰付也。

一組頭ノ者ハ。勇才兼備。度量寛太ニシテ。可引廻諸勢器量ノ者可申付也。

一其方第一ノ嗜ハ。無依怙最負。士卒ニ眞實ナル盡情候ハ。諸勢モ可相立忠儀事。

一正士ハ不進。佞人時ヲ得タル顔ナラハ。其方裁判不明有私欲可存事。

一普請等無油斷可申付事。

一敵襲東アラハ。西ヲ可疑事。

一於敵地。能兵ナト含恨。其國ヲ去リ度ト有存者聞立呼取才覺可然事。

一弓鐵砲武具以下有用所。村井所之助方迄可申越事。

一當座々々爲褒美。料足二千貫遣候。猶以用次第可申越事。

一火ノ用心等不可有油斷事。

一諸勝負堅令停止事。

一敵方ノ事告知ラスル者ニハ可重恩賞事。

一小事ノ儀ニ感スル事多ケレハ。武勇ノ嗜迫ク成物ニ候。其心持肝要ノ事。

一敵付入ノ行有テ働ク時ハ。弱々ト有之物ノ事。

右條々相守此旨。可勤寛容大成ノ功者也。

秀吉隔川出敵地。可守要害望處ヲ。信長被感。許此役云々。

依之濃州有退治。先賜三千貫被附與力。番手ノ侍五百人。及雜兵三千人。信長被打入軍勢。同廿四日。從岐阜出奇兵。稻田見之。敵ノ足輕心有ヤウニ思ヒ。柵ノ外へ不出。一人堅固ナル体ヲ見テ。鬨聲ヲ舉テ引取ル。稻田蜂須賀等。此返禮ニ今夜可夜討トテ。兼テ敵ノ在々へ賂遣シケル處へ内通シケレハ。案内スヘキ爲ニ使者ト打連來ル。彼レニ道知ベサセ。勇士三千人。駈引ノ大將ハ蜂須賀梶田也。殿ハ稻田諸手ノ勢百騎計。各五六百人如輕卒。案内者三人ノ内。一人殘人質。秀吉ハ留城。若敵於付入。二三人可拔立込云令半向北燒在家二三間。無人聲弓箭ノ音。稻田カ曰ク。今夜謀宜カラント云シニ。俄ニ物音騒シケレハ。稻田青山以松明爲迎出向之。夜討ノ士勇進テ首十三。分捕余多シテ來ル。秀吉感之献信長。

謹而奉言上。昨廿四日從岐阜率數千騎令出張訖。其行曾不强付入ノ術無所疑之條。柵ヨリ外へ一切不可出旨堅制止之處ニ。敵失所思圖。何ノ無仕出事引入ノ條。唱歌。以弓鐵炮聊送テ。頓テ引飯候。然處ニ番手ノ者トモ。昨夜於敵地入夜討致手柄候者五人并討捕ル首十三進上申候。可然ヤウニ御披露所仰候。恐惶

永祿九年九月廿五日木下藤吉郎秀吉

福富平左衛門殿

村井所之助殿

信長卿感悅。物初好ト被許御旗并御持鎗持筒。達年來望。夜討ノ者爲褒美八木十石宛五人ニ賜。領知五十貫宛。稻田カ被感指圖。賜御書并羽織。

一濃州鶴沼城。大澤次郎左衛門。秀吉以謀略屬味方。十二月十日注進信長不怖我武勇。其方

依長謀略也。被感之。秀吉成城主。爲陽春ノ
拜禮。永祿十年正月五日。具大澤候清瀨。信長
ノ曰ク彼レ大勇ノ士也。變心有後悔不許之。
秀吉曰。於敵地以謀引入味方事大澤初也。然
ルヲ被害。向後ノ計略難成。再三雖請宥免無
許容。然シテ飯宅呼大澤曰ク。於汝身上有大
事。我ヲ取人質可退。拋刀脇指。大澤雖爲勇
氣。愚ニシテ不知道理。如尋常人質短刀ヲ當
胸。入夜飯濃州本處。信長驚テ被宥之。濃州
治テ賜三十貫。

一 永祿十二年正月六日。三好ノ一族襲義昭公。
攻六條本國寺。同九日信長於岐阜聞之。駢來
其内ニ三好カ凶徒敗ス。

一元龜元年六月廿八日。信長ト淺井朝倉ト戰
姉川。二十四歲。

同三年七月十七日。義昭公奔槇嶋。(槇カ)信長涉宇
治川被追討。遂ニ被宥之。被放西國。本ノマ、三

十六歲

一天正五年十月十日。松永彈正於和州信貴自
殺ス。四十一歲。

一同六年信長欲征西國。先和播州三木別所小
三郎長治。別所和之。而シテ請大將。

別所小三郎ハ村上源氏具平親王廿六代赤松
圓心カ末葉也。領播州東八郡。居三木ノ城。
毛利輝元退治ノ爲大將。被命羽柴筑前守。依
君命三月四日出洛。同七日至播州加瀨屋館。
行列ノ次第驚耳目。前駢後騎從之。軍勢七、
五百余騎ト云々。長治迎之。伯父山城守賜孫
右衛門出向奔走ス。國士各敬之。而シテ山城
守三宅治忠來。此評議ノ次ニ被問當家ノ軍
法。兩人說之。依爲緩々法式不應。秀吉心被
嘲。尤對揚軍勢ニハ可然在ラン。向大敵微勢
ノ軍ハ討不意。以謀術也。各ハ先陳ノ役。吾
ハ賜大將任。可行號令云々。兩人立飯テ訴長

治。長治怒テ惣テ賜大將可爲信忠信雄乎。不然可爲一門內事ナルニ。凡下ノ秀吉當時雖有軍忠。對長治自由ノ至也。所詮不如變約云々。舍弟ノ小八郎十七歲進出。軍ハ發不意必有利云々。某ニ被付四五百人。夜更切駈本陳。可討秀吉謀之。同名甚大夫曰ク。御謀不無一理。然トモ一國一郡ノ大將。不憑加勢可討取。隣國計時ハ尤也。信長ハ天下ノ草創大器ニシテ。秀吉程ノ小將五人三人討死シテモ不事闕。互ニ立敵色合戰ノ駈引會尺セハ。敵ハ佗國ニシテ可勞糧。乘其弊借毛利援兵於遂合戰。秀吉可敗。以其競天下ニ可立旗云云。長治モ山城モ同之。國中へ成號令志方ハハ。櫛橋左京亮。神吉ハ民部大輔。淡川ハ同彈正忠。高砂。梶原平三兵衛。野口。長井四郎左衛門。端谷。衣笠豐前守彼等ノ取人質。各守居城。其外ノ小城。

上月。中村。高橋。服部。後藤。長谷川。神澤。大村。光技。上原。魚住。加吉。加須屋。來野。垂井。飯尾。藤田以下。七千五百余騎楯籠三木城。秀吉察之招長治伯父別所孫左衛門重棟。三木別心曾テ不心得。今度西國發向ノ事。信長偏ニ被任置長治處也。何ノ在不足變約乎。貴方知之乎。如何云々。重棟努々不知之陣。於其儀。以書簡可賺長治云々。依仰通書不及返答。依之秀吉三月廿九日圍三木城。數代所築峻難ノ地。武勇ノ侍八千余騎。士卒一致堅陣守之。

秀吉魁兵城邊。近々ト押寄。谷々放火シテ。輕々ト引取。殿ニハ被命舍弟小一郎秀長從城欲慕出。城中ニ有諍論者。依之止ス。秀吉巡見シテ所々ノ端城。各守要害。圍三木城時ニ。從諸方可後詰謀也。引違敵行從弱方可攻

討。四月三日早朝攻長井野口城々主武勇ノ士堅固ニ守之。寄手ヲ近々ト引付發矢石依之手負死人不知其數。後ニハ揃大筒。段々ニ令打之。味方半町計引退。秀吉ノ以下知刈取草木青麥等。埋涅塗成平地三日無透間攻之。見諸卒疲勞。秀吉高聲ニ攻城法ハ急ニ乘入レハ。忽得利。率手廻三百余人被乘入。先陣耻之。一度ニ攻入。外面ノ塀四五十間破リ。已ニ乘取ノ處ニ。長井請和。秀吉宥之得之。天正七年二月五日ノ早朝。三木ノ諸將來會ス。座上ニ長治ヲ初兄弟三人叔父ノ山城守。其外一族双二行長治ノ曰ク。近年野口神吉落城全ク非諸軍拙。偏ニ長治カ依謀愚。敗軍ノ將ハ再ヒ不謀云々。此上ハ各可被計アレハ。久米五郎。志水彌四郎。從末座近出。明日軍ハ分二手。一方ハ城州大將ニテ。秀吉ノ懸先陣被初一戰。一手ハ小八郎大將ニテ我

等加リ。從東山麓駈出。秀吉旗本可決勝負云云。翌朝二手ノ大將ハ山城守。別所左近。小野權左衛門。櫛橋彌五三。足輕ノ頭ハ室田内匠。樣隅越中。岡村因幡。其外高橋源太左衛門。神深民部。加古右京。大村九郎左衛門。小寺若狹。黑田右衛門尉。廣岡藤九郎。矢田太郎左衛門以下侍七十二人。惣シテ二千五百騎。後陣ハ別所小八郎。侍大將ハ別所甚太夫。同三太夫。光枝小太郎。同道碩。足輕頭ハ久米五郎。志水彌四郎。其外服部五郎左衛門。後藤又左衛門。加須屋玄番助。乘井武藏。有田兵庫。端山左馬助永郎。魚住以下六十三人。七百余騎。勇進テ押出シ。前ノ小川ヲ乘渡シ。鶴翼ニ陳ヲ取リ備之。秀吉自山見下シ。敵寄セ來ルン出向ヘト以軍使被觸。互ニ懸足輕。初矢軍。而爭先。若武士五騎十騎懸出懸出相戰。後ニハ入亂盡粉骨。軍半ナル處

ニ。三木方ノ二陣少シ進出シ。イカナレハト見ル處ニ。東ノ山ノ岨ヲ駈上リ。秀吉ノ本陳ヘ切懸ル。秀吉ノ號令今日ノ軍ハ勝タルソ。其故ハ敵味方隔十余町。其間人馬ノ足ヲ勞カシ。備亂レ處ヘ切懸ラハ。必可得勝利云云。居ナカラ逢敵成陰氣損多シ。可守我耗敵。間半町計ニシテ懸レト加下知。軍兵一度ニ上関聲駈出ル時ニ。羽柴小一郎秀長平山ノ腰ヲ廣場ニ駈出。入一番鎗。兩軍入亂相戰。双方戰勢レ別東西。半ハ手負討死ス。已ニ三木方半町計引退。敗軍ト見ヘシ時。久米五郎。志水彌四郎打取タル首ヲ貫切先。大將ノ入見參。多勢押分々々通ル。秀吉ノ下知シ給フ處ヘ。十間計ニ成テ兩人抛首走懸ルヲ。在合人々怪ミ。引組テ討取ル。従是三木方敗軍ス。秀吉ノ勢追北疾シ。三木ノ大將小八郎引返シ。踏止。近習ノ侍百五十騎返シ

合。以馬上鐵炮五間六間ニシテ打ケレハ。無流矢於是寄手ノ兵多以討死ス。サレトモ秀吉ノ以武威追立。攻戰已ニ及敗北時。小八郎以鎗懸入處ニ。寵愛ノ小姓本卿采女引止欲先駈。フリ切駈入。樋口太郎得此首。十四五騎處々ノ敵ヲ追拂。小八郎死骸ノ前ニ跪キ自害ス。山城ハ味方ノ見敗。高地ニ居馬卒百騎計。寄手侮小敵打テ懸ル。城兵ノ内上月宮内。高橋彌五左衛門。神澤又市。上原越中。同孫之允先登シテ。双馬鼻待來敵。跡ニ續ク百余人駈出ル。寄手ノ五百余騎ヲ半町計追返シ。跡ヲ見レハ。櫛田傳藏。飯尾長吉。藤田惣六手ノ者廿人計引具シテ近付。敵ヲ待ツ。廣瀬左衛門佐引返馬頭曰ク。此若武者トモ敵ニ被取籠。一定可被討。連レテ飯ラント云。山城守カ曰。知此殿ヒシタルキ者ハ捨テ引物ト下知スレハ。三人モ付跡引ヌ。退後レ

タル武者二人傳畔返者アリ。寄手八騎追、レハ近々ト成テ。二人ノ者道ノ左右ニ立双。追來ル敵ヲ三騎討取。高聲ニ名乗ハ。敵モ敵ニヨルソ。別所普代ノ侍飯尾吉左衛門依藤ノ某ト云々。秀吉感之。沒落ノ後尋出シ可召仕。不可討之宣フ。其日三木勢三十五人。雜兵七百八十余人討死ス。秀吉二度上勝関被引取本陣。二月六日平山軍也。

丹生ノ山合戰。淡川救之。此山嶮難ノ地也。近邊ノ一揆二千計籠之。秀吉聞之。イカニモ達者ニシテ。夜討ニ馴タル兵三百人スクリ入。風雨夜忍行難切ニス。城中驚騷。不云谷岨落失ヌ。半時ノ中ニ乗取之。爰ニ淡川彈正集一族云フ。近邊丹生山ノ一揆ヲ秀吉賢キ謀ニテ討。此上ハ當城ヘ可押寄以謀可得利。一族郎等五六千人。足輕人夫三百余人。普請具ヲ持セ。日々出城。敵ノ可乘道ヲ堀切

リ。落ヲ拵。或馬サクリ。車菱ヲ蒔。逆茂木ナト引懸ル處ニ。何者カ云ケン。今朝彈正忠出城塞道告秀吉。城主小勢ニシテ出城與天處也ト。舍弟秀長ニ五百余騎分ニ手押出シ。已ニ欲駈入。然トモ所防難所ニ被障少シ源ヲ淡川一族五十八人スハタニテ切テ懸ル。淡川制之止テ。足輕トモヲ近邊ノ遣在家。陰馬一疋宛引來ラン者ニハ錢ヲ可與云聞セケレハ。打散テ從方々五六十疋引來ル。彼馬ヲ追放敵軍敲手上聲。陰馬駈亂セハ。數千ノ馬トモ刎廻リ。陣中散亂ス。彈正思フ圖ニ謀テ。五十余輩ノ若者トモ切懸レハ。秀長ノ三百余人敗北ス。弟ノ新三郎城ニ在ケルカ。見馬煙駈來追北討數百人。然處ニ一家ノ江見又四郎カ曰。今日ノ手立ハ非凡慮。明日ハ可被發大軍。以此競三木ヘ被取籠可然。淡川尤トテ。燒拂城加三木。大村合戰中國ノ援兵。

吉川駿河守。小早川左衛門佐。兵糧二百餘艘押寄。明石。魚住持大將ニハ乃美部兒玉内藏太夫。其外紀州賀ノ者トモ海邊ニ築要害。舟ヲ引付ル。秀吉ノ曰。三木ト魚住ノ間ヲ取切不可留敵通路。初君峯方々へ出人數向城構三十余。毛利家ノ諸侍評シテ曰ク。秀吉奇妙ノ將也。僅六七手ノ軍勢ニテ打圍六七里。我輩三木爲後詰來。此徒ニ送日數。天下ノ人口悅之處也。定三木相圖可遂一戰。忍テ三木へ入人來十日丑ノ刻押寄敵陣。可始合戰。見狼煙從城中可被出向。一戰ニ可決安否云遣ス。從城返答ニ武略尤可然。サレトモ城中糧盡及難義。九日ノ夜可遣案内者人夫ヲ以可被入糧城中云々。至當日。從城案内百余人交兵具出魚住九月十日丑ノ刻。藝州ノ住人生石中務ヲ爲大將。先秀吉ノ與力谷大膳居平田付城中國勢押寄。上鯨波打テ入。夜中ナレハ

周章シテ失十方。大膳手ノ者八騎ニテ披大手城戸。切入大軍。堀柵ニ付タル敵十方へ逃散。雖然微勢ニシテ味方大半討レヌ。敵大膳ヲ懸目取籠ル。サレトモ無隱勇士ナレハ携長刀働ヌレハ。敢テ無近付者。稠キ戰シテ遂ニ討死ス。此戰ノ内。三木方手島市之助土橋平之允。渡邊藤左衛門下知シテ。以七八十人夫運兵糧。平田ノ後ロヨリ運ハセケルカ。曙ニナリ大村ニ著テ上糧煙。平田ノ城以ノ外色メキ立テ見テ不構兵糧ニモ。手島土橋ハ横合ニ平田ノ城ニ押寄切崩堀柵。三木ノ兵(狼カ)見糧煙則駢出。切入平田城。大膳カ手ノ者堅固ニ防之。中國勢モ是程ノ小城不攻討引取モ弓箭ノ瑕瑾ト入替々々攻戰。秀吉見給。則時ニ被駢付。一千余騎不取敢駢付ル。秀吉ノ曰。是程定相圖合戰ナレハ。敵一手ニハ働マシ。南北ニモ手立可有。心ノ配ラル、處

ニ大膽討死ス。於後詰延引當城落去無疑注進ス。秀吉不聞敢。鞭馬駢ル。隨兵乘繞。中國ノ軍士欲揉合。秀吉名將ニテ三木ト大村ノ間ヲ可押隔。從笠坂上打テ懸ル。別所山城大村ノ前ニ率三千余騎靜テ扣ル。見秀吉大軍。アキレテ馬ヲ駢居ケルカ。秀吉上大音下知シ給フ。平場ノ軍ニ請大敵。如尋常出合出合戰ハ必味方可失利。捨命戰ヘト味方ノ軍ヲ鋒矢ノ陣ニ押直シ。イナリ懸リニ突懸レハ。三木勢扣鶴翼中ニ取込欲討。秀吉ノ下知ニテ四方八面ニ懸拔懸破リ戰ヘハ。三木勢不叶引退。敵息ヲ不續追討ハ。別所甚太夫。同三太夫。同左近。光枝小太郎。同道碩。櫛橋彌五三。高橋平左衛門。三宅與平次。小野權左衛門。砥堀孫大夫大將十人手ノ者九十六人一度ニ取テ返。散々ニ戰。一人^モ不殘戰死ス。爰ニ淡川彈正稠ク戰テ。深キ^{ス脱カ}・余多負ケ

ルカ。主從五人ニナリ細道ヲ退ケレハ。敵十四五騎ニテ追駢ル。次第ニ弱リケレハ。彈正カ曰ク。今ハ當敵ヲモ難討。以謀最後ニ可討當敵。芝居ニ伏。拔刀手ニ手ヲ取組自害シタル休ヲシテ俯シ伏ケレハ。敵乗寄テ欲取首。近々ニ寄セ伏ナカラ拂切ニスレハ。敵五人膝ノ口ニ薙落ス。殘ル敵ヲ追拂。面々提首互ニ自害ス。古今ノ武將也。秀吉ハ敵ノ返合返合見働休。馬廻二三百一處ニ打寄。馬印ヲ立置。自身四方ヲ乘廻シ。馬印ヲ日當ニ不殘可引取下知シテ。大軍ヲ片時ニ被引取。其日三木ノ大將分七十三人。都合八百余人討死ス。三木方彌失氣。

秀吉大村ノ軍ニ得勝利。付城ヲ次第ニ付寄。南ハ八幡山。西ハ平田。北ハ長屋。東ハ大塚。追付寄向城敵城ヲ間僅隔五六町。堀ノ高サ一丈余。二重ニシテ其間ニ入石搔楯。西樓ヲ

高ク上前ニ引逆茂木。口々ニ居番。改往來通路。後ニハ諸國ノ軍勢双陳屋。燒箒。夜番無隙近習ノ侍分六番三百人宛改役所書付名字守之。城中十余日斷食云々。秀吉上高地。城中ノ見煙雲氣。知城弱氣。天正八年正月六日ニ。宮ノ上ノ要害ヲ命馬廻取破ル。諸軍ヲ被寄城際三町。十一日南ノ構ヒ付人數山下ヲ放火ス。秀吉秀長兩將ニテ彦ノ進ノ鷹尾ノ城。山城守ノ新城ニ懸入給フ。城兵力盡氣衰ヘ。鎧重シテ難働。各若侍三百余人スハタニシテ切先ヲ揃ヘ切テ出ル。心計ニテ足手不働。不報當敵。爰彼エテ討レ伏ス。老武者ハ大手ノ開木戸。各一面ニ座テ三十八人切腹ス。秀吉首トモ實檢シテ被押寄詰城。三木ノ守護十四代。別所小三郎長治。舍弟彦之進友之。城中糧盡軍士取銚無力惣シテ軍シテ尸ヲ東土ノ懸馬蹄。可口惜無如自害云々。友

之調一封書送秀吉曰ク。我等兄弟山城守令自害。於被助士卒幸ナラン。命近習宇野右衛門佐。達淺野彌兵衛長政。持帖供使者。秀吉前披之。

唯今申入意ハ。去々年以來敵對ノ事雖不無其故。今更不能述素意。併時節到來。運已ニ極ヌ。何ノ嚙臍乎。長治。友之。山城守三人。來十七日。申ノ刻可切腹定訖。士卒等以憐愍於被助置。今生ノ悅。來世ノ樂何カ如之哉。此旨宜被披露者也。

天正八年正月十五日 別所小三郎長治

淺野彌兵衛殿

秀吉暫ク塞日低首廻思慮。命淺野酒肴種々持人夫相添返帖渡遣使者。使者飯テ長治ヘ献返簡。

書札到來令披見。今度從籠城初。至于今。每度ノ合戰。一トシテ無不當理。雖失勝

利。更ニ不可謂性。(愧カ)雖然運命難遁。來ル。(十脱カ)七日申ノ刻。長治。友之。吉親。被致自害。殘

ル士卒雜人以下被助申度ノ由。誠ニ大將

(愛カ)

受士道。前代未聞可謂良將。感其心落涙不

留。右三人於生害。軍卒赦免ノ事不可相違候。猶從淺野彈正方。可申達候。恐惶謹言。

羽柴筑前守

正月十五日

秀吉

別所小三郎殿

不達期十七日ノ早朝入簾中。山城守ノ内室刺殺三子。自ラ刀ヲ□口俯ニ成テ死ス。長治見之。刺殺三歳ノ男子。害自内室友之妻。出大庭七人一處ニ葬之。兄弟共ニ出客殿自害ス。

長治二十三友之二十一三宅治忠乳人介錯シ。以其刀自害ス。吉親ハ城中ニ懸火可戰死云々。依之於櫓生害ス。

翌十八日被看諸卒出歩ス。三人ノ首献洛下。信長公攻取當國端城ノ御着 志方 魚住等屬平均。秀吉ヘ賜感帖。則移三木。清穢地。穿堀。引直退散人民。定制法四十四歳別所退治ノ後。備作ノ太守宇喜多八郎直家屬幕下。

天正九年六月廿五日。秀吉出張播州姫路。至同州所々放火ス。鳥取ノ城主山名 豐國號禪高。并輝元ノ援兵吉川式部少輔。森下出羽入道與。中村對馬守等堅固ニ守之。彼山ハ高峯峨々トシテ訖立ス。西北ハ蒼海范々トシテ湊川帶城。雖然秀吉圍之。隔二十町築向城防藝州後詰諸手□配軍勢。同ク從廿八日朝朝ク攻之。從七月朔日。築付城入杉原七郎左衛門敵城三ヶ處ノ間ト遮鳥取。無藝州便。海上ニハ命松井猪之介荒木勘十郎浮番船數艘守之。其内ニ籠城糧盡餓死倒傍者不知數。後ニハ雖食牛馬肉不足。依之山名ハ降參ス。援兵

三人以福光小三郎使淺野彌兵衛。代諸卒三將可及生害請和。秀吉被感義禮被許容。送酒肴。十一月廿五日。命堀尾茂助爲檢使。三將切腹ス。吉川カ小姓坂田孫次郎十七歳福光小三郎差違殉死ス。秀吉痛諸勢以奉行與稀粥養之。其後以米三百石被施之。城中掃除イテ賜宮部善禪坊五万石。

一從去六月及十月下旬攻鳥取城。昨廿五日落去可休諸軍勞之處ニ。爲攻伯州南條勘兵衛居城羽衣石。小鴨左衛門尉城岩倉。吉川駿河守率多勢有襲來告。爲救彼等急難出勢ス。其日ハ龜井新十郎居城鹿野ニ著陣シ。翌日鎧畠ト云處ニ陣取ル。吉川出合陳馬山。以蜂須賀小六郎。木下平太夫三千余騎押之。在々放火シテ奪兵糧等籠南條小鴨合力。弓鉄炮步兵三百人可遂年内籠城從城取寄雖懸合戰出不可戰下知シケレハ。兩人是迄ノ出張不可

勝計。從當月深雪埋山。敵モ在陣可難成。秀吉ヲ進テ令在歸陣。來春可有進發約シテ。十二月十一日至姫路歸城ス。四十五歳。

一天正九年十二月廿日。立姫路至安土。以菅屋九右衛門堀久太郎祝歳暮。則兩人ヲ爲御使因幡鳥取ヲ攻捕大將三人ノ首到來。其後南條小鴨カ救急難。感悅不斜。可賜明朝養膳之旨申宣ル。先御禮ニ登城シテ被謝明朝饗應。兩人達之。先可有對面被召出。因伯ノ物語及深更。從曉。進物ノ臺二百余運山上。信長公從殿守上覺被感大器。(覽カ)

翌朝秀吉登城ノ進物。

御太刀國久。馬代白銀千枚。吳服白。鞍馬十疋。枳原紙三百束。馬皮二百枚。明石干鯛。蜘蛛野里ノ鑄物色々。

御連枝簾中方善畫シ美盡ス。信長卿有感被招茶店。被加丹羽五郎左衛門。長谷川丹波

守。醫ノ道三被見名物珍器。則以堀久太郎賜暇下先老相傳國次短刀。

淡州退治被命秀吉ト池田勝三郎 天正九年十一月十五日

令渡海圍安宅河內守由良城。稠ク攻

之。安宅難堪降參ス 向後可盡忠儀。以蜂須

賀彥右衛門伊木清兵衛陳之。 兩將信長卿

へ達之。則被宥之。得彼城。秀吉ハ飯姫路。池

田伴安宅至安土。聘禮シテ賜安堵奉書。十二

月二日坂本國

一天正十年三月十五日。秀吉卿發兵。爲毛利輝

元退治出張備中國。廿二日勦軍勢刻冠山ノ

要害依不慮失火。諸勢駢付乘取之。城主ハ

清水長左衛門。一味林三郎左衛門。鳥越左兵

衛。松田左衛門 是ハ往昔備中半國守護。率々シテ加

之。以此競圍スクモ塚穢多城。怖秀吉威風忽

ニ降參ス。然シテ從四月十二日押寄高松雖

賺之。清水勇功士ニシテ。更ニ不傾。弟月清。

子右衛門。中島大炊。林與三。荒木一類并湯

淺新藏等都テ六千余騎楯籠之。秀吉 四月十四

日未明ニ。登高松上龍王下云山巡見シテ。秀

吉卿宇喜多カ軍勢以六万余騎押寄ス。城中

モ發矢石。互ニ引入ル。五月十二日輝元爲後

詰出張シテ陣猿掛。岩崎ノ間三里余。魁首吉川

元春。小早川隆景。五万余騎。廿日陣岩崎ヒサシ

山。秀吉卿ハ五月七日高松ノ上蛙鼻云處へ

被寄陣。此城三方深泥ニシテ難寄。從翌日築

塘。堰入蛛津川穢多川。一日二三度宛諸軍

揃鉄炮發鬨音。黃梅ノ時節恰如湖水。城兵苦

之。バンキウト云フ手先。秀吉卿ノ攻口ハ中

島大炊一族。荒木一類稠ク守之。池ノ下ハ

宇喜多カ攻口。林與三。片岡助兵衛。林與九

郎。鳥越五兵衛防之。從降景來近松左衛門。

從元春栗屋信乃加之。城中水湛。依之集板造

船三艘。棹之來往ス。寄手ハ大船三艘引入塘

下。組合之。其上ニ構栖樓。衝楯。以熊手等欲破堀柵。城兵設其防。夜白鳴貝鉦打鼓攻之。五月下旬秀吉卿招安國寺被談和睦。伯州ハ限矢橋川。備中ハ河邊川ニシテ。中國悉ク令領知。於清水切腹可達信長和平云々。輝元ノ曰ク。國分ノ事ハ兎モ角モ。累年忠功ノ清水切腹不心得。再三依之儀絶ス。然處ニ蜂須賀彥右衛門。生駒甚助談安國寺曰ク。近國ノ諸將悉ク屬秀吉諫輝元云。

此僧語清水曰ク。雖調和平。輝元憐貴方被變和睦云々。清水聞之。大守ノ慈悲難勝計。我故不可破和儀。以此僧秀吉ヘ告可切腹旨。秀吉彼カ被感至功。

信長公ハ不聞給和睦。依可有中國出馬。先立テ被命明智日向守。筒井順慶。細川兵部太輔父子。池田勝三郎父子。中川瀨兵衛。高山右近等三万五千余騎。信長公五月廿九日安土出張。

被寄宿洛下本能寺。信忠ハ被陳一條妙覺寺。光秀以其次從丹州龜山發兵。六月二日奉弑信長信忠。翌二日子ノ刻長谷川宗仁告高松秀吉ハ不密信長公ノ□。告敵陣ヘ以使介可被破先和平否ト云々。輝元以內藤越前可被遂舊君吊戰條神妙也。全ク不可變兼約云々。依之清水弟月清。子右衛門。難波傳兵衛。近松左衛門尉等。六月四日浮舟上一聲自殺ス。高市允介錯之。從秀吉以堀尾茂助檢之。士卒悉ク宥之送り遣ス。元春隆景使安國寺調和睦。同五日秀吉直家拂陳。一日一夜經廿七里打入姫路。輕可息人馬處。光秀語織田七兵衛信澄手合河州旨。八日酉ノ刻聞姫路。信孝於生害可爲武勇瑕瑾。九日出姫路。十一日至攝州富田。大坂ヘ以使。其間ニ信澄カ與力朽木河内吉武次左衛門夜更。來丹羽長秀宅。兩人ハ依所領。假リニ屬信澄者也。依信長公ノ不

忘芳恩。告信澄逆心。明曉信孝長秀攝州出勢ノ時。信澄發兵。使長柄川不殘可討取謀之云。長秀感之。相議信孝。未明ニ攻入千貫櫓。微勢ニシテ剩被越先難防自害ス。家人持首渡長秀。上田左太郎。堀久太郎入大坂。謁信孝。十二日信孝長秀出張攝州。秀吉出向富田堤頓首沈紅淚。各軍法事了テ十三日依手先陣ハ高山。二陣ハ中川。不交他勢出山崎閉木戸守之。堀久太郎池田ハ山崎ノ外寄川際立備。

信孝ハ信長公在世ノ時。四國發向ノ爲將。艦泉州。信澄長秀ハ自元在大坂。依之兩人以使令迎大坂移本丸。

光秀弑兩君。四日駟下安土。定制法令守。同名左馬助佐和山ニ入置。荒木山城父子。催江州諸將出洞峠。雖催筒井。不隨惡逆黨。迷進退處ニ。秀吉忽ニ從中國發。駕旨謳歌ス。依之

光秀從淀過久我繩手。率江州兵。出青龍寺表。定軍法。魁首松田太郎左衛門先鉄炮三百挺并河掃部等丹波ノ國人七人。二千人向西山。

先陣ハ齋藤内藏助。柴田源左衛門二千加勢阿閉淡路守息孫五郎。池田伊與守景雄。後藤喜三郎。多賀新左衛門。久徳六左衛門。小川七佐守等不意難背加光秀從之。都テ及五千余騎。津田與三郎二千。右軍ハ伊勢與三郎。諏訪飛驒。御牧三左衛門二千。光秀カ旗本五千。味方ハ高山二千。中川二千五百。池田五千。丹羽三千。信孝四千。秀吉ノ勢二万。都テ四万余騎也。然處ニ堅田猪飼被催光秀出之。彼レカ子堀力陣ニ在リ。爲子告翌日明智軍法達之堀。堀甘心シテ深更ニ從寶寺攀上天王山。松田隔谷雖押上堀先立テ打懸鉄炮。依之松田力輕卒敗ス。高山見之。開山崎北門切懸ル。伊勢諏訪御牧等出合攻戰フ處ヘ。中川駟合。池田突

懸横合。三人於此戰死ス。光秀御坊カ塚ニ備五千余騎。已ニ欲駈出。比田帶刀取轡引入青龍寺。中ノ刻着到ニ不過千騎。夜更明智勝兵衛。進士作左衛門。村越三十郎。堀池與次郎。山本義入。三宅彌十郎。隨從シテ過伏見。小栗栖ニシテ當鄉人鉾極運難遁落馬。各雖介錯絶入ヌ。無爲方討首投叢退散ス。五十五歳。首ヲ村春長カ家人拾取求死骸。六月十四日磔日岡。十三日進入青龍寺。時秀吉命堀久太郎曰ク。光秀可逃散坂下。汝經東寺可遮山科云云。如案弃諸卒退散シテ羅雜人乃死ス。明智左馬助同日亥ノ刻於安土聞味方敗。十四日ノ曉懸城中火攻上ル。瀬多ニシテ行逢敗軍。山岡美作燒橋。則時繼之至大津濱時。堀久太郎於相坂見之。雖馬鞭乘駈敵急取入坂本城。光秀カ子男女六人生害シテ殿主ニ懸火自害。又左馬助二十六歳。

明智勝兵衛高山次衛門一處ニシテ自殺ス。
同名
 齋藤内藏助ハ退出シテ隱山林。虜鄉人。引秀吉陣則梟首。

光秀六月二日弑信長父子至安土。其間蒲生右兵衛忠忠三郎。伴簾中方我入日野谷。
俄歟
 光秀定安土制法殘左馬助。十日入坂下催江州諸將。

一信忠ノ幼君三歳命前田玄以從岐阜令入清瀆。
 後號岐阜黃門。

一秀吉取聚兩君骸骨。下清瀆謁幼君。柴田修理亮勝家モ越中表仕置シテ。爲吊戰欲發軍勢。難然光秀生害ノ告從信孝秀吉使節。十六日逢江北柳瀬。從是勝家モ至清瀆。池田父子。丹波。筒井。蜂屋等各爲次目禮。候尾州謁幼君。十五歳ノ内預闕國。尾州ハ信雄。濃州ハ信孝。丹波ハ秀吉。大坂兵庫ハ池田勝入。若州并江州ノ内志賀高嶋ハ丹羽長秀。

若公ハ令居安土。以長谷川丹波前田玄以傳之。

勝家雖來清湏。各先テ定國法。曾テ不應勝家心。已ニ及口論立座。秀吉ハ有心飯長濱。欲遮柴田還路。勝家ハ侮之。入清湏旅館。如例遊宴酣也。佐久間玄番使人窺秀吉宅。從宵飯長濱云々。依之勸勝家還路處ニ。秀吉從長濱以使。無天下相續謀。被任我意條。似忘舊君厚恩。於其儀。飯國難叶云々。勝家彌雖怒。玄番宥之。來春可被任心云々。然シテ秀吉請質不及力。殘伊賀守過越路。於此送酒肴。秀吉謂伊賀守曰ク。客ハ勝家カ養子也。從甥玄番賞少シ。勝家ニ於有恨無疎意可讓長濱。云含送北越。

同十月十五日。秀吉被執行亡君ノ葬禮於洛

下蓮臺野。然シテ築城山崎寶寺令守畿内。幼君ヲ移安土。十五ノ内信雄爲後見。秀吉ハ爲立大功撫育万民。不寢夜白苦肺肝。於龍寶山大德禪寺。一七日被執行法會。後建徳見院。印塔一基白銀數千兩。寄附寺領三百石。

法事次第

十一日轉經。十二日頓寫并施餓鬼。十三日懺法。十四日入室。十五日闇維。十六日宿忌。十七日葬禮ノ儀式。棺槨以金紗金襴裹之。軒ノ瓔珞以下鏤金銀。八角ノ柱ハ畫丹青。八面ノ彩色以沈香彫佛像。從蓮臺野縱橫太也。四門ノ幕ハ白綾白段子。方百二十間ノ中ニ有火屋。如法經道造之。外ニ結埒。羽柴美濃守秀長警固ス。諸將從大德寺千五百丈ノ間。警固ノ武士三万余輩守護左右。以弓箭兵杖立續ク。葬禮ノ場秀吉分國ノ人數ハ不及云。合体ノ諸將群參ス。見物ノ貴賤如垣堵。龜ノ轅ハ池田古

新。後轅ハ羽柴御次丸。

古君ノ末子秀勝。秀吉ノ養子也。

昇之。

位牌ハ和公第八御長丸。御太刀不動國行秀吉持之。兩佛相連ル者三千余人。各著烏帽子藤衣。始五岳洛中洛外ノ禪律諸宗ノ僧侶不知幾千万。厥宗ノ威儀又手問訊ス。集會行道五色ノ天蓋映日。一樣ノ旗ハ飄風。沉水(木カ)ノ煙ハ如雲。灯ノ明之光似星。供具盛物龜足造リ花七寶ノ莊嚴。定九品淨土。五百羅漢。三千ノ佛弟子。如在面前。

鎖龕

怡雲大和尚

掛眞

玉仲大和尚

起龕

古溪大和尚

念誦

春屋大和尚

奠湯

明齊大和尚

奠茶

仙岳大和尚

取骨

竹澗大和尚

秉矩

笑嶺大和尚

偈曰。四十九年夢一場。威名說什ナニ存亡

請看火裡鳥曇鉢吹作梅花遍界香喝一喝

秀吉在洛外揮威旨。勝家聞北怒越ル。雖然雪前不任意。然處ニ瀧川左近依爲緣者密ニ告。

勝家曰ク。賺秀吉詐テ可有和睦云々。依之前田利家。不破彦三。金森五郎入談三人曰。吾秀吉和睦シテ可守立幼君云々。三人至江北長濱談伊勢守。同ク乘船。十月二日至寶寺談秀吉。秀吉曰。勝家ハ先公ノ功臣誰カ背之乎。大幸ノ旨賞客饗應善盡。四日客飯洛。十日各至北庄。秀吉ノ大悅ヲ告勝家。勝家内ニハ春來雖待雪消。外ニハ含喜悅笑。然シテ三人飯府中。

二十月中旬。秀吉以猛勢勦江北。柴田伊賀守老賺木下半右衛門。大金藤八。德永石見守。向後伊州事被演無疎意旨。伊賀守大悅シテ約諾ス。廿二日招家老。近年勝家ニ語有恨趣記十七ヶ條。家人等從之。

秀吉ハ丹羽。筒井。池田。細川。蜂屋幾内遠境ノ軍士率五万余騎。不厭寒氣至濃州入大垣。一國大半屬秀吉。成岐阜一城。信孝無爲方。

命丹羽長秀被和秀吉。秀吉曰。於若君御取立
爭カ在疎意云々。然ハ信忠ノ次男在岐阜。其
上信孝ノ老母ヲ移安土給ヘト約シテ。濃州
ハ十五六日ノ中平均ス。飯長濱。北國押ヘノ
築城々。入兵具兵糧。十二月廿三日候安土。
若公ヘ獻歲暮小袖十重。白銀二千兩。廿六日至
寶寺越年シテ。今度濃州出勢ノ傍輩ヘ聘禮
シテ被謝之。天正十一年・九月何月之二字脫歟。從午時飯姬
路。集近侍陪臣賜賞祿。

一安土ニハ若公後號岐阜中納言幼稚ニシテ信雄
補佐シテ被執行元日朝禮。秀吉七日從播州
上洛シテ參内。翌日從大津乘船至安土。翌朝
禮兩公。五日滯留シテ柳瀬巡見。正月中旬令
飯寶寺。

一秀吉廻思慮。北越殘雪ノ中先瀧川ヲ可討。從
正廿三日出草津邊軍勢七万余騎分三手。土
岐多良ハ舍弟美濃守。筒井。氏家。稻葉二万五

千。君畑口ハ三好孫七郎秀次。中村彌平次堀尾茂
助等從之二万余騎。秀吉率三万余騎亂入安樂
越。瀧川爲可防之道筋ニ構取手。從秀吉敵ノ
城々ハ遣押兵經閑道入勢州。一益支度相違
シテ。秀吉ノ三万余騎押入桑名。近邊放火。
瀧川從長嶋中井桑名持續守。秀吉取上矢田
山有手遣。一益モ矢田ノ古城ヘ輕卒組合侍
四五百人押上ル。先陣ハ中村孫平次敵ヲ可
追立被命之。一益旗本丈夫ニ立堅メ。自身ハ
出先手敵テ會尺シ。輕々ト引取ル。秀吉モ被
打入取懸龜山。瀧川僅以六七千ノ勢。三手ノ
防敵事不足。如病鶴翅翎ノ短。秀吉秀次ハ一
益甥ノ義太夫カ楯籠ル攻峯城。龜山ハ佐治新
介籠ル。

秀吉ノ先陣。閏正月廿六日ノ朝。破堀棚燒拂
山下。夜白無隙攻戰ヒ。以金堀崩坤矢倉。已
ニ落城ノ處ニ。從瀧川內通シテ成降人渡城

遁出。長嶋龜山ハ奉信雄。嶺ノ城。關ノ地藏ハ。自外堅堀柵。爲攻手。當國ノ住人關安藝守入道万鉄齋。木村隼人。前野少右衛門。柳市介。山岡美作。青地等ニ定軍法。秀吉ハ被赴江北。有柴田出張告云。

天正十一年二月七日。柳瀬可出張云々。前田孫四郎利家爭魁。續ク勢ハ不破彦三。佐久間久六。原彥次郎。金森五郎八等也。玄番大將ナレハ跡ニ打シカ。押東野城立備前後一万五千。在々處處分入テ燒立上凱歌。柳瀬邊ヘ打入軍勢。同十日押天神山木下兩城。玄番勳出。今度ハ井口川ヲ切テ放火セントノ義ナレハ。取手ノ城々ニ押ヘノ勢ヲ方々ニ置テ燒勦也。

秀吉著陣ノ事。去七日北國勢出張シ。木本邊放火ノ由至勢州注進アリシカハ。則翌八日龜山ヲ立テ江北發向。十日ノ暮長濱著陣。玉

藤川井口邊今日令放火由被聞。半日早ク來ラハ可討留物ヲト怒ラル。翌朝志津嵩邊ヘ押出シ。惣軍備十三段。一番堀久太郎。二柴田伊賀守カ勢。三木村小隼人堀尾茂助。木下將監。四前野勝右衛門。加藤作内。淺野彌兵衛。一柳市介。五生駒甚介。小寺官兵衛。明石與四郎。木下勘解由。大鹽金右衛門。山内猪右衛門。黒田甚吉。六三好秀次。中村殘平次。七羽柴美濃守。八筒井順慶。九赤松次郎。蜂須賀彦右衛門。伊藤掃部。十赤松彌三郎。神子田半右衛門。十一長岡與一郎。高山右近。十二羽柴御次丸秀勝。仙石權兵衛。十三中川瀬兵衛。此次ハ秀吉近習馬廻弓鉄炮一万五千ヲ備三段。敵味方先手ノ間不可過十町。鉄炮足輕計ニテ其日ハ相引也。翌日未明足輕ニ紛レ。古老ノ侍十騎引具シ。峯ヘ上テ敵ノ屯ヲ見給フニ。急ニ可破アラス。敵

ヨリ可討入ヤウモナシ。彌取手ノ要害丈夫ニ拵。兵ノ加勢シ。惣軍ハ可打入。老臣ニ評義シ。伊賀守カ勢ヲ入置シ天神山ノ城出過益ナシトテ。十町引退。本山ニ構要害。在禰山ヲモ丈夫ニシテ。堀久太郎ヲ入置。志津嵩ノ尾崎中川瀬兵衛。隔七八町高山右近。志津嵩ニハ美濃守内桑山修理。田上山ハ美濃守居城也。

遊軍ハ蜂須賀彦右衛門。生駒甚介。神子田半右衛門。赤松彌三郎。明石與四郎。小寺官兵衛。二万五千也。何レモ弱カラシ乎ヘ可助成事也。

海津口ハ丹羽五郎左衛門。率一万余騎從坂本出張。四月朔日秀吉被入長濱打城主柴田伊賀守。依重病爲保養上洛ス。

伊賀守カ家臣山路將監反逆ノ事。本山ノ要害ニ木村隼人在本丸。外構ニハ令守伊賀守

軍士。大金藤八。木下彦右衛門。山路將監等。

四月十三日ノ朝。山路謀テ木村ヲ賞茶客討之。柴田カ勢ヲ可本山引入企也。然處ニ其夜伊賀守カ兵士野村庄次郎ト云者。密ニ來木村陣告之。木村號病變茶約。山路驚テ尋同意者。野村不出合忽駈。從者欲退長濱老母妻子等。其身ハ奔勝家陣告之。木村雖圍山路陣。

ハヤ落失ヌ。木村長濱ニ告急。先之妻子等浮舟欲出湊。係番船繩驚之。追駈彼船。擒山路妻子。四月十六日。老母妻子七人柳瀬表ヘ引寄。向柴田陣前磔之。舉閨聲謠笑ト云々。

一信孝如何被思。舊冬秀吉トノ變和睦。談柴田瀧川被放火稻葉氏家領分。依之秀吉公四月十七日曉天立長濱。同日亥ノ刻著。翌十八日命稻葉氏家令放火信孝領内。十九日岐阜ヘ可攻寄號令諸陣。其夜暴雨洪水不得涉。魁兵空陣呂久川端。信孝ト勝家ノ兼約ニ。秀吉於

働岐阜表弱々ト被喰留候へ。其内出張柳瀬表。包中可討取云々。秀吉ノ軍勢依洪水不越川。柴田不弁。如兼約出勢。是爲秀吉與自天幸也ト云々。

一同十九日ノ朝。山路向玄番曰ク。秀吉一昨日至濃州。信孝ヲ欲退治。不可有不救之。北表チ賦ノ行テハ道筋所々ノ取手ハ丈夫也。上西山經余語海邊中川カ要害ハ構庵相也。敵不寄思是討不意術也ト云々。玄番同之。取手ノ城ニ置押勢談勝家。同日午ノ刻西ノ方二ヶ所ノ城ノ押ヘニハ。利家息利長也。志津嶽ノ押ヘニハ柴田三左衛門三千騎。堀久太郎。取出ハ勝家ノ可成手勢。引取ニハ道筋ヲ直ニ可退下知シテ。廿日ノ早朝ニ先陳ハ不破彦三。徳山五兵衛。原彦次郎。佐久間久六。大將ハ佐久間玄番。都合一万余騎經余語海邊。凌難處。曉天ニ至中川カ要害。城ニハ不寄思。下

人共余出語海洗馬足。ハヤ玄番カ先勢討之。殘輩逃入要害。依之中川張番ノ軍士發矢石防之。中川武勇ノ達人。三尺計ノ隔土居。不破佐久間カ勢ト揉合攻戰フ。或ル老兵ノ曰ク。先年與平九八郎長篠ノ籠城ニ燒立鳶巢山ノ陣屋。武田勢後ロヲ被燒立。途ニ迷シ尤能キ謀也。廻麓可燒立陣屋下知ス。引合徳山勢内千余騎。命神戸兵右衛門。燒立之。如案中川高山カ勢驚テ逃亡ス。中川五六百ニテ逃ル。味方ノ押留籠要害。北國勢息ヲ不繼攻入ケレハ。中川度々突テ出相戰シニ。大半討死ス。玄番カ兵近藤無一ト名乗討中川首。實檢事了テ日傾西山。中川カ首送勝家。玄番カ軍勢昨夜歩山野竟日戰勞レ。上下倦勞ス。勝家ノ本陣ヘ廻レハ。及四五里直ニ行ハ不足一里。玄番陣之。柴田以軍使可引取雖及度。玄番乘勝不承引是レ勝家盡運ノ先表也。

ト後人唱之。

同日未ノ刻至大垣。有中川討死告。卽驅步行五十人。廿人ハ持松明。木本筋山々峯々ニ立サセヨ。三十人ハ觸在々所々。持參食物馬飼可待道左右。米錢ハ可爲倍々云々。又出馬ノ砌召堀尾茂助。請汝命宣フ意趣ハ出馬ノ後若氏家左京於變心。汝可討之云々。堀尾畏テ應貴命。

秀吉馬廻ノ勢弓鉄炮僅率一万五千騎。從大垣鞭馬驅ス。其形勢如天广破旬。氏家殘大垣與信孝怪ミ。兼テ命堀尾。左ハ無テ氏家モ西ノ刻赴木本。堀尾モ從之。秀吉藤川邊ニシテ及夕日。兼テ如下知鄉人手毎ニ立松明。聲々ニ捧食物出御迎。何トナク人聲響地。北國勢周章ス。

秀吉至木本。取手ノ諸將ヘ以軍使唯今此表着陣ス。明曉可遂合戰被付力。

丹羽長秀其比領若州并江州志賀郡。在坂本城押北國勢。敦賀ニ三千。塩津海津ニ七千配置處ニ。四月十七日。秀吉聞濃州發向取手ノ爲巡見。率千余騎乘小船五六艘。廿日至飯浦。當志津嶽稠ク發鐵炮。渚ニ舉軍勢戾船海津。軍勢三分二來之告急。鄉人立寄テ今曉越前勢攻中川高山要害落城ト見ヘ火ノ手ヲ上ルト云々。當城ノ在番桑山修理驚テ退去ス。未過十町云々。依之長秀入城追懸桑山呼返ス。所々取手ヘモ遣軍使鄉人等ニモ付力堅之。可謂百万競爭。

玄番力軍士。昨ノ勞煩睡眠忘前後。然處ニ敵陣物音騷シケレハ。驚失途從夜半引上夫馬山上。其後兵士自ラ提鎗クリ引ニス。急ナル故ニ陣拂モセス。原彥次郎。安井左近ニ今日ノ命殿。兩人丈夫ニ領掌シ。鐵炮十挺弓五六張宛立替々々。是迄引取ント下知シテ。兩人

交二三度立替シカ。強敵ノ故カ安井ハ退去シテヤ不見。原一人吐廣言蹈留々々引上軍勢。然處ニ秀吉ノ若武者トモハヤ喰付余語海邊。原カ勇士。青木勘七。原勘兵衛。長井五郎右衛門。豐島猪兵衛。鷺見源五郎。鷺津九藏。毛屋新内等。返シ合々々盡粉骨。原カ形勢爲傑出。

柴田三左衛門率三千余騎。從前日押志津嶽。要害築芝手。宿屋七左衛門。丹甚太郎以下抱之。從城秀吉ノ兵士奥田勘兵衛駈出投込鎗。次ニ安田作兵衛合鍵。長秀カ軍士モ加之。暫シテ互ニ引取ル守之。玄番一万五千漸ニシテ引上北上。以軍使急キ可引云々。三左衛門勢ヲ欲立替。志津嶽ニ立。秀吉ノ金ノ旗金ノ瓢ノ馬驗近習ノ早リ雄ノ若武者トモ爭魁。秀吉以軍使被進ケレハ。於堀切上急ニ喰留ル。玄番從山上見下シ大事也ト危テ。以拜谷

五左衛門ヲリ下リ。三左衛門ニ入替リ。クリ引ニ取上ル。秀吉以下知稠ク被打鉄炮越堀切。北國勢貳百余有手負死人。是ヲ可引退騷働ス。秀吉小姓馬廻許法度云々。依之我モ我モト駈出攻上ル處ニ。福島市松紙ノ切サキシナシヒハヤ取首來ル。石川兵助先登シテ入鎗相突ニシテ忽戰死ス。加藤虎之助紙ノシテバレン加藤孫六郎紫母衣。加須屋助右衛門ノ角取紙ノエツル。脇坂甚内白絹ノエツル。片桐助作銀ノ切サキエツル。平野權平紙子ノ羽織。并ニ秀長ノ兵士櫻井左吉。赤母衣金ノ切圓。加彼並片桐平野ハ合鎗。剩得首。金森五右衛門。伊木半七取首。北國勢山路將監。淺井兵衛。拜谷ニ續テ返シ合各討死ス。大鹽金右衛門カ手ヘ討捕ル。宿屋七左衛門。小原新七郎。安彦彌五右衛門。水野助三ハ廿町計拂退ニ引上ル。三左衛門抱手負引取ル處ニ。秀吉ノ勇士無透間追詰。利

家茂山ノ麓高地ニ率二千余。二段ニ立備便之。佐久間久六邊ル味方ヲ左右ニ押分蹈留シニ。玄番舉大音下知ス。然處ニ原彦次郎立向テ。味方及敗北。於此可有一合戰。先陣ハ某ニ被任ヨト云々。玄番如何思イシ不應之。如案敵勢重テ北國ノ弱兵驚色メキシニ。長秀時分ハ能ソト惣懸リニセヨト馬印ヲ振シカハ。敵一度ニ敗軍ス。此時急ニ追詰ラレ。淺見藤右衛門引返ス。秀長ノ兵士加藤作藏討死ス。淺見ヲクレロノ高名トテ舉名。今井角右衛門山瀬半右衛門兩人シテ討之。互ニ論前後。

一勝家手廻ノ勢七千余騎押。堀久太郎要害東野對陳ス。前日討中川後。玄番ニ可引取。勝家以軍使再三雖云遣。玄番乘勝不用。匠作逆鱗シテモ無益。是負軍基也。從夜半四方騒シク密メク也。老臣集勝家陣。如何アラント評

議ス。然ハ當余語方。夥シク聞鉄炮音。怪之處ニ。小野小右衛門カ使來テ。今曉玄番及負軍。敵急ニ攻入味方敗北スト云々。勝家任佗ハアレ。馬廻計ニテ可決安否。揉身雖旬。西ノ方玄番兄弟ノ備亂合。無庸次。其内ニ勝家ノ旗本モ退散ノ氣色見ヘケレハ。殘ル勢僅不足千余騎。此勢ニテハ難得勝利諸臣諫之。勝家ノ曰。軍ノ慣不寄多少。諸人一致スレハ依時勝物ント勇ケレトモ。軍士曾テ不得進。爰ニ毛受勝介云ケルハ。貴命ニハ候ヘトモ。往昔尾州ニテ馴軍々士在ル時ノ事。如此見逃。聞逃ノ軍士不及力極運在眼前。先北庄在歸城無謀計。可有御自害。賜御馬印御名代ニ可討死云々。勝家術計盡果。不及了簡。任所望被渡五幣。毛受カ手ノ者三百余人。勝家ノ近習外様少々殘留。在左右原彦次郎力要害ノアキタルニ引入。古郷ノ老母妻子ノ遺

言ヲ云送リ。各へ酌酒盃待敵來。兄ノ毛受茂左衛門。加殿備戰シカ。聞弟忠義。拂當敵。加勝介。勝助向兄老母爲孝行即今ノ遁死給へト雖盡言不用。兄弟度々討テ出攻戰。秀吉ノ軍勢ハ見柴田五幣。恐レテ過道アリ。彌進ミ寄モアリ。ヒタ／＼ト取卷ヌレハ。勝家之名乗。二三度突テ出相戰フ。サレトモ勢レタル無勢過半戰死ス。今ハ勝家遙ニ可落延給。兄弟遂忠死。首ハ小川土佐討之。勝家入府中對利家父子。近來ノ謝苦勞。極運不及力云テ。暫ク休息シ。貴方ハ秀吉ト舊友也。右ノ變スルト誓詞約云々。利家ノ不勞馬ニ乗替テ出ル。利家北庄へ送ラント出ラレシヲ堅ク辭シテ返サル。互ノ勇武炳焉シト後聞感之。

勝家從柳瀬。四月廿一日及夕日至北庄。柴田彌右衛門。小島若狹。中村文荷齋德菴。中村

與左衛門。松平甚五兵衛ヲ呼出シ。今度ノ合

戰ハ玄番乘勝・餘語不引取。弓馬ノ得耻辱。

背脫歟

此上ハ城門ニ配軍勢可定持口。集軍士。一番

十五才

ニ佐久間十藏利家ノ婿。二ニ松浦九兵衛常一城

守也。松平市左衛門

隨玄番於志津嶽高名。被疵昨夜歸北庄。

溝口半

左衛門龜田大隅父也。山口一露。上坂大炊。小島

新五郎。

十八歳。若狹子。

吉田藤兵衛子藤十郎。大屋長

左衛門柴田彌左衛門子。此外留守ニ有シ僅也。

從戰場敗軍ノ士ハ。秀吉ノ勢ニ被押隔。北庄

へ不取籠。秀吉無透間被押詰ケレハ。其日着

陣府中。翌廿二日北庄へ押出。命先陣堀久太

郎。堅陣無立錐地。取手番ノ次第。

一駟引其外何事モ。黃母衣ノ者。并使番次第

可守其旨事。

一濫妨スヘカラス。并酒家へ入間敷事。

一マハラ駟スマシキ事。

一不可誇勝利事。

一合戰ヲ備心可有夜討用意事。

右條々無相違可守此旨者也。如此五六十通調テ、夜中ニ被觸諸陣。堀カ勢打立道令放火押寄北庄。惣搆ハ可相抱無勢。漸ク堅二三丸。寄手ハ圍四面一度ニ燒立城外。其内ニ秀吉着陣シテ被取上愛宕山。此煙氣幸也。依煙下付本丸堀際。以竹策可攻被下知。必不可立聲云々。夜明隨風立煙下空ニ塵。晴レハ四方ノ寄手如雲霞。城中靜リ返リ打鉄炮事無浮矢。サスカ名將ノ見籠城。然處ニ柴田權六佐久間玄番ヲ擒テ來ル。昨今ノ城主面縛シテ耻敵。世間ノ盛衰皆如此。從秀吉被預山口甚兵衛副田甚左衛門。兩人誘陣屋籠手ヲ赦シ。行水ヲス、メ著替帷子。

一廿三日。午前ニ止攻鼓呼テ曰ク。昨廿二日ノ夜於山中御子息權六并玄番ヲ生捕來ルト云

云。依之城中靜テ音モセス。入夜所々持口ニ催酒盃。勝家小谷ノ御方ヘ盃ヲカハシ。信長ノ妹ナレハ。敵モ不可害。強テ諫ケレトモ。先年小谷ノ遁死于今後悔ス。三人ノ女ハ爲菩提殘シ度ト云々。依之文荷引手。奉出城外。

廿四日。申ノ刻勝家自害。行年五十七歲。

秀吉伴丹羽長秀。從愛宕山見下シ。抑躍シテ一生ノ大望。武門ノ面目何カ如之哉ト云々。廿五日拂城中焦土。

毛受カ感忠死。老母妹等ニ賜堪忍領。

一廿六日。秀吉入賀州。所々紮攻道。五三日滯留シテ。金澤ノ城。石川河北兩郡。賜前田利家。五月朔日被飯北庄。今度長秀ノ謝忠義。賜越前若狹賀州内能美惠郡二郡。則任越前守。五月三日被飯江州坂本城。於此爲端午祝儀諸去四月廿日立大垣。至五月朔日僅十一日ニ大功任意臣ヘ賜美酒珍肴。于此留十余日。志津嶽武功

ニ未聞前代ノ例云々。

ノ輩ニ賜感帖并加恩ノ地。世以テ謂七本鎗。
柴田權六。佐久間玄番。命淺野彌兵衛渡大
路。六條河原ニシテ斬罪ス。

今度三七殿依謀叛濃州大垣令居陣候處
ニ。柴田修理亮至柳瀬表罷出候條。爲可及
一戰一騎懸ニ駈向候ノ處ニ。心懸深ニ付
早ク懸付候テ。秀吉於眼前合一番鎗。其勦
無比類候條。爲褒美三千石宛行訖。彌向後
奉公ノ依忠勤。可遣領知者也。仍如件。

天正十一年六月五日 秀吉 正判ノ寫

各佗準之。但福島ハ依氏族與五千石。

秀吉從加州打入レ。赴岐阜欲攻之。信雄率尾
兵圍之。信孝不及力。乘船退出知多郡内海。

信雄使中川勘兵衛門被勸自害。已ニシテ害
廿六歲

ス。其後秀吉至坂本。諸人祝端午。

從是秀吉ノ威風普天下。至安土。成信雄拜趨
禮。信雄モ大悦ス。

一秀吉被飯坂本。何トナク中絶シテ不和。依之
秀吉ハ可征伐西國。入大坂定五畿内制法。池
田勝入雖領攝州二郡遣濃州大垣。宇喜多毛利
ハ從去年和睦ス。筒井。中川。高山。堀久太
郎。長谷川藤五郎。蒲生忠三郎兼テ屬幕下。幾
内北國ノ武士無背秀吉命者。依之信雄引拂
安土飯清瀨。家康ヘ以使介向後被演憑入旨。
瀧川左近ハ勢北領半國居長島。勝家依爲一
味。關地藏ニ築要害。以同名彦次郎爲少將。
甥ノ金七并國人等守之。嶺城ニハ甥ノ義太
夫ヲ爲將加國人。龜山ハ佐治新介ヲ爲將入
置軍勢。南勢ハ被領信雄卿。先爲可追討瀧
川。秀吉被發勢州。一益依微勢不克出勢。龜
山ヲ可攻討。西北ノ高北ニ築取手。十五日攻
之。雖然堅ク守之。依之引テ入江州。瀧川ヘ
被立和睦使。一益悦テ至大坂謝禮儀。其後尾
州出張ノ旨被觸。諸將於此瀧川カ北勢五郡

代信雄。

同十二年三月。初從信雄勢州へ出軍勢。搆峯欲支秀吉。秀吉聞之出江州。蒲生。長谷川。日根野。瀧川等與力ノ勢使一万余騎攻之。嶺ニハ佐久間駿河守ヲ爲將。中川勘右衛門。關甚五兵衛爲次將。四千余騎ニテ楯籠ル。坐ナカラ敵ヲ不引請。五町計出張ス。寄手モ駈合挑戰事及數刻。瀧川後レ駈ニ來テ見敵形勢。ハヤ城中へ可引入急ニ揉ト下知スレハ。前後一度ニ押入關乘廻シ。兵ヲ討セシト士卒ニ付力。無難雖城中取入。關ハ討死ス。其儘於攻入可乘取。聞家康後詰。驚テ少シ引去テ立備。其夜中川勘右衛門率軍入尾州。上方勢北勢ノ小城トモ不及攻討。飯江州。

家康尾州出勢援信雄。中川勘右衛門從北勢飯犬山。時有私恨池尻平左衛門。於途中害之。乘此弊池田語犬山。鄉人從大垣發兵乘取

三月十五日

之。中川カ叔父清藏主雖防之不及力。依之勝入放火小牧邊。森武藏從金山出張羽黑邊。信雄家康從清瀨一覽發兵。洒井左衛門尉。奥平美作。松平紀伊守等。勦出武州輕卒少々被討引入金山。稻葉父子遠藤欲救之。池田曾テ不進入犬山。

勝入ハ信長公ノ乳母ノ子難捨信雄。秀吉ニハ媚養子ノ秀次殆摸陵手。信雄ハ家ノ子ナレハ不及賞翫。秀吉ハ諸事ノ被談安否。依之息小新ヲ爲質留置長島。密ニ呼取和秀吉公。

信雄ハ從信長公賜南勢在城松島。先老薨去之後被移尾州。依之玄番守護松島。信雄秀吉中絶シテ互ニ成疑時節。家臣岡田長門。津川玄番。淺井田宮。瀧川三郎兵衛ヲ秀吉公從大坂被召對信雄全ク被宣無疎意旨。各大悅シテ飯テ告之。信雄。其内三郎兵衛經伊賀路。

頼テ可出合長島。行別レ從伊賀反逆ノ密事告長島。依之信雄召三人。三月六日命岡田ハ土方彦三郎、津川飯田半兵衛、淺井ハ森久三郎及生害。然シテ松島ヲ賜瀧川三郎兵衛。雖然津川カ家人同名謙入彌太郎。神田清右衛門。中村仁右衛門。佐々木半右衛門。武衛三松等防之不入立。然ルニ木造左衛門佐。從日置城押寄セ攻戰。討百余人。遂ニ退去ス。依之三郎兵衛從伊州移松島。日置大膳加之。本丸ハ瀧川。城門ハ日置防之。

勢州ノ侍織田上野介ヲ初。田丸中務。九鬼大隅。澤源六。秋山右近。芳野宮内等屬秀吉。信雄ノ味方ハ南方ニハ木造左衛門佐。小山戸船江本田北方ニハ神戸與五郎。佐久間甚九郎。國府次郎。天野佐左衛門。土方彦三郎各籠城ス。秀吉被攻松島。然處ニ家康被救信雄出張尾州。

秀吉公聞此告。發向尾州。就其被殘御次丸羽柴美濃守。筒井順慶。織田上野介。九鬼等。凡四十日雖攻之。度々切テ出合戰ス。

峯ノ城ハ。蒲生父子關安藝守父子江州ノ軍勢攻之。城主佐久間甚九郎難抱出奔尾州。以此競神戸モ開渡ス。四月下旬松島ハ慶法ト云フ比丘尼。調和瀧川三郎兵衛。日置大膳加尾陽。

一 秀吉公率十万余騎天正十二年三月廿一日大坂出張。廿

七日着陣犬山。二重堀ニ構要害。日根野備中弟彌次右衛門ヲ被入置。岩崎ハ稻葉父子。小松寺山ニハ丹羽越前守長秀。青塚ニ森武藏守。内窪山ニ蜂屋。金森。段々ニ立備。

信雄ハ秀吉聞出張。請家康援兵。依爲信長舊好不及辭退。率一万余騎被駈付清瀨。酒井左衛門尉巡見シテ打上小牧山。三月十六日兩將出兵樂田羽黑五郎九近邊放火ス。

秀吉ハ被聞信雄家康出張。押出魁兵鶴沼ノ
渡リ掛船橋欲働諸勢。森武藏三千余騎出金山
牒合池田可討小牧。處々放火シテ待後詰勢
陣羽黒八幡。敵ハ任酒井下知。小牧山へ上軍
勢見下國中夜中ニ五百騎打出。曙上鯨波亂
入森陣。サシモノ武州不慮ノ朝込ニ周章シ
テ。乘廻シ雖下知。弱兵崩立テ退散。金山兩
將ノ勢追北討五百余人。此時勝入乍在犬山
(救カ)
不赦武州敗。失一代譽云々。從是兩將取上小
牧山備軍勢。

秀吉卿出勢ノ行列

先陣

伊藤掃部助

筒井四郎順慶

筒井カ勢

二

山崎源太左衛門

三

羽柴源七郎秀次

池田孫次郎後伊與守

多賀新左衛門

淺野彌兵衛

一柳 市介

長谷川藤五郎

日根野備中守

日根野常陸守

四

堀左衛門督

長岡越中守

五

氏家久左衛門

氏家 源六

瀬多左馬允

木下半右衛門

六

德永 石見

小川孫一郎

牧村長兵衛

甲賀衆

蒲生飛驒守

七

伊藤牛之介

高田小五郎

谷兵助

藤懸三藏

石川小七郎

田中小十郎

八

八重葉左衛門尉

毛利河内守

柘植與八郎

九

矢部善七郎

池田久左衛門

蜂屋五郎介

吉田左介

松下加兵衛

瀧川義太夫

津田四郎左衛門

生駒市左衛門

木下與右衛門

生駒源介

野村內藏助

伊藤彌吉

多賀宗十郎

木村彌右衛門

舟越左衛門尉

宮本藤左衛門

此所十脱歟

織田 三郎
富田 平右衛門
小野 木清次
福島 市兵衛
木下 千藏
間島 彦太郎
片桐 助作
早川 喜八郎
津田 小八郎
戸田 三郎四郎
吉田 彦三郎
加須屋 助右衛門
川尻 與四郎
赤松 彌三郎
加藤 虎助

加藤孫六郎

池田庄三郎

一秀吉公ハ於羽黑。武藏守ヲクレテ取シカト
モ不屑。催十万余騎尾口樂田二重堀へ押廻
シ。青塚ヲ本陣トシテ出勢ス。互ニ堀ヲホリ
柵ヲ付稠ク守之。未懸馬足輕。或人告秀吉曰
ク。於賜大將。忍テ取岡崎城可參云々。秀吉
公大ニ悅召勝入被談之。勝入至剛ノ武士ナ
レハ。可宜進ム秀次ヲ爲大將。森武藏守兩將
トモニ婿ナレハ。人不交乘取岡崎。可雪會稽
耻勇ミケル。池田申ケルハ。一族計ニテハ
面々武功ノ次第モ難申。人ノ疑モ有ヘシ。誰
ニテモ一人可被加申ス。秀吉任望被命堀久
太郎。四月八日。池田父子森堀三人爲魁。秀
次貳万余騎。樂田打立流泉寺ニカ、リ向岩
崎。秀吉寵愛ノ養子其上初陣ナレハ。無心元
被思ケン。馬廻ノ勇士少々被相添。信雄家康

三州住人は助某

小牧ノ山下ニ築要害御在ケルカ。岩崎ヘ敵ノ軍勢中入ノ由聞ヘケレハ。夜ニ入水野惣兵衛。柳原小平太。大須賀五郎左衛門。本多豐後。丹羽勘介召五頭。被添岡部内膳大久保新十郎。敵ノ跡ヲ進テイツク迄モ行逢次第可決一戰。三千余騎ニテ越勝川。於此家康着鎧給^マ。被出小幡原。爲遮敵先陣驅出長久手。小牧ニ酒井左衛門尉。石川伯耆。本多平八郎。信雄ノ軍勢相加テ守之。池田^{父子}森堀等押寄岩崎城。則時ニ乘取。城ニハ丹羽勘介カ弟次郎介取合セ雖防戰。微勢ニシテ難叶討死シ畢。首八十余切掛實檢シテ討將勇誇テ欲發向岡崎。翌九日ノ早天於小幡野東岳。秀次ノ勢遣兵糧。油斷シテ在ケルニ。不寄思敵ノ五頭三千余騎ニテ後ヨリ鬨聲ヲ上放矢石切テ入ケレハ。秀次ノ後備俄事ナレハ。驚騷失十方。秀次呼軍使魁兵ニ雖可告之。難

去虎口辭シテ不諾。無爲方被命田中兵部。不能默止追付堀久太郎森池田告之。各引返軍勢。其内ニ秀次ノ勢混亂シテ不知立處。木下勘解由。同周防蹈留テ討死ス。然處ニ堀懸合横合。五頭ノ軍勢乘勝懸來ル。柳原先立テ進ミ來ル。堀カ三千余騎一度ニ懸リケレハ。五頭軍勢且シ雖支之。續無味方。被押立退散ス。追北得首五百。

秀次ノ敗兵競之取テ返シ。勵武勇。栗野十太夫。吉田久左衛以下遂高名。堀集軍士。森池田ト成一手行ケルニ。長久手上ノ松山ニ。信雄家康率四千余騎被備軍。堀カ先手被突立引返ス。

勝入ト武藏隔二町余。松山ノ東ニ立旗。可及一戰手分スル處ニ。伊井兵部打懸鉄炮。敵ノ喰留。堀カ勢打散テ集勢僅不過三百。森ト成一手。隔四五町道ヲ押ケルカ。從松山家康ノ

見給へハ。引退ヤウニ見ユルニ依テ。此敵打留ヨト懸入々々遂高名。軍勢雖退散。堀集人數既ニ横合ニ懸入ラント思ケルニ。從武州以軍使後ロヲ被諾候。可初合戰云々。堀雖無勢可詰寄下知スル處ニ。武藏守中鉄炮。其手ノ軍勢三千余騎敗ス。堀モ被押立此勢引退ク。池田ハ押出軍兵懸。宗康旗本勢ハ對揚也。相懸リニシテ五段口計ニ成ケレハ。互ニ以鎗靜リ返テ在處ニ。平松金次郎五間計躍リ出ル。武藏守家來山口八右衛門。千田主水等進出合鎗。池田黒母衣交テ相働。鳥井金次郎。關金平。安藤彦兵衛。永井傳十郎。八屋七兵衛等。我モ々々ト懸入入鎗。池田カ勢七八間被押立。已ニ可及敗軍處ニ。勝入蹈留下知シテ又押返サント見ユル程ニ。家康崩旗本懸レト宣フ。信雄ノ勢諸共ニ突テ懸ル。池田カ後陣裏崩ケル。勝入ハ素ヨリ死狂ノ事

ナレハ。母衣ノ者三十騎計ニテ扣ハタル處

十九歳

へ。井伊兵部武藏守ニ打勝テ。横合ニ懸リ太刀打シケル。安藤彦兵衛以鎗。敵勝ナハ可助見合ス。然トモ兵部切勝ケレハ不搆進先池田カ母衣ノ者十騎計ノ中ニ。黒糸ノ鎧ニ頭ナリノ甲差物ハ不指。以十文字鎗二三間進出ル敵アリ。安藤聲ヲ懸テ向逢フ。然處ニ永井傳十郎走出。突伏討首。勝入也八屋七兵衛永井ト不知一太刀打ケルカ。詞ヲ被懸先へ廻ヲ母衣ノ者ヲ討捕ル。其後兩將近習馬廻迄崩シテ追北。安藤ハ黒キ馬ニ乗タル武者腰ニ白キ熊ホヲ差タル逢敵。互ニ打合。遂ニ得此首。如何様大將ナラント思イシハ池田カ嫡子紀伊守ヲ討取ル。武州ハ手負難引退。本多八藏得之云々。覺テ兩將二万余ノ敵ヲ追崩。秀次不及力成惣敗軍經篠木柏井閑道引入本陣。兩將ノ曰ク。秀吉手早キ將ナレハ。必可

爲後詰味方疲勞ス。必定可失勝利。小牧へ不打入近所取入小幡古城。兎角シテ如安秀吉於樂田聞秀次敗軍告。不取敢一騎懸ニ被馳向。至流泉寺從家康被殘。小牧勢ノ内本多平八郎見之。先ニテ有合戰可懸横合。僅三百計ニテ隔小谷秀吉ノ人數ニ引付テ押來ル。秀吉被感至功云々。

於流泉寺待給。後軍二万余騎馳集ル。此勢ニテ可決安否。身揉テ匂リ給ヘトモ。小幡ノ城ニ入テ不取合。失手卒諸勢被引入。能ク戰者ハ致於人不致於人。兩將不被入小幡。勞兵ナレハ後ノ軍ハ危カランニ爲才智將云々。

秀吉不被出流泉寺迄敗軍ノ勢可聞逃。味方ノ後レヲ不顧被打出事。勇將ノ可爲本意。世人感之。小牧ニ殘留ル酒井左衛門尉。秀吉流泉寺見出張。向石川伯耆守。敵ノ窺疎押破二重堀可燒陣屋云々。石川ハ兼テ入魂秀吉。

依之不同。入夜兩將軍ヲ被打入小牧山。

一秀吉被打入樂田。本陳ヲ定小松寺山。西ハ口保曼陀羅寺。東ハ從二重堀小松寺ヘ持續ク。北ハ青塚小口樂田如雲霞取陣。長久手ノ合戰雖失利。率八万余騎。可遂合戰。勢ヲ分七手。使淺野彌兵衛被解諸勢。從小牧山兩將ノ勢一万八千ヲ分十六手。先酒井井伊段々ニ三重堀ノ前ヲクリ出シ。東野ヘ押出シ。立備マ、合戰。

二重堀ハ細川與一郎。蒲生忠三郎。堀久太郎。長谷川藤五郎。一万計ニテ堅メ見之。從小牧揮勢出張ス。被詰同勢。可遂一戰告急。秀吉下知シテ曰。敵馬ヲ入來ラハ。折敷テコタヘヨ。味方不可懸出。敵懸ラハ可詰同勢云云。小牧出勢ノ魁兵二重堀ノ色メクヲ見テ懸合戰勇ケルヲ。家康押留給ヒ。小松寺山ノ同勢出二重堀。可遂一戰。無左縦ヒ敵雖騷不

可出勢。堅ク被制魁兵。頻ニ雖進更ニ不被許。小川ヲ當前一時計守居ル。去レトモ小松寺靜リ返リ無出勢。已ニ及午ノ下刻引取レト下知シ給ヘハ。十六手段々ニ勢ヲ入小牧山。

秀吉三韓征伐ノ時。於名護屋軍營以軍伍次何トテ二重堀ノ軍勢ヲ不追拂被問。家康ノ曰ク。小松寺ノ同勢ヲ於被出。可及一戰。左モナクハ不可進堅ク制止ツルト云々。秀吉抑テ感シ給フ。我モ左ヤウニ下知シツルト宣フ。從二重堀頻ニ雖請同勢。敵カ、ラハ可出。敵打トモ射トモ不構。堅備可守下知シケルハ。二重堀ノ兵ヲ餌兵ニシテ其方ヘ取セ。以大軍亂備處ヲ可打取思シト語給フ。互ニ被制軍智謀深シト聞人感嘆ス。軍中語敵美依之味方危ク見ヘケレハ。長陣可惡先被引取犬山。

四月十四日。拵羽黒古城。被入置堀尾茂介。山内伊右衛門。伊藤掃部。其外十余ヶ所搆向城大羅ノ寺内ニハ。丹波ノ少將守之。

五月朔日。八万余騎。寅ノ刻ニ打立。渡宇留間舟橋兩將魁兵ニ下知シテ不被出軍勢。雖然十五騎駈出ヲクレタル首討十余級。細川カ兵士圖與一取テ返討敵首。大軍無難越川入大垣。兩將モ押出柴元寺。軍ヲ入清瀨。

秀吉飯陣ノ次而ニ。信雄ノ領加々井城主神戶與五郎。加勢千草三郎左衛門。林十藏。加藤太郎左衛門也。五月二日。秀吉公ノ先陣欲襲之。城兵突テ出駈退ク。サレトモ追討千余人。

竹鼻ニ在不破源六。同十日押寄水攻ニス。降シテ開渡之被入置一柳。兩城ヲ入手以其競令入大垣。瀧川左近去年迄雖領勢北五郡。依柴田生害降秀吉。於江州賜五千石。富田平右

衛門相伴ニ在番。木造城。秀吉公へ欲盡軍忠
勵計略。蟹江ノ城主前田與十郎ハ佐久間駿
河守カ舅也。爲家老。所領モ如形雖無不足。
被進瀧川金謀反秀吉へ窺之。大悅シテ被許
之。六月十六日瀧川出勢州神戶。翌十七日曉
欲舟ヲ乗入。前田見之舉火手。一盆舟二艘ニ
シテ入蟹江。九鬼大隅乗船舶雖付下市場。干
鹽ニシテ不得入。浮舟漂泊ス。然處ニ蟹江ノ
火ノ手見清瀨。依之兩將發兵。其内郷人等散
亂シテ告前田謀反旨。井伊兵部ハヤ乗付蟹
江。岡部内膳警固津島。是モ見火焰直ニ馳下
市場。九鬼カ甥擒長兵衛。敵ヲ不上下市場。
兩將ノ軍勢手分シテ圍城。翌十八日ノ夜九
鬼密ニ告瀧川カ方曰ク。此城始終難抱。急キ
乘大船退ヨト頻ニ告急。雖然率七百余騎加
前田勢合シテ不足千騎。去レトモ武勇ノ達
人ナレハ。日置五左衛門。谷崎忠右衛門。瀧

川彦次郎ノ爲小將分三手配軍法。家康被乘
付有巡見。即時ニハ難落去。北ノ本丸ノ方ハ
大須賀五郎左衛門。東ノ丸長澤衆服部半藏
弓鉄炮。西ハ信雄ノ勢攻之。城兵微ニシテ三
ノ丸難抱。夜中ニ引三丸勢二ノ丸へ可引入。
付入ニセラレテハ叶マシト。從城突出。以其
競可引拂。海門寺口へ谷崎。前田口ハ日置。
本丸西北ノ押へニ遣瀧川彦次郎打テ出ル。
於海門寺口谷崎合鎗當鉄炮。前田口ニテハ
難ナク引入。其内ニ從大手大須賀本丸北ノ
門ニ付ケルヲ。彦次郎追拂。三ノ丸無難引
取。二丸此時一盆自ラ開門取入軍勢。從西道
シツハラヒ。日置谷崎互ニ盡粉骨。於門口辭
前後。瀧川怒テ吾在眼前時已ニ急也ト云々。
依之一度ニ入門。自ラ閉扉。寄手攻詰三丸築
竹束。城兵難堪見ヘケレハ。從信雄調和。織
田源五カ士鳴海喜太郎ヲ入城中。從城出津

田藤三郎兩將ノ曰ク。謀反人害前田瀧川。向後可爲味方以誓詞。於城ヲ開渡可被宥罪。云云。

前田生害雖成難儀。三日無籠城術。依之令領掌。前田察之。欲退去。瀧川甥ノ源八幸ニシテ討之。一益七月二日乘船退神戶。兩將得城打入。清湏從去十八日至朔日雖攻之。尙吉乍在大垣不被救之。瀧川ハ耻謀不成。蟹居洛下妙心寺。後日依爲丹羽緣者被謫越州。

天正十二年

一同六月。小牧表和談ノ後。秀吉卿被割與關國

賜フ。和州郡山ハ舍弟美濃守。伊賀上野城筒

十一日順慶卒ス三十六歲

井伊賀。志摩鳥羽城九鬼大隅守。北伊勢神戶

甚助

ハ生駒雅樂助。木造分小山戸分小森上野ハ

加織田上野。南伊勢松島ハ蒲生飛驒守。田丸

中務。關長門ハ依爲緣者被付氏郷與力。然處

ニ。木造小山戸不波城屬信雄。依之不和氏郷

常ニ動干戈。織田上野介氏郷構向城襲木造城。從氏郷蒲生左門。蒲生源左衛門。同忠右

衛門。同彌五左衛門。從上州分部左京亮中尾

內藏允岡金助家所等向城。小山戸ノ住人

岡林修理長野左京ハ屬氏郷。常ニ置回候リ。

九月十五日夜出小川表。刈田木造方田中仁

左衛門。畑作兵衛。金子十助。中川少藏等也。

氏郷聞回候告一騎駈來。敵圍之危キ處ニ。外

池長吉。黒川西田中新平攻戰テ討死ス。外池

孫左衛門立塞。氏郷矢面挑戰テ。已ニ鯨尾ノ

甲ニ當鉄炮二。鎧ニ立處ノ矢不知數。其内味

方七八十騎駈來。依之敵シラム處ヲ見テ。入

馬駈破レハ敵遂ニ敗北ス。日置ノ城下迄追

討。首得三十余。雜兵不知數。是ヲ曰日置夜

軍。如此防戰ノ内。秀吉ト信雄有和陸。木造

開城。奔尾州。名譽ノ勇士也。

豐臣記上終

續群書類從卷第五百八十四中

合戰部十四

豐臣記中

一八月下旬。秀吉公發大軍出尾州取上二宮陳。
上奈良五郎丸尾口三井。信雄ハ郡村。家康ハ
被陳小牧上奈良川田大野ニ搆要害入置城
主。雖經數月無功。剩討池田森等。徒ニ上洛
セハ。乘弊可有謀反人。濃州所々ノ定制法。
十月三日。入軍大坂。六日被出勢州羽津繩生
ニ搆要害。入置蒲生忠三郎。桑部ニ入蜂須賀
彦右衛門。信雄ハ對陣中江。濱田ニ瀧川三郎
兵衛桑名ニ酒井左衛門尉石川伯耆守之日々
ニ有駢合。其内足立清左衛門以才覺。兩公ノ

調和。十月廿日於矢田川原有對面。從家康公
以石川伯耆守秀吉公ヘ祝和睦。秀吉公ノ聞
上洛。從家康公松島ヘ遣服部半藏出白子濱
四日市場ニ搆要害。入置軍勢被飯岡崎。此時
秀吉公犬山ヲ被返信雄。

一前田利家在城加州金澤。能州加州ノ境末盛
ニ搆要害入置奥村助右衛門。然處ニ佐々陸
奥守ハ屬信雄。率一万余騎襲末盛來リ。稠
ク攻之。天正十二年九月十一日利家利長爲後卷立金
澤。津幡ノ町ニシテ聞炮矢音。末城落鞭馬馳
付曉天ニ至末盛切懸。佐々新右衛門野々村

主水カ攻手。從城奥村千秋紀伊守突テ出手合ス。佐々不思寄處ニ被切立先陣敗ス。奥州旗本七八千ニシテ返來ル。其内ニ利家集軍勢堅備越中勢至節處。上関聲引取ル。金澤ノ留守丹羽長秀。加勢村上周防守。溝口伯耆守也。鳥越ノ城ニハ從利家入置日加田又右衛門。丹羽源十郎。石澤又右衛門。佐々依末盛遺恨可破津幡發兵寄茂林立備。越中勢引返シ取上吉倉山。鳥越ノ勢驚之開退。然處ニ奥州ノ兵士寺島其介。同半ノ介。久世又兵衛押入持城。利家ハ未在末盛。敵勦入賀州ノ旨聞注進。及丑刻立飯リ出寅佐々カ斥候見誤上方勢引入木船城。

利家父子押鳥越。勦入越中。所々放火。從鳥越出テ欲拂之。依之引入先手。從木船出勢。不破彦三武藤助十郎クリ引ニス。然處ニ從佐佐方福岡與五郎。印牧次郎兵衛。飯野權兵

衛。栗田傳兵衛。杉江左門。八田甚兵衛。鈴木孫左衛門。梅野小一郎ナト進先登。從利家備鷺津九藏。横山七兵衛。上杉九左衛門。半田源太郎。名勢庄三郎。九里少藏。川村五右衛門返シ合相戰。利家ノ軍負色ニ見ヘケル時。山崎庄兵衛根尾吉左衛門取テ返シ。追拂越中勢。

陸奥守去々年柴田敗北ノ時可屬秀吉約セシカ。去歲秀吉信雄確執ノ前。十二月四日忍テ至濱松。今度尾州出勢シテ秀吉ト於合戰。從北國攻上リ。挿東北可被得勝利云々。家康ノ曰ク。尾州ノ出勢ハ被憑信雄故也。全ク不可奪天下。無對面。翌日至清須禮信雄。此事通秀吉。依之敵秀吉。

十二月廿二日。秀吉越階シテ被任大納言。四十八歲。

天正十三年三月十日。秀吉被任內大臣。

當月上旬。發向紀州。一揆梶籠泉州千石堀積善寺濱ノ城。千石城へハ秀次ヲ爲將。美濃守

秀長。細川兵部太輔父子。筒井順慶。堀久太郎。

長谷川藤五郎從之。積善寺へハ蒲生忠三郎。

濱ノ城へハ中川藤兵衛。高山右近攻之。三月

廿日力戰シテ乘取千石堀。盡粉骨。以此弊兩

城ハ開退ク。廿一日押寄根來寺。燒拂堂舍佛

閣。破却雜賀。廿三日。太田ノ城水攻ニシ。四

月朔日百五十余人誅戮ス。攻討湯川玉置。勸

入熊野本宮。新宮ノ神人等出向降參ス。屬幕

下。封高野山欲引入諸勢ノ處ニ。長宗我部元

親。從信長公在世時不隨嚴命。剩押領三好カ

阿波讃岐。毛利カ伊與國。近國ニ振威ヲ。依之四

國爲退治被命秀長秀次。率六万余騎從兩所

攻入。美濃守ハ從淡州福良入阿州土佐伯。

四月廿四日。秀吉ハ從淡州岩屋解纜。宇喜多八

郎秀家。蜂須賀彥右衛門父子。黑田官兵衛父子

出讃州八島。毛利右馬頭輝元。吉川。小早川。

率八州兵着陣與州新濱。三万余騎。從方々一度

ニ亂入。

廿六日。長曾我部新右衛門所梶籠和氣ノ城。

秀次ノ先陣押寄攻之。城兵降シテ開渡ス。一

ノ宮ハ元親カ弟親安守之。秀長圍之。無爲方

降シテ加魁勢。木津ノ城ハ桑名左衛門督梶

籠ル。是モ難抱開退。仙石權兵衛モ涉讃州八

島。討城主元親。始終難叶頻ニ請芳免。兩將

執之。以尾藤甚右衛門被窺之。城阿波讃岐伊

與賜土州七月中旬四國平均。ヒトシタヒラノ心カ

秀吉從紀州上洛。六月中旬被任左大臣。折節

近衛二條家有關白諍論事。重而有勅許。秀吉

假ニ居關白職。可移行万機云々。

一不及四國ノ平均八月四日。佐々陸奥守爲退

治北國へ向。信雄ハ於小牧語家康。雖爭雌雄

始終難叶。談家康令和睦。秀吉悅テ守舊君好。達上聞被任大納言。

今度被進北國ノ先陣。秀吉ハ催畿内勢至賀州。着座前田利家カ居城金澤。被定越中表手配。佐々ハ越中ノ境ヲ爲外構。具利迦崎ノ初左右構出城三十六ヶ所。其外迫々ノ築要害。秀吉公有巡見。揃乘馬三百疋。八月廿日未明ニ越具利迦羅。凌礪並山。傳巖石上岩田嶺。國中有直下造送橋入軍勢。秀吉岩田ノ嶺ニ構要害。越後境立山劔山姥カ崎迄廻軍勢亂入ス。備ノ次第信雄卿。幼子織田上野介。前田利家父子。丹羽五郎左衛門。細川與一郎。金森五郎八。蜂屋出羽守。宮部善禪坊。池田三左衛門。稻葉彦六。毛利十藏。木村隼人。中村平次。堀尾茂助。小田伊右衛門。加藤作内。九鬼右馬允等十万余騎入越州。從廿二日暴雨洪水シテ如暗夜。敵味方塾居陣營。晦日快晴。

奥州難叶。涉木船川神通川。入夜密ニ降信雄。盡□秀吉へ被請芳免。秀吉モ舊識ノ好難欲宥罪。奥州所々ノ開渡要害。此上ハ可甘陣處。閏八月二日陣替。野々宮三日入利家館。佐々ニハ限當國神通川一郡被扶助。利家ニハ佐々反逆ノ刻度々竭忠功。依之賜賀州半國。能州息利長。越中飛驒國ニシテ姉小路左京大夫頼綱。企反逆旨告來ル。以金森五郎八誅伐頼綱。依其賞一國ヲ賜。金森十一日阪洛ス。四國征伐ノ兩將被謁秀吉公。秀吉公大悅。賜秀長和州紀州。秀次ハ主トシテ江州ノ八幡山ニ構城郭居之。

長曾我部ハ如兼約。賜土佐領。阿波ハ蜂須賀小六。讃岐ハ仙石權兵衛。半國ハ十河安田。與州被宛行小早川隆景。四十九歲。

同十一月廿八日。秀吉公使織田源五後號有樂瀧川三郎兵衛。土方彦三郎。家康公ト可和睦

旨達之。家康ノ曰。秀吉ニ無私ノ遺恨。小牧ノ一戰ハ信長公ノ依舊功爲援兵以何和秀吉云々。十二月重テ以瀧川三郎兵衛。富田平右衛門。秀吉ノ妹君ヲ令嫁家康云々。家康公被應之。

一同十四年四月十一日。乘輿ヲ約入濱松。廿三

〔結〕 視カ

日使本多平八郎大坂ヘ有言納祝。秀吉公被大悅。本多ニ賜貞宗短刀定家掛物。五月五日

飯濱松。十一日妹君ヲ供奉。淺野彌兵衛至三

州。酒井宮内迎之。十二日乘輿至吉田。酒井

左衛門尉饗之。十四日入濱松。十六日以柳原

視カ

小平太令祝秀吉。雖然家康無上洛。秀吉ノ謀

ニ淺野彌兵衛。津田隼人。富田及織田長益。瀧

川三郎兵衛土方彦三郎來テ被招家康公嫁姻禮。

乍應之延引ス。重テ秀吉公以計老母大政所

息女ノ被勸對面。十月十八日來入岡崎。井伊

兵部本多作左衛門設之。依之家康公上洛。本

多平八郎。柳原小平太。阿部伊與。鳥井彦右衛門以下供奉シテ廿五日入洛。被寄宿四條新町商家。秀吉公爲謁之。從大坂令來此。互ニ對談了テ令飯大坂。翌日從淀乘船令下大坂。被命寄宿秀長。秀長迎森口。廿六日被入彼亭。秀吉公則被訪之。翌日登城被獻御太刀并黃金百枚。駿馬十疋。秀吉公慰勸ノ饗應善盡美盡ス。及九献被報正宗短刀。三好郷太刀。白雲壺。蒼鷹。信雄被隨從。秀吉ノ曰。且ク雖留之本國ノ家人等可相待。可被急飯駕。則座ニ賜暇。添淺野彌兵衛參内シテ被任權中納言。十一月十一日被飯岡崎。十二日大政所飯洛。以井伊兵部被謝秀吉公。同十四年秀吉公築聚樂城。又創大佛殿。

從文明至元龜年中。公道衰。東西武命募。南北諸侯太夫領國郡。恣ニ誇榮華。畿内遠境是同シ。爰ニ薩州ノ大守島津修理大夫義久號龍

伯在自國。任官隨我意出仕。依古例可令上洛以使介。

一 豐州大夫 宗麟ノ使。告秀吉公曰ク。島津義久率薩隅日州勢。勦出豐後。向後屬下心矣ト。請援兵。依之天正十四年九月十二日。遣仙石權兵衛及長曾我部元親ヲ入豐州。薩人聞之。秀吉以不肖身欺當家。侮テ不應之。

一 立花左近將監 宗茂八十八歳ニシテ 在筑前立花山。招秀吉公ノ出馬。從大友義統。島津發向ノ注進如櫛ノ齒引。依之被命毛利右馬頭輝元。吉川。小早川。加黑田勘解由。宮本入道令渡海。輝元ハ守門司城。先手義統ト令承伏。可敵計討云々。

然處ニ島津勦筑前。日々ノ一戰堅宗茂立花城。九月廿四日。薩人退出處ヘ付慕。剩攻破高島居。東西討取。星野中務。同民部勵軍忠。今度島津。殿下ヘ成御敵。九州ノ逆ノ徒等

引具罷在。味方ノ城二三ヶ所打果ス處ニ。其方立花ノ城ニ在之。請留大軍。抽粉骨。付テ島津敗北ノ由。殊ニ高島居ノ城。攻崩星野一類。其外不殘一人刎首ノ由。無比類手柄。但天下ノ面目不過之候。來春ハ可有御動座。新知等爲褒美被見計。何レノ國ニテモ可被仰付候。仍御太刀國俊鬘斗付。鐵炮藥二百斤。并縫物ノ羽織遣之。彌可勵忠節事尤ニ候。併被出馬島津退治不可有程候條。聊爾之働有之間敷候。委細森勘八。森兵吉可申者也。

天正十四年十月十一日

秀吉

立花左近將監殿

先度森兵吉。森勘八差遣ノ處。馳走ノ山候。其表ノ義堅固ニ申付候段。兩人言上候。神妙ニ被思召候。島津豐後令亂入付。此刻龍造寺。殿下ヘ可致忠節由色立之由

候。然間阿波淡路備前美作ノ人數差遣候。其表彌無越度行ヲ肝要候。猶兵吉勘八可申者也。

十二月二日

秀吉

立花左近將監殿

今度依忠節。爲御恩知於筑後國山郡。三渚郡。下妻郡。三池郡合ノ事被宛行訖。但三池郡ノ事對高橋彌七郎可引渡。并三渚郡ノ内百五十町三池上總介相渡之。右兩人爲與力致合宿。自今以後可抽忠懃也。

天正十五年六月廿五日

秀吉

立花左近將監殿

私ニ曰。秀吉卿雖被治天下。未屬鎮西ノ凶徒幕下。予茲立花左近將監宗茂十八歲在筑前立花山。招秀吉出馬。九州賊徒亂入宗茂領年尚シ。從永祿九年至天正三。凡及十ヶ年。戰日日月々。然ルニ先考道雪紹運兩父モ於筑前岩

屋筑後高良山。對殿下戰死ス。宗茂楯籠立花山勵軍忠。迎秀吉公ノ下着被命魁着。盡勇功依其賜筑後柳川城。剩ヘ昇殿シテ任四位侍從。天正八初テ發兵於朝鮮時。宗茂數度先登超人。九年從明朝救朝鮮。率大軍從朝鮮都數十程發平安。日本ノ軍士又陣之。我軍微ニシテ敗ス。正廿六宗茂廿六歲。從南大門破明兵互ニ討敵。秀吉公被感之。

薩州ノ大守島津義久命同名中務家久。率二万余騎出張豐後。依之仙石權兵衛長曾我部元親

息信親與大友義統六千余騎。天正・四年九月十

(十脱カ)

二日出國境陣伊集院境內。兩雄挑戰。互ニ盡

粉骨。信親從者廿余輩。隨左右揮鉞戰死ス。敵得此首貫鉞差上。討取大將呼ル。元親ハ不

知之引退處ニ。竹田新介。桑名太郎左衛門。元親ニ乞暇引返シ。入敵陣。大友カ勇士十河

新太郎。矢野田宮等戰死ス。大友仙石敗シテ

入豐州。黑田勘解由。小早川隆景。率八千余騎。十月下旬至豐前處。其國ノ一揆蜂起シテ出宇呂津搆要害。留行人通路。兩人相議シテ。十一月五日切懸逆寄。五百三十余討捕。其夜陣障子嶽。七日上高良嵩搆要害待秀吉動座。十一月三日從仙石秀吉公へ告之。依之來春三月朔日。爲九州發向出勢被觸諸國。二月廿日以前至攝州可參陣云々。畿内北國南海東州中國三十七ヶ國ノ軍勢廿万余騎ノ兵糧爲下行。命小西降佐建部壽德吉田淺右衛門宮本長次。十二月十日出大坂。三十万人ノ兵糧二万疋ノ馬ノ飼料。一年分爲用意赴西城。扶持方奉行ハ石田治部少輔。大谷刑部少輔。長束大藏太輔。

天正十五年九州發向ノ掟條々

一兵糧并馬ノ飼料。九州ノ地參着ノ日ヨリ可下行事。

一出勢ノ日次。從二月十日無相違打立。宿リ宿リ不着合様ニ宿。奉行次第可守其旨事。一喧嘩口論仕出候ハ。双方其罪不可遁事。一追立夫押買狼藉等有間敷事。

一奉公人先主ニ不乞暇主取仕有之處ニ。先主見付理不盡ニ成敗仕候ハ。却テ可爲越度。見付次第當主人ニ相斷。以其上ヲ急度可申付。又届在之奉公人逃シ候ハ。其主人可爲越度事。

一打圍城事。相定ル攻手ノ外。一切令停止事。

一合戰ニ出立。先陣後陣ノ儀。軍奉行次第下知ヲ可相守事。

右背軍法自由ノ駈引於在之。可被處嚴重罪者也。

一先陣ハ從二月朔日出勢シテ。後陣モ渡豐前豐後地。依之秀吉公三月朔日出洛陽。着緋威

甲冑。供奉耀傍。三月廿日。詣藝州嚴島有奉幣詠歌。廿五日至赤間關。翌朝巡見シテ中國西域ノ爲要地。依之被殘置増田右衛門尉。舟奉行毛利勘八。同兵吉。門司ノ城在番丸毛三郎兵衛。木戸十乘坊。從是有評議。美濃守秀長爲大將。至豐後經日向令入薩州。分軍勢相隨人々蜂須賀彥右衛門六千余騎。尾藤甚右衛門三千余騎。長宗我部土佐守五千余騎。宇佐郡へ勸入。毛利右馬頭輝元四万余騎。備前宰相秀家万余騎。爲目代黑田勘解由相添。龜井武藏構同國時枝城急之。

三月廿八日。秀吉公被移之豐前。堅制法亂入豐後。島津同名中務ヲ爲將ト。二万余騎。豐後府内ニ築城。欲與秀吉軍勢。秀吉公巡見シテ。命蜂須賀。遠卷ニシテ調攻具圍之。中務難防思ケン。紛風雨夜。從濱手乘船引退ク。味方以早船追之。討留二三艘得首數級。則府

内ニ入。大友宗麟義統征日向國。三月廿九日。秀吉公陣豐前馬嶽長野三郎左衛門要害。從是楯籠熊井。越中巡見岩石城向戰ヲ被命。羽柴飛驒守氏郷。同肥前守利長。兩人回候。先路當麓在一構。打懸鉄炮試之。輒ク可乘取。窺秀吉公。秀吉公大ニ悅。爲回候被添牧村兵部太輔。戸田三郎四郎。兩人ノ曰ク是嶮難ノ地也。九州征伐ノ手初ナレハ力戰如何ト云ニ。氏郷重テ以町野左近望之。秀吉公彼レカ被感勇氣。明旦可攻捕被許之。秀吉公爲後詰可有一覽。大將丹波少將秀勝。爲檢使。谷出羽守小野縫殿助。四月朔日寅ノ刻押寄山下。氏郷ハ本道筋。利長ハ山ノ尾筋ヲ攻ル。秀吉公率數万騎枝原ト云フ野山へ被舉旗。家康モ被加。石川伯耆。本多豐後。已ニ押詰木戸口。城兵堅ク防之。氏郷ノ魁兵蒲生源左衛門。寺村半左衛。蒲生四郎兵衛。岡本半兵衛。高木

助六。神田清右衛門。利長ノ勇士河原兵庫。大平左馬允。坪内次衛門。大田兵庫。神尾圖書。盡粉骨乘入二ノ丸。秀吉公被感之賜縫羽織。其後ニ諸勢一度ニ攻入放火。敵咽煙頽落。秀勝攻口一人モ不洩刎首。於此兩將ニ賜鞍馬。乘テ候公前。賜感帖。蒲生。寺村刀差物ヲ取手於眼前進先登被稱美。賜羽織。其外得首與金錢。秋月三郎種長在小能城。驚岩石落城降シテ開渡ス。四月二日。秀吉公被移之。城主隱山中赦免之。於此ナラシハノ献小壺。

一島津義弘怖秀吉公武威。引入薩鹿籠嶋云々。秋月ニ五六日滯在被定制法内。壹岐對馬。平戸五嶋籠造寺政家。淺生高橋草野宗像中八屋原田杉原十郎。城井彌三郎。長野三郎左衛門。小代伊勢守等降シテ加先陣。薩州ノ内有御動座。千代川ヘ兵糧ノ大船着岸ス。配分諸

勢ニ。三日逗留シテ总人馬。五月被入押太平寺。五月四日薩州ノ内糧千代川有太平寺。秀吉公陣之。京泊ノ湊ヘ兵糧船數千艘着ス。公大悅シテ助近來諸勢ノ新納武藏楯籠ル肥後ノ高迫。以五万余騎押寄ス。難防思ケン。七日ノ夜開退。十一日本陣ヲ被移南關。十三日爲番手入堀尾茂助。從其小代伊勢守カ居城請取筒嶽。入川尻肥前守。隈本ノ城ハ。城十郎太郎守之。以多勢圍之。不及力降シテ請和。依之十六日秀吉公被移之。暫留滯之。

一向州高城ハ要害ノ地也。美濃守秀長攻之。先遠卷ニシテ圍之。十七日薩州太守義久。并大隅日向率一万五千余騎夜討。伯耆南條小鴨陣宮部善祥坊五千。木下平太夫。龜井武藏。垣屋隱岐守。福原右馬助。都テ一万五千。秀長ハ隔五十町在陣ス。聞此告。夜半ニ打出救之。薩人敗北ス。秀長ノ家臣藤堂。羽田。岸田等駈付追討ス。遂ニ高城降シテ開渡ス。十九日肥後

ノ宇土モ爲降人請取城。入置加藤虎之助。廿日隈本ノ城モ開渡ス。居岡本太郎右衛門。廿一日高塚關ノ城八代モ退散ス。秀吉公被陣八代。於此被廻遠慮。小敵ノ城ハ被赦免可令安堵被立高札。依之群集シテ遂拜禮。

九鬼 脇坂 加藤左馬助爲奉行。千代川ニ渡船橋。先陣十万余騎攻入薩州。段々ニ設備可攻入休嚴重也。

島津老臣諫テ曰ク。當時秀吉ノ武威普天下。彼レニ不可有不隨。避來銳。計當家相續功。不如伊集院幸侃。入美濃守ノ陣。請許義久龍伯罪。秀長執之。福田三河ヲ加幸侃以木下平介被達秀吉公。則謁秀吉公。五月七日爲和睦。

却テ懇情安堵本領。美久(義久)龍伯。舍弟兵庫義弘。

嶋津右衛門大夫俊久。同中務家久及臣伊集院左衛門大夫幸侃。平田美濃守。本田下野守。野村兵部以下舍弟三人。家老四人出人質。各謁

見ス。

一隅州。向州不降輩。分兵遣ス。先以降參軍勢爲魁。大隅發向。龍造寺政家。筑前筑後肥前肥後三万余騎。羽柴肥前守。堀左衛門督。長谷川藤五郎。青山修理。木村常陸介。淺野彌兵衛。戸田民部少輔。毛利壹岐守。村上周防守。満口伯耆守。大田源五等五十被着添。

日向發向。丹波少將秀勝。細川越中守。羽柴三左衛門。羽柴飛驒守。丹羽五郎左衛門。稻葉彦六。羽柴左衛門大夫。中川藤兵衛。高山右近。水野惣兵衛等五万騎。五月廿日出太平寺働向州。野村兵衛カ居城圍山崎。則降ス。之爲本陣。廿一日被移山崎。翌働華曇院定制法。被打入山崎。廿三日島津右衛門大夫カ居城至鶴田城。向隅州軍勢悉ク取人質來。鶴田兩國速成ノ功感悅不斜。無幾程九州平均ス。一六月朔日。從八代至熊本。兩日滞在。肥後ヲ

賜佐々陸奥守。抽武勇故也。四日宿南關阪陣ノ初上下悅之。五日筑前ノ高良山。六日宰府安樂寺岩屋ニ龍伯營茶店催一興。七日被社參宮崎ノ八幡。於此營閣暫留滯。十五日龍伯舍弟二人家臣三人召連。爲洛陽供奉來博多。則有對面。於此肥前ハ龍造寺政家居之久シ。依通志秀吉不敢改。政家幼少ニシテ。臣鍋島加賀守ニ被命國政。十八日小早川隆景決斷豐後大隅國政來。此賞之賜。筑前筑後ヲ與吉川元春。賜豐前二郡中津ノ城黑田勘解由。小倉ヲ毛利壹岐守。秀吉公七月朔日被出宮崎陣宗像。三日着座小倉。翌日被開戶渡海。秀長運元宗麟謁秀吉公。於此被問曰。日向高城ニシテ不救善祥坊。秀長曰。依不進尾藤也云々。依之改易讃州。此時名物ノ冑賜運元云々。大悅シテ叮嚀ノ奔走献千鳥太刀。從秀吉公被報光忠刀。大友義統奉瓢箪小壺無双ノ珍器也。四

日赤間關解纜。雖然風烈シテ陸路ヲ着座廿日市。爲休息二三日滯留。十日歸座大坂。天正十五年五十一歲。六月六日賜肥後國佐々陸奥守成政。并下國吉短刀小袖五十外實何カ如之。當國ノ士頭五十一人屬幕下。阿蘇ノ大宮司隈部大隅子式部甲斐宗雲等也。各應奥州ノ號令。雖然國人ノ本所領無關處。忠儀ノ士ニ可割與無地。依之國中檢地シテ欲求余慶。而シテ背奥州命。山鹿ノ城從隈本七里。菊地郡桑部不從之。八月六日發向之。城主隈部式部號有動。ワイフノ城隈部大隅式部カ父也。常ニ父子及銚楯。桑部追立檢地使依之奥州怒テ自身執戈發兵。國人隨從ス。大隅聞此告日來雖爲不和。子式部ニ談之。子隨父命與奥州勢。佐々攻ワイフノ城。父子兼テ所談。奥州攻城時從後陣可切懸。城兵モ切テ可被出約ス。然處ニ大隅カ從者反シテ告奥州。奥州前日聞之

軍勢ヲ分二。一手ハ攻城。一手ハ切入式部カ勢。式部謀相違シテ敗ス。依之乘取城討大隅。次ニ攻式部カ山鹿ノ城。率軍勢五千堅固ニ守之。剩打テ出。奥州引上高地。從後攻ル。然處ニ甲斐宗雲等催一揆攻隈本城。成政ノ居城也。城代堅固ニ抱之。其内ニ佐々一味ノ國人等多以逐電ス。奥州爲後卷欲。引取隈本。其時從山鹿於慕來危カラントテ。ワイフノ傍ニ構二ヶ處ノ要害。二日ニ成就ス。入置微勢。成政乘返隈本。敵雖付慕。同勢強シテ不得慕。無恙歸熊本。上下加蘇生。小代下總一人不隨。國人與奥州此時松原五郎兵衛。佐々與左衛門。久世又兵衛。抽人盡粉骨。從城神保安藝守切テ出。内外揉合。追拂敵。翌朝敵退去ノ刻。自城出勢追討三千六百八十余。

二ヶ所ノ押ヘノ城糧盡及飢渴。奥州令請立花左近。左近糧米ヲ入袋。軍勢ノ挾腰働寄城

邊。城兵欲拂之。立花無勢ニシテ不得戰引入勢刻。各付腰袋ヲ投入。城中堀口二間ト云云。

隈本於所々相戰。遂ニ陸奥守持堅隈本。一揆同意ノ輩三治。宇土。八代。小川等國人ノ城へ押寄セ合戰無止時。大方靜謐ノ時分。於大坂達秀吉聽。援兵細川父子。蜂須賀。加藤左馬助。毛利壹岐守ヲ被差遣。早依和之國人等飯服ス。秀吉公ノ曰ク。國人降スル輩ハ賜本知處ニ。行新法惱諸人亂制法罪起欲心。秀吉以威光飯服ノ地再ヒ依悖興。大ニ有逆鱗。右ノ諸將至肥後宥之。秀吉公ヘ爲拜禮可召供詐テ。至豐小倉。毛利壹岐守賞入城中。始式部頭人七八人令生害。所從等挑戰於城下ノ大橋。攻伐佐々。依此罪召攝州尼崎。天正十六年閏五月十四日生害行年七十三歲。其後當國限カウサ川以南賜小西攝津守。北ヲ加藤

主計頭。天草ハ爲小西領。志岐孫次郎不屬小西。依之發向彼島。本渡淵本。カウツラ以下仕孫次郎。小西攻志岐城處ニ。一揆蜂起ス。

依之主計助來ル。^{〔頭〕}小西カ曰ク。我ハ可攻志岐。被押本渡ヨト云々。依之主計從志岐向本渡。木山彈正三百余ニテ遮中途。援本渡。木山

ハ本渡方家來也。志岐本渡隔五里。木山戰死ス。爲志

岐後卷劔出戰主計頭ト。主計頭從富岡欲伐本渡越大山時。松山ノ上ニ木山三百余歩立

ニシテ伏ス。主計カ魁兵上坂待請切懸ル。先陣不得支敗ス。主計尾筋ニ立備通眼前横合

ニ突崩ス。自身入鎗名譽ス。庄林森本以下在

左右。然敗軍モ引返ス。相良ハ主計カ魁シテ寄本渡。本渡兵部死シテ後室持堅城。主計

行懸リニ攻寄ス。攻城稠ク打鉄炮。不成力戰遠卷ニス。後家下知シテ女トモ紅ノ裳束ニ

テ三時計攻戰。手負死人多シ。遂ニ攻入城中

自殺ス。依之本渡入小西手。志岐ハ有馬カ兄弟也。

一天正十六年元日。參内。從者衣冠騎馬行粧儼

然タリ。後陽成院四月十四日天子十六歲行幸

ス。秀吉卿聚樂亭。爲御迎秀吉參内。帝出御

南殿。鳳輿出四足門過正親町。西面シテ至聚

樂。十五町ノ間警衛及六手余人。其行粧國母

准后女御ノ輿先行ク。大典侍勾當等凡車輿

五十余。其次塗輿六ノ宮ノ御方古佐丸。中務

卿邦房親王伏見殿。准三后兼孝九條殿。准三后

內基一條殿。從一位藤原昭實二條殿。菊亭右大

臣晴季。德大寺前内府公維。飛鳥井前大納言雅

春。四辻大納言公遠。勸修寺大納言晴豐。大炊

御門前大納言經賴。中山大納言親綱。白川三位

雅朝等也。其次左右前駟數千輩。其次近衛次

將左右六人貫首二人。次ニ左近衛大將鷹司信房。

右近衛大將西園寺大納言實益。伶人四十五人

奏安城樂。其次鳳輦。次二近衛左大臣信輔。內大臣信雄。鳥九大納言元宣。日野新大納言輝資。久我大納言雅道。大納言家康。大納言秀長。及近

江中納言秀次。備前宰相秀家。其次脫力關白太政大

臣從一位秀吉輿。次二前驅騎馬左右二行各三

十七。左八増田右衛門尉長盛。右八石田治部

少輔三成。次雜色三十人。隨身六人。布衣三人三

行。加賀少將前田利家。阿濃津侍從織田信兼。丹

羽少將秀勝。三河少將秀康。侍從織田秀信。金吾

侍從秀秋。東江侍從長谷川秀一。北庄侍從堀秀政。

松島侍從蒲生氏郷。丹後侍從細川忠興。三吉侍從

織田信秀。河内侍從毛利秀頼。侍從織田長益。越中

侍從前田利長。敦賀侍從蜂屋頼隆。松任侍從丹羽

長重。岐阜侍從池田輝政。曾根侍從稻葉貞通。豐後

侍從大友義統。伊賀侍從筒井定次。金山侍從森忠

政。侍從井伊直政。侍從京極高次。龍野侍從勝俊。

土佐侍從長曾我部元親。各馬上着袂衣行。鳳

輦至聚樂。右大臣勝季。撥簾帝被下車。万里小路頭ノ弁光房取裾。秀吉拜謁ス。酒七献。三献ノ時賜天盃。七献ノ時秀吉被献御劔。十八日還御號後陽成院卜。

同十日。於北野松原有茶興。嗜之者不撰貴賤出テ構茶店。就中以歷々三座ニ賜茶。珍器名物盡其數。一座ハ近衛信輔。日野輝資。家康。信雄兼。二座ハ秀長。秀次。利家。氏郷。貞通。稻葉。千宗易。三座ハ織田長益。羽柴秀勝。蜂屋頼隆。備前秀長。細川忠興。

天正十七年三月入御前田利家亭。饗應盡善盡美。今年爲保養有馬湯治。十余日滯在。軍人ニ賜青蚨二百貫。

五月被施諸將金銀。聚樂門内二町ニ積金銀臺。秀吉公出座門戸邊。秀長ハ座其東。六ノ宮同座。秀吉。菊亭右府。勸修寺。中山大納言。鳥九大納言。日野大納言。廣橋中納言等

來會ス。德善院。淺野彈正。前野但馬守。増田石田監之。

黃金二千兩。

銀一万兩ヲ

六ノ宮

古佐丸ハ正親町ノ王子稱八條ノ宮古佐丸信雄。

家康ヘハ金三千兩

銀一万兩。

秀長ニ金

三千兩

白銀一万兩。

秀次秀家黃金千兩

白銀一万兩。

輝元

景勝ニ白銀一万兩。

利家ニ黃金千兩

白銀一万兩。

中將二人小將五人侍從十三人ニ金銀廿万七

千兩賜之。其外黃金三千兩

白銀一万兩

大廳

黃金

一万兩

北政所。黃金五千兩

駿河ノ御方。

備前ノ

姫君。千兩

丹波ノ少將ノ母堂。

惣シテ金銀三十

六万五千兩。

北條家

元祖平相國ノ八男助盛卿ノ末葉號伊勢新九

郎。於備中國領三百貫

康正三年。

至駿州仕今川

立身如飛龍。初テ

賜豆韭山

長祿二年。

領豆一

州。至早雲氏綱氏康氏直五代爲連綿。當氏政

ノ時不恐朝恩誇我意不遂出仕。依之從秀吉

以津田隼人。富田左近。速ニ令上洛可被遂參
内云々。氏直カ叔父美濃守氏親來テ陳之從秀
吉重テ使右兩人雖加異見不容之。其帖云ク。
一北條事。近年蔑如公儀。不克上洛。於關東任
我意。致狼藉之條不及是非。然シテ去年可被
加誅伐ノ處。駿河大納言依爲緣者。種々懇望
ノ旨以條數被仰候ヘハ。就承引令赦免。美濃
守罷上一禮申上事。

一先年家康被相定條數被成御對面候ヘハ。境
目等ノ儀被屈聞召。有ヤウニ可被仰付候間。
家老中差越候ヘト被仰出候處ニ。岡江雪差
上畢。家康ト北條國切ノ約諾ノ儀如何ト御
尋ノ處ニ。其意趣ハ甲斐信濃ノ内ノ城々ハ
家康手柄次第可被申付候。上野ノ内ハ北條
可被申付ノ由相定。甲信兩州ハ則家康被申
付候。上州沼田ノ儀北條不及自力。却テ家康
相違ノヤウニ申成。寄事於左右北條出張迷

惑ノ由申上カト思召。於其儀沼山ヲ可被下候。乍去上野ノ内眞田持來候。知行三分二沼田ノ城ニ被相付。北條ニ可被下候。三分一ハ眞田ニ被仰付候條。其中ニ在之城ハ眞田相抱之由被仰定。右之北條ニ被下三分二ノ替地ハ。從家康眞田ヘ可相渡之旨被究。北條上洛可仕トノ一札出候ハ。則上使被差遣。沼田ヲ可相渡被仰付江雪被返下事。

一當年極月上旬。氏直可致出仕之旨。御請之一札成津田隼人。富田左近被差遣。沼田被渡下ノ事。

一沼田ノ要害受取候上ハ。相任右ノ一札。則可罷上被思召候處ニ。眞田相抱候鳴海ノ城ヲ取リ表裡仕上ハ。使者ニ不可被成對面。不儀ノ使者雖可及生害。助命被返遣事。

一秀吉若輩ノ時成孤屬信長公幕下。捨身山野。骨ヲ碎海岩。爲枕戟戈夜半寢。夙ニ起テ竭軍

忠。然シテ從中比依西國征伐對大敵爭雌雄刻。明智日向守光秀以無道弑信長公。此注進聞彼表。彌押詰任存分不移時日令上洛。逆徒光秀力伐惡逆。雪會稽辱。其後柴田修理亮勝家。忘信長公厚恩亂國家反逆之條。是又令退治畢。此外諸國之叛者討之淨者。近之屬麾下。就中秀吉一言ノ表裏不有之。以此故ニ叶天道者カ。予旣ニ舉登龍楊應譽成鹽梅。則關臣關万機ノ政。然シテ氏直違天道ノ正理。對帝都企奸謀。何ソ不蒙天罰。古語ニ曰ク。巧訴不如拙。所詮變天下逆勅命輩。早ク不如誅伐。來歲携節旗令進發。可勿氏直首事。不可廻踵者也。

十一月廿三日

秀吉

北條左京太夫殿

來春關東發向軍役ノ事

五畿内半役。中國四人役。四國同前。從坂至尾州

六人役。北國六人半役。遠三駿甲信 五ヶ國八七人役。

右任軍役旨。未三月朔日。令出馬可攻伐北條者也。

天正十年十月十日

秀吉

被命長束大藏太輔。所々從御代官所。兵糧廿万石運送。從早春積船入駿州清水倉可施諸勢并黃金一万枚。以之於勢尾三遠駿 五ヶ國ノ兵糧ヲ可買調云々。

同十八年三月朔日。小田原進發ノ軍勢及廿万人。勢尾二州ハ信雄卿一万五千余騎。三遠駿甲信 五ヶ國ハ家康卿二万五千余騎。

隨國々使先駟富士野由井蒲原充滿

被命洛陽警固輝元以四万余騎守洛中洛外

行列之次第

二月十日
松坂少將氏郷四千人

先陣
家康 二月朔日二万
中備

二陣
信雄 同日一万三千人
六備

阿濃津中將 上野介
三千二百人

中村式部少輔

堀尾帶刀

初テ

二月十五日
岐阜侍從
丹波侍從二千五百人

金山侍從
森右近二千百人

郡上侍從
稻葉右京千二百六十人

兩遠藤四百人

村上周防守二千人

二月十五日
大梯少將二千五百人
近江中納言 一万七千人
七備

同人數二千三百人
一柳伊豆守

東江侍從 三千人
長谷川藤五郎
山内對馬守

田中兵部太輔

青山伊賀守六百人
北庄侍從 堀左衛門督
三千人

本村常陸介二千三百人

廿五日
丹後少將

松任侍從

細川越中守二千七百人
丹羽五郎左衛門七百人

溝口伯耆守千四百人

青木紀伊守千人

大谷刑部少輔二百七十人

太田小源五二百人

所々城々ニ軍勢被入置次第

輝元ノ軍勢千六百人

美濃大梯
スノマタ
竹カ鼻

小早川左衛門尉

三千人
尾張清須劉屋次賀
星崎

兩人番之

吉川藏人

大和太納言軍勢二千五百人二河

岡崎千人
長澤五百人
吉田千人

龜井武藏守二百七十人

宮部善祥坊千人

木下備中守四百五十人

遠江濱松
縣久野
(懸川カ)

垣屋隱岐守二百人

南條伯耆守七百五十人

前野但馬守千二百五十人

明石左近五百人

駿河府中
興國寺
沼津

齊村左兵衛七百五十人

別處主水

船手衆

九鬼大隅守千五百人

脇坂中務少輔千三百人

加藤左馬助六百人

菅平右衛門二百三十人

土佐侍從長曾我部二千五百人

來島兄弟五百人

大和大納言軍勢千五百人

蜂須賀阿波守二千五百人

戶田民部少輔千人

備前宰相軍勢千人

安藝宰相軍勢五千人

合一万六百三十人

北國口

眞田安房守三千人

越後宰相景勝一萬人

加賀中將利家一萬人

越中侍從利長

合二万三千人

秀吉三月十九日。洛陽出馬。御裝束。作リ鬚

大太刀異風ノ粧嚴然也。同二十八日至駿州

沼津。先驅ノ諸將出向。

一山中ノ城主松田兵衛大夫依微勢加北條左衛門大夫氏勝。間宮豐前守。朝倉能登從舊冬命

之。正月廿日（倉脱カ）盃酒ノ後賜金吾兼氏ノ刀。間宮

國吉ノ刀。朝・短刀。向山中。山中・葦山兩城

人數配ノ事有。秀吉卿著陣。處々巡見シテ入

沼津陣營。筥根山中・葦山ノ鑑繪圖。然シテ聞

夜半鐘聲。召福原右馬助。翌日山中ノ城付仕

寄可攻寄。家康ノ軍勢ハ越長久保至本山中。

小田原ヘ可押寄。欲城北高山押上。

信雄ハ向葦山。蜂須賀。細川。蒲生。中川。森

右近。羽柴左衛門太夫。戶田民部等從之。

山中ハ秀次爲大將。中村式部少輔。堀尾帶

刀。田中兵部。山内對馬守。一柳伊豆守先驅

ス。其勢五万余騎。北國勢堀左衛門等。山中ノ

南隔谷欲攻上嶮難。翌廿九日催諸軍勢。被上

三島上山。召中村式部少輔。木下美作。出丸

へハ可隔十町。今少シ寄陣仕寄場ヲ可見合云々。中村命渡邊勘兵衛嶮岨ノ道筋ヲ遣回候。渡邊乗上尾筋窺之。要害疎ニシテ軍士モ又幽也。不及仕寄可爲力戰。見及中村カ前駆等無猶豫則攻上リ。付出丸。秀吉公危ク見給以軍使被制中村。後ニハ黑田勘解由來テ告秀吉命。雖然士卒進テ攻上。ハヤ乘取出丸。手毎ニ得首。其者献之。賜金錢破出丸付三ノ丸實戸口。依之從諸手乘入攻戰フ。本丸ノ後口大杉ノ上ノ段ニシテ。城主松田右兵衛大夫。加勢ノ間宮豊前防戰。双方盡粉骨。遂ニ自害ス。軍勢死殘タルハ堀底へ頽落退散ス。加勢ノ北條金吾。朝倉能登。サシモノ勇士也シカ臆シテ不入本丸。隔堀在シカ。本丸へ敵込ケレハ敗小田原。秀吉公則時ニ被押詰。召中村被感之。手ツカラ賜羽織。秀吉公ノ左右ニ被座。

家康秀次山中ニシテ碎手輩ヲ召寄。各賜羽織。中村傳之名望也。一柳伊豆討死。

一 小田原ノ要害以八州軍勢四万余騎。堅固ニ籠城ス。松田尾張。上田上野。原式部。加安房上總勢以一万二千守宮城野口。湯木口千葉新介八千。竹浦口ハ北條陸奥守兵輝。成田下總守壬生上總。皆川山城守一万。小田原累代ノ名地也。況普代舊功ノ士。盡數楯籠ル。第憑宮根嶮難。吐廣言處ニ。有山中落城告。落人來テ危ク語之。城兵周章シテ失十方。三ヶ所置役處軍勢。四月朔日盡ク逃入小田原。無程上方ノ數万人押入。嶺々谷々鬨聲矢石ノ音。女童發聲啼哭ス。同二日四方ノ定攻口。從未明取詰付仕寄。入金鑿。夜白放矢石攻寄スル音不如百千雷。城兵堅ク守之。五月中旬ハ仕寄近堀際及通言。長陣僻トシテ諸軍屈シテ陣中ニ雜說區也。秀吉公聞給テヤ。或時仕寄

巡見ノ次ニ。入家康陣營。招信雄酒興入夜。依之從翌日巷說止ム。希代ノ名將也。初ハ陣湯本眞覺寺。後ニ杉山ニ築石壁攻寄ス。次第ニ城中困屈ス。

一五月。奥州ノ伊達正宗。從越後經甲州來此請謁秀吉公。行年廿四禿髮異体ニシテ一騎來會シテ言上ス。秀吉ノ曰ク。我率諸軍來此攻問北條罪。然ハ上杉景勝。佐竹義重。馳聘使輸懇誠。汝獨不然。征伐關東可攻討奥州思ヒキ。然ハ汝カ所浸會津仙道早ク可返上。米澤三十万石如元可宛行云々。正宗隨之。秀吉公被感彼レカ勇。赦免シテ盡懇情。賜暇先公飯國ス。

一前田利家息利長率大軍。二月十六日出賀州經木曾入關東。隨從ノ輩上杉彈正景勝。毛利河內守秀賴。眞田源五三万五千打圍上州松枝ノ城。城主大道寺駿河守子新四郎兼テ雖吐廣

言。引受大軍不似言成降人。三月十日開渡却テ加先驅ノ勢。成關東導。

一松山ノ城主上田上野介ハ。家人難波田因幡木呂子丹波。金子紀伊守。山田伊賀守等守城。自分ハ籠小田原。三月十日利家先松枝勢持運攻具遠卷ニ攻之。家人等難抱。以僧降利家陳。一二ノ丸ハ渡利家。三ノ丸ニハ入諸人妻子。以三千ノ著到。可加先驅旨降參ス。十九日氏政ノ舍弟北條安房守居城押寄鉢形城以仕寄放矢石。沼田ノ城主猪俣能登守モ在此城。房州カ家臣ト猪俣相議シテ。則以難波田木呂子。十九日ニ降參ス。是ヲ加先驅勢並降參勢及五万余騎。八州ヲ鋤堅橫打靡在處處連數ケ所人質。利家來小田原。秀吉ノ御感微少也。利家ハ今度ノ忠義莫太也。妬ミ給フニヤト疑フ。然ハ秀吉公夜話ノ次ニ。利家カ軍功不足計。雖然七八ヶ處ノ端城責テ安

カラン城ヲ令破却。撫切ニスヘキ事也ト宣フ。利家聞之。實甘心。至八王寺力戰シテ攻崩。悉ク刎首。可備實檢。廿二日請暇飯本陣。秀吉公不審シテ命木村常陸介。汝令參陣無聊爾働ヤウニ可計宣フ。如案利家飯我陣處。北陸道ノ諸將並降參ノ軍勢等ヘモ相觸。一万五千騎從廿三日亥刻打立。丑刻至八王寺破外搆取首數級。陸奥守小田原籠城ノ時。本丸ハ横地監物。中ノ丸ハ中山勘解由。并桐野一菴。山下ノ丸ハ近藤出羽ニ預置。降人ノ軍勢山下ノ丸ニ攻入時。惜名盡粉骨勇諸勢遂討死。漸ク夜モ明ヌ。中山千余騎ノ小將タリシカ。今ハ二百余人ニナリヌ。向彼等奥州小田原入城ノ時心安ク領掌シテ在城ス。見多勢遁レンヤ。忠死ハ當然ノ理也ト。心ヲ一致ニシテ守武名。夜モ明。利家押來レハ。大道寺以下山下破却ノ時討捕シ首三百五十備

實檢。各感功。手ノ者中ノ丸ヘ攻入。中山狩野不騷。聊爾ニ不可放矢石。敵ヲ引付可計取下知。軍兵如案手負死人不知其數。利家ノ小姓大音藤藏十六歲先驅シテ乘入得首。其比利家ノ依背命。爲令知傍輩再三名乘シ也。二番ニ雨森彥太郎。續大音乘入取首獻。利家父子可記一番首云々。雨森カ曰ク。大音進先辭退ス。利家父子モ聞人皆感之。本丸ノ横地監物怖之一支モ不怵落失。景勝ノ勢不知之。雖攻入無一人。自ラ入本丸。中山狩野自身太刀打數度驅出。盡粉骨。手勢僅十五六人殘ル。引入本丸欲遂自害。利家上高地見之。大道寺カ内ニ彼者ノ知人ヤ在ルト被尋。金子紀伊守。小岩井雅樂助舊友也ト云フ。利家問彼姓名。中山ハ勇無隱兵士也。爲右筆備武名云々。主膳父也。利家命兩人。感武勇欲許之。金子入城(腹カ)中超門見之。害于二人切服ス。初利家諸人惜

之。小田原落去ノ後。中山カ長子助六。一菴カ子主膳。家康召出ス。横地ハ遁死二三日過被害。一揆因果歷然。

一武州鉢形ノ城主ハ氏政ノ舍弟。號北條安房守。關東境目爲遊軍在城ス。以利家ノ謀和之。軍勢ハ加先駈。其身ハ於青龍寺剃髮ス。後加州ニシテ病死ス。

一忍ノ城主成田下總守ハ。秀吉公ノ右筆山中山城守ト知己也。命之小田原城中ヘ通書簡可被屬秀吉公云々。成田返簡應之。秀吉公召家康令送成田返札。氏直八州ノ諸將皆如此云々。從家康被告城中。氏政雖招成田虛病シテ不出。下總雖陳之不免重罪。彼役所四方ニ穿堀付欄。命山上右衛門。堅ク警之。

忍ノ城石田三成率佐竹宇都宮從初開之。雖然堅守之。淺野長政父子向之。于時城兵請和。三成猜之。翌日欲攻之。父子攻入行

田口。三成不進長政不及力引軍去ル。遂ニ城兵降長政。

一武州岩付ノ城主北條十郎(妹イ)氏直ノ弟。本丸ハ伊達與兵衛。三ノ丸ハ(妹イ)媒尾下總片岡源太左衛門堅ク守之。自分ハ率三千余騎入小田原爲發向。淺野彈正息左京大夫。木村常陸介。本多中務一万余騎。六月廿三日押寄抱町屋。(妹イ)媒尾片岡爲小將防戰ノ處ニ。本多平八郎(後美濃守十六才)勵武勇攻入。媒尾(妹イ)片岡盡粉骨。淺野左京大夫十五歳ニシテ自身碎手力戰。媒尾ハ討平八郎。片岡ハ負深手死ス。城兵爰彼ニシテ討死ス。味方乘利込入。赤座久兵衛手ノ者首三十余討取り献秀吉公。攻二ノ丸。則時ニ可攻入處ニ。伊達難抱舉笠降參ス。請取城助命云々。岩付ノ家老春日川邊細屋三人ハ召連小田原籠ル。伊達ハ當時ノ寵臣執事故ニ預城臆シテ遁必死。

一箕輪 既橋 川越三ヶ處皆降ス。

一以秀吉公武略。八王子ノ生捕ヲ乗船五六艘。求陸奥守役所。城中ノ妻子等悉ク捕ハレテ先十方云々。役所ノ輩疑之處ニ。中山狩野カ首ヲ筥ニ入。僧二人ニ持セ。息助六郎主膳ニ對面アレト呼レハ。八王寺ノ落去無疑云々。岩付落去ノ事ハ葛原三右衛門ト云者遁レ來リ語十郎。廿五日落去ト云々。依之籠城ノ面而武勇臆ス。

一松田尾張守ハ北條累代ノ家臣ニシテ。持五千人余入威益八州。富餘東海。然ルニ變忠臣惜一生。附堀左衛門督以使告之。秀吉公大悅シテ與天幸也。可宛行伊豆相摸云遣ス。父見返簡。六月九日ニ二男左馬助ヲ呼從本丸語之。子諫テ曰ク。縱ヒ雖有千万ノ恨。此則ハ無勿体。盡理實ニ道理至極ス。於其儀可切腹。短刀ニ掛手。左馬助爲宥之隨父命。十四日迄同

之。其夜長男笠原新六郎。二男左馬助。三子彈三郎。内藤左近。太田肥後守ニ饗應シ。呼入茶店。籠城不靜。我モ人モ成疑。如此落城三日ニ過マシ。所詮變忠心。一家ノ末葉思立世。明夜羽柴越中。同三左衛門。堀左衛門督カ勢ヲ可引入某役處。各可成其旨云々。左馬助先爲延。明夜不成就日也。明夜ハ可被延諫ム。父甘心シテ定十七日。其夜左馬助入替具足櫃行本丸告氏政氏直。此上ハ父カ命ヲ可賜某請。兩將感汝カ功約之。翌朝召松田。隨命來ル。奥州并以岡江雪從敵其方告反逆。依之糺明虛實云々。松田ハ陳讒者謀計。重テ曰ク。左馬助守君臣忠義云シニ無陳處。氏直思慮シテ害松田。七月六日ノ朝供山上郷右衛門。至家康ノ陳可被助諸卒降ス。家康公心服シテ至羽柴下總陳此旨ヲ被申宣ヤラント。任差圖某成降人出ル上ハ。父氏政并諸卒

ヲ助給ヘト請和。秀吉公被感之。從七日。至九日。開小田原七口ヲ上下出入ス。落人ヲハ勞ル物ソトテ。命脇坂中務片桐市正。止軍勢狼藉。

一氏政氏照兄弟切腹ノ事哀ナル哉。盛者必衰。昨七日迄ハ。主數万騎誇八州太守。七月八日移營安清軒宅待死期。秀吉公ノ曰ク。今度率數十萬騎入關東事。北條一家爲征伐也。然ルニ一家悉ク助テハ。似空兼言。所詮害氏政氏照兄弟。氏直兄弟可相助被談家康。十日晚爲檢使石川備前。蒔田權佐。中江式部太輔。佐々淡路。堀田若狹。從家康添榊原式部太輔至安清軒宅。陸奥守氏照察之。兄弟。察詠辭世自害ス。首ハ從家康持參ス。依背天命仰石田治部少輔。梟洛下反橋。

一小田原ハ命本多中務。井伊兵部。榊原式部受取之。同二十日氏直謫高野山。供奉一門ハ北

條美濃守。同左衛門佐。家臣ハ松田左馬助。大道寺孫九郎。內藤左近。□豫左兵衛。余田大膳此外近習ノ侍三十人。雜兵三百人供奉ス。兵糧賜五百人。

一七月北條美濃守氏親附葦山家康。內藤三左衛門。新庄新三郎。石川兵藏。赴葦山監事。

一甘繩ハ北條左衛門大夫氏勝守之。本多。井伊。榊原ヲシテ異見及三度遂降ル。

天正十九年十一月十日。勞山寒移天野。翌年三月從天野招大坂。入信雄室宅。賜糧米三千俵。臘月初テ謁秀吉公。於西國一ヶ國可被宛行處ニ。病痘瘡三十三ニシテ卒。

天正十八年七月十日北條左京大夫氏政弟陸奥守氏照於小田原生害。□□□□秀吉公五十四歲。

一北畠中將信雄。被挿虎狼思之旨有凝滯。依之改易尾勢。配下野州鴉山賜二万石。翌奉移羽

州秋田。經一兩月至勢州朝熊。從是泉堺ニ艤船。被謫與州道後住石手寺。翌文祿元年爲三韓征伐。秀吉公西征時信雄ヲ被誘肥名古屋。飯洛ノ後寓大坂。息參議ニ賜越大野五万石。

一秀吉公被改關東制法。割與關國。
伊豆相摸上野武藏上總下總

大納言家康

尾張并北伊勢五郡

中納言秀次

三州之内吉田十五万石

羽柴三左衛門照政

同岡崎五万石

田中兵部太輔

遠州之内濱松十二万石

堀尾帶刀

同懸川五万石

山内對馬守

同横須賀

渡瀨左衛門佐

駿州十八万石

中村式部少輔

甲州

加藤遠江守

信州之内小室五万石

仙石越前守

同松本

石川伯耆守

同伊奈郡

毛利河内守

同諏訪郡

日根野織部

同本曾二郡

御倉入石川掃部預リ

早速雖可及御注進。無一廉候テハ如何ト存。令延引候。

一去月十四日。在城罷立。同廿一日ニ大崎境目へ令着候キ。拙者下前大崎中過半城々遊明候内。小池之郡號宮崎依名地一揆共籠居堅固ニ相抱候間。廿四日ニ彼地へ押寄。其儘取卷。次ノ日卯ノ刻攻破。數百人及撫薙切ノ事。

一佐沼ノ城主去春令進首候キ。其子彥九郎取籠佐沼候故。大崎葛西殘黨等悉ク及助力。手堅ク相抱候ヘトモ。從宮崎直ニ押。頻ニ取拵。昨二日以來取付。今三日寅ノ刻ニ打破。二千余人討捕。其外伐捨不知其數候。大崎中殘處一ヶ處モ無之候。葛西過半

城々開迹仕候間。不可有幾程候歟。殊更明日葛西へ陣替仕。吉左右トモ追テ可申上候。

七月三日

正宗

木下半介殿

山中橋内殿

秀吉公被赴陸奥。正宗迎那須野。南部大膳信直來テ拜謁ス。東國悉ク平ク。

一會津數代ノ守護ハ芦名盛氏嗣子盛高。被弑近

臣無嗣子。依之養得佐竹義宣ノ弟ヲ號義廣令

繼之。此時會津ノ家臣猪苗代返逆シテ。引入

正宗會津。從會津出勢。見正宗旗先。會津勢

引退ク。義廣從佐竹來テ無幾程疑郎從故乎。

臆シタルカ不克守之。直ニ經間路退。佐竹。

正宗付人ニシテ得會津。二年住此。然處ニ

秀吉公發向小田原。

同十八年八月十五日。關東征伐。奥州平均ノ

時。會津輪ノ内。大沼稻川耶广山郡猪苗代南ノ山以上六郡。於仙道。白川。石川。岩瀬。安積。二本松五郡。合十一郡。下賜四十二万石羽柴飛驒守氏郷。爲奥州魁。正宗ハ本知無相違。羽州長井郡米澤在城也。三十万石。木村伊勢守父子賜葛西大崎三十万石。然シテ召三人。秀吉公ノ曰ク。向後成父子思國中ノ政道可正。若一揆蜂起セハ先正宗可退治被定則法。八月廿日被赴洛。爲知國中員數。以淺野彈正。石田治部少輔。大谷刑部少輔令檢地。

一其年十月。葛西大崎一揆蜂起ス。伊勢守ハ子彌一右衛門ノ無心元出張。葛西子ハ。慕親馳大崎。途中ニシテ父子行逢フ處ニ。一揆集來ル。雖戰敵多勢ニシテ難叶。家人成合平左衛門カ楯籠ル。取籠佐沼城。一揆圍之十重二十重。剩城中糧盡及難義之由。十月廿二日風聞ス。氏郷會津ニシテ聞之。陣觸シテ待之處

ニ。彌必定ノ由廿六日慥ニ傳之。會津ノ留守小倉豐前父子。關万鉄齋。蒲生左門。同喜内。北川平左衛門等ヲ殘シ置。仙道ニハ守田丸中務。扱正宗ヘ以使節ヲ發向大崎表責方可有出馬云々。家康ヘモ告之。我領分迄請援兵。僅ニ軍勢率三千余騎。魁ハ十月廿八日九日打立。氏郷ハ十一月朔日可出馬處ニ。從廿九日大雪埋地。從會津至猪苗代三十里不立馬足。以多勢蹈雪。五日ニ出勢。翌大雨洪水。阿子嶋ト云處ニ滞在。七日正宗領至。二本松正宗率一万余騎。信夫郡出飯沼ノ城。氏郷ノ魁兵同郡鎌田本折福島邊ニシテ行合。正宗勢。正宗ハ有一揆内通。イツ可打立トモ不見。氏郷ノ從先陣以蒲生四郎兵衛。玉井數馬。告氏郷陣。二本松曰ク。正宗ノ体難見分。返逆ノ難說區也。旁以二三日滯留可然乎ト云々。氏郷逆鱗シテ愚ナル哉。正宗返逆アラントハ

兼テ覺悟ス。何方ニテモ立色時可遂一戰思定處也。不救木村急難不叶。明未明打立從正宗勢先ヘ可押通相觸大ニ怒ル。兩使閉口。然シテ從夜半大雨頻也。雖然拂曉ニ出二本松。至正宗領分大森城。正宗延引セハ可爲氏郷先陣云々。正宗聞之打立。是ヲ押立々々。繼夜日。雖然猛勢ナレハ大崎ノ境。正宗領黑川迄十一月十七日ニ着陣ス。從翌日勦敵地。與正宗對談シテ可手遣令行彼陣處。初テノ來會也。不知先々ノ案内。葛西大崎ノ道ニ端城間在之。正宗カ曰ク。從是佐沼ヘ行程百四十里。其中一揆ノ城高清水トテ從佐沼三十里。此方ニ在之計也云々。氏郷ノ曰ク。於其儀明早天出大崎表。民屋令放火勦高清水追散敵。伊勢守ト可合手云定。翌十八日早天ニ打立。氏郷ハ本海道。正宗ハ付右在々處々放火シ。從黑川三十里四十里ノ内鹿間中新田兩城在ツル

カ難抱開退。其日氏郷ハ中新田ニ居陣。正宗ハ隔七八町陣古城。從中新田高清水迄六十里在之付。明鶏鳴ニ打立可攻破被觸陣中。然處ニ亥ノ刻計ニ從正宗以使。俄ニ持病再發ノ旨僞テ告來。氏郷ノ返答ニ。在保養被押來候ヘ。氏郷ハ從早天出張ト云々。扱陣中ヘ明十九日鶏鳴ニ打立ト云々。然ハ不知案内敵地ナレハ。夜明テ可出觸ル。先駈蒲生源左衛門。同忠右衛門。二段脱カ蒲生四郎兵衛。町野新三郎。三段ハ五手。六手。七手組。寄合組。其次弓鉄炮旗本馬廻。後備ハ關忠五郎也シヲ。正宗依虛病。五手。六手。七手組ヲ跡備ニシテ入替。關三組代先ニ在名生城。正宗密之不言。爲返逆謀氏郷ノ先駈ニ從城打鉄炮。氏郷ノ軍勢驚ナカラ不繼息攻入。則乗取二三ノ丸。氏郷聞之速ニ乗付。近習計ニシテ乗入本丸。跡備ハ不搆城中備三段可待。正宗ノ後

詰下知ス。如案正宗重實片倉小十郎先駈ニシテ押來レハ。ハヤ乗取城。無爲方以軍使威勇功。左ノ方野中ヘ乗上馬立備。氏郷ノ軍士モ道家孫次郎。栗井六右衛門。町野新兵衛。田村理介ナト盡粉骨戰死ス。城兵難爲一揆。サシモノ國人籠リタレハ。攻戰五百八十余人討死ス。以此競岩手山宮澤古川松山不攻四ヶ處敗死ス。氏郷陳之。正宗以使依病不加名生ノ攻手事。京都ノ聞ヘ失面目云々。氏郷ノ返答ニ。魁兵不聞我下知。攻崩畢。幸ニ宮澤トヤランニ一揆楯籠ト云々。被攻取可然云遣ス。其夜亥ノ刻計ニ正宗普代ノ侍。須田伯耆ト云者。蒲生源左衛門カ陳ニ懸入。正宗ノ告返逆。氏郷怪之。相傳ノ家人。如此訴。不審也。計畧ニテモヤラン。能ク可糺云ヘハ。源左衛門改之。須田カ曰ク。不審尤也。我父ハ正宗ノ父仕照宗。相馬畧ニ被預一城。依

之照宗於二本松死去ノ後。我父殉死ス。忠儀ノ末ナレハ可有懇切處ニ。サモナク至今如此休ナレハ。深ク含恨者也。去十七日於黒川來會ノ時。可討氏郷處ニ。於其義秀吉公ノ咎メ難通。其罪思慮シテ所詮勸一揆大崎へ加弓鉄炮。氏郷被攻之時定相圖可後切約ス。雖然依氏郷武勇。速ニ名生ヲ被攻討。正宗失手。此上ハ宮澤モ可開退。高清水モハヤ退散ト云ヒ。明日ノ勦於被延。定テ木村モ無恙云ヘハ。從勢州飛脚來テ。一揆トモ退散ス。其時匂リケルハ。氏郷ノ後詰ニテ名生モ落城ス。ハヤ大崎迄開出勢。以御威光遁死云云。氏郷返答ニ。其城間糧乏由。急キ被加名生候ヘト云遣ケレハ。翌廿三日來テ對氏郷謝武功。氏郷ノ曰ク。當國ニ貴處我等ヲ被殘置。互ニ不可疎略。秀吉公堅ク被仰合。貴處討死シテハ氏郷ハ不本意云々。扨度々以軍

使何トシテ宮澤延引候。攻アグマレ候ハ從此方可攻取云々。正宗計略シテ陳氏郷。然處ニ。淺野彈正少弼。奥州關東甲斐信濃調法令上京都。氏郷ノ注進ヲ聞。駿州引返シ下奥州。於江戸評家康。十二月中旬著二本松カ家康公モ結城三河守ニ添櫛原式部太輔。下着二本松。正宗聞之。供重實片倉來二本松陣無誤旨。淺野カ曰ク。於其儀公へ可達無疎意旨。先氏郷へ重實盛重兩人ヲ遣人質尤ト云云。不及異儀遣之。從淺野氏郷ヘモ以使今度ノ威武勇。先是迄被引取候へ。從正宗兩人質可來云送ル。十二月廿八日。供彼等氏郷并木村父子引取二本松。淺野對氏郷被催感涙。奥州表一揆悖興ノ注進達秀吉時。自身可有動座被觸遣。先ツ石田治部少輔。從明日駈下リ於江戸。勸家康出勢。通岩城相馬引率佐竹右京大夫。正宗領分伊具由利柴田口へ可相

勸旨奉仰。正月十日ニ下着相馬。然處ニ氏郷無恙聞飯陣。三成ハ上洛ス。氏郷ハ會津飯城シテ正月上旬上洛也。秀吉公今度ノ武功于今不始被感悅。

秀次ハ元日清須出陣也。

同年南部大膳カ家來九戸修理亮本ノ、南部カ伯父不

怖公儀。背南部。任我意。南部達之。依可有征

伐被命氏郷。六月下旬從京都下着シテ。率二

万余騎。備十三段。七月廿四日出會津至糠夫

發向ス。從秀吉公爲御名代。淺野彈正。從秀

次堀尾帶刀。從家康并伊兵部着陣ス。九月朔

日九戸カ端城穴太井ノ城。氏郷ノ先陣蒲生

源左衛門。同忠右衛門。行懸リニ攻懸ル。城

兵雖防之。源左衛門カ手ノ者石黒喜介坂九

介等攻入討死ス。忠右衛門カ手ノ者谷崎三

十郎入鎗蒙疵。則時ニ乘破ル。關右兵衛ハ爲

諸手備軍處ニ敵崩レ落關カ手ヘ切テ懸ル處

ヲ。關以下知一人モ不洩討取ル。又穴太井近邊。根曾利ト云處ヨリ三百騎計ニテ穴太井ヘ心指シ驅來ル處ヘ。田丸中務氏郷ノ五手組ニ門屋助右衛門。寺村半左衛門。森民部。梅原彌左衛門。新國上總ナト懸來リ入馬乘破ル。見之根曾利ノ軍兵落行。其儘九戸居城ヘ押懸。櫛引ト云者モ己カ居城ヲ引拂ヒ。楯籠九戸一處。堀尾伊井モ押寄。以竹束攻寄ル。城兵難堪降參ス。詐テ可有赦免。出三ノ丸受取。本丸九戸櫛引ニハ付警固武士。差上京都。家人トモハ追入三ノ丸長屋。燒殺ス。

秀次公三ノ迫ヘ下着。九戸櫛引兩人於此梟首セラル。家康公下着岩手澤。是ヲ正宗爲居城。

木村伊勢守不治領分一揆。依此罪被沒收所領葛西大崎三十万石。賜正宗。

糠夫ヲ賜南部大膳。

正宗領ノ内。羽州長井郡上下。奥州田村塩ノ

松。伊達信夫蒞田。加賜氏郷都テ九十万石。

秀次公ハ奥州法令調テ。平泉有一覽上洛。

正宗本領ノ内。可起一揆有巷説。然處ニ家人有亂奔他國。

山戸田八兵衛。手越内膳來氏郷。訴フ正宗ノ反逆。於伏見雖爲糾明。被宥其罪被立置。

一當年十二月廿八日俄ニ秀次へ被讓關白職。

大閣築伏見城。

至此時。舍弟大納言秀長卒ス。打續三歳ノ鶴松

君早世ス。五十余歳ニシテ初テ誕生ノ公子薨

シテ。秀吉ノ愁嘆不足言。爲忘愁被催異國之

追伐。去年有朝鮮三使。大明ニ發兵從朝鮮有出兵被命彼三使。雖然于今無返答。所詮先ッ

可討朝鮮云々。命諸將令九鬼大隅造勢州大

船。百余艘。

秀次ハ守護聚樂。治畿内。定兵糧運送制法。東北ノ勢ハ陸路ニシテ無船ノ便止之。名護屋船手ハ依遠近或ハ半役。或三分一。五分一被定軍役。南海西域ハ可爲本役。

一天正十一年琉球國初テ献貢。依之從彼國大明へ遣使。日本へ不通聘禮。可征伐被遣琉球へ牒帖。原田孫七郎以商船便常ニ來往ス。琉球ノ貢臣鄭禮明朝へ奉之。福庭ノ巡撫趙參魯令奏之。又閩人丘福旺ハ。近年行薩州事醫。從日本伐朝鮮。大明へ入魁セント云事ヲ告閩ノ守臣。雖達守臣。朝廷不事。勅海邊土居番船用心ノ休計ニシテ無驚儀。

文祿元年爲征三韓遣兵。先陣小西攝津守。加藤主計頭。三月朔日出洛發鎮西。秀吉公同廿六日率大軍四十八万人出洛陽。令至肥前國名護屋朝鮮ノ成號令。

軍勢ノ手分

先手

一七千人

小西攝津守

一五千人

羽柴對馬侍從

一三千人

松浦刑部卿法印

一二千人

有馬修理大夫

一千人

大村新八郎

一七百人

五島大和守

合一万八千七百人

一万人

加藤主計頭

一万二千人

鍋島加賀守

一八百人

相良宮内太輔

合二万二千八百人

一五千人

黑田甲斐守

大友

一六千人

豐後侍從義督

一二千人

毛利壹岐守

一万人

薩摩侍從

一千人

高橋九郎

秋月三郎

伊東民部太輔

嶋津又七郎

合二万五千人

右一日宛番替ニ可仕先驅

同次ノ備

一四千人

羽柴左衛門太夫

一三千九百人

戸田民部少輔

合八千七百人

一万人

小早川侍從

一千五百人

久留目侍從

一二千五百人

柳川侍從

一八百人

高橋主膳

一九百人

筑紫上野介

合一万千七百人

一三万人

安藝宰相輝元

右先驅ノ儀ハ。三組ノ者一日替ニ被仰付

候間。可成其意。次ノ備如書立。次第々々無油斷相働。大明國可成程可申付候。猶以渡海ノ人數追々可相詰旨被仰出候。日本弓矢キヒシキ國ニテサヘ五百千ニテ如此不殘被仰付候。大明ノ長袖國へ先驅仕候間。無心元不思召候。早速可申付事肝要ニ候。猶石田治部少輔可申者也。

天正二十年六月三日 御朱印

羽柴土佐侍從殿
生駒雅樂頭殿

朝鮮國御仕置ノ城々

一釜山浦本城 一万七千六百人 安藝宰相

一椎木島端城 同人

一セツカイ

一地續ノ出崎端城 同

以上三ヶ處

一セツカイ本城 六千六百人 小早川侍從

一端城 四百人 久留日侍從

千百三十人 柳川侍從

三百三十人 筑紫上野介

二百九十人 高橋主膳

合八千七百五十人

以上二ヶ處

一唐島之内一ヶ所四千五百人 蜂須賀阿波守

二千四百五十人 生駒雅樂頭

合六千九百五十人

一唐島之内一ヶ所二千五百九十人

土佐侍從

二千五百人 福島左衛門太夫

二千三百四十人 戸田民部少輔

合七千四百三十人

一加得ノ嶋 八百卅四人 九鬼大隅守

三百十四人 加藤左馬助

百六十人 菅平右衛門

四百五十八人 來島出雲守

百十二人 得居

九百人 脇坂中務少輔

合貳千七百廿三人 番替

千四百七十三人 藤堂佐渡守

五百七十四人 堀内安房守

百八十五人 杉若傳三郎

五百四人 桑山小藤太

同小傳次

合貳千七百廿六人

一本城一ヶ所 千六百七十一人 毛利壹岐守

七百四十一人 高橋九郎

三百八十八人 秋月三郎

四百七十六人 島津又七郎

七百六人 伊東民部太輔

合三千九百八十人

一本城一ヶ所 六千七百九十人 加藤主計頭

一端城一ヶ所 以上二ヶ所 同人

以上二ヶ所

一本城一ヶ所 貳千百廿八人 薩摩侍從

一本城一ヶ所 五千八十人 黒田甲斐守

一本城一ヶ所 七千六百四十二人 鍋島加賀守

一端城一ヶ所 同人

以上二ヶ所

一端城一ヶ所 對馬侍從

一本城一ヶ所 七千四百十五人 小西攝津守

一端城一ヶ所 松浦刑部卿法印

宇久大和守 五島

大村新八郎

有馬修理大夫

以上三ヶ所

城數十八之内 本城十一
端城七

人數合七万八千七百人

右所付無之分ハ見計。從西生浦西ニ付テ。

此書立次第ニ城可相究事。

一普請ノ割手間可入所見計。人數割府可仕事。

一唐島ノ儀ハ。チンシユノ働ニ不相搆。蜂須賀阿波守。生駒ウタ。土佐侍從。羽柴左衛門大夫。戶田民部少輔。并舟手ノ衆トシテ惣手ノ舟ヲ以相越取堅候ハ、。四國衆トシテ普請仕。船手ノ者加得島へ如書付可相越事。

以上

文祿癸巳二年五月廿日 御朱印

萬曆壬辰。李如松爲提督。五万人出山海關。癸巳正月三日。次安定館。六日抵平壤。八日攻城。日本人退平壤。十六日明兵至開城。二十七日碧蹄館與日本人戰。如松被傷。四月廿一日日本人出王京退釜山。五月二日明兵駐善山府。七月初日攻晉州落城。

一四國九州伊勢紀州ノ兵船渡海ス。大閣ハ有着座名護屋。被連謀於千里ノ外。名護屋在陣。

武藏家康公大納言 一万五千人

大和中納言 一万人

加賀宰相 八千人

阿濃津中將 三千人

結城少將秀康 千五百人

織田常眞 千五百人

越後宰相景勝 五千人

會津少將氏鄉 二千人

常陸侍從義宣 三千人

伊達侍從正宗 千五百人

出羽最上侍從 千人

金山侍從 二千人

松任侍從長重 八百人

京極侍從高次 八百人

安房侍從里見

百五十人

羽柴河内侍從

毛利

千人

龍野侍從俊勝

千五百人

北庄侍從

六百人

村上周防守

二千人

溝口伯耆守

千三百人

木下宮内少輔

百五十人

水野和泉守

千人

青木紀伊守

千人

宇都宮彌三郎

三百人

秋田太郎

百二十人

津輕右京亮

五十人

南部大膳太夫

百人

那須太郎

百五十人

日根野織部

三百人

北條美濃守

二百人

伊藤長門守

千人

外樣大名

合六万六千六百七十人

近習ノ備ハ富田左近六百五十人

金森飛驒守

八百人

蜂屋大膳大夫

百七十人

戸田武藏守

三百人

奥山佐渡守

三百五十人

池田備中守

四百人

小出信濃守

三百人

津田長門守

五百人

仙石越前守

千人

木下右衛門大夫

二百五十人

上田左太郎

二百人

山崎左馬允

千人

稻葉兵庫助

四百七十人

市橋下總守

二百人

赤松上總介

二百人

羽柴下總守

二百人

赤松上總介

二百人

羽柴下總守

三百人

合七千百九十人

弓鉄炮衆大島雲八

二百人

伊藤彌吉

二百五十人

野村肥後守

二百五十人

木下與右衛門

二百五十人

船越五郎右衛門

百七十五人

宮木藤左衛門

百卅人

橋本伊賀守

百五十人

鈴木孫市

百人

生熊源介

二百五十人

合千七百五十人

御馬廻六組

四千三百人

小姓六組同

此外室町宰相中將公五百人

御咄衆

八百人

木下半介

千人

御使役衆

七百五十人

御詰衆

二千百人

鷹匠衆

八百五十人

中間以上

千五百人

合一万六千百人

後備羽柴三吉侍從

三百人

長東大藏太輔

五百人

吉田(古カ)織部

百卅人

山崎右近進

二百人

蒔田左衛門權助

二百人

中江式部太輔

百七十人

生駒修理亮

百卅人

同主殿佐

百人

溝江大助

百人

川尻肥前守

二百人

池田彌右衛門

百五十人

大鹽與一郎

百廿人

木下左京亮

百廿人

矢部豐後守

百人

有馬玄番助

二百人

寺澤志摩守

百六十人

寺西筑後守

四百人

同次郎助

福原右馬助

五百人

竹中丹後守

二百人

長谷川右兵衛尉

二百七十人

松岡右京進

百人

松下右兵衛尉

七十人

氏家志摩守

二百五十人

同内膳正

百五十人

寺西兵衛尉

二百人

服部土佐守

百人

間島彦太郎

二百人

合五千七百五十人

此外浮勢六万余騎。朝鮮渡海ノ勢十五万二千五百人也。於大明有援兵。急ニ可有渡海被下知。

四月十二日。諸勢從名護屋解纜。小西對馬ヲ拔駟シテ。廿八日至釜山浦。則乗捕之。討八千五百人。同日午ノ刻東萊ヘ押寄ス。敵不堪開渡ス。五月二日。秀家着岸加小西。三日小西攻討忠州。依之帝去都退去ス。十日小西先立テ入洛。主計頭追潜幸進慶安道得太子。

一從釜山海當任有赤國。守護號木曾。ホケン忠州ノ城

江安

主也。加藤ハカアン道。小西ハ平安道ニ出勢處ニ。木曾發兵。則細川。長谷川藤五郎。木村常陸介。小野木縫殿亮。牧村兵部太輔以下以一万三千余騎攻之。敵猛勢ニシテ不克攻討。六月十二日陣拂シテ引取ル。秀吉公大ニ怒リ。急ニ可攻討云々。依之六月廿七日乗取力

攻。無難得忠州。加藤先諸軍。木曾カ首ハ討
秀吉ノ士岡本權允。

船手ノ働

朝鮮人兼テ釜山浦數十里ニ出番。欲遮日本
ノ通路。爲傍觀。福原右馬助。太田小源五。毛
利勘八。竹中源介。垣見彌五郎。熊谷半次。早
川主馬首。七人ヲ被著遣。諸將目代於唐島。
可伐取番船評議逗也。然處ニ藤堂カ家臣同
名新七郎。七月十五日ノ夕陽乗捕番船來ル。
翌朝又諸將集目代ノ舟欲調日本注進帖。然
處ニ加藤左馬助カ兵揃數十艘。押寄唐島湊。
諸將目代見之典厩カ兵士拔駈ノ働尤背制
法。急可被引取云々。左馬助呼軍使雖制之。
兼テ云含シ事ナレハ不隨之。典厩僞テ自身
行テ可制。怒テ乗小船追懸ル。暫シテ諸將察
典厩謀。各々ノ乗船押出ス。日本ノ船數萬
艘。一度ニ解纜。典厩ハ昧方詰後得力賊船ハ

敵ノ猛勢ニ失力押船退ク。典厩自ラ乗艘。白
晝ニ附番舟。則乗取之。其後逃散ノ番船又乘
拾舟。我モクト討取。燒捨ル事不知數。中
ニモ島津兵庫頭得數艘。日本ヘノ注進。藤堂
ハ乗取一番船。左馬助ハ白晝ニ自身乗取敵
船云々。從大閤各ヘ賜感帖。

日本勢取釜山浦ノ城事

朝鮮舟手ノ大將元均。船師ヲ統率シテ閑山
島ノ前洋ニテ。軍ハ雖爲午角。日本船如雲霞
競來レハ。元均失術。其上釜山ノ民爲商賣常
ニ結日本。交日本人モ多以住彼處。是等爲案
內者導之。朝鮮國王李^{リエン}昭。在住年久ク。怠政
道。賢臣被退。小人得時。邪臣柳承李寵李德
馨等。飾諂諛調疎忠直人。不知國家兵。依之
逢此亂失十方。雖然不防戰。則時ニ可被破王
城。集近國軍兵二万余騎。楯籠釜山浦城。此
城郭正面ハ城廣ク石壁ハ高シ。後ロハ高山

嶮岨ニシテ。二方八山ノ尾傳ニ振柵堅固ノ要害也。サレトモ日本人從三方取卷。後ノ山へ上弓鉄炮見下シ打入中。依之諸門攻崩。城兵三万余人不洩殺害之。此勢ニ恐怖シテ平安アヘハチクシヤク黃海忠清ノ三道無可防兵。

日本勢入王城事付加藤清正捕二王

子事

平安黃海忠清ノ三道破レテ。ヤカヤシク慶尙道全羅道モ開城落失ス。國王聞釜山落城弃王子后妃被奔義州王子后妃騷テチランカイ兀良哈ヲ志シ落給フ。加藤小西二手ニシテ追之。南方ハ小西。北方ハ加藤也。小西二十日計雖追懸。大明境南道へハ不落給。空手引還平壤舊都。清正ハ兀良哈ノ境へ追詰ル。是ハ朝鮮地異人形失力引還處ニ行逢王子退去。王子之勢不過五百騎。勞倦無力。入古館繼息處へ。清正以使是迄來上可有渡御云々。不及否被對面。清

正王子二人イモヘイクレン太子臨海君肆次子光海君瑋ヲ奉生捕還王城。依之目代并清書日本注進ノ狀ニ。王子奉請殺害ノ芳免。大閣喜悅不斜。清正ニ賜感狀。從兩王子清正カ感懇情一通帖ヲ遣。加藤右馬允。兩王子イモヘイクレン臨海君。順和君。兩府夫人。陪官長溪君シヤゲ。上洛君。行護軍大將南兵使等。自壬辰年七月廿四日被擄日本大將軍主計頭清正入城。相見テ即加禮遇。一行下人并テ給衣糧撫恤頗至レリ。又稟于關白殿下到釜山浦。還テ許放還京城。其慈悲如佛。眞ケ日本中ノ好人也。況ヤ素聞。關白殿下雄傑無比。四隣皆畏之。且善於分別。待隣國ノ王子。諸官稍存舊意。愍其渡海復于京。其恩厚與北海俱ニ深シ。一行ノ人其レ敢テ或忘。後日ニ若對日本及主計頭。後發雜談。少有背負之意非人情也。天地之鬼神共。知之矣。修好日通書寄情事。

萬曆二十一年六月初二日順和君

行護軍

南兵使

臨海君 長溪君

加藤右馬允殿

秀吉卿ノ母堂號大政所。依病疴七月廿二日名
護屋出船。晦日上着。母堂廿五日逝去。葬大
德寺建天瑞寺。

于時天和二丑卯月下旬

續群書類從卷第五百八十四下

合戰部十四

豐臣記下

軍勢又渡海之事

二月朝鮮渡海ノ勢雖遣十五萬騎。大明ノ援兵來ラハ可爲難義。其上王城ノ制法爲下知。三奉行令渡海。備前宰相秀家ヲ爲大將。被遣六萬騎。秀家一萬人。增田右衛門尉二人。石田治部少輔二千人。大谷刑部少輔二千人。前野但馬守千人。加藤遠江守千人。合一万七千二百人。二番淺野左京大夫三千人。宮部兵部少輔千人。南條左衛門尉千五百人。木下備中守八百五十人。垣屋新五郎四百人。齊村左衛八百人。

明石左近八百人。別所豐後五百人。郡上侍從千四百人。一柳右近八百人。谷出羽守四百五十人。服部采女八百人。石川備後三百五十人。合一万五千五百人。三番岐阜少將八千人。羽柴丹後少將。三千五百人。同東江侍從五千人。木村常陸介。三千五百人。小野木縫殿助千人。野村兵部少輔七百人。岡本下野守五百人。加須屋內膳二百人。片桐東市正二百人。同主膳正二百人。高田豐後守三百人。藤懸三河二百人。新庄新三郎三百人。毛利兵部少輔三百人。龜井武藏守千人合二万五百人。此外伊達正宗ハ淺野彈正ニ隨從ノ依望渡

海被添淺野左京大夫。此時被遣諸大將銘銘。

人數押ハ去春如被仰付

右先懸ノ儀ハ。三組ノ者一日替ニ被仰出候間。可成其意候。

其次ノ備ハ。如書立。次第々々無油斷相働。大明國可成程可申候。猶以渡海ノ人數追々可相詰旨被仰出候。皆共多勢ニテ。大明長袖ノ國へ先懸仕候間。無御心元不思召候。早速可申付事肝要ニ候。石田治部少輔。増田右衛門尉。大谷刑部少輔可申者也。

天正二十年辰六月三日 御朱印

兩雄爭威事ナレハ。加藤小西不和也。清正ハ擒王子ヲ賜感貼。行長ハ骨折ナカラ空手不還。王城留平壤ノ舊都雖待出大明人未來襲。依之王城ノ諸將へ以使介。從是渡鴨綠江入安大明。可有後詰云々。雖然

王城ノ諸將評議ノ。慶安道全羅道城々堅ク守テ不降。後ニ置大敵渡大河事成大事云云。從王城全羅道船手ノ便リ好シ。船與陸ニテ先全羅道ヲ可發向定ル。小西カ思慮不叶。仙巢玄樞長老竹溪宗逸ヲ遣持檄告朝鮮王。

此書朝鮮國王告李昭王大ニ驚。急ニ告大明請救兵。大明ノ群臣閱之驚駭ノ。倭犯朝鮮窺國中事二百年來所未見者也。見義不爲無勇也。可出援兵評議ス。當時北方寧夏西南夷ノ都蠻起亂遣兵人民苦轉漕。如何セント僉議ス。遂ニ爲救朝鮮。祖承訓ト史遊擊ヲ爲將。出邊兵三千人。壬辰五月渡鴨綠江。

平壤ノ軍討取史遊擊

祖承訓史遊擊二將ノ士卒遼東ノ馬武者也。不諳地利又不知日本行。五月雨無絕間。山

水漲リ來レハ馬足浸泥土蹄爛レリ。一度上
嶺足爪盡ク掣テ働不得。小西カ勢ハカリニ
ノ平壤ヲ拵堅固ニ王城迄ノ繫ノ要害ヲ堅
メ。次ハ大友豊後侍從義智。次ハ黒田甲斐守。
其次ハ久留米ノ侍從。次ハ小早川。段々ニ持
堅。有告急事爲懸合也。小西ハ今マヽト
待敵處ニ。七月十五日西大將僅三千余騎ニ
テ着平壤ノ安定館。小西見之。其夜懸足輕
敵騷立テ亂備。然ハ敵ハ無勢也。不足恐。
翌日押寄安定館。日本ノ武具ヲ大明ノ馬不
見訓進不得。歩立ニナレハ泥土ノ中ニ顛倒
ス。日本勢競來テ討之。サスカ兩將不遁。蹈
留テ史遊擊討死ス。祖承訓ハ僅ノ勢ニ討ナ
サレ。一身ニノ逝去ヌ。此事聞大明天子驚。
群議ノ此時總兵李如松平北方寧夏成功飯
ル。是ヲ爲將發向ス。令惟敬調和。行長以
兩僧報之。八月廿九日。惟敬贈金幣。初テ行

長ト會乾伏山麓調和好儀三奉行モ都ノ軍
將モ同之ニ所々ノ城ヲモ不攻。行長與ル惟
敬ニ書ニ曰ク。

日本差來先鋒豐臣行長。謹テ啓大明遊擊將
軍沈公ノ閣下。日本絕朝貢者久矣。數年雖求
計和議於朝鮮。朝鮮不應日本求。故ニ起兵
矣。惟時閣下來平壤。實ニ兩國舊規之起ル本
乎。抑閣下以轉奏遣天使於日本。以爲和親之
驗則幸也莫大焉。若見許尺使則相待コト者
以中間五十日爲期。若又誤期者則難留日本
諸將於朝鮮城中。伏乞亮察。誠恐頓首不宣。

計開

鎧一。甲鉾一挺。冑一首。弓一張。

韃一。腰付十矢。單刀一ヶ。長劔一挺。

壬辰九月初三日 行長

翌日惟敬カ方ヨリ求日本鉄炮。此時又遣書
簡義州ニ坐朝鮮國王告知之。無逗留還大明

和好ノ返事可報五十日内。書テ吾性名官位迄具ニ顯之。僕ハ攝津州前司小西秘書少監豐臣行長也。傍將ハ對馬州前司宗拾遺侍中豐臣義智ト書テ遺ス。十月ノ初惟敬以和議雖回報。群臣不評定上難定。其上李如松提督ノ催大軍時節ナレハ。先出軍。重テ可評議。石司馬カ所ニ留置惟敬。

李如松攻平壤小西引退事

經略宋應昌ハ行遼陽。提督李如松ハ率兵渡鴨綠江。如松分兵爲三協。中協ハ楊元。左協ハ李如松。右ハ張世爵也。吳惟忠ハ領三千ノ南兵屬右協。以上五万余人也。萬曆二十年壬辰十月廿七日出山開關。十二月廿五日誓軍渡江。

翌癸巳年正月三日着安定館。朝鮮軍兵從方馳加テ二十万騎ニ餘ル。小西敵ヲ引出シ懸足輕李寧近々ト寄セテ打散ス。依之城兵

モ大軍ニ恐テ不出。同六日押寄平壤城下。平壤。東ハ有大同江。西北ハ山坡也。城外二里計有牡丹臺。臺邊柵ヲ構ヘ是ヲ牙城トス。城兵一万五千人。堅固ニ持之待敵。提督カ三脇見之。先破臺押寄。從城密ク打鉄炮。敵モ不近付。從内恐大軍不出合及夕陽。夜半從城打夜討。兼テ敵心得發矢石。日本人過半討レ引入城中。八日早天從三方攻入。城兵開門打出攻戰。西ノ手ノ兵微勢ニシテ敵攻入ケレハ。城中散亂ス。日本人千六百余人討ル。小西下知諸卒密ク打鉄炮。敵數千人討死ス。依之敵モ引取ル。小西以軍使云。遣大友傳繫城々。乞王城援兵。大友侍從義智元來弱性ニシテ。聞敵大軍。小西ハ早可被討。捨繫城逃入王城。黑田甲斐守。久留米侍從微勢ニシテ待王城加勢。王城ノ諸將四五日僉議シ各恐大軍不得進。小西無爲方。夜半ニ恐テ去城皈王城。夜

明テ雖攻入。無一人。小西退去ノ時。黒田久留米小早川モ可被引取イヘトモ。敵ノ旗色モ不見不可退去云々。黒田久留米ハ拂此城。小早川カ繫ノ城ニテ可待王城勢云々。王城ノ諸將三奉行以軍使小早川ニ可被引取云ヘトモ不承引。大谷來彼陣盡理諫レハ。小早川モ大谷トツレテ還王城。

小早川開城軍ノ事付南安府ノ軍

正月十六日。李如松率十萬騎來開城。開城モ日本人開退ケレハ。窺王城行可遂合戰云フ處ニ。長通事ト云者進提督ケルハ。日本ノ勇士於平壤盡ク死ス。於至王城相戰。必可有利云々。提督信之。以南兵令守開城。朝鮮人ヲ爲後軍。高昇孫守廉祖承訓等率強兵十萬騎。同廿七日渡開城門至碧蹄館。小早川後ニ引ケレハ。從王城隔三里在一手先。此手柳川侍從久留米侍從等相交二万余人。敵張開城

陣急ニ可有襲來。筑紫侍一人宛夜廻シ。堅ク守之處ニ。柳川カ常番ニ提督カ勢闇紛レニ行逢。大軍ナレハ過半討レ引入本陣。夜明テ見之。敵勢隔一里。段々ニ立備。若將望魁。雖然小早川兼テ思設シ事ナレハ。佗人ニ不可讓。二万余騎ヲ分六組。一番粟屋四郎兵衛三千。二番丹上五郎兵衛三千。三番隆景。胸勢一万余騎。搦手ハ柳川侍從二千五百。毛利大藏元康久留米侍從秀巴以上六千。大手ノ軍半ナラン時。横合ニ駈ラント兼テ定約。李如松カ兵乘入。密ク射半弓。味方手負死人不知數。已ニ危キ處ニ。柳川元康入横鎗。乘破敵軍中。敵周章ノ色メクヲ。隆景一万余騎突テ駈ル。李如松入替々々進軍勢。サレトモ隆景密ク戰ケレハ。敵ノ大軍シトロユナリ。追入間城川。提督カ兵討取万余人。然處ニ南兵以鉄炮五百挺加來。提督得力不退開城持堅ム。王

城ノ西南有大河。南安府有二山。兩ノ間有沼。嶮難ノ地也。大明人此山構取手。欲留王城道間。城川ノ軍ニ不逢將可取此要害談。三

奉行加藤遠江守母衣十四五騎遣外候ニ双備

(斥力)

東江侍從木村常陸等。吾モト十騎計宛

遣之。回候トモ爭先付柵際。城中ニハ敵ヲ

謀カラン爲ニ不物音。寄手見之。城中ニ人ナ

キト心得テ。我先ニト押上ル。數万ノ敵柵際

ニ著ヲ見テ。投懸大石大木射立ル。人頽レヲ

ツイテ落重谷底。諸將自ラ採白旆進軍士。諸

卒勵軍忠外輪ノ柵一重引破テ押入城中。城

中人多ケレハ射出ス矢如雨。敵味方入交テ

戰。從本丸突テ出。追出外輪。勢盡力衰テ引

取。城兵氣ニ乗テ所々詰リトニ待懸。射弓

欲遮留之。返シ合セ無爲戰者。王城ニ殘ル小

早川加藤小西無心元山際迄出迎。互ニ引取。

トモニ翌日出斥候見スルニ無一人。夜中ニ

入開城。從日代日本へ言上ス。大友カ不救平壤。勇士ノ非本意。本朝ノ耻也ト大ニ怒テ。沒收所帶。小早川柳川ニハ賜感帖

攻晋州ノ城事

集王城勢十万余騎。徒ニ送數日。從大閣以使
者大明人ノ出張幸也。急可遂合戰被命諸將
井三奉行。依之日々雖有評議。提督李如松二
十万騎ニシテ守開城。輒ク不成寄來。更ハ不攻
晋後ニ渡セシ加藤遠江守長岡丹後侍從東郷
ノ侍從木村常陸介等七人不交忙勢打立。晋
州ハ隔王城四日路。軍勢不足二万騎。晋州ハ
朝鮮第一ノ名城也。國王沒落ノ時。從箕子傳
來ル代々ノ寶物等納置此城。還兵二万騎楯
籠ル。七人ノ將不知之。無勢也ト侮テ凌切所
押寄城下。我先ニト攻寄ル。味方不續事ヲ見
透ノ打テ出追拂。手負死人不知數。可入替
無勢モ引退ク處ニ。從城中稠ク慕跡敗北ス。

其後ハ不得戰。空ク送數日。依之日本へ請加勢。然ノ被遣安藝侍從秀元。於此時諸將ニ爲付勇氣催茶湯宴。謀猿樂被興歌舞。諸將勉此役自被舞曲。

遊擊沈惟敬兩國調和

去年小西行長。會惟敬說和義。依之惟敬從帝都來テ見李如松。石司馬宋經略カ意ヲ宣テ語可和義由。依之議小西。

一ニハ和親。二ニハ割地。是ハ今迄日本ヨリ切取シ四道ヲ可領知義也。三ニハ入貢。如前代ノ年々進貢船義也。四ニハ封王。大閤ヲ從大明可封日本國王義也。行長モ三奉行モ聞誤之。大閤ヲ可封大明王義也。告此旨。大閤依之遂ニ破和義云々。

徐貫謝用梓沈惟敬。六月ノ始渡海ノ至名護屋。見大閤。建別館賞之。兩使ニ賜千銀。惟敬ハ從初執之。故ニ賜三千銀。金作ノ長刀屬兩

使。小西飛驒守ト藤原如安ヲ爲使節。被遣大明國被命小西三奉行二人ノ王子并臣下ヲ可送返朝鮮云々。

大明ト日本和平ノ相定條々

一 天地不替間者。不可在相違於契約者大明帝王之姬宮。日本帝王ノ爲后可被相渡ノ由可申事。

一 勘合ノ儀可申談事。

一 大明日本武官衆誓紙取替之事。

一 朝鮮國人儀。先勢罷越盡ク申付候條。此上ハ經年月。民百姓以下靜謐ノ様ニ。彌遣人數被仰下候。今度大明國へ被仰出候條數於相究者。朝鮮國王之儀雖不相届候。免大明又最前一禮ヲモ申候條。付朝鮮都四ヶ道。不被遣候事。右王子一人并家老衆相渡候事。

一 最前生捕ル王子二人ノ儀。非下々者候條。無事ニ相構。爲四人請取。唯今遊擊相添可返朝

鮮事。

一朝鮮國家老之者。永代相違有間敷トノ誓紙之事。右ノ赴大明勅使ニ可申渡事。

一牧僧城取卷仕寄築山中付。手負無之様ニ令覺悟。如何ニモ丈夫ニ仕。一人モ不殘可討果事。

一於其上。赤キ國ヘ相働可致成敗事。

一赤キ國成敗ノ上ニテ。右前ニ城相拵。依人數多少城大小共見計。其々ニ可被侍事。

一中國衆。同隆景。四國衆船手ノ者共事。九州衆ノ外ニテ候間。釜山浦熊川浦モカイ。其近邊ニ可然ノ事。

一兵糧藏之事。其城持應人數相定可入置事。

一鹽增右同前ノ事。

一鉄炮玉藥藏可同前事。

一自然大明國御詫言雖申上候。無油斷右ノ通可申付候。來年名護屋被成在府。可被仰付候

事。

一仕置等於被相濟上。備前宰相事ハ名護屋可爲在城事。付壹岐對馬ニハ御馬廻在番不被仰付事。

一猶以様休委曲。熊谷半次。水野玖右衛門兩人ニ被仰含候事。

文祿二年五月朔日 御朱印

淺野彈正少弼殿

黑田勘解由殿

增田右衛門尉殿

石田治部少輔殿

大谷刑部少輔殿

六月ノ末兩使惟敬還釜山。以大閣之命喚朝鮮臣。下渡二王子。帝王モ還幸從義州。王城上下成安堵思。

攻落晋州城

小西主和儀。三奉行七人ノ目付一同ニ調和

儀之由。雖告大閤。落攻晉州。其上ニ可調和儀。安藝宰相二万余騎着岸釜山。小西ハ調和儀空ス。加藤ハ盡粉骨。二王子送返サルヲ不安思ヘハ。攻落晉州破和儀進ミケル。文祿二年六月ノ初。清正。行長爲兩魁兵。一方ハ安藝侍從ヲ爲將。小早川。黑田。淺野彈正。伊達正宗加之。其外小勢ノ將盡數。一方ハ備前宰相秀家爲將。島津兵庫頭。鍋島。土佐侍從蜂須賀。柳川侍從等。以兩手六万余騎向晉州。從大明赴朝鮮援兵不知數來ル。晉州前ニ在大河。三方峻岨ニシテ石壁屹出也。内ニハ大明ノ牧使ヲ爲將。朝鮮ノ古兵二万余騎楯籠ル。諸手從四方攻入。清正生牛ノ皮數百枚重テ。爲龜ノ甲。此内ニ入軍兵。一方ノ櫓ヲ掘崩ス。黑田カ手拔石壁櫓顛倒ス。大手ノ從攻口乘入。城兵防之。西ノ方ハ秀元攻入。後無爲方落失。溺前川。牧使モ逃出。遂ニ被討

首。大將分ノ首十余渡日本。大閤實檢ノ於洛陽渡大路。此時正宗ニ賜感帖。

朝鮮王五月還王城不經兩月。攻晉州。恐怖ノ又大明ヘ乞援兵。日本人モ可入王城心ニモアラス。治全羅道還釜山ニ。李如松見之。惟敬カ和儀ノ貴^{責歟}僞。不及一言返答。又行小西カ許。恨變約事。小西却テ責惟敬。汝雖調和儀大明ノ兵日々入朝鮮。是欺我怒ル。兎角ノ經日數。

大閤在名護屋。待給和儀左右。大明ノ無返答。諸勢長陣ニ可油斷。從八月毎日遣使節。秀家秀元并諸將ニ被勵勇氣。

一至十日。從朝鮮無大明和儀左右。又無王城ヘノ勦。諸軍勢釜山近邊ニ充滿シ。暗然トシテ送日。從大閤使長東大藏木ト大膳。諸將ニ加下知。其帖ニ曰ク。其表爲見舞被遣美濃部四郎三郎山代小才次ヲ。長々在番苦勞不被及

是非候。殊ニ普請以下丈夫ニ申付番等。無油斷ノ起被聞召届候。就其人數兵糧等相改可申越候。猶以兵糧當春船數相揃。追々渡海之儀被仰出候。將又小袖二被遣候。猶兩人可申者也。

正月廿八日

二月ノ比可爲進發事

一高麗ノ都ハ。二月落去候。然間彌急可被成御渡海候。此度大明國迄不殘被仰付。大唐ノ關白職可被成御渡候事。

一人數三万^(可カ)不被召連候。從兵庫船ニテ可被相越候。馬ハ陸地可被差越事。

一三國ノ中御敵對中者雖無之。外聞實儀ニ候間。武器ノ嗜專一ニ候。下々迄其通可申聞事。

一召具ノ者廿人持ノ中へ三万石。馬廻之内へ貳万石。可借遣候。金子モ似合々々可借遣

事。

一京都爲御城米被詰置候八木ハ不可有手付候。其外三万石最前被下候八木。陣用意ニ不足候ハ。大閤御藏米入次第可被遣事。

一熨斗付ノ刀脇指千腰。可有用意候。餘兩多候ハ差候者トモ。遠路令迷惑候間。刀七兩。脇指三兩余ニテ可申付候。

一熨斗付ノ長刀三十枝。同鍵二十本。此外ハ無用ノ事。

一長柄ノ鍵ハ柄ヲ金ニ可仕候。毛ノ投鞘ハ無用。大坂ニ櫓ノ柄枯シ候テ置候可在之候間。可被召寄事。

一金子手前ニ在之分拂底候ハ。聚樂ニ在之銀子二万枚遣大坂。大坂ノ金子千枚可召寄候。^{枚數}但五百技用意候ハ。銀子五千枚替ニ可遣候。如何程ニテモ可爲十分一事。

一段金子金襴唐織物之類用ニ候ハ。以注文可被

申候。イカ程モ可被遣事。

一具足ノ笈五六十可持候。余リ多ハ無用ノ事。

一御馬共唯今高麗へ半分被引候。名護屋へ鞍道具共殘置候間。從其方數多引候儀無用ニ候。廣島ニモ十疋被置候條。彼地ヨリ可引替候。能々可飼置ノ旨。可申聞由西尾ニ被仰付事。

一名護屋へ高麗所々御兵糧澤山ニ在之事ニ候間。不及用意候。路次中ノ兵糧計可被遣事。

一若黨小者以下。下々迄モ可召置候。此方ノ小者共被爲雇候。俄ニハ不可在之候條。前廉其用意肝要之事。

一丹波中納言此方へ可召寄候條令用意。一左右可相待候。八月以前タルヘク候。借米等ノ儀ハ山口方へ被仰付候。八月以前ニ被召寄。高麗カ名護屋ヲ留守被仰付事。

一高麗ノ爲留守居。宮部中務以法印可被召寄

候。令用意可相待旨被仰遣事。

一大唐之都へ移竄慮可申候。可有其用意候。明後年可爲行幸候。然ハ都廻ノ國々十ヶ國可進上候。其ノ内ニテ諸公家衆知行可被仰付候。下々ノ衆可爲十倍候。其上ノ衆可依人休。

一大唐ノ關白右如被仰出。秀次へ可被爲讓候。然ハ都廻リ百ヶ國可被成御渡候。日本ノ關白ハ大和中納言。備前宰相兩人ノ内覺悟次第可被仰付事。

一日本帝位ノ義。若宮八條殿ニテモ可被相究事。

一高麗ノ義ハ。岐阜宰相カ備前宰相カ可被置候。然ハ丹波中納言ハ九州ニ可被置事。

一震旦國一被爲成竄慮候。路次ノ列行幸ノ可爲儀式。御泊々今度御出陣ノ道路御座處可然候。人足傳馬ハ。國限ニ可申付事。

一高麗國大明迄モ不入御手間被仰付。上下迷惑無之候間。下々逃走ル事モ有間敷候。遣諸國奉行共。召返シ陣用意可申付候。

平安城并聚樂御留守ノ儀。追テ可被仰出ノ事。

一民部卿法印。小出播磨守。石川伊賀守以下令用意。御左右次第可致參陣旨。可申聞事。

右條々被仰含。西尾豐後守被遣候間。可被得其意者也。

文祿元年五月十八日 御朱印

關白殿

薩州肥後ノ境。佐敷ノ城ハ領加藤清正處也。同名與左衛門守護之。朝鮮初渡ノ留守ニ止與力廿餘人。然處ニ薩州梅北宮内左衛門ト云者率二百余人。拂曉ニ襲來奪之。城兵周章ノ雖防之。微勢不及力。詐テ請和。然ノ通相良約援兵。謀梅北。城下ノ商人可遂謝禮云

云。梅北許容ス。侍ヲ作凡人。持酒肴入城中。近付北梅。坂井善左衛門切彼。與左衛門カ弟井上勘兵衛ヲ取入質。上置二階。坂井カ聞太刀音飛下リ。以二太刀切伏。井上彌右衛門。同彦左衛門等出合討果。梅北郎等殘黨怖之逃城外ヘ。然處ニ不違時刻相良勢來テ討之。梅北奪佐敷。割分軍兵遣八代。彼等聞梅北害逐電ス。

秀吉公於名古屋達上聞召寄セ被感之。賜坂井ニ二千石。井上勘兵衛二千石。同燭右衛門彦右衛門ニ五百石宛ノ恩地。

秀賴誕生被還大閣大坂事

去年ノ春在肥前ノ名護屋。以下知轍ク日本人入朝鮮都。剩清正擒二王子欲入大明處ニ。去冬依母堂ノ病死。俄上洛被執行於大德寺葬禮ノ儀式。過中陰之限至名護屋云々。此事入叡聞以傳奏有御留。大閣謹テ勅答被申ケ

ル。全ク不背勅命。日本人過半有朝鮮。雖勝軍大明ノ援兵無覺束候。從九州運謀略。退治彼國。欲耀日本威光云々。天子被感理所當有勅許。此時秀次廿八歲請天下讓下九州事。可爲本意。有洛事酒宴遊興。忠孝二ナカラ闕タリ。難道天罰乎。

大閣在名護屋。成朝鮮號令。彼國八道ノ内三道ハ入手。雖押入王城。道遠ノ不續兵糧。大明人日々ニ重リ來レハ。先引入釜山浦。各休息ノ待大閣下知。公モ家康利家ト有評議。雖然以小勝大術難有。然處ニ若君誕生ノ告及度々。大閣不ニ悅テ。朝鮮ノ事遊擊調好和無異儀諸事可付家康利家ノ下知。乘小船令還大阪。成給弄璋悅。

小西カ兩使入朝筆談ノ事

十一月十五日。孫經略差人テ招日本兩使令入朝。十二月七日入帝都。石司馬禮甚厚シ。

兩使入禁中禮法不成。隱使可惡先入別館賞之。十一日詣鴻臚寺習禮。十四日朝見シ畢ヌ。後令書三事。一ニハ釜山倭ノ衆受封後一人モ朝鮮ニ留リ不住。又不任對州。速ニ不販國。一ニハ封ノ外別ニ入貢不可求互市。一ニハ通朝鮮好共ニ爲屬國再不可侵。此三ヶ條小西飛驒守一々ニ合點ノ自筆ニ差出ス。十七日司禮監太監張誠傳聖諭承ル。天子猶モ倭使ノ詞ヲ正ノ可盡其情。秀吉何トノ侵掠朝鮮。于今在釜山不退。又差使奉表請封。豈輕ク可與乎。僞テ詳ニ究封名可議光遣二宦可究聞。一ニハ諭行長ニ留釜山不任盡クニ歸本國。釜山ノ城廓一字モ不殘可燒拂。一ニハ諭朝鮮。日本盡ク飯國セハ。可奏聞此由。來宣ヘハ。小西飛驒守又於左闕會同ノ文武及科道等ノ官集テ。以通事覲面ニ問合シ。詳情僞永ク令莫他變。依此誠初テ起兵故ヲ問

フ。求封乎。侵掠ノ爲乎。行長カ與惟敬書ヲ證トスヘシ。既ニ退釜山。又請封カ屈スル故乎。果ノ非カ。屈乎。是ハ晉州安康ノ警不證。又問許封之後。倭盡ク退カル乎。殘留ラン乎。今釜山ノ倭皆在也。カヤウノ事。一々問詰テ可知眞僞。以兩使口不可誤郡國。同廿日石司馬又內問ノ大學士趙志阜定國公徐文壁史部尙書孫丕楊及ヒ會集科道官於左闕。請小西飛驒カ封。初末ノ情由ヲ詳ニ究メ逐一問答ス。

朝鮮ハ依調惟敬和儀止軍。釜山近邊ニ搆城郭。休息士卒。朝鮮人ハ勞數年大亂搆要害不働。大明人モ引入ケレハ不及手遣。今年文祿三年甲午ノ春。名護屋在番ノ諸將モ還上大坂。大閣ハ秀賴ニ可讓天下雖有內意。秀次辭退ノ無氣色。依之爲隱居和州多門ニ欲築城被集諸勢。然トモ邊土ニノ不宜京大坂便ト

テ。木幡山ニ搆城郭。集諸國人夫壘石壁急ニ築之。朝鮮在陣ノ勢ハ屈長陣。病死スル人不知數下々ハ不及云フニ。

丹波少將。東郷侍從。加藤遠江守病死ス。中川右衛門大夫ハ卒爾ノ働ノ討ル。惣ノ諸軍勢半ハ死。半ハ病勞ス。此事達上聞。釜山在番ノ外各飯朝ノ候伏見。取屋敷。營私宅。秀次今モ至名護屋可計朝鮮宣拉カ。不然於調和議可爲父子和順。依無武道志。晝夜好鸛鷹。逍遙催遊宴。恐ニ伏見ニ營作シ。殿閣欲養應大閣。其中ニ日來ノ積惡受天責。文祿四年七月三日反逆ノ上達公聞。大閣大ニ逆鱗ノ。以増田。石田。富田玄以法印被問故。素リ依無逆心。雖以誓紙陳之。遂ニ不止疑心。木村常陸介。爲普請在淀。聞之七月四日入夜。乘女輿至聚樂謁博陸。

翌五日。輝元以石田言上ス。去春秀次卿白井

備後ヲ被差下藝州。向後不可有親疎旨賜誓詞草案不能固辭隨之云々。依之以玄以法印。宮部法印。中村式部少輔。堀尾帶刀。山内對馬守於無誤至伏見。直ニ可陳申云々。於此近習舊臣雖盡評議不隨異見。直ニ可申達伏見ニ馳駿馬。然レトモ不能面謁。入木下大膳宅。則被配高野山。剃髮染衣ニシテ供奉百余騎。八日ノ晡時出伏見宿玉水驛。從是供奉減二十騎。九日宿奈良中防。井上源五カ家。十日入高野山青嚴寺。關白ノ公達寵愛ノ妾三十余人。八日ノ夜移德永式部卿法印宅。玄以法印。田中兵部稠ク警固ノ。十一日送丹州龜山城。

殿下切腹ノ檢使。羽柴左衛門太夫福原左馬助。池田伊與守。七月十三日ノ呈奉書賜木食上人。三使十五日ノ朝至彼山。上人執之。一山ノ衆徒等評議スト云々。詮スル處鈞命重

ノ及生害。

十五日山本主殿。山田三十郎。不破滿作切腹。秀次卿介錯之。次ニ東福寺隆西堂自害ス。強テ雖被留之。日來之依厚志不得已。博陸二十八歳自害。雀部淡路守介錯ノ則以其刀自殺ス。三使十六日ノ夕陽持參首於伏見。

同罪ノ輩木村常陸介。於攝州五ヶ庄大門寺切腹。白井備後ハ四條大雲院。熊谷大膳ハ嵯峨二尊院。栗野杢助ハ吉水ノ邊鳥ノ小路カ家ニシテ生害。日比下野山口正雲ハ北野寺。丸毛不心ハ於相國寺生害。

八月二日。公達妻女數十人命德善院。石田増田。於三條河原生害。

七月晦日。從龜山坂德永法印家若君一人姬君一人妻廿余人。載雜車渡大路。引出河原。雜色害之。

被配一柳右近ハ家康ヘ。服部采女正ハ越後宰

相。渡瀬左衛門佐ハ佐竹右京。明石左近ハ隆景。前野但馬守息出雲守ハ中村式部少輔。後年於駿府生害ス。

文祿四年 五十九歲

大明ノ兩使齋璽書朝事

石司馬カ奏聞既ニ達上聞。皇帝準信之。卒ニ封王ノ儀ヲ定メ。令鑄日本王金印一顆。并冠冕法服ヲ多調。其費數万金也。詔ノ臨進候季言恭カ長子季宗城ヲ爲正使ト。都指揮楊方亨ヲ爲副使ト。策命印章ヲ令齋封秀吉爲日本王ト。

萬曆二十三年乙未正月廿一日

大明ノ使者先行三浪江逗留シ。釜山海ニ日本人一人モ不殘由從朝鮮王告來ヲハ。渡海ノ往テ可封云々。石司馬猶モ無心元。使楊鎬令見惟敬カ所爲。惟敬先ニ賜日本以金買取中國貨物爲商賣也。吾調和儀依其功可爲冊

使。思フ處ニ。副使ニサヘ不成。案内者迄ノ渡海無念也ト云々。日本勢モ不引取。朝鮮王ノ無奏報。依之兩使行釜山。待フ及半年。石司馬驚之。急可渡海由責ケレトモ。惟敬飭言不成。由ト云々。大明宦人モ聞之。司馬カ惟敬ニ賣ラレタリト云々。司馬怒テ家人三故子ヲ渡海サセ。直ニ問惟敬。惟敬使通事婁國安ヲ返答封事決定由。司馬雖安心。兩使未渡海。今年ハ暮ス。惟敬カ依妨渡海延引ス。正使宗城臆ノ逐電ス。楊方亨ヲ爲正使。惟敬如望爲副使遊擊也。今年慶長元丙申六月十五日。楊方亨。沈惟敬。并從者四百余人渡海ス。清正。行長從之飯朝ス。八月十八日既ニ着泉堺浦。朝鮮ハ素リ知難調和儀。不欲遣使者。去レトモ被攻催惟敬。不得已ヲ全羅道ノ觀察使黃愼同將官朴弘長ヲ添兩使。是モ着同津。

於伏見城饗應大明兩使事付和儀破ル
(議々)

兩使着岸ノ由。大閣大ニ悅テ。種々ノ以好味。五六日休息シ。廿九日冊使至伏見。路次ノ警固善盡美盡。兩使モ爰ヲ晴ト調威儀。大閣ノ曰ク。朝鮮ノ王子自ラ來テ可謝事。添兩使條無禮也。冊使ト同ク不可相見云々。九月二日於伏見城被謁見冊使。正使方亨在リ前。惟敬捧金印立階下。良久ノ開殿上黃幄。太閣二人ノ侍從ニ持太刀。隨左右出ラル。百官悉ク侍座ス。着座ノ時百官稽首ス。惟敬恐懼ノ金印ヲ持ナカラ匍匐ス。方亨ハ惟敬カ眞似ヲ振ヒワナ、ク。行長出テ進レハ。惟敬カ取金印。謹テ謝禮奉封王冠冕衣服。并日本諸臣ノ冕服五十具調進ス。冊使對面既ニ了テ飯館。賞珍膳美酒翌三日可宴冊使殿上ノ上段ヲ定。中央座次ノ間ノ右ニ大明ノ兩使設座。左ハ內大臣家康。大納言利家。黃門以上

大名七人設座。初太閣七人各着大明冕冠。各座曲录ニ。諸將ハ座南緣。諸大夫以下侍廊下庭上。羞膳ハ可隨大明禮法。高三尺。五尺四方ノ膳ニ。牛羊鷄魚盡數粧金銀飭作花。給仕ハ侍從以上宰相以下ノ歷々十余人。粧花麗候之。盃酒了テ歌舞管絃ハ起唐朝可賞亂舞拍子謠初ム。嘹唳ノ笛ノ音達當ノ鼓ノ聲勅使驚耳。冊使飯館。大閣入花園山庄兌長老三長老哲長老候之璽書ヲ讀セラル。大閣大ニ怒テ。從大明我ヲ可封日本國王云々。彼レ何ソ吾ヲ可許乎。可封大明王。小西依申應和儀。彼レ僞吾條可被刎首云々。兌長老諫曰ク。大明ハ中國ニ勝諸國。從古國々受封不無例。依御威光奉冊使云々。依之被和氣色。兩使嘆無返簡。退堺津數日滯留ス。然ハ冊使ニ送金銀寶物。返書ハ從是可遺云々。九日出船ス。冊使至名護屋。待順風處ニ。正長壹岐守

下豊前清正飯肥後催軍勢。大明朝鮮ノ使變色周章ス。惟敬ハ不驚。吾存生ノ内可調和儀云々。暫ノ正齋來關白書。皆人謝恩ノ可爲文章思ヘハ可攻朝鮮一撒也。朝鮮王日本ノ寫一通。大明ヘ乞援兵。十二月十七日。冊使着釜山。急飯帝都。可奏云々。同廿五日出釜山。飯明朝。至浹川時朝鮮京幾道ノ都驛察使李元翼從是先ニ逢朝鮮二使。具ニ知大閣怒心。集軍勢防キ戰ント用意シケルカ。今日冊使ニ逢。海邦寺問日本情。方亨一々ニ云聞セケレハ。元翼先向釜山。日本勢多ク不渡海内ニ可攻討云々。惟敬止之。於負初軍。後悔不可叶。以謀スルヲ謂良將。依之止起兵。万曆廿五年二月十六日。冊使入關。日本ニテ多得贈物。惟敬以之種々ノ買珍器。大明王ヘ贈。秀吉什物也ト云々。人不信之。

日本勢重テ入朝鮮國

從文祿元年壬辰。至慶長元丙申五年ノ内。調シ和漢ノ會盟。今度使來朝ノ時。朝鮮ノ王子來テ不謝罪ニ依テ。大閣大ニ怒リ。再ヒ令與干戈。去年九月進還兩使加藤主計頭。小西攝津守ヲ又爲魁兵被命。中國九州諸將各飯國令休息。來春可發向朝鮮云々。東北五畿ノ諸勢雪苦霜辛ノ築立シ伏見ノ城。去年七月十二日ノ大地震ニ顛倒ス。又點地上木幡峠。創城郭。

最前ハ肥前名護屋有御動座。今度ハ各依知案内不及渡海。二月諸軍勢可令渡海云々。加藤小西先立テ。正月ニ解纜。

征伐之制法

一先手働之儀。加藤主計頭。小西攝津守。以圖取上可爲二日替。非番ハ二ノ日ニ可相備事。一三番黒田甲斐守。毛利壹岐守。嶋津又七郎。高橋九郎。秋月三郎。伊

東民部太輔。相良宮内太輔。

一四番 鍋嶋加賀守。同信濃守。

一五番 羽柴薩摩侍從。

一六番 羽柴土佐侍從。藤堂佐渡守。池田

伊與守。加藤左馬助。來嶋出雲守。

中川修理大夫。菅平右衛門。

一七番 蜂須賀阿波守。生駒讚岐守。脇坂

中務太輔。

一八番 安藝宰相。備前中納言。兩人朋勢

可爲替々。

一釜山浦之城筑前中納言目付太田小源五令在

番。先手ノ注進無油斷可仕事。

一安骨浦城 柳川侍從。

一加德之城 高橋主膳。筑紫上野介 在番。

一竹嶋之城 久留目侍從 在番。

一西生浦城 淺野左京大夫 在番。

一先手ノ御目付福原右馬助。熊谷内藏允。垣見

和泉守 竹中伊豆守。毛利民部大輔。早川

主馬首六人被仰付候間。任誓紙上惣ヤウ

勸等ノ儀以日記。善惡トモニ見隠不聞隠。

日々可令注進。

一諸事高麗ノ様体。從七人注進申上儀可爲正

意之旨被仰聞候間。存其旨。縱雖爲縁者親類

知音。無最負偏頗。在様ニ可致言上事。

一先手勸等ノ儀。各以相談上就多分。可隨其

意脱歟

拔懸ノ一人二人申破候ハ。可爲曲事。

一於何方可爲野陣事。

一赤國不殘一筋ニ成敗申付。青國其外ノ儀ハ

可成程可相勸事。

一船手ヘ勸入時ハ。藤堂佐渡守。加藤左馬助。

脇坂中務太輔兩三人申次第。四國衆菅平右

衛門并諸手警固舟共可相勸事。

一右ノ勸以相濟上任置ノ城々所柄ノ儀。各見

及就多分定城主。普譜ノ義爲備々ノ衆令割

符。丈夫可申付事。

一 右七人ノ者共ニ被爲書。七枚起請諸事有ヤウ可申上旨被仰付候條。忠筋ノ者ニハ可被加御褒美。自然背御法度族於在之。右七人ノ申次第不寄誰々。八幡大菩薩可被加御成敗之條。得其意不可有油斷事。

一 自然大明國之者_レ。從朝鮮都五日路モ六日路モ大軍ニテ出張於陣取。各令談合。無用捨可令注進候。御馬廻迄ニテ一騎懸ニ被成御渡海。則時可被討果大明國迄事。案ノ中ニ候條。於油斷可爲越度事。

慶長二年

二月廿一日

御朱印

一加藤清正ハ。部將豐臣茂守等ヲ領シ。以兵船二百余艘。正月十三日渡海シ。十四日至朝鮮地。入竹嶋古城。從去年殘置朝鮮合勢陣機張頓テ攻梁山。梁山ノ大守退去ノ。土民ハ不逃

散。十五日小西行長カ兵船從釜山浦外洋進テ着豆毛浦。毎日引モ不切岸上ニ立四色旗。可還本所云々。廿二日清正先手ハ舟ニテ征西生浦。示牌文一紙。曰ク。日本國加藤計頭。受大閣殿下命令。再ヒ航海於此。道使遣使者于朝鮮京城回報之間。慶尙左道ノ民更ニ勿疑此書。莫恐怖退散。玆先遣我臣金大夫以令告報也。慶長二年丁酉正月日平清正。書牌ヲ所々ノ觸百性聞ス。從是兩將ノ勢三四万渡海ノ不絕運兵糧入城々。二月朔日。小西行釜山古城集材木。上天守軍營丈夫ニソ入筑前黃門。是ヲ爲本城爲謀略從釜山王京ノ道ハ。數年日本人往來亂妨ノ無人居住。全羅ノ地ハ。雖免兵火城々開去テ久ク不加修理破壞ス。然處ニ日本人俄ニ渡海スレハ。驚騒ク。國王モ前ニ懲リ。具后妃王子移海州。軍民ハ不及云。大明在番ノ兵留之不入聞。第一ノ寵

臣柳承寵サへ逃去尙州。依之大明へ請兵。大明人評義ノ内。咸三月中旬。日本ノ軍兵三番備初黒田甲斐守及黃門迄。段々一勢々々渡海シ。都テ十三万余騎入朝鮮。東萊。機張。西生浦。豆毛浦。安骨。竹嶋。梁山。蔚山。加德等ハ皆日本ノ成居城。熊川。金海。昌原。咸安。晉州。固城。泗川。昆陽モ日本人横行スレハ。大明朝鮮ノ人ハ其間へ一人モ不往來。懷土民不奪人民。此時日本人如前進來ラハ。大明ノ援兵ハ未來。朝鮮ノ軍兵ハ退散スル時ナレハ。全羅慶尙ニ無拒兵。王城へ押入ランニ可輒。居住王城。働大明へ。遼陽震動ノ登萊浙直モ危急ナルヘキニ。日本人大閣ハ無渡海。兵ハ少シ拉敵無謀計。其上兵糧モ盡テ。空ク在陣スル計也。大明人モ朝鮮人モ。聞内證安心。軍勢モ立直テ。己カ堅城々々。今年六七月ノ間。日本ノ大兵一時ニ可渡海。

黃門秀家。其外釜山竹島等ノ兵ハ。從宜寧晉州向全羅可働。宰相秀元并西生等ノ兵ハ。從慶州廻密陽大丘可向全羅。六月十四日ニ調信渡海ノ。此旨達清正行長并諸大將。惟敬聞之。對大明人不及陳子細無爲方。朝鮮ノ僧雇松雲大師密帖送清正。

刑總督カ大兵七十万。將至勸兵退兵。清正在西生浦。答書ニ曰ク。大師ノ云ク。大明ノ兵沓至ス。是我所願也。朝鮮ノ弱兵而無向我敵也。對大明兵。快ク作一戰。則朝鮮國ハ不足言。大明北京燒却之。不可回首。幸ニ又幸也。餘ハ不具。惟敬初大明朝鮮ノ兵トモ驚此返書。心ヲ不安。日々乞大明兵。惟敬雖盡計。清正モ兼テ心得不信惟敬言。

攻落南原事

沈惟敬擒ハル、ヲ。揚元カシワサ也ト恨。楊元成擒返報難成。俄ニ思出シ。遣婁國安云。

小西行長。無南原兵使取可。安南原東ニ有雲峯島嶺。南ニ在三浪大江。直ニ通金海竹島。是全羅道ノ門ノ戸也。阻截日本船。是又南原ノ爲古陣爲總督楊元ニ添遼兵三千令守此地。又陳愚衷領兵二千。住全州南原。若在變爲助合。又朝鮮ノ將金應瑞季充翼カ兵有雲峯外。權慄カ兵在閑山島內。閑山ニ又元均カ領舟師爲守。各不捕南原ヲ。互ニ成應援ヲ。之ニ置手當。攻取南原。餘ハ不攻可敗云遣ス。是ハ楊元カ執我爲散恨也。小西モ日來取南原預大悶御感恩ヘハ。幸ニ欲攻之。密ニ牒合諸將。七月初大雨連日不止。晝夜平地ニ如浮舟。依之宣府大同ノ大明勢被支。中旬至平壤。此時有便船師步兵不進一足。見之朝鮮水營ノ將元均在閑山。密ニ謀テ舉兵。約會中國勢欲忍取釜山ノ城。此時朝鮮ノ金應瑞居宜寧張擊勢。元均カ支度時日ヲ告知行長攻南

原元均カ以舟師從後襲カト案スル折節ナレハ。遣舟手勢不襲破元均カ水兵乘取閑山島。閑山入手。船手ノ勢共自由ニ往還シ。此勢ニ押入レトテ。舟手一方ハ二三日ノ内ニ光陽豆耻津ニ入テ待後陣ノ味方。此地去南原近シ得元氣。從七月廿八日繰出先手。從右押廻全羅慶尙忠清三道筈ナレハ。小西ヲ先手トシテ。秀家ヲ爲將。島津。加藤左馬助。蜂須賀。長曾我部。生駒讚岐守等ヲ加テ。五万余騎。慶尙ヲ右ニ見テ劔雲峯。攻南原押入。一手ハ加藤清正爲先手。從八月朔日段々ニ押出ス。宰相秀元爲將。黑田甲斐守。淺野左京大夫相交中國九國勢五万騎。慶州ヨリ發シ。經密陽大丘打出全義館。在王城大明勢出ハ遂合戰。忠清道不殘打廻ル。釜山在城ノ黃門委秋。家老山口玄蕃ヲ爲將。八千余騎從密陽劔玄風。從同勢入忠清道擬ス。朝鮮人權慄元

翼等カ雲峯近邊ニ雖充滿。無遮留敗東方日
本人日々ニ重リ。雲峯近邊ハ無不敵。楊元驚
テ持財寶。除平壤。平壤南原隔一千余里。小
西。宇喜多得機定手分。從兼全州後詰ノ約束
ヲ惟敬知セタレハ。諸將鬪取ニシ置全州ノ
手當。島津。加藤左馬助定全州手當被向タレ
ハ。陳愚衷可出首ヤウナシ。同十二日小西宇
喜多等四万余騎攻寄城下放山下圍之。楊元
ハ朝鮮全羅ノ兵馬節度使李福界ト共ニ守此
城。強ク發矢石。寄手少シ引退トイヘトモ。
大軍ナレハ入替々々攻近ク。又濠ヲハ以埋
草攻寄。濠外ニ振柵。從城突テ不出ヤウニ
ス。十五日從夜半。寄手不發矢石。攻口ヲ少
シ甘ロク。城兵モ爲休勞暫ク眠ス。十六日ノ
早天破南門押入城中。吹立相圖只。宇喜多。
蜂須賀。長曾我部。生駒。藤堂等面々ノ從攻
口打破テ乘入。楊元臥帳中聞之。驚起上テ。

不及衣裳逃去ル。家ノ子十八人從西門逃散
ス。從遼東來ル兵三千百十七人逃出。三日メ
ニ至思肆館。生殘ル者百七十人也。朝鮮ノ李
福界ハ不立去。士卒トモ盡ク討レヌ。諸將碎
手。首數三千余。生捕少々相添注進釜山。

副總兵解生。日本人直ニ打入王城驚テ。其手
ノ軍兵ヲ稷山ト水源ノ於要害防ント打テ出
折節。秀元カ先手ハ黒田長政也。長政カ先手
ト隔五里行逢フ。後藤又兵衛。栗山備後守。
五十余騎懸付欲追討。解生カ運ヤ強カリケ
ン。三將楊登山遊擊牛伯莫。日本人ノ通ルヲ
見ント出タリシニ。黒田カ勢ト行逢タリ。彼
レハ多勢也。取籠テ可討戰フ。栗山。後藤左
右ニ受敵。數千騎雖切落。味方手負死人多ノ
無助勢引退本陣。見之長政ノ貳千余騎懸來
ル。秀元ノ先勢千余騎乘出ス。三將ノ兵打鞭
逃ル。折節于總李益喬把總劉遇節カ大軍懸

來ル。解生是_レ得_レ力。取_テ返_ノ攻戰_ヲ。討敵百五六十。味方モ廿九騎討_レヌ。互ニ引取_テ休息。既ニ及夕日。依之日本人引退。大明ノ大軍不來。王城守護ノ兵ハ少シ。既ニ可被取朝鮮王ヲ初無安キ心。解生手痛ク戰_テ日本人ノ持首來_ル。依之持堅王城。日本人十月ノ事ナ_レハ。寒氣以前秀元一手ノ打廻_リノ待引入。青山ノ敵ヲ追落サントモセス。秀元一手ハ懸彦陽蔚山漸ニ引入。秀元ノ手ヨリ穴戸備前一万余騎ヲ加ヘ。淺野幸長二千余騎太田飛驒守八百余人殿ニ殘_ル。

大明ノ大軍入朝鮮事

十一月中旬。刑玠渡鴨綠江時。嚴寒ニノ雨雪續歟降經_ケハ。十一月廿九日初_テ至王城。出兵軍ヲセントス。日本人モ大明人來_ルヲ聞。逆寄ニスル事モ可有。出斥候。日本人ノ窺動靜。日本勢ノ堅メタル城多ト云ヘトモ。大軍ハ

屯三所。行長ハ在松島。是舟手ニテ持續順天。清正ハ在蔚山。要害ノ地ナ_レハ談_ノ諸將北ハ堅順天入置大軍。南ハ築尉山。南方一筋ヲ心安ク往還セン爲也。共ニ舟手ノ便_リ宜クノ。シカモ嶮岨ニノ自然ノ要害也。此城ニ清正暫時居ス。船手ノ城トモ爲修造。自身ハ行西生浦飯機張。殘置加藤清兵衛。毛利家。并筑紫衆少々加ヘテ普請ス。依之明人ハ清正任之思フ。秀秋ハ主將ナ_レハ。李恒福ト諸道ノ都處寮使權慄トヲ惣奉行トシ。從十二月朔日。從諸方城打_テ出。遮留日本人ノ往行。小勢ニノ堅タル砦ヲハ可攻破下知ス。朝鮮人ハ恐日本人逃隱_ル。大明ノ大將ニ進_ラレテ。朝鮮人打_テ出。其内ニ順天ニテ李順臣任俊莫トノ兩勢勝矢軍。日本人ノ首取廿五献ス。從方々討取シ首八十余。大明ノ大將ニミセケ_レハ。朝鮮ノ兵頼モ敷ト悅ケ_リ。欲攻

釜山。口々嶮難ニシテ不得進。清正任西生浦攻之。陸路ハ從西東ノ懸東承機張。又從北出南懸慶州蔚山北路。東南ハ大海。西北ハ山嶺也。日本人取繫城堅メタリ。從舟手欲出從東廻西長鬚甘浦ニヨル。朝鮮ノ水兵有此處云ヘトモ。小勢ナレハ大軍ノ着ヲ見。頓テ可拂。謀ノ第一ハ一備ハ屯南原。可拒全羅道。一備ハ屯天丘可拒慶尙道。一備ハ屯慶尙全羅中晉州宜寧等ノ處ヲ定本陣。分兵釜山機張ノ兩城ヘ向。陸水兵ト東西四面ヨリ一度ニ發ノ攻シニハ。如此定テ奏聞シ。兵馬四万余人ヲ以テ三協トス。左協ハ副總兵李如松。馬步一万三千人。部將ハ盧得功董正誼茅國器陳寅大綱也。中協ハ中軍副總兵高策馬步官軍一万千六百九十人。部將ハ祖承訓頗貴李寧李化龍紫登科苑進忠吳惟忠也。右協ハ副總兵李芳春解生馬步官兵一万千六百

人。部將ハ牛伯莫方時新鄭弔直戴盧繼忠楊万金陳愚聞也。又標下ノ參將彭友德楊登山大同ノ遊擊擺賽坐營ノ張維城ハ浮武者ニテ何レモ可働也。監軍(察カ)密御史陳效也。玠カ本謀ハ麻貴ト楊鏞ト左右二協ノ兵ヲ率ノ。忠州烏嶺ヨリ向東安赴慶州攻清正蔚山思フ。サレトモ行長自西來テ援ナハ惡カリナント。使中協兵出宜寧筋。東ハ左右協ノワキ詰ニナリ。西ハ全羅道ヨリ援蔚山敵ヲ遮ラシメ。又三協ノ中ヨリ兵馬千五百人ヲ擇テ朝鮮ノ兵ト營ヲ合セ。從天安全州南原下リ攻取順天狀ヲ見セテ。行長ヲ出スマシキ謀也。又平壤筋ヘハ兵糧十二万石ヲ備ヘ可出云々。朝鮮ノ兵ハ忠清道ノ節度使李時言カ兵二千。平安道ノ兵二千是ヲ入左協。慶尙道ノ節度使成允門カ兵二千。權應銖カ兵二百。慶州ノ僕般長カ兵一千。咸鏡道江原道

ノ兵二千ハ入中協。慶尙道ノ鄭起龍カ兵一千
黃海道ノ兵二千防御使高彥伯カ兵三百ハ入
右協。其大器大將軍ノ鉄炮千二百四十四位。火
箭十一万八千支玉藥以下。遼東ノ分張登雲
運之行長カ城モ近船手爲此水兵三千余人。雖
抑置自然ノ事アラハ可難拒。清正今ニ居機
張近邊ヲ領シ。自由ニ働也。此押ヘニ朝鮮ノ
水兵官李應龍 五百余人。雖有伏鳥中首ヲ不
出。

攻蔚山

諸方ノ手分既ニ定テ。十二月四日放數万鉄
炮震天地。同廿日ニ大將經理楊鎬同麻貴三
協ノ將士ヲ率テ會慶州。從是蔚山ヘ一日路。
清正等籠蔚山由聞ユ。蔚山ノ南ハ息山也。二
山甚高カラス。山ニ依テ固ヲナス。中ニ有一
江通釜山。從彥陽。釜山有大道。麻貴。急ニ蔚
山ヲ攻落サント思。敵ノ可助來道ヲ手當ス。

淺野幸長。太田飛驒守。宍戶備前守。明日入
蔚山陣彥陽。一里計跡ニ川アリ。川向ニ斥候
五百人計置。五里三里ノ間ニ陣ヲ取ル。吳惟
忠高策カ兵見之可討取。曉方宍戶カ先手淺
沼カ手ヘ切テ懸リ。五百餘人討取。隔山引入
ル。夜明幸長聞之。蔚山ヘ引入處ナレトモ。
味方ヲ討レ。敵ノ良モ不見城ヘ入ナハ。可有
後難。定テ山ノアナタニ敵アランスラント
怒ル。宍戶危ク思ヒ不應之。太田モ同之廻遠
慮。サレトモ幸長二十二歳。勇氣壯ニノ駈出
ス。太田モ宍戶モ乗出シ。向ノ山ヲ廻ル時山
陰ニ數万ノ唐人鳴貝鐘押出軍勢。元ヨリ小
勢ナレハ引取蔚山。幸長宍戶ト牒シ合ス。大
事ノ退口ナレハ。幸長兵士龜田等殿ヒシテ。
淺野左衛門佐先手同名右近二ノ手ニテ次第
クリ引ニス。宍戶一万余騎。先手淺沼兒玉
等段々ニ引ケルカ。從彥陽蔚山迄日本道三

里ノ間軍士多討ル。幸長既ニ可討處ニ。龜田
權兵衛駈入討敵將。依之一陣引退ク。從城
中加藤清兵衛開門出向フ。入城敵モ勞レテ
ヤ破外郭諸勢引取ル。幸長守大手。穴戸ハ
大軍ナレハ島山ヲ受取ル。太田ハ目付ナレ
ハ。浮武者也。加藤清兵衛城代ナレハ懸廻リ
付力并配兵糧。翌廿三日卯ノ刻。左協ノ副將
李如梅同楊登山城際近ク寄リテ窺ヘハ。鉄
炮ハ不打。味方モ諸軍モ揃フ間ハ岸際ニ添
テ入。遊擊擺賽吳兵 五百騎 堅要害互ニ盡粉
骨。城兵我先ニ高名セント深入ノ戰ケルニ。
四方ノ伏兵一度ニ起立。城中ヘ入マシト攻
寄ル。敵ハ多勢ナレハ引入ヨト下知ノ取入
ル。此時討敵二三千。味方逢伏兵。討ル、者四
百人也。是ヲ手分ノ初トシ。副總兵李芳春解
生ハ攻入西手風上ニ放火。煙下ニシテ近付堀
際。島山ノ間ノ川ニ舟アリテ兩方持合ケル

カ。城中ノ舟ヲ取テ乘入ントスルヲ。城兵稠
ク打鉄炮ケレハ。舟四五艘乘沈ケル。寄手引
退陣二三里間。此由欲告清正。幸長カ士木村
頼母廿三日ノ夜忍ヒ出。二日路ヲ機張迄廿
五日ノ曉行付。清正對之。シカ／＼ト云フ。
清正則乘舟出ラル。一夜ノ間ニ島山ト蔚山
間ニ堀ヲ付揃鉄炮待懸ル。昨日此手ヲ破リ
シ寄手ニ。麻貴又荒手ニ加リ。號令ヲ嚴ニシ
進ミ付ク。茅國器モ仰ノ兵ヲ領シ。昨日李如
梅カ合戰シ。多クノ敵ヲ討取レハ。今日又可
勵勇。兩手ノ兵攻入構從蔚山稠ク打鉄炮。更
ニ無浮矢。城兵モ五百余人死ス。寄手ハ及二
万余人。敵モ戰屈ノ引退ク。廿五日麻貴又率
三軍攻上島山。嶮岨ニシテ難上。鉄炮數万挺打
ケレハ。死人手負不知數打ル。蔚山モ數万ノ
敵攻寄ル。小勢ナレハ切テ可出ヤウハナシ。
是モ以鉄炮防ク也。敵鉄炮ヲ防ク 挨牌布簾

梯^{カケハシ}ナトノ以攻具攀上高山。從城中投大石倒大木。ヒルム處ヲ打鉄炮。手負死人如岳。敵又引取ル。廿六日早旦。清正舟十余艘ニノ押來。島山ト蔚山トノ間ノ川ヘ乘入。唐人數万人出門警防之。清正ノ乗舟ハ早メ入川供船少跡ニサカレハ。敵押隔一人モ陸ヘ不上。清正入城。城兵得機勇進ム。廿六日ニモ敵兩方一度ニ攻上ラントス。城兵清正ニ得力近々トヨセテ打鉄炮。攻アクンテ楊鎬カ下知ニ如此死人計ニテ其功難成。唯四方ヨリ取圍ミ不攻。清正幸長ヲ可擒云々。廿六日ノ晚ヨリ。城際ニ取詰。無透間打圍ム。サレトモ。水ノ手入戸骸血ニ交不止渴。兵糧モ次第ニ乏ノ及飢渴。敵モ被侵寒。一身如氷不動得。清正見之。寄手ヲ誑サントテ。日本ノ大將ト大明ノ大將ノ相對スルヲ數日。徒ラニ人ヲ殺サンヨリ。大將ニ對面シ日本ノ意趣

ヲ云ヒ。可止軍云送レハ楊鎬大ニ悅和得清正勢逼テ乞降云々。依之勇ヲナス。吳惟忠舊武ニノ獨呷キ。楊鎬ニ圍ム師ハ必缺ト云フアリ。此城數日攻レトモ不落。一方ヲアケ逃ル者ヲ討取ナハ。清正雖武也ト即時ニ可擒諫ケル。此儀尤也ト可同從城中扱ノ謀行レテ安ク引出清正。生捕ラント思詰テ目ヲ張リ向吳惟忠ニ老將軍ハ我一ケノ活清正ヲカヘサント思フカ。今日明日生捕可懸御目物ヲト憤リケレハ。不及是非トテ。吳惟忠ニヒ不諫。相圖ノ日ニモナレハ。城外所ヲサシ。寄手ノ大將楊鎬モ出其處。城中ノ清正モ可被出定ケレハ。參會セント床机ニ腰ヲ掛居ケル處ヘ。幸長來テ可被出事無勿休。大國ハ難計。イカナル出大力者引立テ行ンモ不知。實ニ可有會盟ナラハ。我出テ可會云々。清正カ曰ク。其方ヲ出シ捕ヘサセ。某生テ在

ルヘキヤ。清正カ家人毛利ノ家人トモ幸長ノ異見理ニ當ルソトテ。頻ニ留メケル。從清正今日出マシキト云遣ス。楊鎬ハ何トモメヲヒキ出サント思ヒケレトモ。城中遂ニ不出。楊鎬無爲方。此方ハ早ク攻落サント下知スレテ。諸卒不勇。既ニ正月朔日ニナル。行長從順天二三千飭舟。水ノ手ヨリ合力漕上ル。同二日。從釜山後卷宰相秀元。黑田長政。黃門秀秋。三萬騎ニテ隔十里計。陣高山。從順天四國勢二万余騎。旗ノ手ホノカニ見ユ。後卷ノ押ヘニ置シ者ヨリ。釜山ノ胸勢如雲霞來ル由告レハ。楊鎬恐怖ノ明後四日陣拂ノ可退定ケル。三日ニ後卷ノ旗先向ノ山ニ見ヘケレハ。明日ヲ可待ヤウモナク。從宵士卒ニモ不牒合退散ス。慮遊擊二千騎ニテ水ノ手ヲ堅メケルカ。是ニモ不知。大將分ノ者先退ケル。去レトモ城下ニ押詰タル勢ハ不

知。從城打テ不出。四日ノ早天ニ陣中ヲ見レハ。後陣數萬ノ勢アハラニナル。扱ハ敵退ヨ打留ヨト後卷ノ大軍從山突懸ル。城兵得機之打テ出追討ス。吳惟忠茅國器兩手ノ軍兵立備殿ヲシケレハ。城兵モ不長追引返ス。後卷ノ勢ハイツク迄モト追ケルカ。兩人ノ退口ヘ懸リタル者ハ度々返シ合セシニ依テ。及夕陽引返ス。弃武具馬具無足蹈處。二年ノ間七十五萬ノ勢ヲ催シ。盡四海力。朝鮮總國ノ軍勢ヲ加テ百萬騎一城ヲ攻落サテ。散々ニ成テ引退ク。不耻諸人ノ哂。

日本ノ軍兵過半歸朝ノ事

蔚山ハ要害ノ地也。是ヲ敵ニ取レテハ惡シカリナント。清正并諸大將評議ノ上テ。毛利宰相秀元ニ筑紫衆加テ。從正月普請ノ三月ニ成。畢ク筑立ル。渡清正スル時。順天ニアル諸大將小西ヲ初順天ヲ明テ釜山近邊ヘ

ツボマント評定ス。故ヲ如何ト問ヘハ。順天ハ北。蔚山ハ南。其間百余里。大明人百万騎ニテ今度ハ順天ヘ可取懸依有沙汰。取卷レテハ惡カリナント只中路ト南方ト二筋ヲ可持堅云テ。^(フカ)加藤左馬助申ケルハ。敵ノ旗先ヲモ不見開城可退事。武名ノ爲瑕瑾。於某一^人ニテモ此城ニ可殘留云々。諸將モ典厩ヲ可捨殺事難儀也ト口々ニ駢立ッ。此由告來蔚山。清正ト秀元ト相談シ。安國寺爲使節遣順天。其城ヲ明ラル、事。日本ヘ被窺御下知次第可然ヤト被申ケレハ。小西モ左馬助モ同之。則言上ス。大閣怒テ大明ノ大軍寄せ來レハトテ。明テ退クヲヤ在ヘキ。自初城所ヲ見定メ。大軍出タリトモ可抱ヤウヲ見定テコソ可取城。先隔百里。廣々ト取城沙汰ノ限也。大明人五日六日路ニ在トモ不聞。冬ナラテハ寄モ來ルマシ。其内ニ休息サセ。九月ヨ

リ又可渡海。城番ハ清正。行長。嶋津。鍋島。淺野左京大夫。黒田甲斐守。毛利壹岐守。筑紫上野介。久留米藤四郎等六万余騎ニテ可堅。筑前中納言秀秋。毛利宰相。備前秀家。其外四國勢ハ先渡海ノ可休息。五月ニ被仰遣。依之毛利宰相ハ蔣山ヲ渡清正。備前宰相中國勢ハ立順天行釜山。次第々々ニ渡海ノ歸朝ス。六月中旬至伏見。大閣忠否ノ穿鑿アツテ。蔚山ノ後卷遲參。并順天ヲ可開退輩御咎メ有テ。不被許對面。毛利宰相ハ數度ノ軍功ト云。順天ヘ遣安國寺被止騷動條有御感。翌日在對面盡懇情給フ。加藤左馬助ハ云數度ノ軍功。今度順天ヲ不退。忠義不可勝計。加往昔ノ軍忠。賜感狀并加恩。

嶋津新寨軍ノ事

中路ノ大將董一元ハ。率部將。八月ニ出陣尙州。^(本カ)日日中路ノ將嶋津兵庫頭義弘。并息家久

(津カ以下同シ)

一万余騎。搆六七ヶ城。望洋ハ天險ノ地也。北ハ從晉江東ハ築永春ニ。西ハ築昆陽。三城如鼎立テ犄角ナシ。峙新寨前。新寨三面ハ廻海。一面計通陸。是ヲ爲義弘居城。外ニハ石壁木柵茂ヲ引海濠トス。繫大船數百艘。又金海ノ周城ヲ翼左右。中ニ造東陽ノ倉。積糧數百石。勇兵泗川弱クハ爲懸合也。望津ト新寨四十八里連八城。故ニ日々ニ出兵。陝州宜寧感陽高靈ノ間ヲ掠搶。恐嶋津武勇。今又見軍備無進者。遊擊茅國器在全州說先手刑玠壯其言。加兵令守星州。此時董一元(一脱カ)在宣府未至星州。三面ニ受敵以勢危。浙ノ歩兵三千人ニ遊擊虛得功カ馬兵添三千人守ラシム。日本人日々出テ雖犯槍。董一元未至茅國器モ出テ不動。董一元至初テ議大舉進テ高靈晉州ニ陣ヲトル。晉州前ニ有大江。江ノ南ハ卽望洋也。望洋ノ南ハ日本人ノ城也。隔江互ニ

令守一月余。遊擊進テ云ケルハ。望洋ヨリ至新寨取城勢ヒ如長蛇。望洋ハ其首也。碎其首餘ハ如破竹ナラン。九月廿日。城中ノ兵糧倉ヲ可燒立。此時渡川爲相圖。廿日ニ茅國器出兵欲渡江。日本人出テ臨江欲遮之。折節望洋城中ニ上火手。日本人捨虎口放火。茅國乘勢。其手ノ兵早ク渡リ押入望洋燒拂軍勢小屋二千余間。日本人奔望洋退テ守泗川舊城。同日申ノ刻。董一元分遣兵襲破永券。燒拂近邊役所。廿一日。西ノ方破昆陽。此時嶋津カ勢。雖多敵討取。彼レハ猛勢也。不叶開昆陽合泗川。董一元兵ヲ駐江南欲戰。嶋津カ勇士追拂之進ム。義弘堅ク制之曰ク。彼ハ大軍也。率爾ノ軍ノハ如何ト不許之。廿八日夜半ニ發兵襲取泗川。泗川ニ籠ル嶋津カ勢三百騎ニハ不過。大同驍將李寧勇ヲ特ミ。衆ニ先テ拔懸シケリ。夜半ノ事ナレハ道ニ蹈迷ヒ

討レス。依之先手夜半ニ不得進。夜明テ後陣ノ大勢進ミ來ル。泗川ニハ討取李寧寄手退散スレハ。刈田ヲセント早天ニ打出ル。向ヲ見レハ數万ノ唐人滿々タリ。見之入城中。其儘追來リ門ヲ立サセシト攻戰フ。城兵少クノ難成籠城突テ出拂敵。可取籠新寨。三百余騎喚テ懸ル。互ニ爰專ラニ挑戰フ。驍將盧得功當鉄炮死ス。其手ノ兵引退ク。所々ノ敵集テ圍新寨。嶋津又七郎若武者ナレハ突テ出追拂敵。義弘制シ敵ノ人數不見定軍ヲスマシキト云々。入夜寄手イツノ間ニカ解圍引退泗川。又七郎ヲ初トノ。至士卒討漏。唐人無念ト云テ押寄泗川。遂一戰進ケル。義弘此時モ對又七郎可繼武勇家人。サホト怵セイナクテハ叶フマシ。士卒何ト云トモ大將ハ不騷物ソ。唐人頓テ可寄來。大事ノ軍仕損シナハ。可爲日本耻辱耻シメラル。廿九日

董一元取新寨議ス。サレトモ義弘カ居城ナレハ如何アラント諸人聞異見處ニ。董一元侮テ不承引。十月朔日。茅國器(葉イ)葉邦榮彭信カ歩兵。新寨ノ下ニ抵テ攻打。郝三盼師道立馬里文藍芳成ノ四備ノ馬兵ヲ分テ左右ノ堵伏トシ。歩兵以一備令守本營。茅國器(葉イ)葉邦榮從卯時攻近テ。巳ノ刻着屏下破大門扉。彭信古初トノ。既ニ欲乘入。義弘制ノ雖乘破外郭不出。從内込出セト下知ス。寄手ノ木槓破レテ藥ニ火付ケレハ。黑煙聳半天。四方成暗。寄手ノ騷動スルヲ見テ。雖制義弘若兵不聞入三千余騎一度ニ突テ出ル。群タル寄手ナレハ一度ニトツト崩ル。彭信古カ三千余騎又七郎カ從小門突テ出タルニ遇テ盡ク討ル。郝三嫂(マ)師道立カ馬武者立留リ欲射半弓引立タル大勢ニ交レハ。是モ共ニ崩ル。茅國器(葉邦イ)葉榮カ二備不攻城。五六町脇ニ扣ヘタル

カ。見之一様ニ鎧立タル赤武者一万余騎乗
取ラント進ム。義弘思設タル事ナレハ。手モ
トニ殘ル勢五千突テ出。アマサシト攻戰フ。
サレトモ手負死人多ノ敗北ス。大將董一元
勵諸將モリ返サント下知スレトモ。不云堀
岨崩レカ、ル。廿万騎ノ勢望洋ニモ不怵。越
大河。散々ニ逃散ス。義弘輕ク引取入城中。
茅國器留望津集敗軍ノ勢欲戰。董一元カ曰
ク。敗北ノ士卒恐怖ノ休ヲ見テ。此城ニ無
助勢。暫還星州。再起大軍雪此耻云々。士卒
モ同之。此時從城兵追驅ハ可無殘生者。從新
寨星州へ百五十里。山野埋骸。義弘カ手へ討
取首三万余。殺耳鼻入樽渡日本。

朝鮮征伐之間七年

文祿元年三月朔日。秀吉公聚樂出陣。同七月
廿二日。母堂ノ依所勞被飯洛。同九月再渡。
同二年ノ夏船手衆重テ渡海。同八月廿五日。

秀吉公大坂飯陣。從四年至慶長三年要害構
十ヶ處入番勢。其年ノ秋各飯朝。
一文祿二年巳ニ秀賴生ス。秀吉公 五十七
歲。

一文祿三年二月廿五日。吉野參詣。廿七日登
山。諸侯太夫供奉。花宴有詩歌善盡美盡。
同三月三日。高野山參詣。寄宿青嚴寺。母堂
ノ吊禮供八千ノ僧。五日能興行。

同四月廿九日。有馬入溫湯。五月十三日。被
還大坂。

同四年七月十九日。關白秀次於高野伏誅ス。
慶長元年。唐使遊擊將軍來朝。九月二日謁於
伏見。秀吉和不調。九日堺ノ津出船。十二月
十七日。冊使飯釜山

同三年三月十五日。醍醐ノ花ノ宴。被伴北政
所。其粧稀今古也。修造三寶院嶺谷營茶店催
逸興夕日還伏見。

豐臣薨逝遺言 六十二歲

慶長三年戊戌。從仲夏不例ニシ。日々苦病疴。依之以利家秀頼ノ爲傳。被命後代制法等家康利家。就中朝鮮在陣ノ諸軍勢輒ク苦可引取事。從八月初旬重病難堪。既ニ及死期。命ノ曰ク。我死ハ深ク隱シ。淺野彈正。石田治部少輔。渡海朝鮮可引取軍勢各歸朝ノ後披露(可カ)ノ不與遺物等云々。大明人以多勢於付慕。家康利家一人可令渡海被命奉行宿老。八月十八日薨伏見城。守遺言雖秘之。昵近ノ輩知之。攀世嘆惜ス。淺野石田談家康利家。九月初出伏見至筑前博多。先朝鮮ニ遣使介告薨去由急可引取云々。閑人郭國安聞之。密ニ告知大明人。嶋津新寨ノ戰ニ不勝歸朝及難儀。大明人今度ノ懲敗軍。曾テ不進嶋津カ勝軍。十月朔日達日本家康可有渡海被喚上東兵。又利家ハ欲向兵。依之暫ク止評議。

然ハ家康ノ曰ク。先遣藤堂佐渡守可窺彼國次第。此人久ク在陣ノ知案内。又手輕キ人ナレハ速ニ可有注進云々。各同之。藤堂急下向筑紫。欲渡海處。則可引軍勢告來ル。依之淺野。石田モ不渡海。況藤堂不及沙汰。

日本人欲引取之由大明人知之。使陳璘任水路提督陸兵五千人在海上成防。猶可加軍勢。副總兵陣蚤鄧子龍。遊擊馬文煥李金張良相等ヲ附ラレ。一万三千人戰艦數百艘。朝鮮ノ忠清全羅道慶尙道ノ海口ニ懸双テ警固ノ欲遮留日本ノ船。被隔陳璘小船ノ無渡海。サレトモ日本人ノ城近ク不寄無軍陳蚤。依之分兵船加德巨濟鼓金ノ島ニ遣シ。欲押留往來ノ船。此時鄧子龍在鼓金。方日新浙ノ兵統三千從義州兵糧ヲ入鼓金。九月廿九日颶風起テ碎舟。三千人盡ク死ス。十月ニ經理ノ

万世徳初テ來朝鮮。諸將ノ軍ノ謀已ニ定レハ。別ニ可手段ヤウモナク。作檄文遣日本ノ軍中。大閤薨ス。引兵早ク可飯。不然脫甲可來降觸遣ス。蔚山ハ遠海手清正開テ還機張。嶋津モ徹泗州。行長モ徹順天。近日欲渡海。評定如何ノ知ケン。十月十六日嶋津小西カ聞渡海。告海手陣蚤。陣蚤聞テ悅テ擊和收功此時也。留遮鄧子龍ヲ朝鮮ノ李統制ト同ク引千余水兵。乘三大船爲先手。自鼓金出テ取日本船。嶋津ハヤ行過小西船。鄧子龍第一ノ功名セント。手勢二百人乗小船乗移日本船。取多船。跡ナル大船ヨリ打石火矢。誤テ當鄧子龍舟。打折帆柱漂ケルヲ。小西乗移其舟。二百余人不殘切害ス。李統制見之。救鄧子龍進ミケルカ。此モ討レニケリ。第三ノ船ノ地總沈理ツトメ進テ發矢石。ヒルム處ヲ乗移リ。小西カ兵百三十余人討取ケリ。

是ニ得氣。陳蚤李金從後引裏ミ遁サシト攻戰。日本人船軍ニ不馴。其上小船ナレハ皆燒沈ラレテ無爲方。鼓金ノ岸ニ逃上ル。幸ニ鼓金ニ敵多カラサレハ入此城。暫ク繼息居タリ。去レテ船ヲ皆被燒ヌレハ可逃飯ヤウナシ。其上敵掛大船取卷ハ不異籠中鳥。小西カ乗シ船能ケレハ乗切テ嶋津カ着シ至加徳。義弘カ後陣ノ勢モ五百余騎不來。鼓金ニテ兩手ノ勢彼取籠^{被歟}。思ヒ弃テ飯ルモ難義ナレハ先其様ヲ見ント。伊藤兵部少輔早船三艘ニテ行鼓金伺ヒ見ルニ。船付ニハ掛大船双テ可寄ヤウナシ。夜ニ入テ廻嶋後岸。下ニ寄船呼ハレハ。開城戸ソレ、在茲。可給迎舟。聲々ニ喚ル。伊藤急キ漕飯リ云フ。嶋津小西遣多船大手ノ船付ヲ陳蚤固メケルカ。中軍ノ大將陶明宰日本人ニ討レケレハ。掛双シ解大船ヲ澳ヘ漕出ス。其間ニ迎舟取乘

鼓金勢着。加德劉挺ハ小西カ勢ヲ見知レハ。行テ加德ニ當小西。双方對々ノ人數也。加德ハ又渡海ノ真中ナレハ互ニ兩方ヘ引別レント。嶋津小西カ取人質。毛國科等八人又劉挺カ遣ス所ノ劉天爵ヲツレテ至對馬。從是返人質。清正。幸長。鍋嶋等ノ船ハ待順風一口渡海スレハ。無恙飯朝。大明人刑玠論其功。四路大將ノ内。董一元初渡晉江破望洋云之首功。新寨ノ軍ニ摧手雖不勝。次ノ功也。八寨平テ一人モ不殘引取ハ全功也。又海上ノ軍ハ陳璘ヲ爲功第一。此歲十一月朝鮮安堵シ。君臣共ニ戴大明ノ恩。再ヒ如蘇生。李劬杜清等ハ不散軍勢。留朝鮮王城守禦ス。茅國器陳蚤ハ留釜山。張良相張榜在海口。聞日本ノ騷動。翌廿七年四月迄守禦備ヲ不緩。翌廿八年正月ニ軍勢盡ク入關。刑玠カ依軍功爵ヲ晋南天司馬

日本人モ盡ク飯朝ノ。來博多。會淺野。石田。諸將集伏見。家康。利家有對面。各談ノ曰ク。嶋津不勝新寨ノ軍。日本人可難引取。一同ニ感之。賞其功添四万ノ所領。吉光短刀賜十人連判感帖。朝鮮ノ^{キリミキリハナ}馘^{キリミキリハナ}劊ヲ載車渡大坂伏見洛下。東山大佛殿ノ前ニ築塚供僧吊ス。

朝鮮分八道

遼東	撫巡	旅順	北直	女直	川廣	大同
山東	天津	准安	大沽	起口	大丘府	高靈
鴨綠江	山海關	新寨	西生浦	陝川	大丘府	高靈
咸陽	望津	善止府	永春	巨濟	長鬚	鼓金
龍山	八寨	耳浦	松島	狼山	巨濟	鼓金

蘇延

緩保定

哈密
占城

蘇遼
漏喇咖

理球
呂宋

安南
元良哈

從肥前名護屋至壹岐

四十八里

從對馬府至同豐崎

三十六里

從豐崎至朝鮮釜山浦

四十八里

從釜山浦至都

一千貳百六十里

從都至鴨綠江

一千貳百里

從薩摩琉球へ

從棒津至役島 四十八里薩州ノ中地

京幾道 弓漢陽城居中

江原道 咸鏡道二道共ニ在北

平安道 黃海道 即平壤城
二道有東

忠清道 慶尙道 在海東南

全羅道 在海西ノ南二

釜山浦

東萊

熊川

安骨浦

唐島

開城

閑山島

安定館

平壤

軋伏山

牡丹臺

遼陽

安南府

碧蹄館

機張

蔚山

彦陽

順天

梁山

豆毛津

海州

尙州

加德

金海

固城

昌原

咸安

泗川

昆陽

鳥嶺

密雲

大丘

慶州

忠州

宜寧

漢城

珍馬

濟州

東陽

沔海

密陽

南原

丹城

雲峯

全州

宣府

光陽

豆耻津

全義館

玄風

思驛館

任實

南兵

公州

漢江

長口

星州

谷城

求禮

青山

從役鳥至種島 十六里同四万石也

從種島至七島 十六里在七島

從七島至大島 十六里琉球也在六郡

從大島至八幡馬場 九十里是ニ在皇居

合百八十六里

朝鮮八道ハ二州宛大州アリ。全羅ハ全州
羅州二ツアリ。

赤國ハ古ノ百濟也。黃海道ハ黃州海州也。

慶尙道ハ慶州也。熊川ハ古日本ヨリ渡海

ノ地。倭ノ口ニコモカイト云是也。クマカ

イト云義カ。今ハ釜山浦ヘ渡ル。

西生浦^{セツカイ} 今ノ渡海ノ湊也。

經理都寨院揭示ス。清正如降不惟保全一身

並ニ城中ノ諸將皆得不死。清正如シ不肯降

自ラ作之孽。不足惜。其諸將餘ノ倭並ニ脅從

朝鮮ノ多命玉石俱ニ焚。甚可惜也。諸將之中

有能縛來降者。共ニ得免死。仍テ有陞賞。

天朝^{諭歟}ノ信義決ノ不食言。各宜三思勿貼後悔
論平清正。

帖王ノ師極救朝鮮。以鉏侵暴兵精。食足戰勝
ノ後。守ル者自ラ守。攻者自ラ攻ム。此ノ理
ノ正也。爾既ニ倦々トノ求和。誰レカ其樂マ
シヤ。逞干戈第此等ノ大事信義在心。豈必假
手僧人營中今有越後云モノ。深ク道爾好意。
爾如思活即可親到營中。對天盟誓ノ倭盡ク
渡海セヨ。與朝鮮永相和睦。^(和カ)兩ラ俱ニ班師。
仍須ク關白ニ着倭官上表朝廷ニ謝罪謝恩。
不然或ハ死守。或出戰カヘ。任爾裁之即明白
ニ具ニ書來。

万曆二十五年十二月廿七日申時

清正既ニ不在此。各小將願降者ハ投降。不必
與朝鮮言和如不降或出戰或據守惟爾所捧不
必爲誑語也。令箭速ニ出。

日本平清正曰

天朝之大將軍矣。前日予カ於于下軍等賜貴書
即自吾雖可獻回答。猶預貴意。故當城ノ中不

居云々。自今日欲約和矣。予小船ニ召供一兩輩而去ル。廿二日ノ夜來城中故文學ノ達者曾テ無之。故ニ貴書ノ中能ク不分明。自西生浦招文者一名入賜城內ハ。則約三國和。只今奉待尊回者也。誠恐誠惶。

慶長二年

十二月廿九日 平清正

尊翰拜披焉。今之使价口上ニ云ク。貴官予直ニ面談ノ爲三國和說。然ハ則明日午刻城山南ノ下枉駕歩來之。則吾モ亦其處與貴官欲^(結カ)請三國和。貴官枉賜駕。則尙明朝奉待使書也。餘ハ不宣。

十二月廿九日

平清正

日本平清正白

官脫款

天朝大將軍。昨日午刻貴與予直面而欲結三國和處。對面之場違之。故ニ至今日焉。既ニ倭兵數十萬。近々ニ自海陸來于此。今日貴官

ト與予面談。而今日中ニ欲決和。因此回答欲留倭兵來。今日面談スル則ハ天兵至于蔚山ノ古城可引去賜。急々不宣。

慶長三年

正月二日 平清正

今度高麗國發向之刻。先手被仰付之處。釜山浦之城則時攻崩屬平均之段。御感被思召候。依之御太刀一腰定則。御馬一疋^{栗毛}被下候。領知之儀。重而可被宛行。猶增田右衛門尉。石田治部少輔可申者也。

慶長三年

五月三日

御朱印

小西攝津守殿

四月十一日之書狀及 上覽候。都ヘ一番ニ入令放火候ヘ共。帝王退散軍士一人無之故

不及一戰之由聞屆候。近日帝王捕可申之由。
氣味能被思召候。彌無油斷可抽戰功候。猶淺
野彈正少弼可申者也。

五月朔日

御朱印

加藤主計頭殿

七月廿五日之帖。被加 御披見候。高麗國
王子兄弟并官人等二百人生捕之由。無油斷
故ト被 思召候。都ヲ打立六十八日。炎天ヲ
不指除押詰事。可爲武門之棟梁。兀良哈國^{ヲランカイ}へ
罷越。殿下 御弓矢之風儀見セ可申之由
無越度樣ニ可申付候。仍爲御褒美吉光之御
脇差。并黃金五百兩遣候。歸朝之上。一廉領知
可被 仰付候。猶淺野彈正少弼。長束大藏太
輔可申者也。

十一月十四日

御朱印

加藤主計頭殿

今度於朝鮮國古川表。大明朝鮮人催猛勢相
働之處。父子被及一戰。則伐崩敵三万八千七
百余被討捕之段。忠節無比類候。依之爲御褒
美。薩州之内御藏入給人分有次第一圓ニ被
宛行訖。并息又八郎被任少將。其上御腰物長
光。父義弘へ御腰物正宗。被爲拜領候。於當家
御名譽之至也。仍如件。

正月日

輝元

景勝

秀家

利家

家康

羽柴薩摩守殿

其表爲見廻。美濃部四郎三郎山代小才次
被差遣候。永々在番辛勞不被及是非候。殊普

請以下丈夫ニ申付。番等無油斷之趣被聞召屆候。就夫人數兵糧等相改可申越候。猶以兵糧當春船數相揃追々渡海之儀被仰出候間。可成其意候。將又小袖二被遣候。猶兩人可申者也。

正月廿八日

御朱印

安藝侍從殿

今度於釜山浦。淺野彈正父子。其外諸軍勢及難儀之處。其方助合得大利候事。日本國中ハ不及沙汰。三國無比類高名。前代未聞候。且其身名譽且秀吉相叶御日利被思召候。猶此上無越度樣ニ其方才覺專一也。

慶長三

四月廿日

御朱印

羽柴伊達侍從殿

急度被 仰遣候。於京都被 思召候ハ。名古屋ニ三十日モ被成御座先ニ御人數遣其上ニテ可被成御渡海思召候ヘトモ。是へ被成御着坐候ヘハ。片時モ急御渡海有度候條。各手船有次第投ナル奉行相添。至名古屋可差越候。御自身可被成御請取候。渡海之衆人數多少之儀。舟數ニテ可相見候條。荷物悉上置。商船迄手前持之内相改可差越候。此時ニ候條。少モ於油斷曲有間敷候。委細安國寺澤志摩守。兩人ニ被仰合候。猶以各油斷ニテ舟不越。直ニ御手船ニテ一万二万ニテモ高麗ヘハ無御坐。直ニ大明國ヘ可有御渡候。八幡大菩薩。各々ハ被越申間敷者也。

四月廿八日

御朱印

加藤主計頭殿

三月七日之書帖被加

上覽候。慶州ニ至テ

令放火。一千百五十討捕之由神妙ニ候。朝鮮國微弱之國タルニ依テ。不及一戰之由。書中之通高麗國手ニ入程事有間敷候。誠以心地能被 思召候。彌可被入精事專一也。猶淺野彈正少弼可申也。

四月廿九日

御朱印

加藤主計頭殿

今度牧使^{モウシ}カ居城。晋州惣軍勢ヲ以攻崩刻。其方名譽ノ龜ノ甲ヲ仕出シ。石垣崩一番乗仕段粉骨ノ至也。其上來森本儀大夫。飯田角兵衛無比類働不可勝計候。則爲御褒美正宗ノ御刀被遣候。惣ノ清正事。今度高麗傳奏館開城方々ノ働無油斷入精候。歸朝ノ上可被加御恩知。儀大夫義ノ字角兵衛ニ覺ノ字可爲右之文字候。能々可抽戰忠候。猶淺野彈正少弼。長束大藏大輔可申者也。

七月三日

御朱印

加藤主計頭殿

今度朝鮮表番船切取之刻。粉骨之段神妙之至ニ被思召候。仍手前御代官所之内ヲ以一万石目錄別紙ニ在之令扶助訖。本知七万石合八万石可領知者也。

慶長三

六月廿二日

御朱印

藤堂佐渡守殿

去十五日ノ夜。於唐島番船被伐捕事。貴所一番無其隠候。於御前具ニ可申上候。爲其如此候也。

七月廿三日

熊谷内藏允

垣見和泉守

早川主馬首

竹中源介

毛利民部太輔

太田飛驒守

福原右馬助

藤堂佐渡守殿

七月十六日注進ノ帖。今月九日到來加披見候。今度番船唐島ニ在之。釜山浦表へ切々罷出。日本ノ通路相支候處。去十五日ノ夜相働。番船百六十余艘切取。唐人數千人切捨。其外海へ追入先々津々浦々十五六里之間。船トモ悉ク燒捨之由。手柄之段無比類候。以來迄番船ノ根切仕候事。御感不斜候。何レモ歸朝之刻可被加御褒美候。猶德善院。増田右衛門尉。石田治部少輔。長東大藏大輔可申者也。

八月九日

御朱印

藤堂佐渡守殿

七月廿三日之書帖。并同名太郎左衛門差越候番船伐捕様子言上。具ニ被聞召届候。其方調儀ニテ可在之被思召候處ニ。如御推量抽粉骨之由。神妙ニ思召候。彌先々之儀入精各以相談之上。働等可申付候。隙明候テヨリ仕置之儀是又各見計可然處。令普請在番可被入置候。度々被仰遣候。大明人數自然從朝鮮ノ都五六日路モ此方へ罷出候ハ可被注進候。急度被成。御渡海。被討果。大明國迄可被仰付候。猶同名太郎左衛門 御直ニ被仰渡候者也。

八月廿一日

御朱印

藤堂佐渡守殿

八月十六日之注進帖被加

御披見候。

赤

キ國之内南原之城。大明人楯籠付テ。去十三日取卷致仕寄。同十五日ノ夜攻崩。其方手前首數二百六十九討取之旨。則臯到來候。粉骨ノ至候。最前番船伐捕。度々手柄無比類候。彌先々働之儀。各申談丈夫ニ可申付事。肝要候。猶増田右衛門尉。長束大藏大輔。石田治部少輔。德善院可申者也。

九月十三日

御朱印

藤堂佐渡守殿

其方事。先年於江北。柴田合戰之刻就一番健仕。爲御褒美御知行一廉被遣候。其以後於朝鮮數度伐捕番船。無比類手柄之段。不可勝計候。殊今度順天蔚山可引入之由。各雖連判仕。不致加判神妙之覺悟。御感不斜候。依之手前御代官所有次第。三万七千石爲御加増被下候。本知六万二千石都合十万石ノ内一

万石無役。九万石之軍役可仕候。國持ニ臆病之者於在之被成御闕所。猶以國主ニ可被仰付候。如此被仰出之上。全命可致忠節候。自然乘調儀。聊爾之働等不仕。無越度様ニ可令覺悟候。猶德善院。淺野彈正少弼。増田右衛門尉。長束大藏大輔可申者也。

九月三日

御朱印

加藤左馬助殿

猶以歸朝之刻御對面直ニ可被仰聞候

急度申入候。去十二月廿二日至蔚山表。大明人數十万余罷出。其儘取詰同廿三日從卯ノ刻惣搦押寄候處。已ノ下迄雖防戰。寒天之普請ニテ候ヘハ。堀モ無之。塀壁不首尾ニ付。不及是非城中ヘ取籠。本丸二三ノ丸堅固ニ相抱候。晝夜以數万入替攻候ヘトモ。面々於手前築人塚候。其上手負數十万人在之。人數

薄ク罷成候折節。一昨日ニ後卷ノ旗先ヲ見懸。其手宛仕。昨三日ノ夜子ノ刻。今日辰ノ刻迄從諸手攻候ヘトモ。各自身碎手相働ニ付。手負死人不知其數。今日從巳ノ刻引取申候。於今度働哀懸御目度ト奉存候。大明之人數三十万余取掛候ヲ請留。數万人討果候。□故如此引退候事。手柄之程書中ニ申上外ニ候。但此表渡海之衆中ヘ被成御尋。御次而之刻。可然様ニ御取成奉賴候。恐惶。

正月四日

加藤主計頭

淺野左京太夫

太田飛驒守

長束大藏大輔殿

今度蔚山表ヘ。大明人取出之處。駈入城中。堅固ニ相抱。數千人討捨ルニ付テ。敵令敗北之由神妙之働ニ候。然ハ兵糧五千石最前被

遣候ヘトモ。重テ五千石被遣候。都合一万石被下候間。從寺澤志摩守。手前可請取候。就夫蔚山西生浦兩城難抱ノ由聞召届候。則毛利壹岐守。同一手ノ者共。西生浦ニ可在城由被仰出候間。成其意可相渡候。猶歸朝之者共罷戻。様子被聞召候テ。重テ可被仰出者也。

正月廿二

御朱印

加藤主計頭殿

先書ニ如被仰遣。其方事。今度蔚山表ヘ早駈入ニ付テ。異國ノ大軍引退事無油斷故。右之通感シ被思召候。次ニ順天可打崩旨何レモ相談之通聞届。順天ヘ安國寺遣事。武道之味不可勝計候。仍光忠之刀被遣候。猶淺野彈正少弼可申者也。

三月廿三日

加藤主計頭殿

其表。大明人并番船罷出之由ニ候條。藤堂佐渡守被差遣候。敵於在陣仕在番衆ノ船手各被逐相談可成裡可被及行候。其方一左右次第九州表被遣置候。船手ノ衆其外御人數急度可被差渡候。敵於退散。最前德永法印。并宮木長次ニ如被仰合。諸城早々被引取。釜山海從其可有歸朝候。万端藤堂次第ニ可有覺悟事專一ニ候。恐惶。

十月八日

長東大藏大輔

增田右衛門尉

德善院

高麗在陣

各御中

豐臣記下終

齊藤松太郎
大和田五月
藤倉喜代丸
三宅松之允

校

大正十二年三月十七日印刷
大正十五年三月二十日發行
昭和十八年六月三日發行
(四〇〇)

京東市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

京東市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島喜次郎

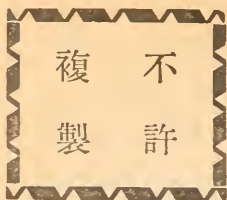
京東市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

京東市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會太洋社

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八



(文協會員番號115016)

出文協承認ア360249

發行者

印刷者

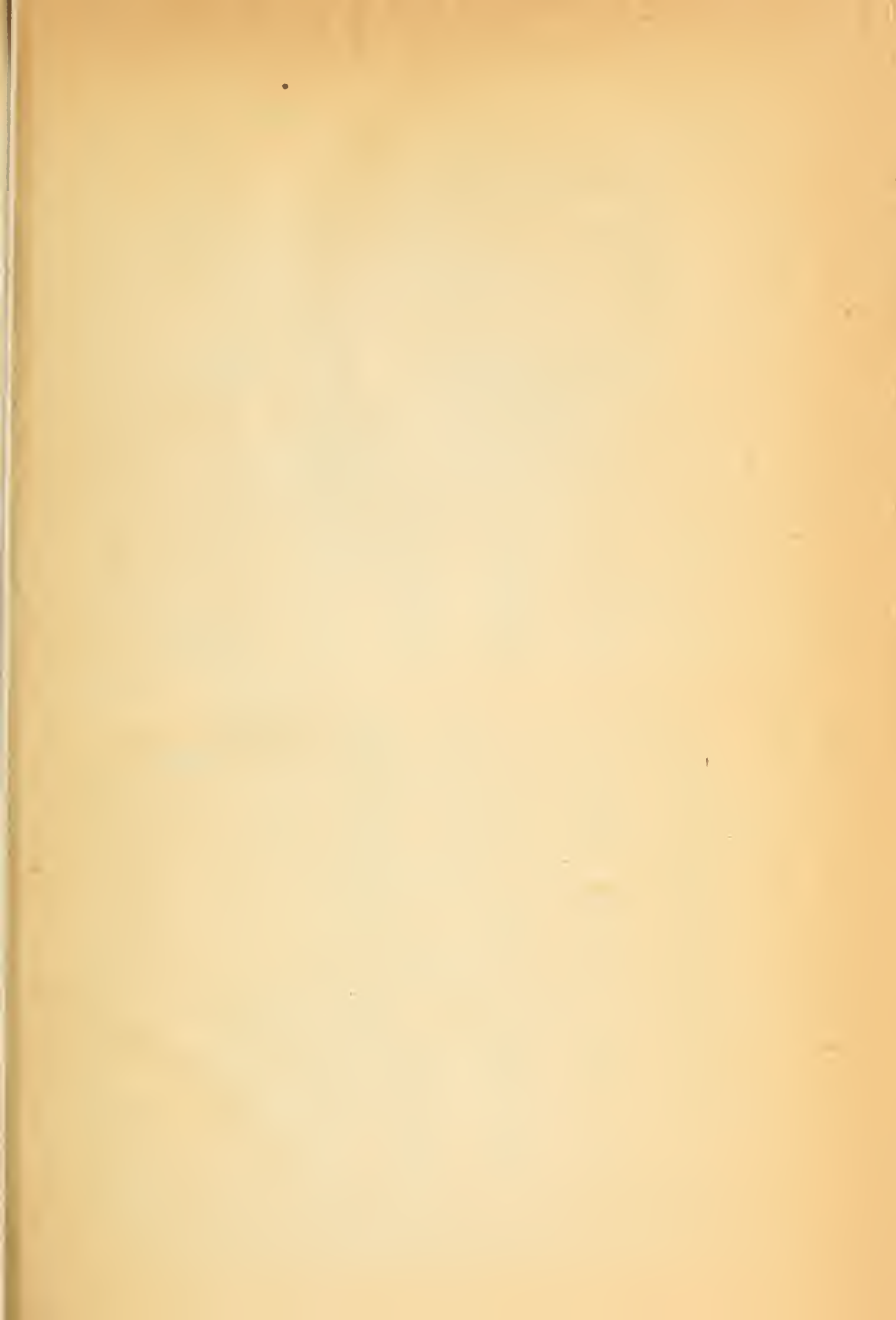
印刷所

發行所

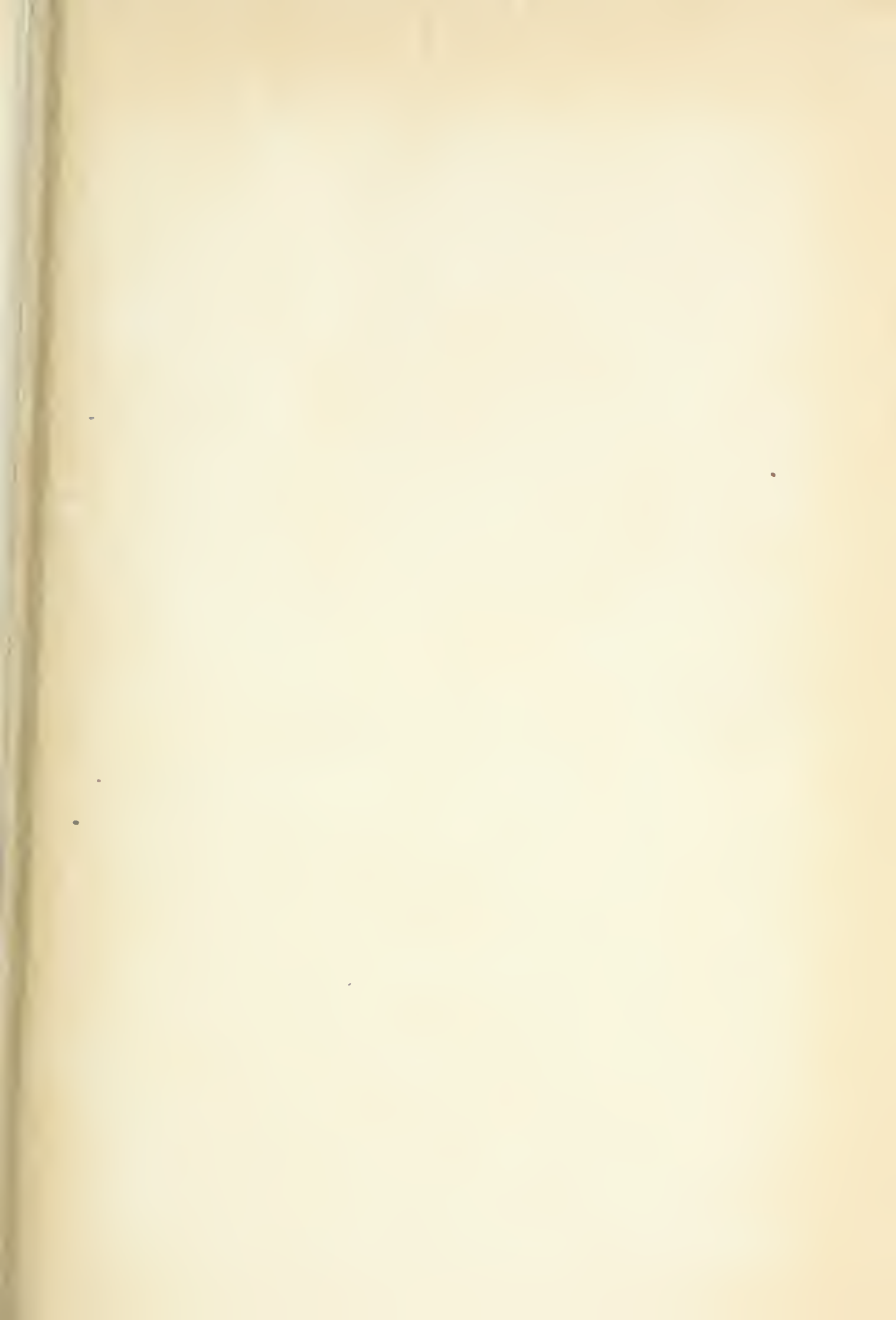
配給元

京東市神田區
淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 3692